EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02951 3819

UNIVERSITY OF TORONTO
LIBRARY

WILLIAM H. DONNER
COLLECTION

purchased from
a gift by

THE DONNER CANADIAN
FOUNDATION

幸田露伴先生
饗庭篁村先生
塚原澁柿先生
校訂

文藝叢書

第一卷 忠臣藏文庫
第二卷 椿說弓張月
第二卷 俊寛僧都島物語
第二卷 賴豪阿闍梨怪鼠傳
第三卷 西鶴文集
第四卷 道中膝栗毛全集
第五卷 俠客全傳
第六卷 演劇脚本集
第七卷 忠義復讐傳
第八卷 南總里見八犬傳 前編
第九卷 南總里見八犬傳 中編
第十卷 南總里見八犬傳 後編
第十一卷 世話淨瑠璃名作集
第十二卷 紀行文編

文藝の人に於ける其の性情を薫染し、其の氣習を陶鑄す。功もとより尠少にあらず、目するに閑を消し心を娯ましむるの書を以てして而して之を輕んず可からざる也。聖代泰平、文運隆昌、本館今玆文藝叢書を出版し第一期十巻を發行す。外観はたゞ賞を士女に求むるが如しと雖も、微意いさゝか補を風敎に添へんと欲するなり。是に於て、鑑裁を諸先生に仰ぎ、近古文藝の中に就き、精を取り粗を舍て、趣多くして弊少きものを蒐め刊す。校字は嚴密を期して魯魚の衍無きを必し、用紙は佳良を極め破損の虞に遠ざからんを希ふ。印刷の鮮明より裝釘の緻緊に至るまで、皆一々心を用ゐ意を致し、實質の美をして廣く流布の諸本に超ゑしめんと欲す。而して其價を低くして江湖の購得に便にするもの、また佳書の廣布を望むの意に出でずんばあらず。若しそれ本叢書の刊行によりて、山村水郭の人も容易に多數の書を得、繁劇怱忙の士も清興を寸暇に取るを得、而して不知不識の間に世態を悟り、人情を會し、敦厚邪を憎み正を愛し、忠恕の風を養ふあるに至らば、俊秀なる古作者の遺業も、其功空しからず、且や本叢書刊行の微意もまた酬はむ。

藤島武二
橋口五葉 裝幀

全十二冊 洋裝菊判 天金縁美本

正價各金 壹圓
送料各十二錢

發兌元 東京日本橋本町三丁目 博文館

ショペンハウエル氏原著

文學博士

姉崎正治君著

意志と現識としての世界

ショ氏の哲學は近世思想とギリシャ理想との融合、東洋思想と西洋哲學との連鎖。徹透の思想と剔抉の論議とを以て、高遠の理想を宣べ、寂靜の福音を傳ふ。その大著作は彼れが死後滿五十年の紀念として發刊せられたり。今や大哲の名文は茲に姉崎博士の流暢なる口語に依りて譯せられ、特に原著の論調語氣を寫すに勉められたれば從來哲學書は難解なりとの誤解もこの一書に依りて一掃せられん。出版者たる本館も、亦この廉價を以て不朽の傑作大譯書を世に提供するを以て敢て誇とせん。

全一册　洋裝菊判　上卷金一圓八十錢
特製美本　正價　中卷金一圓六十錢　送料各十二錢
下卷金一圓八十錢

發兌元　東京日本橋本町三丁目　博文館

東京帝國大學文科大學教授
文學博士
姉崎正治君著

宗教と教育

全一冊 洋裝四六判 特製美本 正價金壹圓參拾錢 送料金十錢

内容

一般の觀察。個人と社界。現實と理想。現世と彼岸。慈愛と權威。個人の信念と傳來の權威。日本の思想界。現代文明と宗教並に教育の缺陷。宗教と教育。勅教と國體と宗教。

附篇
- 日本宗教の概觀
- 西洋文明の由來
- 三教會同の觀察

個人と社會、國家、人道、現實と理想、諸方面より宗教と教育との問題を論究したる者。信仰の闡明、人生の哲理、現代社會の評論として、教化の大事を考ふる人の熟讀を煩はす。

發兌元 東京日本橋本町三丁目 博文館

文學博士

加藤玄智君著

宗教學

著者は東京帝國大學を初め、公私の諸大學に宗教學を講ずる茲に年あり。今や十有餘年の蘊蓄を傾注して本書を成す。其富贍なる資料は、之を廣く佛教基督教は勿論各民族の宗教史宗教心理學神話學人相學等の諸方面に求め、一々確乎たる事實の基礎に立ちて、歸納的に宗教の何にものなるかを研鑽究明し、歐米諸大家の學説を納れて而も著者一家の創見と明快なる斷案とに由りて、斯學界に一生面を開けるもの則ち本書にして、眞に斯學界の寂寥を破り、曾て邦文にて出版せられたる宗教學書中、最も詳密を極むるものなり。殊に宗教學の研究に從はるゝ人士は勿論現下我國思想界の混戰期に際し其前途を患ふるの諸君子は、請ふ一本を備へて座右の指針とせられんことを。本書豈に啻に之を學生神官僧侶牧師教育家諸彦にのみ推奨すと言はんや。

全一冊 洋裝菊判 函入美本 正價金貳圓五拾錢 送料金十二錢

發兌元 東京日本橋本町三丁目 博文館

文學博士
姉崎嘲風君編

文は人なり

樗牛文編

全一冊 洋裝四六判 裝釘優美 正價金壹圓 送料金十錢

内容
第一期◎憧憬の時代 第二期◎自信の時代
第三期◎煩悶の時代 第四期◎渇仰の時代

挿畫 十數葉及樗牛筆蹟書簡挿入

附錄 性格の人高山樗牛

情趣思慕の青年時代より、自信の人、煩悶の人、信仰覺醒の最後に至るまで、樗牛氏一代の意氣感情を傳ふべき文章の粹を集めたるもの、全集以外の材料と編者の評論とを加へ、文に依つてその人を傳ふ、尚姉崎嘲風山川智應兩氏に依りて編れたる別冊『高山樗牛と日蓮上人』と相待ちて、現代超越の大旨を宣揚するは此の書にあり。

發兌元 東京日本橋本町三丁目 博文館

故鳥谷部銑太郎君遺著

春汀全集

全三冊 洋裝菊判 表裝華麗 正價各壹圓五拾錢 送料各十二錢

第壹卷 前編 明治人物月旦 政治家月旦

第貳卷 後編 明治人物月旦 外交家、教育家、軍人、實業家、文士、記者各月旦

第參卷 各種の評論 外人月旦 其他

故鳥谷部春汀氏の文品は世既に定評あり、殊に其人物月旦の技に至りては殆んど天下の絶品と稱せらる。今其浩瀚なる遺文中、最も世に喧傳したる人物月旦及び各種の評論を編輯し、三卷に分冊して洽く江湖に薦む。

發兌元 東京日本橋本町三丁目 博文館

文學博士

故高山林次郎君遺著

樗牛全集

全五冊　洋裝菊判　裝釘高雅　正價各壹圓五拾錢　送料各十二錢

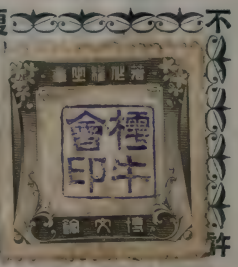
第一卷　美學及美術史
第二卷　文藝及史傳　上
第三卷　文藝及史傳　下
第四卷　時勢及思索
第五卷　想華及消息

樗牛博士識見一世を拔き學名一代に高し評論の筆に文壇を嚮導する事數年その間又倫理美術に關して斬新の提說を公にして學界に雄飛したり而して前後一貫常に社會人生の深義を求め晩年靈界の光明に接してより猛然として身を妙法の宣傳に委し三世の豫言者としてその短き一代を終れりこの時々の議論不朽の著作集めて此全集五冊の中にあり日本文明の將來と人生の光明とに焦慮する人士は此中に一條の大天火を見ん

發兌元　東京日本橋本町三丁目　博文館

明治三十八年三月十　日印　刷
明治三十八年三月十三日發　行
明治三十八年三　月再　版發行
明治三十九年四　月五　版發行

櫟牛全集第二卷
文藝及史傳上



定價金壹圓五拾錢

明治四十二年四　月十　版發行
大正　元　年十　月十五版發行
大正　二　年三月十五日十六版發行

編輯者　齋藤信策

發行者　東京市日本橋區本町三丁目八番地　大橋新太郎

印刷者　東京市小石川區久堅町百〇八番地　水谷景長

印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地　博文館印刷所

發兌元　東京日本橋本町三丁目　博文館

（上等裸本）

榜牛全集第二卷終

◎人を脱して神となる、己れの小さきを悟る所以である。人のまゝにして神となる己れの大いなるを信ずる所以である。

（三十五年十一月）

◎迷信は力である。ダンバーの戰を人が出來事と言つたのに對し『是れ人事に非ず神事也』と怒りたるクロムエルは恐らく當代第一の迷信者に相違無かつたであらうが、其の事業は天日と共に輝けるのである。日蓮は三災七難の佛讖を叫むで一世を警めたが、今日の學者などの眼には是れ程大いなる迷信者は無からう。然しながら是の迷信の上に打立てられたる彼れの事業の如何ばかり偉大なりしよ。

◎我輩は斯ふ思ふのである。迷信と云ひ眞信と云ひつまりはどちらでも好いので、唯必要なは精神である赤誠である不惜身命の大勇猛心である。

◎今の人は祈ることを忘れた。是れこそは今の世の最も大いなる禍と謂ふべきであらう。

◎大いなる人となるの道は唯二つあるのみである。己れの小さきを悟るは其の一つである。己れの大いなるを信ずるは他の一つである。前者は情により、後者は意による。彼れは攝受門、此れは折伏門。彼れは易行道、是れは難行道である彼れは釋迦、基督の敎義にして、此れは余破翁、ニイチェの信條である。

◎あゝ新らしい物は左程に貴まるべきものであるか。眞理は古いものであるとこそ聞け。何事も皮相の新しきに走りて珍奇是れ喜ぶは、畢竟其の學風の輕佻浮薄なるの致す所である。實に歎はしき現象と謂はなければならぬ。

◎あらゆる學術は常に奴隸的のものである。問題は常に外より與へられる。彼れは是の與へられたる問題に對つて解釋を提供すればそれで好いのである。

◎問題の提供者は時としては自然である、又時としては天才である。學術は常に是れ二者の何れかの奴隸である。

◎迷信は世人が騷ぐほど左程怖るべきものでは無い。むしろ怖るべきは道學先生の固陋なる道德說である。基督を十字架に上せたのも、ソクラテースに鴆毒を飮ませたのも、スピノザを迫害したのも、乃至はシ■ペンハウエル、ニイチェを苦めたのも、皆是の道德說の爲せる業だ。

◎昔は犧牲は少數の偉人に限られたが、今や多數の凡人が是れに代ることゝなつた。彼等に口無きが故に世は平和に見ゆれども、實は死滅に近づきつゝあるのである。

知解は當代思想界の最高潮を示めして居るものと見て決して大過なきことを我輩は信ずる。イリヤ、ムロメッの甲板の上で商賈の團躰を指して生命の破壞者と罵倒したるフォーマは、最早や知解の人に非ずして本能の人である。ゴルキが現代文明に對する大いなる反抗の氣焰として其の所謂る野獸的性欲の自由を發揮したのである。吾人若し彼れに於て得る所あらむと欲せば、彼れの長所の那邊にあるかを先づ考へなければならぬ。

◎早稻田の專門學校もいよ〳〵先月より大學と改名した。名前は一枚の看板で如何樣にも懸け換へることの出來るものであるが、唯憂ふべきは其の名前に稱ふだけの實質である。我輩は早稻田大學當事者の功勞を多とすると共に、是の大學の前途に對して少からざる憂を懷くものである。

◎今の我邦に於ては、書物の標題に新と云ふ字を附けなければ賣れ行きが惡いといふことである。大方其の爲であらう倫理新說とか、新敎育學とか、最新經濟學であるとか云ふ樣な標題が新刊の書には頗る多い甚しきに至つては新式佛敎講義などゝ云ふ書目さへ見ゆるのである。

く、唱ひは多くの場合に於て救ひであるとすれば、人々はゴルキを唱ふ己れの聲によりて自ら救はれつゝあるのである。

◎況んやゴルキの作は今の我邦の無學なる批評家の雷同する如く、罪惡浮浪の外に何物をも語らざる樣のものでは決して無い。若し欲するならば、我邦人の如きは是によりて多大の敎訓と箴規とを受くることが出來る。

◎ブオーマ・ゴルデエフに描かれたるマヤーキンの人生觀の如きは我邦人の大多數にとりては殆ど理想に近いものであるかも知れぬ。若し彼等にしてそを一讀するならば、ボシャックやツェルカッセを描いたる同一の人が、如何にして是の如き人物を寫し得たるかを驚かずには居られまい。ゴルキは決して無學者では無い。活ける人生の知識に於ては如何なる文豪詩人とも匹敵し得べき深大なる素養を有して居る。

◎試に見るが好い、ヨッホーフやルホフを通じて彼れが發表したる人生の批評は、今日の最高の知識に對して何等の遜色を認めざるものではないか。フオーマは或は彼れ自らの性格を現はして居るかも知れぬ。然しながらゴルキ其の人の

て吾人の精靈に安慰と希望を與ふる一句半句の文字だにあるならば尚ほ取つて吾人の糧とすることが出來るのである。

◎十九世紀の文明がトルストイを產せむが爲めに如何なる高價を拂つたか。吾人は是の偉人を言ふ前に先づ是の問題を熟考しなければならぬ。彼れの主義を是非し、彼れの行爲を批評するは極めて容易の事である。然しながら其の懺悔錄』と其の『吾宗敎』とを讀みて、是の偉人が身讀體達したる人生の經路の如何なるものであつたかを考ふるならば吾人は肅然として自ら畏るゝ所無きを得ない。

◎ゴルキを罵りて野獸の如く卑む人があるが、彼れはゴルキに於て果して何物を見たのであるか。ツェルカッセやボシャックに於て所謂る浮浪主義の權化を見たるの故を以て、彼れは爾かく吾人に忌み嫌はるべきものであるか。あゝ所謂る批評家の鑑識は何故にかくまで狹少であるか。

◎吾人は文明の批評家として其の所謂る浮浪主義に大膽なる發聲を與へたるゴルキを偉なりとするものである。十九世紀文明の大なる缺陷の一つは是の發聲によりて人々の胸中に明白なる自覺を喚び起したのである。古人の言へる如

是を言ひ表はさずとも、其の觀察の中に、其の文字の中に、はた又其の全體の精神の中に、おのづから發揮せらるゝのである。斯くして一面に於ては能く自然主義の旗幟を打立つると共に、他面に於ては又能く理想主義の幢幢を掲げ得たのである。

我輩は荷風君が是の事を一考せむことを希望する。

◎『地獄の花』は其の主張を言ひ表はすに於て餘りに赤裸々であつた。是の主張の骨が目立つに隨つて自然の皮肉は如何にも痩せ衰へて見ゆる。自然主義はあらゆる理想を包容しても決して狹隘を感ずべきものでは無い。我輩は『地獄の花』に於て慥に著者の最も有望なる將來を認識するが故に、ことさらに是の苦言を先づ批評の辭に代ゆるのである。

◎近來我邦の批評家の中には頻りに魯西亞文學排斥の聲を揚ぐるものがあるが、我輩には一向其の理が解らない。

◎今日トルストイは老耄して居るかも知れぬ。如何にもドストエフスキーは癲癇病者で、ゴルキは浮浪漢であつたとしても、其の文學をば何故に排斥せむとするのであるか。吾々は聖書として文學を見るの要は無い、唯一部人生の批評とし

くしい處にあらゆる將來の希望が籠つて居るのである。我輩は是れまで多くの青年作家の著述を讀まされたが是の『地獄の花』に於て初めてまことの青年らしき情熱と意氣と才思とを認め得たのである。

◎著者は是の『地獄の花』に於て一種の主張を言ひ表はさむと力めたるは明かなる事實である。我輩は決して是れを批難するものでは無いが、世上の凡庸作家に往々見る所の如く、唯是の主張を發揮するに急なるが爲に、他方に於て人物事件の上に有害なる拘束を加へたるの弊が現はるゝに至つては、甚だ好ましからぬ事と云はなければならぬ。著者は言ふまでも無くゾラの作に精通せる事であらう。彼れは一種の主張を以て其の筆を執つたものであるが、其の所謂る主張なるものが具體的事相を假らずして赤裸々に紙上に陳述せられたる如き場合は決して無かつた。況して是の主張の爲に性格もしくは事件の自然的開展を犧牲としたる如きは想ひもよらぬ事であつた。彼れが其の小說を作る時は其の眼中には人物の性格と境遇との二つあるのみ。是の二つの者が交錯貫通して初めて小說的事件の開展を見るのである。所謂る主張は彼れ自らの人格に存するが故に、故らに

て疑はざる所である。

◎然るに事實に於て『あらひ髪』は殆ど是の點を閑却して居るの觀あるは實に不思議である。『己れには如何にしても後悔の念が浮ばぬ』とばかりにて、何故に悔ゆることを知らざるかの肝腎な理由に至つては一言も述ぶる所がない。是の如くにして出見の行爲は全く其のジャスチフィケーションを失ひ、『あらひ髪』の一篇も亦茲に全く其の精神を失ひ、著者の作意も全く空茫に歸し了つたのである。あゝ文字や、體制や、竹風にとりて何物でも無い。是の精神、是の主張にして遺憾なく發揮せられたらむには、『あらひ髪』は其のあらゆる缺點を以てして猶ほ且つ生命ある文字たるを失はなかつたのである。我輩はくれ〴〵も竹風の爲に是を惜む。

◎近刊の多くの小說の中で、永井荷風の『地獄の花』は慥に出色の文字であらう。素より缺點の數ふべきものが無いでは無いが、この缺點は青春の活氣に伴ひて、一面其の長所と離れがたきものなることを想へば、むしろその愛すべきを覺ゆるのである。總じて全篇の文字活氣に充ち〳〵て、其の筆の尖には青年の熱き血汐が紙背を徹して滴つて居る。わか〳〵しいと云ふ批難もあるであらうが、このわか

如く自己の經歷を第三者の地位より觀て、冷然としてそを批評する態度に出でたのであるか。著者にして若し將來作家として世に出づる覺悟があるならば、是の點に就て明瞭なる自覺を有さなければならぬと我輩は思ふのである。

◎殊に我輩が是の『あらひ髪』に於て最も遺憾とするのは、其の文躰や、詞藻や、結構などの點よりも、寧ろ主人公たる出見の行爲を是認するに足るべき十分の理由の言ひ表はれざる一點にある。我が友竹風は戲作者ではない、東隣西家の俚談を寫し出だして小說と稱する所謂る寫實家の一輩では無い。其の作には必ずや主張がなければならぬ。而して其の主張をば彼れは是の『あらひ髪』に於て何處に表はして居るか。出見は世間の非難を被り、友人の忠言を受け、其の老父の苦諫を耳にしても、自家從來の行爲に對して一點悔悟の念を起し得ない。起し得ないのみならず、自己の中心には飽く迄是を是認して居る。著者の主張、大きく言へば人生觀は是の點に集中して居るのである。是の一段即ち是れ是の一篇の精神主腦である。是れ無くむば、『あらひ髪』の一篇は徒らに紅恨紫怨を物語れる一戀愛小說たるに過ぎない。著者が是の點に就いて十分の自覺を有せることは我輩の堅く信じ

とてあらう。

◎竹風君の『あらひ髪』は盖し著者が諷誦自ら慰むべき底の者て、今の時木に上せて世に公にする者て無かつたかも知れぬ。然しながら、著者が一氣筆を呵して、三日にして成したと云ふに至つては、其の文才實に驚くべきものと謂はなければならぬ。若し能く此の文才を淘冶して更に人生の研究を重ねたならば、他日の造詣必ず見るべき者があらうと信ずる。竹風たるもの自ら信じて可なりである。

◎凡そ一氣感激の文には躰制文字以外に必ず人を動かす所があるものである。所謂る感極まつて而して哭すと云ふ様な、最も確的に人の肺腑をつらぬく斷腸の文字があるものである。然るに怪むべきことは、『あらひ髪』には是の如き文字が一として見出だし得られぬ。其の事柄にこそ曲折もあれ、波瀾もあれ、其の行文の意氣は平板流暢にして毫も感奮激越の趣がない。やがては人生の大悲哀に陷り、自殺によりて此の世に打勝たうとする出見速雄其人の精神に感孚せられたる著者の筆としては、極めて情熱に乏しいと謂はなければならぬ。著者は果してゲーテの所謂る『まことの憎み』があつて其の筆を執つたのであるか。或はハイネの

◎此頃は面白い小說は頓と出ない樣だ。太陽には小說の批評が出ないと曰ふ人があるが、それは批評すべき新作が出ないからで、我輩が好んで出さぬ譯では決して無い。喩へば爰にクォー・ヴヂスの樣な小說が春陽堂から發刊せられたとすれば、我輩は五十頁位の批評をば、篇章段落堂々と二號にも三號にも亘つて必ず揭載したであらう。それが疑はしいなら試みに作つて出して見るが好い。

◎世間では我輩は病氣の爲めに文藝上の議論をする氣が無いなどゝ言ふ人もあるが、病氣であらうが何であらうが、筆を持つて居る以上は書くべきことは屹度書く。何か我輩に不滿があつて、當面に議論を挑む人があらば、其の議論にして應ずべき理由のある限りは必ず應ずる。

（三十五年十月）

◎エミール・ゾラもとう〳〵彼の世の人となつた。あゝ英物！世界は是の如き人物を失ふごとに一つの光明を失ふのだ。其の生を禍とすべき人の斯くの如き多き世の中で、偉人の獨り荒然として逝くのは實に痛ましい。

◎イブゼンもトルストイも頽齡もはや多く事に勝えず、ゴルキは可愛さうに肺病に惱んで居る。歐洲文壇も盖し遠からずして其の局面に多少の變化を見るで

『國民の友』を讀める人は必ず是の事を憶ひ起すであらう。

◎あゝ此の大西君の故人となられてから既に二年を經た。學者は君の後に年毎に殖えるが、文藝宗教の上に深き趣味を有ち、一個の人として思想界の儀表となる如き人は未だ一人も見當らない。君は道學先生の如く修身道德を殊更に說かなかつたが、君が人としての力によりて活ける感化を受けた無數の青年は今日尙ほ君の遺恩を感謝して居る。君は所謂る革新家の如く世の腐敗を慷慨して其の救濟を叫ばなかつたが、君の周圍には世の汚れを淸むべき青年の團躰が常に力を得つゝあつた。あゝ吾々は今に及びて是の得難き先輩の遺風を慕ふの情に勝えないのである。

◎大西君は又京都に於ける文科大學の組織者であつた。同大學も來年より愈々開かれるであらうが君に代て誰が組織者となるであらうか。新らしき文科大學は如何樣に構成せらるゝであらうか。實に懸念の至りだ。想へば大西君の死によりて日本は一個の學者、一個の人物を失ひたるのみならず、又大學敎育上の一偉才を失つたのである。——『半月集』の序文の事からツイ返らぬ追懷に流れた。

◎湯淺吉郎君の新躰詩集『半月集』は、近時の出版物の中で一異彩を放つて居る。殊に古英雄の一篇が、外山、井上諸氏が新躰詩鈔に先だつこと數年の作であると云ふ事實は、明治文學史の一資料として注目すべきことである。

◎總じて湯淺君の詩躰は穩やかな、角のない、溫乎とした所に長所がある。其の題目は、例へば天地初發と云ふ樣な崇大雄渾のものより百猿舞と云ふ樣な諧謔洒落のものに至るまで、其の範圍は頗る廣いが、其の用語格調は概して平穩閑雅の趣があると思はれる。其の思想に於ても強ゐて怪奇を衒ひ、力めて清新を裝ふの跡は絶えて無く、雍々として堂上に歌ふの概がある。されば紅恨紫怨を喜び、變幻怪奇を好む者より見れば、或は單調平凡の訛りを被るかも知れぬが、君の本領は居然として此の間におのづから一家を成して居る。

◎此の『半月集』の卷頭に故大西祝君の天地初發に對する批評を載せてあるが、まことに面白い。大西君は本來哲學者であつたが、文藝の上にも深大なる素養を有つて居られた人で、其の文學上の批評は見るべきものが頗る多かつた。曾に批評家であつたばかりで無く、操山と號して好んで多くの新躰詩を作られた。當時の

知らぬが、兎に角其の子を國家の爲めに捧げたのが國民とやらの本分であつたであらう。然しながら一人息子の殺されたのは如何にもつらい。戰爭だにないくば、國家の爲と云ふとだに無くば、我が子は無事息才であり得たものを。是の現在の悲みはトテも國家の爲と云ふ樣な聲ばかりでは打消すことが出來ぬ。斯うなれば愚なる身には疑ひも起る。何故國家と云ふものは我等の杖柱とも賴む一人息子をまでも奪ひ去つて、そして是を戰場に死せしむるのであらうか。——『野人』に描かれた老農夫は斯くまで思ひつめたのである。

◎眉山君は何故に是の好題目に對して更に一開展を試みなかつたのであるか。老農夫を狂せしむるのは必ずしも惡くは無い、唯其の狂せしめ樣が如何にも無意味であるのは、かへすがへすも殘念であつた。

◎頓機翁物語が英學新報社から出た。是れは普に英學書生の必讀書であるばかりではない。今の道學先生達の是非一度は讀まなければならぬ書だ。併しながら讀み了つてドンやバンザを笑つてはならぬ。我輩の眼から見れば、先生達の多數は皆是の物語の主人公に近いのである。

◎先には『ニイチェの學說』と云ふ書物が出たが、今度は又『孔子の學說』と云ふのが現はれた。あゝ學說か〳〵、文敎の流れは徒らに理辨に泥み、先哲の遺韻は空しく文字の間に沒る。是の學風の革められざる限りは德敎の刷新などは思ひも寄らぬことだ。

◎前號の本誌に揭げられた眉山君の『野人』と云ふ小說は、中ほどまでは中々思ひ附も能くシチュエーションも巧みに搆へられたが扨て末段に至て老爺の無意味なる發狂の爲に何物にもならずに了つたのはかへすゞ〳〵も遺憾であつた。

◎國家は賴りなき老農夫より其の一人息子を國家の爲と稱して兵役に就かしめ戰場に臨ましめ、敵彈に死せしめた。鄕黨隣保はみな〳〵國家の爲と稱して一人息子の戰死の爲に老農夫を祝した。學校の敎育家は國家の爲に討死せる兵士は、上杉謙信よりも武田信玄よりもえらいと言つて老農夫を喜ばせた。然しながら死せる信玄を子に持たうよりは、一人息子の生きて歸つた方が、如何程老農夫にとりて喜ばしかつたであらうか。

◎人は國家の爲と云ふ、成程國家は有難いものでもあらう。自分は何の故とも

いが爲だ。我輩の眼から見れば、日本には美術家の假面を被れる商人や俗物が多くて、眞の美術家が甚だ少ない。

◎理想のある處には常に進歩がある。是に於てか一生は斷えざる戮力の連鎖となるのだ、我邦の雅邦先生などの老い方は餘りに早いといはなければならぬ。

（三十五年八月）

◎扨て秋は來た。天の色は澄み渡つて居るが、人の呼吸には是からそろ〳〵痛みを覺えるのだ。天地の色は老いずして人間の世は移らふと詩人は歌つたが、人は季節の變る毎に其の身の衰へを今更の樣に感ずる。

◎一部俳壇の泰斗と仰がれた正岡子規君は遂に亡くなられた。八年の永き病褥に一日も風雅の筆を休めず墨汁一滴に病牀六尺に常に斯界を指導せられたる其の志の篤き實に敬服の外は無い。三十六歳は此の世にて短命ではあらうが人の眞の齡は其の事業を以て計るものとすれば、君の如きは長壽者の一人と言つてもよい。世間の人は徒に君の短命を哀むをやめて、己れの長壽に恥ぢざる樣に自ら省るが好からう。

と云ふあたりから、『八億亞細亞の民をゐて、帝座のもとに俯せよとや』と結んだところなどは是の詩人の獨得の壇場と云ふべきだ。是の歌がその一部を成して居る『東海游子吟』と云ふのは想ふにバイロンの『チャイルド、ハロルド』の様なものではあるまいか。

◎日本の畫家が三十になるやならずに早く既に大家となり濟ますのは如何にも早や過ぎる。苟も一藝一學に身を立てゝ門戸を天下に張ることが左様に容易すく出來る譯のものではない。

◎それから老大家となつても、既に得たる名をたよりに碌に骨を折つた作も出さずに、刷毛先のゴマカシ書をのみ書いてお茶を濁すと云ふ様な薄弱な風習は外國には決して無い。これも亦日本美術界の一宿弊と云はねばならぬ。

◎理屈を言へば、眞正の美術家は理想の爲に生きて居るべき筈のものであるから、命のあらむかぎりは是の理想の實現に盡して日も亦足らずとすべきである。それに大家の名を得れば一生の能事終れるかの様に、頓に生氣活動を失ふの觀あるは、畢竟其の道に盡す赤心の足らざるが爲だ。言ひ換ふれば眞正の美術家でな

◎マキシム・ゴルキの評論が民友社から出た。由來露西亞と云ふ國はとかく文明の謀叛者を出す國であるが、このゴルキは又格別なものだ。世人は野獸的ゴルキなどゝ何も驚き騷ぐにも及ぶまい。彼等は彼等の呪咀する人物によりて漸く自己の意證に近づきつゝあるのである。

◎罪無き者は審判の聲を恐るゝものでは無い。ニイチェやゴルキを人が刑事巡査の樣に嫌がるのは、皆己れに犯せる罪があるからだ。

◎其は兎に角、世上の文學者は深くゴルキに顧みる所あつて然るべしだ。彼れは二十餘年の間浮浪の生活をした一無學漢であつた。然し彼れが是の間に天地人生の中に鏤刻せられたる金文を其の涙と血とで讀みわけたのである。文學者としての彼れの成功は實に是の身讀體達の大教育に原づいたのだが、書物を讀むだり講義を聽いたりして、それで是世の事が獨り解るものなら、ゴルキは今日でも矢張り一浮浪漢であつたであらう。

（三十五年七月）

◎晩翠の『亞細亞大陸回顧の歌』と云ふのが最近の帝國文學に現れたが、これ程の題目をこれ程までにやつて退けたのは流石に晩翠だ。『金光まばゆき三千の伽籃』

動かされた例しは少いが、少くとも讀むで居る中は面白い。慾には讀むで了つた後にも何か殘る樣な作が讀ませて貰ひたいものだ。

◎餘り深酷とも思はぬが、現代の社會を種々の方面から描寫することに於て君は確かに今の小說家中に一頭地を抽むでて居る。併し我輩は斯う思ふのだ若し假りに君の常に抱いて居る魯庵的社會觀を虛しうして十分に寫實の筆を伸ばしたならば、其の結果は今日見る所のものよりも數層大なるものがありはしまいか。我輩は決して傾向小說を否定する者でないが、魯庵君の有望なる前途に對して是のトライアルをお勸めするものである。

◎宙外君の『めぐる泡』を（著者に內證だが）澁々讀むだ。君が年來苦心の作と聞いただけに其の失望も大きかつた。我輩に言はせると、君の書き方はドーモ執拗つこい。つまらぬ所をなが〳〵と書き立てるあたりは今までの天外君に似て居るが、急所々々を抑へて筆を省く遣り方は天外君に及ばざること遠しだ。それに君の描く主人公が每々女の腐つたのゝ樣なには殆ど閉口だ。是れで無ければまさか主觀的描法とやらが出來ぬでもなからうに。

雜談（明治三十五年一月より同年十一月まで）

◎イプセンの病篤しと傳へらる。ラスキン逝き、ニイチェ仆れ、トルストイ亦起つ能はざる今日に於て更に是の報に接す。惆悵の思何ぞ堪へむ。

◎イプセンの一生は其の著『ブラント』の主人公の如く好く戰ひたる生涯なりき。彼れが歐洲文明の批評家として樹立したる個人主義の旗幟は、十九世紀末の一大勢力を代表せり。彼れは是の信仰の爲に母國に容れられざること二十餘年、近年厘にクリスチアナに歸り、民衆景慕の間に其の永遠の眠を迎へむとす、是の如くにして得たる彼れが墓門の平和は實に貴しと謂ふべし。

◎トルストイ伯病みし時、幾多の醫師其の病を審にせず。伯乃ち嘆じて曰く、今の醫師は醫學に於て知らざる所無し、唯醫學其物は何事をも知らざる也と。味ある哉言や。希くは以て今の道學先生を戒めむ。

（三十五年一月）

◎内田魯庵君の近作は何れの小説雜誌にも出て居るが、何れもそれ〴〵に面白い。我輩は魯庵君の小説と云つたら大抵逃さずに讀むで居る。讀み了つて深く

繪巻物と云へば宮中の宴遊、社寺の沿革、或は合戰など、凡て上品なるが多き樣なれど、昔の畫家は隨分思ひ切つてたる題目を描きしもの少からず。光信、元信等が描きし春畫は言ふまでもなく、病草紙、狂ひ草紙、百鬼夜行などは土佐家常套の畫題也。たしか光長のなりしと覺ゆ、病草紙の第一紙に婦人の下痢に惱める態をさながらに描き出せるにて餘は推して知るべし。例の鳥羽僧正に到りては例へば放屁軍、男色繪、陽物くらべ繪など奇想奇構、毫も憚るところ無し。傳ふる所によれば時の帝病に臥せし時、陽物くらべ繪及び其の他の滑稽畫を奉りて帝の鬱を散ぜし功によりて名を勝畫と賜はりしとか。されば當時はかゝる題目をば畫く人も觀る人も強ちに怪み咎めざりしと覺ゆ。今日より見れば大膽なる寫實ならずや。

（三十五年四月）

書家にて詩人を兼ねたる人少からず。例を西洋に取れば、遠くしてはレオルナド、ミケランジェロの如く、近くしてはダンテ・ガブリエル・ロセッチの如し。されど畫家にして小說家を兼ね、聲聞並び到れるもの、近年にありてデュモーリエ(Du Maurier)の如きは多からじ。彼れは五六年前六十餘歲にて死せしが、其の死する五六年前までは一個の畫家、殊に滑稽畫家としてのみ世に知られたりき。然るに『ピーター・イベットソン』てふ小說を一雜誌に公にして圖らず非常の喝采を博してより、續いて『トリルビー』『マルシャン』の二篇を公にし、一時英米文壇の耳目を聳動せり。予は是の二篇を讀みしが、其の文章脚色等の勝れたるは暫らく措き、其の自筆の插畫、一篇毎に二百數十葉はあるべきが、何れも見事に描かれ、一冊の畫帖としても類ひ多かるまじき成功を示したり。古人は書畫一躰なれば書を能くするもの多く亦畫を能すと言ひしが、繪畫に長けたるもの亦小說をも能くするの謂はれあればにや。兎にかく珍らしき例なりと云ふべし。

十一　繪卷の寫實

くして實に大不穩當也。所謂る客觀的の判斷らしくして實は大の主觀的僻見也。今の學者是の種の猾手段を弄して俗目に媚びるものあり、注意すべし。

九　表

又學者の中には何事につけても表を作ることを好む人あり。こも亦利害相半ばすることを忘るべからず。表にて示せば打見たるところ如何にも明晰にして、所謂是を掌中に指すの觀あれども、表の作り方の誤りなきや否やを看破し得る人に非れば、動もすればその明晰なるに欺かれて知らず〳〵論者の所說に化せらるる者多し。畢竟表は前項に述べたる例と同じく極めて方便的、ばた器械的のものにして人の思想の活ける作用を障碍する傾あり。論議上萬已み難き場合を除いては使用せざるを好しとす。世の學者中には、一にも表、二にも表と表ならでは議論說明の出來ぬ人あり。是等は其の頭腦の器械的なるを證するものと謂ふべし。

十　畫家と小說家

世に分類を好む論者あり。例へば或人の價値を判定せむとする場合に、先づ是の人の屬し得べき種類を別ちて甲乙丙丁等と爲し、扨て是の人は甲にもあらず、乙にもあらず、丙にも丁にもあらず、故に何物にても無しと云ふが如き論法にて斷じ去る也。かゝる論法は一寸俗眼にて見れば如何にも精緻公平穩當らしけれども、實は甚だ危險にして且つ凡俗なる論法也。故如何とならば凡て分類は人々の勝手次第に定むるものにて、其の人の考の精粗、又識見の高卑等にて如何樣にも差別のあるもの也。今甲乙丙丁等と分ちたりとて甲乙丙丁等以外に尙ほ遺漏なきを保し得べきや。良し又遺漏無しとするも、所判の當體は活ける人也甲乙丙丁等の何れにも屬せずして而かも何れをも含むと云ふが如き場合なきを得るや否や。甲乙丙丁と分つは人々の任意也。然れども玆に以呂波仁等と新たに分類し得べくむば如何。又は甲乙丙丁等各部の所屬量若干づゝを結合し、取捨して幾多無量の分類をも爲し得べき也。單に甲乙丙丁等の在り來りの文字によりて活ける人を判定せむとするは、是れ小我の見に執着して、我以上の新事物世に無しとする大偏見也。されば是の種の論法は表面は精緻らしくして實に大粗漏也穩當らし

七　例と談理

例を擧げて論ぜざれば解し難ぬる人あり。かゝる人には常識の外は談ずべからず、抽象の理は說き難し。高遠なる宗教の信仰、幽微なる文藝の趣味得て共に談ずべからざる也。

事例を以て解し得べくむば、吾等多くの場合に於て言論の要を見じ。事を離れ境を絶し、厘に理義によりて會通を求むるもの、如何にして更に事例によりて解說し得べき。シエペンハウエル曾て曰く、抽象の談理に勝えざるものは我が書を讀むことなかれと。予は今の凡俗學者に向ても亦同じく是の語を寄せむと欲する者也。

例に依らざれば解し得ざる人は、取も直さず想像の貧しきと、思辨の足らざると、觀心の到らざるとを證す。あゝ心はたゞ心を以て解し得べけむのみ。

八　俗學者の猾手段

六　眞正の寫實

予の知れる小說家中、寫實に最も長けたるはズーデルマンにして、最も拙きはゾラなるが如し。ゾラは通例寫實の大家と稱せらるれども、たゞ〳〵精しきのみ、順序なく統一なく精しきのみ。そが主觀上の印象より見れば寫實の本義を去ること頗る遠しと謂ふべし。ズーデルマンは然らず。その事を記し景を叙するに當りて畫面の物象を屢〻少なる觀念に約して、餘は是を讀者の想像に委ぬるところ、整々として肯綮に中らざるは無し。一句、二句、五字、七字、身は忽ちにして作中の人となり了るを覺えしむるは、他作者に於て殆ど見るべからざるの技倆なるが如し。

今の我小說界に自ら寫實家と稱するものあれども、概ねゾラ一流の無意義なる精緻を以て自ら得たりとするもの、ズーデルマンの亞流は予未だ是を見ず。往々人の語るを聞く、寫實は凡才も尙ほ能くす、唯力めて達し得べきのみと。是れ大なる誤解也。眞正の寫實は天才にして始めて能くせむのみ。

予はかくの如くにして詩初めて解し得べしとなす。げに等しきものゝみ等しきものを解し得べし。文藝を遊戯と觀ぜむは、かつて涙を以て其の麵包を割きしことなき徒のみ。

五　當今の文章

當今文を能くする人甚だ多し、されど吾等をして見れば多くは優人の其の面に粉して喜怒哀樂を裝へる類ひのみ。意誠語朴の人を動かすものとては甚だ少し、かの青年讀者流、その才に任せ其の氣を驅りて巧に優麗閑雅の文藻を綴れども、その情に於て既に眞摯の一義を缺く。細心精緻又何かせむ。西歐文藝の風丰を傳ふると云ふもの、唯西施の顰に倣へる類ひのみ。吾等を以て見れば戯文たるを免れず。

戀と云ひ、望みと云ひ、慰めと云ふ、是れ人生の一大事也。人はその文字を弄ぶに先ちて、自らの血と涙とを以てそを解釋せざるべからず。

今の我邦にて斯かる人に邂逅ふこと頗る稀なるべし。路行く人に是れはと心附かるゝ顔容の人は甚だ少く、多くは物欲しげなる賤しき面構へなり。予の見る所にては、婦人は知らず、男子の美は今の日本に於ていたく荒れすさびたり。

四　文藝は嚴肅也

『人生は嚴肅也、文藝は遊戲也』とは古の詩人の套語にして人のよく唱ふる所なるが、予は然か思はず。文藝は決して遊び事に非ず、その意義の嚴肅なることに於て決して人生に劣るまじき也。

予は常に好てバイロン、ハイネ、ゲルチル等の詩を讀む。予は是等詩人の文字を通じて人生の最も嚴肅なる事相を感受するを樂む。畢竟是の如きは文字にあらずして精靈のひゞき也、血汐と涙の痕也。吾等の胸に打てば應ふべきあらゆる人生の憂悶と悲愁と希望と歡喜と活ける呼吸を通じて吾等の耳にひゞく也。吾等は箇中に作者の生涯を想ひ、彼等が自讀せる人生の事相によりてその詩篇を解く。詩篇こゝに至りて人也、命也、人生也。

三　人の容貌

人の容貌を吟味して其の性格と想ひ合はせむはいと〳〵興味ある業也。予はこの目的にて現代の人に就いていさゝか考へ試みしことあれど、流石に憚りあることゝて言ふべき機なくて過ぎぬ。

西洋人の中にて好ましきはゲーテ、ヘーゲル、ショペンハウエルなどの顔ばせ也。鬘みの影だになきゲーテが圓滿なる面に現はれたる平和は、即ち是れ人生の最も大いなる苦痛に打ち勝てる表章なるを想へば、言ひ知らず貴し。ヘーゲルの面ばかり威重と自信と平和との表はれたるはあらじ。ショ氏の顔には悲愁皺深く刻まれたれど一分嘲世の氣ありて其の人格の超絶を示現せるところ、たとしへなく美はし。吾等人に對する時、何とはなく、たとへば重き石もて頭上を壓さられたらむ如く、面を擧げ難ぬるまでにけおさるゝ事あり。奇矯物に滯らざるハイヲの如きすら、始めてゲーテに會へる時、その威容に打たれて言ふべき事も言ひ得ずして、空しくワイマルの麥酒を稱ふるまでの無念を忍びたりき。

一層の光焰を放てるが如し。『夜の如く黑く、塔の如く高き』魔王の姿、陰慘なる地獄の光景などは言ふまでもなく、『創造』の大題目を提へて波濤の如き連山の頂、いつしか大蛇冲天の化成せるが如き、其の想像の偉大にして其の描法の奇拔なる、一個無聲の大詩篇也。聖書の說明書は予の書架中にもあり。ソドムの陷落、ダニエルの獅子窟、或はサムソンの最後など何れも見るべし。新約の終り、十字架上の基督の如き殊に崇大を極めたり。

總じてドンの作、個性の包容豐富にして、躰勢の變化極まりなし。殊に數十人を一幅に集めて其の奔馳、格鬪、憤怒、驚怖の狀情を現じて活けるが如きは、本邦畫家などの企て及ばざる手腕と謂ふべし。本邦の畫家にありては太だしき怪奇の面貌を許すに非ざれば恐らくは十人の個性を現はし得るもの無かるべし。少しく表情按配の困難なるに遇へば、すなはち種々の方便を以て是を塗糊し、掩蔽し、曖昧の中に其の責を免れむと欲す。而かも尙ほ其の小虛飾の凡情を離れざるや、其の表現せむとする當躰の果して本文の要求に稱へるや否やを省みず、ひたすら自家の小技倆を衒はむと力むるの惡習慣あり。愼むべきこと也。

描き方など更に相應はしからず。さらば所謂る新派獨創の新畫とも許し見むか、東西古今の流派を離れて何處にかその新らしきを誇り得べき點ありや。かゝる化物畫をば新と唱へ奇と稱ゆるは何の見る所ありてにや。

總じて高尚なる美術としての挿畫は我邦人の多く知り能はざる所なるべし。こは一つは我が繪畫の性質にも因るべけれども、技倆ある畫家初めより墨塹人の小技としてそを卑むるにも因るが如し。されば新聞雜誌又は小說等の挿畫に見るべきもの甚だ少く、例へばかのテオドル・ドレなどの諸作品に見る如き偉大なる成功は我邦にては殆ど想ひも寄らざる所也。予は是の點に於て本邦畫家の三省を促すべし。

二　ドレの挿畫

ドレの作にて最も有名なるはミルトンの失樂園の挿畫と聖書の說明畫となるべし。前者は友人晩翠の許にてしば〳〵是を見たるが、その崇高神祕なる表情はドレ獨得の深酷なる描法によりて殆ど遺憾なく發揮せられ、失樂園の本文も爲に

界の爲に太だ惜むべき事となす。

終に臨みて一言せむ。他人は知らず吾人は三十四年の文壇を德とすべき何等の理由をも有せざる者也。彼れは吾人に何等の慰藉をも、希望をも、娯樂をも與へざりき。如上の記憶の吾人の頭腦に印象せられたるは、吾人の甚だ遺憾とする所也。あゝ是の如き文壇は何時まで繼續せざるべからざる乎。吾人の懸念する所唯是れのみ。

（三十五年一月）

文藝雜談

一　挿畫

この頃の文學雜誌又は詩集に挿畫無きは稀なるが、その多くは挿畫と云はむよりは一種の摸樣とも見るべきものにて、其の技巧はいと〳〵拙きが多し。日本畫かと見れば骨法用筆の工夫もなきのみか、思ひもつかぬ處に陰影を施せるなど西洋畫らしくも見ゆ。さて西洋畫かと見直せば、聊さか形の似よりはあれど、明暗の

三十四年の文壇に關して吾人の言はむと欲する所略々右の如し。其他記憶に遺れる斷片の事件は、一にして足らず。『文壇照魔鏡』なる一書が文壇の廓清を期すと稱し、醜陋至極なる文字を弄して與謝野鐵幹の私行を訐きし事もありき。鐵幹の兒戲に與みして法廷を煩はしゝが如きは大に直に過ぎたりと謂ふべし。雜誌『明星』は極めて單純なる裸躰畫を挿入したるの故を以て、時の內務大臣末松氏によりて發賣禁止を命ぜられたり。秋に入りて白馬會の展覽會に黑田氏等の裸躰畫陳列せらるゝや、當局者は命じて腰部に黑布を纏はしめたり。彼れと此れと、共に俗吏輩が美術上の鑑識に盲目なるを證せると共に、文藝保護の爲に何等かの行政機關設立の必要を感ぜしめたり。高安月郊氏が譯出せる『イブセンの社會劇』は好出版と謂ふべし。讀賣新聞は月曜文學を廢して連りに懸賞俳句を募り、紅葉の名は常に撰者の中にあり。爾來彼を呼ぶに早く宗匠を以てすべき也。露伴は新作の見るべきもの無き代りに、舊作を集めて『譫言』『長語』の二卷を公にせり。中江兆民居士の『一年有半』及び『續一年有半』は是間に出てゝ洛陽の紙價を貴からしめたり。大橋乙羽が是年六月の初め、俄に三十三の壯齡を以て易簀したるは本邦文藝

解せむとす、既に〳〵誤まれり。況むや身獨逸語をも解し得ず、ニイチェ自身の著作の何物をも色讀せずして、漫に其の是非を判せむと擬す。眞理を求むるの道を去ること頗る遠しと謂ふべし。

竹風のニイチェ論と共に吾人の記憶に上れるものは、大塚保治氏の女子服裝の美術的價値に關する論文、藤岡作太郎氏の東西兩京の美術比較論、畔柳芥舟の詩文病理論等ならむか。讀賣紙上の『馬骨人言』が坪内博士の筆なりしことを聞きたれども、恐らくは爲めにする者の流言ならむ。吾人の畏敬する博士が斯かる淺薄凡俗なる批評法を以てニイチェに臨まるゝ事あるべしとは、吾人の思惟し能はざる所なれば也。某々雜誌記者等が空谷の跫音として讃美措かざるが如きは滑稽の極と謂ふべし。萬一坪内博士にして、馬骨人言は吾が草せし所なりと明言せらるゝが如きことあらば、吾人は謹で前言の無禮を謝し、同時に改めて大に博士に問ふ所あらむと欲す。夫の小兒輩と論爭するは到底吾人の堪ゆる所に非ざる也。

九　斷片の事件

八　見るべき論文

昨年中に表はれたる論文の稍々見るべきものを擧げむか、先づ指を登張竹風の『ニイチェ論』に屈せざるを得ず。ニイチェの說の是非は暫らく措き、其の難解なる幾多の著書を渉獵してかゝる明瞭通達なる長論文を編述するの勞力は頗る多大なるものと謂はざるべからず。從來ニイチェに關する敍述論評は世に少からざりしが、多くは淺薄なる英文雜誌の翻譯の類に過ぎず。其の精細の點に於て其の確實の點に於て竹風の是の論文と同日にして論ずべきものに非ず。吾人は是の十九世紀末の一大產物たるニイチェを殆ど遺憾なく我邦に紹介したる事に對して竹風の勞を多とせざるを得ざる也。

ニイチェの說に關しては世上種々の批評あり。是事に關して吾人は暫らく何事をも言はざるべし。然れども一事の最も明瞭なることは、世のニイチェを論ずる者の多くが殆ど全くニイチェを知らざる事也。吾人は是點に於て今の學風の缺點の最も分明に暴露せられたるを認むる也。嗚呼觀心自得の修證を經ずして偉人を

『永遠なる遺却』の中に埋沒し去るべければ也。

七　小兒輩の時文評論

時文評論の如きも特に言ふを要せざる也。嗚呼今の如き文壇に立ちて眞面目に議論し、眞面目に批評するが如きは、少しく心ある者の得て堪ゆる所に非ざるべし。凡そ新聞雜誌に時文を評論するもの、多くは黃口の少年のみ、素より人に訓ゆるの學殖あるに非ず、事を論ずるの識見あるに非ず。況して觀心修證の覺悟の如きは彼等の絶えて知らざる所、たゞ〳〵口耳三寸の學に依り一時の意見を述ぶるのみ。彼等能く其の知らざる事を論じ、能く解せざるの理を爭ふ。例へば佛蘭西文を讀む能はずして佛蘭西文學を論じ、獨逸語を解せずしてゲーテ、ニイチェを批評するが如きは彼等の最も得意とする所也。其の輕佻にして恥を知らざる、深く憫むべしとなす。是等小兒輩の事、素より毫も齒牙に懸くるに足らずと雖も、是の如き浮薄の學風の起因する所那邊にあるかを考ふれば、吾人は今の官私立學校の管理者に向つて特に警告する所無くむばあらざる也。

六　皆無の新著述

當り小說と新躰詩とのみならず、文藝に關する何等注目すべき著述の吾人の記憶に殘れるものとては殆ど一も是れある無し。浩瀚なる史籍は預約出版によりて陸續世に出でつゝあれども、歷史其物の著述は皆無也。史料は盛に編纂せられつゝあれども、吾人が其の恩惠に浴するの日は果して幾十百年の後なりや知るべからず。字書的、類書的、敎科書的編述は吾人數々是に接したりと雖も、學者が其の獨特の見地に據り時勢に率先して警拔なる批評を公にせしが如きは、吾人の絕えて見ざる所也。名著綱要と云ふが如き出版は是れあれども、誰れありて名著其物を出だしたるもの無し。國學者は依然として訓詁的也。洋學者は依然として紹介的也。新時代の精神と提携して進步的態度を執れる大研究の如きは、今の學者の想ひも寄らざる所なるが如し。

三十四年に現はれたる紛々たる駄書の名の如きは吾人茲に揭げざるべし。假令ひ强ゐて記憶の中より喚び起して茲に特筆大書するとも、彼等は間も無く再び

『春草』の如き詩歌專門のものもあり。其の他靑年文士の手に成れる新躰詩集少くとも七八あるべし。

然れども是れ唯外觀の盛大のみ、作詩其物の價値に至ては多く言ふに足らざる也。『曉鐘』は往年の『天地有情』に比して特に進境を示めせるものに非ず。『落梅集』『行く春』はた『若菜集』『暮笛集』に比して寧ろ遜色あるを見る。唯藤村の格調舊に依りて優麗典雅を極むるを多とすべきのみ。『亂れ髮』は一時奇才を歌はれたれども、浮情淺想、久しうして堪ゆべからざるを覺ゆ。鐵幹の詩、一家の風格あり、居然として新派の雄鎭たりと雖も是れはた當年一樣の鐵幹のみ。『鐵道唱歌』の凡調は兒童の口にこそ囃されたれ、素より大方の鑑賞に入るべきものに非ず。『文典唱歌』の類に至ては俗惡無味、詩の墮落も玆に至て極まれりと謂ふべし。其他靑年文士の手に成れるものゝ如きは、多くは淫靡なる戀愛を歌ふに輕浮なる調子を以てせるもの、言奇語麗を以て俗目を喜ばさむとするところ、忌むべく厭ふべし。見來れば百千の詩篇、畢竟流水の剽竊のみ。唯夫れ尾上柴舟の『ハイチ詩集』の譯の如き、聊か推奬を値すべしとせむか。

の所謂る經驗は念々刹那に於ける是等單純なる印象の連鎖に外ならざるを以て、彼の具存的事物の精緻なる記述を以て寫實の本意を達せりとする輩は、取も直さず吾人の經驗に反對せる非寫實主義を取れるものと謂はざるべからず。天外の如きは自ら自己の言語の意味をすら了解せざるものと謂ふべし。

這般の理論は本題の旨趣に非ざるを以て多く言ふを已めむ。吾人は今の文壇に流行する惡寫實派の模本として暫らく天外を推し來りたるのみ。紅葉門下の諸作家及び柳浪の如きは、特に吾人の言に耳を傾けて可也。

五　進歩せざる新體詩

短歌集及び新體詩集の出版の多かりしこと昨年の如きは從來未だ曾て見ざる所也。其の最も主なるものを擧ぐるも新體詩には、晩翠の『曉鐘』あり、藤村の『落梅集』あり、泣菫の『行く春』あり。短歌には鳳昌子の『亂れ髪』あり、鐵幹の『紫』等あり服部躬治氏の『伽具土』あり。其の他唱歌には『鐵道唱歌』を初めとして、『敕語唱歌』あり『東京唱歌』あり、『楠公唱歌』あり。近時又『文典唱歌』の刊行を見る。雜誌には『片袖』

り。就いて是を讀むに、其の所謂る寫實なるものは唯々當面の事物を無意義に描寫して遺漏なからむと期するものゝ如し。其の當然の結果として、之を外にしては讀者の注意を散し、是を内にしては事相の統一を失ひ、精緻は煩項となり、丁寧は冗漫となる。是の如くにして作者の所謂る空想に隨伴を命ぜられたる讀者こそは實に迷惑の限りと謂ふべし。天外は抑々如何にして斯かる沒分曉なる寫實主義の上に自家至重の專業を寄托し、剩へ是を自家製作上の覺悟として公言するの盲擧に出でたりしか。吾人の思料し能はざる所に屬す。所謂る寫實主義を奉ずる天外の一輩よ、暫らく吾人の說く所に聽かむか。

仔細に自ら省みて吾人の經驗を檢覈せよ。而して或る刹那に於て吾人に印象を與ふるものゝ何物なるかを考へよ。そは所謂る寫實派の好で表現する如く物象の全形躰なるべからず。吾人の注意力は一刹那に於て爾かく當眼の全現象に通じて精緻なる觀察に勝ゆるものに非ざれば也。言ふまでもなく近園の情況は朧ろげながら吾人の感覺中に入ることを妨げず、而かも一定の刹那に於て吾人が明確に感受する所の印象は極めて單純なるものならざるべからず。而して吾人

は決して彼等の門下に赴く勿れ。『紅葉露伴』てふ小理想が如何ばかり今の青年作家を中毒し、萎縮したるかは今の文壇の宜しく熟考すべき問題なりとす。今の時青年作家の爲に計るに、其の理想を高大にし、其の意力を雄偉にするより急なるは無し。吾人はくれ〴〵も是の事を以て今の文壇に戒告せむ。

四　惡寫實の流行の例（天外）

今の小說家が文明の大勢に通せず、學術、政治、宗教等の事歷に對して馬牛相關せざるが如きは暫らく說くを要せざらむ。唯今日著名の作家すら、其の自己の專業たる小說著作上の覺悟に於て極めて愚昧なる意見を有するに至ては一言の價値あるが如し。試に一事例を擧げむ。

小杉天外は小說著作上一種の意見を有すと稱するもの也。其の昨年中出だす所の作、必ず寫實小說の四字を標榜し、揚言して曰く、小說の要は有りの儘に事物を寫せば足る、作者の空想の導くところ、讀者は須らく隨伴して不滿無かるべしと。是の如き無意識なる主義の上に『戀と戀』を初めとして幾多の新作は公にせられた

罪』が大體に於て重厚の趣あるは嘉みすべしと雖も、結構陳腐にして文章甚だ冗漫加ふるに性格の研究尚ほ大に足らざる所あり。傑作を以て許すべからざるや論無し。『思ひ出の記』は平板に過ぎて無味に近けり。一種清新の理想の其の間に現はるゝもの無きに非ずと雖も、畢竟尚ほ稚氣あるを免れず、老成深實の境を去ること頗る遠しと謂ふべし。是等の作家何れも尚ほ春秋に富む、或は將來に於て多大の造詣あるべきも、現當の著作に對して多くの讃辭を呈するは吾人の能くする所に非ず。而して顧みて方今の文壇が、是等をしも尚ほ傑出の作として僅に將來の希望を繋がむとするを見て、吾人は轉た惆悵の念に堪えず。

遮莫今の小説界は方に局面一轉の時機に切迫せり。紅葉、露伴一輩の所謂先進大家の如きは最早や度外視して可也。彼等は舊時の小成に安じて既に新進の氣力を失へり。時勢の急潮に後れて最早や實力の競爭に勝えざるを見るに及びてや、高く自ら標持して偏に既得の虚名を失墜せざらむことを恐る。醜且陋と謂ふべし。今後の文壇は最早や彼等に求むる所無かるべし。彼等を大家と呼ぶは不可ならず、然れども其上に歴史的の三字を冠することを忘るべからず。後進作者

の浮薄なる裝釘の意匠と正に好一對たり。

表紙挿畫の美を以て其の書を賣らむとす、既に卑むべし。其の意匠畫風の爾かく輕浮を極めて而かも尙ほ其の清新を誇らむとするに至ては、著述出版者流の趣味好尙の太だ俗惡なるを想ふべし。宜なる哉、其の內容の亦爾かく輕佻浮薄を極めたるや。

三十四年の文壇を知らむと欲するものは、先づ其の表裝と挿畫とを一見すべきなり。

三　紅葉露伴を葬れよ

中村春雨の『無花果』、菊池幽芳の『己が罪』、德富蘆花の『思ひ出の記』等は昨年の小說中に於て最も名高きものなりき。されど是等は從來の陳套腐爛なる群著作の間に出でゝ、稍々新面目を現ぜしと云ふの外、特に多大の推奬を値せざる者なりき。『無花果』の如きは着想に於てこそ多少の見るべきものありしが、描法措辭の幼稚なるは素より、其の全篇を貫通せる理想は尙ほ太だ淺薄なりと謂はざるを得ず。『己が

笑ふ者をして欲するがまゝに笑はしめよ。他の褒貶によりて喜憂するの時代は吾人に於て既に遠く過ぎ去れり。其の見る所、今の衆俗と同じからざるは吾人の寧ろ欽ぶ所也。

二　表紙挿畫は恰好の代表者

三十四年の文壇を最も好く代表するものは書籍の表裝と雜誌の挿畫となるべし。街上の書店陳列する所の幾十百の新刊書は裝釘の美なること、たしかに一種の觀物也。著者出版者が表紙の圖案賦彩に苦心して互に新奇を競へるの狀歴然として見るべし。然れども仔細に觀察すれば、唯是れ新のみ、唯是れ奇のみ。一見俗目を喜ばしむるのみ、毫も重厚高雅の趣無く、其の趣味の輕佻浮靡寧ろ太だ厭ふべしと爲す。而して著者は清新を誇り、讀者は其の奇拔を喜び、相傳へて靡然として一時の風を爲す。吾人より見れば殆ど兒戲のみ。雜誌の挿畫の如きも亦然り。妄りに洋風の皮相を模して頻りに新樣を衒ひ、形似なく、骨法なく、明清なく、漫然東西を混じて歸適する所を知らず、たゞ怪畸を求めて嶄新を誇らむとす。其の風格

三十四年の文藝界

一　吾人の批評は無遠慮也

爾力めて己れに直かれ、然らば即ち人にも直からむ。吾人の奉ずる所の批評主義は唯是れのみ。今の小說家、新體詩人、批評家、著述家諸君の多くは是の文を讀みて恐らくは忿怒せむ。然れども諸君にして吾人に對する諸君の忿怒の今に始まりしことならざるを憶はゞ、自ら顧みて苦笑するの外無かるべし。

有體に言へば、吾人は毫も今の文壇に信賴せざる者也。如何なる新著述ありても其の世評如何に喧しきも、吾人は始めより多くの價値を措かざるを常とす。吾人は生來決して是の如き意地惡き者に非ざりしが、文藝批評家としての多年の經驗は吾人をして知らず〳〵斯かる習慣を馴致せしめたるを如何ともする無き也。敢て告ぐ、吾人に同情あれと要むるは無益也。吾人は却て今の文壇の如何なる作家に向ても先づ吾人に同情を要求するの權利を得來れと言はむ。是を以て吾人の批評は飽迄冷酷也、大膽也、無遠慮也。怒る者をして欲するがまゝに怒らしめよ、

きのみ。

◎天外柳浪が其の無意義の寫實より目覺むる時、紅葉が其の『金色夜叉』の宿痾に離るゝ時、露伴が其の學識と悟道とを脫する時、恐らくは多少の讀むべき作あらむ。然れどもそは一年の後なりや、十年の後なりや、將た百千年の後なりや、吾人得て是を知らず。

（卅四年十月）

◎兆民居士の『一年有半』を讀みたる人は心ずや其の『續一年有半』を讀みたるならむ。眼前の死期不斷の病苦、而して是の冷然たる哲學的思索に從事して其の他を知らざるものゝ如き、眞に生命死生の外に遊べる者と謂ふべし。其の學說如何の如きは暫らく說くを要せざらむ讀者須らく居士の人物を箇中に觀想すべき也。

（卅四年十一月）

か。

遙に想ふ、嘲風、曉翠好在なりや、否や。

○晩年の平和

近日嘲風、イルメナウに於けるゲーテの畫像を送り來る。心を傷ましむる哉。Ueber allen Gipfeln ist Ruh.....。嗚呼是の老詩聖が晩年の平和と安心とは、吾儕の生涯に於て果して望み得べきことなる乎。凝睇多時、感慨何ぞ勝ゆべけむ。

○抑々是れ何の才子ぞ

往年拙堂才子を論じて曰く、天下第一等の才子、秦漢の際、一の司馬長卿あり。魏晉の際、一の曹子建あり。皆華にして實少し。唐宋の際、一の蘇子瞻あり、其の言皆世用に切也。然らば則ち是を千古第一の才子と謂て可ならむかと。

今の高襟才子、華も無く實もなく、況むや其の言世用に關せず。抑々是れ何の才子ぞ。

○當今の小說

帝都近來絕て好小說を見ず。人は却て淚香が『巖窟王』の類を說く。趨勢知るべ

の樂を抛ち、薄資自ら給して遠く異域に游ぶ。國家の爲に盡せりと謂ふべし。旅愁幾年、憂積で其の人遂に狂す、命や慘憺たらずとせむや。然るに國家恤まず、却て狂癲の人に命ずるに歸國を以てす、無情も茲に於て極まれりと謂ふべし。

敢て問ふ、海外留學生諸君よ、諸君は是の如くにして安じて萬里の外に越在することを得る乎。

○人々自ら悟らざるべからず

喇嘛去りモルモン來る、去來我に於て何の關する所ぞ。今や、信仰は外にあらずして內にあり。人々遂に自ら悟らざるべからず。外にあるものは儀禮のみ、否されば職業のみ。世の宗教と謂ふもの即ち是れ。

○趣味ある旅行記

學者文人にして歐米に遊ぶものよ。吾人多くを望まじ、願はくは趣味ある一冊の旅行記を齎し來れ。歐米廻覽實記以來、旅行案內と政家年鑑との翻譯は寧ろ多きに過ぐ。願はくば吾人に示すに自家の趣味と識見と批評とに本づける一大創作を以てせよ。グラーフ・フォン・シャックが『半世紀』庶幾はくは以て範とするに足らむ

はしめざるべからず。

嗟呼、吾人の生きるは言はむが爲乎、吾人の言ふは生きむが爲乎。天下第一傷心の事、省みれば彼れにあらずして却て吾れに在り。

○一年有半

『一年有半』の面目は能く性命憂患の外に超脫する所にあり。怒て逼らず、哀て泣かず、嘲罵の間尙ほ活潑の禪味あるが如きは、當世名利の人をして慚死せしむるに足る。兆民居士の如きは眞に死生の外に遊べるもの、吾人をして轉々欽羨に堪えざらしむ。

○學士の虐遇

聞說らく白井學士伯林に狂す。同學狀を具して資を求む。文部省經費無しと稱して一金を送らず、直に命ずるに歸朝を以てす。國家學士を虐遇する何ぞ一に酷だしき。

○國家の無情

身は儼然たる學士、名聲夙に儕輩に布く。一旦命を被るや、暖飽の逸を捨て、圖纂

性自然の要求あるのみ。見よ、古來自然主義を外にして能く改革の實效を擧げしもの果して是ありや。凡俗的改革者流は是の簡明なる事實を如何とか見る。

○兆民とハイヂ

兆民居士の末路は、人をして詩人ハイヂの晩年を聯想せしむ。

ハイヂ曠世の奇才を抱いて人に背き世と離れ、晩年流浪して巴里に客たり。偶々癈疾に罹り、全身麻痺して起居意の如くならず。兩唇は開けるまゝにして、眼瞼亦閉ぢず。是の如くにして其妻の看護の下に一室に仰臥すること殆ど十年。而して病少しく衰へて指頭屢に動くや、即ち筆を執て休むこと無し。其の『レッテ、グヂヒテ』は實に是の如くにして成りたりき。何ぞ兆民居士の昨今と相似たる。

『一年有半』既に成りて居士京に入る。聞說らく、京に入るの後病俄に革まる。居士是の間に於て更に一大論策の著述に着手せりと。嗚呼是の人にして是の病ある、天乎、命乎。

○天下第一傷心事

生きむが爲に言ふもの、言はざるも尙ほ可也。言はむが爲に生きるもの是れ言

作家自らの陋劣なる品性を暴露するに過ぎざる今の駄小説に較ぶれば、殆ど同日の談に非ざるを覺ゆ。

（卅四年四月）

○美術と工藝

將來の美術は益々工藝と接近せむことを要す。是の兩者の提携は本邦美術の特色にして又其の長所也。二千年の歷史明に是を證す。敢て當來美術の當事者に告ぐ。必要の地盤に立てるものに非ざれば必要以上に發達すること能はず。

○自由美術

漫に自由美術と言ふ勿れ、ミケランジェロ、ラファエレの美術に果して自由なる者ありしや。工藝を卑み、裝飾を卑み、而して美術あれと云ふもの、是れ美術無かれと言ふ者也。價値は要求に伴ふ。分類は空名のみ。

○吾人の預言

凡俗的改革の失敗、吾人敢て是を預言す。體裁稱謂如何に備はるも、人性の至然を無視するもの、何處にか成功の途を求め得べき。

敢て彼等に告げむ、歷史は凡てのものゝ最大の敵者也、是に打勝つべきもの唯人

到る處に於て、自然及び人生の上に鏤刻せられたる大文字を讀むの準備なかるべからず。而して書籍の含蓄する所の如きは、人知の一小部分に過ぎざることを覺悟せざるべからず。學術が人を殺したるの事例は吾人の日夕見聞する所也。諸君は當に學者たるべし、然れども同時に人物たらざるべからず。我が國家の眞に要求する所のものは學者に非ずして實に人物にあり。敢て是の言を以て諸君の行を送らむ。

（卅四年十一月）

無題錄

（三十四年七月より十二月まで）

○『思ひ出の記』

近刊の小説中、やゝ異彩あるものは德富蘆花生が『思ひ出の記』なるべし。五百頁の紙幅は必ずしも珍とするに足らざるも、文情の高潔なる、今の小説界に於て稀れに見る所也。全篇の結構平淡に過ぎて波瀾に乏しきを憾むべしと雖も、樂天和平の間に於て能く人生の歸趣を描くところ、太だ及び易からず。加ふるに深き信仰あり、高き道念あり、而して詩趣亦乏しからず。是を無趣味、沒理想にして唯紙背に

吾人は一千八百圓の學資の甚だ豊かならざるを思ふと雖も、若し諸君にして書生の生活に復歸するの勇氣だにあらば、寧ろ其の多きを覺ゆべし。而して是の如き勇氣は曾に貧少なる學資の上に生活することに於て必要なるのみならず、其の妻子、父母に離れて遠く萬里の外に、越在するの旅愁に打勝つが爲めにも、亦極めて必要也。吾人は是れ迄海外留學生の中或は失神し、或は發狂し、或は病痢に罹りたる幾多の事例に接せり。而して其の十中の七八が懷鄉の哀情に基けることを見聞せり。異邦にありて故鄉を懷ふは人情の至然なりと雖も、諸君は暫く是の點に於て木強漢たるの覺悟無かるべからず。

諸君は各々專門の學者、其の學の益々博く益深からむことは吾人の素より希望する所也。而かも茲に諸君の指定せられたる學術の研鑽にも劣るまじき一大事の諸君に待つものあることを忘るべからず。何ぞや、人物の修養、是れ也。這般の覺悟素と平生に存すべしと雖も、三年の遊學は特に其の好機會なりと謂ふべし。歷史は回顧すべく、偉人は追慕すべし、而して山河舊に依りて我を迎ふ。人生の最も大いなる教訓と感化とはおのづから是の間に存すべし。諸君は是の天地の間

留學生諸君が其の修學の土地、方法等に就いて預め明瞭なる覺悟を有すべきは勿論の事なるべし。聞說らく、農學士某なる者あり、浮塵子研究の目的を以て獨逸に赴きしが、浮塵子の發生無き歐洲に於て是の如き研究の不可能なるを發見したるは、彼の地に到着したる後なりしを以て某は已むを得ず昆蟲の一般研究を以て現に其の責を塞ぎつゝありと謂ふ。吾人は本年の留學生諸君が是の如き失體を再演することの無からむことを希はざるべからず。

從來の留學生が、語學の素養無きの故を以て其の留學年限の過半を徒費したる事例は、吾人が連りに耳にせる所也。是の如きは留學生として有るまじき事ならずや。既に外國に留學生と謂ふ、語學は言ふまでもなく其の第一の資格ならざるべからず。知らずして是を任命するは當局者の過失なりと雖も、自ら知て是の任命を受領するものゝ、はた緩怠の責を免るべからず。吾人は本年の留學生諸君に向て切に是の事を警告するの無禮を忍ばざるを得ず。

吾人は留學生の待遇に關し、當局者に對して幾多の希望を有する也。然れども既に任命を受領したる諸君にありては暫く今日の狀態に甘むぜざるべからず。

て曾て子の家に賓客たりし二三の事例を目睹せり。

あゝ乙羽子既に逝きぬ。歳僅に卅有三。茲に徒に其の生前の事業を追懐するは、蓋し又人生の恨事たり。

（三十四年七月）

留學生諸君を送る

二十八名の文部省留學生諸君よ。國家が拔擢したる青年學者の選良たる諸君が、是の名譽ある拔擢に負かざるの準備と抱負とを有し居るべきは素より言ふまでも無し。吾人は茲に將來の日本が諸君に期待する所の甚だ輕小ならざることを一言して諸君の覺悟を確かめざるべからず。

留學生の濫發とは、吾人の數々耳にする所也。吾人は聰明なる當局者に於て是の如き訛傳を生ずべき措置無きを確信すと雖も、諸君は當に事實によりて是の如き疑惑を氷釋すべき位置に立てることを忘るべからず。日本は將來に於て益々多數の海外留學生を要すべし。今に於て區々の惡評の爲に留學生の品位を失墜するが如きことあらば眞に國家の爲に憂ふべしとなす。

版者との間を疏通するの地位に立ち、子自らも亦甘じて是の地位を守りたりき。今の文藝界は是の如き好意を有したりし乙羽子の名に對し、亦宜しく好意を以て記憶すべき也。吾等は是の點よりして文藝界の爲に深く子の遠逝を悼まざるを得ず。

而して乙羽子の短かき生涯は、又少年子弟の爲に好摸範を遺したり。子の幼時は小學校の教育をすら滿足に受くる能はざる境遇に過ごされ、東京に出てゝ硯友社の仲間入りをなせしまでは、西奥の邊陲にありて商家の小僧なりき。子が學問はかゝる間に於て爲されたるものなりき。東京に出て、一個の文學者として多少の名を成すまでにも、或時は一日三錢の食料を得て苦學せしことすらありしと云ふ。吾等は這般の事實の殆ど立志篇中の說話として耻かしからぬものあるを見て、子の人物に對して一段の尊敬を加ふるを禁ずる能はず。世上の少年諸子は須らく人生多少の成功も決して偶然にあらざるを悟了すべき也。乙羽子は身自ら是の如き苦境にありければにや、他の薄倖を憐むの情も亦おのづから篤く、才子の不遇なるものに遇へば喜て是を庇護したり。吾等は現に今日知名の小說家にし

ての子が獨擅の事業なりける。

私人としての子が性格は率直にして飾らず、洒脫にして拘らず、義に固く、情に厚く、能く親み、能く恕せり。されば子と親交あるもの、子が人と爲りに服せざるは無かりき。加ふるに子は事務を處理する上に殆ど天稟とも稱すべき才氣ありしを以て、出版社交の事業に盡したるところ亦尠からず、隨うて知交上下に遍く、文藝社會に事ある時の如きは、子の斡旋に依賴する所甚だ多かりき。往年の文學美術家懇親會の如きは、實に子が首唱に起りしものにして、子は是によりて今の藝苑に於ける小黨分立の弊を救はむと欲したるなりき。而して吾等の最も子に感謝すべきことは、子が其の力の許す限りに於て文藝の士を庇保せむと力めたるにあり。

子は素より豪富の身にあらずと雖も、子が管掌せる出版事業が今の文藝社會に影響する所の勢力は甚だ大なるものありき。自ら文學者たる子は、今の文學者の境遇に對して常に深厚なる同情を有し、出版事業として許し得る限り、務めて其の便宜を計りたるの事實は、吾等の平生親しく見聞せし所也。大學出身者の中にも子を德とするもの尠からざるべし。されば子は何時しか隱然として文學者と出

進む、是れ詩人たる君が天職也。想ふにサンタクロースの煙波長へに依稀として、ワイマールの古國舊によりて縁ならむ、古哲をしのぶ君の情や如何に。サンベルナル峰高きところ、トランスチベルの水深きほとり、古今の感慨、君が俯仰に任さむ。行けや君。

（三十四年七月）

大橋乙羽を悼む

乙羽子病に罹りてより百餘日、去月一日を以て終に不歸の客となりぬ。同じく三日谷中の養福寺に葬祭の式を營みぬ。風雨を冒して會するもの數百人。一代文藝の士來り列せざる無かりき。紅顏瀟洒の才人も今や冷土一抔のあるじとなり果てゝは、死後の萬戸侯も生前一盃の酒に如かざらむ。あはれ死者にのみ篤き人の心こそうたてけれ。

さはれ乙羽子はげに惜まるべき人なりき。小説家としての子は素より紅葉、露伴の諸先輩に及ぶべくもあらず、詩歌を能くし、俳諧に巧なりしが、是れによりて名を後世に留めむには尚ほ多大の修養を要したりき。唯夫れ紀行文ぞ文學者とし

去月十五日橫濱を解纜せる日本郵船常陸丸は土井晩翠を載せて西航の途に上りぬ。この文の世に出でぬべき頃には、君は紅海の岸に沙漠の月を眺めむか、蘇西の渚に古國の跡を偲ばむか。

心あるものにとりて旅行ばかり大いなる敎訓を齎らすは無し。そは自然の興會、人生の趣味、歷史の回顧、すべて旅行によりて活ける知識となり得べければ也。さればにや、古より大なる詩人の生涯の少からぬ部分は旅行の中に費されたりき。ゲーテは伊太利の漫遊より歸りて自ら其の詩想の頓に進めるを驚けりとさへ言へらるゝに非ずや。吾れは品性あり、學殖あり、詩情ある晩翠が能く這般の消息を解し得るの期、遠きにあらざるべきを疑はず。

君は詩人也、詩人として生死すべき人也。往年君の仙臺に赴く時、吾れは英語の敎師に果つべき君ならぬを信じたりき。今や君職を辭し、自ら資を拋ちて遠く歐洲に遊ぶ、發するに臨み君の近作を輯めて『曉鐘』の一篇に公にし、其の首めにゲーテの句を題して曰く、『吾れにして歌ふ能はざらむか、是れ吾れに命なきに等しき也』と。是ある哉君、壯なる哉君、歌へ、大に歌へ。理想を歌ひ、人道を愛し、進歩を信じ、無窮に

軍の生母たる權威とによりて、當時の施政に如何の勢力を有せしかは、著者の素より知了したるべきところ、殊に夫人が佛法の信者として、かの護持院の隆光等を役し、盛に堂塔伽藍の造營につとめたるの事蹟は、美術の歷史上にとりては見遁がすべからざる大事なりとす。例へば大和の法隆寺、唐招提寺、東大寺の如き古代の伽藍佛像が、今日尙ほ依然として存立するは、夫人の營繕與つて最も力ありき。吾人は著者が這般の消息に就いて毫も顧みる所なかりしが如きを憾とするもの也。

然れども恣に全きを求むれば、天下何物か瑕疵なからむ。以上の批難は良し批難たるの價値ありとするも、素より本書の定品を增損するに足らざるべし。方今史料編纂先生ありて而して歷史家なし、著者の如きは大處を誤らざるの史眼あり、過去を活現するの史筆あり、向來勤めて怠らずむば、造脂測り知るべからざるものあらむ。其の後年の著述に較ぶれば、本書の如きは蓋し言ふに足らざるものならむのみ。

（三十四年七月）

土井晩翠を送る

我の如きものが如何ばかり當時の風尙に投ぜしかは、天の網島に踏利天の例を引けるを見ても略々想ひ知らるべけむか。守景一蝶の畫風飄逸奇雋なるは更にも言はず、横谷宗珉、後藤通乘、奈良政隨等諸金工の作にさへ、一種剛健の氣風の安永以下の製作に見るべからざるものありと云ふに非ずや。其の風俗を見るも、狹斜の巷に遊客の氣嫌を取るを職業とする幇間だに鬚髯いかめしく生やしたることは、鬚の十、鬚の無休などの例にて知らるべし。腰に大刀をたばさみて道を行くに、六法を踏みたるも當時の風なり。元祖團十郎が隨市川の荒事を以て名聲を馳せたるもこの時代也。水木結、吉彌結の優美はありけむも、水木辰之助が槍踊りと云ふものも其の風姿の勇壯想ひ見るべからむか。這般の事例によりて想像すれば元祿時代の一面には、吾人の所謂る尙武剛健もしくは殺伐の風氣尙ほ存せりとせむも、強ちに不當の說に非ざるべし。

吾人は又著者が將軍綱吉の生母たる桂昌院夫人の事に關して毫も言ふ所なかりしを遺憾とす。若し元祿を以て天平に比し、常全院を以て聖武帝に擬すべくむば、桂昌院夫人はまさしく光明皇后にも較ぶべき也。夫人が其の絕世の才氣と將

史を案ずるに元祿の前に明曆あり、而して明曆三年には江戸の城市邸宅の殆ど全部を焼き盡し、二日間に十一萬に近き焼死者を出したる大火ありき。爾來江戸市街の復舊工事を如何にすべきかは幕府上下の最も苦心したるところなりき。加ふるに時の將軍たる犬公方の放縱なる施政と蕩樂とは益々其の困弊を甚しからしめたるに相違無し。上野根本中堂の大建築は叡山に摸して是の間に經營せられ、服部南郭をして玉樓金殿高多少、不庇貧民七尺身と憤慨せしめたりき。國用多端にして內帑の漸く支へざるや、惡貨の鑄造は容赦なく始められ、銀銅半ばを占むる金貨と、銀二銅八の銀貨との濫發は經濟社會を甚だしく攪亂せしめたり。是に於てか物價暴かに騰り、人情日に險惡となり、偸盜詐欺の徒世間に橫行するに到る。木枯言水が『犬吠えて家に人なし蔦紅葉』と歌へるもの、蓋し當時の實況なりしならむ。

是の如く世に事多くして人の心穩かならざる時代なりければにや、當時の文藝風俗の一面は、多く殺伐剛健の氣象を現はせるが如し。近松の著作中最も數多くして且つ最も世人に歡迎せられたるものは所謂る時代淨瑠璃なりき。國姓爺、曾

覺ゆるのみ。後半風俗世態を叙するところ、巧に事例を點綴して委細を曲盡す、殊に著者が素修の深と探討の勞とを見るべし。其の流麗にして洒脫なる著者が一流の文躰、また是の間に處して、一段の光彩を發せるが如し。唯惜むらくは叙事餘りに簡畧なればにや、往々人をして名辭の送迎に遑なく、爲に其の意義をして生呑活剝に終らしむるものあるを。想ふに讀者の多くは吾人と憾を同じうするならむ。

是の如く、吾人は大躰に於て著者の所見に服すと雖も、尚ほ一二の言を加ふべきものあり。元祿を以て太平和樂の時代と爲し、是の點より當代の社會を說明せむとしたる著者の見地は、吾人強ちに是れを否定せずと雖も、吾人は同時に是の時代の裏面には尚ほ戰國の遺風あり、文藝美術風俗の上に現はれて尚武剛健やいもすれば殺伐の風尚をさへ成したるを認む。是の一面の觀察が多く著者の筆に上らざりしは吾人の潛に遺憾とする所也。

蓋し元祿は今日世人の思惟する如く爾かく太平無事の時代には非ざりしなるべく、其の人情風俗亦恐らくは爾かく優柔佚蕩を極めたる者に非ざりしならむか。

來發達を論究し、題して『元祿時勢粧』と云ふ。吾人平生是の種の著作無きを恨みとせるもの、茲に一言なきを得ざる也。

元祿時勢粧、何ぞ其の標題の瀟洒にして夫の所謂る史家先生の撰ぶところに異なるや。案ずるに時勢粧の文字は太平記第二十一に天下時勢粧とあるに基くが如し。其の文によりて其の意を察するに、所謂る時勢粧とは當り政治軍國の大事を誌すのみならず、普く當代の人情世態を描寫するの謂か。『元祿時勢粧』の著者また是の意を躰せしものゝ如く、其の記述するところ、法政文敎より人情風俗に至るまで、細大網羅して餘すところ無し。第六章以下江戸と上方とを比較し、太平の粧飾を說き、廓の音づれと若衆姿とを描き、歌舞音曲を叙し、元祿美人相を論ずるところ、殊に著者が如何に人情世態に重きを置きしかを察するに足らむ。時勢粧の標題亦是に於て其の意義を全うせるを見る。吾人は先づ著者が這般の着眼、夫の滔々たる史家先生と異なるものあるを欽ぶ。

元祿時代を以て文藝復興期としたる著者の識見も亦吾人の概ね服するところ也。唯美術工藝に關しては復興と云はむよりは寧ろ革新と稱するの妥當なるを

祿に比すべくむは、萬壽長元は、猶ほ文化文政の如き乎、十一代大御所の豪奢と法性寺入道の榮華と何ぞ相似たる。聞說らく、足下近日元祿時勢粧に次て化政時勢粧の著あらむとすと。然らば則ち奈良朝史に次て平朝史無なかるべからざる也。

予嘗て奈良に遊び藥師寺の高塔に登り、三笠山より四方一帶の地、堂塔相望み、梵唄讃誦の聲旦暮に響くの狀を想像して神往禁せざるものありき。今茲に足下の書に接し、更に懷舊の情に堪えず、即ち恣に所思を陳して下問に答ふること是の如し。足下果して首肯するや否や。

（三十四年七月）

『元祿時勢粧』を讀む

（元祿時代の側面觀）

元祿は文藝復興の時代也、社會革新の時代也。元和偃武以來六十年の平和やうやく戰國の創痍を癒やして、茲に清新の氣運を喚起せむとする時代也。若し爛眼なる史家の文章を能くするものあらば、是の時代の如きは眞に好箇の題目たらずむばあらず。頃日笹川臨風一書を著はして當時の文物社會を叙述し、略々其の由

濃、柘、弱なる諸流派に較ぶれば、國民性情の權化、彼れにあらずして、寧ろ此にあるを觀る也。足下以て如何となすや。

是の書奈良朝の文華を叙述して殆ど餘蘊無し、唯其の美術に精しからざるを少しく憾とすべきのみ。佛法東歸の勢力が我が奈良朝に於て其の高潮に達したるが如く、漢竺の美術は我が天平の時代に於て其の英華を煥發したるの觀あり是れ豈本邦史上に特筆大書すべき事項に非ずや。今日寧樂の舊都、健陀羅美術の殘影を留めて餘光尚ほ煒々たるもの、啻に好古者の鑑賞に資すべきのみに非ざる也。健陀羅の地は即ちスキュタイ民族の故國にして、曾て歐亞二文明の交渉の地に當る。今日東大寺法華堂の觀音像にアポロ・ムザゲートの遺照を見出し得べしとせば、天平美術の意義亦決して淺小ならざるを見る。足下の是の書、是の一段の注意を缺きしの觀あるは、予の少しく憾とする所也。

足下先に『元祿時勢粧』を著はして江湖の喝采を博したり。想ふに奈良平安の二朝を以て德川時代に比擬するを得ば、天平は猶ほ元祿の如き乎、而して綱吉將軍と聖武天皇と、桂昌院大夫人と光明皇后と、何ぞ一に相似たる。而して天平を以て元

的は國家鎭護にありき。畢竟奈良朝の佛敎は現世敎なり、而して現世の福祉以外に求むる所無きは、古事記、風土記、祝詞に現はれたる日本民族の特性に非ずして何ぞや。奈良朝の文學は萬葉集を以て其の代表者となす。而して萬葉集收むる所の和歌は格調雄大、氣象剛健、其の情緒は快濶にして和樂也。是を古今以下の歌集の纖弱、憂鬱、多く婦女子の涙痕あるものに較ぶれば、果して孰れか能く我が祖先の性情を發揮せるものぞ。予曾て古事記を讀みし時、其の歷代の歌謠一として花鳥風月を歌へるもの無きを見て、本邦固有の性情が平安朝以下の文學と甚だ近からざるものあるを思へり。予は萬葉集に關して精緻の研究を遂げたるものに非ずと雖も、其の歌咏の中に花鳥風月の小題目に拘泥せるものとては、予の曾て記憶せざる所也。果して然らば奈良朝の文學は最も我が祖先の性情を代表せるものに非ずや。

美術に關しても予は同一の立言を爲し爲べしと考ふ。天平朝の彫刻の如きは、其の儀軌形式の如何は暫らく措き、少くとも其の精神氣格の雄大、快濶なる點に於て、紀記、萬葉の風尙ほ傳へ得て甚だ適切なるを覺ゆ。是を王朝後期に發生せる纖

し、宗教は殊に其の空前絶後の偉觀を呈したり。而して外來文物の輸入日尚ほ盛きや、國民固有の性情尚ほ其の潑剌たる活力を失はず、内外勢力の交貫錯離の跡、史家にとりて好箇の題目たらずむばあらず。足下の是の書、能く是の複雜なる契機を捉へて大處の觀察を怠らず、讀むものをして耳聞目睹の感あらしむ。眼光紙背に徹するものに非ざるよりは誰か是を能くせむや。予は足下の達觀活識、夫の子々たる史料編纂先生と同じからざるものあるを見て深く是を喜ぶ。

世の史家概ね曰く、奈良朝の文物は漢土の摸倣のみ、唯夫れ平安朝に於て初めて日本固有の面目を見得べしと。予の見るところ聊か是に異なるものあり。蓋し國民の性情古と今と素より同じからず、特に何れを以て固有とすべきかは暫らく別箇の疑問となさむ。唯若し吾人の祖先が古代に於て有せし所のものを以て我國民本來の特性と爲すべくむば、奈良朝の文物の如きは、最も明かに是の特性を表現したるものと謂ふべし。試に見よ、奈良朝の佛教は平安朝の佛教の如く、厭世趣味を帶びざりき。其の轉讀せられし經典の最も重なるものは金光明經と最勝王經となりき。聖武天皇が總國分寺として東大寺の大造營を企て給ひしも、其の目

に理想なき今の凡俗者流の云爲としては素より怪むを要せざらむ。唯是の凡俗的改革によりて誘導せられつゝある國民は禍なる哉。彼等時として功利の爲に文藝を言ふ、美育を唱ふる教育學者の如きは其の例也。されど美的要求は人性の本然に原づく、文藝其れ自らは何故に人生の一目的たる能はざる乎。人性本然の要求を無視して何處にか教育あらむ、何處にか道德あらむ。吾等は豈に改革を喜ばざるものならむや、唯今の凡俗的改革に對しては、遂に同情を寄する能はざるを悲む。

（三十四年七月）

笹川臨風が『奈良朝史』の首に書す

臨風兄足下、高著奈良朝史に關して、卑見を徵せられたるは予の光榮とするところ也。されど予は素より史に明なるものに非ず、何を以てか專門史家たる足下の下問に答ふべき。筆を執りて聊か躊躇するところ無きを得ず。

奈良朝は蓋し本邦歷史中に於て最も興味ある一時代也。政治は茲に初めて其の軌制を具へ、文學は茲に初めて其の端緒を啓き、美術は茲に初めて其の精華を發

俗者流が淺近なる實用に拘泥して人生の大本を遺却するものゝ如きは、寧ろ初より改革無きを可なりとせむ。

今の多くの敎育倫理學者の言ふ所の如きは、吾等殊に是を厭ふ。口躰の外に趣味を解せず、功利の外に理想を知らず、拘々として力めざるに非ざるも、人生の大本歸趣に就いては、藐然として會得するところなし。昔者ゲーテ、其のワグネルをして言はしめて曰く、藝術は永く、人生は短かしと。而して自ら歎じて曰く、吾にして歌ひ若しくは想ふこと能はずむば、吾が生命はありて無きに等しき也と。嗚呼何ぞ今の學者の說くところと異なるや。

蓋し今の凡俗者流の解するところの人は麵麭の人也、金錢の人也、能く世に處し、國に事へ、人に交るの人也。是の如き人を造るは即ち彼等の所謂る敎育倫理の目的也。是の如き目的を達する爲の運動は即ち今の凡俗的改革也。恐らくは世は是によりて無事ならむ、國は是によりて榮えむ。唯是の如くにして造られたる人の吾等の理想の人を去ること甚だ遠きを如何せむ。

嗚呼今の所謂る改革は文藝宗敎を度外視せり。口躰の外に趣味なく、功利の外

謂る改革論者の唱ふるところ、概ね是の類のみ。何ぞ其の凡俗なるの甚しきや。

彼等の言ふところは經濟也、教育也、道德也、是を約すれば實用の二字に歸す。彼等は是の二字を標榜して天下の事輙ち革新し得べしとなせる也。嗚呼何ぞ其の思想の凡俗にして而かも單純なるや。借問す實用の爲に人生ある乎、將た人生の爲に實用ある乎。抑々彼等の所謂る經濟、教育、道德に於て是の大いなる人生の歸趣は極盡せられたりとする乎。

吾等は素より實用を尚ぶ、されど實用以上に大いなる人生の歸趣あるを信ずる也。敢て彼等に告げむ、吾等は經濟の爲に活くるものにも非ず、彼等の所謂る教育道德の爲に活くるものに非ず。是等のものは人生が其の存在の目的を達せむが爲に要求する事物の一部分に過ぎざるのみ。夫の凡俗的改革者流は是の本末を顚倒せり。

試に問はむ、彼等は其の所謂る改革を唱ふるに當りて、何故に文學を言はざる乎、何故に藝術を說かざる乎、何故に宗教を言はざる乎、抑々彼等は文藝の事を以て人生と關知する所なしとせる乎。吾等豈に改革を喜ばざるものならむや、唯夫の凡

鳴呼凡俗改革

吾等の生活の超凡脫俗のものに非ざること、吾等素より是を知る。吾等は邦を護るに軍隊を要し、世を利するに金錢を要し、民を治むるに法制を要し、人を導くに敎育を要し、自ら活くるに米鹽を要す。吾等豈國家社會よりの見地を無視するものならむや。唯今の世の凡俗的改革に對しては則ち慊焉たらざるを得ず。

改革の聲は今の社會の四隅に響き渡れり、されど其の聲の如何に凡俗なるよ。國字改良論者は曰く、今の國字は實用に適せず、敎育上徒らに無益の年月を費すのみ、須らく改革せざるべからずと。言文一致論者は曰く、從來の文章は實用に適せず、敎育上より見るも經濟上より見るも、歷史上より見るも、言文一致たらざるべからずと。風俗改良論者は曰く、現行の服裝は實用に適せず、衛生、經濟、道德の上より見るも百の害ありて一の利無し、宜しく改革すべき也と。敎育改良論者は曰く、今の讀本の記すところは實用に適せず、今の外國語の敎授法は實用に適せず、兒童の遊戲亦實用に適せず、宜しく敎育的、道德的たらしめざるべからずと。凡そ今の所

ども文章も亦一種の技術なるを以て技巧の習練に待つある、素より言を須ゐず、唯是の場合に於ても亦徒に老人の摸倣を事とする勿れ。己れ能く先人に如かむと欲せば、亦等しく先人の學びたる所を學ばざるべからず。予は今の青年諸君が文を見るの甚だ輕からむことを憂ふる者也。

（三十四年五月）

夫れ其の弊を擧ぐれば、輕妙餘りて重厚の風に乏しきを惜むべしとせむ。其の史論、亦一家の體裁あり、夫の乾燥無味なる史料編纂先生と甚だ異なるものあるを多とすべし。往年の著『日本地氣論』の如きは識見文章共に、矧川が『日本風景論』に優る數等のみに非ざる也。

以上は青年文學者中、文名既に世に籍けるものに就いて言へる也。是の外、其の名未だ甚だ高からざるも望を將來に屬すべきもの、尙ほ少からず。是の文彼を取り此を捨つ、必ずしも褒貶の意を寓するものに非ざる也。

(八) 結論

現代の文章に就いて予の見るところ概ね此の如し、讀者願みて自ら悟了する所あるべき也。終りに唯一言青年諸子に告ぐべきあり、文章の基く所は其の人の品性也。文字は學び得べく、體裁は倣ひ得べけむ、唯其の氣格、神髓に至ては遂に其の人の品性に賴らざるを得ず。是を以て品性の修養は作文の第一義也。是れをこれ務めず、徒らに粉飾彫琢を是れ事とするものは畢竟戲作者流の餘技のみ。然れ

若し夫れ天隨は新進文章家として現下隆々の名聲ある者、其の文雄健自在、豪氣汪溢、縱橫の姿態を盡す。唯君は餘りに漢文漢詩の素修に富めるを以てか、其の用ふる所の文字、語法、亦餘りに支那的なるに過ぐ。動もすれば無用の典故を援引して却て文義の散漫を致し、不急の對句を臚列して論理の朦朧を招くところ、寧ろ勞して損ありと謂ふべし。其の弊の及ぶところ人をして往々其の文字の爲に枉ぐるに非ざるやを疑はしむ。吾人君の爲に潛に是を惜む。要するに君は桂月と共に赤門文士中の最も能文にして且最も健筆なるもの也、唯其の健筆に乘じて文を作ることの餘りに多きに過ぎむことを憂ふ。多作必ずしも濫作に非ずと雖も、推敲沈思の一段に於ておのづから缺くる所あるを免れず。天隨たるもの其の才器に顧みて須らく自重することあるべき也。

臨風の文は漢文の素養ありて而して漢ならず、國文の蘊蓄ありて而して和ならず、其の間一分の俳味を帶びて瀟洒輕妙の姿態あり。蓋し亦一體たり。桂月は情に熱し、抱月は理に拘はり、天隨は文に役せらる、唯夫れ臨風は能く情を解して執着せず、理に明にして拘泥せず、而かも風韻あり、雅致あり。蓋し風流才子の文か。若

雨俄に到るの概あり。理必ずしも精核ならず、說必ずしも妥當ならざるも、意力あり、情熱あり、生氣筆端に溢れて光芒四邊を拂ひ、讀む者をして心驚き目眩み、恍として端倪に遑あらざらしむ。是の如きは學んで得べからず、眞に天賦の文才なりと謂ふべし。但其の氣に任せ情を恣にするや、往々奔放に過ぎて放縱に陷り、鋪張に過ぎて浮誇に近づき、沈靜醇雅の趣に於て少しく缺くる所あるを恨みとすべし。

君が才氣の橫溢と詞藻の豐富と、和漢文學の蘊蓄とを以てして、尙ほ是の病を見るは、蓋し多忙の間に筆を落して沈潛未だ足らざるの致すところか、非乎。

劍峰、嶺雪、鯉洋、天隨は何れも漢文學の學士也、是を以て其の文亦主として漢文より來る。

劍峰の文は正々堂々たり、喩へば名將六師を率ゐて關を出づるが如し。布置章法、秩然として一絲亂れず、錯落奔放の奇趣乏しきも、文字は醇正にして鉅麗、事理は明皙にして切當、蓋し漢文の正體に近きもの乎。嶺雲の文は佚宕橫肆、好て怪奇を弄す、齊整は劍峰に如かざるも、淋漓は則ち過ぎ、才氣は桂月に及ばざるも、奇峭は則ち優る。鯉洋の文は太だ嶺雲に似て少しく及ばざるもの乎。

抱月は早稲田出身第一の文章家也。逍遙が馬琴の摸倣を力めしことあるが如く、君にも亦逍遙の擬似を事とせし時代ありき。『早稲田文學』發刊の當時に於ける君が文を緬想すれば思ひ半に過ぎむ。然れども逍遙が幾もなく馬琴の圈套を脫せし如く、君も亦永く逍遙の踏襲者に非ざりき。近時君の手に成るもの、おのづから一家の躰裁を具へ、儼として峙立するところあるを見る。凡そ君の文謹嚴にして典雅、精練にして簡機、殊に修辭の巧を稱すべし。彼の明堂辟雍を造るもの、門階戸席、皆程式あり、一楹一牖と雖も妄に移易すべからざるもの、取て君の文に喩ふべけむか。唯惜らくは撿束に過ぎて氣燄に乏きを。其の幽微の理を論ずるものにありては、語平明、意透徹、推開轉折の間に於て錯綜の妙を極むるところ、故大西操山の遺風を見る。蓋し君の如きは優に當代の文章家を以て許すべきものなるべし。同門の士にして文名あるもの網島梁川あり と雖も、君に較ぶれば一籌を輸せざるを得ざるべし。

赤門出身者の文を能くするものを擧ぐれば先づ指を桂月に屈せざるべからず。桂月の文は素と氣を以て勝る、一氣乘じ來れば雄健橫絕、離奇夭矯、萬馬亂れ奔り、風

有的にして、此は超絶的也、兩々相對峙して其の獨擅の地歩を占むるところ俄に他の軒輊を許さゞるものあり。明治文壇の二君に負ふところ蓋し小少ならざる也。

(七) 青年文學者の文章

逍遙、鷗外の二君は文壇の耆宿也、然れども若し吾人に許すに歴史上の見地を以てすれば、文學者としての二君の事業は、過去に於て其の大半を終れるものゝ如し。逍遙君教育に隱れてより既に數年、鷗外君亦京を去りてより往年の意氣復見るべからずとせば、文壇の將來は事實に於て二君の繼紹者たる青年文學者の手に委ねられたりと謂ふべき也。知らず、青年文學者中二君の後を享けて遜色なきものありや否や。

今の青年文學者の文名あるもの一にして足らず。曰く抱月、曰く梁川、曰く桂月、曰く天隨、曰く劍峰、曰く嶺雲、曰く鯉洋、曰く臨風、十指殆ど屈し盡して遺算尚ほ多きを覺ゆ。是等の諸君は皆是れ一時の選、素より傳人の上下を容れずと雖も、試みに少しく吾人の見る所を述べむ乎。

に近時の譯述に係る美學上の論著にありて是の慨特に深きが如し。

然れども是の如きは毫も君が文章の價値を增損するに足らざるべし。人或は君の文謹嚴に過ぎて洒脫の趣無きを言ふ、是れ或は然らむも、而かも恣に全きを望まば何ぞ必ずしも一二にして足らむや。一代の大家、君の如きは、人唯須らく其の長所に見て自ら學ぶ所あるべき也。

(六) 逍遙と鷗外

今試に逍遙鷗外二君の文章を對比すれば、彼れは平明にして記述に長じ、此は精嚴にして論議に通ず。彼れは事を假るに淺近力めて具體の事を說き、此は論を講ずるに高遠好て抽象の理を談ず。彼れは常識に基づきて成るべく通俗ならむことを力め、此は學理に據りて必ずしも難解を嫌はず、彼れは時に偃臥して洒脫の言を弄べども、此は終日危坐して肅敬の容を頹さず、彼れは諄々たり、此は昻然たり。若し夫れ批評上の態度に至ては彼れの尙ぶ所は記實也、經驗也、沒理想也、此の重ずる所は談理也、考察也、理想也。其の傾くところ、彼れは客觀的にして此は主觀的、彼は包

語の婉曲を似して冗漫の嫌なく章句の法巧に和漢を折して是を行るに一家の文脈を以てす。渾然として斧鑿の痕を留めず、文品甚だ高し。蓋し君が天才の然らしむるところ、最も學び易からずと爲す。而して所謂る君が一家の文脈なるもの、主として歐文より來れるものゝ如し。紆餘曲折縱横自在、文華四もに飛び光彩四邊を拂へども、一條の理義綿々として其の間は貫通す。その理を析くや幽微論を行るや森嚴加ふるに間々詩趣あり風韻あり措辭の巧あり造語の奇あり人をして卒讀を覺えざらしむ。

君の文抽象の理を述ぶるもの多し。是の種の文章にありては宛然として君が獨逸學者の風度を見る。是れ逍遙が英國派の學風を受け好で淺近の事を假りて高遠の論を爲すに比すれば、二君の面目おのづから明かなるものあり。君既に好で抽象の理を述ぶ、其の語義まゝ艱深にして解し難きものある、蓋し已むを得ざらむか。加ふるに君が學語の製作に關して一家の見地を有するや、其の用ふる所の文字往々世上に流布する所のものと同じからず。之を以て君の文に慣れざるもの、動もすれば晦澁不明を以て評するものあり、吾人潛に君の爲に是を憾とす。殊

にあり。是の如きは寧ろ君の性情に屬すと雖も、是の性情ありて文章亦一段の品格を高うせるを見る。夫の豫め成心を挾みて他に對するもの、言論未だ外に交らざるに、排攘の勢既に內に成る、是を以て論理窮屈、氣勢徒に張りて文品愈々低く、蕩然として情の人を動かすもの無し。君の文は則ち然らず、辨難攻撃に際して能く對手の言ふ所に聽き、力めて其の理に同ぜむとして而して同ずる能はざるに及びて、乃ち徐ろに反對の態度に出づ。而かも尚ほ他に許すに一家の見地を以てし、強て自己に同じきを求めず、唯務むる所は理窮まり情徹するにあり。其の氣度の寬裕なる、流石に老大家の風ありと謂ふべし。

(五) 鷗外

若し夫れ森鷗外は其の文體に於て、其の論法に於て、其の理想に於て、其の批評家なる態度に於て、其の他殆ど凡ての點に於て、逍遙と甚だ同じからざるものあり。而かも逍遙と並びて當代第一流の文豪たるの一事は則ち相同じ。

鷗外の文は謹嚴を以て鳴る。其の文字は漢文の嚴正を襲いで拮屈の病なく、國

君の文躰は是の如く三段の變遷を經由せりと雖も、そが本來の面目は流石に掩はるべくもあらず、其の眞摯なる情想と周到なる注意とは到る所に現れたり。其の用語は常に妥當にして毫も誇大鋪張の病を見ず、語法亦常に嚴肅にして一絲亂れず。間々滑稽洒脫の趣あるも法度おのづから其の間に備はりて少しも散漫の弊に陷らず。時に檢束餘りありて放縱やゝ足らざるの憾なきにしもあらざれども、諄々として理を窮め、切々として情を責むるところ、極めて力あり。漫りに大言壯語して他を威壓せむとするものに比すれば、文品遙に優るものあるが如し。而して極めて平明の文字を以て艱深の理義を穿ち、着々として肯綮に中るところ庖丁牛を解くの概あり、游刃常に餘地あるを以て文情詩趣亦おのづから油然たり。蓋し空文によりて空理を闘はすは君の常に避くるところ、是を以て如何に抽象の事理と雖も一たび君の筆に上れば忽ち其の躰形を具し來り、人をして耳聞目睹の感あらしむ。比擬提喩是の間に百出して、讀む者又高遠なる理屈三昧に彷徨するを覺えざるなり。時文百家、君に於て獨り這般の妙を見る。

而して吾人の最も君に服するは、其の能く人の言に聽き、人の理を容るゝところ

文學者中にて文名最も高きものは、先づ指を坪內逍遙と森鷗外との二君に屈すべし。

(四) 逍遙

逍遙の文は一概にして論ずべからず。人若し君が大學卒業の當時の著述なる『小說神髓』の文章と、早稻田文學時代の文章とを較ぶれば、其の躰裁の上に少からざる相違を認むべし。更に早稻田文學時代の文章と數年以來の文章、例へば倫理敎育、歷史書に關する諸論文とを較ぶれば、其の間に亦多少の變化を認めざるを得ず。是によりて見る時は、君の文躰は明治十八年頃より今日に到るまで少くとも三段の變遷を經由せりと觀るを得むか。即ち小說神髓の時代にありては主として馬琴に負へるものゝ如く、早稻田文學時代に到ては是の馬琴摸倣の段階より進で却て君が獨得の文躰を發揮したるものと謂ふべく、而して數年前君が文學界より敎育界に轉じたる頃よりは、其の文も亦君が敎育主義の影響を受けて更に別種の躰裁を成し來れるものゝ如し。

池邊吉太郎氏は東京朝日の主筆にして、其の往年佛京巴里にあるや、鐵昆崙の名を以て文名を日本新聞紙上に轟かせし人也。人は謂ふ、往年の文章、今の氏に於て認むべからずと、予を以て見れば則ち然らず。現時の東京朝日の論說は、都下の如何なる新聞紙に對するも、決して遜色無かるべき也。氏の文字、雪嶺の奇峭なく、蘇峰の才思なく、竭南の儀容なく、知泉の精悍なしと雖も、意眞にして語朴、邊幅を飾らずして氣格おのづから老蒼なるもの、氏に於て獨り是れを見る。今の文を言ふもの、かの四人を說いて而して池邊氏に及ばず、區々たる文名素より氏に於て增減するところ無かるべきも、而かも世評の沒鑑識は深く遺憾とすべき也。

以上述べ來りたるところは所謂る政論家の文章に係る。大凡そ政論なるものは、事概ね眼前口頭の實務に關するを以て、雅致詩情に乏しきは其の免れ難きところ、恐らくは曠世の大文豪を以てするも、多く施すところ無かるべき也。是を以て政論によりて文名を成せるもの古より甚だ多からず、想ふに文章の如はなほ文藝の範圍內に求むべき乎。

然らば則ち我邦文學家の文章は如何。

も學び易からずとなす。加ふるに其の文悠揚にして迫らず、靄然として情の掬すべきものあり、夫の奇怪自ら悦ぶものに較ぶれば文品遙に高し、蓋し時文の最も正躰に近きもの乎。春汀近時報知社に入りて其の論説を擔當す、而かも太陽載する所の月旦語に較ぶれば殆ど別人の手に成れるが如し。彼れが本領此れに在りて彼れにあらざるを見るべき也。

石川幹明氏は時事新報の記者也。彼れは巨人福澤諭吉氏の背後に潜みしを以て、其の名殆ど全く顯はれずと雖も、近年時事の論説欄に表はるゝ文字は、概ね此の人の手に成れりと云ふ。其の文平明和樂、兒女翁嫗も尚ほ是を解し得べし。理に偏せず、情に走らず、一に常識上より打算し諄々として人に接す、所謂る福澤流の最も純粹なるもの也。所謂る福澤流の文章は文字の奇なく、章句の工なく、たゞありのまゝの事理をありのまゝに言ひ表はすのみ。是を以て理通せざるなく意貫かざる無し、而して其の影響は實に普く國民の上下に亘る。かの所謂る文章家の文字が、小數によりて翫味せらるゝに較ぶれば、其の勢力の大小、日を同じうして語るべからざる也。

文を評して戰國策士の文と謂ふもの、蓋し大過なかるべき也。

羯南、知泉の外、沼南あり、涙香あり、春汀あり、石川幹明氏あり、池邊吉太郎氏あり。何れも新聞記者中の能文家也。

沼南の文は猶ほ其の辨の如きか。論理精密、文字平明、奇構なく、奇趣なく、混々として些の淳滯を見ず、理究まり意達して而して後已む。乾燥無味の嫌無きに非ずと雖も、亦一種の異材たるを失はずと謂ふべし。

涙香の文は人多く知らざるものゝ如し。而かも其の文の暢達奇矯なる、今の新聞記者中、多く其の倫を見ざる所也。彼れが文語句に於て整はざる所ありと雖も、委曲周匝、能く其の言はむと欲する所を言ふ。夫の空文虚辭を排列して遂に無意義の文章を作爲するものと同日の論に非ざる也。加ふるに論理精明、文に一種の奇構あり、常に讀者の注意を喚起して卒讀を覺えざらしむ。唯惜むらくは達意を旨として修辭を力めず、是を以て文品少しく野鄙なるを免れざることを。

春汀は人物評を以て其の獨擅となす。其の月旦は悉く現代の人物に關するを以て、其の言を婉にし、其の辭を微にし、力めて鋒鋩を露はさゞらむとするところ、尤

羯南の文、人をして呂東萊の時文を聯想せしむ。文路暢達毫も窘促の態を留めず、漢文の格ありて而して古ならず、時文の理ありて而して今ならず、おのづから一格を成す。語嚴肅、意悠揚、例へば名將三軍を指揮して平野に戰ふが如し。其の態度の正々堂々たる、現代政論家中稀に見る所なり。唯其の變に臨みて迫らず機に應じて移らざるや、往々にして單調平板の弊あるを免れず。是を以て法言懿則は則ち聞くべきも、辨難攻撃は則ち未だし。是を雪嶺に比すれば、謹嚴は則ち過ぎて、洒脫は則ち及ばず、沈鬱は則ち餘りありて飛動は則ち足らず。若し夫れ窮通開閉の機變に應じて、出沒變幻の奇工を弄するが如きは、羯南遂に雪嶺の敵に非ず。

知泉の文は辨難攻撃に長ずるを以て著はる。其の理を講ふる精核、其の論を立つる嚴峻、縱橫博辨、毫も缺隙を留めず。其の敵に接するや、冷酷にして一步も假借するところなく、其の勢に乘ずるや、千乘萬騎の奔馳するが如く、英氣颯爽、傍ら人無きが如し。蓋し覇才也。たゞ知泉の文刑名理法に是れ走りて、往々強辨附會の嫌あり、是を以て文意窘迫、人をして面を背けしむるもの無きに非ず。畢竟嚴酷に過ぎて肅穆の風を缺く、理は則ち爭ひ得べけむも、情は則ち動かし難からむ。彼れが

年に愛讀せられたる書籍なりき、然れども今にして是を見る、果して何の奇かある。雜誌『日本人』載する所の彼れの論文の如きも、今にして考ふれば、桂月、天隨の一輩に劣ること數等のみに非ざりし也。『日本風景論』は、慥に彼れが獨得の著書、着想の奇警なる者無きにしも非ざれども、素より蘇峰、雪嶺の文字と並び稱せらるべき價値あるものに非ず。而して近年讀賣紙上に間々掲ぐる所の地理紀行の文章の如きは、文情文品更に下落せるを見る。概して言ふ時は、矧川の文、理徹せず、情迫らず、瀟洒は則ち是れあるも、大抵散漫の誹りを免れず、動もすれば瓦礫雜投、その醇厚に勝えず、是に於て推望の弊あり、裝飾の弊あり、穉氣紛として近くべからざるに到る。畢竟彼れが文の如きもの、今日斗を以て量るべし。青年者流が今日尚ほ特に彼れを稱する所以の者、果して那邊に存するか、予の解する能ざる所也。

(三) 政論家の文章

雪嶺、蘇峰の外、今の新聞記者中、文名あるもの尠からず。陸羯南、朝比奈知泉の如きは蓋し其の尤なるもの也。

又偶然に非ざる也。

然りと雖も、予は必ずしも雪嶺を揚げて蘇峰を貶せむと欲するものに非ず。人各々長ずる所あり、一是一非、尙ほ盡さゞる所あるを見る。蘇峰は常識に明にして、觀察の才あり、是を以て新聞記者としては當代の第一人と稱するも、予決して其の過褒に非ざるを信ずる也。今の時、都下大小の新紙無慮二十有餘、其の記者として多少の名あるもの亦少しとせず、然れども、彼等の多くは一業一門の記者たるなり。政論に巧なるものは是れあり、法律經濟に精しきものも是れあり、敎育、文藝、宗敎に通ぜるもの、社會問題に明かなるの、各々其の人に乏しからず、而かも、是等各方面を包括して等しくインテレストを有し、是に關する意見を具躰的に發表し得るものは、今の世に於て一蘇峰あるのみ。是の點より見れば、彼れは天成の新聞記者なりと謂ふべし。是を雲嶺の議論の往々迂遠にして時務に適せざるに比すれば、寧ろ同日にして論ずべからざるを覺ゆ。

若し夫れ矧川に到ては、予は寧ろ彼れの文名の如何にしてしかく盛大なりしかを怪まむと欲する也。彼れが著『南洋時事』は、蘇峰が『將來の日本』に次て尤も多く青

だ能く人を動かすに足らず蓋し情に於て迫らざる所あれば也。

今蘇峰の文を以て雪嶺の文に比せむか彼れは理に長じ、此れは氣に勝つ。彼れには觀察の奇警あれども、風雲の意氣に乏しく、之れには氣節の高潔あれども、理義の徹底は則ち未だし。彼れは常識に本づくを以て動もすれば平板に陷り、此れは意氣を尚ぶを以て往々奇矯に走る。見來れば二者の文畢竟二者の性格に外ならざる也。

蓋し雪嶺は氣節の士也、蘇峰は功利の人也。昔者錢虞山、才富み學博く、名聲嘖々として一時の文柄を操りき、然れども彼れ身は勝國の大臣を以て新朝の官爵を受け、而して外節士に附いて却て口舌を以て人を欺かむとせりき、是を以て遂に後世の指斥する所となる。想ふに蘇峰の進止亦虞山に似たるところなしとせず、是れ予輩の潛に彼れが爲に悲む所也。蓋し文を論ずるに人を以てする、必ずしも當れりとせず、唯其の人によりて其の文を品するに及びて、情僞是非更に一段の分明を加ふるものあり、是れ節行の亦文士に重ずべき所以なるか。雪嶺は一寒士、十數年來名利の外に立ちて偏に其の名節を砥礪す、人物文章共に傑然として重きを爲す、

勝えず、讀む人をして徒に拮掘敖牙の感を起さしむるもの無きにしも非ずと雖も、森嚴の中おのづから洒脫あり、重厚の間時に奇矯あり、若し夫れ一氣乘じ來れば、才思益湧、論鋒犀利、筆端疑ふらくは風雨を捲き來る。而かも奔放の中檢則あり、縱橫意の如くならざる無くして、而して章句の法尙ほ嚴として存するを見る。喩はゞ駿馬の急坂を下るが如けむ、疾驅飛ぶが如しと雖も、四蹄石に着く處、步々力あり。彼の氣焰大に昂りては輒ち散漫雜糅の弊に陷るものとおのづから其の撰を異にす。是れ雪嶺の文の學び易からざる所也。

蘇峰の文は才子の文也。一介無名の書生にして忽ち天下の文躰を風靡したるもの、奇才に非ずむば爲し能はざる所也。『將來の日本』の一書、今日より見れば必ずしも珍とするに足らずと雖も、十五年前の當時にありては、眞に破天荒の文字なりし也。爾來蘇峰の文は時と共に進步し、其の冗漫は漸く簡勁となり、其の浮誇は漸く沈重となり、其の稚氣は漸く老蒼となりたれども、畢竟依然として才子の文也。文品何となく輕薄にして篤厚の風に乏しく、まゝ平板の思想を飾るに造語用句の技巧を以てするところ、識者潛に是を惜む。是を以て理到り意徹するに、其の文未

ば、それ何人をか師とすべきと。げに理なる問なり、想ふに本誌の讀者中、是れと同一の疑惑を抱けるもの尠からざるべし。即ちこゝに私信に答ふるに開書を以てす、事必ずしも徒爾に屬せざらむを信ずる也。

然れども人各々見る所あり、吾れを以て直に他を律せむは抑も危し、況むや事文藝の嗜好に屬し、關はるところ皆悉く現代の人、加ふるに知交亦其の半ばに居る、一是一非、予に於て必ずしも容易の業に非ざる也。願はくは讀むもの、予が言を以て直に他を評價せるものと爲すなく、たゞ暫く其の好む所に從ふものと見て可也。

(二) 雪嶺、蘇峰、及び矧川

今の青年子弟の文を稱するもの、曰く雪嶺、曰く蘇峰、曰く矧川、今の時に於て文名を青年者流の間に擅にしたるもの、蓋しこの三人に及ぶもの無からむ。予は先づこの三人に就いて見る所を述ぶべし。

雪嶺の文素と漢文より來る。是を以て法度の備はれる、邊幅の整へる、略々漢文の躰を失はざるものゝ如し。成語を餖飣し、典故を臚列するところ、往々其の弊に

に過ぎたるを憂ふる也。今の世に國語改良の聲高し、されど國文改良も亦是れに劣らざる一大問題には非ざるべき乎。將來の文章に對する予の希望一にして足らずと雖も、詮ずるところ忠實の二字に歸着すべし。文を作るもの、自己に忠實なれ、文字を以て自己の思想を拘束する勿れ。思想ありて而して文字あるを忘るゝ勿れ。須らく文字を使用すべし、決して文字に使用せられざれ。良心は道德の上にのみ言ふべきものかは。自己に忠實ならずして徒に言綺語麗を喜ぶものは、是れやがて文藝上の良心なきもの也。是の如き僞情一點たるあらば千萬言の大文字も一紙半錢の價値無けむ。

（三十四年三月）

現代文章私見

（一）序言

先に、予は作文に關する私見の一端を述べたりき。頃日、讀者の一人書を寄せて聞へらく、高論は則ち了し畢むぬ、たゞ後進の子弟、法を現代の文章に求めむと欲せ

る國學者を外にせる國民の大多數と共に、其の妙味を解し能はざる予の如きものより見れば、晦澁冗漫の惡文字に過ぎざるのみ。古文の妙は國文學者の翫味を妨げず、たゞこれを今日に施し、擬似摸倣以て得たりとするの弊風はつとめて除去せむことを要す。今の人の思想は今の世の文字もて初めて現はし得べき也。

若し予一己の嗜好に本づきて論斷するを許さば、おしなべて今の文を學ぶものにとりて、王朝以前の古文は殆ど用ふる所なかるべき也。世人は古來の因襲に基きて、漫に源氏物語の工妙を言ふと雖も、平家、太平記の如きは今の人の普く解し得らるべき更に工妙なる文辭には非ざるべきか。世人は僧侶の文章にはあまりに注意せざれども、例へば日蓮の遺文の如きは獨り鎌倉文學の偉觀たるのみならず、今日の人尚ほ則を取り得べきほどの名文章なりと想はるゝは如何に。是を源氏などの讀みがたく解しにくゝ、今世の趣味を去る頗る遠きに較ぶれば、文を作るもの特に留心するの價値あらむか。

是を要するに、今の文章はおしなべて文字に食傷せり、無意義、誇大鋪張の文字の多きに勝えざる也。修辭學は學者の研究にまかすべし、たゞ予は修辭の既に餘り

人の言ひ現さむとする觀念に比べて誇大鋪張に過ぐるもの多し。是を以て作る人は始より文字通りに解釋せらるゝを望まず、讀む者も亦始より其の間に矯飾あるを預想す。是の如くむば作者讀者互に虛僞を以て相交はるなり、達意を旨とする文章の第一義を去る頗る遠しと謂はざるべからず。

されば予の思ふ所を以てすれば漢文的語句は今日現に使用せらるゝよりも遙に節減せらるゝを可とすべし。精緻なる景物の記述、或は細心なる學術上の叙論等に於て殊に其の要を見るが如し。一定の形式に投じて其の思想を行るの風は時に不測の危險を招くことあるべし。吾人の思想は他人の心を以て考ふる能はざるが如く、他人の文字によりて表さるゝを得べからず。唯自己の言葉のみ自己の思想を發表して能く遺憾なかるべし。まことの文章是に於てか成る。

予は漢語使用の節減を望むと共に、本邦古文の擬似を事とする所謂る國文家の文章にも慊らざるふし多し。文章の種類多き、素より一律にして規約し難しと雖も、例へば王朝以前の古文辭を摸倣するが如きは、如何なる場合に於ても成功せる文章を成す所以に非ざるが如し。源氏物語は古今の名文と稱へらる、されど所謂

其の語を壯にせむが爲に、動もすれば事を假り、情を矯む。一見飲ぶべきが如きも、幾もならずして其の弊に勝えざるを覺ゆ。是に反して些の矯飾なく、單に己れの所思を忠實に現はさむことを力めたるものは、文字如何に拙きも、尙ほ眞情の掬すべきものあり、以て讀む者の心を動かすに足る。猶ほ便佞にして辭令に巧なるものよりは、朴訥にして禮を解せざる野人の事に臨みて功を成すが如けむ。

所謂る文章家の弊は、予漢學者もしくは漢文の素養深きものに於て特に多きを見る。本邦の文章が漢文に負ふ所多きは言ふまてもなし、隨うて苟も文章を作らむ者の一通りの漢文に通ずるを要するは素より論なし。唯漢文の通弊は餘りに形式的なるにあり、文法、語法等の餘りに定着せるにあり、換言すれば吾人の觀念の極めて複雜にして變化多きに應對してそを忠實に表現せむには、餘りに大まかに又餘りに頑固なるにあり。是れ或は漢文を操縱する能はざるが爲にして漢文其物の罪にはあらざらむも、而かも大かたの漢學者が是の弊に染まざる無きを以て見れば、普通の人にとりては、やがて漢文其物の弊なりと見むも妨げなかるべし。

漢語は其の形壯重にして力あり、塲合によりては缺くべからざるも、其の多くは吾

作文論

如何にして文章を作るべきか、予は是迄幾度となくこの疑問に接したり。然れども予素より文を能くする者に非ず、實は問者と等く是の疑問の中に在る者也。唯年來筆硯に親みたればにや、平生の經驗に徴していさゝか心に會する所無きに非ず、敢て自ら是を實にすと言はざるも、尚ほ以て青年子弟の參考に資するに足らむを思ふ。乃ちこゝに作文の論をつくる。

如何にして己れの所思を忠實に現はすを得むか、これ文を作るもの、筆を落すに先ちて熟考すべき第一義たるべし。己れの使用する所の文字、語句、己れの言ひ現はさむとする所の觀念を代表して果して遺漏なきか、遺漏なきと同時に又果して過剰なきか。文章の要實に茲に存す。是の第一義を失はむか、是れ既に文章無き也。如何ばかり美はしげなる辭藻を如何ばかり巧に累ねたりとて、畢竟狂言綺語のみ、遊戲文字のみ、事に臨みて寸毫の益無き也。

予は是の點より見て世の所謂る文章家の文字を厭ふもの也。其の文を美にし

も紅を流せるが如し。あゝ舊知の山河、亦新粧を呈し來る、人生獨り何ぞ舊によりて落寞たる。時下北歐の風物恐らくは人に佳ならず、幸に加餐せよ頓首。

（三十四年五月）

の時に於て道學先生の倫理運動よりは寧ろロマンチシズムの勃興を希望せむ、庶幾くは我が思想界の面目爲に一新せらるゝを得むか。

然れども足下よ、悲しい哉、是の如き希望はながく實現せらるゝとき無かるべし。道學先生は依然として其の所謂る道德を講ずべく、村學究は舊によりて其の所謂る敎育に當るべく、而して社會は彼等の影響によりて益々其の煩瑣と冷淡と無趣味と沒理想とを加ふべき也。嗚呼足下よ、薔薇花は砂漠に咲かざるなり、本邦文藝の前途亦遠い哉。

（十一）

嘲風兄足下、予は未だ言はむと欲する所の半ばをだも言はざる也。唯紙幅限りあり、更に後來を期せむ。予近來文辭に遠かりてより平生の惡文、更に甚しきを加ふ、足下を累はす、實に大なりと謂ふべし。晩翠兄近日西歐に遊ばむとす、足下と相見るの日、談若し予が事に及ばゞ、幸に日本湘南の海涯に病軀を抱いて遠友を憶ふものあるを忘るゝ勿れ。是の文を草するの夕、海靜かに風和ぎ、伊豆半島の夕照、恰

切の理想を沒し、餘す所のもの即ち道德なりとする也。其の村學究的道學先生的なる、寧ろ當然のみ。

足下よ、予は玆に道德の價値を詳論するの遑なきを憾とす。唯予の信ずる所を以てすれば、道德全能主義は由來東洋民族の痼疾なるが如し。吾人自ら製作したる道德を全能なりと妄信するの日は即ち是れ方便主義、僞善主義の勝利を得たるの日也。予は想ふ、道德全能主義の自繩自縛に過ぎざるを認め、道德の支配者が其の根底に於て個人に外ならざることを明にし、更に人間本然の要求を無視するものは如何なる場合に於ても人生の目的を阻害するものなることを痛切に覺悟するは、あらゆる道德の根本たるべし。是の根本に對する覺悟にして誤らむか、寧ろ道德なきを可なりとせむ。

足下よ、今の日本の社會は新舊道德の過渡期に際す。是れ從來久しく方便主義の桎梏に苦みたる吾人が、大に其の本然の要求を發言すべき好時機に非ずして何ぞや。彼の村學究と道學先生と、果して何爲るものぞ、何を苦みてか其の煩瑣、冷淡、無趣味、沒理想なる彼等が所謂る德德主義を以て吾人を累はさむとする。予は今

味に於て『人』たることを要する也。是の如き人にして初めて倫理と教育とを語るべし、何となれば倫理と云ひ教育と云ふ、畢竟人生を解釋して其の理想を現示するものに外ならざれば也。

足下よ、現今我邦に於て所謂る教育家、倫理學者の多く如何なる種類の人なるかは、足下既に知了せる所ならん。彼等は人生の事すべて哲學上の冷刻なる思索によりて解釋し得らるべしと信ぜる也。彼等は五六の西洋倫理書の素讀によりて、人生の理想輒ち解し得たりと爲し、茲に學說の異動を辯じ、社會の進化を說き、個人と國家との關係を明にし、更に將來の道德に關して論斷するところ、人をして耳聞目睹の感あらしむ。彼等は是を以て自得の眞理となし、論文に著書に到るところ其の說を公告し、工業家に遇へば則ち工業道德を論じ、商業家に遇へば則ち商業道德を說き、其の狀恰も一切人生の指針、藏めて是の胸に在りと爲すものゝ如し。あゝ足下よ、彼等の多くは實に是の如き徒なるのみ、何ぞ其云爲の偏狹、固陋、乾燥無味なるを怪まむや。蓋し彼等の所謂る道德は極めて簡明なるのみ。是の多面多趣なる大いなる人生より一切の宗教を省き、一切の文藝を去り、一切の趣味を却け、一

倫理、教育に關する研究及び運動は誰か是を歡迎せざらむや。方今倫理、教育の學者、運動家幾百千人ありとするも、予は是等の人々に向て憂國の士たるを拒むものに非ざる也。只予を以て是を見る、彼等の所謂る倫理、所謂る教育の餘りに偏狹に失する無からむや。角を矯めて牛を殺すは痴人の事たり。予は彼等が憂國慨世の美名の下に是の痴人たらざることを希はざるを得ず。

予を以て見れば、彼等の多くは倫理、教育が人生の爲めに存するものなるを遺却して却て彼等の所謂る倫理と教育とを以て人生を律せむとするものゝ如し。彼等が倫理、教育の理想を説いて村夫子に示す所のもの、甚だ鹿爪らしからざるに非らず、唯疑ふ、彼等自らは如何ばかり人生を解し得たりとするや。宗教の冥想なきものは人生を解すべからず文藝の趣味なきものは人生を解すべからざる也。一枝の野花を以てソロモンの榮華よりも大なりとするの消息を了するものに非ざれば人生を解すべからざる也。彼れは歴史に於て無數の自己を認めざるべからず、彼れは哲學科學が吾人に訓え得る所のものよりも人生なるもの、意義更に更に高く且遠きものなるを悟らざるべからず。一言すれば、彼れは最も完全なる意

（十）

足下よ。藝苑の落莫是の如きを致したるは、素より時勢也、而かも予は今の思想界の無趣味沒理想實に是が近因たるを思はざるを得ず。願はくは卑見を致して足下の教を乞はむ。

足下よ、最近數年間に於ける本邦思想界の趨勢が倫理的教育的に傾きつゝあるは爭ふべからざる事實也。文科大學が年々出すところの卒業生中、其の最多數を占むる者の一は常に倫理教育の學士也。精神科學の研究を目的とする會合、團體中に於て最も多數を占むるも亦常に倫理、教育の學會也。新刊雜誌、著譯書に就いて見るも、倫理教育に關するもの最も多きに居る。夏期講習會に於て村夫子の間に最も歡迎せらるゝものも亦常に倫理、教育の講師也。倫理なる哉、教育なる哉、今の本邦思想界は倫理と教育とを措いて、一日も存立し難きものゝ如し。足下よ、是れ果して何の現象ぞ。

本邦道德の頽廢は吾人の等しく憂とする所也、其の救濟の目的を以て起りたる

せられざる限りは、文藝界の前途唯闇黒あるのみと放語せり。足下よ、夫の茫々焉として兒女童幼の喝采の中に、詩神の桂冠を夢みつゝある彼等が、是の如き言を喜ばざるは、極めて自然の事ならずや。

然れども予は初めより今の多くの作家を以て予の言に警醒せられ得べきものと思はざりき。而かも能はざるを知りて尚ほこの侃諤を敢てせしむものは、後に來るべき多望なる青年文學者の爲に聊か先轍の戒を遺さむが爲なりき。足下よ去るものをして速に去らしめよ、新教育と新文明と新理想の間に保育せられたる青年文學者の場に上るに非れば、文壇の事殆ど絶望のみ。其の出處に見、其の經歷に見、其の修養に見て、今の多くの作家は到底新時代の福音を傳へ得べきものに非ざる也。

足下よ、予は到頭文壇の悲觀者に終らざるべからざる乎。頃日、足下送る所のズーデルマンの『エーレ』を讀み、遙に獨逸の劇界を想望すれば、神往殆ど禁ぜざるものあり。顧みて鄉國の佳信、一も足下に傳ふべきものなきを思へば、恨何ぞ堪ゆべけむや。

るに本邦文壇の現狀を報ずべきを以てせり、而かも予をして強ゐて今の文壇を語らしむる、是れ殆ど皆無を語らしむるに等し。足下よ、予が答は兩言にして盡くすべけむ、曰く、今の文壇の狀勢足下が一年前に見たるところと毫も異ならずと。

足下よ、本年一月の本紙上に揭げたる『文明批評家としての文學者』と題せる拙論は、足下既に一讀の榮を給ひしならむ。予は是の論文に於て主として今の我小說家を警醒せり。十九世紀末の一大思潮たる個人主義の勢力を代表せる者、實に三四の文豪詩人に外ならざること、隨て文學藝術の力時に科學哲學に幾倍するものあること、隨て文藝の士が文明の批評家として有すべき信念抱負の極めて遠大なるべきと、是等の事項に關し予は今の我邦小說家に對して愷切なる注意を與へたりき。予の意が如何ばかり我が小說家に解せられしかは、審ならずと雖も、最も明なる事實は彼等がそを喜ばざりしと也。如何に自然の徑行なるよ。彼等自ら信じて名譽とせる所のもの、予はすべて是を虛榮なりと嘲れり。彼等自ら信じて文學者の本分を盡せりとせる所のもの、予は指して兒戲に均しと罵れり。予は今の作家の眞相が依然たる舊世界の戲作者なるを指摘し、是の戲作者氣質にして擺脫

を發揮して、清新なる生命を藝術界に注入するの一事は、亦愷に主觀主義の一長處也。予は再び言はむ、主觀主義其物には何等の定價なし、唯是を唱ふるの人によりて初めて價値を有し來る、超人（ユーベルメンシ）を理想とする個人主義は、ニーチェの人格によりて初めて成立すべく、意志の發展を極致とする個人主義は、イブゼンの個性を待て初めて意義あり。一度び偉大なる人格の強烈なる意志によりて傳道せられたる主觀主義は、時に一世の民心を把住して所謂る時代の精神を作ることある也。

嘲風兄足下よ、予は文藝上の主觀主義、もしくは理想主義に對して、實に是の如き抱負を有する也。予が是の矛盾と煩悶と我執と偏癖とを以てして、尚ほ且つ評論の筆を取らむと擬するもの、足下予が意を諒とせむ乎、又は其の愚直自ら計らざるを笑はむ乎。

（九）

嘲風兄足下。予は餘りに、空論に走りたるが如し、然れども足下よ、予は今に於て特に足下に語るべき多くの事實を有せざるを如何せむや。足下の近書、予に要む

音樂に就いて何の研究し若しくは自得する所なし、是點に於ては、予は最大多數の俗人と毫も異なる所無し。然れども是等の俗人は其の好惡を宣言し、其の意志を以て美術家を強ゆるの權能あるもの也。彼等の判斷は必ずしも正確ならざるべく、彼等の趣味は時に多大の醇化を要すべし、然れども彼等の宣言は尙ほ至高の判決也。彼等は如何なる場合に於ても下の如く公言し得、美術家よ、吾等は敢て命令す、吾等の命令に從ふは爾の任務也、若し爾の美術にして吾等の所望に副はざらむか其の作の優劣如何を問はず、吾等は是を擯斥すべし。——ブルードンは是の如き方法を以て藝術批判の原則となし、公々然として當時の藝苑を橫行せりき。予は茲に彼れが所謂る原則の誤謬を指摘するの遑なし、唯極端なる主觀的批評主義の一事例として讀者の注意を喚起するに止めむ。主觀主義も是に至りて寧ろ其の弊に勝えざるを見る也。

是を要するに、主觀主義には一定の規準無し、其の勝劣は唯是を提唱する人物の如何によりて別るべきのみ。一定の規準を立し、萬人をして依據する所あらしむるを得ざるは、慥に主觀主義の一缺點也、而かも文字以外、繩墨以上、個人天來の理想

て、シレーゲルは理論家として、シライエルマッヘルは說法者として、各々其の理想の爲に戰ひたり。彼等の理想は畢竟個人の神聖を認むる所にあり。彼等は、世に創作の權能あるもの、唯不羈獨立、天才豐富なる『我』のみなりと爲し、一切の法則、彼れによりて生ぜらるとなす。即ち是れフヒテの主觀的唯心論に加ふるに更に神祕的性質を以てしたるもの、遙にスチルチル、ニーチェ等が個人主義の前驅として見るべきもの也。是の如くにして上はフヒテより下はハイネに到るまで、五十年間の歐洲文藝界は、佛蘭西に於ける政治的革命と同一の機運を經驗したりし也。

兎にも角にも、文藝界に於ける主觀主義の勢力が遙に客觀主義に勝れる者ありたるは、予を以て見れば炳焉たる歷史上の事實也。然れども、是の如き歷史上の事實あるの故を以て、一切の主觀主義を擧げて是を推奬するは予の意に非ざる也。夫の無學無識の徒、一時の好惡に任せて漫に褒貶を弄するもの、今の時寧ろ其の多きに過ぐ、予は決して彼等に黨同するものに非ざる也。往年佛蘭西にブルードンと稱する美術批評家あり、『美術の原理及び其社會的運命』と題する一書を著はして當時の藝術界を搖撼せしことありき。彼れ公言して曰へらく、予は繪畫彫刻又は

る所の事實也。人或は其の存續如何を疑はむ。然れども強大なる個人の意力の現はるゝ所、其處には必ず永遠の生命あり。見よ、ムーアによりてアナクレオンを味ひたる英吉利人は、更にオマイル、カイアムを波斯の古墳より起さずむば已まざるに非ずや。

更に是を批評家に見む乎、予は主觀主義、理想主義の上に立てる批評家によりて、最も強大なる勢力の發現せられたるを見る也。カーライルを見よ、彼れの說くところ、所謂る穩健着實の境を去ること頗る遠く、其の矯激なる點に於て、其の偏癖ある點に於て、客觀主義者流を欽ばすべき何等の長所を備へざりしにも拘らず、其の勢力の如何に大なりしよ。彼れの勢力は實に英國人が永遠に感謝すべきものたる也。ペーコンの如き、マコーレーの如き、若しくはミルの如きは、アングロサクソンの平明なる常識を代表したるに過ぎずと雖も、カーライルに到ては實に破天荒の才なりき。又夫のロマンチシズムの諸文豪に見よ、凡そ文藝の歷史中に於て、詩人の勢力一代の氣運を搖かしたる是の如きは他に多く類例を見ざる所、而して彼等の多くは何れも最も急激なる主觀的批評家なりし也。チークは詩人とし

褒貶を憚るや。抑々何が故に所謂る主觀主義、理想主義を嫌ふこと、しかく蛇蝎の如く甚しきや。

主觀主義は他方より見て個人主義也。而して文藝の史上に於て最も強大なる勢力を有せしものを實に是の個人主義と爲す。人動もすれば沙翁の名を擧げて客觀詩人の勢力を代表せしめむとす、吾人必ずしも是を拒まざるべし。唯沙翁の大を許さば何故に同時にバイロンの大を許す能はざる乎。沙翁の如きはむしろ千歳稀有の一人のみ、學で達し得べきに非ず、彼れに於て事例を援引せむとするは、寧ろ自ら計らざるのみ。翻てかのバーンスに見よ、シェレーに見よ、若しくは彼れのビュルヂ、ハイテに見よ『少年獨逸』の基礎は實に是等主觀詩人の個人主義に基けるに非ずや。テニソン、ヲーヅヮース等の名は大陸に於ては殆ど無意義のみ。而かもバイロンの盛名は現にチュートン民族を振蕩しつゝあるに非ずや。平板和樂なるロングフェローは北米の國民詩人なりと稱せられき、然れどもホヰットマンの勢力が如何に是を壓倒したるかを見よ。是を現代の詩人に見れば、ニーチェ、イプセン、トルストイ等の個人主義が、殆ど中部歐羅巴の文壇を風靡しつゝあるは世人の熟知す

何處にか審美の判斷ある、餘すところは一の記實あるのみ、一の歷史あるのみ。批評上、客觀主義を尙ぶものは勢ひ茲に至らざるを得ざるべし。足下よ、是の如きは標準科學に臨むに記述科學の通則を以てするもの、謬戾言ふまでも無からむ也。

然らば則ち人道に對して廣く同情を表するを以て客觀主義と解すべき乎。是れはた程度問題のみ。テインが所謂る平等の慈眼を以て一切に對せざる限りは、吾人の表示し得る同情は、少くとも吾人自らの個人性によりて制限せられざるを得ざるべし。所謂る客觀主義は如何なる程度までの制限を許容せむとするや、誰か是の如き問に答へ得べきものぞ。畢竟客觀主義なるもの、予を以て見れば殆ど無意義に近し、若し何等かの意義ありとすれば、そは多數主義、人氣取主義に外ならざらむのみ。夫の務めて好惡の情を蘊し、褒貶の意を藏し、可もなく不可もなく、平板無爲の間に成るべく多數の滿足を失はざらむとするもの、寧ろ陋ならずとせむや。大に罵る能はざるものは、亦大に褒むる能はざる也。文藝の發達は趣味の問題也、好尙の問題也、吾人の力行に待つあるもの殊に多しとす。夫の客觀主義なるもの遂に歷史主義たる能はずして、既に一分の是非を許さば、何が故に更に十分の

(八)

足下よ、所謂る批評家の任務は既に是を說きぬ。然れども茲に人あり、吾れは批評に就いて何の考ふる所無し、吾れは唯吾が好む所に從て是非の判斷を下すのみと言ふものあらば、予は彼れが發言を否定すべき何等の理由をも有せざる也。足下よ、予は是の如くにして文壇に立つ能はざるべき乎。

今の人動もすれば曰く、批評は客觀的ならざるべからず、一個人の習癖を擺脫したる沒理想のものならざるべからずと。其の意極めて分明。唯是の事あるが爲に漫に主觀的立言を貶せざるべからずとの理由は、予の認むる能はざる所也。足下よ、若し文藝の批評に於て客觀の極致を求むれば、其の定着する所は、遂にテインが所謂る歷史論に終らむのみ。『藝術批評家として、吾が唯一の義務は事實を表示して、是の如き事實が如何にして生起し來れるかを說明するにあり。科學は一切の事物に對して平等の慈眼を有す、憎惡なく褒貶なく、是非なき也』。是の如きは實にテインが批評の主義なりき。既に理想を沒す、是れ好惡なき也、既に好惡を絕す

是の如き人より如何なる批評を期待し得べしとするや。凡そ批評家は學殖と共に常識無かるべからず。其の心能く人を容れ、物に同じ、八面玲瓏、澁滯する所あるべからず。其の人物は須らくベーコンの如く、アヂソンの如く、ヘヅリットの如く、ハマートンの如く、レッシングの如く、マシュー・アーノルドの如く、坪内逍遙氏の如かるべし。然るに予は詩人としては沙翁よりは寧ろバイロンを取り、ゲーテより寧ろハイネを好み、批評家としてはレッシングよりは寧ろショペンハウエルを高しとし、テインよりは寧ろレエックを大なりとす。足下よ、人は其の性の近き所に從ふ、是の如き好尚を有するの予が、批評家としての態度は果して爾かく信頼すべきものなりや。世人恐らくは足下と共に是を危まむ。見來れば予と所謂る批評家と相距ること頗る遠しと謂ふべし。足下よ、是を如何かすべき。

然らば則ち予に一言の辯なき乎。曰く否。予は矛盾の人也、煩悶の人也、而して又我執の人也、主觀の人也。是の如き人、當代の文藝に對して毫も爲すある能はざる乎。曰く必らずしも然らざらむ、たゞ其の爲す所の所謂る批評家と太だ相近からざらむのみ。足下乞ふ少しく忍で予の言ふ所を聞かむ乎。

是の矛盾煩悶の中に過ごされたり。予は是の苦痛を解脱せむが爲に予の爲し得べかりし殆ど總ての方法を盡したり、然れども其の效果として見るべき者一もあらざりき。予が得たる些細の知識は予に光明を齎らさずして、却て暗黑を與へたり。予は意志の鍛鍊によりて是の疑案を解決せむと務めしが、予が感情は是の目的に對して餘りに強かりき。予は幾度か思ひき、寧ろ一切の欲求を解放して其の爲すがまゝにあらしめむ、我れに於て其の獨を樂む、亦可ならずやと。然れども吾が心流石に夜しかりき。畢竟悟らむが爲には吾が情強きに過ぎ、迷はむが爲には吾が智明なるに過ぐ、予は是の中間に佇徊して遂に其の適歸する所を知らざる也。足下よ、惡夢に魘はれたる夜は眠らざるに等し、予は實に是の十數年の歲月をかゝる煩悶の間に過ごし、人生の負荷、寧ろ其の重きに堪えざるを覺えたり。而かも予は幸に絶望せず、歎嗟せず、何時かは光明の天地に遭遇するの日あるべきを信じて靜に其の修養に勉めたりき。今や齡既に而立に及びて青春將に暮れむとす、而して矛盾と煩悶と依然として元の如き也。あゝ足下よ、是を如何かすべき。

今や再び茲に評論の筆を執らむとするの予は實に是の如き人たる也。社會は

一生は發達の連鎖也、發達は變化を意味し、變化は時に矛盾を意味す、夫の矛盾を恐れて緘默する者は、死するまで發言の機會無かるべし。個性の發展に基ける思想感情の轉移は寧ろ必然の經過のみ、決して反覆を以て批難せらるべきに非ざる也。

足下よ、予が文藝批評家の任務に就いて解するところ略々是の如し。然れども漫に理論を列ぬるは何人か是を能くせざらむ、唯問題は予の如きもの果して是の如き任務に堪へ得べきや否やにあり。足下よ、予不明にして自ら知らずと雖も、遂に惑ひなきを得ざる也。

（七）

先に擧げたる六個條の任務は、高才達識の人と雖も尙ほ是を難むべし、下愚移らざる予が如きもの、如何ぞ企て及ぶを得むや。況や、設令ひ予をして幸に學博く識高からしむるも、この個性の動かし難きもの遂に所謂る批評家の本分と相容れざるものあるを如何せむや。

足下の知る如く、予は矛盾の人也、煩悶の人也。予が今日までの短き生涯は、實に

きかは、各人天賦の性格によりてのみ決せらるべきを以て、素と言論の限りに非ずと雖も、而かも同情力の多少が、多くの場合に於て批評の運命を左右するの力あるは爭ふべからざる事實なりとす。蓋し文藝の事概ね人間の感情に基く、是の感情に同應するの力無くむば、批評の第一義は既に失はれたりと謂はざるべからず。夫の自己の狹隘なる人格に籠居して、一切を是非せむとするは、其の勢力如何は暫く措き、文藝社會にとりて最も危險なる批評家と謂ふべき也。

第六、彼れは如何なる場合にも、飽くまで自己に忠實ならざるべからず。彼れの公言する所のものは彼れ自身の眞に思ひ、眞に感じたる所のものならざるべからず。是を以て彼れは權勢に阿ねる能はず、威武に屈する能はず、情誼に惑はさるゝ能はず、直前邁往、たゞ其の所信を執て毫も動くこと無かるべし。既に己れに忠なるもの、亦己れと共に進止せざるを得ず、是を以て彼れは其の思想好尚の變遷に遇へば、輒ち是を公言して憚ること無かるべし。夫の反覆の誚りを受けむことを恐れて、終始先言に拘泥し、自ら知て其の非を遂ぐるものは、外より見て定見ある者の如きも、實は既に虛言者のみ、眞正なる批評家の爲すべき所に非ざる也。蓋し人の

る所なかるべし。

第三、既に社會の敎育者を以て自ら任ずる批評家は、時に社會の好尙に反對して不人望なる眞理を吐露するの勇氣なかるべからず。批評とは畢竟自己の理想に遵うて事物を誘導し、若しくは改造するの謂なり。一分自己の所信に稱はざらむか、彼れにありては一の戰あらむのみ。自己の理想を妨ぐるもの彼れにとりては即ち是れ眞理の敵なれば也。是れ以て文壇の俗論に歡迎せらるゝは、眞正の批評家に於て極めて稀に見るところ、彼れは時に一世を敵として戰ふの否塞に陷ることすらある也。

第四、彼れは文藝に關する一切の知識を有せむことを要す。然かも文藝の事、古今を貫き東西に涉りて際涯無し、其の一切に通曉せむは素より望むべからざる事に屬す。是を以て批評家の任務おのづから一業一門に偏倚する亦已むを得ざらむ乎。

第五、同情の範圍を擴張するは、文藝批評家の任務を果すべき修養として缺くべからざる也。是の如き修養が意志の力によりて如何なる點まで成功し得らるべ

足下よ、既に評論家として立ちたる予は、評論家たるの任務を盡すに於て自ら遺憾なからむことを期せざるべからず。所謂る評論家の任務とは何ぞや。通常世人の解するところは概ね左の如し。

第一、文藝に關する理論的知識を一般社會に播布するは文藝批評家の任務なり。文藝の事、時に幽玄高遠多年の研究を待て始めて了得するもの少からず、名品大作に於て特に是を見る。若し批評家の解説なかりせば、一般社會は永く其の光明に接するの期なからむ。ラスキンは公衆を無知なりと罵りたるの故を以て、數々不遜の誹りを受けしと雖ども英國の社會は藝術の敎育に於て永く彼れを德とせざるべからず。批評家は須らく一般社會の無學を豫想すべき也。

第二、現代の作家に對しては、批評家は須らく兩樣の態度を取らざるべからず。其の前途有望にして、將來文藝の發達に裨益する所あるべしと想像せらるゝものは、無知の俗論に反して宜しく回護奬勵の道を採るべく、是に反して一時の僥倖によりて虛名を博したる僞作家は宜しく是を貶黜して、社會文藝趣味の崩落を未然に防がざるべからず。評論の筆には兩面の刃あり、己れの信ずる所を執て假借す

きものの徒らに世を亂り人を惚はすに終らむのみ。是を過去の經驗に考ふれば、一是一非多くは我執の偏見、一時の妄念、徒らに人の誣りを受けて身に一毫の益あるなし。今に於て當時の事を思へば慚汗覺えず背を潤ふすもの少しとせざる也。而して當時自ら悟らず、文藝の批評に關して一家の識見を有せりと自信し、縱橫忌憚なく其の所信を告白して自ら其の意を得たりと爲したりき。識者は寧ろ其の穉氣を愛したらむも、予豈今に及びて其の過ちを再びするに忍びむや。

然れども足下よ、忍び難きことをも忍ばざるべからざるは予が現下の境遇也。予は内外のあらゆる障害あるにも拘らず、再び身を挺して茲に評論の筆を執らざるを得ざる也。唯際遇の人を移す、知らず識らずの間にあり。かの乞丐兒が自己の歌曲に興會して一時其の身の哀れなる境遇を忘るゝことあるが如く、評論の筆亦時に予をして其の業を樂ましむることあるべき乎。予は今に及びて是の如き時の速に來らむことを祈るの外なき也。

（六）

人アンデルッン氏の日本美術史を翻譯するの奇觀あらしめたるは、予の潛に心外とする所也。足下以て如何となすや。

(五)

嘲風兄足下。足下東京に在るの日、時に緣日の市場を散歩せしことあらば、必ずや破れたる三味線を抱きて、哀を行人に求むる幾多の乞丐兒を路傍に見しならむ。あゝ自己の生き甲斐もなき生活を續けむが爲に、路人を樂ましめむとするは如何に悲しき境涯ぞや。時として彼等は其の技藝によりて哀を求むるの身なるをも忘れ、何時しか自己の歌曲に感動して興會自ら禁ずる能はず、徐ろに行人をして其の樂みを羨ましむるものある也。あゝ足下よ、漫に夫の乞丐兒を憐むを已めよ、予が現下の境遇また太だ是に似たるものある也。

予や誤て文壇の人となりてより茲に六年、身世幾度びか變轉して、而かも尙ほ是の惡因緣と絕つこと能はず、茲に再び評論の筆を本紙上に執るに到りたるは、予の寧ろ恨事とする所也。凡そ評論なるもの、もと達人高士の事たり、短才寡聞予が如

予は信ず、世界に於ける各個の民族は其の到達すべき文明に關して各々特異の理想を有すべし。是を以て人類全體の上より見る時は、或る特殊の國民、又は特殊の民族が好尚する所の特殊の理想を以て、他の國民、又は他の民族の文物を批評する唯一の照準となさむは畢竟謬見なりと謂はざるべからず。予は又信ず、若しこの世界に人道の理想なるもの存せりとせば、そは何れの國民、又は何れの民族にも偏倚せず、あらゆる人類のあらゆる特質を包括し、調和し、玉成したる所に存すべきも也。足下よ、予の見る所を以てすれば、すべての歷史的研究は、是の見地よりして初めて至大の興會と最高の價値とを有すべし。

日本美術史の研究は、是の點より見て更に重大なる意義を有し來れるを見る。世界の文明を二分して其の一を保てる日本國民が將來人道に寄與する所のもの、素より一にして足らざらむも、而かも美術は如何なる場合に於ても其の最も貴重なるものいつたるを失はざるべし。足下よ、是の如きは、予が日本美術に對して有する抱負也、信念也。而かも本邦人の自ら自己を知らざるや、是の重代傳來の貴寶に關して、一も研究するところなく、遂に名譽ある文學博士末松謙澄君をして一外

たるは、吾人の親しく目撃しつゝある所也。足下よ是の如く見來れば、日本の美術史は取も直さずチュラニアン民族の具體的文明史なり。而して政治史上の日本がチュラニアン民族最後の勢力を代表するが如く、日本の美術史は、歐洲美術史と對峙して、人類の美的活動の二大發展を表示するものと謂ふべし。足下よ、日本美術史の意義また決して淺少ならざる也。

足下先に送り來れる伯林時報によりて、予はキールに於ける獨逸帝の演說を詳知するを得たり。其の主意の存する所は人種競爭の目的を赤裸々に現示したるに外ならず。曰く異教徒の文明は、其の程度種類の如何を問はず、遂に滅亡せざるべからず、是の目的を達するは基督教國民の天職也と。是の如き政略的詭辯は素より多く意に介するに足らざるも、今の西洋學者の多くが是と同一の見地により、て異人種の文物を批判するの態度を取れるに到りては、實に陋隘の極と謂はざるべからず。足下よ、試に英佛獨の學者の手に成れる世界美術史と題する書籍を繙讀せよ、名は則ち世界と謂ふと雖も、實は歐洲美術史のみ。アリアン民族以外に於て吾人の有する美術史の如何なるものなるかは、彼等の殆ど全く知らざる所也。

までもなく我が日本也。凡そ權力競爭の裏面には必ず文明の競爭あらざるを得ず。見來れば、印度以東、南洋以北の東半球の文明を二千年の歷史中に綜合し來りたるチュラニアン民族の最後の代表者は、實に人類の史上に於て最も重大なる地位を保てりと謂ふべき也。

予は日本の美術が是の間にありて實に稀有なる位置を有するを見る也。足下よ、印度以西の凡ての邦國の美術が歐洲美術史の中に流注したるが如く、印度以東の凡ての邦國の美術は、間接又は直接に日本美術史を構成する勢力たらざるは無き也。希臘佛敎式の健陀羅美術は、佛法の東歸と共に支那、朝鮮を經て早く既に我邦に入り來れり。大唐の藝術が天平、平安の二朝を風靡せしは言ふまでもなし。鎌倉より足利の時代に及びては、宋元の影響より遠く盛唐の餘波を復活せり。豐公征韓の役は八道の文物を黃土に委棄したりと雖も、其の繼承者たる日本の手によりて、半島の工藝永く存續せらるゝを得き。德川時代に到りては、近くは明清の勢力あり、遠くは西洋の感化あり。下て明治維新の開國と共に、西歐の風尙痛く本邦の藝苑を動かし、本邦美術の將來に向て最も重大に且更も有望なる影響を與へ

を本邦美術の上に置き、其の歴史的研究を推奨する所以のもの、決して偶然に非ざるを見るべき也。

(四)

足下よ、願はくば予を以て己れの好む所に偏するものと爲す勿れ。予は本邦美術に關して、今の學界の注意を喚起するところの寧ろ足らざらむを憂ふ。乞ふ、更に數言を費さしめむ乎。

今の世、アリアン民族以外に國するもの少からずと雖も、儼然として獨立國の體面と實力とを保有し、世界の一大勢力として二十世紀以後の競爭場裡に聘馳し得るの望あるものは獨り我が日本あるのみ。是を人種競爭の歴史上より觀察すれば、近世の大事は、主としてアリアン、チュラニアン二民族の勢力の消長に外ならず。而して是の競爭史上の敗者たるチュラニアン民族の力漸やく支へざるや、競爭の部位次第に西より東に移り、今や世界の勢力は極東の分野に奔注し來りたり。是の時に當りてチュラニアン民族の文明を代表して是の競爭場裏に立てるものは言ふ

出したる國民及び時代を看破せむこと、強ちに望み難き事に非ざるべし。畢竟政治や、宗教や、文學美術、風俗や、同一國民の活動を異なりたる形式によりて表現せるものに外ならざるを以て、美術の歴史は是等政治、宗教、文學によりて説明せらるゝ如く、亦飜て政治、宗教、文學を解釋するものならざるべからず。是の人文史的見地を離れて美術の發達を了知せむは、予を以て見れば決して望むべからざる也。

足下よ、日本の美術は其の統一に於て、其の繼續に於て、其の美術たる價値に於て其の他凡ての點に於て、歐洲美術と對峙して多く遜色あるものに非ざる也。埃及や、波斯や、印度や、曾て其の美術を有しき、而かもそが他邦の文物に及ぼしたる影響を外にしては今日殆ど歴史上の意義を有せざる也。支那は美術上日本の導師たりしことありしが、唐宋の盛時一度び去りてより、藝苑長へに振はず、遂に我が雪舟をして唐土學ぶべきもの山川のみと嘆せしめたりき。今日一千年以上の儼然たる歴史を有し、尚ほ有望なる進路を將來に有するもの、渾圓球上實に我日本と歐洲とあるのみ。風土別れ、好尚同じからざるも、是の二者は世界に於ける美術發達の二大潮流を代表するものと謂ふべき也。足下よ、予が今の學術界に於て特に重き

足下よ、予を以て漫に壯語するものと爲す勿れ、試に見よ、『國華』は本邦美術雜誌中の巨擘と稱せらる、而して其の批評眼の如何に幼稚なるよ。『國華』の批評家にとりては古代美術は殆ど如何なる場合に於ても犯すべからざる證權也。彼れにとりては古色は即ち賦彩の極致、簡朴は即ち技巧の理想、而して古來の傳說は即ち批評の典據也。あゝ是の如くにして藝術批評の局に當る、婦女童幼も尙ほ是を能くせむ。想ふに、『國華』記者の沒鑑識の如きは深く咎むるを要せざらむ、彼れは今の所謂る美術鑑賞家の一代表者に過ぎざるのみ。

予が今の美術學者に希望するところ一にして足らずと雖も、其の第一着として大に歷史的研究の精神を喚起せむことを希はざるべからず。蓋し一個の共存同衆の經營する歷史は素と是れ一體たり。個人の行爲が自我の發現に外ならざる如く、國民の活動も亦國民の性格を表現せずむば已まざるべし。即ち一國民の經營する諸般の文物はそれ〳〵小天地的に是の國民を表現するものと見るを得む。例へば聰明なる動物學者が一個の齒片によりて、時に是の齒片の所有者たる動物の形態を想像し得るが如く、活眼ある歷史家は、一基の彫像によりて、是の彫像を產

に憑據せるものならむ。あゝ足下よ、繙衣を纏ひ、僧侶を冠するの故を以て、明兆雪舟の如き人物を畫人傳中より排斥するが如き美術史家は、何れの國にか其の匹を見出だし得べしとするや。予は是の一事實を以て本邦人が美術史に關する觀念如何を推測するに足るべきを思ふ也。足下よ、今の所謂る鑑賞家の多くは、予を以て見れば扶桑名畫傳の著者の更に小なるものに過ぎざるのみ。

名は即ち鑑賞家と云ふも、實は一種の骨董家、一種の好古家のみ。彼等が古書に於ける知識は洵に當今の珍とするに足る。彼等は能く時代の今古を考へ、能く流派の異同を辨じ、又能く製作の眞贋を別つ。例へば歷山大帝の乘馬の黑白を論ぜし西洋史家の如く、葛飾北齋は飮酒家なりしや否や、と云ふが如き問題は彼等が最も得意の壇場たり。然れども彼等には歷史なき也、批評なき也、人文史上の考察なき也、審美學上の研究なき也。

足下よ、足下の專門とする所の宗教哲學の上より觀察すれば、日本の佛教史の如き、今の僧侶の關知するところのものより、更に〳〵重大の意義を有し來らむ。予は本邦の美術學者が是と同一の運命に接するの日も亦遠きに非ざるを想ふ也。

試に足下の爲に近時予が遭遇したる一事例を語らむか、思ひ必ず半ばに過ぐるものあらむ。今春のことなりき、元祿美術の研究者として、予は當時の大立者たる光琳の事蹟に就いて探討するところありたりき。而して予が少からざる勞力を以ていて辛やく到達し得たる結果が、予が最後に閲讀したるルイ・ゴンス氏の光琳傳に優ること甚だ過ぎざるを發見するに及びて、予は憮然として長大息するを禁じ能はざりき。嗚呼ゴンス彼れ何者ぞ、身は西歐に生まれて天涯に越在す、風土好尚本より同じからず、極東の美術に就いて見聞するところ略知るべきのみ、而かも尚ほ是の如し、鑑識の明、研究の精、寧ろ驚くに堪えたらずや。予が搜索し得たる光琳に關する事蹟一二にして足らずと雖も、悉く皆零碎斷片のみ、一篇の評傳として見らるべきもの、一も是あるなし。最も驚くべく且怪むべきは、本邦畫人傳中最も完全なりと稱せらるゝ黒川氏の扶桑名畫傳の如きすら、是の元祿時代の代表的美術家の爲に一行も記するところ無きこと是也。顧ふに光琳は名目上法橋の僧位を有す。この書其の師本阿彌光悦を記し、其の弟乾山を收めながら、光琳自身に就いて言ふところ無かりしは、蓋し一切の僧侶を度外視したる本書の國學者的偏見

切りに身に逼り、興會未だ到らざるに、身世茫々として青春早く既に暮れなんとす。つら〳〵往を觀じ來を想へば心潛に平ならず、洵に已むを得ざらむ乎。唯世事意の如くならず、繫累よもに塞る、今に及びて四方の事に當らむとするも、時既に晩れたり。茲に病軀を挺して一生を書窓の裏に閑却せむとするもの、予に於て又如何ともするなき也。足下よ、人生の心事何ぞ夫れ一なり難きや。あゝ予も亦夫の學者と共に營々として生死すべき也。

然れども足下よ、願はくは予を以て薄志弱行の徒と爲す勿れ。既に學者を以て立たむとす、不肖と雖も、聊か自ら負ふ所あり、豈徒に先人の後蹤を追ふて餬口補綴を是れ事とすべけむや。成敗今に於て豫め知り難きも、冀はくは多く意に介せざれ。男子苟も風雲の意氣あらば、天下の事深く憂ふるを須ゐんや。

（三）

嘲風兄足下、今の本邦の學界に於て其の最も不備なるものを擧ぐれば、日本美術史の如きは慥に其の一也。足下よ、予が殘敗の生を以て斯學に致す可ならむ乎。

君よ、予は實に感慨思念を併せて君に致さむと欲する也。

（二）

足下よ、足下の知る如く、予が生涯は書窓の裡に過ごされたり。あゝ足下よ、予は何時まで讀書子たらざるべからざる乎。予を以て是を見る、讀書は徒に人の憂患を增すあるのみ、生を養ひ、天を樂むに於て多く爲す無き也。夫の徒に知識を趁ふものは、猶ほ徒に金錢を蓄ふるものゝ如きか、愈々得て而して愈々足らず、終始欲求の限りなきに苦みて、遂に安ずるところを知らざるもの、彼と此と何ぞ一に相似たるや。予は世の所謂る學者なるものゝ生涯の、まことに果敢なきものなるを想はざるを得ざる也。あゝ足下よ、されど果敢なきことは他の上にのみ在らざりき、予も亦是の如き學者たらざる能はざるを如何せむや。

若し予をして恣に其の好む所に從はしめむか、願はくはかの江山に放浪して餘生を無爲の間に樂まむ。予年僅に三十有一、尚ほこの老餘の言を爲すは、人生の憂患むしろ既に多きに堪えざるを覺ゆればも也。顧みれば弱冠情を解してより、恨愁

姉崎嘲風に與ふる書

（一）

嘲風兄足下。去年三月、君が西航の首途を横濱に送りたるの日、予は西の方函嶺を踰えて駿州に入り、清見潟の海樓にやどりて離別の悶を遣りたりき。是の夜月明星稀、一灣の風露、恍として夢の如し、中宵欄に倚りて靜に君を思ひ、うたゝ人生遭逢のはかなきを歎きぬ。越えて六月、偶々官命あり、將に君を追ふて西歐に游ばむとす、發するに臨み、病俄に起りて果さず、即ち今茲陽春の候を以て程に上らむことを期しき。期に及ぶや、病の故を以て再び果さず。幾もなく三月十二日の君が書を領しぬ。其の首に謂へらく、恐らくは是の書母國に達する頃、君は既に印度洋上に浮べるならむと。あゝ予又何をか謂はむや。病軀山河に親みてより殆ど一歲、愁思徒に繁くして風物日に荒涼たり。今や身世忽忙として相移り、際遇漸やく異ならむとするも、平生憂を同じうするもの、君と予と先世何の契緣かある。天涯五千里、望み茫として遙なるも、希くは尙ほこの區々の消息を傳ふるを得むか。嗚呼

吾人は想ふ、若し我邦の小説家にしてイプゼンの『ブランド』を讀み、トルストイの『アンナ・カレニナ』を讀み、ズーデルマンの『フラウ・ソルゲ』を讀み、ヨーカイの『グリーン・ブック』、シェンキー、ヤッチの『クォー・ワヂス』を讀み、而して眞に是を解したらむには、復び安じて從來の著述に從事すること能はざるべし。然り、吾人實に其の然らむことを想ふ也。

嗚呼ニーチェは一詩人のみ。而して獨逸の思想界は現に彼れが爲に動かされつゝある也。寧ろ突梯とも見らるべき彼れの個人主義が、爾かく一國文明の大動力となれるを見ては、吾人は切に文學藝術の勢力、實に科學哲學に幾倍するものあるを思ひ、更に是の點に於てうたゝ文學者の崇高偉大なる天職を覺悟せずむはあらざる也。吾人は我邦文學者に勸めて強ちにニーチェ、イプゼンの先蹤を履ましめむとするものに非ずと雖も、而かも彼等が是の如き天職を自覺するの途に就いて、本邦文學の體面を一新せむことは、吾人の希望して已まざる所也。

(三十四年一月)

が如何なる種類の人なるかを想へ。吾人の知る限りに於ては、少しく教育あり、識見あり、趣味ある者の百中の九十九は、彼等の作を手に觸れむともせざる也。彼等が其の褒貶に一喜一憂する所の所謂る批評も、多くは文學の何物なるかを解せざる黄吻書生の惡戲のみ。少しく名ある學者が彼等の爲に眞摯なる批評をものしいが如きは、吾人の殆ど耳にせざる所也。是の如く國民に度外視せられつゝありて而かもそを覺らざる彼等は、却て日本讀書界の全體を占領せるが如く思惟し、自己の作世に行はれざるを見ては輒ち社會趣味の高下を口にす、滑稽も是に至て極まれりと謂ふべし。

吾人をして今の文壇の爲に計らしめむか、吾人は何よりも先に本邦文學者が文學に對する覺悟を一新せむことを希はざるべからず。彼等が戲作者氣質を擺脫せざる限りは、一切の助言も水泡のみ。吾人は是の目的に對する一方法として切に歐米輓近の詩人小說家の傑作を翫味することを勸告せむ。文明批評家としての文學者が、如何の修養、如何の品性を須要とすべきかは、特に彼等の注意を要すべし。

見き、世人或は呼て深刻小說と云へり。されど吾人を以て見れば深刻小說はむしろ慘酷小說と呼ぶべきなりき。精神病通なるゾラが其のナヽを描き、ルセーを描き、ルーボー、ミサールを描き、ジャック、コロラ、スヴリーンを描きしが如き深酷は得て見出だすべくもあらず。彼等は唯抽象的に事象の輪廓を描き、而して覺束なき自家の社會觀を其の上に貼附したるに過ぎざるのみ。是の如き著作によりて小說家の名譽を博するを得ば、天下何者か小說家の如く多幸なるものあらむや。

八

吾人は文明批評家としての文學者を論じて圖らずも罪を我邦小說家に得るに到りぬ、深く是を遺憾とすと雖も、而かも本邦文壇の爲に謀るもの、勢ひ玆に出でざるを得ざる也。吾人は今の我邦文學者の多くが、是の如き憐むべき狀態に存するに拘らず、高く自ら標置して大文豪、大小說家を氣取るの癡態を傍觀するに忍びず。夫の丙丁童子に擁せられて先生を以て自ら居る者の如きは眞に人をして絕倒せしむ。知らず彼等は何物を以て何人に誇らむとする乎。試に彼等の愛讀者

ン・イワノヰッチ』の如きも單に一病者の陰深なる苦悶を描寫したるの外、毫も他奇ある無し。而かも是等の作、何れも痛切深刻、たしかに一部人生の幾微に入るものあり。吾人は是の如き意味に於て果して一寫實小說を有するか。吾人は遂に我邦小說家の所謂る寫實を尊敬する所以を知らざる也。數月前都下の一新紙が當代知名の寫實小說家に關して傳へたる一記事は、今の我邦小說家の所謂る寫實が、如何なるものなるかを說明せるものなりき。其の略に曰く、某氏（小說家の名）は橫濱市の裏面の未だ社會に紹介せられざるものあるを遺憾とし、自ら是を蹈査せむが爲に同地に赴き、數日間滯在すべしと。數日間の觀察によりて看破せらるべき一大都市の祕密とは果して何物なるか、吾人未だ是を審にせずと雖も、又以て我邦小說家の覺悟の那邊に存するかを知るに足らむ。曾て聞く、ゾラが其の『人非人』を著さむとするや、人物事件凡て鐵道に關するを以て、爲に數年間の準備を累ねたりと謂ふ。吾人は名家の功を成すの偶然ならざるを想ひて、轉た我邦小說家の淺薄不用意を恨とせずむばあらざる也。

吾人は又社會小說の稱謂の下に、境遇遺傳の感化を描かむとしたるものあるを

れ大いなる誤りならむ。彼等は互に單位を異にし、地盤を異にし、平面を異にす。

吾人は我邦に於て政治小説の名を聞かざるに非ず、されど彼等が政治上の觀察批評は日刊新聞の雜報にだも及ばざる也稗氣滿幅、眞に人をして憫笑に堪えざらしむ。吾人曾てヨーカイの『綠書』(グリーンブック)を讀みて魯國現代史を讀みたるよりも多大の如き識を得たるを覺えき。實に是の武斷國の皮相の文明と、根本の野蠻と、戰慄しながらも常に反抗する其の農民と、鐵の如く頑堅なる社會及び宮庭の組織の爲に常に其の高尚なる理想の實行を沮害せらるゝ無力なる帝王と、凡て躍如として是の一書に描破せらる。先に擧げたるメリマンが『播種者』(ソーアース)亦多く是に劣るまじき也。

吾人は是の如き作品を讀みたる後、我邦の所謂る政治小説に對して、如何の批評を下すべきかに惑はざるを得ず。實に二三子の著作の如きは、殆ど兒戲に齊しきのみ。

吾人は我邦に於て寫實小説の名を聞くや既に久し、されど彼等の所謂る寫實とは果して何を意味するぞ。眞に其の實を寫して誤らずむば、世間何物か一部の小説ならざるべき。ドーテーの『ジャック』の如きは、其の傍話中に多少の傳奇的分子あるを外にして世間平凡の事例に外ならず。『サッポー』亦然り。トルストイ伯の『イワ

修養の深大なる、眞に歎美すべきものあり。試に思へ『アンナ・カレニナ』の如き、『名譽の負財（ネーム、オノア）』の如き、『ジャック』の如き、『播種者（ソーアース）』の如き若しくは『クォー・ヴヂス』『フラウ・ゾルゲ』の如き小說の作者たり得むものは、果して如何なる學殖、修養を要すべしとするや。例へば『クォー・ヴヂス』の作者の如きは、羅馬衰亡の事情に通ずることに於て多くギボンにも劣ること無かるべく、基督敎の歷史に精しきは勿論、兼ねて希臘、羅馬の宗敎、文藝、哲學にも通曉せざるべからず。又魯國近代史の精髓を了解し、其の土地と人民と、併せて英佛獨魯諸民族の民族心理とに明なるものに非ざるよりは、決して『播種者』の著者たること能はざるべし。吾人は素より學識と文學とおのづから別材なるを信ずと雖も、多く學び深く識る者に非ざるよりは、決して讀むべき著作を出だす能はざるを思ふ。我邦小說家は這の事例に就いて須らく一思する所あるべき也。

有體に言へば、其の名稱こそ東西齊しく『文學』なれ、同じく『小說』なれ、其の實質に就いては彼我日を同じうして語り得べきに非ず。我邦の小說家にして若しズーデルマン、ヨーカイ、シェンキー、ヒッチ等と其の事業を共にすと思惟するものあらば、是

に幼稚なる社會と雖も永く是に勝ゆべくもあらず。時勢進み人心移るも彼等は是に適應すべき所以だも知らず、況や是に率先し、況や是に超越するをや。流石に事漸く昔日の如くならざるを看取するに及びて、強ひて新境地を開拓せむと焦心するも、想ひ涸れ筆澁りて如何ともすべからず。是に於て彼等の中未だ名を成さゞる者は、已むを得ず舊樣に據りて胡盧を描き、其の既に少しく名を成したる者は、高く自ら標置し、事に托して容易に筆を執らず、ひたすら既得の虛名を失墜せざらむことを是れ慮る。而かも這般の兒戲を弄しつゝある間に、大勢漸く推移して又計の施すべき無きに至らむことを知らざる也。予を以て見れば、是の如きは、今の文學者の大多數が其の先輩たると後進たるとに論無く、踵趾相接して迴りつゝある所の一樣の徑路也。而して自ら覺らず、旦夕の計に汲々として自ら得たりとするを見ては、眞に人の心を傷ましむ。

七

去て是れを輓近歐洲の小說家に見るに、其の品性識見は暫らく言はざるも、其の

志無きに到りては、切に警戒する所無かるべからず。

今は全く局外の人と爲れりと雖も、予が初めて文壇に評論の筆を執りしより最近數ヶ月前に至るまで、前後殆ど六年の久しきに亘れり。予は是の短かからざる年月の經驗により、文壇の事情を知る上に於て通常人よりも多少の便宜ありたるを信ず。予は評論家の本務として是の間に現はれたる殆ど總ての著作を一讀せり、而して常に所謂る文士の進退祖徠に注目して出來得べき丈け文壇の消息に精しからむとを力めたり。是の如きは實に予にとりて最も苦痛多き事業なりしと雖も、而かも亦最も必要なる勤務なりし也。予は是のあらゆる經驗の名によりて公言するを憚らざる也、今の文學者には修養の念慮無しと。若し彼等にして修養を怠らずと謂はゞ、是れ疑も無く修養の道を誤れる也、即ち吾人の所謂る修養に非ざる也。試に見よ、最近十數年の間に出でたる新作家の數、十を以て數ふべし、而して彼等の十中の八九は今や殆ど見る影も無き姿となれるに非ずや。彼等の多くは、其の出場の初期に於てこそ多少注目すべき著作をも出だしたれ、其の貧少なる思想觀察を飽飣し補綴して僅に一時を彌縫することの度重なるに及びては、如何

とするや、彼れ書を其の友ローラ・キーレルに贈りて曰く、『詩の第一義は自己自らに忠なるにあるのみ。我れは我れにして他の何物にも非ず、是を以て欲せざるべからざる者を欲す、已むを得ざる也、詩即ち是れのみ。或は彼を撰び、或は此を擇ぶ、赴く所は虛僞あるのみ』と。『ブランド』は實に、是の如くにして成りたりき、其の人を動かして劇切痛激を極むるもの眞に所以ある也。請ひ問はむ、優柔媚悅を事とする我邦の文學者、這般の事例に對して果して何の顏色かある。

凡そ文學者に要するもの學殖然り、識見亦然り、而して最も得難きものを是の氣魄となす、是を以て眞正の文學は古より傑士の事也。彼れにして若し處を換ゆれば、或は敎の爲に血を流すの義人となり、或は義を見て難に趣くの國士となる。夫の紛々たる遊蕩兒、無賴漢にして偶々穿窬の技を弄ぶもの、果して何爲るものぞや。

六

是の如きは暫らく言ふを已めむ、恐らくは言ふて甲斐無きことなれば也。唯我邦文學者の多くが僅に彫琢の末技を怙みとして無學無識に安じ、絕えて修養の意

擔へる胸の如何ばかり苦しきかは、彼等の未だ曾て知らざる所也。是の如くにして詩人たり、小說家たらむと擬す、洒落本、浮世草紙の戲作者と相距ること果して幾何ぞや。

去て是をホイットマンに見るに、彼れは其の詩に於て慥に北米合衆國を侮辱せり。而して其の詩集の一部を抹殺すべしとの衆論に對して揚言して曰く、是の如くむば吾れ悉く吾が詩を火にせむのみと。意氣何ぞ夫れ壯なるや。トルストイ伯は『吾れは魯國の民に非ず、魯國政府に對して何の負ふ所無し』と公言せり。原始基督敎の理想を復活せむとする伯にとりて、是れ實に已むを得ざる宣告なりき。其の『イワン・デウラック』は魯國の軍隊政治を難じて頗る痛快を極め、其の『燭』は公然弑逆を論じたり。『吾宗敎』の發賣を禁止したる魯國政府が是の如き著述を默過したるは寧ろ奇怪とや稱すべけむ。遙莫、全世界の恐れとなれる魯國の權力を以てして遂に其の一步を枉げしむる能はざりしトルストイ伯の偉大なる人格は吾人の歎美するを禁ずる能はざる所也。文學の嚴肅なる意義は吾人又イブゼンに於て是を見る。彼れにありては詩は即ち彼れの意志也、理想也。『ブランド』を公にせむ

も、而かも詩人小說家としての覺悟に關しては、予其の同日にして論ずべきを信ずる也。實に一代の文明を批評し、若くはそを敵として戰はむ程の者は、曾に其の識見の高邁なるのみならず、其の氣魄の雄大、凛として秋霜烈日の如きもの無くむばあらず。一分、世に阿ねるの意あらむ乎、是れ既に批評家に非ずして諂諛者也、世に訓ふるに非ずして却て訓へらるる也、時勢に率先するに非ずして却て追隨する也。是の如くにして社會の劣等なる讀者を籠蓋し得たりとて何處にか貴むべき所あらむ。文明批評家は己れの信ずる所に非ざれば動かず、己れの信ずる所を貫徹せむが爲には輒ち一世を敵として戰ふを辭せざるの氣魄あり。利害の打算は彼れの知らざる所、彼れは推歩せずして跳躍す、而して其の意志の滿足は實に其の至高の報酬たり。是の覺悟あるもの初めて文明批評家たり得べき也。

吾人は茲に顧みて我邦文學者の多くが、氣節なく、德操なく、飄々片々として時好に投ぜざらむことを是れ怖るゝの薄志弱行を遺憾とせざるを得ず。依て以て虛名を得、錢利を貪るの外、彼等に於て毫も著作せざるべからざるの必要無し。彼等は唯官吏たらず、商人たらざる代りに、假りに文學者となれるのみ。理想の重荷を

る、其の豆大の眼孔に映じたる貧少なる閲歴を糊塗し、輒ち呼で詩歌と云ひ、小説と云ひ、我れこそは文學者なりと稱す。抑々彼等の多くは文學者なるものを如何なる物と心得居るにや、抱腹絶倒せざらむと欲するも豈に得べけむや。吾人嘗て我邦の文學者に向て時代の精神に接觸せよと說きしことありき。而して彼等は即ち同音にして言へらく『願はくは所謂る時代の精神の何物なるかを說示せよ』と。あゝ何ぞ其の厚顏にして愧ぢざるの甚しきや。文學者を以て自ら任ぜる彼等に向て却て文學者の覺悟を說く、既に是れ百步のハンデキャップ也。而して彼等自ら慚づる所以を知らず、尙ほ且つ斯かる奇問を發す。若し吾人にして是の如き者即ち時代の精神也と說示せば、厚顏なる彼等恐らくは更に問はむ『然らば如何にしてそを描くべきや』と。嗚呼彼等は吾人に向つて『文學者と爲るの法如何』と問はずむば已まざらむとする也。吾人豈恨無きを得むや。

五

我邦斗筲の文學者を以て歐米現代の名家に配す、素より不倫の誚を免れずと雖

面を被れる『シムボリスト』のみ。其の本來の面目に於ては、ニーチェ、イブセンと多く異なる所あらざる也。

四

吾人は我邦の文學者が切に這般の事實に對して熱慮するところあらむを希ふ。想ふに是の如きは一端の事例のみ、輓近歐米の文學者にして盛名を一世に擅にするものは、殆ど凡て文明批評家なりと謂はむも不可無き也。彼等は其の理想に於て、將た其の詩風に於て各々趣を異にすと雖も、而かも時代の精神を代表し、若しくは批評し、若しくは是に反抗し、文明の進路に率先して億兆の師表たらむを期するに於ては則ち一也。本邦の所謂る文學者は果して是の如き事實を如何とか見るや。彼等の多くは耳あれども國民の聲を聽く能はず、目あれども時勢の風潮を見る能はず、一代の民衆が空しく光明に憧れて暗中に煩悶する所のものを捉へて、『見よ爾等の理想茲に在り』と呼ぶ能はざる也。彼等の多くは社會を知らず、國家を解せず、況してや十九世紀の世界文明をや。彼等の多くが一代の文明と風馬牛な

人を說明せむとするが如く、イブゼンは個人によりて翻て境遇を規定せむとせり。是を以て彼れが詩は意志の詩也、理想の詩也。『ブランド』の主人公は實に是の勇猛不退轉の意志の化現とも見るべきもの也。彼れにありては凡ての事『萬事』が、然らざれば『皆無』也。彼れは讓歩を知らず、況や屈辱をや。彼れは是の本來の意志を貫徹し、實現するところに人生の極致ありとなし、隨て人は生れながらにして戰死すべき運命を擔へるものと爲せり。而して是の如き强健なる意志と崇高なる理想とは、イブゼンの母國たる那威人の特に缺如せる所、即ち彼れが詩は『スカンヂナビア』文明に對する公然の反抗とも見るべき者也。不幸にして母國は未だ彼れの眞價を認むるに至らず、彼れが勢力は今や却て南の方獨逸聯邦に擴がり、ニーチェと相呼應して獨逸文壇の風色を一變せり。ズーデルマンの如き實に彼れが偉大なる影響を代表する一人たり。佛のゾラ將た儼然たる文明批評家也。彼れを目して單に寫實家とするものあらば、是れ未だ彼れを知らざる者のみ。『ナヽ』や、『ラキエレー』や、『ラルジャンヌ』や、將た『倫敦』『巴里』の連篇や何れか佛國文明の病處を批評したるものに非ざるべき。彼れは實にチーグレルが言ひし如く、寫實家の假

ンの事は予嘗て本誌上に論ぜしことあり、讀者の中或は是を記憶する人あらむ。十九世紀と亞米利加の文明とありて而して吾が詩あるもの、眞に已むを得ざる也てふ彼れが語は、誠によく彼れが詩の面目を發揮せり。實に形式主義、方便主義に墮落せる十九世紀末の文明と、平等の虚名に眩惑して却て民主自由の咒咀者となりたる北米合衆國の缺陷とは、彼れが詩是を暴露して殆ど餘すところ無し。『生命に渴えて而かも其の泉を得ざりし理想の兒』は、さながら『ハムリン』の小兒が捕鼠翁の笛聲に赴けるが如く、踊躍して彼れに隨ひぬ。トルストイ伯が當代文明の最も大膽なる批評家なることは何人も知る所ならむ。曾てルソーが自然に還れと說きしが如く彼れが理想は十九世紀の文明を倒逆して原始基督教の禁欲主義に還沒せしむるにあり。彼れは國家の威嚴を認めず、帝王の尊貴を認めず自ら稱して世界の公民と呼ぶ。魯國政府が發賣を禁止したる『我宗教』の一書、眞に彼れが肺腑を暴露せり。彼れが思想の『アナクロニズム』は素より學者の批評を俟せざらむも、而かも魯國文明の彈劾批評としては何物か能く彼れが書の痛快に及ぶべき。イブゼンはニーチェと等しく個人主義の宣傳者也。ゾラが境遇 Milieu に依て個

ふ也。予は、街上に爛醉して車夫馬丁と格鬪したる知名の小說家あるを耳にせしことあり、而かも一人の當代文明に反抗して清新なる理想を歌ひたる者あるを聞かざる也。彼等の所謂る詩歌と云ひ小說と云ふもの、多くは、予を以て見れば到底戲作のみ、無意義の文字のみ。彼等の胸は未だ人生に對して開かれず、耳あれども聞こえず、眼あれども見えず、何ぞ其の作る所の主義なく、識見なく、精神なく、光焰無く、理想無く、殆ど小兒輩の落書と擇ばざるを怪まむや。詩人ニーチェの名が如何にして史上に鏤刻せられたるかを見よ。予は我邦文學者が文學に對する覺悟を一新せむことを希はざるべからず。而して更に見よ、是の如きは獨りニーチェのみに非ざる也。

三

輓近歐米の文學者にして其の名を一世に擅にせるもの、曰く米のホイットマン曰く魯のトルストイ、曰く那のイブセン、曰く佛のゾラ、皆是れ文明批評家也。一代の文明を抱擁して自家の想理中に化育せむとしたる文明批評家也。ホイットマ

人は言ふ、彼れの書險難にして解すべからずと。蓋し彼れは素哲學者に非ずして詩人也、而して彼れの歌へるものは山に非ず、河に非ず、恐らくは彼自らも解する能はざりし天地人生の幽微也。語妙に意徹せざるもの蓋し亦自然の勢のみ。唯靈なるものゝみ能く靈を動かす。そが十九世紀の重荷を自覺し初めたる當代青年の中に無數の味方を贏ち得しもの、亦決して偶然に非ざるを見る也。

二

ニーチェに關しては曾く是の如きを以て足れりとせむ。唯文明批評家としての彼れが偉大なる品性と高邁なる識見とは予が特に我邦文學者の注意を乞はむと欲する所也。

我邦文學者を以て自ら居る者甚だ少からず。されど「詩は人生の批評也」と云へるアーノルドが語を眞に會得せる者果して幾人ありや、予は實に是を疑ふ也。獨逸の學者中には藝術を以て哲學に配し、精神生活の最高位を以て是に擬せしもの少からず。我邦文學者中、眞に這般の消息を解するもの幾人ありや、予は實に是を疑

義も、ニーチェが是の個人主義の極端なるに較ぶれば尚ほ遙に緩漫なるを覺ゆ。而して吾人の最も注意すべきは、是の如き思想が獨逸現代の人心を搖撼したることの豫想外に深大なるの事實に在り。

是に於て吾人は文明批評家（クルツールクリチカル）としてのニーチェが偉大なる人格を歎美するを禁ずる能はず。彼れは個人の爲に歷史と戰へり、眞理と戰へり、境遇、遺傳、傳說、習慣、統計の中に一切の生命を網羅し去らむとする今の所謂る科學的思想と戰へり。徒らに外面皮相の觀察を事として精神的生活の幽微を解せざる今の心理學と、認識論の如き一部煩瑣の研究に陷りて、本能と動機と感情と意志とを遺却し去りたる今の哲學とは、彼れの所謂る僞學として排斥する所也。彼れは青年の友としてあらゆる理想の敵と戰へり。彼れは今のあらゆる學術の訓へ得るよりも更に〳〵大いなる實在の宇宙に充滿せるを認めたり、同時に是の實在を認識し、其の祕密に到達せむには、今の所謂る學術道德の甚だ力無きを認めたり。彼れは其の豫言者の眼によりて其の方法の何者なるかを知りぬ。彼れが當代の文明に反抗して其の神怪奇矯なる個人主義を唱ふるに至りしもの、亦眞に已むを得ざりしならむ乎。

ニーチェは、更に論歩を進めて民主々義と社會主義とを一擊の下に破碎し、揚言して曰く、人道の目的は衆庶平等の利福に存せずして、却て少數なる摸範的人物の產出に在り。是の如き摸範的人物は卽ち天才也、超人（ユーベルメンシュ）也、卽ち是れ無數の衆庶が育成したる文明の王冠とも見るべきもの也。されば若し衆庶にして自ら自己の爲に生存すと思はゞ是れ大いなる誤り也、彼等は唯是の如き天才、超人の發生を助成する限りに於て其の生存の意義を有するのみと。——彼れは、是の人道の理想を認めず、却て是に脊馳せる方針に出づるの故を以て今の社會、國家、學術の凡てを非認し、讃てルソー、ゲーテ、シヨペンハウエル、ワグネル等の人物を擧げて眞正なる文明の指針是に在りとなし、所謂る超人は學者に非ず、識者にも非ず、又歷史的に發達し來れる如何なる人にも非ず、實に是れ一個の藝術家、創作家なりと斷じぬ。彼れの說は是に到りて現時の民主平等主義を根本的に否定し、極端にして、而かも最も純粹なる個人主義の本色を發揮し來りたるを見る。さはれ、歷史無く、眞理無く、社會無く、國家無く、唯個人各自の『我』あるを認むるもの、十九世紀末の思想に對して何等の對比ぞや。遠くは『ロマンチシズム』の運動も、近くはヘンリー・マッケーの無政府主

ひて、つらつらニーチェの名の空しからざるを悟りぬ。蓋し彼れは哲學者と謂はむよりは寧ろ大なる詩人也。而して詩人として大いなる所以は、實に彼れが大いなる文明批評家Kulturkritiker たる所に存す。

ニーチェは殆どあらゆる方面に於て十九世紀の文明に反抗せり。哲學界に於てはヘーゲル以來、科學界に於ては、ダルヰン以來、一代の思想を殆ど殘り無く風靡し來りたる歷史發達說（ヒストリスムス）も彼れの眼中には僞學者の俗論に過ぎざるものとなれり。以爲らく、十九世紀末の吾人は歷史の多きに勝えざる也。主觀を沒し人格を虐げ、先天の本能を無視するものは歷史也。個人自由の發達を妨げ、凡ての人類を平凡化し、あらゆる天才を咒咀するものは歷史也。——彼れは是の如き論據より多くの學者を嘲りて僞學者（ヒルツングスフヒリステル）と呼び、『凡ての活力あるものゝ障礙、凡ての疑惑に沈むものゝ迷信、凡ての弱者に對する道德家、凡ての高きに向て進む者の足枷、凡ての清新なる生命を望みて進みつゝある獨逸人の前途を沮害する砂漠』は即ち是等の僞學者なりと罵り、『新舊信仰』の著者たる博士ストラウスの如きは是の如き僞學者の好摸本として標榜せられたりき。是の如く人格の獨立の爲に歷史發達論を否定したる

文明批評家としての文學者

(本邦文壇の側面評)

一

予、人のニーチェを語るを聞く毎に其の書に接するの暇無きを恨みしや久し。頃來閑に乘じて彼れが二三の著書を讀み、其の要領を會するを得しが、初めは其の說の太だ意表に出づる者あるに驚きぬ。抑々歷史を尙ぶ進化論と平等を旨とする社會主義とが殆ど思想界の上下に貫盈せる今の時に當りて、奇矯大膽、時には殆ど突梯不穩とも見らるべき彼れが如き說の如何なれば科學、哲學の中心たる獨逸には興りたる。今や『フリードリヒ・ニーチェ』の名は獨逸靑年の間に魔語の如く響き渡り、『フラウ・ゾルゲ』の五十一版を出だせるズーデルマンを初めとして、文學者中にも彼れが影響を被れるもの尠からずと傳へらる。科學を蔑如し、歷史を無視し、漫に不穩の空想を臚列して幽玄神祕を衒ひたるらしき彼れが如き說の、如何なれば斯くは一世の人心を鼓動し得たりとするや。予は其の當に然るべき所以を想

第三期

明治三十四年一月より
同三十五年十一月まで

點に於て學ぶ所無かるべからず。

◎大學生の不品行は誠に慨すべきも、教授先輩の中に通人粹士あることは更に大に慨すべきに非ずや。待合の奥座敷に警吏の誰何に辱められたる博士教授の如き責殊に重し。

◎自著と爲して翻譯を公にするは賞讃すべきことに非ず。森氏が『審美綱領』の廣告の如きは、素より書肆の猾策なるべきも、知らざるもの或は累を氏に及ぼさむ。

◎文學者の講談は倘迄講談改良の爲になさるべし、是を以て文學に代用するあらば、是れ文學の墮落なりと知るべし。

（卅三年四月）

◎藤村隱れ、晩翠去りてより中央の詩壇漸く寂しからむとす。近時帝國文學に載する所のものゝ如きは概ね紛として近くべからず。

◎文を作り詩を賦する、何ぞ妨げむ、唯一時の客氣に乘じて風流めかすは斷じて弊也。

◎學生時代に詩人にして、一家を爲せば輒ち俗人となり、オクピにも詩を言はざる者、比々として皆是也。是の輩花と云ひ戀と云ふ、吾人其の何の謂たるを知らず。

◎學を以て身を立てむとするものは、須らく浮華の文字を弄ぶを已めて其の學に專心なるべし。吾人文科大學の諸子に向つて特に是の惡まれ口を言ふ。

◎洋行者の夥しきこと今年の如きは無かるべし。行先は言ふまでもなく巴里大博覽會也。成るべく多くの同胞が海外に航海して其の見聞を擴めむことは至極望ましきとなれども、田舍者の東京見物の如く、生かぢりの通を振舞はすことのみ習ひ來らざらむことも、亦等しく望ましし。

◎今回の巴里博覽會に於けるピカー氏の設計は從來の方法を一新せるものなりと聞く。內國博覽會に於てすら完全なる設計を案じ得ざる我邦人は、特に是の

◎而して更に吾人の希望を述べしむれば、恐れ多き事ながら、例へば奈良正倉院御物中の美術品の如きも御差支無き限りは、是の美術館に保管の榮を得せしめられたきもの也。是の如くせば、國民も亦公共心を奮ひ起して、續々保管を依頼するに到らむか。

◎さるにても建物の建造費三十五萬圓は餘りに小規模ならずや。吾人は國家の永遠の爲を思へば三百五十萬圓も亦必ずしも多しとせざる也。

◎今の世の學者は殆ど全く官學の中に網羅せられたるが如し。社會は官學の外に學者を養ふ能はざる乎。學者は官學の外に其の身を立つる能はざる乎。

◎英のスペンサー氏は大學の敎授にあらず、獨のハルトマン氏は一室に籠居するのみ。而かも尙ほ儼として官學以外に於て學術界の一重鎭を爲す。是の如くにして初めて學術國と稱すべし。

◎華族の禮遇停止續々として現はる。驚くを已めよ。貴族院は宗敎法案の試石に遇うて既に其の腐敗を證據立てたるに非ずや。華族を如何に處分すべきかは愷に刻下の一緊急問題也。

◎我邦の美術は久しく全國に散布し、今に於て其の所在を知るに苦むもの尠からず。是を蒐集する事既に容易に非ず。

◎夫の株券を所有する代りに美術品を所有するものは寧ろ輿し易し。何となれば彼等は値段次第にては何物をも容易に手離すべければ也。

◎唯鑑賞の誠意なくして、偏に私有を喜ぶものは、是を美術館に致すこと容易の業に非ず。今の富豪の多くは蓋し是の類ならむ。而して最も難儀なるは、是の輩の有する所、往々にして稀代の逸品なるにあり。

◎如何にして美術品を收容すべきかは、今より考究し置かざるべからず。吾人の希望を陳べしむれば、富豪をして其の所有品の保管を美術館に托せしむるに若くは無し。唯困難なるは我邦の富豪が果して是の如き公共心を有し得るや否やにあり。

◎然れども是の如くするに非ざれば、完全なる美術館は遂に成立し難からむ。古寺院の佛像寶物等の如きも亦適當なる方法によりて、其の保管を美術館に托せしめざるべからず。

◎寄宿舎の有様の如きは、一度でも友人を訪問すれば直に分るであらうが、さて人物の寫實に到てはなか〳〵左樣に容易なものでは無い。是の如き幼稚な觀察を有せる鏡花に對ひて寫實の成功を褒むるのは餘り可哀相であるまいか。

◎吾人はくれ〴〵も天才ある鏡花が邪道に迷はぬことを切に祈るのである。

（三十三年一月）

無題錄（四）

◎皇太子殿下御慶事の紀念として東京市民は愈々一美術館を建築して献納することに決せり。例の祭禮的騒動に無益の金錢を費やすを止めて是の恒久の事業に出づ、社會の一進歩として見るに足る。

◎美術館の建築は御慶事の性質に關して特に其の體を得たるに庶幾し。公會堂の建設も必要ならざるに非ざるも、是度は美術館のかた然るべし。

◎されど東京市民の決議したるは建物なり。是の建物に入るべき美術品を如何にすべきか。

◎されば鏡花に對して彼れが自家の本領を自覺して、猥りに淺薄なる寫實を衒ふ無からむことを吾人は望むのである。良し『湯島詣』は佳作であるとしても、其の佳作たる所以を其の寫實なるところに存すとせば、それは大いなる間違であると云ふことを自覺する樣に、吾人は鏡花に望むのである。

◎吾人は眞正の寫實小說は、吾人の所謂社會的小說に到るべきものなるを信ずるものである。併し是を鏡花の樣な作者に望むは能役者に壯士芝居を眞似よと勸むると一般ではあるまいかと恐るゝのである。

◎鏡花が實世間に對する觀察に乏しいことは、神月梓の描寫によりても明に見ることを得るのである。神月は文學士だと言はれて居る。大學の寄宿舍の有樣などは煩はしきまでに實際を描いて居るが、扨て文學士たる神月はマルデ傀儡の如きものでは無いか。彼れを大店の若旦那としても、今樣の丹次郎としても、乃至は濟生學舍の書生としても毫も差支は無いのである。例へは是の文學士は、蝶吉のワキとしての外は生存の意義も事業も何も無いでは無いか。斯樣な文學士がマア何處に在るであらうぞ。

物ではあるまいか。彼れが如き作者に所謂寫實の風の加はるは果して祝すべきことであるか。

◎吾人は彼れの作の自然に離れ、寫實に遠かることを強ちに咎めなかつた。唯自然に離れかた、寫實の遠かりかたの如何にも無理なところがあるのを難じたのである。吾人の美意識の赴くところは、決して自然又は具象と云ふが如き一面のみではない、自然を超絶せる處にも吾人の理想として渇仰するものが多々あるのである。所謂天地の祕密と云ひ、人生と宇宙との幽玄なる變通と云ふが如きは、何れも是の一面の渇仰を著した言葉に過ぎないのである。潛に思ふに鏡花の本領は此にありて彼に在らざるのではあるまいか。

◎吾人は鏡花が『湯島詣』に於て、力めて寫實に赴ける痕跡を明に認めるのである。が、作の全體の精神と、是の寫實とは如何程までに調和して居るかを考へると、吾人はこの寫實に對して多くの讃辭を呈し兼ねるのである。喩へば雪舟の山水に北齊の人物を點した樣の不調和、喩へば能役者が壯士芝居を眞似た樣に不統一が明かに現はれて居るのである。是れをしも寫實の功として褒むべきであらうか。

◎天外、作なきこと幾月。近時人の傳ふるを聞く、來る十一月を期して三冊續の一長篇を公にし、以て世に問ふべし、是れ彼れが一世一代なりと。吁天外、年幾何ぞ、何ぞ一世一代を言ふことの早きや。

◎見渡せば明治文壇の將來も、今日の儘にては餘りに好望なりと謂ふを得ざる也。吾人の作家諸子に望むところの酷なる、亦已むを得ざる也。（三十二年十月）

無題錄（三）

◎鏡花の『湯島詣』はたしかに三十二年の文壇に於ける棹尾の作であつた。『新小說』の記者が溢るゝばかりの同情を有つて褒めちぎられた言葉も、強ち溢美で無いと云ふことを吾人は認めるのである。

◎主人公たる蝶吉の性格は、兎に角成功を以て描かれた。而して其の描かれ方る從來の鏡花には多く見なかつた程に際立つて寫實に傾ける事も、殊に注意すべき事實である。

◎『新小說』記者は、是の寫實の傾きを以て鏡花の一進歩とせられたが、是れは考へ

◎學識を衒ふの風は、作の全部を擧げて虚僞のものたらしむ、製作の根帶に於て一點の虚情あらば、藝術の第一義は既に失はれたる也。 吾人は特に是言を以て今の青年作家に呈せむと欲する也。

◎吾人は乙羽の紀行文に取る所は、虚情無き所にあり。 彼れは觀たる通りに描き、感じたる通りに述ぶるの外、其の他を知らざる也。 文字の瑰麗なるものあるにあらず、觀察の奇拔なるものあるに非ず、而かも尚ほ人をして卒讀を覺えしむるは、畢竟虚情無きが爲也。

◎紅葉が『煙霞療養』の如きは、金色夜叉を草したる筆を移して紀行文に擬したるものゝみ。 或は評して曰く、露伴と紅葉との差別は、其の紀行文に於て最も善く表はれたりと。

◎舊硯友社以外、又所謂新進作家以外、超然として雄を一方に稱するものを澁柿となす。 澁柿の作、概ね堅實にして稚氣なく、觀察亦間々精核、敍事の文最も讀むべし。 而して出だす所の作、何れも不佳ならず、殊に近時全く浪六調を脫したるは、殊に多とすべき也。

共に慥に明治文壇の天才也、『風流佛』『五重塔』『新浦島』を書ける彼れは、決して是の如くにして已むべきに非ず。

◎一葉女史の死は、明治文壇が被れる最も大なる損失なりき。彼れの作は造るに非ずして生むも也、芽の發する如く、花の咲く如く、生まるゝ也。彼れは慥に人情の幾徹を解し、且つ捉へたり、是を以て彼れの作には生命あり、活動あり。若し明治文學の産物として後代に傳はるべきものあらば、彼の作必ず其の隨一ならむ。

◎一時所謂撥髪小説を以て鳴れる浪六の作は、今尚太平新聞紙上に見ることを得べし。然れども彼れが今日の名は、寧ろ『三日月』の餘韻のみ。撥髪小説を以て起りたる彼れが、撥髪小説以外、新に向上の一路を求め得ざりしは、深く恨とすべき也。

◎紅葉門下の秀才は、指を鏡花、風葉に屈すべし。風葉文字の才あり、觀察の才あり、勉めて怠らずむば、進境見るべきものあらむ。唯其の文字は流麗を衒ひて散漫となり、觀察は精緻を濫りにして冗漫となる、緊縮一番せむことを要す。

◎彼れの近業『かつら下地』は、苦心の作と傳へらる。然れども惡作也、其弊は書き過ぎたるにあり。佛人の諺あり、曰く『人を倦ましむる祕訣は總てを語るにあり』と。

而して年や屢に十年を經たるに過ぎざる也。

◎寫實主義の順風に乘じて、幾年の覇を文壇に稱したる紅葉、彼れの昨今も亦顧る疲癈に堪えざるものあり。『金色夜叉』稿を起してより既に三年、未だ成らず。而して成れるものは量に於て柳浪が三月の作にも及ばず。或は洗錬の工あるべしと雖も、而かも『伽羅枕』『二人女』時代の元氣を消耗せるは掩ふべからざる事實也。

◎而して『金色夜叉』は如何の作ぞ。見るべきものは其の第一篇のみ。人に眞情の流露無く、事に自然の開發無し、徒に文辭の洗錬を事にするも、遂に感興の索然たるを如何すべき。寫實主義を以て起りたる紅葉が、是の『金色夜叉』に於て、却て形式主義に陷りつゝあるは、亦掩ふべからざる事實也。

◎如何にして是の形式主義の圈套を顚脫すべきかは、卽ち彼れの將來を決すべき一大問題也。今のまゝにして其の進路を續けむか、彼のマスターピースは『伽羅枕』『二人女』の類にして已まんのみ。

◎露伴も亦逍遙、二葉亭と共に、今や埒外の人たるが如し。眠れる乎、養へる乎、抑々彼れは詩人としての彼れの天分を如何せむとせる積りなる乎。彼れは一葉と

多くは淺薄なる地口のみ。滑稽文學の上乘なるものは、一九的にあらざれば三馬的のみ、圓珍の萃むるところは、書に於ても、文に於ても、多くは拙劣なるカリカチュールのみ。ユーモルに到ては殆ど是を見ず。

◎避暑旅行已み、紀行文學終りて、詩人小說家の筆を執るべき秋は來りぬ。而して文壇の光景依然たり、依然として寂寞たり。

◎明治の文壇は逍遙を以て創まりき。而して今や逍遙は育英の道に潛念し『牧の方』以來、未を壇坫に着けざること一年有半。人をして空しく望河の情に堪へざらしむ。

◎逍遙に次て起ちたるものは二葉亭なりき。『書生氣質』の後を承けて新寫實主義の旗幟を明にしたるものは、彼れの『浮雲』なりき。今や彼れ亦深く藏して空しきが如し、文壇の先輩、何ぞ早く遯れ去らんとする。

◎『夏木立』の一篇を以て、小說界に新文體を齎したる美妙、久しく振はず。『國民』紙上飛影の名によりて小說を草するもの、彼れなりといふものあれども、意氣素より往年の如くならず。『胡蝶』『いちご姫』時代の全盛を顧みれば、恍として隔世の如し。

勿論なるのみ。

◎標號藝術に於て成功したる事例は、歷中上極めて稀に見る所也。而して是の成功の程度は、藝術の種類と對境の性質とに職由す。今日繪畫又は彫刻によりて、電氣と云ふが如きもの丶標號を造らむとす、吾人をして言はしむれば、是れ勞して功無き也。ミケランジェロが『天然間の萬物一として躰現し得ざるもの無し』と謂へるは、是れ彼れが一家言のみ、以て後葉の則となすに足らず。

◎別項載する所の奈良の非露佛生の修正案は、最も殘酷なる露佛說也。生の說く所は、殿堂の破壞、又は燒失によりて佛頭の斷落を希望し、而して後其の再造を希望するにあり。若し生の注文通りに佛頭のみ斷落せずして、佛躰蓮座をも併せて壞敗し了らば如何。想ふに生は吾人の露佛說を贊成して、故らに是の激話を放ちたるものならむ。

◎『新小說』賞を懸けて諷刺書を募集す、撰に入るもの何ぞ一に拙きや。此の如きは『フリーゲンデ・ブレッテル』を片端より譯載するの遙に優れるに若かず。

◎本邦人は滑稽的藝術に於て成功すべきや否やは頗る疑はし。機智としては

◎哲學雜誌が敬て和田守某の書翰を掲載せるは、何等の醜態ぞ。彼れ一個の山師のみ、品位ある學者の歯すべき者に非ず。哲學雜誌なるもの何ぞ自ら重せざるの甚しき。

◎『記憶術の發明者として世人を驚動せしめたる和田守菊次郎氏は、過般高島翁の易學に證明を與へられたるが、更に翁より氏の書翰を寄送せられたれば左に載錄せむ』是れ日本の哲學界の代表者たる哲學雜誌記者の言ならむとは。

◎『余は社會道德の壞敗を憂ひ、易占を以て世に神あるを知らしめ、神人の間を媒介して化造の恩澤を受けしめむと欲す、凡百の君子愼みて之れを思ひ、和田守氏の書翰に就いて顧みられむことを請ふ』。是れ高島氏の附書而して是の如き閑文字の爲に敬みて八頁を割與したるは八十頁の哲學雜誌なり。

◎前島密氏が電氣の藝術的表現に就いて苦心せられ居ることは、吾人の傳聞せる所也。本號載する所の一書幅は、即ち其の結果なりと謂ふ。

◎標號は遂に標號たるを免れざるべし。電氣と云ふが如き複雜なる勢力を、一個の藝術的製作によりて表現せむと擬す、是の『表現』に向て多きを望む能はざるは

故らに公の性格に相應はしからざる異形の面貌を造りける。何ぞ公の歷史上の性格と事蹟とに鑑みて、一個の理想的相貌を現ぜむとは力めざりける。惜みても餘りあり。

◎楠公像は一例のみ。誤解せる寫實主義の弊を說かむが爲に特に、茲に一言を費せり。

◎大抵今の學者、自ら標置する事高くして超住獨り喜ぶ。學說の論難に際しても言を後進に交ること甚だ稀也。老加藤博士が、常に少壯者と論辯して飽かざるは、學者の眞態度を得たりと謂ふべし。

◎學者苟も其說を公にす、是れ己の爲にするに非ずして、世の爲にする也。然らば則ち反駁は究めざるべからず、誤解は辨ぜざるべからず、是れ立言者の世に對する責務にして、又自家立言の目的を貫徹する所以也。

◎今や大論策無し、偶々是あるも大論究無し、學者は獨居して相交らず。說の異なるもの其の異なるに任せて互に相接觸せず。是の如くにして學術の進歩、眞理の探究得て遂ぐるを得むや。

◎若し夫れ經驗の缺乏せる所に於て、是を補充するものは、所謂理想主義ならざるべからず。喩へば楠正成の肖像の如き是也。

◎今日に於て楠正成の肖像を具象的に表現せむは、到底望み得べき事に非ず。是の如き場合に於ては、公が歷史上の性格上より、其の相貌を構成するの外無かるべし。

◎宮城外門に立てらるべしと傳ふる公の銅像は、是點より見て批難を免れざるべし。其態度は暫く措き、其顏面の何ぞ一に醜怪なる。楠公像と題する無くんば、足利尊氏の像とも見えぬべし。而して作者の辯解を聞けば、是れ京地某々寺所傳の肖像に依據せる也と。

◎是れ笑ふべき辯解に非ずや。楠公の今を去る幾百年ぞ、良し當時の畫工是を似寫せりとするも、勿論不十分なるに相違無し。楠公を見たる人、或は是を以て追憶の資となさむ。今日の人をして依て以て其相貌を想像せしめむは、土偶により て上代の人物を揣摩するが如けむ。

◎公の相貌果して具躰的に知る能はずとすれば、何ぞ怪しげなる典據によりて、

ること極めて稀なるべし、恐らくは科學者が特殊の目的を以て是の如き事例に注目したる時に於てのみ經驗せらるべき事實なるべし。是の如き稀少、もしくは稀有なる經驗は、『山高月小』の想像を非美なりとするの力無し、是れ想像なるものは、其の背後に無數の類似的徵證を有するものなれば也。

◎故に審美上、經驗にして想像を打破するの力あらむが爲には、其の經驗は日常無數の事例により、吾人の常識として確立せられざるべからず。而して是の如く確立せられたる時は、即ち想像が他に打破せらるゝまでも無く、自ら其の審美上の主張を撤回する時也。

◎藝術上、所謂理想主義と、所謂寫實主義との界限は、恐らくは是の如くにして初めて決定せられむ乎。科學的知識を尙ぶは善し、但藝術の世界には、經驗以外、想像の特權あることを是認せざるべからず。

◎S. S. 生の說は、恐らくは今の科學者の藝術に對する意見と見るも大過無かるべし。吾人は大躰に於て是を是認するも、是認の預件として前條の辯を爲すこと爾り。

無題錄（二）

◎藝術家の科學的知識に關するSS生の意見は、吾人大體に於て是を是認すべし。四脚獸が平行四邊形的に步行し、烏が雨量計に水浴びし、楠正成がアラビア馬に乘るか如きは、眞に笑ふべし。但所謂理想主義と所謂寫實主義との實際上の界限如何に到ては、問題は爾かく簡單ならず。

◎何人も知る如く、赤壁賦に『山高月小』の句あり、屢々四字、誦し去て何人も景物の眞に逼れるを想像すべし。然れども實際は然らざる也、高山の上に月ある時は月小さく見えずして却つて大きく見ゆ、是れ經驗上の事實也。

◎然らば則ち、是の經驗の事實に本きて『山高月小』を虛僞なりとして排斥し去るべき乎。經驗と想像と背反する場合には、吾人は必ず想像を虛僞、非美として否定し去るべき乎。問題は必ずしも決し易からず。

◎吾人の見る所によれば、是れ程度の問題也、精しく言へば經驗の如何ばかり普通なるかの程度によりて決せらるべき問題也。吾人は『山高月大』の事實を經驗す

◎嘲罵、諧謔、放言、遊蕩、若しくは自己の品位に累を及ぼすが如き行爲等、凡て眞面目に責任を負擔するを憚る場合に當りて、人は輒ち雅號を用ふ。然れども人は如何なる場合に於ても、同一の人たるべし、本名と雅號との差別によりて責任の輕重を分つが如きは、是れ人に不義を爲し得る餘地を與ふる也。

* * * * *

◎年はなかばを過ぎて野に秋風わたる、あせべき色は漸くあせて、常盤樹の色のみ黒くなりまさり、零つべき葉は漸やく零ちて、檐打つ雨の音悲し。あはれ何處の蝶ぞ、やがては來べき身の果てを寄すべき花は無しと知らずや。

◎寂しき哉、秋の色や。澄み渡れる大そらに、鳥は翼を收めて高く翔らず、蕭殺の氣は天地に充ちて、萬づのもの、其の呼吸に痛みあるを覺えぬ。

◎是れ詩人の泣くべき時、哲學者の考ふべき時、宗教家の悟るべき時、志士の義憤を漏すべき時、凡ての人が自己の濁情を濯ぎて、自然の洗禮を受くべき時。

◎秋には哀みあり、されどまた大いなる慰籍と敎訓とあり。（三十二年九月）

ふに遑あらんやと。

◎作品の優劣は其の責藝術家にあり。批評家の適否は其の責寧ろ社會に存せずや、批評家は卽ち社會の藝術的嗜好の程度也。今の世に於て批評家が如何に重せらるゝかを知るものは、決して多きを藝術家に望むべからざる也。

◎雅號に關する土井晩翠の寄書、載せて別項にあり。『毎日』紙上の晩翠は宜しく其の求めに應ずるを可とすべし。誤解は如何なる場合に於ても雙方に利益あるものに非ざれば也。

◎近時藐姑射と號する人、『大阪朝日』紙上に小說を連載せることあり、是れ萬々『オセロ』の譯者たる藐姑射山人と同一人に非ざるべし。想ふに晩翠の場合と同一の誤解は、是處にも存するならむ。暗合已むを得ずとせむか、則ち冠するに其姓を以てする、蓋し適當の措置なるべし。

◎本邦の文學に於て雅號の必ずしも贅物ならざること、吾人之を認む。唯雅號を被れば、輒ち多少責任を脫するに宜しとせらるゝに到りては、慥に弊なりと謂はざるべからず。

◎大凡そ旅行は圖書館と共に文字あるものにとりての二大學校也。人をして人生の多趣を味はしめ、天然の風興に感せしむるもの、旅行に若くは無し。有名なる學者文人の手に成れる旅行記が、吾人に對して最も有益なる敎訓を與ふるは、是が爲也。畢竟旅行記の眞價は山川を敘し、風俗を記するの外、更に一隻の活眼を以て自然人生の眞面目を描破する所に存す。今の所謂旅行記是の如きを得たるもの、果して幾人ぞ。

◎人は曰ふ新聞記者は大臣となり得べし、安ぞ美術鑑査官たり得ざるの理あらむや』と。一場の詭言なりと雖も、又以て今の社會が藝術に對して如何の觀念を有するかを知るに足るべし。

◎政治家より見れば、美術鑑査官の如きは素より言ふに足らざるべし、然れども、藝術社會に取りては、批評家の權利こそは最も貴重なる權利なれ。藝術社會の面目を蹂躙する惡批評家の跋扈より甚だしきは無し。

◎今や鑑査官問題は多くの世論を惹くに及ばずして批難は却て藝術家に向つて爲されたるが如し。人は曰く、作品既に是の如く貧し、如何ぞ批評家の適否を問

後段の悲劇を開展す。抑揚あり、波瀾あり、一氣讀過して感究まり無きを覺ゆ。

◎旅行記は今年に於ける夏季文學の大部分を占めたるが如し、然れども其の二三を除きては、名勝を叙し、古蹟を記するに於て、尋常一樣の旅行記たるのみ、特に精透奇拔の觀察を見ること少きを恨とすべし。

◎日本の古社寺は、從來傳說に誤られ居るもの寧ろ多きに居る。古社寺の緣起と稱して寺僧等の印行するものに於て殊に其の杜撰を見る也。今の人の旅行記は聞くに隨て輒ち是等の謬れる傳說緣起を寫取したるに過ぎず。何ぞ更に歷史的批評眼を放て從來の訛傳を一掃することを力めざる。

◎風景を叙するに當ても、漢文流の誇大文字を列ぬるの風、尙ほ未だ已まざるが如し、是の如きは、景の爲に文を行るに非ずして、文の爲に景を假る也。文字瑰麗、音吐頗る佳なりと雖も、讀み去て明劃なる印象を留め難し、是れ從來叙景文の通弊也。

◎是の如き文人的叙景文よりは、吾人は寧ろ尋常一樣の旅日記を取らむと欲す。若し夫れ篁村一輩の彌次喜太的道中記は、慥に一種の滑稽文學、亦捨て難き趣味ありて存す。

ず。あはれ光明は一度びも彼等の上に落ちざりき、彼等は終始暗黒の中に苦悶して其生を終りたりき。唯夫人が失ふべき子を有せしは、女史が死ぬるまで家庭の樂趣を知らざるに比して寧ろ多幸なりと謂ふべき乎。

◎されど一葉女史、嗚呼流星の如き彼れが短生涯は、その脆きが如くに美はしかりき。幾多の作家は起りたり、幾多の著作は書かれたり。されど吾人は未だ彼れの『濁り江』『たけくらべ』に並び得るものを知らざる也。

◎一葉逝てより文壇秋風あり。女性作家に到ては近時杳として其の消息を聞かざるを恨む。花圃女史は如何にせし、薄氷女史は如何にせし。田中夕風なる一女史ありき、潜に望を後年に屬せしが、今や亦那邊にあるかを知らず。

◎文藝倶樂部載する所の澁柿の『脫走兵』は近時稀に見る所の佳作也。幕府瓦解の大慘劇を後景として、亡國の孤憤、人生の流離を經緯として、一場可憐の愛情を拈出す、筆路暢達、抒情亦間々肯綮に中る、優に短篇中の上乘に屬すべし。

◎お政は荒井父子の脫走を知らずして偏にお安の非道を憤れり、彼れはお安母子が人生最大の悲哀に沈みつゝあるを知らざりし也。作者這般の預件を設けて

要素である。其の表面に於て毫も修飾の痕跡を留めずして、而かも是の境地に達するを得せしめたる其根幹の練磨の、如何ばかり深大なるかは、蓋し想像すべきであらう。

◎一言すれば博士の演說は政治的煽揚家の演說である。（三十二年七月）

無題錄（一）

◎近刊の『リテラリー、ダイヂエスト』にキップリングが日本紀行の一部を掲ぐ、記する所曰く料理屋の景況、曰く藝妓の服裝、曰く洋服紳士の不格好、宛然としてピエル・ロチー一輩の觀察のみ。而して『日本は小兒の國也、其の大人も亦小兒の如し』と放言するに到ては、無禮も甚し。

◎彼れ終りに記して曰く『斯る國民も尙ほ憲法を有すとよ何たる滑稽ぞや。世界に於て眞に憲法國たるの資格あるものは、英國と合衆國とのみ』と。日本彼れを知らざる乎、將た彼れ日本を知らざる乎。

◎オリファント夫人の傳記を讀めば、吾人は故一葉女史を憶起するを禁ずる能は

◎併しながら、感情的、若くは煽揚的の處になれば、其の効果は實に目覺ましき者である。あの抑揚自在にして無限の力の籠れる朗々たる音吐は、あの自然にして熱心に、且尤も巧妙なるデェスチュアと相待つて、滿堂の人心を掀翻し、煽揚するに於て、殆ど遺憾無き効果を奏するのである。ナレチーブの場合には、時として滋晦にすら聞えたる辯舌は、何時しか最も暢達なる快辯となり、混々として口を衝いて出る。あはれ革命時代の煽揚家は、是の種の演說によりて如何なる事業を爲したるかを回想すれば、吾々は演說の勢力の實に恐ろしきことを痛切に感ずるのである。

◎威嚇に於て成功することも、慥に博士演說の一特長である。訓誡もしくは譴責に關はるものある時は、吾々は一種抵抗すべからざる壓力を感じ、覺えず襟を正すに到る。是れ強ちに論旨の如何によると謂はむよりは、寧ろ其有力なる音吐の中に含有せる一種の言し難き威嚴が與て力あることであらう。

◎博士の演說の長所は、要するに感情的の部分に存することは博士自らも認めらるゝ所であらう。其の成功の一大要素は、音聲に存するとは言ふまでも無いが、其の風度の如何にも自然に、眞摯であることも、人を動かす上に於て最も有力なる

たることに於ては、慥に當代のオレーションである。

◎博士の演說を重からしむる第一の要素は、聲である、――新聞などでは破鐘と綽名せらるゝ、幅もあり、高さもあり、深さもあり、音樂ならばバースよりアルトーまで、まづ融通のきくべき、日本人としては實に珍らしき聲である。凡そ發聲の苦しそうな、聲量の乏しそうな演說は、演說者其人が何となう見すぼらしく、何となう淺墓に見えて、其の說の內容に傾聽せしむる丈けの餘力を有ち得ぬのであるが、博士の演說に於ては是の如き憂は毫頭無い。あの遠雷の如きグレーブな調子にて『諸君』と呼び懸けらるゝ時、吾々は魔力にでも遇うた時の如く、吾々の感情の上に一種の束縛を感ずるのである。

◎然れども博士の演說は、恐らくは能辯と稱せらるべきものでは無からう。感情的、煽揚的、威嚇的の部分に於ては、實に恐ろしい力を有て居る代りに、敘述的の部分に於ては寧ろ聞きにくい迄に拙いこともあるのである。畢竟博士の辯舌は些細なる事の敘述には餘りに嚴肅に且つ餘りに重くるしい。ナレーションに必要な、輕快自在の趣が割合に乏しいと云ふ批評は、恐らくは免れないであらう。

ば、悲むべき現象では無いか。人は報酬無しでは神の祭りをだに營まぬまでに實利主義に傾いたのか。以太利のサン・ジョバンニの祭などを今日より想像すれば、實に神往の情に堪えざる事である。

◎所詮今の世の人は餘りに眞面目(マジメ)に、餘りに理屈ぽく、又餘りに道義的である。人生は夢で無いだけにそれ丈け夢の如くに戯れ遊ぶことが大いなる慰籍である。餘りに眞面目なればこそ僞善も起るのであるまいか、餘りに理屈ぽく餘りに道義的なる丈に詐欺も、不德も、それ丈け多いのではあるまいか。

◎去る三日の夜、外山博士は『基督敎信者の覺悟』と云ふ題で、青年會館で獨演說を試みた。我輩も聽衆の一人として、非常なる喝采聲裡に三時間の長演說を終りて降壇せられたる博士の滿足の分配に預つた者である。其の論旨は暫らく措いて、其の演說振りに就いて所見を述べて見やうか。

◎我輩は政治家諸君の演說を聞く機會に遭遇すること甚だ稀なるが故に、比較して言ふことが出來ないが、政治社會以外には、雄辨家として博士に匹敵するもの、先づ五人とは數へ難い事であらう。博士の演說は他の點は兎角、其の風格の堂々

事業を向慕せしむる紀念の本旨には稱はざる事ではあるまいか。

◎近い例しが兵庫の楠公社である、又は北野の天滿宮である。是の二社は多數國民にとりて、無病息災の神樣雷除の神樣と云ふより外に、幾何の意味があるであらふか。日本忠良の鑑と云ふ樣な考は殆ど見ることを得ぬのではないか。

◎最も憂ふべきは、地方人民が其の土地に關係ある英雄の爲に、商賣的に紀念祭を執行する惡風である。紀念祭の美名の下に寄附金を募り廣告を爲し、附近の鐵道滊船と割引の特約を結び、地方廳の幇助を得、百方力を盡して、人寄せの計畫をする、而して目的は何れ旅客の懷である。是の如きは一種の興行にして、紀念祭の美はしき精神とは頗る遠かれるものである。近年是種の紀念祭が尠からず見受けらるゝは、果して祝すべき事であらうか。

◎兎に角紀念祭の方法が、イマ少し高尙に、眞摯に、イマ少し有效に且つ、非商賣的に、計畫せらるゝ事に就いては、當事者たるものと國民とがイマ少し熟考すべきである。

◎祭りと云へば最も趣味ある無邪氣な、祭りらしき祭りの年を追うて寂れゆく

ものあるが故ならむ。然らば則ち何ぞ一歩を進めて大に摸造品を增加せざる。

（三十二年六月）

◎國華は誠に結構な美術雜誌であるが、挿畫の褒め方の大袈裟なるには驚かれる。我々凡人より見れば、エタイも知れぬ繪に向て、氣六合に充つとか、妙技靈腕千古に横絶すとか、最上級の形容詞を惜氣もなく振り播かれる大度量には、ほと〳〵驚嘆の外はない。

◎さるにても久保田米僊氏の作をば古人の物として掲げたるは、國華記者の揶揄として何たる疎忽であらう。

◎近來豐國祭を初めとして、歷史上の英雄の爲に紀念祭を催すことが連りに流行する。事のよしあしは暫く措いて、其の旨趣の分明ならざると、方法の適切ならざるとは、切に當事者並に國民の注意を促すべきである。

◎英雄の紀念を國民間に持續するは、士氣を鼓舞し、風敎を振作する上に於て、多少の利益あることは疑ふべからざることである。併しながら、其の方法として普通神佛的の祭典を行ひて得たりとするは、下民を迷信に導く計りで、恐らく英雄の

◎例へば弊褸袍に安ずるの人、他の輕裘綺衣を着くるを見れば、目して邊幅を飾る輕薄兒となす。而て後者亦前者を誣りて鄙吝禮に嫻はざる粗樸漢となす。然れども是れ嗜好の差別のみ、品性の高下に非ざる也。

◎品性時に嗜好に關せざるにあらず。然れども若し一切の嗜好盡く品性によりて律せらるべくむば、社會は單調砂漠の如くならむのみ。

◎畢竟互に個人的嗜好を認容するの雅量なきは、本邦人の一僻性也。もろ〳〵の無意義の猜疑、嫉妬、憎惡爭鬪、是より來るもの尠からず。

◎『我の日本は三百年後の日本也』との內村氏の抱負は吾人の眞に敬服する所也。然れども吾人敢て氏に告げむ、三百年後を以て事とするの人は、先づ今日を以て事とせざるべからず。事物の發達は、飛躍を許さゞれば也。

◎近出の『日本美術』に、雅邦翁の畫集あり。翁や畢竟一代の鉅匠也。溫厚人に誇らず、靜かに育英を樂む。願はくは松柏の蒼々、更に芳翠を加へて、永く斯界の宗師たれ。

◎吾人は博物館內の美術部に摸造品多きを恨みとす、盖し事情の已むを得ざる

南洲の銅像を上野公園に樹てたるの不倫なる、吾人既に說きぬ。今や又日蓮像に就いて一言せざるべからず。

◎太宰府と日蓮と何の關係がある。安國論の一事を以て、元寇の歷史に附會するが如きは殆んど兒戲に類す。

◎日蓮にして紀念像を有せざるべからずとせば、其地は安房可なり、鎌倉可なり、佐渡可也、身延、池上、亦可也。何爲れぞ筑紫太宰府を累はさむや。將た又、日本國民は元寇擊退の紀念として日蓮像を有するを願ふべき乎。

◎日蓮像建立者は宣言して元寇紀念の爲と呼ぶに非ずや。元寇紀念の爲ならば、忠臣義士何ぞ限らむ、是國家の大事を表彰せむが爲に、何ぞ一に日蓮氏を累はさむや。

◎安國論の一事を附會して日蓮の像を太宰府に建て、以て元寇の紀念と稱するは、卽ち日本の忠臣義士、別して伊勢の神靈を犯し奉る者に非ずや、如何。

◎我邦人は嗜好と品性とを混同するの風あり、誹謗嘲罵の由來する所、是に基くもの尠からざるを認む、是れ弊也。

を箇中に教育し得るの人は、古より大なる人物なり。而して同時に大なる事業を成し遂げたる人物也。

◎畫題の陳腐は日本繪畫の一大弊竇也。今春開く所の美術協會並に全國繪畫共進會にありても、山水花鳥其の大部分を占むるが如し。社會畫の如きは殆ど是を見ずと云ふも可也。

◎往年外山博士、社會畫の缺乏を痛論して我が美術界を警醒せりき。爾來十年尙ほ是方面に進歩の著しきものあるを認めず。或は個性の表情に乏しき本邦畫風の然らしむる所ならむも、濟々たる青年畫家の、盡路頭上に一路を畫するもの無き、深く歎ずべし。

◎佛畫を描く、可也。吾人は唯畫家の信仰如何を問はむと欲す。

◎歷史畫として畫題を宗教に取る、素より可也。唯傳襲の儀軌に法り、寬平、貞元の古式を摸倣して得たりとするもの、吾人其の何の意なるかを知らず。是れ獨り宗教畫のみに就いて言ふに非ざる也。

◎紀念像の位置は、須らく其人物の歷史と、密接の關係を有するの地たるべし。

◎勢力の上より見るも、今の多くの小說家は、人の美感を移して實情を挑發するの力だに有せざる也。是を日刊新紙が市井花柳の猥褻事を日常普通の事實として臚列するに比すれば、影響の大小、同日の論に非ざらむ。

◎高等女學校長は是の如き一些事に拘泥するを止め、何ぞ一步を進めて品性根本の感化を力めざる。往年敎育社會に民約論を禁じてより敎育者爭て是を讀めり。西鶴全集發賣禁止せられて、人爭て是を求む。女學生に小說を禁止するが如き、藪蛇的の拙策に了らずむば幸也。

◎近時少年に傾慕せらるゝ大町桂月の如きもの、蓋し少矣。先に桂月雲州に入るや、都鄙の少年雜誌、等しく是を惜む。人生名を成す是の如くむば、何ぞ必ずしも處の朝野と、人の老少とを擇ばむ。

◎往年蘇峰の京に入るや、彼れは其の味方を靑年の中に求めたりき。其の『國民の友』の多數の愛讀者は、慥に靑年學生なりし也。而して彼れは其の平民主義と共に靑年の味方を失ひ、今や果して何の狀ぞ。

◎靑年の上に築かれたる勢力は、天下の一大勢力也。社會を一校舍として、靑年

◎人生の四季を觀じて是を天然に擬す、亦多少の興味無きに非ざるべし。而して吾人は信ず、天然が吾人に與ふる大なる敎訓の一は、實に這般の觀察に由來すべきことを。

◎高等女學校長會議は、女生徒の小說閱讀を禁止するの意志を發表せり、我が小說家、感果して如何。

◎高等女學校長の輩、何ぞ文學の事を解せむ。唯彼等をして事茲に至らしめたるの事、亦以て一般社會が小說に對する觀念の如何をトすべし。吾人が文壇の爲に潛に憂ふるの點茲に存す。

◎若し夫れ高等女學校の敎育方案としては、吾人は寧ろ彼等の切々たる小量を認めずむばあらず。今の小說に何等の社會的勢力かある。是を禁止するが如きは寧ろ小說の名譽と謂はざるべからず。

◎且つ夫れ風俗壞亂の恐れあるを以て、是を禁止せりとせむ乎、吾人は寧ろ日刊繪入新聞中に、今の最も下等なる小說よりも下等なる幾多の有害文字あるを認む。高等女學校長夫れ是を如何せむとする。

は、渾沌なる理想の人たること、猶ほ五十歳以後の老人が枯淡なる知性の人たると等しき也。見來れば圓滿なる人生は、夫れ三十前後にある乎。

◎圓滿なる人生が三十前後なるが如く、圓滿なる天然は、恐らくは初夏季に於て求め得べけむ乎。晩夏に近くに隨ひ、黄漸く減じて青漸く加はる、八九月の森林は人をして幽邃の感あらしむるも、快濶の情を起さしめず、理想色なる黄味の減じたれば也。下て秋に入れば、常綠樹は暗黑色を呈し、他は即ち漸く乾枯す。何ぞ夫れ恬淡情に忍ぶ白頭翁と相似たる。

◎且夫れ初夏は、血氣に富める事に於ても三十前後の青年と均しき也。見よ、牡丹、芍藥、石竹、躑躅、薔薇等凡そ、燃ゆるが如き赤色の花は、一年中是季を以て最も多しとなす。孟春の花は清冷雪の如き梅花のみ、些の情熱なし。中春の花に桃花あり、櫻花あり、海棠あれども、其色尚ほ甚だ紅ならず、血氣に於て未だ足らざる所あり。猩々緋の如き極熱の色素は、多く五六月の間に於て是を見る。

◎赤は熱色也、而して熱色の標示する所の感情は情慾也、煩惱也、血氣也。三十歳前後の人は是點に於ても亦初夏の天然に似る所あらざる乎。

◎而して青は天の色也、海の色也。即ち其標示する所の感情は『深遠』也、而して『深遠』は知識也。

◎今夫れ黄は理想の色なるを以て、同時に希望の色也。而して純黄は其色相餘りに抽象なるを以て、そが標示する所の希望亦餘りに不明也。是を人生に喩へむ乎、猶ほ嬰兒の呱々として聲を擧ぐるが如し。

◎即ち茲に一分の青味を加ふ、淺緑是れ也。是れ即ち渾沌なる希望に加ふるに若干の知見を以てする也。夫の柳條の淺緑を見よ、轉た人をして紅顔二八の少男女を想はしむるもの無からずや。

◎季は夏に入りて青味漸く加はる。先きの淺緑なるもの漸く變じて純緑となる、即ち是れ、少年の知見漸く進み、其希望亦漸く定明ならむとするに似たらずや。初夏の天然は、正に三十歳前後の青年也。

◎青黄二素、其均衡を保ちて、茲に純緑の色を成す。是を人生に喩へむ乎、理想に對する希望と、實在に對する知識と、兩々相調和して最も快濶なる生活を現ずる也。二十前後の人は、空想に耽るを樂み、四十前後の人は、實際に執着す、十歳前後の少年

◎但し理義の高遠ありて情熱に乏しきを恨む。蓋し晩翠は抒情詩人としては藤村に劣る或は一等、若し夫れ叙事冥想の題案に到りては嶄然として當代を拔く。文字の警拔を求めて往々未熟に陷るは、彼れに於て微瑕、言ふに足らざるべし。（三十二年五月）

◎今や吾人を圍繞するものは初夏の天然也。而して初夏の天然は四季の中の最も快濶なる天然也、最も希望と血氣とに富める天然也。是を人生に喩へば、夫れ三十歳前後の青年乎。

◎夫れ色相の上より見れば、黄と白とは理想の標號也、而して黄は白に比して一分の熱素を含む、即ち是れ白が冷絶清絶の理想を標示するに對して、一分の情味を蓄ふる也。是れを以て吾人の理想とする所の天國、淨土、及びもろ〳〵の佛光神彩を現はす主なる色相は、黄金色也。

◎東帝鴉を旋らして、萬物漸く春ならむとするや、草木の初めて嫩芽を萠すもの其色多くは黄に近し、而て春漸く深くして、初めは淺緑より漸やく純緑となり、夏期に至りて深緑より漸やく暗緑に移る。而して色相上、緑を成すものは黄と青と也。即ち知る、春夏二季の天然は、色相上黄青二色の消長に外ならざるを。

べき。曾てユーゴー氏が『探偵ユーベル』の結尾の言を記す、曰く『畢竟彼れは餓たれば也』と。

◎青年學生にして吉原の遊廓に入るもの日々三百人以上と傳ふ。記せよ是の如きは腐敗せる社會の一閃華のみ。

◎『新世紀』と題する雜誌却て『舊世紀』の事を語る。奇觀と謂ふべし。

◎萬朝報『基督敎を捨てたる知名の日本人』の續篇を掲げて、中に三好文太氏の名を收む。氏は今や故人なり、若し吾人にして辨ぜずむば恐らくは永く世に誤られむ。

◎三好氏は記者の想像せる肥後人にあらずして福井の人也。氏は敎會に出入せざりき、然れども死に到るまで其の基督敎を棄てざりき。是れ吾人が氏の最後の二年間に於て親しく實見したる所也。萬朝報の寄書家よ故人の褒貶を愼めよ彼れは辨解する能はざる也。

◎晩翠の『天地有情』を讀む。情を托する高く、思を馳する深し。加ふるに文字豪宕にして調に一種の天來あり。優に赤門詩人の白眉たり。

し、其の去るや何ぞ速かりし。

◎『新小說』紙上の不知庵の『霜くづれ』讀むべし。『片鱗』と等しく基督敎の光明を現はしたる一種の社會小說也。唯祕密の默契を叙する所意餘りありて筆足らざるを惜む。

◎世人は何故に他の罪惡を知らむことを好む乎。祕密は祕密として永く暗中に葬らしめよ。抑々矯風なるものは人を傷くること無くして成し遂げ得ざるものなる乎。

◎近時の新紙女學校の內幕を訐くものあり、私生兒を探りて是を公にするものあり。好奇の劣情あるもの、喜て他人の罪惡に甘心す。讀まるゝものゝ罪乎、讀む者の罪乎、抑々讀ましむる者の罪乎。

◎蓄妾實例揭げられて未だ蓄妾者の畏縮したるを聞かず。社會の矯風豈是の如き皮相の方法の能くする所ならむや。

◎『孤兒は性僻むで盜心あり之を醫するは胃腑の飽足にあり』との岡山孤兒院長の言、何ぞ一に愷切なる。社會問題を解釋するものは、何れか胃腑の飽足に非ざる

缺く。是れ爭ふべからざる事實也。露伴は『風流佛』『五重塔』を殘して、今や漸く壇站の外に逸し去る、『外科室』に世を驚かしたる後、鏡花の作眞に評家を饗かしめたるもの幾何ぞ。『三尺角』の方向に一步を進めむ乎、彼れの遭遇すべき運命は唯一の『遺却』あるのみ。柳浪が實感の筆、獨り舊によりて健なれども、今日の覺悟を一新するに非ざるよりは、吾人は多く彼れに望む能はず。眉山は『暗潮』の筆を納めてより作無きに等し。天外抱月、宙外亦當年の氣魄を存せざるもの、如し。公等老ゆる、何ぞ夫れ速きや。

◎人は進まずむば則ち退く也。今の文學者は、是の時勢の轉變を如何とか見る。

（三十二年四月）

◎十年の歷史は十年の未來を語る。紅葉夫れ大言壯語を已めて、靜に修養する所あれ。五年十年或は傑作を生ずるに足らざるべし、而かも天才は豫告の後に來るものに非ざる也。

◎吾人は思て茲に到る每に未だ曾て故一葉女史が流星の如くにして來り、流星の如くにして逝けるを悲まずむばあらざる也。嗚呼女史や其の來る何ぞ遲かり

詹々錄

◎紅葉の文、意は筆先にあり、慧は牙後にあり。『金色夜叉』渾融の妙無しと雖ども纖巧の趣あり。露伴の作、喩へば玉石の肆に陳ぬるが如し。瑕瑜必ずしも掩はず、而かも卓犖縱橫江河を決して橫に荊南の野に注ぐが如し。『西行物語』蓋し近時の名品。

◎一卷の古事記を繙け、繪畫彫刻の好題目比々として應接に遑あらず。我が美術家は何を苦で異邦の死宗教に赴くや。佛畫を善くするは國民の名譽にあらざる也。

（三十二年一月）

◎詩人は其の一面に於て哲學者ならざるべからず。人生の紛糾を兩斷して其の眞義を抉摘し得るもの、其の哲學的確信の致す所也。トルストイとイブセンとは詩人にして同時に哲學者なり。歐洲の文明を呑吐するの意味と魄力と、實に箇中より出で來る。

◎『伽羅枕』『新色懺悔』以後、紅葉の作は漸く剪裁の巧緻に走りて天眞流露の妙味を

較ぶれは、同日の談に非ず。文章を學者の餘技と心得る風は、お互に追ひ追ひ矯正したきものならずや。

歷史は哲學よりも更に多く文章に待つあるもの也。歷史とは古文書の綴合せの謂に非ず、過去の時代を活きるが如く描寫し、其の精神をさながらに發揮するが本旨なり。是の本旨を遺憾なく達せむには、古文書の蒐集素より必要ながら、敘述の一段に至りては、詩人の想像力と文章とに待たざるを得ず。ギボン、マコーレー、カーライル、ランケ、フルードなどの著書が世に重きを爲すは、其の文章與つて力あることは言ふまでも無きこと也。我邦の歷史家中には、哲學者に於けるよりも能文の士多けれども、歷史家らしき文章を書き得る人とては極めて少數ならむ。所詮は、事實を取調ぶるをのみ歷史家の本領と心得、想像と文章との他面を閑却したる弊ならむと思はる。

兎に角、學問と文章とは離るべからざるものなれば、我邦の學者諸君はイマ少し文章に心を懸けられたきもの也。

（三十三年七月）

ひもよらず、是非共美文的の技倆に待つ所なきを得ざる也。さるを思想だに正しくば、文字は言ふに足らずと一概に拂拭し去らむは、啻に文章を知らざるのみならず、又學問を知らざるものと謂ひ得べけむ。

哲學の中にても、倫理學、教育學、宗教學、美學の如きは殊に文章に待つあるもの也。吾人は是等の學問に關する本邦學者の著書論文を見る毎に、其文章の如何にも拙き爲に其の懷抱の十分傳はり得ざるべきを想ひて、常に氣の毒に堪えざる也。中には井上(哲)博士の如き學識と文章と兼ね備へられたる人もあれど、こは寧ろ例外に屬す。我邦大學の學問は獨逸風なりと云へれども、獨逸の學者中には碌に文章も書けぬ片輪なる學者は先づ見當らぬ也。ベルトマン氏もヴント氏もなか〳〵立派な文章を書く學者也。フォルケルト氏の如きは中にも文章家にて、其の著『悲壯の美』中の或部分の如きは、シ■ペンハウエル以來の名文なり。美學に關する著書などは、美文としても一ツ廉の名文なるが多し。こはカリエル、シテルン、エーゼル諸氏の著書を讀みたらむ人の首肯すべき所也。倫理學者にも亦パウルセン氏の如き得難き文才あり。是を我邦の博士學士達の文章拙劣殆ど意を成さざるに

ずや。自家の天分を自覺せられ、是の自覺に本いて進退せられたるべき氏の事業に就いて、とやかう容吻するは無禮の業ならむも、吾人は暫らく是の無禮を忍びても尙ほ是の得失の俄に知り易からざることを公言せむと欲する也。

社會に惜まるゝ人は實に幸なる人也。然れども最も幸なる人は時としては最も大いなる不幸を社會に被らする人なることを忘るべからず。與へられたるを取戻さるゝは、時として盜まれたるに均しければ也。

（三十三年七月）

學者と文章

近頃の學者には兎角文章を輕ずる風あり。何事も內容だにうるはしくば、それを表白する文章の如きは如何にても好しと思ふめり。こは文章の價値を知らざる謬見也。

凡そ何學問にまれ、數學の如き純粹の知性のみに關はるものゝ外は、多少は情の分子を包含するもの也。されば多くの學問は知ると同時に感ずる也。是の感情の趣味を有力に發表せむには、乾燥枯淡なる數學の解說の如き文字のみにては思

日に於て素より測知し得難き所ながら、氏が半途より學問を廢めて小說家となられたることに對して、社會は須らく感謝の意を表すべき也。今日は兎も角數年前の文壇より、紅葉の名を除去せりと假定せば如何。是の點に於て、氏の出處進退は宜しきを得たるものと謂はるべけむ。坪內逍遙氏が政治、哲學の專門學士として、却て『當世書生氣質』の作者となり、日本の小說史上に一改革を齎らされたることも、亦紅葉氏に於けると同樣の理由にて社會の感謝すべき所たり。何となれば、若し當時逍遙氏にして假りに學者となられ、或は政黨員、官吏などになられたりと假定せば、日本の小說界は如何なるべかりしや、覺束無き次第なりければ也。

坪內氏の事のみを申す樣なれども、氏は今日文學者を廢めて專ら倫理敎育に身を委ねられつゝあり。氏の如きはどの道、社會國家に必要なる人物也。唯氏が敎育者たると文學者たると、社會にとりて何れか希望すべき事なりやは俄に決し易からじ。敎育、殊に倫理敎育の幼稚なる今日に於て氏の如き熱誠あり識見ある學者が是に從事せらるゝは素より國家の慶事なるべけれども、是れが爲に脚本家批評家としての春の家主人を失はざるべからずとすれば其の得失俄に知り難から

人は兎角勝手なものにて、己れ等の爲にならざることには、社會の爲、國家の爲と云ふを口實にして反對するを常とす。今假りに團十郎が役者を廢めて漁師になりたりとせば、誰かは是を惜まざらむ。己が天分を全うせざる痴者なりなど、然しかつめらしく批難する倫理學者もありなむ。そは、團十郎にとりては漁師として暮さむかた、安樂ならむかなれど、是の一個人の安樂の爲に、天下の名優を沒し去らむは、社會全體の爲に不利益なることなれば也。斯樣な造作もなき標準にて人の出處進退を批評せんは、極めて思ひ遣りの無き仕方ならむも、兎に角一種の批評法たるを失はず。人はお互に自己の爲に活くると同時に、自己の屬する團體の爲にも活くべきものなれば、團體を標準とせる倫理には動かすべからざる根據あり。

斯かる見方より試に今の文學者を觀察せむか、當今露伴氏が文壇に遠かれるなどは惜むべき一つ也。人は個人として性の近き所に從ふを幸なりとせむ、只萬一『五重塔』の作者が、將棊指しに口を暮らさるゝ樣の事あらば、世間にとりては何ぼう恨めしき極みならずや。紅葉氏は素法科大學に入りて法律を修められたる人なりと云ふ。氏がもし法律修行を續けたらむ時、其の造詣幾何なるべかりしかは、今

るべからず。明治の文學者中、何人か果して女史と對立し得るものぞ。其の『たけくらべ』『わかれ道』に較べ得べき著作は幾何ありや。彼れには露伴の哲學者めいたる所無く、紅葉の通人めいたる所は無けれども、觀察靈あり、文字神あり、天才高く一世に超絶せり。不幸にして夭折せりと雖も、其の傷ましき記憶こそは却て其の不朽の名を美はしくしたるものに非ざりしか。人名字書が是の大名を逸し去りたるは、一大失體なりと謂はざるべからず。

さはれ思軒、一葉の如き人だに、勤もすれば遺れ去られむとするの一事、亦以て今の藝苑の風氣を徴するに足らむか。文學者諸君にとりては容易ならざる疑案なりと謂ふべし。

（三十三年七月）

人の出處進退

人の出處進退にはいろ〳〵複雜なる事情あるものなるが故に、一概に批評し去らむは烏滸の業なるべし。されど、局外より冷淡に觀察すれば、隨分言ひ度き事も無きに非ず。

らしき詩人を有せざるは、日本國民の大不幸と謂ふべき也。

（三十三年七月）

人名字書中の文學者

此頃經濟雜誌社より出版せる人名字書を取りて試に森田思軒を索めしに、見當らず。次に樋口一葉を捜せしに、是れ亦見當らず。人名字書は如何なれば斯くは文學者を逸したるにや。吾人は田口卯吉氏の主幹の下に編輯せられたる人名字書の信用の爲に、殊には文學者の名譽の爲に、一言せざるべからず。

森田思軒氏が明治文壇の一文豪として後世に傳へらるべき人なることは、吾人の堅く認むる所也。苟も氏の文字を讀みたることある人は、吾人と共に爾か認むることを躊躇せざるべし。ツマラヌ近年の役者、三味線引きの末派までも、可成りに網羅したる人名字書が是の一文豪の爲に一行半行をだも割愛する能はざりし事情は那邊に存せりや、訝かしき次第也。

思軒氏の名を逸したるはマダシモ也。一葉女史の名を掲げざりし一事は編輯者の沒見識に非ざれば、人名字書編輯にあるまじき、一大粗漏として特に警告せざ

の手腕にあり。今世紀の初めに於けるロマンチク派の主動者は何れも詩人なりき。されど若し今の我邦の文學者に是の事を責むるあらば、そは迂濶の極みならむかし。

詩人ハイヲはロマンチク派の運動を最後まで續けたる人なりき。流石に全歐洲の文明を敵として戰ひたる勇士の事とて、哲學、宗教に於ける造詣はなか〳〵に見るべきものありき。彼れが全集卷三に收めたる『獨逸の哲學及び宗教』を讀める人は、如何に彼れが當時の煩瑣學風に反して戰ひたるかを認むるならむ。フヰヒテが主觀的觀念論を批評して、尾長猿が其の尾を料理するに譬へしが如きは、如何ばかり痛激の打擊ぞや。かゝる識見ありてこそ自ら『人道の兵士』とも誇り得れ。顧みて我邦の文學者の沒見識なるに較ぶれば、吾人たゞ〳〵言ふべき言葉を知らず。

學術上に於ては煩瑣學風行はれ、德敎上に於ては形式主義行はる。正しく是れロマンチク運動が思想感情の自由の爲に興るべき秋ならずや。今の世にバイロンあらば、其の惡魔の如き力を提げて起つべき筈也。もしハイヲあらば、其の毒蛇の如き舌を揮て罵るべき筈也。今の時勢に於て一人の文學者らしき文學者、詩人

何ぞや。常識を無視し、ひたすら文字論理の末に拘泥して故らに融通會心の道を杜絶する、煩瑣學風に非ずして何ぞや。セセコマしき小理屈をのみ尙びて、分類解析の外にファンタジーの大いなる力を認めざる煩瑣學風に非ずして何ぞや。吾人は是の瑣煩學風が方今我思想界の一大勢力となりつゝあるを見て、轉た我學術の前途を危むの情を禁ずる能はず。

是の如き煩瑣學風は、動もすれば趣味を沒し、人情を沒し、常識を沒し、亦動もすれば人生の大本に對して其の統一的存在を打破するの恐れあり。其の結果は方便主義となり形式主義となり、ラショナリズムとなり、フ非リスチニズムと爲る。是の學風に感染せる人は、手足に缺くる所こそ無けれ、其の心は片輪也。今の世の道德學者、敎育學者の多くが、かゝる片輪の徒なりとせば、洵に歎かはしき次第ならずや。心あらむもの須らく反省熟慮する所あるべき也。

（三十三年七月）

煩瑣學風と文學者

煩瑣學風の弊害を救ひ得べき一の大いなる勢力は何れの時代に於ても文學者

ざるぞかし。少年客氣の　にはこのエラサウなる所、ヒドク氣に入るものにて、虛名を儕輩の間に馳せて一ッ廉の文豪になり濟ます樣は、笑止千萬と申す外無し。我邦の文壇如何に幼稚なればとて、まさかにかゝる大文豪の鞭撻にて左右せらるべしとも思はれず。大文豪自らにとりても、即がて目覺むるまでの夢一場に過ぎざれば、他日の悔を殘すのみにて、其の身の爲には露なるまじき也。知りもせぬ西洋詩人の名前など人並に振廻はすさまは殊の外危し。

斯く謂はむは、恐らくは少年諸子の喜び給ふ所にあらじ、唯今の時弊に感じては是の直言の無禮をも忍ばねばならず。兎角はドッチにも都合の好き事は無きものと知らるべし。

（三十三年六月）

煩瑣學風

歐羅巴中世のスコラスチック派の哲學をば煩瑣學派と譯すること行はれたり。されど吾人を以て見れば、今の我邦の學風ばかり是の煩瑣てふ文字に稱へるは無し。容易しき事柄を難かしく言ひ立つるをば學問と心得る、煩瑣學風に非ずして

ころ、如何にも驚かるゝばかりなり。小說も茲に到れば、歷史よりも確かなる事實地、哲學よりも賢こき知識也。吾人は我邦の小說家に是の種の作五六を讀ませ、其の所感を聽きたき心地す、かくても卿等は安じて其の筆を續け得べきやと。小說家諸君よ、甚だ失禮なる申分ながら、諸君は小說てふものを餘りにやすく見くびり居るには非ざるか。ハイヂが詩篇は獨逸の境界を萊因河まで移せりと謂はる、諸君は其が何を意味するかを知れりや。

（三十三年六月）

少年の文學熱

少年の手に成れる文學雜誌は、今日少からず發行せられつゝあることなるかこは寧ろ憂ふべき事也。少年は修養の時代なり、眞に其の本分を自覺せるものならむには、是の修養の爲に日も尙ほ足らずとすべし、何の遑ありてか文壇の事に關り知るを得むや。今は印刷の便利なる世とて、今夕筆を走らして利口げな事を書けば、明日は麗々たる文字となりて天下に頒布せらる。知らざるものは其を如何にもエラサウに想像すれど、多くは無一物なる白面書生が無責任なるざれ書きに過ぎ

て思ひのまゝ也、何を苦て今の紛々たる作家の小供らしき製作を要せむやと。吾人是に對して言ふべき言葉を知らず。

恐るべき傾向なる哉。而して今の小説家の多くは是の恐るべき所以をだも覺らず、タアイもなき改良講談などの餘技に浮身を窶す也。大文豪、大傑作、是の如くにして出で得べくむば、お目出度きこと是上も無し。

遮莫、茲に世にも氣の毒なる一種の人類あることを忘る可らず、己れが職責の一部として、如何なる駄作をも讀まねばならぬ、批評家と稱する者、是れ也。

(三十三年六月)

小説の意義

例へばシエンキーヰッチが『クオ・ヴデス』を見ずや。こは今の以太利人を狂はしめたる者なりと謂ふ。羅馬帝國の末路を描きたる所はギボンが衰亡史にもをさをさ劣るまじく、チロもセチカもペトロニウスも、希臘の哲學も、羅馬の文藝風俗も基督教とペガニズムとの衝突も、當代文明の經緯として活けるが如く現はさるゝと

勿論修業中なり、試驗中なりとも謂ふを得む。されど言文一致には修業し盡さざる、試驗し盡さざる中に、幾多の望を繫ぐべき點ありや。言文一致の缺點の寧ろ明になりすぎたる今日、吾人は尚ほ忍むで其の萬々一の成功を夢想せざるべからざる乎。今の言文一致體は大抵にして葬らるべきものに非ざるか、但し葬るとは廢滅の意に非ず、將來の國文たるべき非望を斷念すべしとの意也。勿論是は今日の言文一致體に就いて言ふことゝ知らるべし。

（三十三年六月）

自國の作を讀まざる風

近頃の小說に見るべきもの絕て無し、好いの惡いのと言ふ丈が野暮也。ロセッチが詩はその妻の爲に作られしと聞きしが、今の小說家は何人に讀ませむとて、かゝる小說を作るにや。

是に於て文字無き俗衆が講談物に走るが如く、少しく敎育ありて外國文學などの趣味を解せる人は、自國の文學を手にするを恥とするの傾向あるに至れり。彼等は動もすれば曰く、吾等若し小說に渴へなば、ゾラ、ズーデルマン、シェンキーヰッチ、凡

漫なる、形式的なる言葉を追々廢止し、是に代ふるに最も平易なる文章體の語句を以てし、其の野卑なる調子を和らげ、日常の實用に甚しく害を及ぼさゞる限りに於て、追々と文章雅語に近からしむべし。是の如くせば、文章の側よりも、言語の側よりも著しき反對を受くること無くして、而かも歩々其の理想の境域に進行するを得べし。言語文字の事なれば、急激の變化は望むべきことにあらず、望ましきことにもあらず。假すに年月を以てし、是が指導者たる國家並に國民中の識者は氣永に、而かも確實なる自覺を以て、着々其の地歩を占むべき也。強迫的急進法も臨機の方法としては可なる事もあれど、成るべくは氣永主義のかた好ましからむ。

吾人の思惟するところ、マヅザット是の如し。

言文一致論者の參考ともならば幸也。

今の言文一致は一種の新文體に過ぎず。

今の人の所謂言文一致と云はむよりは、寧ろ一種の新文體也。新文體としては長所あり、又短所あり、されど是外に文體あるべからずと云はむは未だし〳〵。

を遂ぐべきかを慥に預言し得る大識見家あらば、いざ知らず一國の言語、文章の自然の進化を聞睹する如くに明にせむは、人間業には望まれまじき事也。言文一致と雖も國語國文の性質に逆行して實行せられ得べきものに非ず、謂はゞ自然の發達を人爲によりて速かに利導するの外無し。然る以上は今日何人も『是れが將來言文一致の標準語たるべきものに候』と斷定し得ざるべし。良しやかゝる斷定をなす人あらむも、到底鼻先思案の誣は免れじ。況してや現行の言語を兎やかうイヂリ廻はして、天晴れ將來の國文是なむめりと思へるなどは、暗中の摸捉にも較ぶべけむ。一個人の便利は兎も角、主義としての言文一致論としては、何の意味も無き事也。

さらば是を如何かすべき。吾人は答へて曰はむ適當なる方法によりて、現行の文章を平易にし、同時に現行の言語を醇化すべし。是が爲には必ずしも明白なる一定の標準を要せざるべし。文章に對しては、小六かしき、無意義なる文字熟語は成るべく省き、是を耳にして解り得るを目的とし、文學的趣味を甚しく傷けざる限りに於て、徐ろに言語に近づかしむべく、又言語に對しては、餘りに下劣なる、或は冗

か。是れぞ言文一致の先決問題にして、此の問題にして定まらざる以上は、主義としての言文一致論は成立せりと謂ふを得じ。

さらば如何にして是の標準を一定すべき乎。吾人の意見をザッと述ぶれば左の如し。

言語は一國人文と共に調和的發達を爲し來れるものなれば、一朝一夕に變改し得べきものに非ず、何に理屈攻めにしたりとて、機運にして熟せざれば望み難き事也。然るに今日國民中に言文乖離の不便を自覺し初めたるものありて、現に言文一致を用ひ居る人、言文一致會を設立したる人さへある事なれば、時勢が是の氣運を助長し、一日も早く是の兩者の一致を見得る樣にするは、先に言へる改革の標的とも見るべき標準語を一定するに若くは無し。而して是の標準語に今日の言語を其まゝ用ひ難きは言ふまでも無きことなれば、兎に角是の目的の爲に今日の言語を如何樣にか變化せねばならず。されど是の『如何樣にか』を解釋せむは中々容易ならざる事也。

茲に言語の自然の變化を審に洞見し、數十年數百年後に今の國語が如何の發達

致が理想通に達せられたりとすれば、恐らくは現今隔たり居る距離の中間に折合ふものなるべきか。即ち言の文に近づくこと、猶ほ文の言に近づくが如くなるべきか。言文一致てふ理想は洵に結構なれども、豫め是の一致の標準點に着眼し、茲に其の大方針を樹つるに非れば、恐らくは角を矯めて牛を殺すの弊に陷らむ。吾人の見る所にては、今日の處、文を矯めて言に合するの弊は、猶ほ言を強ゐて文にするの害に齊しきものあり。言文一致論者はこゝらのところを能く〳〵注意せむことを要す。

是の弊は今日現に表はれつゝあり。新聞雜誌などにて見る言文一致體の十中七八は、其の拙さ加減と云つたらとてもお話に爲らぬ者也。言文一致會の一會員が文部省訓令を直したるものなども、殘念ながら是のお話にならぬ仲間也。斯かる手際にて、無暗に言文一致を實行されては、タマッタものに非ず。

勿論是等の人々とても、日常の言語そのまゝを取りて標準としたるものにもあるまじ、多少の醇化を施したる痕は見ゆれども、まだ〳〵是の醇化が足らぬ也。ッマリ先に謂へる標準語の取り處が低き也。さらば是の標準語を何處に求むべき

お伽噺は其名の如くお伽噺のみ、見聞の新あるに非らず、學理の深あるに非ず、洵に小供らしきもの也。然れども吾人及び吾人の祖先が是のお伽噺によりて如何の修養を得來りたるかを顧緬せば、吾人は吾人の子孫に對しても亦永く是の貴重なる遺物を世襲せしめざるべからず。是の點に於て漣山人の事業は徒に文藝上の製作を以てのみ見るべきに非ざるべし。

（三十三年二月）

言文一致の標準

言文一致會の主旨には大賛成なれど、今日に於て直に是を實行せむと力むるは一寸考へ物也。我邦の言と文と餘りに離れ、言は聞くもの、文は見るものとなり居るは、言ふまでもなく好ましからざる狀態也。少くとも讀て解る位の文にし、書いて讀める位の言にするにあらざれば、一國の文化は圓滑なる發達を望み得べからず、こは何人も異存無き所なるべし。

さりながら、國語の不完全なるが爲め、今日直に言文の一致を企てむは如何のものにや。千年以來の分離の爲に、是の兩者は兩極端に上下せり。もし將來言文一

等素より是を尊重す。唯淺薄皮相なる似而非寫實派に對つては、一日も早く其本領を自覺して、修養の　に就かむことを切望す。

（三十三年一月）

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

漣山人の『日本お伽噺』

近時の最も成功したる著作を數ふれば、漣山人の『日本お伽噺』は必ず其一に居らざるべからず。吾人教育上の見地より觀て特に是事を言ふ。

自國の傳說を保存することの教育上極めて大切なるは言ふまでも無し。具躰の表現に依るに非ざれば何物をも了解し能はざる兒童にとりて、一の『かち〳〵山』は一日の倫理論よりも痛切に感得せらるべし、況むや一國民の間に流布せる傳說は、即ち國民性情其物の一化現とも見るべきをや。今や時流日に急にして人は唯新事物の送迎に忙殺せられむとす。如何にして吾人の同胞及び子孫をして永く是の國性と民情とを繼續せしめむ乎、當今教育者の一大問題、實に茲に存す。吾人は是に於て我教育者が『日本お伽噺』の正當の價値を認識せむ事を切望する者也。

家の上に現はれたるものよりは、寧ろ隱約の中に深く且つ大なるものありしを想はざるを得ず。吾等潛に想ふに、露伴彼れ自らが暫く筆を文壇に絕ちしも、是の氣運に對する態度に於て多少慮る所ありしが爲に非ざる乎。己れの本領を自覺せる彼れは俄に是の氣運に動かされて其の理想的傾向を拋つが如きこと萬々無かるべきも、而も一旦の顧慮に惹かされて暫らく觀望の位地に立ちたるに非ざる乎。潛に想へらく、紅葉が『金色夜叉』の筆路漸く重膠となれるも、亦是の同一の氣運に對して慮るところありしが爲に非ざる乎。柳浪、天外、鏡花諸子の作に氣勢乏く、光焰甚だ揚らざるもの、亦是の同一の氣運に對して逆行せしが爲には非ざる乎。所謂文壇の不振と云ふもの、是の氣運に對する明白なる發聲と標的と實現とを得ざるが爲に、空しく遲疑煩悶したる痕跡には非ざる乎。

以上吾等の觀察にして大に謬るなくむば、作家が今の文壇に處するの道亦おのづから摸捉するを得む乎。所詮は社會的傾向は文壇一世の氣運也。人と、事と、社會との間の活ける關係を捕へ、時代精神によりて是を解釋するは、所謂社會的小說の極致也。文學の事素より一規を以て律し難し、理想派主觀派の製作と作家と、吾

豐富に、其形式に於て實世間に接觸するものなるべき乎。

露伴の名を聞けば人は直に理想派、もしくは超自然派の小說家を聯想す、而して是の理想的、超自然的なる露伴は、今や却て實際的たれ、實世間に接觸せよと說く。文壇の氣運漸く移れるを見る也。彼れの意は必ずしも小說を社會的のみに限るに非ざるべし、されど社會的傾向を推奬し、それを以て將來の作家が當に進むべき路なりとせるは明也。是れ理想派の領袖の說として特に注意すべき點ならずや。露伴が從來の諸作は、紅葉の所謂寫實主義と絕好の對比なりき。其の『對髑髏』と云ひ『風流佛』と云ひ『五重塔』と云ひ『一口劍』『新浦島』『二日物語』と云ひ、空靈高遠の理想を現示せるところに製作の價値あり、作者の本領ありき。斯かる理想派、主觀派の作家にして、尙ほ且つ人に勸めて實際的たれ、客觀的たれと說く、批評家が千萬言にも增してまことに好く文壇の氣運の那邊に向へるかを表明するものに非ずや、如何。

七　結論

是の如く觀ずれば、三十二年の小說界に於ける社會的傾向の影響は、著作及び作

述べたる如し。されど是の傾向を齎したる氣運は、決して是等の作、是等の作家にのみ及べるに非ず、其の影響するところは寧ろ文壇の全部に浸徹せりしが如し。吾等は幸田露伴の社會的小說に對する見解に於て明かに是の事實を觀取する也。

十一月の中旬、彼れは國民新聞の記者に向ひて其の文學上の懷抱を述べき。彼れは如何に世を觀じてや、凡そこの二箇年の間は、殆ど跡を文壇に絶ち『五重塔』『新浦島』を物したる手腕を收めて寂然として聞こゆる所なかりし也。二箇年間默したる彼れが今や當今の文壇に關して述ぶる所の意見は、一層の注意を價するものと謂ふべし。彼れは今の作家の眼界狹きを難じて曰く、

> 今の小說の讀者は、お孃樣に非れば書生、書生に非れば親の脛かぢりのみ。作家の目當とする所の讀者豈是の如くにして已むべけむや。苟も作家として世に立たむもの、少くとも三十歲五十歲以上の所謂世間の人に感興を與ふるの作無くして可ならむや。

又空想主觀の傾向を難じて曰く、

> 是の活動せる社會に親炙せるもの、爭でか是の如き作家の箱庭觀察に滿足するを得むや。今後の小說は如何の傾向を取るべきや、竊に想ふに、今の物よりは其の內容に於て

て時代精神の活動を看取す、是の識と是の見と爭てか朝夕にして造詣し得べきものならむや。吾等は切に今の作家に望む、徒に彼等が成功の美はしきをのみ觀て、彼等が修養の如何に深きかを忘るゝ勿れ。社會的小說の名は甚だ言ひ易し、而も『霜くづれ』『電影』『政驚』の類を以て是の如きものとなす勿れ。萬一是等の作の失敗を以て直に社會的小說其物の失敗となし、進取の銳氣を喪ふが如きことあらば、是れ即ち日本文壇の將來に向つて永く社會的小說を咀ふ也。濟々たる文壇の諸秀才よ、諸君は今日に於てトルストイたり、ゾラたり得ざることを恥とするものに非ざるべし、さらば靜に其道に就きて大成を將來に期す、亦可ならずや。寫實小說の發達は眞正なる意味に於て社會的たるに到らざれば已まざるべし。是れ吾等の固く信じて疑はざる所也。是を以て切に諸君に告ぐ。

六　露伴の社會的小說に對する批評

批評家に於ける時代精神論と合調して、製作界に起れる社會的小說は、其作の數甚だ多からず、多からざる作の中に於て見るべきもの亦甚だ少かりしことは、前に

らずや。

不知庵、風葉、宙外諸子の作の外に、社會的傾向を有せる者を擧げ來らば、尙ほ尠からざるべし。例へば東京朝日新聞などには殊に是種の小說多かりき。近くは前田曙山の連りに出せる『濁り水』『千枚張』なども少しく品はかはれども是の類なるべし。されど是等の小說は、時事に當て込みて其の人物と事件を案配せるに止まり、其內部に於て當代の社會の生命を捉へ得たるもの少し。謂はゞ三面雜報に見るが如き皮相なる觀察を小說の形に書き延ばしたる迄也。

是を要するに、三十二年に於ける社會的小說は失敗せり。吾等は是の正當の失敗を悲むことをせざるべし、唯今の作家が是の事實に鑑みて、社會的小說の價値と共に其の製作の困難を自覺し、更に修養を將來に積まむことを切望するもの也。

聞說く、佛のゾラ、魯のトルストイ、乃至北歐のイヲセン等の著作は、隱然として歐洲思想界に重きを爲すと。是れ豈彼等の作が當代文明の精神に接觸し、其の根據に於て社會の生命を捉へたるが爲ならずや。彼等は哲學者にあらず、宗教家にあらず、又經世家にもあらず、而も尙ほ一代の文明を箇中に解釋し、凡ての人と事とに於

の觀察と手腕とは、尙ほ大に未だしき所あるに非ざるか。『かたうづら』にまれ『霜くづれ』『血ざくら』にまれ一種の陰慘なるホーソルン的小說として見れば何れも多少の成功なりと云ひ得べけむ、されど予が所謂社會的小說としては吾等多くの讃辭を呈する能はず。

市外の『腐肉團』は政治小說として如何ばかり當世を描破し得たりしや、吾等讀まざれば知らず。されど風葉が『政鷲』の如きは何人も拙作と貶するの外無かるべし。政黨內閣の成立を後景とし、政治運動の爲に產を破り家を亂せる老政治家を描けるところ、題目としては、必ずしも不可なるに非ざるべし、されど其觀察の淺薄にして幼稚なる、到底若隱居作者の描ける國家、政府、政黨たるを免れず。少しく社會に閱歷あらむもの、誰かはかゝるオモチヤ的政治小說に興味を感ずべき。是の如くにして尙ほ時代を描き、社會を寫し得べくむば、小說家となる亦容易のわざならむかし。『戀慕ながし』『かづら下地』の諸編に於て、兎に角多少の見るべき作を出だしたる風葉が、是の如き駄作を著したるは、畢竟其の長所彼れにありて此れに在らざればならずや。一言すれば彼れには未だ政治小說に筆を染むる資格無ければな

的小説の作者たる資格に乏しき事――是等はまさしく不知庵、風葉諸子の失敗が我文壇に與へたる教訓也。

然り我等は不知庵等の小説を失敗せりと謂はむ。不知庵の『落紅』は小學校長の失行を抉摘せる三面雑報の類に過ぎざるのみ。『かたうづら』は一個の戀愛小説として見れば、失戀の悲運を描けるところに多少の精彩あらむ、されど時代の精神によりて其人物事件を解釋せるものとしては寧ろ拙劣陳套の誹を免れず。信仰の衝突、軍吏の醜行は描かれたり、されどこは皮相の擬似のみ。かゝる皮相の擬似を以て足れりとせば、學校受負を寫せる柳浪が『心の影』の如きも、亦時代精神を描けりと謂ふべけん。『電影』に到りては、政治社會の表面觀に過ぎず。例へば流浪壯士を集めて天下の事を論ずる大政治家島根某の如き、所謂『若隱居』作者の眼中に映ぜるものとしてはいざ知らず、當代の思潮を籠絡して特に新舊文明の衝突を描破せむと唱へたる不知庵が觀察としては、聊か不倫の誹無からむや。吾等は子の作を通じて明に時代の後景を看取する能はず、時代と人物との生ける關係より何等痛切の感興を被らざる也。竊に思ふに、子が批評の旨趣や太だ善かりしも、作家として

是の社會的傾向に動かされたるものは、不知庵の外尚他に尠からず。紅葉、柳浪諸氏の如きおのづから一流の地歩を占めたるものは、むしろ冷眼にして看過したらんも、やゝ野心あり、客氣ある青年作家の中には、必ずや時尚の赴く所に乘じて聲名を博せむと欲するものあるべし。想ふに宙外の『腐肉團』風葉の『政黨』少しく品はかはれども曙山の『にごり水』など何れも多少是の風潮を代表せるものならむか。

五　其批評

是の如くにして世に出でたる（假に名くれば）社會的小說は、如何ばかり成功せしや、精しく言へば如何ばかり時代を解釋し、其の人物事件の上に如何ばかり時代精神の影響を現じ得しや。是の問題の齎せる答案こそは、吾等を以て見れば三十二年の文壇が與へたる最も貴き敎訓の一つなれ。凡そ社會的小說の作家たり得むが爲に必要なる修養の何物なる事。是の修養を得むが爲には、作家の多くは其の從來の態度を一變せざる可らざる事。今の多くの作家の觀察と謬見とは、到底是の種の小說家として成功するに足らざる事。一言すれば、今の作家の多くは社會

に過ぎず。見よや我邦の今日は、政治、宗教、倫理の上に於て新舊思想の乖離は將に來らむとする大衝突、大破裂を預告するに非ずや。日々の新聞紙を讀むも、感興百出、慨くべきもの、恐るべきもの、宛然維新前後の歷史を讀むと同一の感あるに非ずや。翻て文藝倶樂部或は新小說を繙けば、天下は太平無事に泥み、戀愛に狂し、放蕩に勞れざること宛として隱世の如し。

彼れは紅葉一派の作風を似而非寫實なりと罵り、紅葉自身の作に現はれたる人物すら時勢を躰現せず僅に時勢粧を學べるに過ぎずと放言し、大に時代精神論を鼓吹せり。彼れの言ふところやゝ誇大に失し、放誕に流れたるものありと雖も、今の作家の若隱居氣質を打擊し、時代と文學との活ける關係を唱へたるは、慥に作家の傾聽すべき言なりと謂ふべし。而して吾等の彼れに於て最も多とする所は、批評家として唱へたるところ、作家として是を實行せむと力めたる事にあり。彼れは果して是を實行し得たりや否やは暫く措き、兎にも角にも己れの抱負に本きて其の所信を行ひたる勇氣は、天晴れなりと稱すべし。『落紅』『霜くづれ』『片うづら』『電影』等は、即ち斯くして生まれたるものなりき。

四　小說の社會的傾向

時代精神論が批評家の筆に上りしは、是の年の春の頃なりき。そは不幸にして文壇を風靡する程の力を得ざりしが、流石に氣運の赴くところ茲に在りたればにや、此頃より小說の社會的傾向漸やく著しくなり增りぬ。こは時代精神論其物に動かされたりと謂はむよりは、寧ろ批評界に時代精神論を生じたる同一の氣運の同時に作家の中に現はれたりと見むかた妥當なるべし。而して是の傾向を代表する作家は、紅葉、露伴其他の老大家にあらずして、不知庵、宙外、風葉等の少壯作家に多かりしことは、特に注意すべき價値ありとす。

不知庵は、一面に於て作家たると同時に他面に於て批評家なり。批評家として熱心に時代精神論を唱へたる一人なり。彼れは五月の『新小說』紙上に於て忌憚無く是の意見を述べて曰く。

> 今の小說家は、身常に社會を離るゝが故に、全く時代の精神を理解せず。政治、宗教、學術の社會は、彼等にとりて風馬牛のみ。されば其の作は新聞紙の三面雜報を延長したる

も寫實派を以て自ら居らむものは、其の極致とするところ必ず茲に存せずむばあらず。そは具象の究竟、特相の至極は、特殊なる時と處と位とによりて規定せらるべければなり。今の作家の描ける人物事件は、其の言語、風習の上にこそ明治時代の特徴もあらめ、十九世紀末の日本文明に就いて何事をか語るべき。其の言語、風習の皮相を變改せば、百年前にも百年後にも均しく通用せられ得べからざるもの果して幾何ぞ。これ豈に寫實の本旨ならむや。

時代精神論其物には、流石に著しき反對もなかりしが、作家を兼ねたる批評家の中には、時代精神其ものは俄に知り難しとの理由を以て、無期延期說を唱ふる者尠からざりき。時代精神を時代又は國民の理想と云ふ意味に解すればこそ、兎角の議論も起るなれ、一の時代に流行し、其の社會の動力となれる精神の義に解せば、それ〳〵の觀方によりてそれ〳〵の解釋は得らるべし。徒に枝葉の理窟に拘泥してこの大處の着眼を閑却し去らむは、いとも惜しむべき事ならずや。吾等は作家が是の警告に聽きて覺悟する所の足らざりしを憾とする者也。

せる達人なり。彼等の多くは、其の性の赴くところこそ同じからざれ、それ〳〵常人に勝れたる立派なる人生觀、もしくは社會觀を有せし人々也。吾等嘗て是の意を述べて我が作家に警告して曰へらく、

時代の精神を解せむには、強ちに社會學を講じ、經濟學にまで通ずるを要せざるべし。唯國民思想の活動を己れが胸裏の鏡に映じ得べき眼識を具ふるを以て足れりとせむ。疑ふらくは、今の作家の多くは、我國家の人文が内外日新の形勢に應じて如何の變遷をなしつゝありやを知らざるに非さる乎。國民思想の大勢が一切の事物を率ゐて如何に行動しつゝありやを解せざるに非ざる乎。嘗に知らず解せざるのみならず、是を知り是を解せむとも思はざるに非ざる乎。

あはれ皮相の摸倣を事として、是れが活動の生命たり、是れが發達の根蒂たる時代精神其物の現狀も理想も辨えず、又辨えむとも思はざるもの、一代の氣運沈默の中に轉移して、彼等が陳套の摸倣を顧みざるに及ぶや、則ち却て時尚を低しとして自ら高ぶる、果して當れりと謂ふべき乎。是れを時代精神論の大意とす。

吾等を以て見れば、是の論は慥に文壇の時弊に適中せるものなりき。露伴、鏡花の如き理想派とも名くべき作家に對する論としては、或は適切ならざるべきも、苟

時代精神論の主旨とするところは、今の作家に對ひて時代を解釋せよ、時代の精神に接觸せよと勸むるにあり。今の日本の時代精神は何ぞと云ふ問題は暫く措き、是の如き時代精神に接觸して、其の人物、事件を解釋することを須要とする點に於ては、恐らくは何人も異存無かるべし。所謂寫實派の作家が描ける人物は、名は則ち寫實と謂ふと雖も、喩へば根の無き草木なり。是の人物の生活せる社會、是の社會に弘通なる精神に就いては、多くの解釋も觀察もなく、單に外に現はれたる言語衣服、風習などの末節に就いて寫實逼眞を衒ふに過ぎず。形似はあるべし、生命は未だし。斯くの如くにして、爭でか社會民衆の胸裏に活ける反響を聞くを得べき。作家が寫實に勉むるは、個躰の特相を捉へむが爲なるべし、されど人事人心の特相は打見たるところこそ無造作に眞似し得べくも想はるれ、そが由來する根蒂はなか〳〵に究め易からず。一人を描き、一事を寫すにも、是の人、是の事の存在し、生起せる時代、社會の少くとも大躰の精神を領會し得たる上ならでは、如何でか其の人、其の事の具象的表現を成し得べき。さればにや古より大なる詩人、小説家の多くは、單に摸倣擬似の術に長けたる人々にはあらず、實に同時に識見一世を看破

目下小說界の趨勢を窺ふに、尤も明に吾人の眼を射るものは、寫眞的傾向也。特に枝葉に偏せる寫實的作風也。

吾等を以て見れば、昨三十二年の多くの小說は實に是の寫實的傾向を以て初まれり。宙外の『縁不縁』『新機軸』抱月の『衆生心』、柳浪の『縺れ糸』『骨ぬすみ』、天外の『三枚襲』何れも大躰に於て是の傾向を有せしが知し。凡そ小說が社會的たらむと欲して先づ寫實的となる、或は自然の經行ならむか。然れども末節にのみ拘泥せる淺薄なる寫實は、未だ活ける人間を表現するに足らず、況むや時と處と位とに限られ、一個特定の社會的生活を營める活ける人間をや。時勢の解釋は、言語衣服の時代粧のみによりて成し得らるべきに非ず、一個人物の特性、ばた是の時勢の根本に接觸するに非ざれば、遂に活現せられ得べからざるを見るに及びては、批評家はおのづから是の淺薄なる寫實以上、更に眞正なる意味に於ての社會的傾向を推奬せざるべからず。斯くして起りたるものは即ち所謂時代精神論也。

三　時代精神論

と同年輩なる二三十の壯年に過ぎざる事。而して是等の人物だも彼等自らの境遇に近き、一般讀者にとりて極めて興味無き人物なる事。斯かる事情より生ずる自然の結果として、平凡なる戀愛談の外には讀者と作者との間に共通の興味の有り得ざる事。而して是の如く小說が滿足を與へ得べき讀者は、一部靑年の書生輩に過ぎざる事。年四五十以上の少しく實世間に經驗ある人の眼には、斯かる小說はおのづから幼稚空疎と見ゆべき事。一言すれば、今の小說家の根本的缺點は、是の實世間、是の活社會の共同趣味を捉ふること能はず、其の主觀性の餘りに幼稚にして且つ狹隘なるに在る事——是等は多くの批評家、例へば『早稻田文學記者』などの夙に唱へしところにして、多くの作家も亦自ら是の缺點を承認するに異存なかりし也。さればにや、三十一年の多くの小說が、紅葉の金色夜叉を初めとして社會的に傾き、是の活社會の生命に接觸せむと務めたるの形跡は、作者の側より見れば或は無意識にてありたらむも、寧ろ彷彿として摸捉するに難からじ。而して是の傾向が作の形の上に現はれたるものを、所謂寫實的作風となす。『新小說』記者、昨年の初め、早く是の事實を認めて左の如く言へり。

十二年の文壇が、是の落衰の餘を受けて何等か挽回の氣勢を齎すべしとは、一般の希望なりしなり。されど三十二年果して是の屬望に報ゆる所ありしや否や。

二　昨年の小説の大傾向

吾等の觀察する所にして大に謬らざれば、三十二年に於ける小説の重なる傾向は寫實的の一言以て是を覆ふべきか。こゝに所謂寫實的とは、成るべく今日の社會に接近し、成るべく多數の人に興味を與へ得べき人物事柄思想を表現せむと務むるの謂也。されば是の意味に於て、現世的と言はむも可なるべく、又社會的と云はむも不可なからむ。

抑も是の傾向は、決して昨年に初まりしに非ず、今の小説家が多くの讀者を有し得ず、又大いなる著作を成し得ざる重なる原因は、彼等が社會の實相と隔離せるにあることは、既に久しき以前より批評家の齊しく唱へたる所なりき。實に今の作家の多くは、年齒尚ほ弱く、閲歷未だ足らず、隨て其の表現する所の人物、事柄、思想の多くが世間見ずのお坊樣的なる事。例令へば彼等が描き得る人物の多くは、彼等

明治卅二年に於ける小說界の傾向を論ず

一　緒言

文壇不振てふ歎聲の聞え初めしも、既に數年前の事となりぬ。斯くて一昨三十一年と昨三十二年とは、是の歎聲の中に過ぎ去りて、兎も角も年は革まりぬ。新たなる年は果して新たなる希望を約すべきや、預言者ならぬ吾等、暫く茲に佇回して靜に過去一年の功過を鑑みむ。人生の經路は何れか失敗に非ざるべき、唯世に最も貴き敎訓は、時として最も苦き經驗より來るものなることを遺却すべからず。

顧れば一昨三十一年は文壇にとりて珍らしき厄年なりき。作家に作の見るべきなく、評家に評の聞くべき無し。『國民の友』も仆れたり、『早稻田文學』も見えずなりぬ。殆ど凡ての新聞雜誌が昨年の初めに下したる批評は、何れも不振極衰を標榜せる文字に非ざるは無かりき。或新聞の記者の如きは、『昨年の文壇を記するは、是れ皆無を記する也』とまで言ひ放ちぬ。兎にも角にも、三十一年の文壇は殆ど批評家をして最早落衰の餘地無きを想はしめたるまでに衰へたりし也。而して昨三

のをも卑きものをも等しなみに滿足せしむる劇ならばいざ知らず、徒に高きに馳せて低きを容れず、大多數の人々に不滿足を與へて獨り少數者を喜ばしむる如きものならむには、良しや藝術上高尚として稱え得べきものなりとも、社會の爲には不幸なる改革と謂はざるべからず。もと〳〵社會を幸福ならしめむが爲めの演劇なれば、斯くてはその存在の本旨にも戻らずや。吾人は是の點より獨りに高尚を貴ぶ改良論者に左袒する能はず。

斯く言へばとて、吾人は改良といふことを全く拒むものに非ず。一般社會をして其の文化の程度に適應せる嗜好を有せしむるは、最も自然にして且つ必要なることなり。今の社會が演劇に對する嗜好は、彼等が當然有すべきものよりも卑きこと、疑を容れず。彼等をして當然有すべき嗜好を有せしむるは彼等の娯樂を深大にし、其幸福を增進する上に於て、極めて必要なるべし。世の演劇改良論者は先づ是の點に着眼せざるべからず。改良に關する凡ての方案は是點より打算せらるべき也。

（三十二年十二月）

と同時に、社會が演劇上の嗜好を彼等の意のまゝに造作するは、是れ亦自然の成り行きとこそ謂ふべけれ。

我邦の社會と演劇との關係、斯かる有樣に在りとすれば社會の嗜好をば劇其物よりも進み居れりとは言ひ難からむ。我邦文明の進歩より推せば、實に進み居るべき筈なり、されど前に述べたる如き事情にて、現に進み居らざることの事實なるべきを如何にせむ。吾人は是の點に於て一概に社會の嗜好を劇其物より進めりとする演劇改良論者に同意し難し。

然らば社會の嗜好の卑きを高めむが爲に、改良劇を起すの必要ありと斷ずべき乎。是の說にも俄に同じ難し。凡そ娯樂の價値は娯樂を享くるものゝ價値なり、享樂者を外にして娯樂其物に價値あるに非ず。八百善の料理の外に旨きを知らざる人は、ドブ六の味を卑しとせむも、車夫馬丁の境遇にあるものには、是れ無くば如何に樂み少からむや。少數なる知者識者の眼には今の劇ばかり馬鹿らしく見ゆるものは無からむも、是の如き劇を是上も無く面白しと感ずる多數者の在らむ限りは、改良呼ばはりこそ彼等にとりては迷惑の沙汰なるべけれ。もし嗜好高きも

降參とあるのみ。語を換て言へば、社會が全く藝術家の好尚に感化せらるゝか、又は藝術家が社會の嗜好に服從するかの二途あるのみ。

こは專ら理論上の話なり、實際に於てかゝる極端の塲合を見ること無かるべし。然れど我邦の社會と役者との關係は、やゝ是れに近からずや。今の世に於て演劇の嗜好を作るものは、社會に非ずして、寧ろ役者なり。役者は割合に社會に影響せられざれども、役者が社會を感化する力は甚だ大いなり。そは今の役者と稱するものは、彼等の間に一種特別の社會を成し、彼等の祖先又は先輩より引き繼げる習慣と勢力とを固執し、殆ど今日の新文明との交渉の途を杜絕し、翻て社會に對して自己の摸型通りの演劇の嗜好を吹き込みつゝあればなり。是れを社會の側より見れば、今の世に觀るべき演劇とては舊演劇の外に無く、且つこの舊演劇なるものは、明治の新文明にこそ多く影響せられざれ、二百年來名優の手に鍛ゑに鍛ゑられし技藝なれば、陳腐ながらも中々見所あり、是を壯士劇などに較ぶれば流石に立ち優りて見ゆることなれば、是をしも尚ほ娯樂の料に資するは、最も自然の成り行きと謂ふべし。是の如くにして演劇の娯樂を與ふるは、舊俳優の專有權となり、是れ

故如何と云ふに、一般社會の嗜好は必ずしも今の劇に不滿なりとは云ひ難からむ。維新以來百般の文物大に進み、文學美術の好尚一として舊時の觀を改めざるもの無き點より考ふれば、是の如き高尚の發達が獨り演劇界に現れざる道理無きが如し。されど事實は必ずしも然らざるを得む。凡そ社會が藝術家を影響し得る如く、藝術家また社會を感化し得べし、時代の好尚は兩者相互の合成力に外ならず。社會の力強くして藝術家の力弱からば、かくして成されたる時代の嗜好は藝術家弱き丈けそれ丈け社會の好み通りになるべく、是に反して藝術家の力強くして社會の力弱からば、社會の力弱き丈け其れ丈け藝術家の好み通りに時代の好尚は造らるべし。素より藝術家も社會の一員として共同の社會的生活を營む以上は、彼れと社會との間に甚しき嗜好の相違無き筈なれども、若し藝術家にして一般社會の文明と隔絶せる生活を營み、其思想感情の上に著しき時代の影響を被らざる場合には、彼れと社會との間に嗜好上甚しき懸隔を生ずべし。是の場合に於ては兩者の間に讓歩、又は調和と云ふことは行はれざるべし、何となれば讓歩、又は調和すべき共通の分子無ければなり。されば是の間に行はれ得べきものは、征服と

般社會の嗜好を高むるに若くは無し。社會の嗜好だに高からば、是に適當せる高尚なる脚本も、技倆ある役者も實際上の必要に驅られておのづから出て來るべきなり。

扨て本邦の演劇に就いて見むに、一般社會は今の演劇に滿足し居れりや。例へば黒田騷動、天一坊、或は太鼓破り等は一般社會を代表し居れりや。日々の觀客場に滿つるところより考ふれば、是の問に對して然りと答ふべきが如し。されど、その他に今の劇に換ふべき高尚なる劇、もしくはおしなべて娯樂なきが爲めに、或は是の如き劇、はた娯樂あるべきを識らざるが爲に、餘儀無く現在の舊劇を觀て滿足し居るものなるか。世の所謂演劇改良論者の中には、是の點に關して兩樣の意見あるが如し。其の一は、一般社會の嗜好を以て今の劇よりも進み居れりとなし、他の一は社會の嗜好はまさしく今の劇によりて代表せらるゝとなす。前者は今の劇は社會の嗜好に後れ居るが故に改良の必要ありとなし、後者は社會の嗜好卑きが故に新劇を起さゞるべからずとなす。想ふに是の二説には各々一面の眞理あるべけれども、事實の全きを得たりとは云ひ難からむ。

挾むこと無かるべし。殊に一般社會の好尚卑きことは、改良の新運動を無効ならしめたる最大の理由なるべし。演劇は所詮一種の社會的娯樂なれば、其の凡ての性質は一般社會の嗜好によりて定まるべきものなり。良しや少數の識者、又は役者の如何ばかり高尚なる理想を抱きてそを實現せむと力むるも、一般社會にしてそを好まずむば、舞臺の上に演ずる由無からむ。演劇はそを施行するに於て大なる設備と隨て莫大の資金を要す、隨て日々千人二千人といふ多數の觀客を得るに非ざれば到底立ち行き難きものなり、されば社會の大多數の嗜好に適ふものゝみ演ぜらるゝに到るは自然の結果とや云ふべき。されば如何ばかり勝れたる作家ありとも、其手に成れる脚本が一般社會の嗜好を代表せざる限りは、舞臺の上に成功せむこと思ひもよらず。役者とても其の通り、其技倆如何ばかり進歩せりとも、一般社會の好みに副はざれば多數の觀客を集むること能はざるべし。演劇改良の方案としては、適當なる作家も役者も共に必要なるには相違無けれども、そは一般社會を代表する限りに於て必要なりと知るべし。

されば演劇改良の方案として最も根本的なるは、まことに陳腐の言草ながら、一

我國演劇の前途に就いて

本邦演劇の缺點は、十數年來の演劇改良論にて殘りなく擧げ盡されたれば、今更喋々すべき要を見ず。少しく目あるもの、誰かは今の劇を以て懷れりとすべき。演劇改良は敎育ある社會の輿論と見做しても差支無かるべし。

されど當の相手たる演劇は殆んど依然として改良せられざるなり。十年前と今日と較べて、舞臺裝飾などの上にこそ多少の變りもあれ、劇その物に何程の進歩かあらむ。こは大に怪むべきに似たらずや。

是の理由に就いては、從來批評家の解釋まち〳〵なれど、所詮は左の三個條に歸着すべし。

一、適當なる脚本作家の乏しき事。

二、良しや適當なる脚本ありとも、それを演ずるに足るべき役者の乏しき事。

三、一般社會の演劇に對する好尙卑くして新劇よりも尙ほ舊劇を喜ぶ事。

是の三個條は何れも至極の道理にて、劇界の現狀を知れるものは何人も異存を

是を爲す方法如何

如何にして是の事を爲さむ乎。吾人は是に於て國文學者及び一般教育家の奮發を請はざるべからず。

若し行はれ得べくむば、言文一致亦可ならむ。然れども差し當り最も無難にして且つ實行に支障無き一方法は、中學校以下の國民教育に於て、一方に於ては漢字の節用及び古文學の研究を排除し、他方に於ては最も簡易平明なる文體を以て凡ての教科及び教科書を統一するにあり。

國文學者の頑迷

然るに世に所謂國文學者と稱する輩は、徒に古言をヒテクリ、文法語法をヤカマシク言ふを能事と心得、中學校の教科書にも土佐日記、伊勢物語を講ぜずむば已まざらむとす。毫も國民教育の大本に就いて思慮する所無きなり。教育者と稱する輩、亦漫然として舊慣を維持し、是の根本問題に關して多く懸念するもの無し、亦一嘆を發すべき也。

(三十二年十一月)

我邦のコトバ即ち口語は、決して圓滿なるものに非ざるべし。思想感情を發表する容易さと自由の上より見れば、恐らくは英、佛、獨諸國の口語に及ばざるものあるならむ。然れども我邦の文字の困難不自由なるに比すれば、尙ほ遙に自由に且つ容易なるものなり。若し書くことの難きに較ぶれば、話す事も、考ふることも、其の容易さに於て大差なからむ。吾人若し話すが如くに書き得べくむば、其幸や如何ならむ。

文章は文章家の專有たるべからず

吾人は必ずしも言文一致を須要とせず、唯文章を書くの困難、今日の如くにして繼續することを不自然なりとなすのみ。

三の力を以て思想に費やし、而して是の思想を發表せむが爲めの文章に七の力を費やすは、全く主客本末を顚倒せるものならずや。吾人は思想發表の方式たる文章をして、所謂文章家の專有物たらしめず、思想ある凡ての國民の自由に且つ容易に取扱ひ得べきものたらしめむことを切望す。吾人實に日本文明の名によりて是を切望する者也。

近時德富蘇峰が國民紙上に述べたる本邦文章に關する意見は、吾人の平生思憂せる所と正に符契を合す。國文學者及び敎育家は是問題に就いて熟慮するところ無かるべからず。

考ふると書くと

我邦にありては考ふる事と書く事とは殆ど別種の勞力なり。吾人は吾人の思想を表はさむ爲めの口語によりて多く苦められるゝこと無し、然れども是を文字に現はすに臨みては殆ど別種の用意を要す。意到りて筆是に隨ふが如きは、世に稀なる能文者に非ざるよりは吾人の想像し能はざる所也。

不自然なる勞力の消費法

然れば一書を著し、一文を草するに當りて著者の最も苦心する所は、思想其物の構成よりは、是の思想を發表するに足るべき適當なる文字を發見する事にあり。是に於てか著述の勞力は、考ふるよりは、寧ろ書くにあり。吾人は是の如き勞力の消費法を以て不經濟且つ不自然なりとする者也。

思想、口語、文章

其父に反かしめ、臣をして其君に反かしめんが爲に彼れは生まれたり。彼れは世に戰ふべきもの多きを認めたれば也。古來劍は大なる福音の傳播者なりき。想ふに足下の理想に近きものは親鸞よりも日蓮乎、孔子よりも韓非子乎、基督よりは寧ろマホメツト乎。

足下よ人心は凡ての方面に於て倦み疲れたり、大執着無き也、大煩惱なき也。足下世に爲すあらむと欲せば先づ是の人心を新たにせんことを要す。

足下は主義の人也、而して足下の主義や直截簡明也。足下は意志の人也、而して足下の意志や勇猛激烈也。足下は人を斃すに非ざれば、人に斃さるゝ人也、讓歩とは足下の字書中に發見せざる文字也。足下の有する物は武器に非ざれば則ち樂器のみ。予は足下の直截簡明主義を貫徹せんことを希望する者也。

予は足下の成功を望む、而して戰によりて成功せむことを望む。足下よ記憶せよ、戰を怖るゝもの多き時代は、即ち戰ふ者の成功する時代也。

（三十二年九月）

本邦文章の問題

鳴呼、詩人の生涯や洵に悲むべし、而してさなきだに苦悶多き詩人の生涯が、批評家の區々たる品隲によりて惱まさるゝは更に大に悲しからずや。良しや書を山に藏して知己を後世に求る程の襟度は無くとも希くは餘りに當代の毀譽に關せざれ。キーツは半ば批評家の爲に死したりき、彼れの死したるは哀むべし、而かも彼れが當に有すべき後年の聲價を夢にだも知るに及ばずして死したる、更に大に悲しからずや。

（三十二年九月）

木村鷹太郎君に與ふ

（富士新聞の發刊に際して）

木村鷹太郎君足下。足下は戰の人也、想ふに足下の新聞も亦世に平和を齎さむが爲に生まれたるものに非ざるべし。今の時に當りて戰ふべきもの尠しとせず、戰を好まざる世も、早晩足下の戰ひを德とするの時あるべし。

基督は己れを十字架に上せたるものゝ爲に禱りたり、然れども是れ彼れの半面のみ、彼は其の他面に於てマホメットなりき。妻をして其夫に反かしめ、子をして

り、即ち其第一行に書して曰く、『美はしき物は永遠の喜び也』と。彼れは『エンヂミオン』其物を以て實に永遠の喜び也と想ひし也、少くとも彼れは爾かく想ひし也。彼の少壯なる血液は名譽にかつへて湧き立ちぬ。以爲らく眞理茲にあり、理想茲にあり、美はしき物はた茲にありと。去て世評に聽くに、人は多く其名を知らず、其名を知れるギッフォルドは『クォータリー』に批評を載せたり、而して其批評によれば、『エンヂミオン』は嘲罵の外何物にも値せざる惡詩篇なりき。『ブラックウード』の批評家は、キーツに告げて曰く、卿よ、是の如き者を作りて詩人たらむよりは、去て藥瓶を執れ、同じくば詩人としてよりは藥劑師として餓死するかた、寧ろ可ならずやと。彼れは憂悶して死したりと傳へられき。そは素より訛傳なりしが、憐れむべき彼れは是時より病に罹りぬ。彼れは力めて平靜を裝ひて世上の毀譽に關せざる爲したりき。然れども彼の咏嘆の聲の漸く悲しきを如何にすべき。彼れは流浪して羅馬に到りぬ。死の避くべからざるを知り、自ら其墳墓に題して曰く、『其譽れ水に書かれたる一人茲に葬らる』と。二十五年の短生涯に於ける忘れ難き失意の餘恨は、是一行の中に表はれたり。彼れの傳記は是の一行によりて殘りなく書かれたり。

て彼れの要求する如き賞讃を與へざるとあり。是に於て彼れは怒らざるを得ず。彼れに對する批評家の嘲罵が如何なる理由によりて爲されたるにもせよ、彼れにとりては眞理の侮辱也、德義の蹂躙也。是の塲合に於て彼れの怒るは、即ち彼れの詩人たり文學者たる所以を守る也。然れども彼れ如何程怒るとも、遂に世と批評家とを如何共する能はず、是に於て彼れは外に失望あり、內に苦悶あり、是際彼れの理想にして健全ならざるか、或は强固ならざる乎、則ち自己の理想を捨てゝ世尙を迎合するを免れず。若し彼れの理想にして尙ほ十分の活力と希望とを供給し得る乎、則ち彼れは世と戰ひつゝも、飽まで自己の要求を主張せずむば已まざるべし。若し又外に對して世と戰ふ力無く、內に向ひて其の理想を捨つるに忍びずむば、苦悶は絕望と爲り、絕望は咏嘆となり、遯かに風月に向ひて餘恨を慰ふるを以て自ら慰めむ。想ふにダンテ、パイロン、ゲーテは終りまで世と戰へる者也、キーツ、バーンス、ハイネは絕望して咏嘆せるもの也、詩人の生涯も亦慘憺ならずとせむや。

詩人キーツの短き生涯は最も明かに這般の徑路を表はせり。彼れは天成の詩人也、詩人として彼れの性情は最も主我的なりき。彼れは『エンヂミオン』を著はせ

聞かれ、是に異なる者は哲人の教も虚僞の影と見らる。花も是が爲に笑ひ、風も是が爲に語り、憤激是が爲に來り、同感是が爲に興る。是れ詩人になりての呼吸也、血液也、生命也。彼れは是に執着して生き、且つ死す。凡そ人生世間の種々相、詩人の筆に上るもの、何れか是の執着の一念に驅られたるものに非ざるべき。

感じ易きは詩人にして、動き難きも亦詩人也。一念の理想に執着して生死尙ほ渝らざる點より見れば、彼れに動かすべからざる自信あるが如し。されど彼れの眼は色なき所にも形を見、彼れの耳は音なき所にも聲を聞く、天下の最も多感なるもの也。感じ易き怯情を以て、動かし難き執着に加ふ、是を以て多くの詩人の生涯は、最も葛藤多き生涯也。彼等の詩の多くは是の葛藤に惱める苦悶の歎聲に外ならざる也。吾人は多くの場合に於て詩人が其の批評家に對する態度に於ても亦是の葛藤を認むる也。自己の理想に執着すると強き文學者は、人類中の最も主我的なる者也。彼れは己れの著作の賞讃せられむ事を望む、而して彼れの希望は素より正當なり、何となれば彼れは己れの理想に異なれる一切を擧げて虚僞と觀ずる者なれば也。然れども世は必ずしも彼れの理想に同じからず、批評家は時とし

見る。炯眼なる批評家は、其功未だ終らず、其過未だ始まらざるに當り、尚古主義に附與するに適當なる歴史的價値を以てせむことを要す。

從日ヴンケルマン氏は、歐洲の藝術史上に於て尚古主義の批評家なりき。希臘彫刻の歡美を旨とせる氏が一卷の古代美術史は、慥に當時歐洲の藝術界に一新趣味を輸入したりき。然れども、是れ一時の功のみ、十九世紀の藝術が尚古主義の打破によりて向上の進路に拓きたるの事實は、何人も知る所に非ずや。吾人は是點に關して我藝術家及び藝術批評家の三省せむことを望む者也。（三十二年七月）

詩人と批評家

感じ易きは詩人なり、動き難きも詩人也。感じ易からざれば詩興來り難し、花の色を笑ふと見、風の音を語ると聞くは詩人の性也、一念の憤激に驅られては眼に帝王なく、一片の同感に動きては匹夫の爲にもいのちを惜まず、是れ詩人の情也。されど彼れに動かざる一面あり、哲學と云はず、理想と云はず、彼れの心は一物の微の凜として動かすべからざるものを有す。是に逆ふものは聖者の言も惡魔の聲と

藝術界の尚古主義

尚古主義は藝術批評の初期に於て免れ難きものなる乎、吾人は本邦藝術界の現狀を見て是の感あるや久矣。

假へば推古奈良の彫塑に於ける、弘仁、寛平、貞元の繪畵に於ける、我邦人の常に好尚して措かざる所也。或は高雅と稱し或は雄渾とたゝへ、猶ほ支那人が先王の遺法に對するが如く、一切の批判を絶して偏に崇拜を事とするもの、今日尚ほ一部の鑑賞家に於て見る所也。吾人は決して彼等に鑑識の明無しと謂はざるべし、唯潛に憂ふ因襲の久しき、知らず識らず、尚古主義の圈套を擺脫する能はざるに非ざる乎。尚古主義は藝術批評の初期に於て或は免るべからざるものなるべし、然れども、それが一旦意識せられたる後に於ては、速に打破し去られむことを要す。

凡そ美術に於ても、文學に於ても、尚古主義は常に功過の兩面を有す。過去藝術の歎美によりて將來藝術の新發達を鼓舞するは、其功績の一面也。而れども漸く發達初めたる新藝術に對して、再び復古的束縛を加ふるに及びて、其過失の一面を

し、解釋せむと力めたるの形跡あるは、吾人の多とする所也。子の所謂時勢粧以外、更に今日の思潮を籠絡し、特に新舊文明の衝突を描破せむとせるは、其技巧は暫く言はざるも、其識見に於て、今の尋常作家の上に一頭地を抽づるものありと謂ふべし。吾人は不知庵の益〻健全ならむことを祈る。

不知庵の新作、曰く『落紅』、曰く『霜くづれ』、曰く『片うづら』、謂はゞ是れ皆子が新發達の初期に屬するものなるべきを以て、吾人は今彼れ此れ批評すること無かるべし。唯一事の注意すべきは、子はホーソルンの流義に染着せしに非ずやとの懸念、是れ也。ホーソルンは新英國文明の裏面を描きたる小説家なり、其作中常に暗黑あり、神祕あり、是の暗黑神祕に對する好奇心によりて讀者を誘惑し、其解釋を最後まで與へざるは、彼れの好て用ひたる慣手段、所謂ホーソルン的デダクチブなるもの是れ也。吾人は不知庵の筆法、甚だ是に近きものあるを想ひ、一言以て子を警戒せむとす。若し吾人の言にして當る無くむば幸也。

（三十二年六月）

らさるること、宛として隔世の如し』と讃る。何等の痛切の言ぞ。今の小説家は深く自ら省みる所無かるべからず。

不知庵は更に紅葉及び其一派の似而非寫實を論破し、紅葉自身の作に現はるゝ人物すら、今時勢粧をなすと雖も、全く明治思想を呼吸したる者と認め難き箇所頗る多きを難じ、其近業『多情多恨』及び『金色夜叉』中の人物は、今の時勢と密接するものなるに拘らず、現時代の思想精神と頗る遠ざかれるを指摘し、『是れ氏が時勢粧の實を寫すに長じて、而して遂に明治思想を解せざるに非ざる乎』と疑へり。紅葉及び其門下は、須らく無意義の慢心を去りて、是の忠言に聽かざるべからず。想ふに偏狹なる寫實主義は、何れの時代にありても文學の衰頽を意味す。不知庵の說は吾人が曾て時代精神と小說家との關係を論じたると、正に符契を合す。而して一作家たる子にして、是の意見を持するは、漫に談理を事とする吾人の數百言よりも、文壇に實效あるべきを信ずる也。

今批評家たる不知庵より、轉じて著作家たる不知庵を見れば、子の近業は必ずしも如上の抱負を實現せりと曰ふを得ざれども、兎に角時代の精神を捉へ是を躰現

きは、吾人が不知庵と共に認めて文壇の病弊とする所也。實に本邦人士の通弊カる、不知庵の所謂『若隱居氣質』は、亦今の文士の通弊なり。『俳諧の嗜み無きを恥辱の如く思ふ』文士、深く自ら顧みて可也。今の文壇は若かく安心すべき時に非ず。

不知庵が時代精神と小説家との關係に就いて論ぜるところ、亦全く吾人の意を得たり。曰く、

> 今の小説家は常に社會を離るゝが故に、全く時代精神を理解せず、其作は畢竟新聞の三面雜報を延長したるに過ぎず。之を極言すれば、今の小説家は思想界に立ちて、他の學者、政治家、宗教家と共に相馳騁するの權利無き者なり。

不知庵は例を西歐文豪に引き、ゾラ、トルストイ等の著作が、當代文明の機微に接觸して、隱然として思想界の重きを爲す所以を說き、更に我邦の今日、政治、敎育、倫理の上に於ける新舊思想の乖離は、將に來らむとする大衝突、大破裂を預告するにも拘らず、又日々の新聞を讀めば、『慨然として憂ひ、憫然として恐れ、或は心骨沸熱し、或は肌膚粟を生ずると雖も維新前後の歷史を讀むと同一の感ある』にも拘らず、『雖て文藝倶樂部、或は新小説を繙けば、天下は太平無事に苦みて、愛戀に狂し、放蕩に勞

的面目は、是によりて漸く拂拭せられむこと亦強ちに期し得ざるにも非ざるべきか。是の如くならば、彼等が後年の著作は國民性情を隔離せる事今日の如く甚しからざるを得べく、又集成せられたる傳說は永く將來の文學者をして國民性情を反省せしむるの好方便ともなりぬべし。

吾人は如上の理由によりて民族傳說の蒐集の必要、及びそを小說家の事業となすの得策なるを主張す。げに作家が狹少なる主觀に據りて餘飢せる小說程世に價値無きはあじ。民族蒐集は永遠の事業なり、今の作家はよもやその爲に各自の小主觀を沒するを惜まざるべし。

（三十一年十二月）

評家及び作家としての不知庵

文壇寂寞の折柄、內田不知庵の卓拔なる小說論に接するを得たるは、恰も空谷に跫音を聞くの思あり。而して子が將來最も多望なる作家なることを思へば、更に人意を強うするものあるを覺ゆ。

今日の文學は修養の時代に在り、今の詩文人が小成に安じて邁往の氣慨に乏し

が小說衰微の主なる原因なること等は吾人曾て『小說革新の時機』と題して本誌上に述べし事ありしが、今の評家及び作家の多くは、吾人の說を偏に狹しとして取らざりき。あはれ斯かる執念に誤られたればこそ、此の今日の頽勢をも致したるなれ、吾人は強いて云はずして時の到るを待ちき。

それは扨置き、民族傳說は國民性情の發表としては最も醇粹なるものゝ一ならむ。素より時勢移り人文進むに隨れて、古の傳說は餘りに素朴に、又餘りに抽象なるも多かるべし。されば直に取て是を今日の文壇に奬むる能はずとするも、少くとも是を聞き又は讀む時、吾人の胸底に潛める最後の琴線は、さながら希臘の昔にありきてふ「エオリア」の琴を春風の吹き鳴らしたらむが如く、外には得がたき微妙の合調に心嬉しく響き渡るなり。是の如きは所詮國民性情の根蒂に觸れて同一生命の流れを分てばなり。されば吾人は常に曰ふ、苟も文學にして國民的たらむが爲の須要の制約は、其中心に於て一分民族傳說の精神を保存せざるべからずと。

吾人は是民族傳說の蒐集に緣りて、今の小說家が知らず〳〵國民性情を正解するに到らむことを望むなり、少くとも成心私情に曇らされたる彼等が本來の國民

郡の方に在りけるが隔り居ることの堪え難く、船に乗りて男の方に行かむと思ひ立ちぬ。されど船人は是女の船に乗るを許さず、そは忍路郡の此方に雷電峠と云へる山あり、男ならぬ人を載せたる船は是山の沖にて必ず沈むべしと云ふ傳説ありければなり。女悲みて、さらば忍路高島までは叶はずとも、せめては歌棄磯谷まて吾を伴へよかしと歌ひしなり。――歌棄磯谷は共に雷電峠の手前なる後志の國の郡なり。是の如き古傳説は、例へば獨逸なる「ローレライ」のそれにも較ぶべき幽妙の詩趣を湛えたり。

我邦の各地方に斯かる種類の傳説到る處にあり、歳時の移ると共にそを自然の湮滅に委ね去らむは、いと〳〵惜しき事ならずや。吾人は今日我邦の文學者が全國を旅行して、其蒐集保存に從事すること、例へば獨逸のグリムの如くならば、其功徳恐らくは如何なる種類の大著述にも匹敵すべからむとこそ思へ。而して吾人が特に是事業を今の小説家諸君に依頼せむと欲する理由は左の如し。

今の我邦の小説家が、おしなべて我國民性情の解釋に暗きこと、隨て其作多くは國民の欲求もしくは嗜好に稱はざること、及び斯く國民の性情を會得せざること

古傳說は全國到る處にあり、何れも人情自然の流露にして特に一人一家の私心を雜へず、單純にして無邪氣なる、まことに人を動かすに足れり。されど時移り人謝れば、古代のおのづからなる感情は何時しか失はれ、終には傳ふるもの恣に補綴するに到りて、その醇粹なるもの遂に傳はらず。甚だ惜しむべきなり。追分曲の如き其一例なるべし。

『恐路高島及びも無いが、せめて歌棄磯谷まで』——

關東以北の人ならむには、誰か是追分曲を知ざらむや、然れどそが何事を意味するかを知るものは、幾人かあるべき。追分曲は北海道江刺に初まると稱せらる、されど江刺の人だにその由來を語り得るもの甚だ多からずと云ふ。曾に其由來を語り得るもの少きのみならず、彼等はそを鄙びたる曲なりとして唱ふことを好まず。されば今日旅人の江刺に到るもの屢に故老に就いて是曲の純粹なるものを聞き得るのみなりと云ふ。傳說の湮滅する、何れの地も概ね是の如くならむか。

されど傳說には氣韻高く詩趣豐かなるもの甚だ多し、追分曲の如き實に其一なり。序なれば、試に其要を語らむに、音波島の國に女ありけり、是女の戀人後忍志路

民族傳說の蒐集

吾人今の小說家に勸むべき一の事業あり、民族傳說の蒐集是れなり。是には二個の理由あり、一は民族傳說の保存の爲に、一は小說家をして國民性情を會得せしめむが爲に。

我邦にては、勇者の物語即ち獨逸語に所謂「ヘルデンザーゲ」こそ博く知られたれ民族の傳說即ち「フォルクスザーゲ」と云ふべきものは未だ研究せられざるなり。言ふまでも無く是種の傳說は、民族自然の一產物なれば、大にしては一般國民の特性是によりて知らるべく、小にしては一國內に於ける各地方の民情亦是中に現はる。文學者が研究の對象としては頗る趣味多く、實益饒多なるものに非ずや。且つ是の如き傳說は、特に今日に於て蒐集保存するの要あるを見る。そは今の時勢國民人文の急劇なる變遷期なれば、前代の古老是世を去るに隨ひて、如上の傳說亦は多少湮滅せらるゝの恐あるべく、又湮滅せられざる者も、思想の轉遷に應じて著しき變化を免れざるべければなり。

發達し來れるなり。さるを如何ぞ今日に及ぶも尙ほ其過去の原因に溯り、普通教育中にだに漢文其物を教授する謂はれやある。多數の漢字は其名は漢字なれど同時に日本字なり、猶歐羅巴の國語中に希臘羅甸の古語に基けるものあるが如し。されば我邦人の漢文を見るや、猶ほ英佛獨諸國の羅甸希臘語を見るが如かるべし。希臘羅甸の古典籍中には、歐羅巴人必讀の書少からず、それ等は何れも其國々の語に譯され、特に古典學者に非ざれば其原書に就て研究する樣のことあらざる也。我邦にては普通教育中に漢文を必修科とす。畢竟是れ漫然として古來の習慣を因襲せるもの、無意義も甚だし。今は方に是誤解を擺脫し、漢文に就て新態度を取るべき秋に非ずや。

或は書き換への實行に就て疑を挾むものあらむ。されど政府、人民共に是を斷行するの意志だにあらば、極めて容易なる事なるべし。又吾人の書き換へを希望するものは、獨り漢文のみにあらず、日本の古典中にも多々あり。是等は茲に說くの遑なし、唯一言の注意に止めむ。

（三十一年九月）

是の書き換への旨趣は、一言すれば、從來は漢學者ならでは知り難き事柄を漢學者ならぬ人にも知らしむるにあり。以上の方法にて、古來和漢の漢文書を書き換へたらむには、一通りの漢字をだに知らば、其事柄を知るに毫も支障無かるべし。隨て普通教育にて、難解の漢文科を以て、一般生徒を困むるの要もなかるべきなり。吾人は是を以て、國字改良案を確定し且完全に實施せらるゝまで、不便なる漢文漢字の補充策として、最も簡易にして、且有効なる方法なりと信ずる也。

次に一言注意すべきは、是方法が漢文の研究を全然杜絶する者に非ざると也。文學研究家等が、例へば支那詩文の妙味を味はゝむと欲せば、其事柄のみならず、文體辭令を知るを要するが故に、原文に就かざるべからざる事勿論也。唯漢書中に含有せられある事柄を知らむと要する人の大多數は、文學研究家の類に非ざるが故に、是人々の爲に簡便の方法を案じたるのみ。抑々漢文は我邦にとりては他國の文章なり。支那の文物が我歷史上、文學上に及ぼせる影響は、今更言ふまでも無き事也、而かも其影響の原因は、過去の事に屬し、今日存在せるにあらず。支那文學が國文の上に有したる勢力は、國文の中に同化せられ、其形も體も、日本文學として

何となれば、是の二者は、何れも漢文と稱する一種の文體とは、何等必須の關係無ければ也。

吾人が漢文書き換へを主張するの必要是に於て愈々明白となれり。漢文を書き換ふる方法としては、吾人は左の數項を缺くべからざるものと思惟す。

一、假名交り文として直讀する事。

二、單に漢文の字句を襲用せずして其の解し難き語句は成るべく普通簡易の文字に書き換ふる事。

三、漢文に成れる普通使用の書籍を是方法にて悉く書き換ふる事。

漢文の解し難き一の理由は、其文字排列法にあり。是れ假名交り文とするの要ある所以なり。又中には單に邦文の排列法に書き換へたるのみにては、其語句解し難きものあるべし。是れ等は審に其意を取りて、更に平易なる他の文字に書き換ふるの必要あり。又茲に謂ふ所の『普通使用の書籍』とのみにては、意義明確ならざれども、漢文の專門學者ならぬ人に要用なる書籍と云ふを大體の標準とし、實際事に當る時、特に精しく詮考せば、敢て不可なかるべし。

會せしめ、又作文の資料に供せむが爲に、多く用語を知らしむを目的とすれども、其卒業生の實際に就いて見れば、決して是の所期の目的を達したりと云ふを得ず。其漢文の知識の幼稚なること、英語のそれと擇ばざるの有樣なり。而して尋常中學に入らむ程のものは、敎育の初期より已に多少漢字の敎養を經たるものにして、尙ほ中學內に於ても其五學年を通じて每週三時間を配當せるなり。斯かる有樣にても、漢文の知識が爾かく缺乏せるを見れば、如何に其修得の困難なるかを想見すべし。こは單に敎育上より見たるものなるが一般實用上の不便も萬々推量すべきなり。

扨て支那文學、又は歷史等に關して、特殊の研究目的を有する人は暫く措き、一般國民は何が故に漢文の理會を須要とするか。是問題には二個の答案あるべし。古來漢文にて書き記されたる事柄を知ること、一也。作文の資料に供せむが爲に用語を知らむこと、二也。（茲に所謂漢文にて記されたる事柄の中には、古來和漢の道德の敎、法制、歷史の事其他種々あるべし。）若し是の二個の答案にして是問題の解釋の大部分を盡したりとせば、是目的の爲に特に漢文を習得するの要なかるべし。

全く從來の文字と交代し了るまでには、果して幾年を費やすべき乎。學者の中には歐洲諸國の例によりて、是交代の案外に迅速なるべきを說くものあれど、吾人は我邦文字の性質上、頗る多數の年所を費やすべしと想像せらるべき幾多の事情の存するを認むるなり。されば、漢字を今日のまゝに放任せむには、是長年月の間も亦多少其不便を忍耐せざるべからず。是不便を補充するの道他に存せざる乎。是れ吾人が漢字書き換へを主張する第二の論點なり。

漢字が實用上にも、又敎育上にも、不便至極なることは明瞭なり。漢字其物の不便なるに隨れて、それより組立てられたる漢文の解し難く誤り易きは、言ふまでも無き事なり、設令ひ一わたり漢字の知識を有したりとも漢文の書籍を讀まむには他に別種の素養を要す。且本邦人の手に成れる文章は比較的に體制略々等しく本邦人にはさまで解し難からざれども、支那人の手に成りたるものは、時代及種類の異なるに隨ひて、文字の使ひ方一ならず、上代に遡るに隨ひて、愈々其難澁を增し來る。されば、一通りの漢籍を解し得む程の人は、今日にありては漢學者と呼びて差支無き程の人々なり。今の中等敎育の漢文科は、其生徒をして普通の漢文を理

あり、左に鄙見を陳して世の識者に訴へむ。

吾人の意見は、一言すれば、國字改良に先ちて漢文に成れる重なる書籍を普通文に書き換へよと言ふにあり。

國字改良は、國家永遠の利害に關する一大事業にして、其の必要なる事言ふまでも無し。世上の學者諸君の十分の熱心によりて、是大事業の完成を一日も速く見むことは、吾人の萬々希望する所なり。否吾人は之を全く國家的事業として政府の手に移すも敢て不可なかるべしとさへ思惟するなり。されど飜て思ふに、國字改良案のいよ〳〵一定して其實行に着手し得るは果して何れの時なるべきや。吾人は決してそを無期限なりと思惟するものに非ざれども、十年二十年にして是の運びに到り得べきや否やを危むなり。假りに是の着手の期を今後三十年の後にありとすれば、其れ迄は漢字を今の儘に据へ置き、それより生ずる一切の不便を甘受すべきか、又は他に是不便を補充する方法存せざる乎。是れ吾人が漢字書き換へを主張する第一の論點なり。又假りに今後三十年に到りて國字改良方案一定し、出來得る限りの有効なる方法によりて、其換用の實行に着手せりとするも、そ

漢文を書き換へよ

國字改良と漢字書き換へとの關係 ── 漢字書き換へに對する二個の論點 ── 漢文の困難 ── 書き換への二方法 ── 普通教育に於ける漢文の不必要

國字の改良は、一世の輿論と見做すも、過言に非ざるべし。扨て是を如何に改良すべきやに就いては、學者各々見る所を異にし今日尚ほ一定するに到らず。但し羅馬字代用を主張する者も假名文字專用、若しくは改作を論ずるものも、又は新國字制定を說くものも、漢字の不適當を認むるの一點に於ては其意見相同じきが如し。然れども、良し漢字は全廢し得べしとするも、そは是に代るべき文字の一定に伴ふべきこと勿論なれば、國字改良の方法にして定まらざる間は我國民は依然として漢字より生ずる一切の不便を忍ばざるべからず。是れ吾人の一考すべき所に非ずや。吾人は此問題に容喙するの資格あるものにあらず、其の見る所或は專門學者の一嘲を買ふに過ぎざらむも知るべからずと雖、一片の婆心默し難きもの

美術は美術也。是を批判し鑑賞するものは我に外ならず。美術の客觀的價値素より是れ無かる可らずと雖も、是を鑑賞するの我れ、亦相當の修養を缺く可らず。美術の衰頽せる時代にありては、特に是要を見る也。

一石一木も、多感なる詩人の眼に映ずれば、是れやがてラファエル、ムリリョの美術なり。獨逸の一偸夫曾てドレスデン畵堂にチチアノがエヌス神像を見、以爲らく是れ我家の妻の抱擁し得るに如かずと。夫の美術を樂むものは、身亦少くとも手腕なき美術家ならざるべからず。今の人他を責むるに急にして、己を顧みること少し、是れ美術の幸福を享受する方法を解せざる者と謂ふべし。

昔者ハイヂの多才を以てして、尙ほ且フヮウストを解する能はず。『是れ惡魔作詩の奇談を有する舞踏歌に過ぎざるのみ』とは彼れの常に言へる所なりき。フヮウスト無く、チチアノの望むべからざる今の日本にありて、大美術、大詩歌を樂まむと欲するものは、自らムリリョたりゲーテたる外無き也。

（三十一年九月）

想ふに今の滑稽小説の作者は、多く近代佛蘭西の輕薄なる喜劇を踏襲して其弊を覺らざるものに非ざる乎。

吾人が讀みし沙翁の喜劇の如きは、決して是の如く卑陋なるものにあらざる也。其人物は紳士なり。淑女なり。彝倫風敎の中にありて、其矩を超えず。良しや、皮想の笑謔、人を倒絶せしむるもの無しと雖ども、人生の滑稽的方面は、其凡ての品位價値を傷くること無くして、吾人の眼前に呈露せらる。潜に思ふに蓋し是れ滑稽の上乘なるもの乎、言ふまでも無く滑稽の趣味は、時代と共に移れり。今代の英吉利人は最早や沙翁の喜劇に笑はざるべし。然れども常識なき、品性德行なき、若くは瘋癲白痴に近き人物は、何れの時代に於ても上乘なる喜劇人物たるを得ざるべし。

聊か文壇の近時に感ずるあり、記して世の滑稽文學の作者に告ぐ。

（三十一年九月）

るものあり。

古の人以爲らく笑は其人の品性を表はすと。是一語太だ翫味するに堪へたり。吾人熟々今の所謂滑稽文學を見るに、何ぞ其笑謔の卑くして墮しきもの多きや。是の如きは、果して能く我民性の特質に應じて其の宜しきを得たりと謂ふべきものか、日本國民の品性はかゝる滑稽趣味を歡迎する迄に賤しき乎。吾人は否と答ふるに躊躇せざるべし。

今の所謂滑稽文學に描く所、多くは常識以下の人物なり、品性なく、德行なく、時としては殆ど瘋癲白癡に近き人物なり。其の上乘なるもの、尙故らに滑稽の爲に造られたるものに過ぎず。かゝる人物の笑謔を見、其品性の侮辱せられたるを感ずる事無くして、眞に其滑稽を歡び得るもの、果して幾人かあるべき。人生笑ふべき事は、往々尤も嚴肅なる事實と相隣す、是を以て偉人正士も尙ほ喜劇中の人物たるを妨げざるなり。若し今の滑稽文學中の人物より、其滑稽的分子を取り去らば、殘る所何物ぞ。是の如きものコメデーに非ずして寧ろファルスのみ。吾人はそが大坂にはか」と相距る甚だ遠からざらむを恐るゝ也。

嗚呼青年事をなす亦難い哉。窮厄の後には希望あり而かも小成の蔭には誘惑あり。是を以て意滿ち氣盛なる時に當りて、薄志弱行の徒、往々其道を誤る、古より然り。眞に恨事とすべき也。想ふに蘇峰は一世の才人、且尚ほ春秋に富む。一雜誌の興廢、彼れに於て何かあらむ。若し務めて丈夫の志を養ひ、國士の節を守り、砥礪切瑳怠らずむば國家尚ほ彼れに待つ所多々あらむ。蘇峰たるもの務めよや。吾人平生彼れに言ふ所、語甚だ朴なりきと雖ども、意は甚だ眞なりき。今に於て彼れ尚吾人の言に聽くの意無きや否や。

（三十一年九月）

滑稽小説の作者に告ぐ

近時の文壇に滑稽的分子の漸く加はり來れるは、著しき現象なり。小説には滑稽小説連りに現はれ、劇場には滑稽劇連りに演ぜらる。兎にも角にも是一生面の開拓せられつゝあるは、我文壇の慶事なりと謂ふべし。

厓に呱々の聲を擧げたりとも見るべき是の滑稽文學に關して、とかうの注文を述べむは、聊か其前途の發達を沮害するに似たりと雖ども、是際一言の注意を要す

文壇に現はれしや、一世の耳目爲に新なるの觀ありき。吾人は未だ所謂平民主義が如何の影響を民心に及ぼしたりしかを審にせずと雖も、後世若し明治文學史を編述するものあらば、慥に彼れに於て其一大勢力を認めざる可らず。彼れは健全なる常識の鼓吹者なりき、熱誠ある信仰の把持者なりき、新島襄氏を以て楠正成に配したるは、慥に一部人心の固陋を覺醒するの力ありし也。而して彼れは是を行るに奇警明瞭なる文字を以てせり。實に時文の文體を一變するに於ても、亦彼れは、慥に一大勢力たりし也。

爾來幾春秋吾人は多く彼れに就て言ふを好まざる也。兎にも角にも彼れは社會と共に生長せり。而して是が記者德富蘇峰の名は、青年一派の景仰する所となれり。設令ひ蘇峰近時の出處と進退と甚だ明ならずとするも、設令ひ其平民主義と熱誠ある信仰とは烟の如く消え去りたりとするも、設令多くの人は彼れに於て失望せりとするも、雜誌國民の友は其の十年の比較的に成功あり、光榮ある歷史を帶びて尙ほ優に社會の一勢力たるを失はざりき。彼れ今や則ち亡し、吾人實に之を悲む也。而して殊に事是に至りたる所以を惜悼す。

共に沈みぬ。

げに哀れなるえにしならずや。柵けはしき流れにはいくその悲しみをや止めけむ。いのちの外の命を夢むる花の心には、ざせる悟りのあるべくもあらず、はかなき誓ひにもゝとせの恨を殘すこそうたてけれ。そも恨みと見るは心なき人のこゝろなる乎。希くは彼れを許して泣かしめよ。人生の望みは何れか葉末の露に宿れる月影にたゝふべからざる。風そよぐあしたの野邊に跡もなきげに陽炎の定めなきさだめを如何にすべき。良しさらば暫く吾れをして『一葉舟』を讀ましめよ。

あゝ吾れ何事を言ひたる乎。讀む人の心乎、讀まるゝ人の情乎、吾れ知らず。あゝ吾れ狂せしに非ざる乎、非乎。

（三十一年七月）

『國民の友』を惜む

雜誌『國民の友』は去月を以て俄然として廢刊を告げぬ。吾人切に是を惜む也。回顧すればはや十數年の昔となりぬ。是雜誌が平民主義の旗幟を擧げて、我が

なるか。

童子釣を江畔に垂れて落花の情になやむ。花物言ひて人怪まず、人、心をよせて花去り難し。事既に甚だ奇なり。

ひそかに汝の姿をうかゞふに、この世に止ること暫くもせず、さけば落ち、落つれば流れ、何をか慕ひ、何をか追ふらむ。こゝろみにわが寂しき心をもて、汝の上に載することを好まずや。さらば汝はわれと共に流れ、われは汝と共に流れむ。

花はおぢたる氣色なく人は捨てがたき思あり。かくて『長途の草の枕を詫びて心の友にめぐり逢ひたらむやうに』花と人と一つの水に流れけり。

あはれむかしより盲目と傳へたるえにしのほども果敢なしや。かの花は瀬に乘りたりと覺しく、ずる〳〵と流れ行きけるが、忽ちうろくづのうちにからまり、あはれげに廻り居るにぞ、見れば眼も昏むばかりにて、いかにもして再び水に浮べむものと岩づたひに水に下りしが、今やさしのばしたる右の手のもろくもかの花にとゞかむとせしとき、古苔幾百年のさびに滑りて、童子は花と

あひみてのちはとこしへの
わかれとなりし世のなごり
かなしきゆめと思ひしを
われや忘れじ夏の夜半。

あはれなる蘇國の詩人もまたかく歌ひにき。友とは誰ぞや、誰か是れを言ふに忍びむや。

あゝあゝ清き白雪は
つもりもあへず消ゆるごと
なつかしかりし友の身は
われを殘して失せにけり。

失戀の詩人バルンスもまた斯く歌ひにき。友とは誰ぞや、誰か是れを言ふに忍びむや。

想へば白磁花瓶の一賦、まことに解し難し。されど世に解し得たらむ人だにあらば、涙は彼れにとりて貴しと謂ふべからじ。さるにても哀れ深きは『哀緣』の一篇

友のこのよのいのちなれ。

水際にさけるあやめよりも白き花瓶は、是の友のたくみより出でこしを、如何なれば戀のねたみありとは咄ちけむ。あまりに薄きえにしをば友が是の世のいのちぞとは、そも何のこいろぞや。

をとめごいろをしら珠の
藏とは友の見てしかど
實の胸をひらくべき
戀の鍵だになかりしか。

眞珠の藏にも喩ふべき、乙女の心を開くべき鍵は、友不幸にして有たざりき。昔しエルテルの悲みには、戀すべき時はありしかど、戀すべき人はあらざりき。戀すべき人はありしかど、戀すべき道はあらざりき。彼れの胸の小暗き隅には、ねたみの蛇蟠まりて、或時は友なる戀人の胸にまつはりき。今や乙女の胸は鎖されて、それを開くべき鍵もなし。あゝ果して戀無かりし乎、戀する人の無かりし乎、將た又戀する道のあらざりし乎。

の詩を解するの道に非るべし。されば藤村に於て吾れの言何かあるべき、況むや讀者に於てをや。

されば『一葉舟』の吾れに於けるや、藤村の意を得たると得ざると吾れに於て亦何爲するものぞ。希くは暫く吾れをしてバルンスの詩を觀るの眼をもてそを讀ませよ。あゝ斯く思はしむるは讀む人の心なる乎、讀まるゝ人の情なる乎、吾れは知らず。唯如何なれば我が心を動かすことのかくはあやしうもむつかしきや。

にごりをいでゝさくはなに
にほひありとなあやしみそ
光は高き花がめに
戀の嫉妬もあるものを。

命運（さだめ）をよそにかげろふの
きゆるためしぞなきといへ
あまりに薄き緣こそ

半は、メリーが爲に堪えがたき哀悼を示せる生ける墓標なりしなり。

彼れは娶れり。されど樂しき人生は歸らざるべう彼れを去りぬ。其の妻なる人の記錄によれば、メリーの死より三週年に當る或日の夕べ、彼れは何事をか思ひ惱みたらむ如く、其の蒼白き顏には涙さへ流れたるが見ゆ。妻問へども物言はず靜に一室に垂れこめて其の夜を泣き明しぬ。曉早く庭園に出でけるを、妻なる人の窺ひしに、秋の夜寒むに草葉の露ふみしだき、悄然天上を仰ぎ見て長嘆息せるもの多時、家に入り直に紙筆を命じて書き綴りしは即ちこゝに謂へる『天上のメリーに』の一篇なりきと傳ふ。

吾れをして他を言ふものと爲す勿れ、藤村が『一葉舟』を讀みて、先づ我が胸に浮びたるはバルンスが是の詩篇なりき。あゝ希くは我れにその何故なるかを問ふ勿れ。そも〳〵斯く思はしむるは、讀む人の心なる乎、讀まるゝ人の情なる乎。世には往々文字を解するの道、一にして足らざる事ある也。

あゝ今にして吾れ藤村を解するの法を得たりと云ふべきか、希くは吾れに其の法如何と問ふ勿れ、恐らくは是れ吾が一家の法ならむのみ。凡ての人依て以て人

其戀人の胸を引き裂ける歎の聲を如何に聞くらむや

歌は是數行に初まりぬ。彼れはアイル河のほとり、綠深き夏の杜影に、命を限りの永き別れとも知らずして行末かけて盡きぬ名殘を惜みたり。

風香はしく、鳥の聲聞こゆ。美はしき菫花は咲き匂ひて、水の流れに歌ありき。

二人は左右の手に聖書を取り交はし、神の御名によりて永遠の愛情を誓ひたり。かくてベルンスがメリーに與へたる聖書には、自ら筆を取りて、利未記十九章の『汝等わが名を指して僞り誓ふべからず、また汝の神の名を汚すべからず』と云へる語と、馬太傳第五章の『古の人に告げて僞りの誓を立つること勿れ、汝が誓ふ所は必ず主に遂ぐべし』と云へる語を書き記し、互に涙ながらに其の手を握りたりき。されど是の誓を遂ぐべき時は、遂に二人の間に來らざりき。メリーは幾も無く是世の人ならずなりぬ。

年毎に夏の綠は濃うなりまさり、アイルの河のほとりには、風香はしく、鳥長へに歌へり。

失戀に心を傷りたる憐れなる詩人は、幾度か是の永訣の地にさすらひて、懷舊の涙に咽びしが、忘れがた無き思ひに、胸は常に新たなる痛みを覺えぬ。

水流れて底深み、年經ちて哀み增されり。

彼れが短かき生涯の終りの

滿足すべしとする乎。例せば生理學、病理學乃至生物學の如きは、人格の犧牲に依りて多々の利便を有す。吾等は公益の爲に是を認容すべしとする乎。但しは美術に限りて人格の毀傷を許容すべき特別の理由ありて存する乎。

吾等は西洋畫家が是質疑に答辯せむことを希望す。

（三十一年六月）

たそがれの辭

（一葉舟を讀みて）

吾れバルンスが詩を讀み、『天上のメリーに』と題する一篇に到る毎に、未だ曾て怨を掩ふて哀哭せずんばあらざるなり。——

あはれ曉の星の光ぞ心無き
我がメリーの昔の今更に忍ばるゝ哉
嗚呼メリーよ世を去りしいとしのものよ
今は何處の空にお在するぞ
汝の戀人が斯くもやつれし姿を如何に見るらむや

那威のピ■ルンソン氏、例のドレーフュー事件に關して書をゾラ氏に送りて曰く『子は是れ人道の爲に戰ひたるもの、世界萬邦は縲紲の間に子の光榮の八表に擴がるを瞻視せむ』と。吾人は實にゾラ氏の自信と勇氣とに敬服す。（三十一年四月）

疑問

吾等は裸體畫に關して幾多の疑問を有す。

第一、裸體畫を自然美中の最高なるものとするの理由何處にある。

第二、人體が自然物の最高なる發達を遂げたるが爲に然りとするは、美學上に幾何の根據かある。そも〳〵人類の美的意識はかゝる單純なる立言によりて規定せらるべきものなる乎。

第三、裸體美術の爲にするの外、裸體のモデルに幾何の用ありや。裸體美術を離れても、美術家は何故に裸體のモデルを須要とすべきなる乎。

第四、若し婦人の人格を毀傷しても猶ほ美術の要求を滿足すべきの理あらば、他に人格の犧牲によりて少からざる利便を感ずるの事實に對して等しく其希望を

利器は是を小兒に貸すべからず今の社會は新聞紙てふ利器を小兒輩に貸しつつあるに非ざるか。社會は其進歩と幸福の爲に其耳目を有せざるべからず其木鐸を有せざるべからず。輿論代表者と事業の監視者と將來の指導者とを有せざるべからず。而して是れ皆新聞紙の役目に非ずや。吾人は今に於て新聞記者の資格を檢査し適當の方法を設けて夫の小兒輩が是利器を擁するの道を杜絶せざるべからざるなり。然らざれば是を貸與したる社會は却て其の傷害する所とならむ。

試に是目的に對する吾人の私見を述べむか。政府宜しく適宜の方法によりて夫の辯護士試驗と均しく新聞記者に對して其資格の有無を檢査すべし而して是檢査に合格したるものに非ざれば記者たることを得ざることゝなすべし。

吾人は社會の公安秩序進歩幸福と密接の關係を有する新聞記者の資格を規定するは、國家須要の一事業なりと思惟するものなり。

（三十一年四月）

ビョルンソンとゾラ

會の木鐸輿論の代表者と稱するを得るか。

新聞記者の事業の眞價値を表白して尤も明なる例證は、蓋し書籍の批評ならむ。一讀私情の好惡に任せて褒貶し去るものは彼の批評の上乘なるものなり。多くは其書を讀まず若しくは讀みて而して解する能はず、漫に序例目次の中より都合の好き文字を捃摭補綴して其書の性質となし、終りに一二賛否是非の盲斷を附するのみ。是を以て知者より是を見れば殆ど兒戯に類す。是の如きは豈社會の木鐸を以て自ら任ずる者の所爲ならむや。

吾れは敢て今の新聞記者の凡べてが是の如き輩なりとは謂はじ。唯其多數に就て概見する時は何人か吾が言を否定し得るものぞ。劣等新聞に於て殊に是事實を見る。是の如き記者によりて書かるゝ新聞が、品位なく、價値無く、隨て社會に勢力無きは、寧ろ自然の事なるのみ。實に今日の新聞紙中其二三を除かば多少の尊敬と信用とを以て讀まるゝもの有らざる也。あゝ彼等の多くは、新聞紙が當に有すべき品位と價値と勢力とを有せざるは勿論、却て一個の社會的玩具として喜ばるゝの迹無きか。而して其病源は主として記者の資格の缺けたるにあり。

に虚無く、偶文筆の才を挟で茲に一時の生を寄する者のみ。是に於て其行や往々にして屠沽穿窬、外天下の義を唱ふるも内一人の責を盡す能はず、朋友是を捨て、知人之を去り、而して己れ獨り義を天下に行ふと稱す。是を以て知るもの皆其言を嗤笑す。今の新聞記者の中是の如きもの決して尠からざるなり。彼等は特に發せざるべからざるの主義あるに非ず、唯私己の利害によりて其言を左右するのみ。彼等は其の新聞記者たるの位地を利とし、曲辯舞僻、睚眦の怨と雖ども報せずむば已まず、甚しきは匿名の記事は責任の所歸を明にせざるに乘じて、毫も中傷讒諛を意とせず、飜て私交私利の存する所に向て諂諛媚悦到らざる所無し。

是の如きは尚ほ恕すべしとせむ、而かも彼等が無學と無識とを以て社會國家の事に容喙し、一系の主義、不拔の所信の内に存するに非ずして時に隨て倖々の辯を弄ぶ。識者の立言も往々是輩の囂々に蔽られて、民心の歸向を示めすに由無し。是故に實際事に當るもの亦重きを新聞紙の所説に措かず、概ね空言疎談として顧みざる也。加ふるに今の所謂輿論と稱するもの、亦是輩二三者の私言に基くもの多く、國民を舉げて殆ど門外漢たるの奇觀あり。嗚呼是の如くにして尚ほ且つ社

庭以外の宣告なり、彼れの主張は法律以外の法律なり。個人も、社會も、國家も或意味に於ては彼れの監督の下にあり。あゝ誰か新聞記者の業務を大ならずと謂ふか。本來斯くの如き大いなる勢力を有し、斯の如き大なる業務に當れる新聞記者が、爾かく我が今の社會に貴まれざるは如何にぞや。其因緣種々あるべしと雖ども、記者の側より是を見れば其資格に於て缺けたるもの多きこと其の主要なる原因ならずむばあらず。そも〳〵其才に非ずして其位に在るものは亂す。吾れは今の新聞記者に於て是を見るなり。

素より今の新聞記者の中には、其學、其才、其德、一世の木鐸として恥しからぬもの無きに非ず。然れどもこは寧ろ例外のみ。彼等の多くは決して社會が安じて其監視の任を寄託し得るの器に非ざるなり。彼等の紙上に論議する所を見れば、往往其の說や高く、其筆や壯、或は一世の豪傑を兒撫して眼識古今に曠く或は天下の公義を唱へて名利を見る土芥の如し。其の言ふ所を聞けば皆曰く、我筆は主義に據て立ち、正理に依て動く。遠く之を望めば風丰卓犖、眞に一代の國士なり。然れども裏面に入りて其人を見れば、多くは是れ職を江湖に求めて而して身を容るゝ

新聞記者の資格

今の世に於て、當に貴まるべくして而して貴まれざるもの多きが中に、新聞記者の如きもの蓋し稀なり。

おしなべて新聞記者とし云へは、聞く者の心には直に諸種の惡德を聯想し、敬して遠くるが今日の有樣なり。彼れは何故に爾かく賤められるゝや、賤められざる迄も何故にしかく貴まれざる。是れ甚だ訝かしき現象に非ずや。

若し夫れ其の執る所の職業を以て見れば、彼れは常に社會の耳目なり、或場合に於ては木鐸なり、社會一切の批評家なり。所謂社會の良心は彼れによりて代表せられ、其制裁は彼れによりて行はる。彼れは又議院以外に於ける行政立法の監視者なり。彼れの聲は國民の名により傳はり、彼れの褒貶は輿論の聲として聞かる。彼れの一言一句は口より口に、胸より胸に、陸を踰へ水を渡り、風の如く、雨の如く、瞬く間に四方に擴ごるなり。義しきものは彼れの音を聞きて其の孤ならざるを喜び、邪なるものは彼れのおもてを觀て其眼に觸れむことを恐る。彼れの是非は判

りたるものゝみ。是れ詩歌美術の弊害の一面なり。是を以て吾人は美感の修養と共に其れと實感との間に截然たる區別を自覺せむことを要す。

慈善は美なるべし、博愛亦更に美なるべし、貧民の救濟の爲に國家を亡ぼす、更に多く美なるべし。然れども美なるもの必ずしも善に非ざるなり。若し美感を規準として見れば、印度帝國或は一沙翁よりも英國にとりて貴からざるなり。米國の富と力とは或は自由戰爭の血潮よりも願はしからざるなり。國家を滅し帝王を廢して自由平等の原野となす、美なること幾何ぞ。更に亡國の殘墟に月夜感慨の詩人を現じて、其運命を歌はしむるは、煙突林立し汽笛耳を聾する灰塵萬丈の市街よりも如何に遙に美なるべきぞ。

然れども美は樂むべきものにして行ふべきものに非ず。宗教、詩歌、小說は人の美感に基く、是を移して實世間に擬するに及びて往々方枘鑿の弊を見る。夫の內村氏一派の思想が幼稚なりとの評あるは、畢竟世界を詩歌と觀じたるの弊に坐す

(明一年三月)。

り。些々たる慈善は彼に於て何かあらむ。國家の利害を犧牲として是婦女子の私情に殉せしめむとするが如きは、眞正なる大和民族の性情にありては思ひも寄らざるなり。

吾人は魯西亞の偉大なることを以て亞歷山帝が四千八百萬の農奴を解放せし時に存せりと思惟する能はず。スラヴ人の歷史は一個の侵畧尙武的國民として彼等を證す、農奴の解放の如き彼等にとりて一大連灣の占領よりも多く住心する所に非ざらむ。是の如き事を以て魯西亞の偉大となすは十九世紀に於ける國家國民の幸福の何者なるかを解せざる腐儒詩人の空想のみ。

吾人は我邦有爲の學者にして是腐儒詩人の空想を喜ぶものあるを見て深く嘆惜の情に堪えざる也。

國家は實在す、空想にあらざる也。

詩歌の誘惑

斯かる空想を樂むの弊は、畢竟美感の誘惑に遇て知らず識らず實感の領域に彷

部國民の無能と詐欺を容るゝ能はざるか。是の如きは殆ど小兒輩の言に類す。深く咎むるを要せざる也。

獨り貧弱者の爲に盡す事業の多寡を以て國家の大小を規定せむとするは腐儒詩人の空想。是の如き道德主義を以て本邦現時の青年に鼓吹せむとするに至ては吾人玆に一言無き能はず。

國を建つるの目的何處にある。國民の幸福を保全せむが爲に非ずや。國民の幸福那邊に存す。國民性情の滿足に外ならざるなり。國躰と謂ひ國性と云ふも、畢竟是國民性情の自然の結晶のみ。

世に若し國家を倒して慈善の資に充て、以て其性情の要求を滿足し得べき國民あらば、亡國は是の如き國民にとりて却て幸福ならむ。吾人復敢て是を憐まじ。所謂美的空想に眩惑して、國家民人の意識を顧みざる腐儒詩人の輩往々斯かる思想を樂む。詩歌小說として是を見る則ち可、以て我帝國の道德主義に擬す、水中の月を探りて却て水に溺るゝ者に非ざるか。日本國民は生々の國民なり、進取尙武の國民なり國民の強盛と威名との中に初めて各個の滿足を見出し得べき國民な

『萬國無比の國躰を有する日本に、無能貪慾薄情なる貴族の存在すべき理由ある無し。世界の君子國に詐欺師に類する紳商、博徒に類する實業家の跋扈する理由ある無し。敢て忠君愛國を以て誇る大方諸先生の教を請はむ』。

是の如きは萬朝紙上に連りに正義と人道とを揚言する內村鑑三氏が近時の言論。事實を扞けて自ら媚悅するは吾人素より取らず。但し自己の美點長所を負うて自ら矜持する事は個人としても國家としても極めて必要なる事と思惟す。吾人は他の公平なる批評に對して自家の研醜を知らむことを利とす、唯偏に他を擧げて自ら抑へ專ら自己の醜所短所を中外に夸揚するを以て大國民の風度となすが如きは、吾人遂に其の可なるを見ず、抑も亦時勢に盲なるもののみ。吾人を以て見れば眞に時勢を知るものは必ずや我國民の自尊心の愈旺盛ならざるを憂へむなり。內に自ら負ふ所無くして而して外に其の大を致せしもの未だ曾て是れあらざるなり。個人然り國家然り。自ら抑畏して而して他の威重を獲たるもの古今東西何れの處にかある。個人然り國家然り。

君子國とは全國民を擧げて君子なるの謂に非ざる也。萬國無比の國躰は其一

もの、批評家の萬言は著作者の一字に及ばざること多し。今の作家が社會嗜好の改進を以て自己の取業に非ずとするものは、是れ自己の責任を沒するものはり。人は進歩の動物なり、最も巧に進歩の動機を催進するものは即ち最も成功するものたる也。

作家自衛の法亦是理を出てず。

(三十一年三月)

實在と空想

『日本國一名、是を君子國と稱す。然るに今の日本に一人の君子無し。伊藤博文侯は大政治家なるべし、然れども君子に非ざる也。濱野茂君は大實業家ならむ、然れども君子に非ざる也。日本は寧ろ才子國、不正鐵管國と改稱するの必要無き乎、』

『偉大なる事業とは貧者弱者の爲に盡す事業を云ふ。英國の大なるは其の印度帝國を有する故に非ずして、其の黒奴の賣買を廢止せしに依る。魯國の偉大なりしは西比利亞を其領に加へし時に非ずして、其の亞歷山帝第三世の時に當りて四千八百萬の農奴を解放せし時にあり』。

老人時代將に去らむとす。幾多の懷舊談は彼等の墓標に非ずや。青年時代の曙光は既に東天にあり、頭を回らして徒に悲愁の色を作す勿れ。

作家自衛の法

所謂清貧は其名美にして其實甚だ然らざるは吾人是を認む。唯文士其文を貴ぶこと錢に過ぐべからざるを想ひて清貧の亦時に已むを得ざるを言ふのみ。

文學は人生の幸福に於て缺くべからざるもの、文士をして貧に泣かしむるは眞に社會の恨事なり。但社會好て是を爲すに非ず、其の實際の得失に於て眞に止むを得ざるものあればなり。

されば是の悲むべき狀態を改善するの方法は、文士と社會と互に力めて計畫せざるべからず。吾人を以て是を見れば是の主要なる方法は畢竟社會に於ける文學嗜好の修養にあり。而して是文學嗜好の修養は主として敎育の普通に伴ふと雖も、文士が其著作の實例によりて之を觀誘助長するの一事亦極めて重要となす。嗜好を作るものは作家なり、評家に非ざるなり。嗜好は素其性に於て具躰的の

摩の言のみ。血と涙とを以て是問題を解かむとするものは誰れぞ。』

嗚呼是れ文壇にて聽かるべき最も悲しき聲に非ずや。而してこの聲を評者と作者とを兼ねたる『新著月刊』記者の口より聞くに到ては吾人は滿腔の同情を禁ずる能はざる也。

然れども品性を說き、淸貧を說くを以て、強ちに情を矯めて自ら強うするの言なりと思惟する勿れ。吾人は實に血と涙とを以て是問題を解せむと欲す。而れども品性と淸貧とを外にして文士世に處するの策を畫する能はざるを悲しむ。

詩人唱はず

今の所謂詩人の唱はざるは詩興到らざる爲乎。今の所謂詩人が筆を小說に染むるは自ら小說家の才あるを認めし爲乎。天來、天遊、桂月、藤村、久しく聲なし。民友社の『抒情詩』連今はた何處にありや。嗚呼詩人は流行すべき者に非ざる也。

老人時代

資格あるべき、今の作家は果して人生世界の己よりも小なることを認め得たるか。吾れは再び言はむ、彼等の笑は賤婦の笑なり、蕩兒の笑なり、世を知らず人を解せざるものゝ笑ひなりと。手を大海に狹み、手盡きて而して海亦盡くと云ふもの、其痴彼等に類せざるか。彼等の笑は、笑はれたるものゝ却て誇りとする所の笑なり。あはれ滑稽文學とは果して是の如きもの乎。

吾れは賤婦蕩兒にして世を笑はむとするものを惡む。佛陀の濟度、基督の救世は佛陀、基督の笑なり。死に臨みて笑ふものゝ笑は眞の笑なるかな。實にや品性の顯はるゝ、笑より甚しきは無し。吾れは今の所謂滑稽作家に一番の猛省を乞はざるべからず。

（三十年十二月）

最も悲しき聲

「生存と理想とは同處すべくして而かも往々相害す。市らむか、品位を如何せむ、市らざらむか、生存先づ亡して理想何の所にか追ふを得む。嗚呼古今東西の文士是苦境に泣かざるもの幾許ぞや。夫の品位を說き清貧を說くもの、多くは門外揣

や、其面に粉して其心に漆するもの、笑に非ずや。吾等は遂に模訥なる國民の中心より出づる笑の響だに聞かざるなり。況してや大人君子の笑をや、達人徹士の笑をや。

あはれ若し世界に萬能の神あらば、一切人事の遑々は遂に彼が一噱に資するに足るべきか。邦家の興亡、民人の生死、畢竟一齣の喜劇に非ざるべきか。大に笑はむものは須らく人世を笑殺すべし世界を諧倒すべし。數々屠沽の小云爲を以て事とするものは憫むべきかな。流石に沙翁は大天才なり、見よ彼れの笑ひたるものは人生なりき。人情運命に森嚴なる意義を認めたる間に彼れは一切の人事を一喜劇と觀じたりき、萬斛の血涙も遂に彼れが一噴飯に價せしに過ぎざりき。

あはれハムレットオセロ、リア王、マクベスと共に、Much ado about Nothing, As you Like it, All's well that ends well, comedy of Errors を書き得たる彼れは洵に希世の天才なるかな。滑稽文學は當に是域に達して初めて其極致を稱すべし。

吾れ敢て今の滑稽作家に告げむ。世を笑はさむと欲するものは先づ世を知らざるべからず。人世の小なることを認めたるものに非ずむば、爭でか是を笑ふの

自家趣好の現想中に鑄鎔し、洗錬す。故に情火燃へず、動もすれば冷刻なる思索に陷る。而かも一脈幽玄の詩趣、是れに依傍すれば覺えず人をして神往せしむるものあり。彼れが長所、短所共に茲に存す。吾等は晩翠がシルレルに私淑するを妨げず、而かも是に加ふるにゲーテが客觀的傾向を以てせば、其造詣必ずや今日に倍蓰するものあらむを想ふ。晩翠以て如何となすや。

（三十年十二月）

今の滑稽文學

何故に滑稽文學は我邦に出てざるや。是れ吾が今問ふ所に非ず。吾れは只既にあらはれたる滑稽文學に就きて大に恨み無き能はず。

吾れ之をゲーテに聞く、何物も其の笑ふ所のもの程、人の性格を顯はすは無しと。ヂデローも亦笑謔は趣好の試石なりと說けりき。實にや人は自己より大なるものを笑ふこと能はず、畢竟笑は自己の規準に照らして他の缺陷を認むるに基けばなり。嗚呼吾れ今の作家の笑ふ所を見て、大文學の出てざる所以に想到するを禁ずる能はざる也。彼等の笑は賤婦蕩兒の笑に非ずや、僞善者僞學者の笑にあらず

何ぞ其調の高くして想の深きや。近刊『帝國文學』に見えたる『登高』の一篇は、殊に勝れたり。

烟は沈み水咽ぶ
高きに登り佇めば、
心の空に吹き通ふ、
夕こそ悼め、夕雲に。

五城樓下の夕まぐれ、
遠く悲雷の響あり。
風の恨に誘はれて、
こもる思を神や知る。

十とせは夢かまぼろしか、
レーズの水は世に湧かず。
今はたこいにわれ一人、
染むと見えぬ秋の色に。

時の流は絶えれども
むかしの思忘られで、
夕日の前にたいずめば、
山々高し、水遠し。

想ふに晩翠は自然の詩人に非ざるなり。其胸は明鏡の如く萬象をありのまゝに映さざるなり。一念深く理想の境に往住し、其の對觀する所の一切、何れも主觀的潤色を帶びざるは無し。是れを以て夫の感興物に應じて起り、眞情露はし來りて直に人の肺肝を把攫するは彼れの長所に非ざるべし。彼れの物を見るや、先づ

詩人よ、君を讐ふれば、
雲に燈ゆる火の山か。
身を天上にとめおきて、
影を下界の塵に寄す。
詩人よ、君を讐ふれば、
光すゞしき夕月か。

晩翠の感情思想は、ともに現實を離れて理想界に到らざればやまず。其の歌ふ聲には常に言ひがたき高遠の氣こもれり。浮世の戀の果敢なきをかこちて、青春の心のやりがたきを怨むや、彼れ歌て曰く、

吹くや淋しき、ずさまじき、
幾世浮世の風のれに、
命の汀眺むれば、
寄するも憂しや老の波、

その仇波の寄せぬまに、
花のかんばせ星のまみ、
戀ゆる思と熱き血を、
そのまゝ共に消えよかし。

願ひむなしきとこしへの、
不變の戀よ、不死の美よ。
詩人の夢をいかにせむ。
みそらの幸を何とせむ

滄入江の春つげて、
燃ゆる畑に思想あり、
夜半の嵐に諫誡あり、
流るゝ川に言葉あり、
空行く雲に啓示あり、
人の心に希望あり。

彼れが理想とする詩人の歌を聞け

詩人

あらしのうちに樂を聞き
詩人よ、君を譬ふれば、
荒野の中に花を見る。
戀に醉ひぬる乙女子か。

口には神の聲ひゞき、
詩人よ、君を譬ふれば、
目にはみそらの夢やどる。
世の罪しらぬをさなごか。

おもてにあるゝ嵐あり、
詩人よ、君を譬ふれば、
衣にひそめる眞珠あり。
入重の汐路の海原か。

星は額にかゞやきて
畑の波は胸に湧く。

俤あることや。彼れは調に於ては藤村に及ばず、辭に於ては遂に羽衣に劣る。されども其想の高くして情の清きことは遙に是二者を凌ぐ。其辭は概ね明澄にして、而かも露骨に陷らず、唯其紆餘婉微の趣に乏しきを恨む。晩翠にして若し其語調辭藻に一振攝を加ふることを得ば、吾れは當世又彼れに前無きを疑はず。其の『帝國文學』に載せたるもの、『夏の面影』、『破鐘の響』、『希望』、『造化妙工』、『山おろし』の諸篇あり。今彼の特色とも見るべきもの二三を左に抜摘せむ。

沖の汐風吹きあれて、
夕月波にしづむ時、
空のあなたにわか舟を
ながき我世の夢さめて
心のなやみ終るとき、
墓のあなたに我魂を
嘆き、わづらひ、くるしみの
暗くも泣くか塵の子よ、
雨風いかにあらぶとも、

白波いたくほゆる時、
黒暗よもを襲ふとき、
導く星の光あり。
むくろの土に返る時、
罪のほだしの解くるとき、
導く神の御聲あり。
海にいのちの舟かけて、
浮世の波の仇騒ぎ、
しのべ、とこ世の世のにほひ。

の琴の俄に天地の間に千よろづの共鳴を喚起するの思あり。詩の力や測るべからず。あはれ夫の采を陳ね虚を裁て人を動かし得べしとするものは賣女のけはひなるかな。今の世の詩人と稱するものは幾何か賣女のけはひならざるや。友に好みて抒情詩人の閲歴を論ずるものあり、理を析き義を討ぬるや、一に卓上の空想に本づく。このごろ彼れ破鏡の嘆あり、恨み綿々として長く、俯仰只天地の悠久なるを悲む。嘆じて曰く先きの抒情詩人の閲歴は皆是れ僞りのみと。吾れは今の世の書典によりて人生を觀ずるものゝ僞善者の心を惡む。

吾れ藤村の調を取りて、其辭と想とを取らず。辭弱柔にして想は朦朧なればなり。吾れ羽衣の辭を取りて其想と調とを取らず。想は淺近にして調は單調なればなり。然れども想清く情まことなるに於ては、蓋又當代の詩人なるべし。吾れ人の是二人を稱するを妨げじ、唯怪む、何故に土井晩翠を言はざるかを。

晩翠は羽衣と共に世人の所謂大學派に屬す、而かも二者の風尚嗜好甚だ一ならず。羽衣は國文の學士なり、されど晩翠は英佛獨の文學に精通せり、其の半生愛吟口を絕たざるものシルレルなりと云ふ。宜なる哉、彼れが詩に到る處シルレルの

晩翠の詩

今の新躰詩人を言ふもの藤村、羽衣を擧げて桂月、天來のともがらに及ぶも、未だ一人の晩翠を說けるを聞かず。批評家の資格として好みて賞鑑の力を論へる早稻田派の人々だに、一言是に及べる無きを見れば、扨ては吾が眼識のあらぬかたに偏れるか。

吾はなべて今の新躰詩を讀むを好まず。そは情まことならざればなり。讀みて我が心を亂るのみなればなり。吾れ常に言ふ、夫の格調辭章の末節になづみて人を動かさむと思ふはやがて是れ僞善者の心にあらずやと。

さあれ、吾れは詩が人心に及ぼす力の高くして且深きものあるを疑はざる也。惱める時吾れを慰め、汚れたる時吾れを清め、よこしまの道に入らむ時、吾れを正しきに導き、暗の中に迷へる時吾れに光りを示す。若し夫れ辭麗うしして氣促れは、吾が血湧き吾が肉躍り、吾れは感激の熱火に煽がれて是世ならぬ人となる。更に又想深く、情なだらかなれば、一氣春の如きもの吾が心を充たし、常には寂しき我が胸

を備へたるに因る。第十三の初段、第十七の末節の如き、讀者をして覺えず兩把の汗を握らしむ。是一轉瞬は殆ど人を魅するの力あり、何等の妙手ぞ。唯重三郎がおもよに對して再三殆ど同一の訪問を反覆するは如何あるべき。おもよの性格は間然する無し。お近は作者の苦心したる所なるべしと雖ども、未だ美を稱するに足らず。作者がお近の放慢を以て死兒の記憶を攪擾せむとするの煩悶に歸し、幾度か其口を藉りて之を辨解せしは、吾人其の何の意たるを知る能はず。是際重三白眼の亡狀を以て其性格に歸してこそ、其の憎むべき所以の明瞭となると共に、力造の憤慨もおもよの苦悶も一層引立ち得べけれ。是を一婦人の自然の性情に歸せむはやがて全篇の感興を減殺したるものに非ずや。力造を呆痴として描かむは作者の目的なりしなるべし、然れども其動作は宛然として深謀遠慮ありて然るものゝ如し、如何。要するに是篇の妙は主として其結構に在り人物の性格はむしろ其次にあるものゝ如し。

兎に角『畜生腹』は柳浪及び當代の傑作なり。吾人は今年小說壇の末局に於ける一大掉尾として是の如き佳作に接し得たるを喜ぶ。

（三十年十一月）

專ら思を幽冥の境に馳せむことを務むと。宜なるかな、其作に對へば慘憺の氣隱々として人に迫るものあるや。人生素暗黑の一面あり、柳浪其夜陰孤燈の中より果して是一面を看透し得たりや否や。

『畜生腹』は慥に柳浪の傑作なり、近時現はれたる小說の中、吾人は紅葉の『金色夜叉』と是作とを推す。其文字の洗鍊巧緻に於ては遂に彼れに及ばず。されど、柳浪の作、感興汪溢、一氣直に下りて人の肺腑を把攫す、修辭行文の妙は蓋し彼れの意とする所に非ざらむ。殊に複雜なる事情を繰縱し、絲聯繩牽、巧に脚色を堪へ、又巧に戲曲的活動を躍如たらしむるの手腕に於ては當代誰か彼れに及ぶべき。唯寫情の深刻を求むるの餘、往々冗漫重疊の病に陷るは惜むべし。もし其辭藻に一段の洗刷を加へなば文情双絕の域に達する甚だ難しとせず。吾人『畜生腹』を讀みて殊に是恨あり。吾人の『畜生腹』に於て最も敬服するは、感興の一篇を通じて振張せられたることにあり。第十七章に於ける大昂揚に到達し、更に十八章の結局に至るまで、讀者の想像は緊々挈提せられ、心游情越、須臾も作中の人物と相離れず。是れ作者が人物性格の活動を寫すことの精撰なると共に、其結搆布置の戲曲的客觀素

やさしき涙ふりそいぐ
君の雨こそこひしけれ

心の闇路むれの星
こひの道芝ふみまよふ
短き夜のあけそめて
いとも露けき夏の朝。

風雲月露に托して情を抒ぶるは、小歌曲の事のみ。九十餘節の長篇を通じて是種の形容に充つ朦朧ならざるむと欲するも、得べけむや。

『四つの袖』は朦朧體の弊を極端まで演繹したるもの、所謂る擬古派の詩人は深く之を鑑にせざるべからず。

（卅年六月）

柳浪の『畜生腹』を讀む

『畜生腹』あゝ何にぞ其名の陰慘なるや。柳浪好て這般の題目を捉ふ、蓋し其性に近きものあるが爲なるべし。聞說らく、彼れ故らに其燈を闇くし、傍ら人を近けさ

君のほとりに漕ぎくれば
言にかへる我身かな

何ぞ夸大の甚しきや、形容も是に至りて其の弊に堪へず。

それもゆめかよ數ふれば
こひの初峰そでの淵
おもひの川の一葉舟
涙の谷のわすれぐさ

に至りては、鋪張工究まりて、迂拙寧ろ噴飯すべし。一篇九十餘節の中語樣（フヒイユア）ならざるもの殆ど希なり、之れ驚くべき事ならずや。

あゝわが戀は夏雲の
かげに照る日の熱ければ
涼しき風の吹きかよふ
君の蔭こそこひしけれ

あゝわがこひはあを〳〵と
胸の若葉のしげければ

ず、再讀三讀して僅に其髣髴を摸捉し得たり。あゝ戀愛なるものは是の如くしての外は歌ひ得ざる者なるか。『四つの袖』を解するの勞苦を以て吾人は慥にスエデンボルグを一讀することを得べし、其艱深朦朧、何人か能く之を釋き得たるものぞ。感情の幽遠なるものは文字自ら艱深ならざるを得ず『フッウスト』や、『エンヂミオン』や、誰か淺易の辭を以て之を書せざりしを咎めむや。然れども『四つの袖』の難解は思想の深邃感情の高遠より來るにあらずして、全く措辭語句の冗漫朦朧より來る、無用の形容に富める是の如きは桂月烏山等の作中にも未だ曾て見ざる所なり。比興工ならざるに非ず、措辭造語亦巧を極む、獨り詩趣の索然たるを如何せむ。

なさけの水棹こひの舟
二つの袖を海として
うす紫に匂ふなる
きみに一葉をつながばや

首節の四行已に解すべからず。

あゝ朱盃を舟として
なさけにうかびこひに醉ひ

夫の所謂朦朧派は其情を飾るに文を以てす、之れ胸より胸に傳ふべきものを、口より口に傳へむとするなり誤らずや。彼等は未だ眞情流露の響を解せざるなり、徒に文字格調の末技を弄して人を動かさむとす、夫の朽木を彫せむとするものに類せざるか。

吾人は今の新體詩を讀むを好まず。又擬古派詩人が早晩時勢に覺醒せられて自ら其の非を悟るの時あるべきを信じたるを以て故らに彼等が迷妄を覺破せむことを務めざりき。彼等の信ずる所必ずしも誤れるに非ず、只其保守的精神の爲に其根柢を腐蝕せられたるは深く惜むべしとなす。

島崎藤村の『四つの袖』は朦朧派の病弊を最も明に表白したるものなり。藤村は現今の新體詩家中の錚々、作品の醇雅思想の高潔を以て夙に同人の間に推さる。『四つの袖』は彼が近業中尤も苦心經營の作として傳へられたる者、四行を一節とし、節を重ねること九十有八、無慮二十四頁に亙る。其の長さを以てするも近出抒情詩中の最大なるものなり。

『四つの袖』は抑々何事を歌ひたる者なるか。吾人一讀して之を解することを能は

朦朧體の末路

新體詩の病根は其の保守的精神にあり。今の擬古派の一輩が營々として回護に力むるは、偶〻新體詩今日の衰勢を說明したるに過ぎず。其論據を近世の詩學に求め、一知半解の見を挾みて、饒舌附會に窮々たるの狀は、保守派が最後の氣焰として吾人之れを一笑に附したりき。

新體詩は其創作を以て其評價を求むべし。議論を以て之を回護せむとするの事實、是れ已に其末路を豫告したるものに非ずや。區々の談理は素より趣味の判斷を如何ともすること能はず。今や保守的精神の極弊は事實に於て新體詩昨今の窘塞を招致せり。

格調に執着するの弊は眞情の流露を妨げ、古雅を偏尚するの弊は思想の朦朧を致す。之を以て文字冗漫にして感情緊切ならず、之を讀めば數行にして睡魔の襲ふ所となる。人の心思を昂揚し感極まつて慟哭せしむるが如きは、是等の詩に於て夢にだも望み得べからざる所とす。

ふ。況むや早熟は特むに足らず、『十で神童、二十で才子』は、世間普通に見る所。今の團洲、圓朝諸氏は中年以上に至るまで多く世間の唇頭に上らざりしと云ふに非ずや。今の少年俳優をして、子役以外に扮せしむるは、徒に其藝風を窘促ならしむるの弊あるのみに非ざるか。

（三十年九月）

むが爲には、是の如き方法は早晩排棄せられざるべからず。

今の俳優には普通教育をすら受けたるもの少し。偏に舊型を株守し、一に形體上の技巧に憑依して其口を歪め、其目を怒らすことを知るもの、爭てか少しく文字あるもの、心を樂ましむるを得べき。過去は之を如何ともする無し。吾等は將來の俳優が是の過を再びせざらむことを願ふ。

今少年俳優の年を問へば七八歳より十五歳迄なりと云ふ。是れ普通教育の就學年齡に非ずや。是須要の時期を犧牲として技巧の修練に身を委ぬるは、吾等其の可なるを見ず。是の如くにして五年を經、十年を過ぎむか、彼等は終生無教育の人となり了らざるべからず。其技巧愈々熟して其識見愈々卑からむ。人は移り、世は進む、是時に當り俳優獨り舊時の河原者を以て居らむとす、日本演劇の前途を如何せむや。

教育を犧牲とせざるべからざるが如き技巧は、我劇界の大患なり、之を改革するの方法を講ぜざるべからず。技藝とは形體以外、更に精神的修養に待つあることを知らざるべからず。少年演劇の流行は果して我梨園の慶事なるか、吾等之を疑

少年演劇に警告す

淺草座の小供芝居は實に梨園社會の一偉觀たるに相違無し。其中の或者は曾に小供として驚くべき技巧を有するのみならず、今日第一流の名優に伍して歌舞伎座の舞臺に上すも、多くの遜色を見ざるべしと想はるゝ迄に發達せり。滿都好劇の士が嘖々其妙を喧傳する、決して無理ならず。されど吾等は是等の鳳雛麟兒の爲に我劇界に警告すべき事あり。元來我劇界の缺點は其技巧上よりはむしろ其精神的教育の缺乏に存す。今日名優と呼ばれ、大立物と尊ばるゝ人にして、其演藝のしかく野卑淺近にして、少しく教育ある人士の翫賞に當り得ざるは、畢竟其見識の足らずして、趣好の卑きが爲なり。形躰上の技巧に於ては何人も其圓熟に敬嘆せざるもの無からむ。然れども、吾等は俳優養成法が將來の儘にては永く繼續する能はざるの事情あるを認む。普通教育の時期を以て全然舞踊の修練に充つるの必要あるが如き方法は、決して以て中等以上の社會に向て其趣好を滿足する俳優を育成することを望むべからず。苟も社會の進歩に雁行して其昌榮を保た

市川新藏は、其見識に於て、其技能に於て、其の文字あることに於て、凡々たる舊俳優中に一頭地を抽てたりき。團洲の後を紹ぐもの彼れを措て外に求むべからずとは、世人一般の評なりき。不幸にして天彼れに年を假さず。吾等は我演劇の前途の爲に浩嘆に堪えざるなり。

去月上旬雨蕭々の日、彼れが遺骸は滿城の恨と共に谷中天王寺に埋められき。是時端なくも、俳優社會の不德義不人情は悲むべき事實によりて暴露せられき。彼れの柩は家族知人の少數によりて送られ、生前の友なりし俳優は其代人をだに出さゞりき、又何等の贈物をなせし者もあらざりき。殊に其師たる三升會長たる團十郎の如きは冷然として知らざる爲をなしたりと傳ふ。彼等の輕薄不友、只利のある所に赴く陋劣至極の性情は惡みても尙餘りあるにあらずや。俳優社會の德義の如何は文藝批評家として吾等の問ふ所にあらず。然れども是の如き輕薄不人情の徒輩の作爲する演劇が、如何にして社會の風尙を高め、士君子の鑑賞に當り得べしとするか。吾等は今日演劇社會の卑猥、其の來るところ一日にあらざるを想ふ。

(三十年八月)

が爲なりし乎。嗚呼吾人は萬朝記者と共に才人蘇峰の出處を咒咀せざるべからざる乎。

陶蘇山の麓より『將來の日本』を懷にして東上したりし一介の措大は、實に明治人文史上に一生面を拓きたりき。彼が鼓吹したる平民主義は一部青年の爲には新日本の福音なりき。其の奇警なる文章、其の犀利なる觀察は一世の耳目を新たにし、世人は彼に於て、其雜誌に名けたる國民の友の權化を見むことを望みたりき。あはれ十年一日の如く、藩閥打破を唱へたる彼れ、平民主義を唱へたる彼れ、經濟的眼孔よりは車夫も大臣も均しと唱へたる彼れ、新島襄と楠正成とを並べ稱したる彼れ、あゝ彼れは今や藩閥政府の高等官二等となり了りぬ。世は彼れを僞善者なりと云ふ。彼れはた世を如何せむとするか。

驥は其力を稱せずして其德を稱すと云へり。あゝ吾人安ぞ今に於て士風の盛衰を論ぜむや。

（三十年九月）

市川新藏を悼む

むべきものなるかな。

（三十年八月）

小說中に顯はれたる現代の女性

ウエッの言によれば沙翁の女性は名譽無く、シルレルの女性は理想的に、ゲーテの女性は自然的なりと。我邦小說家の女性は何を以て之を表はすべきか。

彼等には人格の意識なく、處女の純潔なし。彼等は性慾の奴隸なり、境遇の從者なり。あらゆる女德は彼に於て殆ど見るべからず。見るべきものは意氣地のみ、迷信のみ、一念の狂氣のみ。

現代の女性は果たして小說家の描ける女性の如きものか。吾等は小說家が少しく其眼界を擴張せむことを望む。

（三十年八月）

德富蘇峰

平民主義は果して自己の位置を作らむが爲なりし乎。新島崇拜は果して清士として世に目せられむが爲なりし乎。軍備擴張說は果して薩人の歡心を買はむ

希臘語のポイアィンは創作を意味し、トロバドルは古佛語にて創造者發明者と共に詩人の義なり。詩は所詮つくらるべきものに非ずや。

今の小說家、閱歷を尙ぶ。之れ可なり。社會現象の複雜を加ふるにつれて、精緻なる觀察に依るに非ざれば、爭てか人生の眞相に着到し、自然の幾徵を描着するとを得べき。閱歷もとより尙ばざるべからず。されども、一面に是の如くにして得たる資材を醇化し、詩化する所以の空想を缺かむか、其詩は形骸ありて精神無きなり。ゲーテが貴びしッォイス神の愛嬢は其の中に見るべからざるなり。

吾人は今の小說家に於て閱歷の偏重せらるゝを見る。彼等の小說の骨架は殆ど全く彼等の閱歷談なり。之を詩化する所以の微妙なる空想に至りては、極めて缺如せるを見る。是れ彼等が作品に詩趣乏しく、生硬無味臘を嚙むが如き所以に非ずや。

今の作者は其閱歷によりて苦心談を語らむと欲す。然れども吾人は詩人の苦心なるものゝ果して是の如くにして談り得べきものなるかを疑ふ。あゝ空想の缺乏は即ち詩材の缺乏に非ずや。單に手によりて小說を作らむとするものは哀

堂宇の頽廃によりて、雨露風雪の難にかゝるものに至ては、固より深く惜むべしとなす。美術は一ありて二なし、一度び失へば再び得べからず。博物館裏の陳列は慥に是危害を保障するものに非ずや。

往年エルヂン卿、古代希臘の美術を掠奪して、之を本國に輸送せり。詩人バイロン大に之を罵りて國賊となす。然れども英國博物館裏に南歐美術の精粋を不朽にしたるは、世界文化の紀念の爲に實に埋沒すべからざるの偉功なりと謂はざるべからず。今日誰かエルヂン卿の掠奪を德とせざるものあらむや。

(三十年八月)

閲歴と空想

『死せざるものゝ中にて最も貴き價は何に歸すべきや、そはツォイス神の長へに新たなるまなごなる空想に。』是れゲーテが空想(Phantasie)を詠じたるの句なり。味ひある言葉なるかな。げに吾人の美的意識を醇化し、詩化し、之に形躰を與ふるは一に空想の力なり。空想は詩人の依て以て詩人たる所以に非ずや。詩(ポエジイ)の由來せる

更に藝術の上より之を觀れば、佛像陳列の利益は問はずして可なり。形象を以て聖靈の眞體となしたるより、僧侶の輩は佛像を公開する事を好まず、幔扉深く鎖して故らに尊嚴を裝へり。古代美術の參考の爲に一覽を乞ふものあるも、敢て之を許さず。寶物取調委員が政府の權力を藉りて僅に其志を遂げたるが如きは、蓋し例外となす。而かも紀州高野山の如きは、往年政府派遣の委員をして本尊を拜するに先ちて、沐浴三日せしめ、決して形相の左右を漏洩せざるの誓詞の下に辛じて一見を許したりと云ふ。其頑迷素より及ぶべからずと雖も、本邦美術の研究は是の如き事業により妨害を受けたる其の幾何なるを知るべからず。殊に其名山大刹の安置にかかるものは美術として尤も價値多きものなることは、爭ふべからざるの事實なり。然るに其觀覽視察の困難果して是の如しとせば、美術の研究は茲に一層の障害を增したるものと謂ふべし。佛像陳列は此困難と障害とを排除する一良方便ならずや。

且夫れ彼の寶物なるものは珍藏百襲之を保管するものと雖も、一年一回の檢閲を施すに過ぎず。或は朽敗腐蝕の害に陷り、或は鼠子蟲群の累す所となる。夫の

するところ吾れ亦猶ほ之を尊敬し、共に國民的思想の一致を維持するを須要とする國家的觀念に歸せざるべからず。

崇敬は民心に與ふるに安慰と共に統一を以てす、猥に民の依て以て其心を安ずる所を打破するは、社會の德義に非ざるなり。妄に民の依て以て其心を一にする所を攪亂するは國家の利益に非ざるなり。然れども是の如きは果して佛敎に就て言ふべきものなる乎。

今や國民的一致運動の必要は、國民的道德主義の確立を促がし來れり。今や日本國民が其小異を捨てゝ其大同に就き、其性情の本然に據りて唯一不動の大廈巍の下に集中すべき時期ならずや。是時に當りて幾多信仰の小中心を見るは、國の利に非ず、民の福に非ざらむ。況むや是の如き信仰の小中心にして、厭世退嬰の佛敎的臭味を帶ぶるもの多きに於てをや。

頃日實物取調委員が、一部佛敎徒の不滿を釀したるの事實は、新文化と舊信仰の衝突を表示せる一例に過ぎず。されども、吾等はむしろ國家主義によりて是の如き小信仰の排除を希望するものなり。

り平等なるべし、其躰形は自ら差別なきを得ず。

敢て我邦美術家の一考を促がす。

（三十年八月）

佛像陳列の可否如何

佛陀敎は其本來の面目に於て、決して偶像敎の性質を帶ぶるものに非ず。其の之れあるに至りしは、後代布敎の方便に出づ。無形を觀じ、無想を念じ、空想の中に虛靈を現ず、凡夫の爲し能はざる所也。是に於てか純聖高潔の理念に配するに、相好面妙の美躰を以てし、以て寫象對觀に資するもの、洵に以なきに非ざるなり。宗敎と美術との抱合是に於てか成る。おろかなるもの是理を知らず、形象を以て聖靈となし、無窮の信念を有盡の物質に寄す。之れ人文の進步につれて漸く排除せらるべき迷信なり。若し信仰を維持すとの理由を以て、佛像の神聖を唱ふるものあらば、之れ即ち學問の敵なり、眞理の仇なり。之を排斥し打破するに於て何かあらむ。況むや佛像を以て美術となし、之を博物館裏に陳列するに於てをや。

若し世に佛像陳列を不可をするの正當の理由ありとせば、そは同胞國民の尊敬

想を體現するものあらば、吾人は頗る面白き結果を見得べしと想ふ。今や我國民の活動は極めて多樣なり、極めて多面なり、隨て極めて多趣味なり。吾人は大美術家の豫言的手腕によりて吾人の形體ある理想を見むことを望む。

歴史を題目とせる美術

今日の美術界には佛像佛畫の流行を見る、之れ大に可なり。而れども吾人は更に其筆を歴史的題目に染むるあらば更に大に可なるを想ふ。

佛誕、羅漢、天女の題目は到るところに流行す。獨り我邦神代の事蹟に關して一の製作を見ざるは如何。古事記神代の卷收むるところ以て美術に資すべきもの一にして足らず、吾人は我美術家の冷淡なるを見てむしろ怪訝に堪へず。

美術の發達は其題目の發達を意味す。神州の民にして古天竺の佛像を事とするは、徒に他邦文物の勢力に屈從せるの嫌なきか。國民は其國民的理想に相應せる美術を製作せむことを務めざるべからず。歐洲の美術は希臘より中世に入りて基督教的となり、近世は漸く國家的の一面を開拓し來れり。美術の理想は素よ

如きことあらむか、我邦美術界の前途又知るべきのみ。

吾等を以て之を見れば、今日大東帝國々民の精神及抱負は、未だ我美術家により、て了解せられざるなり。東山時代の幽寂高雅にして厭世の悲觀に富める、豐臣時代の雄大快壯にして尋常の規矩を顚脫せる、德川時代の典麗華美にして常型の中に十全を期する、皆之れ美術が時代の精神を發揮したるものなり。我邦、知を宇內に求め、威を海外に張り、國民的意識の漸く明瞭ならむとするの今日、是雄壯快濶なる民族の抱負を躰現するの美術なきは大に恨とすべきなり。

（三十年七月）

美術家の絶好題目

レホバルディは鎖につながれて泣ける被髮の美女を以て其母國を人化せり。マルコス・ボツァリスは獨立せる希臘を現はすに裸躰なる一青年を以てせり。美術家のファンダジーによりて、國性もしくは國民の理想躰現するは頗る興味ある事業ならむ。今の時に當りて吾人の同胞にもし秀拔なる美術家ありて、帝國々民の理

しむるの外、靈界超絶の理想を聞き得たるもの幾何あるや。彼等の天女と觀音とは、媚態妖冶、娼婦と擇ぶなく、彼等の羅漢と達磨とは、畸形支容、寧ろ醜汚の甚しきを見るのみ。若し夫れ大佛陀の尊容にいたりては、徒に憔悴厭世の狀態を寫すを旨とし、其の一切衆生を濟度するの大慈悲心、大理想念にいたりては、毫も描着するに至らず。氣息奄々として、さながら垂死の人を見るが如きところ、寧ろ人をして嫌惡の情を起さしむ。是れ果して何が爲ぞや。

在來の故型を踏襲するは其一原因なるべしと雖ども、畢竟徒に筆墨によりて其外面を模寫するの外、內之に應對するの信念を缺けるの罪に坐す。彼の女子小兒の徒、內心毫も渴仰の熱誠なきものにして、筆を宗教的題目に染む、むしろ噴飯に堪ゆべけむや。

說を爲すものあり。美術學校の教育制度は、其一般知識の點に於ては小學生徒と相去る遠からず、其教授の中には、普通の書牘すら辯じ難きものありと。果して眞乎あゝ果して眞乎。然らば則ち百の鷗外ありて審美學を講ずるも亦何の效かあらむや。偏に技工を習練せしむるを主として、其精神的教養を等閑に附するが

むしろ憫むべからざらむや。嗚呼世間、疣贅文學、病的文學の多きや。

（三十年七月）

現今美術家の精神的教育

古より美術家は天之を成すべくして人之を造るべからずと謂へり。是語一面の眞理たる素より言を待たずと雖も、世人を誤りたる亦是の如きものは多からじ。是語を解して字の如くなれ。美術家は學識を要せざることとなるなり。一般普通の教育の如きは、美術家にとりて極めて意味無きことゝなり了るなり。彼等に要するところは單に技巧上の熟練ならむのみ。吾等疑ふ、今日の美術家の多くは、たしかに是の如き謬見にあやまられつゝあるものに非ざるかを。

吾等は繪畫展覽會に宗教的、もしくは哲學的の製作を出品するもの、年毎に增さりゆける事實を見る。而かも雄渾卓厲の氣品を缺き、神韻縹緲の趣致に乏しきは、識者の潜に眉を顰むるところなり。幾多の佛誕圖を見よ、微笑を描き、美音を寫するものを見よ、天女と觀音と達磨と羅漢とに見よ。徒らに紅抹朱塗に俗目を欣ば

文學に對する根本的誤解

吾等は潜に疑ふ、人生に對する文學の位地は殆ど全く世人によりて誤解せられ居るに非ずや。

說を爲すものあり。文學は獨立せるものなりと。あゝ果して然るか。獨立とは社會の他の文物の爲に拘束せらるゝを要せずとの義か。然らば則ち吾等に示すに是の如き獨立せる文學の事例を以てせよ。古今東西何れのところにか獨立せる文學あるか。

文學は人生に幸福を供給する文物全體の一部なり。是故に社會國家に於ける人生須要の制約に隨て文學亦一般文物の一致せる活動に伴はむことを要す。是の如くならざる文學は、人生となすなきの文學なり。人生活動の中心に向て榮養補充の交互的作用を營まざる文學は之れ疣贅文學のみ病的文學のみ。

是故に文學は民族の資性、及び歷史によりて育成せられたる國民性情の上に其根底を有せざるべからず。夫の輕跳無識の輩、大體に通せずして獨善の語を弄ぶ、

意氣を以て勝るもの、殊に漢文の一科を推す。此科の學生、善く飲み、善く論じ、又善く罵る。劍峰殊に雄を同人の間に稱す。

然れども意氣を以て勝るもの必ずしも世に勝れず。丈夫苟も志を學に立つ、詩酒の外豈行藏なからむや。吾れ劍峰の器を知る。一卷の『先秦文學』彼に於て何かあらむや。

『先秦文學』の世に出づるや、吾れ殊に其の足らざる所を擧げて彼を戒めたり。劍峰奮然吾れを罵りて愚なりとなす。あゝ好漢吾れ其の意氣の人に勝れて學の未だ足らざるものあるを惜む。吾れ劍峰を以て賢なりとなし、劍峰吾れを以て愚なりとなす。賢乎愚乎吾れ之を知らず。吾れ若し愚ならむか、愚者の賢とする所劍峰亦賢に非ざるなり。劍峰賢に非ざるか、賢に非ざるものゝ愚とする所、吾れ亦愚に非ざるなり。

行け好漢、世間是非の爭、概ね斯の如きのみ。如かず獨を善くして其の學に力めむには。

（三十年六月）

を吾等は支那古代の思想の中に發見すること能はず。劍峰當に訓ゆる所あるべきなり。夫の離騷に見るが如きもの、吾等之をミッスと言はず、又言ふべからず。

材料の豐富は劍峰が多讀を示して殆ど遺憾無し。然れども支那一國の外に何等の觀察するところなきや、其文物をして絕緣獨立自然自存の觀あらしむ。是れ歷史的事實に違へるものに非ずや。南方文學に關しては、近時西洋學者の種々の臆說を見る。必ずしも憑依するに足らずと雖も、劍峰是書を草するに當りて果して之を涉獵したりしや。殊に古代人種の移動に就て、毫も言ふ所無かりしは、支那文化の比較研究上須要の根據を失ひたるものと謂ふべし。

さはれ『先秦文學』は斯學の好著たるに妨げなし。吾等は劍峰が精一、是著を完成せむことの一日も早からむを翹望す。

(二十九年六月)

藤田劍峰を送る

劍峰筆を負ふて上海に航す。吾れ何を以て其行色を壯にせむ乎。文科大學中

單なるものに非ざることの知れ渡りたる今日、バックル一流の舊思想を反覆するは本書の價値を增す所以に非ざらむ。漫に北人南人と呼び去りて、それが人種的意義に就て一も說明するところ無き、最も恨とすべし。其の南人の性質を以て全然北人と殊なりとなし、北人の實踐的功利的に反對して、純ら理想的はた形而上學的なりと云ふ。是れ果して老莊一輩の眞相なるか。吾等の見る所を以てすれば、老子は理の爲に理を說きたるものに非ずして、所詮實行の法規を演繹し、說明するに必要なる限に於て無形の純理を說きたるのみ。老莊は決して印度、もしくは獨逸の或學者の如く、純ら知證慾の滿足の爲に其哲學を說きしものに非ざるなり。其の實驗的、はた功利的立場に留住するに於ては孔孟一輩と何等の差別を見ず。吾等の見る所を以てすれば、支那には自然學なく、（まして超自然學無く）又論理學なく、たゞ一の倫理學あるのみ。之れ易の最古思想より、宋末佛敎の一時的勢力を受けたるものを除きて、支那四千年の文化を徹する一大特徵なり。劍峰が老莊の南方思想を以て純然たる哲學となす。吾等其の可なる所以を見ず。

劍峰は時に支那の神話を云ふ。神話とは所謂ミトロギーの義か。所謂ミツス

『先秦文學』を讀む

劍峰藤田豐八君は、漢文學專攻の士にして、平生造詣するところ優に同人間に一頭地を劃せり。由來漢學を修むるものは、氣宇多くは偏小、學識亦和漢の間を出でず。夫の訓詁釋義を以て能事了はれりとするの弊は、今日やゝ之を擺脫するを得たりと雖も、汎く世界人文の歷史の上より、公明なる比較的研究を爲し得るものにいたりては、吾等殆ど之を見ず。是固陋偏執の舊圈を穎脫し、とにかく新知識に養はれたる新眼孔を以て、是の世界に於ける最古國の文物を觀破し得るもの、我劍峰の如きは今日蓋し罕ならむか。

『先秦文學』は支那文學史稿の第一卷として、劍峰の著にかゝるものなり。

本書の特色は、在來の史傳の如く、單に事例を列擧するにとゞまらず。支那思想の歷史的發達を審にし、バックル、テーン一輩と均しく、主として外圍の自然狀態を以て、文化の特質を說明し去らむとするにあり。本書の長所茲にありて本書の短所亦茲にあり。民族性情と風土との關係は比較人種學の開くるにつれて、しかく簡

れを擁持せむことを願はゞ審に君が一時の成功の由來する所を究め、具に正反の理を尋ねて穩健堅實の路を行かざるべからず。世は進み、勢は變り、社會の風尚今又昨に非ざるなり。夫の當年の舊株を守りて徒に新を衒ひ奇を弄ぶもの、其の愚むしろ憫殺するに足らずや。

君が『化鳥』に描けるところ、落想新奇ならざるに非ず、構思亦頗る慘憺を極む、而かも性に違ひ情を沒するの譏を免れず。『堅、バン』寫すところ、觀察極めて淺近、強て事を驅り境を作るも、遂に其根本動機を解折して人情自然の過程を描くことを爲さず、徒に省筆を以て餘韻を催すところ、むしろ幼稚ならずとせむや。若し夫れ新小說載するところの『凱旋祭』の如きに至りては、吾等讀過一番、呆然として言はむと欲する所を知らず。要するに、君が作は眞摯ならざるなり、性情を解せざるなり、人生を觀ぜざるなり。徒に筆を驅りて境を作り、清新奇拔を以て名を求めむとするの策は、之を三年前に施すべくして、之を今日に計るべからざるなり。鏡花泉君以て如何となす。

（三十年六月）

し來りたる過程を顧みれば、吾等はいとゞ鏡花泉君の爲に氣の毒の思無き能はず。尙ほ記す、所謂觀念派が世の文壇を風靡せしや、鏡花の名は隱然として一面に鎭たるの觀ありき。當時の名聲は殆ど幾多先進の作家をして背後に瞠若たらしめたりき。今や則ち如何ぞや。

吾等は鏡花泉君が文學的生活の龍頭にして蛇尾ならざらむことを希ふ。君が新作の出づる毎に、吾等はそが君の名聲を加ふる所以に非ざるを目睹せり。殊に『化鳥』『凱旋祭』『堅パン』等の近業にいたりては、吾等實に君が爲に批評の筆を執るを好まざるなり。あはれ君は君が當にたどるべき路を失へるに非ずや。吾等は君の近業が一時の迷妄にすぎずして、君が本來の面目に非ざらむを望まずむばあらず。吾等は恐る、ところにして性に歸り、眞を尋ねずむば、君は遂に溝壑に轉じて　蹶又起つ能はざるに到らむを。吾等は敢て今日を以て君が文學的生命の危機なりと思ふ。

人は他を知るに先ちて己を知らざるべからず。所謂觀念派が當時の聲名は、從來作家の沈滯不振に對する一の反動に過ぎざりき。若し君にして永く往年の譽

作し得るに至りたる所以を想へば、むしろ一滴同情の涙無きを得ざるなり。

さはれ、吾等は、我が社會が是の如き方外非倫の醜文字を寛容して多く怪まざるの一事を見て、我が社會的道德の頽廢其の一日に非ざるを思ひ、深く痛嘆に勝へざるなり。殊に『新著月刊』記者が『諷世嘲俗の大文字』として再拜して之を掲載したるに至りては、吾等はくれ〳〵も記者が用意の足らざりしを恨みとす。あゝ色道論は果して『諷世嘲俗の大文字』なるか。僞善者の假面を褫ぎ、虚飾者の眞皮を表はすは、諷諧の旨とする所にして、社會の風敎を維持するに於て其力少しとせず。徒らに人間の劣情を催起し、不德不義を推奬するが如きは、是れ世を陷れ、人を誤るのみ、決して諷世嘲俗を以て稱すべからざるなり。並せて茲に『新著月刊』記者の猛省を促す。

（三十年六月）

泉鏡花に與ふ

往年『外科室』の作者として、泉鏡花の名が明治小說の史上に一楔點を劃せることを懷ひ、更に降りて『化鳥』『凱旋祭』『堅パン』の作者となるまでに、是小說家が經歷

僞となす。之れ好て自ら墮落せむと欲するものに非ずや。人生の萬事は偶然にして其完美を望むべからず、何事か之れ力行精進の結果に非ざらむや。是れはた人間性情のおのづから然らしむる所なり。綠雨が色道論の當否の如き素より問ふを要せざるべし。

蓋し綠雨素心理學者に非ず又哲學者に非ず、唯興に乘じ情を驅りて漫然人を罵るを以て快とするに過ぎざるもの、寧ろ甚だ憫むべしとなす。獨り其の守るべきの分を超へ、沒道義、破廉恥の文字を弄び、而して世を毒し、人を誤るを慮らざるに至りては、吾等義として默過するを得ず。彼れが說くところは、全然道義を破壞するにあり。色慾を以て人生の目的とするにあり、共婚主義を主張するにあり。一切の倫常を擧げて獸慾の犧牲とするにあり。而して之を行るに卑猥言ふに忍びざるの文字を以てし、到るところ嫖客娼婦の情事を穿鑿して却て得々たるものゝ如し。あはれ人は如何にせば、其德性の墮落、心情の卑劣、果して能く是の如きを得べきか。讀み了りて吾等は呆然として殆ど言の加ふべきを知らざりき。想ふに綠雨も亦人のみ。吾等は彼が一點忸怩の情無くして能く是の如き放逸不羈の言を

色道論は、綠雨が『新著月刊』記者の問に答へて、其著『かくれんぼ』の由來、及び旨義を說きたるもの、滔々二十餘頁の長文字也。綠雨自らの言ふ所によれば、彼れが『かくれんぼ』を著したる目的は、戀愛神聖の俗說を打破して、男女の愛は肉慾獸行に外ならざるを論じ、かねて狹斜賣淫の賤婦を辨護するにあり。而して是月刊記者に語りたる色道論は益々是の如き精神を擴張し是の如き旨義を敷衍し、談理の筆によりて、其の戀愛に對する十分の懷抱を披瀝したるものなり。

戀愛果して神聖なるか。又果して神聖ならざるか。そも〳〵茲に神聖とは果して何事を意味するか。戀愛果して肉慾獸行に過ぎざるか。戀愛の情事、過去に於て是の如く、未來に於て亦是の如くならむとするか。皇天の攝理によりて戀愛の厚生に資するや、誰か之を拒まむ。而かも肉交以外に戀愛無しとするもの、果して人情の實相なるか。夫の豚の如く、犬の如きものは、吾等之を問はじ、人生羞恥の存ずるところ、卽ち希望の存ずる所にあらずや。醜を掩ふて美となすは、之れ人性の美なるに本く。現實を超て理想を望むは、之れ人類の依て以て進步する所以に非ずや。醜を醜なりとして恥づる所以を知らず、却て強て人性の美所を擧げて虛

齋藤綠雨が色道論を讀む

社會の近事日に非なり。夫にして其妻を殺すもの、妻にして其夫を殺すもの、子にして其父を害するもの、偷盜、詐欺、殺傷、拐奪、是れ日刊新紙三面の半ばを埋むるもの、非倫背德寧ろ言ふに忍びざるなり。是時に當りて圖らざりき、文壇亦齋藤綠雨が色道論の如き醜絕穢絕の文字を見るあらむとは。

吾等諷刺家として正太夫を知り、又小說家としての綠雨を知る。其の平生口にするところ、素より吾等と所見を異にするもの多かりき。然れども是色道論に接するまでは、其道義的品性に於て爾かく缺損せる人なりとは思ひ量らざりき。吾等は素より綠雨其人の道念に就て容喙するものに非ず。其廉耻の有無、私行の修否に於て他の偷盜、殺傷と異なる所なき也。然れども、苟も之を筆にし、之を文にし、堂々たる公刊の紙面に於て、自家の劣情汚行を表白し、恬然として毫も愧色無きに至りては、文壇の德義の爲に、將た又風敎の維持の爲に、茲に一言の已むべからざるを覺ゆ。

會の會頭たり。而して氏は國會議員としても、銀行家としても、又出版者として、名聲當代に隆々たり。足下よ、是の如きは歐米諸國に於て極めて多く遭遇する事例也。我が邦人をして之を見せしめば、果して何とか言はむ。

足下よ、是の如き狹隘なる人物批判法は人才を窒息せしめ、凡ての人をして凡人せしむる所以にあらずや。一般俗人の見解としては尙ほ恕すべき所あるも、而かも社會の上層に位する學者專門家も亦是の俗見を有するもの多きに到ては眞に浩歎の外無き也。

其七

晩翠兄足下、願はくは予の狂愚を許せ。文壇の近事に關して、予に尙ほ語るべき幾多の不平あり。唯恐る、足下に誅むる所の多きに過ぎむことを。京地近來寒甚しく、飛雪窓を撲つこと連りなり。遙に廣瀨河畔の春色を想へば神思搖蕩して肌骨俄に胖なるを覺ゆ、吁、高音亮節、足下に非ずむば誰か是を能くせむや。詩人たる足下よ、乞ふ自愛せよ。頓首再拜。

（廿三年二月）

東巳代治氏の如きは、何故に是の點に於て政治家たるを妨げざる乎。北里博士は曾て數千金を拋てトンコと稱する一藝妓を落籍したることあり、博士は何故に是點に於て醫者としての信用を落さゞる乎。足下よ、予の言の不倫を笑ふ勿れ、人間の精力を消耗する何物か溺愛に及ばむや。

足下よ、政治家なるが爲に學者たるに適せずとするは、尙ほ小說家たるが爲に事務家たるに適せずと謂ふが如き也。我が邦人の人を見る何ぞ夫れ狹隘なるや。病理學者ヰルヒョウ氏は現今獨逸醫學界の泰斗にして、我が邦に三浦守治氏の如き弟子を有する大學者也。氏の刊行する所の『ヰルヒョウ寶函』は全世界の信憑する所也、而して氏は一面に於て政界の首領也。然れども予は是の(日本人にとりては)奇異なる掛持の爲に氏が學者としての聲價に累を及ぼせしよを聞かざる也。佛のセナール氏は足下の知る如く有名なる東洋學者也、其の梵語學の造詣は歐洲學術界希に見る所なりと云ふ。而して氏は他面に於て銀行家也、而かも予は氏が梵語學者としての面目に何等の障害ありしことを聞かざる也。英のラボック氏は科學者としては殆んどチンダル、ハックスレー諸氏と同平面に立ち、現に萬國動物學

ありとせば、是の如きは其の一也。

予常に想へらく、本邦人の人を見るや、餘りに專門的なり、是を英語にて言ひ表はせば、餘りにクレリカルなり。所謂るクレリカルとは、凡そ人は一業一門の外には信頼すべからずとなすの傾向、是れ也。而して是の傾向は學術上の事業に關して最も甚しきを見る。學者にして少しく政治の運動に關係すれば、彼れは最早や學問上のオーソリティたるに適せざるが如く思惟せらる。例へば、外山博士の如きは曾て文部大臣たり、今又教育家たるの故を以て、世人の多くは博士の口より社會學の學說を聞かむことを望まざる也。菊池博士の如きも、永く教授に關せず、又久しく行政官たるが故に、博士が專門なる數學の宗師として多くの尊敬を得る能ざるが如し。北里博士の如きも、世人往々評して曰く、彼れは醫者中の政治家なり、故に醫師として多く信憑する能はずと。是の種の批評は、專門社會にとりては毫も價値無き者ならむも、而かも一般社會の所信として、冥々の中に偉大なる勢力を有する也。足下よ、予は是の如き批判法を以て人物の眞價を埋沒するものとなす。若し一人の精力は數事に秀づるを許さざるが故なりと謂はゞ、數人の嬖妾を有す

其六

小說家、詩人、俳句家、評論家たる事實が、其の人に累する是の如きは其の原因果して何處に在る乎。予は是の原因に關して彼等と社會と其の責を分つべきものなるを信ずる也。從來に於ける小說家もしくは俳句家等の多數が、不幸にして學者又は實務家たるに適當せざる人物なりし事は掩ふべからざる事實也。社會が是の如き事實の上に小說家又は俳句家等の概念を構成したるは强ちに理由無きに非ず。從來の小說家又は俳句家は是點に於て其の責任を免るべからず。而かも小說家と云ひ又は俳句家と云へば、凡て是の如き非學者的、非實務家的の性格を有すべしと速斷し、爲に卓拔なる作家詩人の脫走を誘致せしは、其の責慥に社會にあり。予は是の點に於て特に社會の沒分曉的制裁を憤慨せざるを得ず。

足下よ、伊藤侯爵は、其の色を好むの故を以て政治家たるの技倆を危まれしことあらざる也、何故に小說家たることが獨り實務家たるに累する乎。大隈伯は其の園藝に熱心なるの故を以て、其の政黨首領としての技倆を疑はれしことあらざる也、俳句家たることは何故に獨り學者たるに累ある乎。天下解すべからざるもの

是の如き迫害は獨り小說家、詩人、俳句家の上にのみならず、文藝上の評論、もしくは新聞雜誌に關係する凡ての事業の上に被らせらるゝ也。設令へば定期刊行の雜誌紙上に文藝上の評論を草するものあれば、彼れの先輩朋友は輒はち曰く、彼れは雜誌記者なり、其の學信ずるに足らず、其の說一時の臆見のみと。是等の人々の雜誌記者なるものを見るや、例へば二六時中營々として編輯事業に從事し、讀書研究の餘裕無く、見聞するところは市井の雜書瑣事に止まり、絕て眞摯なる學術上の研鑽に勝えずと爲すものゝ如し。彼れの論議する所は、其の雜誌記者たるの故を以て初めより是等の人々の一顧をだも値打せずとせらる。隨て彼れの意見の意義と價値とは是等の所謂る專門學者社會の批評を受くるに由無き也、是の如くにして彼れは『一俗學者』『一雜誌記者』として輕蔑せられ、彼れの苦心は永く學術社會の認ゆる所とならずして已むべき也。嗚呼足下よ『雜誌記者』の境遇も亦憐むべからずや。かれも亦小說家、詩人、俳句家と共に其の憤懣を懷きつゝ、社會の陰深なる迫害の下に生活するもの也。

嗚呼足下よ、社會の事是の如くにして文藝の振興、發達、能く望み得べしとする乎。

獨り小說家にのみ存するに非ず、實に詩人俳句家等、文藝に關する殆ど凡ての事業に附帶せるを見る也。是の如き誤解の二三の事例を擧ぐるは必ずしも禮を缺けるものに非るべし。——予の知れる一大學敎授は、新體詩人なるの故を以て鹽井雨江の國文上の知識を危みたることあり。中江藤樹に私淑せる在野の一敎育家は同一の理由を以て、大町桂月の敎育家たる資格を疑ひしことあり。大野豐太氏の如きは、醫科大學々生として頗る熱心なる勉强者なるにも係らず、筑波會の一領袖、酒竹宗匠たるの故を以て氏を知らざる人の中には氏が醫學上の修養に信賴せざるものあり。——足下よ是の如き誤解は恐らくは詩人たる足下の上にも存するならむ。俳家たり、新體詩人たることは何故に學者、敎育者、實務家としての性格に累する乎。予は御歌所の長官たるの故を以て何人も高崎正風氏の人格を難ぜしことあるを聞かず。新體詩と俳句との作者は何故に短歌の作者と爾かく待遇を殊にする乎。酒竹の如きは、森氏の述懷を讀みて今より以後俳句を放棄せむことを公言せり、予は森氏の述懷と共に切に酒竹の憤激を諒とせむ。是の如きは實に社會の文藝に對する無形なる、而かも最も有力なる迫害に非ずや。

して小說家たる乎、氏が醫學上の意見は何故に信ずるに足らざる乎、何故に氏に托するに重大の事務を以てする能はざる乎。想ふて茲に到れば、今の社會が小說家を待つ所以のもの、思半に過ぎむ。嗚呼小說家は學術上の精確なる研究に勝え得ざる輕薄ゴマカシの人物安じて實務を托し難き不實放埒なる人物と思惟せられつゝある也、是れ森氏の場合のみならず、實に一般社會が了解せる小說家の概念なり。足下よ、予の如き者すらも、十年前一歷史小說を綴りたる事ある故を以て、時に風流韻事を解するものと迷惑にも誤解せらるゝとある也。想ふに是の如き誤解の爲に其の事業の上に重大なる損害を被りたるもの、若しくは是の如き損害を避けむが爲に其の本志に反して文藝界を去りたる者、當今第一流の大家と稱せらるゝ人士の中にも存することは、予の現に認むる所也。足下よ、小說家なるものが是の如く了解せらるゝ間は、斯道の振興頗る難事に非ざる乎。是れ予が是事を以て文藝社會の一大憂患とする所以也。

其五

足下よ、足下の詩人たるが故に予の言を枉ぐる事無かるべし。是の如き誤解は

き有難迷惑なりき、爾來予の同僚は皆曰く、森は小説家なり、共に醫を談ずるに足らずと。予の上官亦曰く、森は小説家なり、重事を托すべからずと。是の如くにして吾が官吏としての榮達は非常の妨害を被れり。是れ吾が文壇を退ける重なる理由也』と、予は是の文を讀で森氏の述懐に痛切なる同情を表するを忍び得ざる也。

足下よ、若し森氏と惡き者ありて是の文を評せむ乎、恐らくは氏を以て現世の名利を是れ求むる俗小人となさむ。然れども是の如きは全く氏の衷情を知らざる者ならむのみ。想ふに、氏は文藝の事業を以て人としての性格を傷くる者なりとする今の社會に憤激したるに非ざる乎。或は今の時是の如き謬見をして正當の理由を得せしめたる文藝社會其物に憤激したるに非ざる乎。果して然らば來るべき區々たる批評家の批議を顧みず、是の憤激を眞面目に發表したる森氏の衷情は予の切に諒とする所也。足下よ、文藝社會の大憂患は實に是の點に存する也。

予は森氏の篤學の士にして又篤行の士なるを聞けり。予は氏が論評の方法及び文體に依て是の風聞の空しからざるべきを信ぜり。然るに氏自らの語る所によれば、嘗て小説家の號を被りてより、上司儕輩又氏を信ぜざるに至れりと。氏に

雖も、彼等の多くは口體衣服の奉を盛にし、翩々として儕輩の間に誇揚するを以に、畢竟の樂みとなすものゝみ。老大家北齋が、年耳順を超え、尙ほ半風子を捫て技巧の修練に餘念無が如きは、今の世に絶えて其の例を見る能はざる所也。足下よ是の如きは獨り美術界のみに非ず、文學界に於ても毫も異なる無し。予は一代文藝の風格、今日あるを致す、一日の因由に非ざるを見る也。

其四

足下よ、予が今の社會に於て大不平に堪えざる事の一は、詩人若しくは小說家の性格を疑ふもの多き事也。予を以て見れば文藝の振はざる一原因は慥に玆に在り。希くは予をして是の大不平を述べしめよ。

足下既に知悉せるならむ。小倉師團軍醫監醫學博士森林太郎氏は新年初刊の福岡新聞に一長論文を寄せ、題して『鷗外漁史とは何ぞや』と云ふ一篇の文字、總て氏が胸中の不平を吐露したる者也。而して其の不平の重なるものは、氏が文壇に關與せるが爲に被れる一身上の損害を訴ふる所にあり。其の略に曰く『吾れ嘗て二三の小說を作れるが爲に誤て小說家の名稱を得たり、是れ吾にとりて是の上も無

て九十年の生涯を通じて赤貧洗ふが如く、殆ど活きる能はざるもの數々、而かも名聞を願はず、錢利を求めず、死に抵るまで汲々乎として書を事とするのみ。其の技大に售れ、其の名漸く高くして藝術の精進一日も休まず、死に臨て曰く、天我れに十年の命を假さば厘に書家の數に入るを得むかと。終身刻苦、名一世に遍くして尚ほ自ら足らずとするもの、眞に藝術を愛するの士に非ずや。足下よ、予は想ふ、若し今の時、北齋の如きもの兩三人あらば、藝苑の風色頓に革まらむ。予は今の世に大家の多きに勝えざる也。夫の少しく賦彩に巧みに、寫形に優れたるもの、相率ゐて自ら大家と稱し、高く自ら標榜して俗目を驚かすもの、比々として是れなり。其の技漸く進みて、所謂る老大家の群にあるものと雖も、一度び名を成せば忽ち自ら飽滿し、猥りに流派を樹て、或は恣に規矩を破りて放縱散漫の戲畫を弄し、高渾洒脫と稱して人を欺く。或は甚しきに到りては、己れの門下生をして代て書かしめ、自ら署號して己れの作と稱するものあり。足下よ、是の如きは今の繪畫界に於て現に見る所の事實也、吾等をして書かしむるものは、藝術の愛に非ずして名利の慾なり。素より二三子の現境以外に超然として、其の好むところに從ふもの無きに非ずと

飢何かあらむ迫害追放何かあらむ、死も亦彼れを奈何ともする無き也。吾等必しも凡ての詩人美術家を以て是の如き事例に擬せざるべし。時移り人異り、古の道復求む可からざるもの多し。唯事に藝術に從ふの士、若くは眞に藝術の中に自己の安心を有ち得む人、願はくは是の心を以て心とせよ。文人生活に關する議論は既に古りたるが如し、然れども予は是の點に關して切に詩人、美術家の熟慮を求めざるべからず。而して是の點より更に足下の進退に就いて恨無き能はざる也。——嗚呼殊に足下に向て是事を言ふの予が微衷は、足下先づ諒とせざるべからず。

其三

晩翠兄足下、文藝趣味の衰へたるは夙に心あるもの、慨嘆する所也。まことに藝術の愛無くして偏に談理に泥み、或は製作の事に從ふもの、靡然として風を成し、一代の好尚漸く救ふべからざらむとす、足下よ、是を奈何かすべき。予は先に北齋の事を一言せり、予は實に今の藝苑をして少しく北齋に私淑する所あらしめむことを希ふ也。北齋は一代の妙手也、勝川に學び、狩野に入り、土佐に參し、光琳、文晁、江漢を酌て一團と爲し、浮世繪の歷史に一生面を拓く、功や偉なりと謂ふべし。而し

外の幸と謂ふべく、詩人たる足下の進退に就いて秋毫も異を挾むべきに非ざる也。

然れども予は世の文藝の士、殊に詩人、美術家に對ひて切に反省を要むべきものあり。諸君は藝術家として素より相場師の利益を獲むと欲するものに非るべし。諸君は古の藝術家の傳紀を讀みて現世の福祉多くは彼等の上にあらざりしを見しならむ。大なる詩人、大なる美術家の迫害に斃れ、追放に死したるもの古來幾何ぞや。或は名閥世に高くして一身の衣食に苦めるあり、甚しきは身匹夫と共に賤役を事とし、或は道に餓死したるものすらある也。吁諸君よ、徒に彼等の事蹟を以て好談柄に留むる勿れ。彼等は何故に迫害に斃れ、追放に死し、貧苦に苦み、路上に餓死するまでも其の藝術を捨つる能はざりしや。現世のあらゆる苦痛を以てして、尚ほ其の一分の歩趨を枉ぐる能はざりし彼等が藝術上の安心の如何に悠遠且深大なりしかは、吾人の審に熟慮すべきところに非ずや。眞に藝術の靈火に燒かれたるもの、例へばミケランヂェロの如き、ダンテの如き、キュルヂルの如き、ハイヂの如き、北齋の如きものにありては、藝術は其の眞理なり、道德なり、宗教なり。彼れにして是を得ば是れ凡てを得る也、彼れにして是を失はゞ是れ凡てを失ふ也。貧苦寒

是の如きは暫く言ふを已めむ。足下よ、今の時に當りて社會の腐敗を助長する階級ほど富貴なるは無し。口に正義を唱へむ乎、是れ富貴を唱ふ也、官學に養はるるに非ざれば學者は生活するに由無く、權家に阿るに非ざれば詞客は其の道を求むる能はず。鈍帳芝居の俳優が黑塗の馬車に乘る間に、詩人は其の詩によりて下宿料をすら拂ふ能はざる也。足下よ、是の如きは今の社會也。凡そ官吏が其の八時間勞働によりて衣食する如く、人力車夫其の梶棒によりて妻子を養ふ如く、學者が其の思想によりて呼吸する如く、詩人は其の詩によりて生活すべきものに非ずや。詩によりて生活するは詩人の權利也。是の權利を妨害する者は社會なる乎、將た詩人自らなる乎、予は未だ是を審にせずと雖も、今の時に當りて詩人の迫害せられつゝあるは事實也、幾多の詩人は、是の保護無き迫害の下に追放せられたり。吁足下よ、是の如くにして追放せられたる詩人の數は恐らくは予が今數へ得るより は遙に多からむ。予は寧ろ文藝社會に充滿せる是の肅殺の風氣を望みて自ら屏息し、陽春の佳節に遇はずして早く萎縮し了りたる幾多無名の沙翁、ゲーテを憐む の情に勝えざる也。足下よ、想ふて是に到れば吾等が足下の詩に接するは寧ろ

し、際遇の人を動かし、青年の氣魄しらず〳〵の間に消磨し去るは吾人の親しく見聞する所にあらずや。足下よ、予は是の點に於て殊に醒雪、桂月、芥舟、敏諸子の昨今に恨み無き能はざる也。嗚呼詩人たり、文人たる、眞に天與の職分たり。一度び是の天職を自覺したるもの、爭でか暖飽を是れ意として甘ずべけむや。文藝の好尚を以て少壯の稱氣となさむか、卽ち知らず若し性を拄げ情を抑へて尙且つ口體の奉養を擇ぶものあらば、予は天下の最も哭すべきもの茲に存すと言はむ。予や詩人に非ず、又文人にも非ず、而かも尙ほ是の言を爲す、足下の近事に就いて心潛に平ならざる所あれば也。嗚呼詩人なる足下は遂に東京を去らざるべからざりし乎。

然れども足下よ、予の意を誤る勿れ、予安ぞ足下を以て麵麭の外に糧無しとするものならむや。足下の爲さむする所、乞ふ自ら是れを爲せ、若し足下にして恨むべからずむば、予は更に足下をして是の際遇あらしめたる夫の社會を恨みむ。予は如何に考ふるも、高等學校教授高等官六等は、社會が吾等の詩人を待遇する道としては、餘りに不倫なりと思惟せざるを得ざる也。

其二

嗚呼足下は何故に東京を去らざるべからざりし乎。必ずしも足下と予との爲に言はじ、予は是を以て文壇の誠實なる熟慮を要むるに足るべき一事項と爲す也。嗚呼足下は東京を去らざるべからざりし乎。足下は詩人也、世は足下を以て詩人と爲し、足下亦詩人を以て自ら居りし也。――願くは無用の遜辭を省略し、予に許すに衷情を以てせよ。予は詩人を以て生死せむとする足下の本心を疑ふ能はざる也。然らば足下は何故に詩人として、永く留まること能はざりし乎。或は謂はむ、シルレルの生涯には醫者なりしことありき、キュルテルは鑛山學士なりき、ユーゴーは政治家には非ざりしかと。洵に然なり、人は必ずしも其の本領に據りて生活するを要するに非ず、詩人なる足下が英語の教師たる、素より多く怪むを要せざらむ。唯予をして事實を語らしめよ。同人の間、文藝の士を以て任じたるもの尠しとせず、されど一旦職を他に求めて其の席少しく暖まるや、多くは寂焉として聞こゆる所無き也。先にゲーテを言へるもの、今はリードルを口にし、前に抒情詩を歌へるもの、後には文法を説く。恐らくは修養おのづから是間に存すべく、文藝に飛躍せむとせし當年の意氣、亦大に人を驚かす時あらむ。唯心境必ずしも一なり難

土井晩翠に與へて當今の文壇を論ずる書

其一

晩翠兄足下、數年以來詞人京を去る者何ぞ夫れ多きや。是を我が同人の間に求むるも、雨江先づ出雲に向ひて桂月是れに次ぎ、醒雪先には仙臺に赴きて今は山口に轉じ、鯉洋筆を懷いて九州に隱れ、華水京都にト居して書庫の宰となり、劍峰、嶺雲、共に海を渡りて南の方上海を指せり。嗚呼足下も亦京を去らざるべからざりし乎。今茲三月、吾が嘲風亦遙に獨逸に遊ばむとす、歸程預め期し難し。寧ろ意を決して共に西遊せむと欲するも、家に衰葛の遺無く、身に葬走の勞を絕たず、暫く是の紛々の間に佇立し、徒らに惆悵して已む、亦奈何ともする無き也。加ふるに年少氣銳、未だ幾微を解せず、數々人に誤られて世路の險巇を加ふ、自ら思ひ、自ら省みて心竊に平ならざるものあり。——嗚呼足下よ、願くは予を恕るせ。區々の私情を以て足下を累はす、罪是より大なるは無し。而かも足下東京を去るの一事は尙ほ予に於て一片の恨無き能はず。

は二あるのみ、曰く大に墮落するに非ずむば則ち大に興隆せむ。知らず足下の觀るところ果して如何、頓首。

（三十二年七月）

とを欲するや甚だ切なり、足下幸に僕の意を諒とせよ。

足下よ、世人往々晩翠を目して叙事詩人となし、『秋風馬前錄』『五丈原』『萬里長城』の諸篇を以て叙事詩となす。是れ僕の解する能はざる所也。如上の三篇は假りに詩學上の名稱を擬ずれば、バラーデの變態、若しくは考察的抒情詩と稱すべきもののみ。叙事詩は事件の叙述を本件となす、然れども晩翠の作は如何なる場合に於ても其の主腦は情想にあり、偶々事を記することあるも、假托して情想を抒ぶるの方便のみ。其の類似を西詩に求むれば、シルレルの『鐘の歌』Lied von der Glocke『逍遙』Spaziergang もしくはゲーテが『モハメットの歌』Mahomets Gesang の如きは、蓋し近からむか。例へば『逍遙』は、古代文明を追慕し、歴史の永遠なる反覆と自然の常住なる清新を對比して人生の悠忽を嘆ずるが如き、宛然として『萬里長城』の思想なり。而かも僕は未だ『逍遙』を目して叙事詩となすものあるを聞かざる也。

以上述ぶる所、支離脈絡無しと雖も、又以て文壇の近況を想ふに足らむか。足下よ、最も憂ふべきは人心の倦怠なり。作家は大いなる著作無くして早く著作に疲れ、評家は大いなる批評無くして既に批評に倦む、想ふに將來文壇の擇ぶべき進路

覺りぬ。嗚呼何物の犧牲か、祖國の自由に比して能く貴しと謂ひ得べきぞ。慈み深き父よ、願はくは兒の不孝を許せ。母の恐らくは泣き給はむを慰めよ。唯希くは兒が是の現下の幸福と安樂とを捨て、是の蒲柳の質を以てむしろ屍を戰場に暴すを以て、至大の榮譽とするの微衷を諒とせられよ。嗚呼兒は今月今日を以て一個の兵士となるべき也』。彼れは是の如くにして、二十有三の短生涯を祖國の祭壇に犧牲となしたりき。嗚呼足下よ、美はしきものは彼れの詩のみに非ざるなり、彼れの一生は、彼れの詩よりも更に美はしき詩篇なりき。而して彼れの詩篇の卷帙は祖國なり、其題目は正義なり、其文字は愛國敬神なり。彼れは是を書するに筆と墨とを以てせずして、其の血潮と生命とを以てせりき。彼れは實に自由戰爭時代に於ける獨逸國民の活ける紀念碑なりし也。

足下よ、僕のキルヲルを言ひて長きに失せるを咎むる勿れ。又今の我邦の文壇に何の關係ありやと問ふ勿れ。邦は獨逸にあらず、時は將に二十世紀に入らむとす、今の我が詩人に望むにキルヲルたらむことを以てするも得べからざる也。而かも彼れの愛讀者たる僕は、今の文壇の諸才子をして、篇中の趣味を解せしめむこ

義と呼ぶもの無かるべし、されど彼れは上天の照鏡を仰ぎて其良心の慫々を抑ゆることを敢てし得ざりし也。足下よ、我がキヨルヂルの決心の如何に美はしきかを見よ。維納の劇場に青春を夢みたるキヨルヂルは、アスペルンの凱歌の中に訴ふるが如き同胞の歎きを聞きぬ。擧國の民は、敵愾の涙を揮ひて祖國何處にあると叫びぬ、其の響きは遠雷の如く、キヨルヂルの胸を轟かせり。彼れは詩人としての天職は、文字を弄することに盡きざることを痛切に自覺し、獨逸國民として祖國と上帝とに對して爲すべき務めの宛然として目前に横はれるを目睹しぬ。時は來れり、彼れの起つべき時は來れり、筆を捨てゝ劍を取るべき時は來れり。正義と祖國と上帝と齊しく彼れの起つべきを命じぬ。彼れは人生の名譽は、時としては血潮によりて記さるべきものなるを覺れり。斯くて彼れは、維納府の安全と幸福と惜別とを後にし、其の最愛の佳人に別れ、單騎鐵馬に策ちて『琴と劍』の詩人となりぬ。足下よ、足下は是時彼れが其の父に送りたる告別の書を讀みしことある乎。『嗚呼父よ、獨逸國は起ち上りぬ、プロイセンの侯伯は獨逸國の自由を回復せむが爲に目覺めたり、見や是の運命に際會して、人生至貴の幸福と名譽とは何事を意味するかを

りき、然れども彼れが短生涯の遙に悲壯なるに若かざりき。獨逸は彼れに於て詩人たる愛國者を有せり。ゲーテが故國の自由を知らざる爲して其詩篇に耽り、ヘーゲルが萊府の大戰に際して是れ何の戰ぞやと問へる間に、彼れは其生血を濺いて故國の青山に活ける詩篇を書したりき。嗚呼『琴と劍』、彼れが詩集と、生涯と、墳墓と、皆是の二つのしるしによりていみじくも現はされき。

足下よ、彼れの生涯を追想するは、僕にとりて此上もなき愉快也。而して若し我が青年詩人をして是の愉快を知らしむるを得ば、僕は其の詩風に多少の影響を與へ得べきを信ずる也。げに維納劇場の劇詩家として、彼れが收めたる名譽と幸福とは頗る大いなるものなりき。彼れの父は『パルナスの山にも麓はしき空のみあらず』と言ひ送りて、彼れを戒めし程なりき。されど彼れが是の多幸なる生活の終りを告ぐべき時は遂に來りぬ。若し彼れをして祖國の運命を坐視し得るの人ならしめば、正義の屈辱を傍觀し得るの人ならしめば、はた同胞の困厄を顧みず、上帝の榮寵を侮蔑し得るの人ならしめば、彼れは其の多幸なる生涯を續けむこと素より易かりし也。良しや彼れにして斯くしたればとて、獨逸國中誰れ一人彼れを不

詩は餘りに憂鬱なり、餘りに多恨なり。薄弱なる哲學に本ける厭世的感情は、到る處に認むれども、未だ曾て丈夫千秋の意氣を見ざる也。彼等は從來の歌人を誣りて擬古者流となせども、僕を以て見れば、彼等の多くも亦さましく擬古詩人なり。彼等の詩は特に明治の今日に唱はるゝを須要とするものに非ず、今世紀の初めに出づると、前世紀の中頃に出づると、將た今日に出づると、寧ろ『偶然の撰擇』のみ。彼等の詩が時代の精神に遠かれることは、毫も今の小說家に異ならず。僕が近代主義に關して先に小說家に說ける所のもの移して直に彼等に擬す、必ずしも不倫に非ざるを想ふ也。

足下よ、詩人の生活や洵に美也。而して時代の精神に率先し、人道の爲に盡したる詩人の生活は、殊に最も美なる也。美なるものは啻に彼れの生活なるのみならず、是の如き生活によりて實現せられたる彼れの詩は、更に遙に美なる也。足下よ、僕がキヨルヂルを愛讀して措かざるは實に是が爲也。試に足下の爲に僕がキヨルヂルに對する愛慕の情を語る、可ならむ乎。

足下よ、我がテオドル・キヨルヂルは『琴と劍』の詩人なりし也。彼れは悲劇の作者な

もの、而かも其『若菜集』と『夏草』とによりて、幾何の麵麭をば得たりける。今や又都門を去りて信中の山野に飄零す、社會の詩人を待つ何ぞ一に冷酷なるや。足下よ、一言すれば、ゲーテが詩人の理想とせし所のもの、今の吾邦にありては現實たる也。

Ich singe, wie der Vogel singt,
Der in den Zweigen wohnet;
Das Lied, das aus der Kehle dringt,
Ist Lohn, der reichlich lohnet.
Doch, darf ich bitten, bitt' ich Eins:
Lass mir den besten Becher Weins
In purem Golde reichen.

今の詩人は實に鳥の歌ふが如くに歌ふのみ、歌は其の唯一の報酬なり。彼は酔すべき黄金の鍵を有せず、而かも其歌によりて『裕かに酬ひ』られざる也。是れ豈悲むべき理想の實現に非ずや。

遮莫、僕は今の詩人に於て慊焉たらざるものあり、是れ或は僕が一家の嗜好に過ぎざらむも知るべからず、幸に足下の高鑑を煩はさむ。有躰に言へば、今の詩人の

に非ずして、人の肺腑也。足下は我邦の多くの小說家が、無意義の冗長文字を臚列して、其觀察の精細を誇り、美文と稱し、寫實と唱ふるを見て、果して如何の感かある。僕を以て見れば、彼等は其精神に於ても、其文躰に於ても、近代主義を去ること甚だ近からざる也。

足下よ、新躰詩壇に就いては、僕の言ふべき事甚だ少きを覺ゆ。詩は今の世に解せられざる也、其罪詩人にあると社會にあるとは暫く問はず、詩の解せられざるは事實也。足下よ、是れ尤も悲むべき事實にあらずや。詩人は何れの世にありても、最も無害なる生靈なり。彼は人を殺さず、人の物を盜まず、人の女を姦せず、權勢を得むが爲に社會を毒せず、萬卒の枯骨によりて一將の功を望むが如き彼の知らざる所なり。彼は猶ほ蛺蝶の春に戲れ、蟋蟀の秋に唧つが如く、唯己れの感情を歌はむが爲に生れたるのみ。而して今の社會は、是の如き詩人をすら容るゝ能はざる也。足下よ、最近六七年に於て表はれたる詩人の數、甚だ少からざる也、而して彼等の多くは、今や歌はずなりぬ。足下は是間の消息に幾多の沈默せる悲劇あることを思はざるべからず。近くは藤村に見よ、彼れや晩翠と共に詩壇の牛耳を取れる

は決して新奇の論に非ざる也、若し僕の所論に於て疑ふべき點あらば、そは觀念を以て詩歌の所緣となしたる所に存すべし。色彩紙帛の繪畫に於ける、音響聲調の音樂に於ける、木竹金石の彫刻に於けるは、即ち文字の詩歌に於ける關係に均しからざる乎。詩歌の對象論は、是問題に本きて決定せらるべきもの也。然れども我が批評家は、僕の期待に反し、一も是の根本的問題に關して言を爲さゞりき。足下よ恐らくは我が批評家は是の點に關して僕と見る所を同じうせるなるべし。然らば則ち僕より改めて是問題を呈出する、可ならむ乎。

足下よ、近刊の『リテラリー、ダイヂェスト』紙上に於て、足下は一獨逸批評家のキップリングに對する意見を讀みたるならむ。彼れが成功の一祕訣として是の批評家の語るところは、正しく僕が詩歌の對象論を證明したる者に非ずや。彼れの語る所によれば、キップリングの一特色は、冗漫なる叙述を避くるにあり。彼れは必要なき塲合に於て、景物を描寫する事無し、是を以て讀者の想象は常に彼れの文字に隨て動くを得、明透快利行く處として佳ならざるは無し。彼れは文字又は聲調の美によりて人を動かすの迂濶なることを覺れり。彼れの訴ふる所は耳目に非ず、口舌

しと謂ふべし。動かされむことを恐れて聽かざるものは、既に初より動ける也。僕は作家たるものゝ自信爾かく薄弱なるものに非ざるべきを信ずる也。僕は今の批評家と稱するものゝ學識果して其任に勝ゆるや否やを審にせず、而かも凡そ著作家にして批評家の提撕に待つあるもの、今の我邦の如きは蓋し尠し。彼等の多くは人を見るの明無く、世を知るの識無く、幸に文筆の才を恃みて自家の狹少なる閲歴を塗糊するのみ。哲學と宗教とは彼等の有する所にあらず、所謂時代の精神は彼等に於て風馬牛のみ。所詮彼等は自ら行くべき道を知らざる者也。而して彼等にとりて最も不幸なりしは、其の早く名を成したるにあり。彼等の己れを知るの明無きや、一時の小成に安じて永遠の修養を思はず、世移り人渝りて尚ほ且つ往年の舊株を守る、遺れられざらむと欲するも豈得べけんや。而して彼等は人の漸く己れを言はざるを見るや、輒ち以爲らく、時尚卑くして我が作を解せずと、誰か呆然として其自惚の強きに驚かざらむや。自尊も茲に到れば寧ろ滑稽也。

足下よ、僕が詩歌の對象論に向て精讀の勞を給はりたるは、僕の感謝に堪えざる所也。願はくは後書更に足下の高見に接するを得む。僕を以て見れば、是の如き

にして、果して何物ぞ。彼れがあらゆる修辭上の苦心經營を以てして、遂に時代精神の一片をだに表現する能はずとせば、寧ろ憫むべからずや。而して是の如きもの寫實の名によりて呼ばる、蓋し服裝言語の末事を以て寫實の能事終れりとするもの、到底共に僕の近代主義を語るに足らざる也。而して足下よ、驚く勿れ、『大作は五年十年にして出づべきものに非ず』との訓誡は實に是の如き作家の口より聞かさるゝ也。捧腹絶倒せざらむと欲するも豈得べけむや。

足下よ、批評家と著作家と親善ならざるは、足下の言ふ如く慥に文壇の一時弊也。僕は批評家を以て自ら任ずるものに非ずと雖も是の時弊の矯正せられむことは萬々希望して已まざる所也。批坪家の著作者に對するや、往々徒に罵倒嘲笑を以て快とする者あり、是れ尤も避けざるべからず。然れども著作家の中、往々批評家の言を蔑視して、一に空論なりとするものあり、是れ亦嘉みすべき事に非ざるべし。罵倒時に可なり、嘲笑亦必しも不可ならず、唯要する所は自家一定の識見と、文壇に對する忠厚の念とにあり。作家の自ら重ずるもの、容易く評者の言に惑はざるや、亦素より然らざるべからず、唯他人の批判に遇うて輒ち耳を掩ふは、甚だ謂はれ無

に其の近代文明の解釋にあり。ホイットマン曰はずや、十九世紀と北米合衆國とありて而して我が詩ある、眞に已むを得ざる也と。文學も茲に至れば即ち一種の哲學也、一種の宗教也、一代の民衆が其の存在の意義に關して最も嚴肅なる訓誡を受くる所の倫理なり。ホイットマンが『民主政治の形骸』を描破したるが如く、キップリングは十九世紀末に於ける英國の帝國主義を鼓吹せり。而して佛のゾラ、魯のトルストイ、瑞のイブセン、皆是の近代主義の代表者なるとは、足下の既に熟知する所也。

足下よ、今の我邦の文士は、是近代主義の精神を解せざる也。潜に恐る、文壇の禍根は茲に存せざる乎。彼等は寫實主義を以て自ら居る、然れども是れ近代主義の寫實に非ざる也。烟眼なる一批評家は、既に是の事實を注意して、『時勢粧』に過ぎずとせり、是れ僕と見る所を同じうす。實に當今の第一流と稱せらるゝ紅葉の作を見よ、何處にか時代の影響ある。百年の後是を讀むもの、依て以て明治の風俗言語の一班を知るべし、而かも十九世紀末の日本文明に就いて果して何事をか告げらるべき。『金色夜叉』は、足下も知る如く、彼れが近年の大作と稱せらる。而かもそが吾人に告ぐる所は、青年男女の失戀談と、高利貸の内幕談と、遊蕩紳士の家庭等を外

スヰンバーン、ロセッチ、亦振はずして、今やキップリングの全盛を見る。是れ僕の近代主義と稱する所のもの也。近代主義は最も嚴正なる意義に於ての自然主義なり。詩の爲に詩を作るものは、近代主義に非ざる也。醜を醜として掩はず、美を美として衒はず、現實の中に眞理を求め、自然の中に理想を寓す、是れ近代主義の精神也。藝術の人生に於けるや、其の美を揚ぐるに非ずして、其の眞を現はすにあり、徒に空想に依據して人々自ら媚悅するは、僕の所謂る近代主義に非ざる也。人道博愛の旗章を掲げて新文明を呼ばはり、却て自然の要求を蔑視して人性の自由を抑ゆるものは、近代主義の與せざる所也。今や文明國の人民を虐ぐるものは、專制の君主に非ずして、彼等の所謂る人道と博愛と也。人は何故に其の本來の面目を祕密として掩蔽せざるべからざる乎。血と肉とを有する人に向て其の表皮を取り去るとを勸むるものは、却て人道の名によりて迫害せらる、是れ近代主義の敵とする所也。眞理は衣服を要せず、近代主義は最も嚴正なる意味に於ての寫實主義也。

足下は是の如き近代主義が、十九世紀文明の必然の生兒なることを認めざるべからず。近代主義の存在を擔保する者は、其の所謂る Heroic nudity にあらずして、實

き。僕は足下の爲に我が近松と馬琴とを說かざるべし、元祿の大阪、文政の江戸は、恐らくは今日の社會よりも甚だ多く詩的なるものに非ざりし也。足下は文壇不振の他の原因を以て、國家の多事に歸すと雖も、是れ亦僕の同ずる能はざる所也。猶ほアルプス山頭のヘヤベルが、千古の雪に笑ふが如く、藝苑の花は時に衰世を飾ることあり。人動もすれば曰く、自由と平和とは文學の父母なりと、然れども歷史は正に反對の事實を示せり。希臘の美術は、希臘人の自由がマケドニア人の爲に失はれし後にも、尙ほ其の全盛を續けたり。市と貴族との爭鬪烈しくして、宗敎道德の腐敗を究めたる時、所謂る尙古派の繪畫は以太別に起りたり。カルデロン、沙翁の劇詩は、フヰリップ二世、及びエリザベス女王の壓制の下に生まれ、ゲーテとシルレルとは、獨逸國の自由が殆ど失はれむとせる時代に其の不朽の詩篇を作りたりき。是れ足下の夙に熟知せる所にあらずや。往年マコーレーは、文明の進步は詩歌の衰頹を意味すと說けり、僕を以て見れば、是れ美は黃昏にありと說ける獨逸人と均しく、全く近代主義の文學を解せざる者也。

ロエル逝き、ロングフェロー遺られむとして、ホイットマン起りたり。テニソン去り、

友人某に與へて昨今の文壇を論ずる書

＊＊生足下

昨、來書に接して足下が今の文壇を思ふの情甚だ切なるを領せり、望河の情何ぞ堪えむや。書中僕に就いて言ふ所、敢て當らずと雖も、唯蹇々の微意を諒とするもの、足下の如きあらば、僕又多く望むところ無し。足下の言へるが如く、文壇の近狀は實に落寞を極めたり、是れ足下と僕とのみならず、あらゆる批評家の均しく認むる所の事實なり。唯著作家の或者は、說を爲して曰く、苟も一代の傑作と稱すべきもの、豈五年十年を劃して期待せられ得べきものならむやと。言や洵に善し、唯今の作家にして是を口にするに到ては、僕の到底首肯する能はざる所也。

文壇不振の病根は、時代精神の閑却にありとは、僕の再三反覆せる所也。足下は現代の物質的傾向を以て其最大原因と爲すと雖も、僕の見る所は聊か是に異也。物質主義は文壇の味方にあらずと雖も、必ずしも其仇敵に非ざるべし、要は當代の精神を解釋して、其理想に形體を與ふるものは、何れの時代に於てか成功せざるべ

發達は、從來の倫理と漸く乖離の實を表はし來れるを見る也。宗教と國家との關係は、改正條約の實施と共に將た新面目を見むとする也。哲學界には純理哲學的傾向漸く退滅して、社會學的、教育學的研究の漸く增進し來らむとする也。凡そ是等の事實は、將來の國家的人文に向て如何の革新を預約せむとする。明治の歷史は、改革の歷史なり、而して今や三十年にして再び一大飛躍の時機に際會せるの觀あるを見る。知らず我が小說家は這般の事實に對して如何の考察を遂げたる乎。是の社會風潮の急轉過渡に際して何ぞ獨り文學界の冷々淡々として相關せざるの甚しきや。文壇衰頽の原因實に茲に存す。

凡そ國家の人文は一體として發達すべし。文學にまれ、美術にまれ、其發達を永遠に成就せむと欲せば、是の國家的人文の中樞と調攝し、關聯して共同の生命を維持し、共和の活動を經營すべし。今の文壇は孤立の文壇也。例へば枝葉を根幹より截り去りて剪栽の美を誇らむとするが如し、久しからずして凋落せざらむと欲するも豈得べけむや。

(三十二年二月)

は國家の人文が内外日新の形勢に應じて如何の變遷を作しつゝあるやを知らず、將た又國民思想の潮流は其の一切の事物を率ゐて如何に活動しつゝあるやを知らず。彼等は時勢の現狀を知らず、又其理想を解せず、所謂る時代の精神と全く風馬牛たる也。而して一代の氣運沈默の中に轉移して復彼等の陳套を顧ざるに及ぶや、彼等は則ち激じて曰く、世俗の好尚卑くして又我れを解するものなし、己ぬる哉と。誰か其の自ら知らざるの甚しきに捧腹絶倒せざらむや。

吾人は敢て今の小說家の多くを目して時代の精神を解せずと言ふ、吾れ時代を解せずして却て時代の吾れに背けるを訴る、抑々何等の厚顏ぞ。沙翁、ゲーテにして是を言はゞ、吾人尙ほ是を恕せむ、誰か今の紛々たる小說家の口より是の如き大言を聞くに忍びむや。試みに今の時代を見よ、吾人が活動の氣勢は日に昂り、國民思想を擧げて方に一回轉の機運に迫れるの事實を見る。所謂る元老は政治界に於ても、學藝界に於ても、漸く凋落し去らむとする也。政治、敎育の社會に於ける日本主義と國家主義との爭は國民道德の變遷に伴うて將に一生面を開かむとしつゝある也。社會道德にありては、法治機關の充實によりて促されたる權利思想の

乃至修辭等に對する勞力や頗る多とすべし、然れども彼等は遂に時代を解せざる也。

時代を解するもの眼識なかるべからず。所謂る時代の精神は待合料理屋の席上に現はれず、又粹人社會の通語によりて說明し得べからず。一國人文の根據を洞察して內外古今の歷史的趨勢を達觀するの明あるに非ざるよりは、得て解すべからざる也。是を以て古より大文學者の多くは、同時に識見一世を拔ける大思想家也。彼等は常に天下の人を傾聽せしむるに足るべき人生觀と社會觀を其胸裡に蓄へし也。

吾人は敢て問はむと欲す、本邦現今の我小說家中、果して時代の精神を解釋し得る者ありや。吾人は必ずしも哲學を說けと謂はず、憲法を講ぜよと謂はず、唯時代の精神と國民思想の活動を簡中に觀取し得べき見識ありやと問ふ也。政治、法律、經濟、道德、宗敎、凡そ是れ等は國民的人文を經緯する最大の要素なり、是の如き最大の要素を取り去て是を夫の小說家なるものに問へ、必ずや答て謂はむ、是れ吾曹の關知する所に非ずと。是の如くにして彼等は彼等の可憐なる閱歷に依傍し、其の小々的眼前に映じ來る所のものを以て、即ち是れ人生の眞相なりとなす也。彼等

時代と國民と、若しくは既往に於ける特定の歳時と方處とを離れて、一向平等普遍の人道を具象的に表現せむとするが如きは、吾人を以て見れば泰山を挾むで北海を越ゆるよりも難きなり。吾人は是點に於て摸倣は藝術の第一義なりと云へる命題に於て千古の眞理を確認す。

久しく唱へられたる我文學衰頽の原因は、吾人を以て見れば、畢意今の文學者が時代の精神を解せざるの罪に歸すべき也。彼等は社會の觀察者を以て自ら任ず、而かも彼等の觀察する所は彼等の社會のみ。待合遊廓の通語を知り、藝妓、メカケの內幕を探り、遊蕩社會の應酬に通ずるは、尙ほ依然として今の小說家が第一の資格とする所也。彼等は時に「特別知識」なるものを有す、是れ特別の階級、特別の職業に行はるゝ特別の習慣言語の謂なり、彼等は必要も無き所に是の「特別知識」を振廻して其の「ツウ」なるに誇る。「ツウ」ならざる一切の文學は、其感情思想の如何に論なく、凡て彼等の「幼稚」として擯斥する所なり。彼等は時に「文體」に苦心し、「送り假名」に苦心し、「振假名」に苦心し、俗語に對する新文學の製造に苦心し、題名の語品に苦心し、而して所謂る社會批評家なるものゝ一輩一笑に苦心す。彼等が所謂る社會觀察

彼等は能く時代を解釋せり。而して能く、是時代に適へる理想を洞觀して是を示せり。畢竟彼等は何れも大なる際物師たりし也。時代の精神と大文學は實に是の如き因緣を有せる也。然れども吾人は如上の歷史的事實あるの故を以て、凡ての大文學必ず時代の精神を代表すべしとは謂はざるべし。若し眼識今古に曠く、三世の因果一瞭の下に洞然たるが如き大天才ありて、能く歲時方處の拘束を打破し完全なる具象の體形によりて、平等無礙の人道を顯現し得るものあらば、是れ實に文藝史上の一大偉觀なり。沙翁の如きは蓋し是に近きものなるべし。然れども是の如きは絕無稀有の例、千萬年にして尙ほ僅に一人あるを保すべからず、素より以て一般の則と爲すべからざる也。

凡そ個體の特性は、既存の物象に就いて其外形を觀れば、極めて簡易明晰なるが如しと雖も、其の由來する所の因緣や極めて複雜、全知全能者に非ざるよりは得て究盡すべからざる也。是を以て全く自己の經驗を離れ、純然たる空想によりて新に具象的一個體を顯現せむは、不世出の大天才に非ざるよりは、殆ど不可能の事に屬す。一個體猶ほ且然り、況むや一時代一國民に於てをや。夫の自己を包圍せる

必ずしも永世に不朽なるを妨げず、要は只其方法如何に存するのみ。吾人乞ふ試に二三の事實を語らむ乎。

ダンテの『神曲』に見よ、是れ彼れが一代の煩悶に比擬せる中世の道德史のみ、特に其後景はフロレンス當代の社會のみ。歳時に於ても方處に於ても、彼れの描ける所は歷史上の一小區域なりと謂はざるべからず。然れども誰か神曲を以て一時の物なりとする乎。中世は去り、フロレンスは渝れり、されど『神曲』は猶ほ新しき意味を以て讀まるゝに非ずや。ミルトンの『失樂園』に見よ、是れクロムエルの革命に相當せる清敎的思想の躰現のみ。而かも十九世紀は尙ほ彼れを許して大詩人となすに非ずや。ゲーテの『エルテル』に見よ。是れ當時の唯理的思潮に反抗せるセンチメンタリズムの一餘波として見るべきのみ、今や唯理論は古りにたり、感情派の思潮も已に其波濤を收め了むぬ、されど尙ほ清新の慰籍を齎すにあらずや。佛蘭西の革命思想はユーゴーを生めり、獨逸の自由戰爭はキルテルを起したり、印度婆羅門の再興はカーリダーザを産し、日本の封建時代は馬琴を出たしぬ。彼等が一代の傑作として後世に傳へらるゝもの、孰れか其時代精神の發表に非ざるべき。

時代の精神と大文學

古今東西の文藝史上動かすべからざるの一個の事實は「大なる文學は大いなる人物と等しく最も好く時代の精神を代表せるものなり」と云ふこと是也。所謂時代の精神を代表する事を翻して、直に世俗の好尚を迎合するの意に解せば、恐らくは語弊あらむ。唯能く當代國民の感情及び欲求に最も明瞭なる發聲を與へ其の憤悱する所の前途に最も具象の躰形を附し、見よ爾等の理想茲に在りと告ぐるものあらば如何。目見る能はず、耳聽く能はず、口はた言ふ能はず、唯其胸中の悶々を擁して、空しく闇中に摸捉せる一代民衆の胸は、猶ほ一絲響きて萬管是に和するが如く、翕然として是に趨かむ。是の如きは所謂時代の聲たり。

或は謂ふ一時の爲にせるもの果して能く永世に易らざるを得る乎。時代の精神や美し、唯歳時方處に拘らざる八面無礙の人道を以て事とする、更に佳なる無からむ乎と。答て曰く言や甚だ好し、唯歳時方處を離れたる人道なるものは抽象の觀念たるべきも、未だ其象の體形を備へ得ざるを奈何せむ。一時の爲にするもの

樂を歌ひ男女の關係を赤條々に暴露して、『是れ十九世紀也』と叫びたるを見、吾人は北米合衆國の文明を聯想して、一種悲痛の感覺に打たれずむばあらざる也。帝王神權國の魯西亞に於て、トルストイは世界の公民なりと宣告せり、基督の訓を引いて兵役の義務を否定せり、二萬人のドゥーコーボルチは、是の敎訓の爲に往年信敎自由の爲に英國を去りたる清敎徒の如く流氓として亞米利加に赴きぬ而してトルストイ自らも亦國外に放逐せられむとす。吁魯西亞の文明を語るもの、トルストイの如く明らかなるはあらざる也。

借問す、今の我が邦は一のホイットマンを要せざる乎、國民は悦然として、イプセン、トルストイの聲を聞かむことを望めるに非ざる乎。內村鑑三氏と齋藤綠雨氏と、吾人其の聲の更に大に、其の筆の更に長からむを祈る也。（三十二年四月）

非ざる也。されば其の作に詩歌のまことの生命無く、唯文字章句を巧みに排列して俗目を喜ばしむる一種の玩具たるに過ぎざるは、是非も無き次第とや謂ふべき。是れ詩壇の外道なり、吾等の所謂る僞詩人なり。

吾等は最早や彼等の作り泣き、作り笑ひに飽き果てぬ。吾等の欲するは靈魂の聲なり。良し其の聲は訥れるとも、吾等にもその響きを返すべき靈魂あり。そは靈なるものゝみ靈を知り得べければなり。

去れ、僞詩人よ、文法と古語とを以て詩を造らむとする僞詩人よ。今は是れ詩歌革新の時機なるぞ。

（三十一年六月稿）

文明の裏面

ホイットマンの亞米利加に於ける、イブゼンの北歐羅巴に於ける、トルストイ伯の魯西亞に於ける、是れ皆其の國文明のカウンタバランス也。曰く『十九世紀と北米合衆國とあり、而して吾が詩の生まるゝ已むを得ざる也』。ホイットマンの詩は實に北米合衆國の文明を裏面より描破したる者なり。彼れが肉體の美を歌ひ、酒食の

僞詩人とは何ぞ

僞詩人とは何ぞ、詩才なくして詩人たらむとするもの、是れ。

由來我邦には一種奇異なる風習あり國學者とし云へば必ず同時に歌人にして漢學者とし云へば必ず同時に詩人たり。かく文法家語學家が詩歌を詠ずることをば一種の先天的職業の如く心得世人も亦敢て怪むことをせざるは甚だ謂はれ無き事ならずや。詩歌は別種の才を要す、訓詁釋義、文法語法の知識とは全く其の類を異にす。

是の奇異なる習慣は現に今日に於ても尚ほ持續せられつゝある也。今の所謂る新體詩人と稱する輩も、其の十中の七八は、皆多少國文の教育を受けたる學者なるが如し。彼等は決して詩人たらむが爲に國文を學びたるにはあらずして、唯國文を學びたる序に詩人たらむとの野心を起したるものゝみ。所謂は國學者とし云へば同時に歌人たる在來の奇異なる習慣によりて其の新體詩を作るもの多少古語雅語に通じたりと謂ふの外、何等詩才詩情の特に常人に勝れたるものあるに

ンの讃美を事とする者にあらず、されど敢て天下の讀者に告げむ。今は是れ彼れの知らるべき時にはあらざるか。何となれば彼れの知らるゝ時はやがて僞りの世の終りを告ぐべき時なればなり。吾等豈詩歌を以て殊に言を爲さむや。

（附言）ワルトホイツトマン（Walt Whitman）は北米の詩人にして數年前に死せり。其の詩集を「草葉」と云ひ千八百九十二年フヰラデルフヰアなるダビッド、マッケー出版社より出版せり。

ホイツトマン（再び）

（三十一年五月）

我が邦人が外山博士の新體詩を痛罵したる間に亞米利加人はホイツトマン氏を歡迎せり。今の我が國文學者にして氏の詩篇を讀まば果して如何の感あるべきや。

詩歌は文字の音に非ずして靈魂の響なり。矯飾僞善の世に是の赤條々の人生を歌ふものは誰ぞ。吾れは百千の僞詩人よりもむしろ眞率なる一ホイツトマンに行かむ。

過ふて茫然として爲す所を知らず、往々罵りて詩に非ずと謂ふ。げに平仄と韻脚とを以て詩となすものゝ眼より見れば是れ正しく詩に非ざるべし。然れども所謂る詩なると詩に非ざるとは幾何かホイットマンを輕重し得べしとするぞ。彼れにとりては最も明白に最も有效に其の豫言者的思想を表はし得れば則ち足る。平仄と韻脚と彼れに於て何爲るものぞ。彼れは遊戲の爲に詩を弄ぶものにあらず僞りの世と僞りの人とを直さむが爲に其の筆を執りたるなり。彼れは玩具を以て詩を過するものゝ爲に書かず人生の最も嚴肅なる問題に對して煩悶するものゝ爲に其の解釋の光明を拋ちたるものなり。彼れの眼には人物あるのみ。

來らむとする詩人よ、來らむとする演說家、歌謠者、音樂家よ。

今の時は吾を知る能はず又何の爲に吾れあるかを答ふる能はず。

されど爾是迄知られたる者より更に廣く、更に健全に、更に大陸的なる者よ、起てよ、何となれば吾を知るものは爾なればなり。

（來らむとする詩人、全集十八頁）

何ぞ其の自ら信ずることの厚くして自ら居ることの高きや。吾等はホイットマ

や其の量の多きに堪えずして而も其の然る所以を覺らず。ホイットマンは正に是の時弊の救濟者を以て自ら任じたるなり。

げに大なる詩人は常に其の時と其の國との醫師なり。彼れは吾等に生命を齎らせばなり。アーノルドが、詩は人生の批評なりと云ひけむも、恐らくは是の意味に於てならむ。ワルト・ホイットマンが詩は、即ち十九世紀の批評なり、殊に合衆國文明に對して最も大膽に且根本的なる打撃と忠告とを加へたるものなり。其の言直截にして簡明、簡明にして深遠、かの婉曲の『詩趣』に乏しと雖ども、一氣直に人の肺腑を衝くところ、さながら預言者の聲を聞くが如し。

彼れの聲は琴の音にあらずして太鼓の響なり、感情の響にあらずして意志の聲なり、而かも最も健康に最も體力ある人の口より出づる意志の聲なり。彼れは一度びも泣かず、悲まず、恨まず、常に笑ひ、樂み、踊る。彼れは成すべき事業の多きを見て自ら慰む、過去を顧みて死兒の齡を數ふるに遑あらざるなり。彼れの訴る所は耳にあらず、目にあらず、人の肺肝なり。靈なるもの能く靈を知る、彼れが技工の詩唯是れのみ。ロングフェローの婉麗を好み、ロエルの雄渾を樂むもの、ホイットマンに

冷嘲骨に徹す。更に人智の淺くして爭ふに足らざるを諷して曰く、『一個の小兒あり、草花を手にして吾れに問ふて曰ひけらく、草とは如何なるものぞと。あゝ吾れ如何なる答を是の小兒に爲し得しぞ、吾れの是を知らざるは猶ほ是の小兒の如きなり』（同上）、又曰く、

（吾身の歌、全集三十一頁）

吾れは人の始と終とに就て談ずるを聞けり、されと吾は始と終とに就て談ずる者に非ず、（同三十六頁）

蓋し彼れ、夫の生ながら死せる世の學者に憤る所ありたるなり。一切事物は人の爲に存す、人、物の爲に存するに非ず。人を幸ならしめむが爲の知識は、今や却て人を驅役し、勞死せしめずむは已まざらむとす。其の知に於て一日の長あるものは、宇宙の無盡藏を仰かず、却て他を瞰下して愚なりと呼ぶ。是の如くにして起りたる爭は、人生と何の爲す所ぞや。十九世紀の文明は自殺の文明なり、己の爲に墓穴を堀りつゝあるの文明なり。人は其の末に走りて歸を忘れざれば已まず、世は僞りを養ひて自ら斃れざれば已まず。かつて健康の爲に砒石を食ひたるもの、今

最も體格善き母の住める町のある處に、
其處に大なる都府あり。

吾等是詩を讀む時は、北米合衆國の文明が如何に深くホイットマンの胸裏に懸れりしかを想像ずるを禁ずる能はず。『十九世紀と合衆國と、而して此の詩集あり』と云ふ言の愈々旨味深きを覺ゆるなり。彼れは是の方便的文明と共に形式主義を排斥して曰く、

Creeds and schools in abeyance,
Retiring back a while sufficed at what they are, but never forgotten,
I harbor for good or bad, I permit to speak at every hazard,
Nature without check with original energy. (p. 29, Songs of Myself.)

ホイットマンは又今の學者と稱する輩の空理を談じ、空想に耽り、却て人生の目的を遺却するを笑ひ、且つ謂へらく、

營々として學に力む、是れ何爲るものぞ、學びたるものにも學ばざるものにも事實は事實なり。吾れは求むる所なし。——吾れは只視、踊り、歌ひ、笑ふ。

殊に物質的、方便的の文明に對しては最も痛切なる打撃を加へたり。曰く

爾等が永續すべしと思ふ所のものは大なる都府か、

又は殷盛なる工業國か、又は完備せる憲法か、又は堅牢なる汽船か、又は花崗石と鐵とに建てられたるホテルか、又は工業上の大工事か、域壘か、戰艦か。

已めよ。是等は其物自らの爲めに存在するものにあらず、其の用を終れば用無きものとなり、やがて來るものは破壞のみ。

大なる都府とは大なる男又は女を有する所なり。

よしそは二三の茅屋より成れりとするも尙ほ全世界の最大都府たるを失はず。

大なる都府は何處にありや。

奴隸なく又奴隸の生人なき處に、

平等が事實の上に於て證明せらるゝ處に、

最も友誼厚き朋友の住める町のある處に、

兩性の純潔なる町のある處に、

最も健全なる父の住める町のある處に、

集に跋して曰く、『十九世紀と北米合衆國と、是れ是の詩集ある所以なり』と(全集四、二七頁)。是の大なる公憤と感激との更に鋭どく表はれたるものは實に其の平民主義の鼓吹にあり。『今や民主政治は有力なる人々の爲に妨げられて又當初の氣力無く、一切を擧げて死せる平面とならむとす』。死せる平面なる哉、死せる平面なる哉。北米合衆國の民主政治は正に是の一語の中に盡されたり。今の世に二大壓制國あり、東半球の魯西亞と西半球の合衆國と是れなり。唯其の人民に臨むや、彼れは兵力を以てし、此は金力を以てす。專制と虐待とは則ち一のみ。彼の叫ぶ自由の聲によりて得る所の者幾何ぞ、文字と音響は遂に事實とならざるなり。富は權制を產み、權制は實益を收む、殘る所の名や卽ち自由と平等のみ。されど形式主義の弊や、尙ほ是の空名によりて正義を說く。されば四海同胞の旗幟の下に國を樹てたるものゝ子孫が、宗教の名によりて異人種迫害を行ひ、人道の名によりて『帝國』主義を實行しつゝある間に、彼等は尙ほ其の自由と平等とに謳歌するをやめず。是れホイットマンの坐視するに忍びざる所なり。されば所謂る富、所謂る權力、所謂る紳士は彼れが詩中に認られず、人は其の『人』たるの力と性とによりて初めて尙ばる。

む。左に掲ぐる數行の如きは、我邦にて英語を讀み得べき程の敎育ある讀者にのみ示めし得べきなり。

It is I, you woman, I make may way,
I do not hurt you any more than is necsary for you,
I pour the stuff to start sons and daughters fit for these States,
I press with slow rude muscle,
I brace myself effectually, I listen to no entreties,
I dare not withdraw till I deposit what has so long accumulated with in me.—

p. 89.—A woman waits for me.

然るにホイツトマン自らは、是の數行にして萬一省略せらるゝ如きことあらむには、寧ろ『アダムの子等』の一篇を擧げて是を抹殺すべしと慷慨せり。されど果して是れ氏が所謂るheroic nudityとして容認すべきものなりや否や（全集四三六頁參考）

さはれ、氏の肉慾主義に就いて如何に批難あるにもせよ、吾等は氏をしてかゝる文字あらしめたる所以に就いては其の志を諒とせずむはあらず。ホイツトマン其の詩

されどこの偉大なる哲學上の信念は、ホイットマンに於て重きを爲せるものにあらず。僞りの世を覺醒せむが爲に歌ひたる彼れが詩は、常に實在の人生を遺れざるなり。良し宇宙を觀じて "vast similitude which interlocks all" となすも、良し人生を以て『永遠なる旅行』となすも、彼れの心は常に個人てふことを離れず。『大道の詩』一篇に到り、是の思想は澎湃として波の如く湧き立ちぬ。曰く萬物は個人の爲に存す、曰く、精神、自然、政府、財産の訓への後には常に必ず個人の訓あり。曰く、宇宙の凡ての學理は個人に集まる。

The whole theory of the Universe is directed to one single Individual,—namely, to You.

是に到りて北米合衆國民の個人主義は、其の赤條々の姿態を以て明に表はれたりと謂ふべし。其の思想雄健壯大、實に一世を呑吐するの慨あり。世の肉慾を奬勵したるを以てホイットマンを詬るものは、うはべに浮べる塵芥の汚れたるを見て其の下に洸洋たる大洋の水あるを知らざるものゝみ。

されどアダムの子等』の或部分は、決して清淨なる詩と稱するを得ざるべし。『一婦人我を待つ』『若くば』狂喜の一時』の如きは、猥褻として當然批難せらるべきものなら

地球の天に麗れることの疑ふべからざる如く、地球上の凡ての物は精神的理想に向て走る。

……

區々たる差別は何爲するものぞ、——男にまれ、女にまれ、力あり、愛あり、又清きものは、凡べて是宇宙の永遠不易なる秩序に於て常に人に益あり。

是の永遠不易なる宇宙の秩序に於て、勝敗榮枯生死の多く喜憂するに足らざるを述べて曰く。

爾等は壯きもの、老いたるものゝ如何になりゆくかを知れりや。

爾等は又女子小兒の如何になりゆくかを知れりや。

彼等は何處にか生存す、而して幸ひなり。

夫の小なる芽だも世に死なるもの無きを證す。……

凡ての物は前へ〳〵と進むべし、かくて何物も滅びず。

死とは人の思ひし如きものに非ず、更に遙に幸なるものなり。

（未來の詩人、全集三十四頁）

オヽ吾れ敢て言はむ、是等は肉體の各部と詩なるのみならず、亦精神の各部と詩なりと。

オヽ吾れ又敢て言はむ是等は精神なりと。

（同、全集八六―八頁）

是の如き肉體の讃美は、『アダムの子等』全篇を通じて到る所に表はる。吾等は牧童樵夫を以て特に人生を表示するに足るものなるかを疑ふと同じく、肉體の精神に比して特に貴むべきものなりやを知らず。されど今の時と世に於て是の野に呼べる人の聲を聞く。誰れか清廉なるホイツトマンをして是に至らしめたる夫の所謂る文明なるものゝ缺陷を認めざるものぞ。

されどホイツトマンは、吾等を以て見れば徒に肉慾の快樂を重じたる淺薄なる詩人に非ず。豫め人生世界に關りて良し朧ろげながらも、或る偉大なる信念を蓄へ、是の偉大なる信念を以て現世に臨みたるとは、蓋し疑ふべからざるが如し。『アダムの子等』は人體を唱ひ生殖を唱へたるのみならず、又一切物象に精靈あることを歌ひ、男も、女も、飲食も、呼吸も、是の精靈の圓滿なる發達に缺くべからざることを歌ひたり。

肉體は精神の如く大切なるものに非るか。
若し肉體にして精神ならずとせば精神とは何物ぞや。

（アダムの子等、全集八一頁）

吾れもし我が愛せるものと共にあらば吾が望み達せり、
彼等の間に歩みて其の體に觸れ、暫しは其の頸の廻りに輕く吾腕を纏ふ——
斯くしたりとて何事かあらむ、
吾れは是の上に望むべき樂無し、其の時吾れはさながら海に泳げるが如し。……
凡ての物能く心を喜ばす、されど是の如く心を喜ばしむるもの無し。

（同、全集八三頁）

爾等は曾て女の肉體を愛せしことありや。
爾等は曾て男の肉體を愛せしことありや。
爾等見ずや、是の如きは、世界の凡ての國と時との凡ての人にありて正に均しきことを。

……（健全なる身體の各部を列擧し）……

No shutter'd room or school can commune with me,
But roughs and little children better than they.

The young mechanic is closest to me, he knows me well,

The woodman that takes his axe and jug with him shall take me with him all day.

實在の人生は決して自然に離れ得べきものにあらず、是れホイットマンが人生に關して有せる根本の思想なり。げに文明とは自然の制御の謂なるべし、されど然るが故に自然を輕蔑し、其要求を卑しむべき理は何處にある。肉の外に靈なく、靈の外に肉なし。吾等が身體の健やかに、鮮やかに、美はしく、全からむことは、最も貴むべき自然の要求にはあらざるか。誰れか肉の樂しみを靈のそれよりは貴からずと謂ふか。世は食の旨きを求むるを卑しとなす、今や男女の愛情だに是を『詩的』にせざれば認めて美はしとせられず。所謂る文明は將に凡べての肉慾を亡ぼし盡さずむば已まざらむとす。吾れ却て『人道』の名によりて是の暴行を非認せむ。

かくてホイットマンは唱ふて曰く、

生を汚すは死を汚すと等しく惡しきに非るか。

ワルト・ホイットマンこそ是の僞りの世と、僞りの人と、是の似而非文明とに反抗して社會人生の眞面目を發揮したる北米現代の詩人なれ。ワルト・ホイットマンは徹頭徹尾人生の詩人なり。實在せる人生の詩人なり、自然の要求を重じたる詩人なり、平民の詩人なり、凡ての形式主義に逆ひて人間の大なるを唱へたる詩人なり。凡ての人を包める覆面を褫ぎ取りて其の祕密をば眞理として暴露したる詩人なり。終りに彼はげに一個の亞米利加人として其の國民性を最も明晰に、最も忠實に唱へたる詩人なり。——あゝ斯く言はゞ吾れホイットマンを褒め過ぎたるか。

實在せる人生は彼れが詩の命なり、彼れが詩の到る所に表はれたる勢力は一として其の根據を實在の中に有せざるは無し。されば實在の觀念に乏しき人にとりて、彼れの詩は餘りに強きに過ぐるなり。所謂る詩的と稱せらるゝあだなる想像は彼れに於て爲す所無し。彼れの聲は生ける人の聲、彼れの心は活ける人の心、彼れの描き刻める人は繪畫にあらず塑像にあらずして、活ける人體なり。されば書によりて世を觀じ、學校の窓より人生を眺めたる人は、彼れの詩を解するを得じ。彼れの訴ふる所は汗と血と涙と誠とを以て實在の人生を釋き得たる人にあり。

りて迫害せらる。されど所謂る人の道とは有るものを無しと云ひ、黒きものを白しと云ふの謂なるか。さらば是れ僞りの道に非ずや。等しきものは等しきものの母なり、僞りの中に何處に貴むべき人の道ありや。眞理は裸かにても眞理たるべし。さるにても覆面の中に呼吸する人は是の大自然の活ける眞理を如何に見るらむや。

げに大自然の眞理の如何に大いなるよ。憐れむべき人々の裝ひ、飾り、欺き、僞りつゝある間に、一切を押し包める大自然の眞理は、其の一分の歩趨を枉げざるなり。生くべき所には生あり、死すべき所には死あり、水は流れ、山は峙ち、空は長へに碧し。春來れば花咲き、秋來れば霜降り、日は常に東西し、月は永く盈虧す。裝ひ、飾り、欺き、僞れる人、ばたこの大なる眞理を如何にすべきぞ。愚かなる彼等はすべての物人の如く詐はり易からざるを知るに及び、是世を憂きものと思ひなしても尙ほその僞りを捨てむとはせざるなり。

僞りの世なるかな、僞りの人なるかな。形に拘はりて其の物を斥け、名に泥みて其の實を棄て、末に走りて其の本を遺る。顧みて人に問へば、是れ即ち文明なりと。

誰れか人の知識を進みたりと謂ふ、進みたりと云ふはまさしく僞りの知識にあらずや。人は肉の外に靈ありと謂ふ、されどその靈は却て肉のしもべたるにあらずや。人は物の始めと終りとを說く、是れ彼等が所謂る知識なるものなり。されど過ぎたると來るべきとを知りて、却て今のうつゝを知らざらむには、是れやがてや粟を倉につみて却て餓に死するものにあらずや。彼等は形なきものゝ美を知れども、形あるものゝ更に美なるを思はず。自然の懷に育てられたる彼等は、今や將に其の母を忘れむとす。世を擧げて人は知識の爲に傷けられ、却てそを義の爲に仆れたる人の血潮に較べむとす。あはれ彼等如何なれば恨み悲み嘆きつゝも、尙ほかつかの知識なるものを貴ばむとはするぞ。

げに世を擧て人は覆面の中に呼吸せり。あはれ彼等如何なれば其の本來の面目を祕密として掩ひ隱さざる可らざるか、將た掩ひ隱さむと欲するか。彼等は怒るべき所に喜び、悲むべき所に笑ひ、苦むべき所に樂むをもて、自ら其の行ひの高きを誇る。自然の要求を蔑視して人生の自由を弄ぶは果して爾かく貴むべき事なるか。血と肉とを包める人に對ひて其の表皮を取り去る者は、則ち人道の名によ

ワルト、ホイツトマンを論ず

僞りの世なるかな。皮一重この髑髏を包めども、尙ほさすがに人の形に露はる。されど梟の暗きに集ふが如く、形無きもの僞りの巢となりぬ。

人の言ふなる美はしき心とは、自ら欺ける心にあらずや、詩人の唱ふ美はしき歌とは、かゝる僞りの心に阿ねる歌にあらずや。されば其の掻いならす琴には僞りの響あり。

今や肉を求むるに忙はしき靈は、却て肉を卑しきものと言ひなせり。暗きを求むる人は、却て光の眩ゆきに強いて笑を含みぬ。饑えたるものは食を見て顔を背け、人は其の路に仆るゝを義しと稱ふ。

自由、平等、博愛、あはれ新文明の旗章のいかに美しきよ。されど自由とは自ら欺ける人の晝笑ひて夜泣くの謂なるか。平等とは生けるものを稱へ、死せるものを譏るの謂なるか。博愛とは雨の如くたゞしき自然の力を私し、却てその爲に困める者をしもべとして養ふの謂なるか。

と赤誠とのみ。

さはれ、英雄論の飜譯は吾等の甚だ喜ぶ所なり。されど譯者の意、今の世にカーライル的經世論を勸むるにありとせば、吾等潛にそが人の子を誤ることあらむを恐る、敢て一言す。

（三十一年六月）

するの力ありと謂ふべし。

吾等は茲にカーライルの評論を旨とする者にあらず。唯哲學者、經世家、歷史家として彼れを論ふものゝ甚だ當らざるを言ひたるのみ。世に往々小カーライルを以て自ら居るものあり。其の眞摯と狂熱とは吾等是を諒す、されど其の幼稚なる神祕論を移して現世の經論策に擬せむとするに到りては、遂に其の可なるを知らさる也。あはれ詩人にして經世家の假面を被れるもの、必ず世を毒し人を誤らむ。彼れ若し自ら假面を被れることを覺らざらむには、人是を外より褫落せざるべからず。

終りに英雄論の譯者に問はむ、彼れ亦カーライルを見るに經世家を以てしたるにはあらざる乎。晩翠曰く、物質的文明の弊に堪えざる今の日本は須らくカーライルに學ぶ所あれと。あゝ彼れに學ぶは何よりも易きこと也。現に神祕論は無學なる宗教徒、慷慨家の得意とする所にあらずや。されど學び得たる所、是を何事に施すべしとするか。遮莫、吾等は何れの世に於ても迷信を奬勵する經綸策の利益を認むる能はず。もし彼れ學びて益あるものならば、そは彼れが詩人としての狂熱

カーライルのみ。

げにテニズン、ジェレーが詩人たるの意味に於て、カーライルは詩人に非ざりき。されど平仄なく、韻律無きことを外にしては、彼れの文字は概ね是れ詩篇のみ。こはカーライルを知るものゝ夙に首肯せる所なるべし。人或は彼れを批評家と云ふ、されど彼れがものしたるゲーテ、若しくはバルンスの評傳を讀みて、そを詩ならずと謂ふ程のものあらば、其人の批評家と謂ふ所の言、亦多く典とするに足らざるべし。既に詩人として彼れを見れば、哲學者、經世家、歷史家としての彼れに於て累ひとなれるものゝすべて其特殊の價値を復活して、茲にトーマス・カーライルてふ一大詩人を體現し來る。何となれば迷信も、淺薄も、穢氣も、其他のすべての缺點も一度び詩界の雲翳を隔つれば、更に却て一段の光彩を添え來るべければなり。而して彼れが天稟の赤誠は、其暗啞の音、斷續の聲に一道の靈氣を與へ、聽くものをして覺えず感奮興起せしむ。げに彼れの眼には涙あり、彼れの胸には熱血あり、彼れの唇には火炎あり、言美ならず、語麗ならずと雖ども、沸々直に人の肺腑に迫る。其迷信と、淺薄と、穢氣と却て其情を激し其意を強うするに足る。實に彼れは期せずして人を魅

以て詩となせるもの、ヘルデル、シレーゲル等が發達論的の獨逸史學が彼れの神祕哲學と抱合して、如何に英雄論の一篇を成しゝやは、甚だ想像し難からざるなり。畢竟彼れは是方面に於ても一個の詩人のみ。

さればカーライルは哲學者にあらず、經世家にあらず、又歷史家にもあらずして、一個の詩人のみ。詩人たる彼れの本領の認められざるは、彼れにとりて最も大なる不幸なるべし。若し哲學者として見むか、彼れは猶ほ小兒の如きなり。其の言ふ所條理なく、證驗なく、靦然たる一種の譫語のみ愚かなるもの、迷信あるもの、狂癖あるものは彼れを高しと謂はむ。されど冷淡なる眞理の思索者を如何すべき。若し經世家として見むか、空想暴論に於て誰れか彼れの右に出づるものぞ。彼れ素より時勢に激して起てるなるべし、されど彼れは毫も時勢を救ふの方法を知らざりき。彼れもし多小の警醒を世に與ふるを得たりとすれば、そは彼れが詩人としての勢力のみ。もしそれ歷史家としては、彼れは疑もなく最も無學なる一人なり。彼れの英雄論は言ふまでも無く、佛蘭西革命論のやゝ見るべき者を以てするも、所詮は一篇の變態敍事詩に過ぎず。見來れば彼れに於て取るべきは詩人としての

イル崇拜者と雖どもよもや是點を回護するほど沒理的ならざるべし。

世を憤る者の言として彼れの聲を聞かむ乎、吾等はその眞摯なる熱情に動かさるゝを禁ずる能はず。げに幾百千萬の生靈を載せて、是の限りなき歷史の過程を歩みゆく大なる人生に、一カーライル無しとせば、そは餘りに單調に、餘りに均整に、又餘りに活氣に乏しき人生に非るべきか。吾等に代りて是の限りなき希望をば絕對の威力として讃美するものは、吾等何時にても是を歡迎すべし、是れやがて世に詩人なるものゝ存在を須要とする所以にあらずや。されど是を以て直に人生の經綸に擬するものあらば、誰れか其稚氣を笑はざるべき。吾等は詩人としてのカーライルを認むれども、未だ經世家としてのカーライルを知る能はず。

彼れを一個の歷史家として見むは亦是れ彼れを知る所以に非るべし。英雄論一卷是れ畢竟無韻の詩篇のみ。人文の歷史は偉人の傳記にあらず、謂ふ所の六種の英雄を以て世界史の神髓となす如きは、放誕の極みのみ。されば、彼れの英雄論は史傳にあらずして、實は名を偉人に藉りて自己の懷抱を暢べたるに過ぎず。彼れが所謂英雄を重じ過ぎたるは、殆ど吾等が思料の表に出づ。想ふに彼れは史を

り淺はかなるよ。誰れか『サーター・リザルタス』の時空論を一哲學者が眞面目の意見として聞かむことを思はむや。所詮彼れの世界觀は極めて單純なる詩人的神秘說のみ。

是の幼稚なる神秘說は卽ち彼れが宗教にして、又彼れが社會人生に對する規準なり。而して彼れの是を率るや、その天より稟けたる一種の厭世的性癖を以てしたりしかば、其人生觀なるものは極めて偏頗なるものなりき。されば彼れはマコーレー卿の如き穩健摯實の人を出だし得べき『アングロサクソン』の常識をばさべて虛僞として斥けたりき。

依て以て經驗派の哲學を罵りたる彼れが迷信は、今日果して如何ばかりの價値ありや。神秘說は知識無きもの、若くは知識を得るに堪へざるものゝ其愚昧を掩はむ爲のこよなき甲冑なり。若し人そを意識せずと云はゞやがて是れ迷信のみそを高しとして稱ふる謂はれやある。神を云ひ、靈光を云ひ、天啓を言ひて、一切の知を非拒する詩人的神秘說ほど、世に稚氣ある者は無し。そを空想の詩として樂まむは則ち可、以て人生世界の規準となさむは殆ど小兒の事に類せずや。今のカーラ

ものを、世人は驚きの眼を擧げて其處に百千の意義ありとなしぬ、世は罵られながら彼れの聲を義しと聞き、彼の知を深しと稱へぬ。設令ひ狂へりとも火は以て燒くに足る、彼れは其烈々たる情火を以て天稟の赤誠を鼓舞し、暗啞叱咤その斷續の聲を放ちて一世に呼號しぬ。世は遂に其響を反へしぬ、かくて神祕家たり、淸敎徒たるトーマス・カーライルの名は靑史に鏤刻せられて永く英吉利文學の寶庫を飾りぬ。

是の如きは吾等の眼に映ずるカーライルなり。げに當時の英吉利は、彼れの如き人物の感化によりて其の文明の進路に一段の反省を加へたるなるべし。さらば彼れの聲をきゝて其響を反へしたる國民は賢しと謂ふべきなり。されど菴英は常食とすべからず、特殊の人は其用や特殊の時代に待つあるを知らざるべからず。トーマス・カーライルげに彼れは一個の人物なるべし、されどその人物たる所以はそも何處にある。吾等常に人のカーライルを談ずるを聞きて、心潛に疑ふ所あり。

彼れを以て哲學者とせむはこよなき誤りなるべし。自國の經驗派の哲學に滿たざる所ありてそを僞學と嘲罵したるは、言ふまでも無く彼れが個人としての偏見に基く。彼れがその神祕哲學の料にとて持ち來れる獨逸の觀念論の如何ばか

されど其の觀念論はます〳〵彼れの神秘説を神秘ならしめしのみ。一切知識の門戸を鎖ざして偏へに靈界の見るべからざるに憧る、何物の力か能く彼れを如何すべき。やがて彼れは昂然として一世を瞰下し、己れに同じからざるものを目して凡て虚僞と呼はりぬ。かくて獨逸哲學が其故郷にシライエルマッヘルとスエデンボルグとを養ひし間に、英吉利國は茲に極めて狂熱に富める一個の清教徒を現じぬ。

斯く書し來れば、吾等にカーライルを貶するの意あるが如し、されど暫く吾等をして其の公しきを遂げしめよ。

神祕家にして清教徒たりしカーライルが人を罵り、世を慨きける聲の如何ばかり壯快なりしかは、吾等が茲に述ぶるまでも無かるべし。げに彼れがおもては、彼れの崇拜者の言ひけむ如く、輝きを以て黑みたり、其眼は梟の如く物の暗きを透し、其口は其の暗き處に光ありと叫びぬ。曰く理想、曰く無限、曰く靈光、曰く天啓、曰く不可知、曰く不可見、彼れは凡知には測りがたき幾多の文字を列ねて、宇宙を記號とせる其の所謂神なるものを表はさむと煩悶せり。彼れに於て暗中の摸捉に等しき

なりと謂ふにあり。果して然らば、國民の憂を以て憂とせる晩翠が志は吾等の諒とすべき所なるべし。去りながら吾等茲に聊か言ふべきの事あり。

有體に言へば、吾れは嘗てカーライル氏が最も熱心なる愛讀者の一人なりき。かつて氏が『サーター・リザルタス』とこの英雄論とが吾几上に二つなき友なりし一時ありき。否吾等は、英語を解せる我が青年學生の多くが、是事に關して吾等と經歷を同うしたるを疑はざるなり。想ふに、其生涯の或時期に於て、バイロンを愛し、エルテルを好みたるが如く、誰れか一度びはカーライルを喜はざる者あらむや。それは彼れに於て青年壯士に喜ばるべき謂はれあればなり。

彼れの是世と是人とを見るや、一切の實在を無視して記號となし、虛無となせり。彼れは人に於て肉を見ずして靈を見、世に於て盛衰を見ずして天啓を見る。彼れは其耳と其目と其理性とを信せず、聽くべからざるもの、見るべからざるもの、解すべからざるものを眞理として仰ぎたり。一切の知は彼れに於て爲す所無し、彼の依りたのむ所は一の感情のみ。恍惚ム微、不言不知のエクスタゼのみ。宇宙は是れ神の記號、彼れが神祕說の綱領唯是の一語のみ。彼れ獨逸の哲學を學びたりき、

カーライル氏の英雄論の翻譯に就きて

新體詩人を以て聞えたる土井晩翠が筆に成れるカーライル氏が英雄論は、是ごろ春陽堂より公にせられぬ。吾等先づ英文學の寶庫を飾れるこの一明珠を邦文にものしたる勞に對ひて、深く譯者に謝する所無かるべからず。

カーライル氏の故郷なる英吉利國には、かつて氏の存在を德としたる時代ありき晩翠は我邦の今の時をも是の如き時代なりと思惟したらむが如し。彼れ是の譯書に序して曰へらく、

> 舊信仰既に廢れて新信仰未だ興らず、靈界嚮導の光暗中に沒して民心其の憑依する所を知らずといはば、トーマス・カーライルの言豈に一考の價無しと曰はむや。嗚呼東海の君子國長時の懶眠を破り、世界の大道に立ちて、三十年間物質的文明の利害已に斯の如し。泰西近世史跡に照して本邦の現狀を顧みば、本書の譯述未だ必ずしも徒勞ならざるを知らむ。

言ふこゝろは、日本にこの三十年の間物質的文明を重じたるが爲に、靈界の信仰を失ひて民心歸する所を知らず、こはまさしくカーライル氏が神祕說に聽くべき時

るを自覺せざるべからず。而して是境界を超て其利弊の孰れかを決定する事を ば美を樂むの情に任せず、飜て冷靜なる道理心に訴ふるの習性を馴致せむとを要 す。是の如き習性を馴致するの方法如何。曰く學ぶの一事あるのみ。人は必ず しも現在の世間にのみ拘泥すべきに非ず、唯改善と云ひ改革と云ふ、其の然るべか らざる所以の理を決するものは、飽迄實世間に對する歷史的並に含有的批評に基か ざるべからず。

予は以上の言を以て今の空想的論客及び經世家の座右に呈せむと欲するなり。

（三十一年三月）

其物の無形無聲にして其の美を樂むの感とそを實にせむとするの情との境域一目瞭然たらざればなり。

されば今の人平等を說き博愛を說くや說者聞者共に其の美はしとのみ眺むべきものを誤て現實にせむとするの過なることを自覺せず、そを稱へて高尙となし、深遠となす。而かも今の鎌倉を立帽子時代の鎌倉となさむとするの痴と相埒することを悟らざるなり。又世に『一國の强大なるは土地權力の大にあらずして大人物を有する事なり』『一美術家の巧妙なる製作は一國家の富よりも貴し』『沙翁は英國よりも印度よりも貴し』などゝ我は顏に言ひなすものあり、是等は一個の詩的空想としてもしくは語樣（フヒギユア）としては、其の美はしきを美はしとのみ見て樂むべきものならむ。然れどもそを賢げに又高尙らしく、一個の實世間に對する主義として主張するものあらば、其痴態寧ろ憫笑すべからずや。

されどかゝる一面の弊のみを見て其他面の利を顧みざらむは、經世の爲として其策を得たるものならじ。吾等是弊を捨てゝ其利をのみ收めむと欲せば、詩歌、小說、宗敎等に就きて美を樂む心と、そを實にせむとする情との間に明確なる境界あ

想、例せば自由と云ひ、博愛と云ふ如きものも、そが情の産物なる限り、素樂むべくして現はすべきものに非ず。現はして利なしと云ふにあらず、其の弊あらむと慮ればなり。

誠に道德に關する空想美の如きは、是利弊の尤も大なるものなり。そは其の高尚深遠なるらしき狀あるが爲に、吾等が是に對する反應の情に一段の强さを加ふればなり。

吾等湘南に遊びて鎌倉覇府の舊趾を訪ひ、厚打の立烏帽子に萠黄の狩衣着け、黒金巻の無反を横へて鏢鉦の鞍に打跨り、青額の僕に水口とらせたる武士、或は烏帽子に小結して絹紋紗の直衣に白き大口の袴を張らせ、白金造りの細鞘を佩きたる貴公子などの俳徊する古を回想して、更に由井ヶ濱に紅髯兒俳徊し、八幡宮前に汽笛の聲喧しき今を見ば、其往日の何となく美はしく懐かしきを覺えなむ。然れば其の美はしく懐かしきが爲に誰れか今を革めて古となさむとするものあらむや。而かも、道義の事、其現實に相應はしからざるは鎌倉の今昔にも等しきものから、猶ほ現實の主義として多少の貴むべき理由あるが如く見ゆることあるは、畢竟道義

るとは、即ち吾等が所謂詩歌の兩面のはたらきなり。而して是に反應して其空想を實にせむとする心は、意識としては一つながら、其の實世間に及ぼす影響の上にては更に利弊の二面あり。其利の喜ぶべきこと猶ほ其弊の忌むべきに均しきこと、已に例を引きて說きたるが如し。吾等は是の所謂美感と實感との混合を以て、敢て純美の成立を害するものとは言はず、是事に就ては他の塲合に臨みて別に說くべき說あり。只茲には實世間の見地より其弊の意外の邊に存することを說かむとするのみ。

吾等は詩歌、小說、宗教等をば人心中の同種類の作用に出づるものとなす。即ち旨として實驗知識以外に構へたる想像の上に立つものは、其形に於ては、多少の差あらむも、其質に於ては等しく人心の情的作用に出づるものとなす。さればそを構ふる動機となるものは、主として美を樂むの情にあり。詩歌小說は言ふを待たず、宗教も亦是と少からぬ因緣を有するを見る（是事精しくは他日に讓る）。さるからに宗教の本義は樂むにありて現はすにあらず。樂むべき筈のものを現はさむとするに及びて遂に詩歌通有の利弊を見る。獨り宗教のみならず、道義に關する諸種の空

折にも、其の美はしきを樂む心と、それを我が有にせむず心とは、また異なれることを大方は自覺するなり。唯形なきもの、例へば神、祖國、戀愛、道義と云ふが如きものゝ場合には、是二者の境域甚だ明ならず、隨うて其美を樂む心は知らず〳〵それを實にするの心に移りゆき、己れは美感の中に止まれりと思ひながらも、まことは實感の部に入りて、利慾のしもべと爲れる例し世に珍らしからず。詩歌の利害は共に概ね是折に生ず。

されば愛國の歌に感激して覺えず劍を執て起つものは、其行爲が明瞭なる理性の分別に基かざる限り、樂むべき筈の歌をば誤て現はさむとし、知らず〳〵實世間の利慾の巷に走り入れる者なり。試みにかゝる人の心を察すれば、其の血を流し命を殞す際にありて、己れの身命を捧げてだも露悔しからずとする所のものは、或は詩歌の理想美ならむ。是美を樂むの心は、何所しかそを實にせむとするの心に移りゆけるとには思ひ到らず、又其詩歌の理想美と實世間の現態とは如何の關係に在るものなるや等に就ては毫も悟る所無かるべし。

是の如く詩歌の空想美に同感してそを樂むと、是に反應してそを實にせむとす

として斥けらる。あらゆる理想は過去にあり、喩へば白日の明確を捨てゝ月夜の漂渺たるをのみ喜びぬ。

月の夜を美はしとのみ觀て樂まむは妨げじ。たゞそが爲に日の光を醜しとして斥けむ人あらばこれ詩歌の空想を移して實世間に擬するなり。詩歌の弊はこゝに起る。あはれ中世派の詩人の中、是弊に連坐せしもの幾人ぞや。チーク是れならずや、リヒテル是れならずや、ユーゴー、カーライル是れならずや。彼等の作の中にはまゝ大なる思想あり、唯其の現世に寄せたる望みは極めて淺薄なり。所詮樂むべき筈の詩歌をば現はさむと務めたればなりき。

こは一つの例のみ。げに是のけじめを忘れたるが爲に、賢きものも愚かなる者となることあり、愚なるものも賢き者となることあり、基く所は利弊孰れをとれるかによる。

總じて言ふ時は、形ある感覺美には、人は是差別を忘れ難し。それを忘るゝは形なき空想美の場合に多し。

美人の美はしきに憧れて、それを我が有にせむと思ふはあるべし、されど爾か思ふ

是れを潤色したる所謂中世騎士の氣質の如きは、洵に煙を隔てゝ天上の人を望むが如し。今の世の殺伐無味なるに較ぶれば、中古の風尚人をして覺えず神往せしむ。中世派はやがて是氣運に乘じて人心の革新を企てぬ。要は尾花枯れ伏す當代の野に、中古文藝の典雅なる花を植ゑ付けむとするにありき。

されどこは歷史の上にこそいみじき緣りもあるべけれ、まことは謂はれ無き業なりき。否詩歌の空想として靜に樂まむにはこよ無き料ならむも、實世間に寄せたる望みとして見る者あるに及びて徒に世の亂れを加へたるのみなりき。過ぎし世は引きしぼりたる梓弓、放てば再び返へすべきに非ず、中世派の詩歌亦正に是思想を表はしたるなりき。

中世派の文學は其空想をばまたく悟性と離さむとするなりき。所謂『フヮンタスチク』の文學なりき。其詩歌には形の整へる無く、其人は個性と云へるものに乏し、唯夢の如き事柄の中に限りなき渴望の鎖を繫ぐのみ。さればこはまさしく理性を沒し、個想を沒し、唯美はしき空想の中に混沌たる感情を樂まむとするなりき。是に於て昔がたりは歷史に代り、傳奇は小說に代り、實世間の一切は詩料に適はず

にして成されたりき、宗教革命も是の如くにして成されたりき。我が維新の改革も二十七八年の大勝も何れか是の如くにして成されたるに非ざるべき。げにゲーテが言ひけむ如く、其詩中の人たるに於て最も大なるを得べければなり。

されど經世の眼をもて是を觀れば、斯からむは詩歌の利益の一面なり。事に實世間に從はむものは更に其弊害の他面を見ざるべからず、人の大なる謬り、大なる罪は是けじめを看過するの弊に坐すると尠しとせず。

歐洲文學の歷史を讀める人には言告ぐるまでも無し。嘗て是世紀の初めに中世派と名げられたる思潮ありて、或時はほと〳〵全歐羅巴の人心を司配せしことありき。さても佛蘭西大革命、及びそれに續きたる奈翁の暴力とによりて、大陸諸國の文明は殆ど其根本より撼かされ、物質の上にも精神の上にも、ありし秩序の破れたる樣は、嵐に靡ける枯野の如くなりき。人は漸やく其呼吸に苦しみあるを覺へぬ。見渡す限りの天に望みの光未だ地に上らず、十九世紀の新文明の何物なるかは容易く認め得べからざりき。時の人は等しく嘆嗟の胸に思ひけるは、あはれ過ぎにし昔の慕はしきかな、任俠を經とし、愛情を緯とし、基督敎的博愛主義を以て

には喜びて其血潮を絞りき。彼等のキョヰルはいみじくも歌ひき『是れ王家の關り知る所の戰に非ず、十字軍なり、神聖戰爭なり』と。

當時の獨逸人の心の底には大なる詩歌の流れあり、多くの詩人の歌は其うはべに現はれたる波紋に過ぎざりき。キルヘルム・フォン・フムボルトによりて組織せられたる伯林大學が、ヘーゲル派の哲學の傍らに是の國民運動の爲に其の有名なる羽檄を草せし時、鑛山學士にして劇場詩人なるキョルヂルが其父に告別して『祖國我を招ぐ、今や筆を抛て劍を執るべきの時來りぬ』と呼ばりたる時、フリードリヒ・シンーゲルが其の有名なる Frei ist von Gehuld nicht Einer を叫びし時哲學者なるフヒテが其死に臨み、萊因河邊に於ける獨逸兵の勝利を聞きて『吁、我が病癒えたり』と喜びし時、吾等は全獨逸の人心に大なる詩歌の炎を見る。げに大なる詩歌ならずや。其妻と子と親との爲に涙を濺ぎ、祖國の自由の爲には血を流せる詩歌は、あはれ、大なる詩歌ならずや。血も涙も是の偉大なる感情の熱火を鎭むるに足らざりしなり。

革命の歷史、戰勝の歷史は到る處にかゝるためしを示せり、北米獨立是の如く

なりき。帝王にも乞食にも同じ價を附くる程の平等と自由とをば、如何なる詩人が是よりも明に歌ひ得べきぞ。心の渦へたる時の人には是れやがて精靈のパプテスマなりき。彼等は詩歌として是を樂むのみをもて足れりとせず、是世と是國と是人とを、是福音に稱ふものに造り更へむと望みたるなりき。所謂佛蘭西大革命は其結果なりき。されば是革命のまことの意味は、斷頭臺上のルイ十六世に在らず、ダントン、マラー、ロベスピールにあらず、將た又全歐洲の侮りとなりたる佛蘭西が忽ち起りて其政體を變更し、那の如き短日月の間に全大陸を其鐵蹄の下に踏みにじり、近くはカルヽ大帝の領土を超駕し、遠くは人をして羅馬帝國の全盛時代を想起せしめたる奈翁帝の大勢力にも存せず。まことは佛蘭西國民の其血潮といのちとをもて綴りたる、形ちある一篇の大敘事詩にてありしなり。

自由戰爭時代の獨逸は、かゝる例しの幾個をば吾等に示めしき。まことに奈翁の苦しめより奮ひ起りて是國の獨立戰爭を全うせし國民は、其のキョルチルよりも、其のアルントよりも、其のルュッケルトよりも大なる詩人なりき。人は其の自ら想像したる詩中の人たらむとて其劍を執りぬ、祖國の青山に其の一字を刻まむが爲

くなり。夫の世事破れて補綴に遑無き時、かゝる理想の摸型に投じて世の有樣を改造せむと企つる、所謂革命の幟を樹てしものこそ不世出の偉人として千古に稱へらるべけれ。すべて斯からむ人はおのが理想をば美はしとのみ見て靜に樂むべきに非ず、更にそを我が物にせむとて動けるなりき。

是れ詩歌或は美的空想の利益の一面なり。

革命、自由、獨立の歷史の何れか、かゝるためしに非るべき。クロムエルは言葉無き詩人、其革命の空想は形なき歌なりき、彼れに代りて歌ひしものはミルトンなりき。其歌の響を反へしたる國民は、そを歌としてのみ讀まず、歌としてのみ樂まず、形ある生命ある人と世とをもて、是詩の理想を現はさむと務めたるなりき。

モンテスキュー、ルテール、ルソーの自然主義は誠に美はしき詩歌なりき。彼の時デカールト以來の哲學は幾多の學系を產みたれども、人はたゞ新學語の逆迎に忙殺せられんとし、倫理の標準は學說の浮動と共に準の定めなく、宗教は其の新しきと舊きと、共に是を統一するの力無し。文學界に於けるセンチメンタリズムは益々是紛糾に油するのみ。あはれ是時『自然に歸れ』と唱ふ、誠に野に呼べる人の聲

得べき事にあり。

借問す、今の小説家は是點に關して什麼の覺悟かある。嗚呼靈火一閃、國民性情の核子に點ぜよ。河嶽の流峙、日星の光耀、其れ何者か是を壅塞するを得む。

（三十一年二月）

詩的の兩面と其利弊

誠に美はしきを美はしとのみ打見やりて樂み得べくむば、世に人の罪の如何ばかり少かりなむ。又物の美はしきを鏡の裏の姿とのみまもりて實世間の事にいさゝかも關はらざらむには、世の人のいさをしの如何ばかり微かなりけむ。

人の心は一つにて、物の觀方には二つあり。美を樂むの情は、そを我が物にせむとする思ひと、相は變はれども體は同じ。其の埒やゝもすれば外れて二つのもの互に交はるげに人の罪もいさをしも共に是れよりぞ初まる。

吾れ史を讀みて人間の大事は美的空想の所生なることを思ふや久し。げに志高き人の美はしと觀む程のものは、現在の時と處とを離れて一往我理想の界に赴

るものは實に其の勸善懲惡の大主義に非ずや。彼れは是點に於て慥に文人功名の祕訣を解し得たるものなりき。

何を以てか是を言ふ。

彼れの小說は、今日より見れば、其技工の拙なるもの多きは言ふまでも無し。其事例の怪奇にして人物の不自然なる、又强いて地を作り、務めて理を構へ、時として老農故事を說き俠客道を談ずるの奇觀を呈したる、將又務めて知を擧げて情を抑えたる、何れも小說の體を得ず。唯其の勸懲主義のあるあり、百年の後凜乎として尙ほ生氣あり。實に彼れが唱道せる是主義こそ我國民性情の現世的道義的傾向を投射して尤も明斷なるものなりしなれ。殊に其の力を極めて描寫したる武士道の如きは、任俠氣に勇む大和民族の尙武的氣象を皷舞し、讀者をして嚮慕興起の情に勝えざらしむ。實に彼れが小說は、幾多の缺陷あるにも係らず、其の國民的なるの點に於て長く後昆の翫賞に資すべきなり。

而して吾人の尤も馬琴に於て貴しとする所は、我國民が彼れの作によりて慰籍と敎訓とを求むることに於て、同時に國民性情に尤も健全なる進步の動機を與へ

や先づ國民性情を言はざるべからず。

今や幾多の小ゴットシェッドは到る處是れあり、然れども未だミルトンを拒みたる一瑞西派だにあるを聞かざる也。安ぞ一の大レッシング無きを怪まむや。

今の詩人小説家は果して我國民の性情を解するか。吾人が彼等に對して言べき所唯是れのみ。

セルヴンテス、カモエンスの詩人たるや、何故に英、佛、獨にあらずして特にイベール半島にありや。ゲーテ、シルレルの詩人たるや、何故に英、佛、以にあらずして特に獨逸にありや。抑もダンテは何故に英國の詩人たらずして以太利の詩人たるか。彼等の不朽なるは各々其國民的詩人として國民性情を發揮したりしが爲に非ずや吾人は是點に於て我曲亭馬琴を偉とせずむばあらざるなり。彼れの作一度び世に出づるや、當代の荒唐なる草雙紙、浮艶なる浮世草子、無趣味なる實錄、仇討物に倦厭せる社會は、翕然として是に赴くこと水の低きに就くが如かりしは何が爲ぞ。彼れの該博なる學識や、雄麗なる詞藻や、將又巧妙なる脚色や、素より其流行に力ありしならむ、然れども一世の風尙を化して文化以來の小説界に一生面を拓發したる

謂寫實主義の弊、是に到て極まる。而して其端を啓きたるものは實に坪內逍遙が『小說神髓』の一書にあり。

吾れは玆に逍遙の舊著を難ずるものに非ざるなり。實に彼の如き時代にありて彼の如き說を爲す、矯弊の立言として寧ろ應病與藥の旨を得たるものと謂ふべし。唯其後に來るもの、是一面の理を看取して直に全般の事に充て、遂に一世の文學を誤るに到る、深く慨嘆すべきなり。

然れども既に去るものをして去らしめよ、今は卽ち是極弊の文壇に對して、其根本的革新を斷行すべき時機にあらずや。是を爲すの法、唯國民性情の滿足にあり。是に於てか小說家は自家の偏狹なる嗜好を捨て去て、國民に就て其意識を擴張せざるべからず。作家今日の覺悟は旣に其第一步に於て其道を誤れり。其技愈進みて其作愈行はれず、畢竟非國民的文學なればなり

（三十一年三月）

曲亭馬琴

今の時に當りて日本文學の爲に其前途を劃せむとするの誠意あるものは、必ず

せず、而して國の民唯其兵たらざるを恨みとし、一朝令の下るを待ちて商は牙等を捨て、農は鋤鍬を拋ち、學者は其書と筆とを擲きて共に銃劍を握らむことを期せし時、彼等小說家は冷眼にして世上を看他し去り、一人の其筆に火して愛國義勇を唱へたるものあらざりき。偶々二流以下の小作家が戰爭談を著はすあれば、彼等は却て際物師として擯斥し去りたるに至りては、吾れは殆ど彼等小說家に國家的觀念の存否を疑はむと欲するなり。勢是の如きを以て、戰爭と文學と殆ど相知らざる爲して通過し去りたりき。想ふに當時の小說家は、不幸にして我國家の沒落に遭遇するも、尙ほ其戀愛談の補綴に日も亦足らずとせしならむ、否らざれば中夜月明に乘じて亡國の殘府を訪ひ、是好詩的題目を與へたる上帝の惠を感謝せしならむ。あゝ國民は是の如き文學者と何の爲す所ぞ。

彼等は何を以て實世間を賤しむか。ゲーテが其母國の運命に冷淡なりしの故を以て、誰かアルント、キルヒナー、ケルトウーランドを詩人ならずと謂ふか。世界の苦痛を歌ひたるレーナウは、熱心なる愛國家なりしに非ずや。吾れは我小說家の實世間に冷淡なるを見て、曾て洛陽少年の唱へたる文學亡國論の、強ちに齊東野人の語に非ざるを認む。所

蓋し尚武義勇は我國民の一特性なり。一言の然諾を重じ、甘じて身命を抛ち、己を知るものゝ爲に一死を顧みず、是れ豈所謂武士俠客の精神に非ずや。濶達物に拘らず、而かも意氣相感ずれば死生を以て相許す、是れ慥に我國民の一部理想的人物なり。故に吾れは想ふ、浪六小說が一時那の如き大流行を極めしは、畢竟是一事國民性情を解釋して其肯綮に當りたるものあればなりと。今日弦齋、澁柿園諸子の小說が、批評家の鑑賞甚だ喧しからざるに拘らず、紅葉、柳浪、諸子の作よりも遙に多くの讀者を有するの事實も、一部の理由亦是によりて解釋せられ得べきのみ。吾れは實に夫の國民的性情を蔑視して、徒らに讀者嗜好の卑きを嘆ずる、今の滔々たる作家、評家の大膽なるに喫驚せずむばあらざるなり。是れ皆寫實主義の唱道せる文學獨立論の弊害なり。

是弊害の最も明晰に表はれたるは、日清戰爭の當時にあり。王師海を越て西に動き、國を擧げて國家的精神の大運動に熱中せし時、我が濟々たる小說家は果して何事を爲たりしや。我國家が國命を懸けて東洋の平和を爭ひし時、彼等は其戀愛談に苦心するを以て文士の本分を知れりとなしたりき。兵は戰に臨て生還を期

的嗜好の卑下を以て答ふるならむ。然れども吾を以て是を見れば、是れ其の一を知て未だ其の二を知らざるものゝみ、國民は是等の小說によりて自己の性情の解釋せられたることを認めしが爲には非ざるか。八犬傳と忠臣藏とは兒童走卒も是を知らざるもの無し。蓋し是二者は今の作家評家の所謂る趣味下劣なるものならむ、而かも國民的文學として吾れは先づ是二者を推さゞるを得ず。是れ決して脚色の巧妙、文辭の流麗等の末節によりて解釋せられ得べき現象に非ざるなり。是を今の小說の賣高多くとも僅に三千部を超えざるに比して、徐ろに國民的性情の勢力に想到せば、思ひ半ばを過ぎむ。

今の批評家は村上浪六が所謂撥鬢小說の流行を以て、單調なる寫實主義の小說に倦厭せる讀書社會の一時の反動となす。是れ亦其の一を知て未だ其の二を知らざるものなり。當時紅葉一輩の小說の、兒女の涕涙多くして丈夫の意氣に乏しく、柔弱平板、偏狹單調なる、素より所謂撥鬢小說の流行を招致したる一原因なるべし。然れども抑々又任俠義に勇み而かも風流韻致に富める三日月次郎吉井筒女の助一流の人物性格が、太だ我國民性情と相近きものありしが爲にはあらざるか。

解釋し、若しくは是を滿足したりとするか。日本國民は快濶樂天の國民なり、然るに寫實小說は悲哀厭世の恨事を說く。日本國民は尙武任俠の國民なり、然るに寫實小說は涕涙柔懦の事蹟を語る。日本國民は世界の中に於て最も道義的情緒に富める國民なり、然るに寫實小說は却て彼等に向て非倫敗德を奬む。日本國民は忠孝義勇を以て人道の大本となす、然るに寫實小說は一も君父を言はざるなり。日本國民は家系の繼承を重じ、國家の運命を懸念するに於て世界其比を見ず。彼等は君父の爲に死するを以て最高の名譽となし、國民の利福は獨り國家の昌榮の中に見出し得べきとを確信す、然るに寫實小說は却て彼の爲に情死を說き、民權を說き、平等を說く。花柳の情恨、市井の屠沽、寫實小說是を寫して往々其精巧を究む而かも國民的意識の深底を探りて其性情最後の琴線を打彈せしもの果て幾何ぞ。是を以て作家の技巧愈々精にして國民の是を去ること愈遠し。宜なる哉、今の小說が殆ど作家、評家の間にのみ賞翫せられ、國民を擧げて門外漢たるの奇觀あるや。

若し今の作家評家に向て、矢野龍溪の『經國美談』、末廣鐵腸の『雪中梅』『花間鶯』等の如き小說が、何故に爾かく國民の歡迎する所となりしかと問はゞ、想ふに彼等は國民

の所謂撥髮小說あり、所謂觀念小說あり、然れども今日に到るまで小說文學の中心をなせるものは、依然として是文學獨立論の上に立てる寫實小說なりとす。

吾れは敢て是寫實主義を以て小說界今日の落寞を致したるものとなす。何となれば文學獨立論は即ち國民性情の蔑視を意味し、國民性情の蔑視は即ち是の如き文學の非國民的なるとを意味すればなり。非國民的にして其國民に歡迎せられしもの、未だ曾て是あらざる也。

多くの人は今の小說の衰微を以て、國民的嗜好の卑下に歸す、是れ其末に走りて其本を忘れたるものゝみ。文學は人の爲に存在す、人文學の爲に存在するに非ざるなり。文學何が爲に人の爲に存在す、人是を要すればなり。何が爲に是を要する、我を幸福ならしむるが爲なり。我を幸福ならしむるとは何にぞ、我性情の要求を滿足するが爲のみ。然らば即ち國民的性情を滿足せざる所の文學は、是の如き國民と何の爲す所ぞ、衰微落寞素より其所のみ。是根本的問題を拋棄して、徒に趣味嗜好の高下を說く、抑々末のみ。

試みに問はむ、過ぐる十年間の寫實小說は、果して何れの點に於て國民的性情を

るなり。吾れの目的は逍遙が論旨に就て是非せんと欲するに非ず、唯是の如き小說論が明治十八年以後の我が文壇を風靡したるの結果として如何に遂に今日の落寞を招致したるかを審にせむと欲するのみ。

逍遙以後の小說家が有せる小說の概念は、所詮『小說神髓』の寫實主義によりて鑄せられたるものなりき。二葉亭四迷の『浮雲』を初として、美妙、紅葉露伴以下の著作の何れにも、勸懲主義は其片影だも現はさざりき。美妙の『夏木立』『胡蝶』、露伴の『風流佛』『葉末集』、紅葉の『色戀悔』『伽羅枕』『三人妻』以下硯友社諸氏の作は、何れも純粹なる寫實主義の小說なりき。素より是等の著作の中或は『求めずして誹刺諷誡の暗に人を敎化するの力あり』しならむ、而かも是の如きは作者が初めより預期匠作したるものに非ずして、寧ろ偶然の結果に屬す。彼等の作意の根蒂を叩かば、實世間と文學との關係に就ては毫も意識する所無く、唯漠然として文學獨立論の單純自由を利とせしならむ。想ふに彼等は道義の觀念を以て全く文學以外のものとなし、其著作に就ては、逍遙が所謂寫實小說の上乘なるものは、求めずして道義の軌に合せむと云へる如き信念をだに有せざりしならむ。彼等の後に來りたるも

寫情を以て小說の神髓となす、世と人との關係の如きは素より其の度外視する所なり。己に所謂る人物事件を作るに於て自己の意匠を用ひて善惡正邪の感情を挾むことを爲さず、只傍觀して其の自然の經行を摸寫すべしとなす。是間實世間をして毫絲の累を及ぼさしむるを許さゞるや素より論無し。是れレッシング一輩の文學獨立論と何の擇ぶ所ぞ。是獨立論の爲に先づ打擊を被りたるものは即ち勸懲主義なり。以爲らく、我邦の小說作者は是理を悟らず、ひたすら笠翁が套語を株守し、苟も事を凡近に取りて意を勸懲に發するに非ざれば則ち小說の體を失へりとなし、預め奬誡の摸型を造りて强て脚色を補綴す、甚だ笑ふべきなりと。

吾れは是寫實主義の唱道と勸懲主義の打破との一部に於て、慥に動かすべからざる一個の小說論を見る。然れども、それが文學の絕體的獨立を道破し、全く實世間との關係を遮斷したるの點に於ては、吾れ遂に是に同ずること能はず。げに逍遙自らが實世間の道義を蔑視せしに非ざることは、彼れが『寫實小說には、求めずして誹刺諷誡の法備はり、暗に人を敎化するの力あり』と說けるにても明なるべし。然れども是れ寧ろ小說の偶然性として見たるもの、必然性として推奬したるに非ざ

き人物は、作者が想像裏のものにして、人間世界に實在せるものに非ざればなり。是を以て八犬傳の八士の如きは寧ろ仁義八行の化物にして人間に非ざるなり。更に又以爲らく、凡て小說家たるものは專ら意を心理に注ぎ、假作の人物と雖ども一たび篇中に出でたる以上は、之を活世界の人と見做し、其思想感情を寫し出だすに、敢て自家の意匠に任せて善惡邪正の感情を挾むことを爲さず、唯其自然の狀態を模寫するを主とすべし。

是の如きは『小說神髓』の寫實主義なりき。勸懲主義の圈套を脫する能はざりし當時にありては、是れ實に破天荒の意見なりき。脚色の末節に拘泥して寫情の何物なるかを知らず、抽象の理義に泥みて人物の個性を思はず、殆ど敎訓の外に文學の意義を認めざりし文壇に向て爲されたる是寫實主義の唱道は、我が小說文學の進捗の上に如何に浩大なる利益を與へしや、素より言を待たざるなり。唯是寫實主義の必然なる結果として、實世間と小說との截然たる分離を見るに及びて茲に其弊を見る。先に吾が所謂る禍根なるもの即ち是れなり。

蓋し『小說神髓』の寫實主義は、他方より見れば即ち文學獨立論なり。已に所謂る

を說き以て將來の方針を案定したる者は我が坪內逍遙なりき。實に從來傳奇小說の荒唐を喝破し、寫實主義の甘露門を開き、世を擧げて舊趣味の中に困睡し一人の能く勸懲主義の陳套を顚脫するもの無き時に當り、我が昏々たる小說界をして十九世紀文學思想の光明に浴することを得せしめたる逍遙が功績は、永く史上に赫灼たるべきなり。而かも吾れは敢て言はむと欲す氏が『小說神髓』の中には我小說今日の落莫を來すべき禍根を包藏せり、と。何を以てか是を言ふや。

『小說神髓』說く所に二面あり、一面は寫實主義の唱道にして、他の一面は勸懲主義の打破なり。何をか寫實主義の唱道と云ふ、人情を以て小說の主腦となし、世態風俗是に次ぐと云ふ者是れなり。以爲らく、小說家の本務は人情の奧祕を穿ち、心裏の活動を描寫して周密精到なるにあり。夫の和漢の稗官者流が、偏に脚色の骨髓に入らむを務めて寫實の皮相に止まるを憂へざるは、是れ眞小說に非ざるなり。又以爲らく、夫れ小說家は猶ほ心理學者の如し、宜しく心理學に基きて其人物を假作すべき也、苟も自家放誕の意匠によりて强て人情に悖戾せる人物を作り出ださば、其脚色は如何に巧妙なるも、未だ以て小說と稱するを得じ。何となれば是の如

ざるものあるを見る也。

坪内逍遙が持ち來せし寫實主義の改革が、我が小說史上の一新時期なることは言ふまでも無し、然れども氏に次で來りたるもの、一意是主義を遵奉して其他を知らざるに及びて茲に寧ろ其弊を見き。吾を以て是を見れば明治二十年以後の小說は其進歩と共に漸く國民性情に遠かれり、是れ今日の極衰を致したる所以也。而して是極衰の萌芽は實に逍遙が『小說神髓』の一卷に包藏せられありしなり。

蓋し明治十八年以前の小說は、概ね德川文學の遺鉢を繼承し、馬琴、種彦の荒唐を學ぶに非ざれば、一九、春水の鄙俚に倣ふもの、然らざれば西洋小說を模倣して生呑活剝に陷れるもの、何れも時節後れのものにして、明治新時代の產物としては甚だ幼稚のものなりき。東海、鳴鶴、龍溪、鐵腸、諸子の多少新思想を以て筆を小說に染めたるもの無きに非ざりしと雖ども、其著作は新時代の新好尙に對する一定の見地と明確なる意識とを以て現はれたるものに非ずして單に在來小說の缺陷を補充せむとする盲目的煩悶に過ぎざりしに似たり。是時に當りて東西文學の比較研究によりて我小說の過去現在を觀察し、詩學もしくは美學の立場より小說の理想

三千を超えずとせば是の如き小說は國民の生活嗜好幸福と殆ど爲すなきの小說に非ずや。今の批評家小說家の言ふ所を聞けば是れ社會的嗜好の卑きが爲なりと。吾は今の社會の有する文學趣味を以て高尙なりと思惟する者に非ず然れども、おしなべて今の小說を了解する能はざる程卑き者とは思はず。換言すれば、今の世に今の小說を了解するものが僅に三千人を超えずとは思惟する能はざるなり。却て思ふに批評家小說家が是の如き理由を以て今日の文學を回護せむとする事、卽ち是れ今日の小說をして是の如く落寞たらしめたる原因には非ざるか。吾は又我が日本を以て文學的書籍の購買力に於て爾かく無能力なりと思惟する能はず。現に一傳奇小說を著はして洋行費を獲たる人すらありしに非ずや。苟も其の性情の要求に滿足を與へ得るものならむには、國民の是を求むる豈啻に三千に止まるべけむや。そも〳〵了解と滿足とはおのづから別種の概念なり。現在本邦國民の知識の程度にありて、今の駄小說の意義を了解する能はずとは、到底吾が想像し得ざる所なり。唯是によりて其の性情の滿足を得ざるが爲に、爾かく國民の顧みる所とならざるのみ。吾れは茲に到て國民的性情の遂に動かすべから

新衣を裁せむとするのみ、是を以て千篇多くは一律に出づ。所謂新進作家の多くは、其の幼稚なる閲歴と學識とに依りて其の清新の詩情を發抒せむと務むと雖ども、未だ人生の大觀を得ず、或は以て少年少女を喜ばしめむも、未だ以て一世の風尚を龍斷するに足らざる也。其の未熟なる人生觀に本ける主觀的潤色の如きは、偶々觀念小說の轍趾を襲ふに過ぎざるのみ。顧ふに逍遙が『小說神體』の一編を以て寫實主義の大旗幟を飜へし、在來小說の荒唐失體を道破し、天下の文壇期年ならずして翕然として是に趨くに當りてや、明治小說の前途洸々洋々としてさながら海の如きものありき。今にして是を思へば殆ど今昔の嘆に堪へざるなり。

さはれ吾れは今日の小說を以て十年前の小說に劣れりとするものにあらず。唯其發達の經行を依傍し來れば、前途の甚だ荒寥ならむことを憂ふるのみ。或は問はむ、進歩せるものゝ將來に望なきを得るかと。吾は即ち一個の最も簡單なる事實を以て敢て讀者の注意を促さむ。今の小說の最も賣行好きものと雖も、其部數三千を出でずと云ふ、是れ果して何事を意味するものぞ。吾を以て見れば、是れ即ち今の小說が國民的ならざるの一證なり。あはれ四千五百萬人の中、購讀者僅に

の方に迫り來れるを見る。

試に見よ、文壇の大半を占領せる小說文學の現狀今將た如何にぞや。過ぐる二十年の進步は實に驚くべきものなりしが、斯かる進步は尙ほ將來に於ても持續せらるゝの望ありとするか。顧みれば、坪內逍遙が『小說神髓』と『書生氣質』とを以て初まれる明治の小說は、一轉して二葉亭の『浮雲』となり、硯友社の『我樂多文庫』となり、更に美妙齋の『夏木立』となり、寫實主義は茲に一代の風尙を成したりき。紅葉、露伴二子是寫實主義の高潮に駕して覇を壇坫に稱すること幾年。其の偏狹なる寫實の漸く世に厭かるゝや、所謂撥鬢小說となり、探偵小說となり、更に一轉して所謂觀念小說となりき。然れども觀念小說の主觀的傾向、亦永く時尙を維持するに足らず、其怪奇と深酷とは幾くもなく拋棄せられ、文壇に寄與せし所は唯其心理解析の一事のみ。爾來所謂社會小說の將に起らむとして未だ起らざるあり。作家の中或は一脚を觀念派の殘墟に住め、一脚を客觀派の舞臺に投じ、彷徨爲す所を知らざる者あり。或は寫實主義の舊趾に據りて而かも其偏狹なる主觀的傾向を擺脫せむと務むるものあり、所謂先進大家の輩は概ね想涸れ筆澁り、徒に舊套を綴補して

小說革新の時機

（非國民的小說を難ず）

凡そ文學を與へざるの世は則ち是れあり、文學を要めざるの世は則ち是れあらざる也。唯夫れ缺けたる所必ずしも充たさるゝものに非ず、往々事志と違ひ物其願に稱はざれば、茲に懊惱煩悶の病を生ず。吾は思ふ今の社會は文壇に對して是病に罹れるに非る乎。

吾が見る所を以てすれば、今の文壇は何れの方面に於ても落寞を極めたり。青春の意氣は殆ど消磨し去りて老衰の死相何處にか現し來らざる。さながら紅花綠葉の面影はゆく春と共に名殘なく、黃茅白葦の秋風に搖落するを眺めて屢かに懷を遣るが如し。夫の詩人小說家と稱するともがらは、猶蛺蝶秋に瘦せて風の冷かなるに堪へず、屢に衰殘の黃花を擁して昔日の夢を繰返すが如しとも見るべきか。あはれ人の文學を要せざるに非ずして世の文學を與へざるや、茲に一世の人をして缺焉として悲む所あらしむ。是れ抑も誰が罪ぞ。吾れは文壇革新の時機

ばなり。即ち猶ほ希臘劇詩が主として抒情詩的躰制を示すが如く、是等の作は敘事詩的躰制を表はせばなり。……げにや沙翁は其の當時英國劇壇の根柢を成せる神祕劇の裝置を超越し能はざりし如く、是の種の劇に都合好かりし敘事詩的躰制を離脫する能はざりし也。故に是思慮なくして單に沙翁を摸倣せるものゝ失敗するは、是れ沙翁にありてのみ容認し得べき敘事詩的散漫と支離とを併せて摸倣するにはるゲーテの『ゲッツ』グラッベの『百日』は是例なり（ハルトマン美學卷二、七五九―七六〇）

是の外、史劇に關して言はむと欲するところ多々ありと雖、文長きに過ぐるを恐れ茲に筆を擱く。本文論ずる所は史劇の本領より延いて詩史二者の關係に及ぶ。蓋し詩學及び美學上の一大問題なり。吾人は茲に鄙見を陳して逍遙の再思を煩し、併せて先輩諸氏の意見を聞かんことを望む。

（三十年九月）

其不完全なる形式をも併せ攬做するの可なるを見ざる也。若し沙翁が國史劇の價値は、逍遙が思惟せし如く、所謂る史的隱微を傳ふるの點に存せずとせば如何。英國當代の一沙翁にして初めて成し得べく、後世沙翁に十倍するの大天才も施すに由なき、或一種の事情の纏綿せるありとせば如何。況や國史劇は沙翁が上乘の劇詩にあらざるの事實は即ち國詩劇の中、自ら沙翁の天才を拘束し、妨害し、他の五大悲劇の如き大成功を爲すを得ざらしめたる事情の存在を意味するものに非ずや。逍遙好むて是難局に投じ、以て其詩材を試む、壯は即ち壯なりと雖も、却て自ら功名の前途を杜絶するものに非ざる乎。吾人潛に氏の爲に惜まざるを得ざる也。

終に終み沙翁の國史劇に對するハルトマンの批評を聽かむ。其の識見流石に讃美感嘆之れ事とする紛々たる凡評家と異なるものあり。敢て逍遙の精讀を請はむ。曰く、

> 眞の劇詩的經過、場面、及び側話あるにも係らず、カルデロン及び沙翁の史劇は、敘事詩的劇詩と名くるを至當とす。之れ是等の作に歳時及び方處の一致の缺けたるが爲にあらずして、筋の一致、及び一貫せる振張及び帰場の缺けたれ

史劇に筆を染めたりと云ふ。吾人學尚ほ淺く、未だ沙翁が十二史劇の全體を讀破して、其の所謂る史的發展の隱微なる者を感傳し、逍遙と共に其神韻を讃美する能はざるを恨みとす。然れども之を諸々批評家の言に聽くに、彼等の何人か五大悲劇を超えて國史劇を賞讃したる者ありや。沙翁當代の英國は丕基漸く定まりて、國民的感情の昂揚殆ど其頂點に達せり、國史劇は是國民的意識の結成を體現したるものやがて是れ英國人を喜ばしむべき好題目に非ずや。加ふるに八面往く所として可ならざるなき沙翁の大手腕を以てす、クレシダ、カリオラナスを激賞するの批評家は何を厭うて之を貶すべきぞ。然れども彼等の何人が其形式の缺陷を認めざるものぞ。レッシングがコッドシェッドの佛蘭西崇拜に反對し、沙翁を以てコルネーユの上に置きたるの理由は、其形式にあらずして、其精神にありき（文學書翰十七）。其史的眞理を發見せよと唱へたるヂルテールが劇詩說に對せる彼れが論難は、直に移して沙翁の史劇に擬すべかりき。フライタハは英國劇詩が獨逸に齎らしたる脚色の弊を以て、一部は沙翁の史劇に歸したりき。吾人は逍遙に反して沙翁を云々せむと欲する者に非ず、然れども沙翁の國史劇が賞讃せられたるの故を以て、一向に

吾人が舞臺の上に學ぶべきとは、此の人若くは彼の人が何事を爲したるかに非ずして、或特殊の性格を有せる各人が、或特殊なる境遇の下に何事を爲すべきかにあり。故に詩の目的は史のそれよりは遙に哲學的なり。夫の劇を以て英雄の讃辭と爲し、又は國民の自負心を鼓舞するの用に資するものは、是れ劇の威嚴を墮すものと云はざるべからず。（Hamb. Dramat. 19. Stück. 3. Juli 1767）

レッシングは內面的眞理（インネレ、ワールハイト）を重じたる餘り、一切史劇を用無きものに貶し去りたるは、吾人が劇的事件の『實らしさ』を支撐するの方便として之を保存すべしと說けると多少の差ありと雖も。詩史關係の根本的問題に就いては、全く吾人と見る所を同じふす。吾人はレッシングと共に沙翁の史劇に就て英國史を學ばむとするものがらの迂濶を笑ふものの也。

吾人の畏敬する逍遙は、其形式に於てはむしろ缺陷多き沙翁の國史劇が今尙ほ列國の劇壇に歡迎せられ、數多のシェークスピリアンに激賞せらるゝを見て個中必ず是缺陷を補充して餘りあるの價値存すべしと信じ、而して是の價値は『人間事相の尤も遠大深劇なる隱徵を傳ふ』るの點に存すと爲し、更に進みて是覺悟を以て其

事實を以て、最も恰當なる史劇的資料とすべし。是の如くなれば、一面事實の『實らしさ』を失はず、而して一面自由に其詩想を搆へ、事例を拈綴することを得べし。

レッシングが是點に關する說は、一見吾人のに反するが如しと雖ども、其實他の方面より略〻吾人と同一の意見を吐露したるものなり。其言いさゝか世の史劇論者の蒙を啓くに足らむか。彼れは先づ史は全く詩に隷屬すべきものなるを說き、次ぎに、詩人は如何なる點まで正史の事實に拘はるべきかを論じて曰く、

詩人が一の史的事實を資とするは、是の如き事實が單に興りたるが爲にあらず、唯當眼の目的に對して、空想の所生も之に優る能はざるが如くに興りたるが爲なり。……歷史を依信するに足れりと思はしむるは、何者の力ぞ。それは內部の『實らしさ』にあらずや。然らば即ち是『實らしさ』が全く何等の證據、もしくは傳說によりて確實にせられずとするも、將た又今日未だ吾人の知識の到達する能はざる程のあらゆる者によりて立證せられたりとするも、それは何れにても等しからずや。夫の演劇が英雄の事蹟に關はるを必とするは謂はれなき事ならずや。是の如き歷史は史の務なり、劇のあづかり知る所に非ず。

のみにては足らざらむ。そは家庭的劇詩の、事一私人に係るものならむには、其歳時方處は之に關する固有名辭と共に、全く空想の所生たるを妨げじ。而かも事例へば邦家の興亡にあづかり、英雄の運命にかいるが如きものならむには、正史の保障を待つに非ざれば吾人の依信をつなぐに頼りあしからむ。何となれば吾人が有せる過去世の知識にして、苟も邦家の大事に關するものは正史之を塡充して、又尺寸の遺漏を貽さゞればなり。是を以て劇詩にして壯大なる事局を描破せむと欲するものは、勢ひ史劇の形式を取らざるを得ず。故に吾人は信ず、史劇は一派の學者等が思惟するが如く、史的發展の隱微を傳ふるを旨とするものに非ず、隨ふて當代の人情風俗等を體現するを尚ぶべきものにも非ず、其名稱（及び或場合には事實）を史上に借るは、只劇的動作の「實らしさ」を支撑する所以の方便のみ。

然らば史劇家は如何なる種類の正史中に其の資料を求むべきか。之れ本論の主題に非ずと雖も、序なれば簡單に吾人の意見を述べむ。即ち歷史上顯著の事實にして、而かも其の由來因緣の堙滅せるか若しくは、其首尾、殊に其の落着の悲壯なる形跡のみ著しく世に知られ、而かも其經行の餘りに通常人に明ならざるが如き

名稱たるを免れざるべし。是の如きことを爭ふは殆ど兒戲に類せずや。遙莫史なる名稱がしかく神聖にして犯すべからざるの理由、はた何こにかある。

吾人の見る所を以てすれば、史劇と稱する劇詩の一種が、物類萬種の中、特に史的事實を資料とするは、他の故あるに非ず、主として劇中の事件の『實らしさ』を維持せむが爲のみ。

夫れ人情は虛僞に動かず、一切の文學が人心を動かし得べき第一の制約は、實に其の『實らしさ』にあり。其外面の形式のみより之を見れば、自然世界に有り得べからざる幾多の瑰奇夸大を包有するにも係らず、巧妙なる詩歌がしかく人心を感動し得るは其內面的精神の逼眞自然、即ち茲に所謂『實らしさ』ものありて、知らず識らず吾人の肺肝を把攝するに依る。今夫れ劇詩は縱に抒情詩の幽情微韻を捉へ、橫に敘事詩の宏壯偉大を攝り、以て過去に於ける人生の活動を現在の舞臺に演出せむと擬す。其感興の大いなるを得むが爲めには、自ら事局の大いならむを必とす、是際劇的動作の『實らしさ』は如何にして支撐せらるゝとを得べきか。其內面的精神の自然發展は、其動作の『實らしさ』に缺くべからざるは勿論なり。然れども是れ

限りに於ては、一切の事物其資材となるを妨げず。何ぞ獨り史のみに限るべき。苟も詩的法則の要求に乖離するものは、一切の事物其資材となるを得ず、何ぞ獨り史のみに限るべき。人動もすれば謂へらく、苟も史にして史的といふ殊稱を有し得むが爲には、其史的主題に於ける史的眞意を發見せざるべからず、隨ふて善く當代の人情風俗を觀察して、其眞實に達はざらむを務めざるべからずと。之れ取も直さず、詩形を備へたる歷史のみ、是の如きは初めより正史を取るに如かざるなり。夫の史劇、もしくは歷史小說によりて當代の人情風俗を見むことを望むものは、其の標的とする所詩に非ずして史なり、何にぞ初めより人文史もしくは其他の史乘を繙かざるや。逍遙謂へらく、

詩は史の侍婢にあらねども、史も亦詩の爲に濫用せられて故無く其名稱を犧牲にせざるべからざる約束無し。史學上に寸功無くして、ほしいまゝに史と稱する又一個の妄稱ならむ。

之れ何たる奇論ぞや。名目の爭は當眼の詩論と何の關する所ぞ。氏の論法を擴張せば、小說は小なる說ならざるべからず、レーゼドラマの如きは言語上矛盾の

上の事實をば、明らさまに作り換へて、以て戯曲の資料となさむは、戯曲家としていと〳〵拙なき業なるべし。さらばとて一々史籍にたどりて、眞を寫すことのみ務めなば、戯曲は遂に成り難からむ。歴史は詩學の法則通りに經過するものに非ざればなり。然らば全たく空想によりて事例を假作せむか、是れ所謂世話物に於て寫し得べきも、時代物には施し難きが常なり。そを如何にといふに、時代物は其資料として外面的形式の廣大なる事件を要するを以て、歳時と方處とに於て限られたる史的事實か、若しくは有史以前の傳説に據るに非ざれば、吾れ人の依信を繋ぐに便りあしければなり。云々。

吾人の見る所によれば、詩は其の詩たる性質上全然空想の美術たるべきものなり。詩劇の一類に史劇なるものある、吾人素より之を認む。然れども其人物事件等は正史中の人物及び事件として用ひらるべきものにあらず、其の一度び詩中の物となるや、茲に全く史的眞實との約束を遮斷せられて、偏に空想の料として拈貼せらるべき也。是の如きは詩劇の獨立、詩法の權力の必要なる要求なり。是點に於て吾人は全くドーデンと見る所を同じうす。苟も詩的法則の獨立を妨げざる

想の單純なると他に比すべきものを見ざる也。

史劇を以て史的發展の隱微を傳ふるに在りとするの論は、學說として立ち得べき者に非ず。逍遙は、進んでウルリチが詩的一致の歷史哲學を奉ずる能はず、退てはドーデンと共に詩主史從の說に執着すると能はず、好て自ら是の明白なる矛盾の中に困頓するに至りたるは、惜みても猶ほ餘りあり。而して尙ほ沙翁の墨に據りて、批評家の彈射を避けむと擬す。吾人竊に氏が平生の謙讓に肖ざるものあるを疑ふ。眞し然らば、吾人は更に進みて是の城壁の如何ばかり强固なるかを試みむ。

今や吾人の說を述ぶるの機會に達したり。吾人は史劇（及び歷史小說）の本領に關して、我が畏敬する逍遙と大に其の見る所を異にするを悲む。先に『牧の方』を評するに當り、吾人いさゝか是意見を述べて左の如く曰へりき、

戲曲にまれ、小說にまれ、もと空想によりて人を娛ましむるを旨とするものから、明に吾れ人の確實なる知識に背くものは、吾れ人の眞實なる同情を惹起すること甚だ難し。それは同一の名稱、もしくは形式の下に、全く異種の內容を含ませむことは、やがて人心の統一に反すればなり。されば何人も熟知せる史

明を與ふるにあり。極り無き局面の變化を通じて、動かざる發達の原理を究明し、人類活動の主腦を把へて、縱に是を歲時に繫ぎ、橫に是を方處に照し、精神的及び物質的の全範圍に亘りて、社會發達の眞相を描破するにあり。所謂る『人間事相の尤も遠大深刻なる隱微』とは人文史の對象とする所を外にして何處に存すべしとするか。史劇の本領果して是史的發展の隱微を傳ふるに在らば、而して是目的を達せむが爲には劇詩の法則の如きは顧みるに足らざらむには、史劇家は何が故に科介、臺詞、舞臺上の約束、脚色、修辭等もろもろの詩的繫累を打破し去りて、一向直に人文史を著さゞるや。

吾人は史的發展の隱微を解せむが爲には人文史を有す。何ぞ更に史劇を要せむや。史劇家よ、乞ふ輕々しく『史的發展の隱微』を言ふを己めよ。史的活動の係はる所、悠遠廣大、其隱微と云ひ、精神と云ひ、理想と云ふもの、人文萬般の形式に對して、愼重細心なる科學的攻究を施したる上に非ずんば、如何でか會得するを得べき。之れはた人文史が今日最高至難の科學たる所以にあらずや。所謂隱微なるもの、五七齣もしくは五七段の史劇若くは史劇の連續によりて解釋せられ得べしと思惟するが如きは、畢竟詩人もしくは詩人的批評家の空言のみ。思

容たる理想に存せずして、却て其の特殊なる形式に存すと言ひて、左なきだに如何はしき論理の一致をば、全然破却し了りたるは、氏の爲に殊に惜むべしとなす。想ふに之れ濺墨の誤謬に過ぎざるべきか。

上來述べ來りたる所によりて、吾人はほゞ逍遙が史劇論の性質を領會し得たるが如し。氏は第一詩史の獨立を認め、第二史劇に於ては史を先にして詩を後にしたり。吾人が含蓄的批評を去りて超絶的批評に移るに當り、先づ再び劈頭の疑問を提起して逍遙の明答を乞はざるべからず。曰く、史劇は史か、將た詩かと。

史劇は史か、將た詩か。逍遙は其の必然なる論理的結果として、史劇を以て史と爲さゞるを得ざるべし。何となれば、氏は劇詩の法則に背戻しても史的發展の隱微を傳ふる、是れ史劇の本領なりと明言したればなり。

眞し、さらば史劇を以て假に史なりとせむ。然れども吾人は更に請ひ問はむ、所謂る史的發展の隱微を傳ふるもの、歷史哲學若くは人文史と史劇と孰れとが勝れたるぞ。人文史の目的は、人類社會一般の發達を其精神的方面より觀察し、其外面に現はれたる政治、經濟、宗教、文藝、その他もろ〳〵の事物に對して、其成立變遷の說

ウルリチを述べたるは、所詮論理の混亂と思想の朦朧とを示めしたるものに過ぎずと雖も、是詩史衝突問題に關しては遂に究竟の論斷を與へざるべからず。吾人は氏が一層精透なる意見に接せむことを樂む。

然れども吾人をして更に氏の說を揣摩せしめよ。氏は素よりウルリチが說を祖述して其根本たる哲學主義に及ぶものには非ざるべし。唯何かなしに史的發展の眞相に詩趣あることを認め、而して是詩趣を發揮し、『人間事相の尤も遠大深劇なる隱微を傳ふる』を以て史劇の本領となし、而して是本領を以つて其形式の缺陷を補ふて餘りありと思惟したるならむ。形式の缺陷は詩法の忌む所、而かも史的眞相の發揮は是損失を補充して餘りありとなす。之れ明に詩史の一致を認めざるの見、ウルリチが史的理想の上に何等完全の詩形を認めざるとおのづから其趣を異にす。是點に關しては、氏はドーデンと共に詩史の兩者を以て各々其獨立の範疇を有し、獨立の法則に從へるものとするなり。然れども、史を主とし、詩を賓とするの點に於ては、氏はドーデンを去りて、ウルリチに就きたるものゝ如し。要するに、氏が說は二者の折衷と見て大差無からむか。唯後文に歷史劇の詩趣は、其內

意を表したる眞意の那邊に在るかを知るに苦むと雖も、吾人は前に述べたるが如き臆測によりて、氏の旨趣の存する所は、むしろドーデンと共に、詩史調和論にあるべきを信ずる也。

逍遙にして果して、吾人の思惟するが如く、詩史調和論を執るとせば、次に來るべき疑問は、是二者の孰れを主とし、孰れを賓とすべきやにあり。二者能く兩立し得べくむば、誰かその一を犧牲として強ちに偏頗の譏を招かむや。然れども史は詩の法則通りに發展する者にあらず、よし是ありとするも是の如き場合は、所謂絶無希有の例ならむのみ。史と詩との衝突は原則としては遂に避くべからざる也。逍遙は是場合を如何に裁斷せんとするぞ。

ドーテンは明々地に詩法至上主義を唱へて茲に其論點の統一を求め得たり。ウルリチは由來詩史の衝突を認めずして、却て其一致を認めたるを以て、其間素より主客の別なく、調和の勞無し。然れども逍遙は、苟も自らヘーゲル的歷史哲學の立場に在ることを告白せざる限りは、決して是の如き大膽なる神祕的意見を有するものと認められるゝを得ざるべし。氏が一面に於てドーデンを紹き、他面に於て

劇詩をして眞の史劇たらしめんとせば、史の皮相の事實に執着して、其本領たる劇詩の生命を妨遏すべからず。劇詩の法則は正史の事實よりも重ずべき也。二者相容れざる時は、後者を棄てゝ前者に從ふを至當とす。されど二者能く兩立し得べくむば、決して其のいづれをも犧牲とすべからず。史に忠實なることは、尠くとも其の作を圓滿ならしむるに肝要なり。

是れ明に詩史の分離を認め、劇詩の法則の正史の事實よりも重ずべきことを說き、隨ふて是二者相容れざる時は、劇詩の法則に忠ならむが爲には正史の事實に背戻するを辭すべからずと主張せるものなり。是れウルリチのとは全く反對せる說に非ずや。逍遙若しドーデンの語を更に數行の後まで引用したらむには、是反對は更に一層明亮なりしなるべし、即ち彼れ(ドーデン)曰く、

沙翁の技巧上の大手腕は、殊に史的事實と劇詩の法則との調和に表はる。而して『ジョン王』が歷史として他の國史劇に見劣りせらるゝは、劇詩の法則が要するよりも多く、正史の事實に執着せしが爲のみ。

吾人は逍遙が是の如き全然背馳矛盾せる二樣の意見を臚列して、均しく贊同の

詩趣は其內容の上に存せざるべからず。然るに氏は是重要なる契點に於て、全くウルリチとは別種の意見を抱けるものゝ如し。氏の言に曰く、

『桐一葉』を著はし、『牧の方』を公にするや、其劇詩としての價乏しきことは、予みづから之れを知れりき。其形式上の缺點は若し之れを矯正せむと欲せば、(予にして改めむの心あらば)之を正すことも難からざりし也。されども、予は其特殊なる形式上に一種の詩趣あるを信じたりし故に、敢て美學家の說に背きて、竊かに初めより數段曲を作らむの腹案を抱きたり。

此を以て是を見れば、氏は史劇の詩趣を以て、其劇詩の常規を離れて統一なき敘事詩的の形式の上に存せりと思惟せりし也。氏は詩の內容の最も醇粹なるもの、即ち史的發展の理想に詩趣ありとなすウルリチが說をば、全く其形式に關して解釋し、是參差起伏、散として統一なき形式上に詩趣存すとなせるなり。是れ明に詩史の分離を認めたるものに非ずや。而して是分離論は、氏が些の異見を挾むことなくして引用したるドーデンが言によりて、更に一層の分明を加へたるが如し。ドーデンの言に曰く、

りも深く、一面に於ては家庭劇よりも廣く、其の人間事相の尤も遠大深劇なる隱微を傳ふるの點に於て、他の作の能くし得ざる所を能くし、形式上の缺陷を補ふて餘りあるに非ずや』と論ずるを見て、其詩史一致論をば那邊より把捉し來れるかを叩かむと欲したりき。然れども氏の周到緻密なる論理頭腦は、是の如き大膽なる設想を信じ得ざるべきを想ひ、更に氏がウルリチと共に引用したるドーデンの語と、『牧の方』を公にせしは三部曲の如き特殊なる形式の上に一種の詩趣あるを信じたりとの氏の自白とに顧みて、氏の意見の詩史の一致よりは、寧ろ兩者の調和に存するとを臆測せり。吾人が氏の史劇論の歸結の第一條として、『史劇の目的は史的眞意を描破して、之を詩化するにあり』となせしは、是を以てのみ。詩史一致論の立場より見る時は、史的眞意即ち是れ詩的本領なるを以て『之を詩化する』の一句は、畢竟贅疣に屬す。只夫れ詩史の分離を調和するの必要ありて茲に初めて詩化の用を見る。逍遙にして、若し其の一意祖述したるウルリチと共に、ヘーゲル的歷史論の立場に住まるものならむには、徹頭徹尾、詩史一致論を執らざるべからず。而して、史的發展の理想、即ち是れ詩的精神に外ならざるを以て、史劇の中に認識する所の

隨ふ也

(In taking up the historical idea, Poetry is only taking possession of its rightful property; in attending to the historical subject-matter, so far as the latter expresses the idea, it is but serving to its own laws; in accommodating itself to history, it is but serving its own nature und purposes.)

ウルリチは是の如き自家の純理哲學に胚胎せる詩史一致の設想より、沙翁の歷代史劇がなせる劇詩的形式の蔑視を是認せり。彼が是說の是非は、ヘーゲル派が純理哲學の荒唐にして信憑するに足らざることの知れ渡りたる今日、更に尋究するの要なしと雖も、一個の說としては、兎も角も首尾一貫して其調和を得たりと謂はざるべからず。

吾人は初め逍遙が自家の說を立せむが爲に、一言の批評的注意なくして全然ウルリチの說を引用し來りたるを見て、或は氏が何時の間にかヘーゲル派の哲學を信奉せるに非ざるかを疑ひき。是『不可思議なる隱微の因果は、一面倫理的として見るべきと同時に一面詩的として見るべし』と云ひ『史劇は一面に於ては敘事詩よ

に史的發展に於ける神の天啓を說き、精靈の實現を信じたるの點に於ては、全然ヘーゲル派の眞面目を暴露したる也。其の歷史を過重し、一切の事物は史に關して其價値を有せりと思惟したる、亦怪むに足らざるなり。彼れの史劇を觀ずるや、言ふまでもなく是の點よりせり。故に史的發展の隱微なる眞理を以て、理想の發現なりとし、更に茲に理想の發現として、詩と史との一致を認めたる、素より其所なりとす。故にウルリチは史劇を解釋するに他人の有する能はざる便利なる立場を有せり。何となれば彼にありては史も詩も共に理想の發現なるが故に、其間に自然の融合一致の存在したればなり。故に史の眞意を描くは即ち詩の精神を寫すなり。故に『史の眞意は啻に倫理的なるのみならず其の倫理的なるところやがて其の詩的なる所なり』。故に彼れにありては史即詩、眞の史劇即ち是れ眞の詩劇なり。故に曰く。

詩が史的理想を取るは即ち是れその正當なる所有を取ることなり。詩が史的事實に依傍するは(勿論其事實が理想を表現する限りに於て)即ち是れ自家の法則に事ふる也。自ら歷史に調攝するは即ち是れ自家の本領及び目的に

するを得ず、史劇と歷史と何の擇ぶ所ぞ。夫の正史の事蹟を安排し、其地の文を科白に改め、其人物の語を臺詞となしたる、今の人の所謂活歷劇なるもの、正に史劇の正體なりと謂はざるべからず。史劇若し詩ならむか、一個の美術として詩にはおのづから、詩の本領あり、隨て詩の形式あり、一切の資材が其內容たるを得むが爲には預め是本領、是形式に對して絕對的服從を表せざるべからず。是時に當りて詩中に用ひられたる史的事實も亦一の詩的空想たらむのみ。史的發展の眞相を示すもの、世に幾種の歷史あり、史劇に待つの要なき也。唯劇詩の一體別に史の字を冠するものは、吾人の見る所を以てすれば、史的眞實の發揮を離れて別に用あり、所詮史劇は詩なり、史に非ず。是二者は全然別種の意義を以て結合し、之が主體たるもの常に詩ならずむばあらず。逍遙は史劇の概念に於て、殆どーにウルリチの說に依傍したるが如し。然れども氏は一個の重要なる點に於てウルリチの說に反きしが爲に自家撞着を釀したるは惜むべし。ウルリチは素ヘーゲル派の哲學者なり。ヘーゲル歿後其の凡理論の萬有神敎的傾向を擺脫して、一神敎的哲學を搆成したりと雖ども、其ヒストリスムスに於ては遂に其先人を踏襲せるを免れず、故

ても恰當するが如し、如何。

是の外、氏は性格作意等に關して辨解する所ありたれども、史劇の形式論に關する論點の主腦は是二ヶ條に存するを以て、茲に暫く之を省く。

如上の梗概によりて知らるゝ如く、逍遙は是論の前半に於て、史劇の本領に就て大體論を爲し、後半に於て其自作の是の如き覺悟に本けることを示して、『牧の方』の形式に對するの批難は、やがて沙翁の國史劇全體に對する批難なることを明にせり。而して是前半に於ける大體論の歸結は所詮左の二條に存するが如し。

（一）史劇の目的は史的發展の隱微なる眞意を描破して之を詩化するにあり。

（二）史的發展の眞意は、歷代史劇の形式によりて初めて能く之を得べし。故に史劇は僅々五七齣を限りとせる他の劇詩の常型に背かざるを得ず。

乞ふ吾人をして氏が是論斷の如何なる程度まで眞理なるかを檢覈せしめよ。

吾人先づ逍遙に問はむと欲す、史劇は史か將た詩かと。是簡單なる一問題の決定は、直に氏が論據に向て最も明白なる光明を拋つべし。

史劇、是れ史か、將た又詩か。若し史なりとせむか、徹頭徹尾史的眞實の圈套を脫

逍遙は之に對して直に反問して曰く、

高諭まことに至理なるが如し、只疑ふらくは、此の評は直に移して沙翁の國史劇全躰の批難としても恰當なるが如し、如何。

と。吾人は又『牧の方』が場面以外の幾多の史的知識を預想するを難じて、左の如く云へりき。

戲曲とは場に上れる人物の言語と動作とに緣りて、過ぎ去りたる事柄をまのあたりに表象する詩歌の一種なり。かく戲曲の中に現はるゝ事柄は、全く曲中の人物のはたらきの中に終始すべき者なるが故に、其由來經過を解せむが爲に、曲外に他の話說若くは註釋を要するが如き事柄は、また以て戲曲的とは稱し難からむ。我等は常に戲曲小說をば一個の有機躰に喩ふ、そは其活動の因緣の、すべて自家により說明し得らるべきを謂ふ也。

氏は是に對して亦直に反問して曰く、

高諭まことにことわりなり、予も尋常の悲喜劇に於ては毎に是の如くならざるべからずと思へり、但し此の評は直に移して沙翁の國史劇全躰の非難とし

價値に就ては、

史劇は其性質上おのづから劇の正則に背く所無きを得ざるべけれど、其の人間事相の尤も遠大深微なる隱微を傳ふるの點に於て、他の作の能くし得ざる所を能くし、件の缺陷を補ふて餘りあるに非ずや。

と論斷せり。

是論斷を爲したる後、氏は更に筆路を轉じ、氏が著作にかゝる史劇『牧の方』の形式に對する世評數條を擧げて、一々之を辨解せり。而して是數條の世評を代表するに多く吾人が嘗て本誌に揭げたるものを以てせり。即ち『牧の方』は北條義時を主人公とせる三部曲の一段なるが故に、吾人は是三部曲の形式を以て一切戲曲に缺くべからざる感興の一致を妨害したるものなりとなし、左の如く論難せりき。

戲曲には一定の形式あり、是れ感興受發の理に本きて、作者須要の制約を成すもの也。三部曲は希臘以來の一躰たるに相違無きも、之を分ては則ち支離、是を併すれば則ち冗贅、人物の數、事件の錯綜、場面の變化、時間の延長、皆共々複雜尨大に過ぎ、到底完全なる戲曲的効果を奏すること能はじ。

是意見を確かめむが爲に、沙翁批評家ドーデン、及びウルリチを引用し、更にウルリチの言に隨て氏の說を明にして曰く、

史劇の目的は史的事件の隱微なる眞意を描破するにあり。所謂史の眞意は當り倫理的なるのみならず、其倫理的なるところ、やがて其詩的なる所なり。されば史の眞意を描くは、詩の本領に外づれたる事を爲すに非ず、……史には自然の大法に從へる一道の發展あり、是大勢は人間の存する限り、隱顯弛張して連續し、其因果は綿々として世波の底に起伏し、預め期待すべからず。而して是不可思議なる隱微の因果は一面倫理的として見るべきと同時に、一面詩的として見るべきもの也、否此間に大なる詩的消息ありと言はざるべからず。夫の沙翁が其の國史劇を前後連絡したるものとして作したるは、豫じめこゝに意ありての沙汰なりと斷じ得べきに似たり。

氏は是ウルリチの言によりて、史劇には悲喜劇以外の一種特異の本領あることを斷じ、沙翁の史劇が通常戲曲の例規を離れて形式上不完全の觀あるは、畢竟是本領を全うせむが爲に、故らに適當なる方便を求めたるに外ならずとなし、更に史劇の

に、沙翁の天才は之れを看破し、其の本領を發揮せむが爲に態とかゝる特殊なる形式を取れるにはあらぬかと疑ひ、是形式上不完全なる史劇が、列國劇壇に歡迎せられ、多くの批評家に賞讃せらるゝは、單に因襲の惰力、單に沙翁崇拜の餘勢なるかと反問して、暗に先の疑を然定するの意を表はしたり。

氏は次に筆を起して正面より史劇の性質に就いて說を作して曰く。

史劇とは我が所謂活歷劇の如く、正史若くは野史の事蹟を只そのまゝに安排して、正史の地の文を科介に改め、人物の語を的として劇に物したるに非ず。さりとて近松等の淨瑠理の如く、元和を建仁とし、家康を時政とし、ほしいまゝに史上の名稱を用ひて、ほしいまゝに立案構思せるもの、即ち詩想の自在を得む爲に名のみを過去に借れる空想の作も、正當の史劇とは稱すべからず、前者は劇詩として取るべき所なく、後者は劇詩としては或は取るべきも、史としては一分の取るべき點無きに似たり。詩は史の侍婢にあらねども、史も亦詩の爲に濫用せられて、故なく其名稱を犧牲にせざるべからざる約束無し。史學上に寸功無くしてほしいまゝに史と稱する、亦た一種の妄稱ならむ。

の全價値を標定したるものとなす勿れ。夫の白璧の煌々たるもの、時に一塵のそれに曇る。主人亦吾等が僭越の言を赦せ。

（三十年八月稿）

坪内逍遙が『史劇に就いての疑ひ』を讀む

坪内逍遙は史劇に關する意見を本月五日發行の早稻田文學に載せ、題して『史劇に就いての疑ひ』と云ふ。其說吾人の見る所と異なるものあり、左に其疑點を擧げて氏並に江湖の敎を請はんと欲す。

逍遙が是論は史劇の性質に就いて最も重大なる結論を含む。氏の文、牽引附會に忙はしく、爲に其委曲を審にするに及ばざるを恨とすと雖も、其の究竟の見地は、史劇の目的は史劇眞意を詩化するに存すとの一言に歸着すべし。氏は是斷案に到着するに左の如き論理をたどりたり。

氏は先づ沙翁の半敘事詩的史劇が劇の形式上不具の作なるを認め、而して他の五大悲劇に於ては畧々悲劇的形式に瞑投するを得たる沙翁が、何故に特り其史劇に於ては斯る背則の作を爲しゝかを訝り、史劇の本領は多少他の劇と殊なるが爲

『桐一葉』にありては、全篇の動作に統一の骨子あり、興味の一致亦おづのから維持せられ、人物の點染、景物の摹寫、亦往々にして詩致あり。蜻蛉、淀君の如きは兎にも角にも出色の人物なりしを失はず。之を牧の方の散漫にして詩趣に乏しきに比すれば、實に優秀の作なりと謂はざるべからず。

然り、吾等は『牧の方』を以てまことに詩趣に乏しき戯曲なりと想ふ。照子の前は如何に是戯曲に於て終始せしか、何ぞ其の落寞たるや。七夕の大雷雨は、情景相稱へりと云ふべからず。吾等はむしろ其舞臺上に紛雜騒亂を來したる外、何等の効果あるを認めず。末段目前の琵琶歌、橋殿の一剎那は、事素と好個詩的の資料なりと雖ども、事迫らず、情到らず、徒に藻藻吹嘘の趣ありて、江湖秋濤の觀無し。牧の方の最後の如きも、亦茫昧突如の嫌なきか。恰も是れ紙窮し墨燥して、更に筆を染めたるもの、檢括に過ぎて通脱に乏しきは、蓋し免れざるの勢なるか。

以上は備を求むるの餘り其缺點を列ね來りたるのみ。たま〳〵他の美を成さざるに類する無くむば幸なり。蓋し他の著作に對して二三の弊所を抉摘するは、甚だ容易なることなり。讀者は幸に吾等が是批評を以て、直に春のや主人が高著

れたるものにして、近世是種の名作家少からず。之れはた戯曲の一體として是認せらるべきものなり。今夫れ朗讀戯曲として瑕瑾少きものを、強ひて、舞臺に上せむが爲に種々無理なる改易添刪を施すが如きとあらば、是れ一擧兩損と云ふべからむ。

吾等は『牧の方』が是の如き不利益なる舞臺的調攝に富めるを惜む。

八

吾等は春のや主人の技能を推重するに於て、敢て人後に落つるものに非ず。然れども吾等は遂に是『牧の方』を賞賛する所以を知らざるなり。一段一齣をとりて之を讀むときは、文に抑揚あり、場に變化あり、人をして卒讀を覺えざらしむと雖も全體の上より一個の戯曲として之を見るときは、遂に散漫の譏を免れ難かるべし。戯曲的形式に缺如せるは、實に其根本的缺點として吾等の切に作者の反省を乞はむと欲するところなり。

是篇を以て『桐一葉』に優れりとするは一般の世評なるが如しと雖も、吾等は決して爾か思惟することを能はず。却て後者を以て遙に前者に優れりとなすものなり。

更に想ふ、照子の戀は、全曲と何の關するところぞ。吾等は是不愉快なる一條の戀愛談を以て敢て『牧の方』の冗贅となす。オフェリヤも、蜻蛉も、是の如くにして死せざりき。

直に過ぎたる重保は、尤も興味なき忠義一圖の朴直漢として、其性格の一致を保てり。然れども其の果敢なき最後の讀者を不滿ならしむること、猶照子のそれの如き也。

全曲に於ける統一の缺乏は、其人物の行動をして多く不圓滿不自然に陷らしむ。是れ洵に恨とすべきなり。然れども吾等を以て之を見れば、更に他の病源の存するあり。何ぞや。作者が舞臺上の結果を顧慮するの過ぎたること、是れなり。

七

戲曲は舞臺上に演ずべきものなれば、常に舞臺上の關係に注意し其調和を失はざらむことは、劇詩家の尤も必すべき所なる、素より論無し。然れども其爲に戲曲そのものゝ要性を傷くる樣の事あらば、具に其事體の輕重に鑑みて其左右を決せざるべからず。世には朗讀戲曲（Lesedrama）なるものあり。是れ舞臺の繫累を離

の肖似を利かせむが爲なるべけれどもさりとては術なきの極ならずや。平賀朝雅はほゞ義時の小なるものか。稻毛父子を頤使し、牧の方を操縱し、己が大望に資せむとして、たまたま義時の大逆謀に羅蔽せらるゝを悟らず。義時の遠謀を較著するに力ありと雖も、單調一律の弊無きか。牧の左源太輝英は、始終疎忽者、狼狽者として現はさる。然るに牧の方を初め、用意愼密なる稻毛入道まで飽迄之を信用し、安じて『大事の御使』を托したるは如何に。畠山重保及照子の前に至りては、作者苦心の十一の効果だに現はれ得ざりしを恨みとす。

さるにても照子の前の戀路の果敢なさよ。冷々淡々己を見ること路傍の人に異ならざる重保に對する、至深至切なる愛情の花は、照子の爲に如何なる果を結びしぞ。あはれ七夕の雷雨にそぼ濡れて、腰越驛の渠が愁訴は、思ひきや重保の一喝に却て斷命の緣とならむとは。あゝ照子は何が爲に戀せしか。忠實なる折枝と可憐なる照子との一命を犧牲にしたる是戀には『オゝ其心は是の重保よう推量して候ふぞや』の一言にして癒し去らむには、餘りに痛はしく、餘りに激しき者なからずや。想ふに照子は滿足して死したるべし、されど讀者は平かならざる也。

由す。彼が英邁なる氣質と、剛健なる意志とを挾み、滔天の非運に反對し、抵抗し、煩悶し、沒落するの情狀は、洵に吾等の情想を激揚して、吾等をして吾等が精神中に一種の異常にして高尚なる調趣を意識せしむ。吾れ悲曲を讀みて終宵卷を措かず、勇者と共に感動し、沈思し、嗟嘆し、憤慨し、天理人道を敵として斃れて而して已む。吾れ自ら顧みて恍惚として一種超絶の理想界に往住したるの思ひあり。是れ吾等がワレンスタインを讀み、マクベスを讀み、マリア・スチュアルトを讀みて得たるの感情なり。あゝ牧の方何んぞ獨り其興味の索然たるや。

六

主人公たる牧の方の性格が悲曲的に非ざることは、略々之を述べ畢りぬ。然らば其副人物は如何に。

北條時政は牧の方の感情の少しく溫和にして、性質のやゝ率直なるものゝみ。舐犢の愛に溺れて思慮なく、勇斷なき、一介の老武士は、暴亂の女主人公に配して其性格の對比の著しきを見る。左馬權介政範は十四の幼童としては言動あまりに大人びたるの嫌なきか。著者は何故に殊に是弱年を須要とせしにや。一幡丸と

涙に陷りて、意志の薄弱を示めせるもの、因循姑息ならずとせむや。堂内の密談によりて弑逆の大望を見合せたるらしき、政範の死をきゝて畠山父子の復讐に餘念無かるらしき牧の方が、末段に至りて更に當初の大望を果さむが爲に猛進す。其變心の動機はもとより、依て以て其大野心あるを得たりし所の愛子の死後に於て、尙其大野心を繼續するの情理、殆ど解すべからざるものにあらずや。もし又之を以て性格の一致を失はざるものとすれば、牧の方が堅持耐久の稟資に乏しきこと、是の如き悲曲的大陰謀を醞釀するに適せざることを證するものに非ずや。

之を要するに、牧の方は是の如き大悲曲の勇者たらむには、其性格あまりに單純に、あまりに淺薄に、又あまりに平凡なるに過ぐるなり。渠の女は須らくシルレルに於けるテルツキーの如く、イサベラの如く、マルサの如く、若しくは沙翁に於けるマクベス夫人の如くあるべかりしなり。

牧の方の性格がしかく非悲曲的なるの結果として、精神氣魄の全篇を通じて壯大雄烈なるもの無く、人をして骨鳴り肉躍る底の感情の大昂揚を見る能はざらしめしは、惜みても猶餘りあり。蓋し悲曲の快感は、其勇公（ヘルド）に對する吾人の同情に職

品の高下、智力意志の大小強弱と、其個人的性癖と錯綜紛糾して發展し、窘塞する情狀を曲盡するにいたりて、自ら難易あり、工拙あり。夫の心容狹窄、隨て感ずれば隨て動き、極めて簡單なる動機によりて、其云爲を左右せらるゝが如き器械的人物は、必ずしも老手を待て摹寫せざるなり。

而して吾等は如何なる人物も、均しく悲曲の主人公となり得べきを信ずる能はず。吾等は是點より、春のや氏が前著『桐一葉』に於ける片桐且元の性格を難ぜしことありき。今や同一の批難を以て是牧の方に臨まむと欲す。

牧の方は尋常一般の婦女子のみ。其の子の愛に溺れて非道を企つ、是れ形式上尤も悲曲的たるに庶幾し。然れども渠女は是の如き大謀を成就する所以の材幹を有せざるなり、知淺く、慮短かく、意亦强からず、是を以て其嫉妬瞋恚は尋常婦女子の嫉妬嗔恚のみ。第一段の第三、もしくは第四段の第二に於ける憤怒及狂亂は、赤條々たる感情の活動のみ、些の顧慮なく、些の蘊蓄なし。其の他の爲に揶揄掀弄せられて陰謀の方便に使用せらるゝを外にして、牧の方自身の性格に於て悲曲的勇者に相應はしき何等の活動を見ず。第二段の第二に於ける變心は、尋常婦女子の常

是の如き因緣の不明なる動作は尙是外にも少からず。吾等を以て之を見れば、作者の想を構ふるに當りて其想像の中に浮動せるものは、北條初代史の全局面にあらざりしか。而して作者は是の如き史材の中にて牧の方を中心として、表面に顯はれたる事實のみを攝取して、以て是戲曲を成しゝには非ざりしか。吾等が本篇を讀で先づ感ずるところは、是戲曲中の動作は是曲中に終始し、完備するものにあらず、他に吾等の知らざる此の如き動作を操縱し弛束する一種の動機の存在することとなり。是を以て吾等の想像は絕えず曲外の或物によりて拉取せられ、注意自ら一致せず、感興亦おのづから散漫たるものあるを免れず。是れ『牧の方』の爲に大に惜むべしとなす。

五

牧の方の性格は其個性の明晰なること、其一致の維持せられたる事より是を見れば、さすがに善く描かれたり。

然れども個性の明晰一致の維持は、形式上須要の條件たるに過ぎず。是二者を有するもの、凡て必ずしも巧妙なる戲曲的人物と稱するを得ず。其性情の單複、人

是獨白すらも、其意義極めて茫々、餘意多くして摸捉し難きを恨とす。千幡君を救ひ出したる理由の如きは、遂に明に知了するに由無きが如し。政範の最後は腰越の宿に起れり。而れども政範が朝雅、重保等を隨へて腰越に宿せし理由は、第四段の末に於ける朝雅の白に『只こゝに一つの難義、左馬の介は御臺所御迎の正使なるに』云々とあるにてほゞ知るべしと雖も、御臺所御迎と本編との間に何等の關聯あるを見ず。是無關係の事件を拈出して、政範最後の如き局面一變の所依となす、巧なりと謂ひ難きに似たり。殊に第三段の第一に於て、次郎重政が『幸ひ平賀の右衛門佐どのも、こよひはいまだ腰越宿り』と云ふが如きは、徒に讀者をして怪訝の念を起さしむるのみにあらずや。政範の死を聞ける牧の方の愁傷に、『敵と目ざすべき怨の的があるならば、此の悲しみの半分は、怨にまぎれて忘れうもの。當の敵を求むれば、所詮は我が身、我が心』とあるより、之を察すれば、是老夫人は其愛子の最後を以て自己の野心を諫止するの至情に出づと信ずるものゝ如し。さるにても牧の方は如何にして是事あるを知り得しや。吾等は是の如き判斷の經由し來るべき十分の言動を發見すること能はず。

るべしと雖も、多少教育あり、嗜好高き人々の觀劇眼を如何にすべき。

試に是の如き非戲曲的預想の例二三を指摘せむに、時政が吳羽の前の辨疏に對して『スリヤ全く世上の浮說をしづめむ爲め餘義無きはからひ、義時は申すに及ばず、尼公にも疑念はなきよな』と云ひ、はた吳羽の前が『此流言の源は、禪室さまに加擔のともがら、同志打させうず結搆にて、申し觸らせし苦肉の策略』（第一段第三）とは、何事なるか殆ど解すべからず。第一段第一に於ける往來の雜說は、讀者をして預め這般の消息を了せしめむとの作者の注意に出てたるは勿論ながら、かくのみにては受とれじ。『若君樣の千幡さまが、御膳さなかに俄の御立』を以て、世上の浮說を鎭むるの方便なりと云ふ、亦解し難きに似たり。牧の方の怨言に『邪推にも事を缺き、千幡君を毒害なし、あの政範を將軍家の跡目になさむ企とは』云々（一の三）とあるに及びて、始めて騷動の原因を確め得たるが如しと雖も、是の如き說明を得るまでの三場は、如何に過ぎ行くべきかを思はざるべからず。さるにても殊に義時が千幡君を御所につれゆきしは何故ぞ。これ第二段の第三、及び第五段の第二に於ける義時の獨白を了せる後に非ざれば、是間の關係甚だ明なりと謂ふべからず。加之

喩ふ。そは其活動の因縁のすべて自家によりて説明し得らるべきを謂ふなり。是れはた戯曲の形式上缺くべからざる要素の一ならずむばあらず。『牧の方』はたしかに是要素を蔑視せるものにあらざるか。

試にあらゆる史的知識の北條氏に關するものを、吾等の腦裏より抽き去れりとせよ。而して是『牧の方』を一讀したりとせよ。吾等は疑ふ、我讀者の中、一篇の事實を明瞭に了解し得るもの、果して幾何あるべきかを。尼御臺所の義時、時政に於ける二品禪室の最後に關する、和田、三浦、比企及北條諸家の源將軍家に對する、もろもろの事件關係は、全篇活動の素地を成せるものなるに、作者は戯曲的動作によりて之を説明することを爲さず、殆ど全く是の如き史的事實の知識を預想に附し去りたるの觀あるは如何にぞや。もとより一篇を達觀し、分析歸納の方法によりて反覆檢覈したらむには、全曲の事理をたどりつくすこと、強ちに難しとは謂ふべからず。然かも、さりとは娯樂慰籍を旨とする美文學として相應しからぬ極みならずや。唯目前の感興に揶揄せられ、全體の精神に亘りて抽象的觀察を下すことを知らざる、滔々たる俗客は、不可思議、不合理の如何なるものをも容認して敢て怪まざ

盖し戯曲には一定の形式あり、是れ感興受發の理に本きて作者須要の制約を成すものなり。三曲部の如きは、希臘以來の一體たるに相違なきも、之を分てば則ち支離、之を併すれば則ち疣贅。人物の數、事件の錯綜、塲面の變化、時間の延長、皆共に膨大複雜に過ぎ、到底完全なる戯曲的効果を奏すること能はざるべし。吾等は是點に關して『牧の方』を賛美すること能はず。

四

春のや氏が戯曲に對する妥貼なる意見と、老練なる手腕とは、吾等の敬服するところ也。然れども、詩學上の形式論を度外視するの形跡が、氏の前年の著『桐一葉』に於けると均しく、是篇にも夥しく見ゆるぞ可惜らしき。『牧の方』の作者にかゝることと告げむは嗚呼がましき業ながら、戯曲とは塲に上れる人物の言語と動作とに緣りて、過ぎ去りたる事柄をまのあたりに表象する詩歌の一種なり。かく戯曲の中に現はるゝ事柄は、全く曲中の人物のはたらきの中に終始すべきものなるが故に、其由來經過を解せむが爲に、曲外に他の話說、もしくは註釋を要するが如き事柄は未だ以て戯曲的とは稱し難からむ。われ等は常に戯曲小說をば一個の有機體に

上に於て、多少の力ありしは素より論なし、然れども是の如く特立せる幾多の部分を以て構成せる全體は、果して能く興味の一致を維持することを得べきや。Einheit des Interesses（アインハイト　デス　インテレッセス）は戯曲最大の要素にして、かの Climax と云ひ、Höhepunkt と云ふものは、畢竟是興味の一致を支撐し、興奮する所以に外ならず。三部曲の如きは明に是利益を損殺するものに非ずや。『ワレンスタイン』は、獨逸史劇の白眉と稱せらるゝもの、而かも卓識なるメルケルは此點より之を批難し、支離滅裂を以て之を貶し、其『陣營』の如きは Marionettenbude vor einem Tempel（マリオネッテンブーデ　フォル　アイネム　テムペル）に過ぎずとなせり（メルケルが『美文學の重要なる著作に就て』一女史に與へたる書簡』二十一、及二十四）。吾等を以て之を見れば、之れあながち理無きの說にあらず。『陣營』が『ワレンスタイン』の罪惡の頭首を表はすは、猶『牧の方』が義時の陰謀の端緒を示すが如し。然れども果して全曲の興味を分ち、統一を缺きたるの弊を補ふて、能く餘効あることを得べきや、之れ甚だ疑はしとなす。

よし又單に『牧の方』をとりて之を觀たりとせよ。動作完からず、其後景には僅に頭首を顯せる幾多の人物ありて、却て前面の事件を揶揄するの實あり。是の如きは讀者の注意を統一し、看客の同情を昂揚する所以に非ざらむ。

りと雖も、全篇の動作は玆に其終局を告げたるものに非ず。部曲の全體よりして之を見れば、僅に其端緒を開きたるものにして、其全部の主人公たる北條義時より之を見れば、僅に其頭首を表はせしものに過ぎず。春のや氏自らの言ふ所によるも『牧の方』中に只其頭首のみをあらはしたる北條義時、深見興致、實朝卿の三人物は、別に『源實朝』と題したる續稿に於て其の胴と尾とを描きいださむとす。其のうち、義時だけは『源實朝』にて胴をあらはし、其の續編『左京兆』に於て其の全身をあらはすべきものとす。

是を以て之を見れば、『牧の方』は由來一部完結の戯曲として見るべからざる者なり。故に其眞面目は是三部曲完成の後にあらざれば了知することを得べからざるなり。

遮莫、戯曲家が是の如き方法によりて、一部の戯曲を成就するは、果して賞讃すべきことなりや。是れけだし詩學上の一大疑問ならむ。シルレルが『ワレンスタイン』のTrilogieは、何人も知る如く、『陣營』と『ピコロミニ』と『最後』との三者より成る。前の二者が、全曲の主眼とする所の『最後』の戯曲的效果を增大し、激勵ならしめたる

是れ白面紈袴の作としては、むしろ怪むべきにあらずや。其の渡宋の船を艤装したりと云ふが如き、果して單に奇を好む游蕩に過ぎざりしか。彼が奇怪なる最後の裏面には、史乘載するところの外、又何等の消息を存せざるか。正史的研究の結果は何れにせよ、是の如きは優に詩人戯曲家の豐富なる想像を包容して、一大悲曲を構ふるの骨架と爲すに足らざらむや。春のや氏は其『牧の方』に關聯して『源實朝』を出すべしと云ふ。吾等は奸雄義時の人物と共に、此奇怪なる薄倖將軍の性格、及び事蹟が如何に詩化せらるべきかを樂み見むと欲す。

兎にかく『牧の方』に於ける史料の撰擇は、大に吾等の心を得たる所なり。

三

然れども『牧の方』は獨立して完成せる戯曲に非ず。引續き公にせらるべき『源實朝』及び『左京兆』と、三者相連りて、初めて北條義時を以て主人となせる一部の史劇を構成すべしと云ふ。是事は『牧の方』を批評するに於て重要なる制約なり。

想ふに春のや氏は是三者を合せて、シルレルが『ワレンスタイン』と均しく、三部曲 Trilogie となさむとするものなり。故に是『牧の方』にありては、其主人公は牧の方な

而かも其由來經行の湮滅せるか、若くは通常人に知られざるが如きものを選ぶを最も可なりとすべきなり。換言すれば、其首尾、殊に其落着の悲壯なる形跡のみ著しく世に知られ而かも其因緣の餘りに明ならざるが如き事實を擇ぶべきなり。是の如くむば、作家は明白なる歷史の拘束を免れ、比較的自由に其詩想を搆ふることを得べし、是點に於て『牧の方』は史料の選擇其の宜しきを得たるものなり。

春のや氏が先年の著『桐一葉』が悲曲の形式に於て缺くる所ありしは、氏があまりに正史に忠實なるの致す所にして、所詮は史料が戲曲的材料として明白に過ぐるの致す所なり。是れ吾等が當時注意したるところなりき。『牧の方』は即ち然らず。德川時代と鎌倉時代とは、歷史の精粗明暗に於て同日の論に非ず。北條義時の人物事蹟の如きは、優に專門史家の疑問を容るゝに足るべく、畠山一家の滅亡の如きも、北條氏と源氏との關係につらなりて、幾多の暗流を預想するに足る。殊に將軍實朝の性格は、今日尙未決の問題なり。實朝果して在來史家の傳ふるが如く、優柔不斷なる一介の貴公子に過ぎざりしか。宴樂に沈み、詩歌に耽り、毫も天下を以て意となさゞりしか。其の作る所の歌、豪宕の氣一世を風靡し、超邁の概今古を凌ぐ。

春のや氏が鎌倉時代の史料に藉りて、是戯曲を作りしは、吾等の第一に同意するところなり。

戯曲にまれ、小説にまれ、もと架空の事譚によりて人を娯ましむるを旨とすれども、明に吾れ人が確實なりとする所の知識に背くものは、吾れ人の眞實なる同情を惹起すこと甚だ難し。そは同一の名稱若くは外形の下に、全く異種の内容を含ませむことは、やがて人心の統一に反するものなればなり。されば何人も熟知する史上の事實をば、明らさまにつくり換へて、之を戯曲の資となさむは、戯曲家としていと〳〵拙なき業なるべし。さらばとて、一々史籍にたどりて其事を寫さば、戯曲は遂に成り難からむ。歴史は詩學の法則通りに經過するものに非ざればなり。然らば全く空想によりて事例を假作せむか。是れ所謂る世話物に於てなすべきも、時代物には施し難きが常なり。そは時代物はおのづから其資料として外面的形式の廣大なる事件を要するを以て、歳時と方處とに於て限られたる史的事實か、若しくは歴史以前の傳説によるに非ざれば吾れ人の依信を繋ぐに便りあしければなり。然らば戯曲家は其材料を何處に求むべきか。歴史上較著の事實にして

味ひたる批評家の望を充すに足るべくもあらず。かくて世に渇仰の聲のみ高くして、劇文學の沈默寂寥依然として故の如かりき。是の沈默を破り、是の寂寥を驚かし、戲曲的文學の暗黑界に一道の曙光を照したるものは、即ち春のや主人が『桐一葉』なりき。讀書社會が擧りて是作を歡迎し、聲名一世に喧傳せる亦宜なりと謂ふべし。吾等の見る所を以てすれば、『桐一葉』は素より絕妙の戲曲にてはあらざりき、されども其全曲の精神に於て、其性格の描寫に於て、其辭藻文體に於て、其他種々の點に於て、疑もなく近世戲曲の思想を傳へたる者として遙に在來の者に一頭地を抽てたる者なりき。春のや氏、今や此（戲曲に於ける）處女作成功の餘勢に乘じ、更に其圓熟重錬の手腕を揮ひて、茲に此『牧の方』を公にす。勸懲小說百年の積弊を一朝に打破したりし往年卓犖の意氣を振興し、今日劇文學の運命を双肩に擔うて立つの雄姿は、そぞろに人をして奮起せしむるもの無からずや。吾等は春のや氏が志を壯として、而して其業を偉とす。『牧の方』を評するは吾等の光榮とするところなり。

二

春のや主人の『牧の方』を評す

一

劇文學の寂れたるや久い哉。脚本改良の音沙汰も何時しか絶えて、年毎にたち增りゆく大小の劇場に、假名手本忠臣藏は今も、尙ほ獨參湯のきゝみを顯はしぬるけふ此頃、春のや主人が『牧の方』は如何ばかり吾等が心を強からしめたるぞ。

同じく文學の中にても、小說は兎にも角にも本邦今日の文明に隨れて進み行けるに違ひて、如何なれば劇詩脚本のたぐひのみは獨り斯の如く振はざるや。所詮は一般社會の趣味の卑きにつれて劇部の高尙なる新作を歡び迎へざると、及び誰やらが言ひはやしけむニキビの副產物なる抒情詩や、おのが三尺の書窓を其まゝ大世界の小說などの樣に作り易からぬにも由るなるべし。

されば是數年の間に作り出されし脚本淨瑠璃のたぐひは、二三に止らざれども、武藏野も摘草にすればいとも少しや。獨り櫻痴居士は歌舞伎の樞地に據りて、頻に新作を場に上せたれども、是翁が餘りに着實なる意見は、素より沙翁、シルレルを

て純然たる歴史的立脚地を占得せざるべからずと。

（卅年九月）

是を要するに支那民族の性質は極めて淺近なる功利主義の上に立つ。苟も實際生活の上に多少の利益を與ふるものに非ざるよりは、如何なるものも不急無益として擯斥せらるゝの傾きあり、則ち唐虞三代の古帝王、所謂る先王の遺業を體認し一切の行動凡て之を則とするは、支那四千年の歷史に於ける中心思想なり。是保守的精神は後世に至りて一個の鞏固なる形式主義となり、其歷史的惰性は殆ど絶對無上の威力を以て國民の思情行爲を箝策するに至れり。是れ支那歷史に變遷ありて、發達なく、回顧ありて前進無き主要なる所以なりとす。而して又是老大帝國が世界人文史上に於ては、また文學史上に於て、極めて無意義の位地を占得したる所以なりとす。

以上論じ來りたる所によりて吾人はほゞ支那文學の特質を究明し得たりと信ず。議論長きに過ぐるを恐れ、詳細の說を他日に讓り、吾人は茲に其結論を提起せむ。

曰く、支那文學の思想は我國民文學の進步に裨益するものに非ず。歷史的意義を離れて其價値の稱すべきもの甚だ尠なし。我邦學者は支那文學の研究に對し

支那は最も美術に乏しき邦なり。古代にありて特殊なる建築の樣式を有せず。天を祭るは堂に於てせずして、野に於てす、茅茨土階尙ほ帝王の居たるを妨げず。古代に於て人工の見る可きものは溝渠城池のみ、是れ耕作住居に缺くべからざるものなればなり。繪畵彫刻は後代の創始にかゝる。佛敎の輸入と共に印度式の堂塔は初めて支那人に知られたれども、何等較著の發達を見ずして已みき。音樂は古より大に行はれ、詩書等六藝の一として奬勵せられたり。然れども音樂其物に對して美的欲望を滿足せむが爲に非ずして、其目的は專ら敎育にあり。即ち人心の物に感ずる所を節し、其性情を養ひて道德に和順するにあり。孔丘の所謂る詩に興し、禮に立ち、樂に成るもの、一として實行を旨とせざる事なし。

孔丘曰く、禹は吾れ間然する無し。飮食を菲して孝を鬼神祖先に致し、衣服を惡にして美を黻冕に致し、宮室を卑うして力を溝洫に盡す。禹は我れ間然する無し、と。吾人は是言の支那思想の精神を表明するに於て亦間然する無きを認む。社會の上層より下層に至るまで、是の如き精神によりて浸潤せられたる國土に、自ら美術、文學の發展し得べき謂れなきなり。

實利主義と共に一種の狹隘なる形式主義は文學を支配せり。之れ支那文學の發展を沮渇したる一の主因なり。詩歌も文章も共に一定の典型あり、苟も之に應ぜざるものは以て破格となす。素自由に達意を主とすべき散文にありても、起結照應等幾多の複雜なる桎梏あり。思想の自由なる活動も之に矜式するを心とするを以て動もすれば空言虛文に陷るの弊あり。古より大論策の支那文學に乏しきは、是形式主義與りて力ありと謂はざるべからず。

支那には眞正の歷史的著述乏し、是れ亦其實利主義の影響する所なり。春秋以來、固より史を以て稱せらるゝもの何ぞ限らむ、然れども其の多くは歷史其物の爲に編述せるものにあらずして、或は世道名敎の爲にし、或は王者經綸の用に資す。其材料の取捨、評論の上下、亦自ら公平無私なること能はず、所謂る歷史の客觀的敘述は殆ど之を見ずと云ふも敢て過言に非るなり。已に實利の眼を以て一切を觀察す、是を以て其歷史は多く政治のみ、即ち王者興亡の變遷のみ、一藝、一學、若くは一般人文の歷史に至りては絕て之れを見ざるなり。是の如きは獨り歷史に就て言ふべきにあらず、一切の事物概ね是なり。

義の精神を繼承せるものなり。一般に論ずる時は、四千年の文學は遂に是舊圈を顚脫せざるなり。以爲らく、詩は以て志を暢べ、文は以て意を達す。苟も名敎に益なくむば如何なる絶妙好辭と雖も狂言綺語と擇ぶところ無し。是を以て士君子は文を屬し詩を賦するや、先づ人心世道に裨益するの如何を思ふ。徒に工を弄し文を舞はすは文士の末技として輕蔑せられしなり。是故に戲曲小說の如き純文學に屬するものは、上代に發達せず、莊列の寓言を初めとして、穆天子傳、飛燕外傳より五朝小說に輯錄する所少からずと雖も、多くは坊間の戲具のみ。士君子と稱せらるゝ上流社會に行はれたるものに非ず。元以降、明清二朝に亘りて雜劇、小說漸く流行し、水滸傳、三國志、西遊記、紅樓夢、桃花扇等の名著あり。湯若士、金聖嘆、李笠翁等の名家あり。然れども之れ儒家正經の容れざる所、所謂塡詞一道は文人の末技なりとは、士君子が戲曲小說に對する遍通の意見として見る可きなり。故に小說の作者も務めて自ら抑遜し、博奕戲具を以て自ら比し、勸善懲惡を以て自ら辨ぜり。李笠翁が所謂る淺薄の事を假りて勸懲の意を發すとは、即ち是れ戲曲小說が依て文學として存在し得たる第一の條件に外ならざりしなり。

多露』と云ふも、禮によりて情を抑ふるの意に外ならず、何れも現世の制裁を顧慮するの致す所なり。又鄭風鷄鳴の如き、もしくは唐風綢繆の如き、尚ほ何れも實利形式の一邊に偏し、決して自由なる人情の發揮せるものに非ず。其他人事を離れ、題目を詠ずるもの甚だ少く、政治の汚隆を諷し、君侯の德澤を頌したるもの三百篇を通じて然らざるは無し。

是の如く支那民族にありては、詩は徒に娯憂暢思の爲に作られしものにあらず、素實際人生と爲すあらむが爲なりき。されば孔丘の之を編纂したるも、其意專ら敎育政治の用に資せむが爲なりき。故に詩三百を誦し、之に授くるに政を以てし、達せず、四方に使して專對ふる能はず、多しと雖も奚ぞ以て爲さむと謂へり。功を論じ德を頌するは其美を將順する所以なり、過を刺り失を譏るは其惡を匡救する所以なり。先王是を以て夫婦を經し、孝敬を爲し、人倫を厚くし、敎化を美にし、風俗を移す。詩の成りたる所以、又詩の用ひられたる所以は畢竟是に外ならず。夫の情に發して禮儀に止まるは實に是敎訓主義の自然の結果に非ずや。

源泉は以て下流を知るべし。後世に於ける支那文學は畢竟是實利主義、形式主

實に傾き、詩的情熱を以て能く人心を昂揚するもの少なし。其の雄大悲壯と稱するものは、むしろ其格調によりて重きを爲すものゝ如し。

支那最古の文學を詩經となす。若し一般書典の中に就て最も古きものを求めむか、尚書の今文三十四篇、若くは山海經を推さゞるべからず。然れども純文學としては先づ指を詩經に屈せざるべからず。

詩は素詠諷嘆嗟の聲にして、人情自然の流露に成るものなり。然れども三百詩篇を通覽する時は純粹の抒情詩として見る可きもの甚だ少なく、多くは敎訓の意を托したるものなるを發見す可し。偶々眞正の抒情詩あれば後世の註者動もすれば之を附會して勸懲の意ありとなす（召南草蟲の如し）。男女の愛情に關するものも概ね家族制度より打算し來りたる敎訓的儀式にかゝる、例せば關雎、葛覃以下然らざるなし。偶々王風大車の章の如き、男女自由の戀愛を述ぶるものあるも、『豈不爾思、畏子不敢』と云ひ『豈不爾思、畏子不爲』と云ふに至りては、形式主義に服從する意思如何に强固なるかを想見するに足る。之れ、吾れ爾を愛すと雖も士大夫を恐るゝが故に敢て共に走らずと云ふなり。又召南行露の章に『厭浥行露、豈不夙夜、謂行

心的活動によりて法界を厭離し、もしくは之を滅盡するにあり。老聃にありては則ち然らず、唯大道の自然に結合し、從順し、若くは適應するにあり。故に涅槃も復歸も其形同じきも其實大に異なる所あり。是を要するに老聃の說と雖も其形式こそ多少の特色あれ、其精神に到りては純然たる支那思想の立場に駐まりたるものと謂はざるべからず。莊周以下の南方學者の說亦是樊籠裡を脫せざるなり。

夫れ然り。支那思想の中心たる儒敎が、支那民族に固有なる現世主義の上に立ち、盛に、上代先王の遺訓を祖述したるの結果は、遂に一種の嚴峻なる形式主義となり、國民一切の活動を箝束し、其の自由の發達を拘制するに到れり。是に於てか『古の道に非ず』てふ一義は、殆ど無上命令として其民族の行動を支配せり。其人文の停滯腐爛せる素より其所ならむのみ。進步の民は其希望を前途に認めざるべからず、過去を理想とする國民には退步あるのみ、滅亡あるのみ。

文學も亦徹頭徹尾是保守主義の摸型の中に鑄造せられたり。且其淺薄なる現世主義は詩歌の中に敎訓を與へたれども空想と詩趣とを與へず。激越なる感情も亦冷刻なる利害の秤量によりて十分の發揚を見る能はず、是を以て概ね淺薄近

天より之を祐く、吉にして利あらずと謂ふこと無しと。是れ進化論其物よりは明に人生の實行主義を說けるものに非らずや。

孔丘は是思想の實際的傾向を最も明白に示したるものなり。吾れ生を知らず、焉ぞ死を知らむと云ひ、怪力亂神を語らずと云ひしは、現世主義の套語（モットー）として見る可きものならずや。後世の支那學者が其學を以て正統の古學とせしは洵に偶然ならず。老聃の學は孔丘其他の學に比すれば多少純理哲學に關する思想を有し、又明晰なる世界觀を有せりと雖、而かも道德經八十一章の大旨意は、所詮世に處し生を全うするの道を講じたるのみ。其世界觀として見るべき分出論の如きも、其人生觀に於ける復歸主義將た厭世主義を演繹する上に須要なる方便として提起せられしのみ。其實際的は現世的傾向は恐らくは一步も孔丘に讓らざるべし。唯現世の幸福を求むる方法に於て孔は樂天的にして老は厭世的なるの別あるのみ。

且老聃の復歸厭世の敎義と雖も、決して印度アールヤ民族が內面的考察によりて解脫を悟悅したると同日の論に非ず。印度人にありては解脫を得る方便は唯

現世主義は、一切現世に功利なき事物を排斥するの主義なり。故に現世主義の結果として支那民族は純然たる純理哲學を有せず。易の一經は尤も高遠なる哲理を含有すと稱せらる。其の宇宙の分出を說き、萬物の進化を論ずるの部分のみを取りて之を見れば、實に易は儼然たる一個の哲學なり。然れども是れ理の爲に理を說きたるにあらずして、實は天地人三者の關係を明にし、以て天道に隨て人福を全ふせむが爲のみ。其の宇宙論、進化論を說述せる根本的動機は、現實世界の功利に存せることは、繫辭傳を一讀せば昭々として明なり。

蓋し以爲らく、天地萬有の運行し、變化し、發達する所以の道唯一のみ。大極より天地剖判し、生死以て交はり、榮枯以て繼ぐ。皆是れ同一陰陽の理が時と處と位とに隨ひ、萬殊の事物に對應して其形を變じたるのみ。易の道則ち是れなり、是道に隨ふものは昌へ、逆ふものは亡ぶ。人事に吉凶禍福あり、生死悲歡兩々相對して人は其間に展轉す。是れ即ち易道の順逆に依りて二氣の反影を見るが故也。是故に身を全うし、生を壽うせむと欲せば、須らく是大道に順應せざるべからず。故に君子の安ずる所は易の序なり居る時は其象を觀、動く時は其變を見る。是を以て

が天を畏れ之を拜したるは、是れ人情の自然のみ。然れども是民族の實際的性質は、宗教心をも現實主義の使僕となし、神を拜する間にも實際の利害を遺却せず、天威を畏るゝの傍ら、其意を迎合して豫め吉凶禍福を卜せむ事を務めたり。易は即ち是思想を表示せむとせしものに外ならず。是に於てか支那人の宗教心は、其萌芽に於て切斷し去られ、來世、未來、彼岸を憧憬するの念慮は、全く其跡を絶ち、却て功利、求福の現世主義の發達に資するのみとなりぬ。

蓋し現世の不圓滿不如意に慊焉たらずして、如何にかして如意圓滿なる吾理想に描くが如き世界を實現せむと欲するは、宗教心の根據なり。而かも吾人の理想的世界は是れ現世に於て到底望み得べからざるを見るや、是の如き世界は現世を超絶せる彼等の未來世に存在すとなし、之に到達するに一切現世の繫累を離脫し、專念信仰の力によるの外なしとなす。是究竟の理想界こそ異なれ、是れ佛陀教にも、基督教にも、其他一切の大宗教に共通せる要點なり。即ち一言すれば、宗教の要素は非現世的たるに存す。支那民族は非現世的にあらずして絶對的現世的なり。之れ是老帝國に宗教なき所以なり。

美術の何れも明かに證示する所なり。アーリヤ人種にありても、セム若くはハム人種にありても、太古にありては其身邊を圍繞する自然現象の高大威烈に對して、抑畏崇敬の極、所謂る自然宗教を構成せしを常とす。然れども支那人にありては、是の如き自然宗教の著しきものを見ず。支那古代の文學に天命、上天、若くは帝(天)を言ふものありと雖も、吠陀教若くは希伯來教等に於ける神の意義と大に異なるものあり。寒暑晴雨の自然現象が神爲なりとして信ぜられたるは事實なりと雖、神が自由の意志を以て作爲せるよりは、寧ろ人間の行爲に關聯して或賞罰的の意義を有せるものとして考へられき。即ち人間は自然現象の起廢に對して、一種の能動的勢力を有し、以て能く神意を制限し得るものとして、更言すれば、人間は能く神を驅使し得べきものとして、考へられき。湯王が旱魃に際し、剪爪斷髮して六事を以て自ら責めたるが如きは、印度人が天を仰で渴仰讃美の外他意なきと同日の論にあらず。詩書の謂ふ所の天は多くは之れ自然の法則を表示したるものにして、孔老諸子の所謂る道と同義なるに似たり。

支那古代の文化は北方に起れり。北方の地、荒廢落寞、概ね天惠に乏し。支那人

り。是に於てか儒教は一種の形式主義となり文化の進歩を籍策する一大勢力となれり。支那民族の人文が悠々數十世紀の間何等顯著の發達を爲さざりしは實に是形式主義の馴致せる保守的精神に職由せずむばあらず。

儒教は實踐道德の主義なり哲學に非ず又宗教にあらず。是主義は支那思想の正統にして常に國民的活動の中心核子たり。其體制は內外氣運の變遷に隨ひて多少の更革なきにあらず即ち三代の文化姬周に到りて其頂點に達せしが秦六王を一にするや儒書を燒き儒者を坑にし世漢に入りて德教又振はず。偶々佛陀教の東漸に際して人心靡然として之に赴きしが儒教の精神は湮滅せるにあらず。宋に入りて所謂る宋學派は儒佛二教の調和を試みしが幾もなく所謂る古學派の勃興となりて茲に周初の儒學捲土重來の勢を以て支那思潮の眞面目を發揚せり。故に儒教は其終に於ても其始に於ても支那民族が第一の實行主義たりしなり。

然れども民性に適せざる教義は決して一國の人心を支配すること能はず儒教の勢力は素と支那民族の現世主義に本くを知らざるべからず。

支那民族は恐らくは世界に於て尤も實際的の民族ならむ。之れ哲學宗教文學

に於ても、尙ほ依然として其故態を改めざるなり。而かも其歷史は決して靜平無爲の歷史にあらず、革命相繼ぎ爭奪相追ふ。獨り其人文の停滯進まざるは何ぞ。支那は國老いたりと雖も年尙ほ穉し。否寧ろ小兒の狀態にして而して老耄したるものなり。傳ふ、老聃母胎に止まる事八十歲、生れながらにして白髮なりきと。然らば則はち老子は善く支那の國性を體現したるものと謂ふべし。

支那の文化は何故に其歷史と共に進まざりしか。其國民の性質保守的なればなり。支那の人文は何れの方面に於ても自由の發展を爲さず、一種の形式に拘泥して常に回顧退嬰に傾く。而して是の如き形式は國民が初めて將來に實現せむとする所の理想にあらずして、却て既に過去に實現せられたる法制にあり。國民の正學と稱して一般に遵奉せらるゝものは儒敎なり。而して儒敎なるものは何ぞ。孔丘が今を去る二千數百年前、堯舜を祖述し文武を憲章し、即ち所謂る先王の道を演繹して後世の典謨と爲したるものに非ずや。支那人は時勢の推移と共に政敎の變遷すべきを知らず、一意成憲に法りて其敎義を實行せむと擬す。故に上は國家より、下は個人に至るまで、其の理想とする所は唐虞三代の國家及び個人な

は尙ほ其活力を持續し得べきものなるか。今や日本の文化は支那と其性質一ならず、又其發達の方面に於て殆ど對角線的反對をなせり。是時に於て吾人は吾人の支那思想に對する態度を奈何すべきか。苟も本邦文學の前途に對して顧慮するものは常に這般の問題に想到せざるべからず。

是問題の解釋は即ち支那文學と本邦文學との未來の關係を決するものなり。吾人今支那文學の特質を觀察して是問題に關する吾人の位置を考定せむ、而して是目的の爲に支那文化の一般の性質を瞥見せむ。

そも〳〵自ら中國、中華と號し、一切他邦を輕侮して戎狄蠻夷と卑めたる支那帝國は、亞細亞大陸の東部に位し、面積歐洲より大に、人民は世界人口の三分の一に當る。建國以來凡四千年、其文學、歷史、經典は世界に於て最古なるもの〻一なり。

是老帝國の古代史を讀みたる人は、誰か其現狀の未開、蒙昧に驚かざらむや。今日の支那と先秦、兩漢、若くは唐宋の支那と其人文の程度に於て幾何の差ありとするや。西歐羅巴の森林に羅馬の文化未だ其片趾を着けざりし時に當りて、已に粲然たる文物制度を有したりし國民は、伯林、巴里が世界文華の中心となれりし今日

支那文學の價値

支那文學の價値如何。今日に於て是の問題を提起す、吾人其の無益に非ざるを信ず。

近時青年漢學者の支那文學を論ずるもの甚だ多し。是れ學界の慶事なり。然れども人は各々其の學びたる所に偏し易し。獨り其の好む所に媚悅するは則ち妨げなしと雖ども、苟も往を料りて來に資し、我國民文學の發達に貢献せむと欲するものは、須く胸襟を濶大にし、公正なる批判を以て之を評價せむことを要す。吾人は今の青年漢學者が是覺悟を以て其の筆を執らむことを希望す。

支那文學素より特性異彩を有す。然れども特性異彩必ずしも尚ぶべきものに非ず。其書冊の富贍、歷史の悠遠、詩文人の饒多、誰か之を爭はむ。然れども之れ價値問題に於て何かあらむ。其の我文學と二千年間の抱合は歷史上極めて重大なる意義を有すること素より明けし、然れども今日以後、日本文學は尚ほ其文字思想を支那老帝國に仰がざるべからざるか。國民文學の同化力以外に於て支那文學

幸福を進むるに於て缺くべからざるなり。

今の所謂る社會小說は、貧弱者に訓ふるに服從を以てせずして、反抗を以てし、犯罪者に訓ふるに、悔悟を以てせずして、遂非を以てし、不幸者を導くに救濟の法を以てせずして、破壞の道を以てす。之れ啻に社會道德に稗益するところなきのみならず、又彼等の爲に眞摯なる伴侶と稱するを得ざるなり。

之を要するに吾等は今日の所謂る社會小說を歡迎する所以を知らざるなり。

(卅年七月)

の如き高上なる原理なりと思惟す。

夫の無見識なる小說家者流が、個人の罪惡を外圍の境遇に歸し、以て社會の缺陷を指斥するを以て詩的なりとなす、尙ほ一面の社會觀たるを失はずと雖も、其の道念の卑近幼稚なるは則ちむしろ憫むべしとなす。是の如くにして催起し得たる下層人民の怨嗟反抗は、果して何物に終るべきかを思へ。啻に彼等の生活狀態を進捗するに力無きのみならず、却て自己の放てる矢によりて傷けらるゝ無くむば幸なり。是れはた決して他面に於て富强者の反省を促がす所以にもあらざるなり。

若し道德を以て責むべきものを云はゞ、富强者須らく先にして、貧弱者須らく後なるべし。吾等は素より富强者に向て道德上十分の反省を要む。而かも强力即ち權利なるの社會にありて、是の如き反省は貧弱者の服從によりて初めて得らるべきものにはあらざるか。吾等は社會進化の過程に於て其の勢力の不平均なる分配を受けたるものが、彼の强力に對して應分の服從を示すを以て、彼等の幸福を享受せむが爲め當然の要務なりと思料す。之れはた社會の秩序を維持し、人生の

等しく生を是世に享けて國家を共にし、社會を同うす、誰か同胞の不幸を見て之を憐まざるものあらむや。吾等は若し出來べくむば、一切衆生に向て平等の慈悲を分たむことを望む。然れども人は一定の歳時に生まれ、一定の方處に住す。生存の制約に於て極めて狹隘なる規定を受くるを免れず。是に於て事に先後の序あり、義務に輕重の差別あり。人情自然の發動に任じて、輒ち完全なる道德的生活を現ぜむこと、亦難しと謂ふべし。吾等は是點より、世の所謂る慈善的行爲を以て、適當なる調攝の下に於てするに非ざれば、決して世人の思惟するが如き道德上の價値あるものに非ざることを信ず。

世の所謂る社會問題を論ずるもの、動もすれば貧弱者を庇保せむとするの餘り、一に罪を富强者に塗抹し、進て社會制度の改革を奬勵せむとするの口氣に出づるもの少からず。是の如きは社會生活に對する或る根本的曲解に出づるなからずや。勞働、犯罪、土地、人口、貧民等の問題は、經濟上のそれに伴ひて、洵に憂世者の甚深なる省察を要する所なり。然れども是の如き問題の解釋は、更に他の高上なる問題の解釋によりて制限せらるべきものには非ざるか。吾等は國家主義を以て是

の現象に惑はずして、社會的活動の眞相に看到せむことを要す。社會問題を對象とする所の小說は、社會道德に尤も密接なる關係を有する所の小說なり。是の如き小說の作家は筆を執るに先ちて自己の嚴肅なる實踐道德に接觸せることを自覺せむことを要す。是れはた社會の一員として、文學者が當然恪從すべき須要の制約ならずむばあらず。借問す、今の所謂る社會小說を作る者は果して是の覺悟あるか。

吾等の觀る所にして大に謬らずむば、今の社會小說と謂ふ所のものは、作者が一種の私心に式して、僅に社會生活の偏頗なる一面を描き得たるものに非ざるか。換言すれば、殊に社會の不幸なる階級に同情し、是の如き不幸の因緣を以て外圍の境遇に歸せむとしたるものにあらざるか。是の如くにして社會の組織躰制に免れざる幾多の缺陷は、個人的罪惡の辯解として描寫せられ、隨て社會的勢力の過重なる分配を制し得たる一半の階級は、殆ど社會的罪惡の根蒂として觀察せられたるに非ざるか。是の如きは小說として價値無きは素より論を待たず、吾等は社會道德の不健全なる暗潮を代表するの文學として、大に之を排斥せざるを得ず。

無益なりと思惟するものなり。感情の要求するところは必ずしも德義にあらず。人生の組織其の複雜を加ふるに隨ひて、道德に沈思を要し、義務は比較を要す。單純なる本能が道德的行爲たるを得たるの時代は、永く既に過ぎ去れり。

更に是の如き點より所謂る社會小說を觀察せば則ち如何。

下

今の所謂る社會小說を見るに、其の富者を描き、貧民を描き、犯罪の由來を描き、兇行の情狀を描くは善し。勞働社會の憫むべき困厄を描き、備主資本家の惡むべき恣睢を描く、亦可なり。社會外部のもろ〳〵の關係が個人の內心に影響したるの結果として、幾多の偶生的罪惡の實現と、之に對する必然的迫害とを描く亦不可ならず。死活問題の嚴肅なる危機に際し所謂る生存の意志が無限の制裁を有するの事實が、社會の缺陷として描かるゝ亦可なり。將又是の如き制裁に服從する個人の行爲が、不德不法として描かるる亦甚だ可ならずとせず。而かも一個の小說家として人生世態の客觀的描寫を旨とするものは、至公至正なる見地に據り、當眼

や方に夫の世界平等主義の如きものを、前代の迷妄として埋葬し了るべきの時期に到達せり。即ち國家主義の各國に唱へらるべき時期に到達せり。

國家主義は、國家を以て人生の至寶となし、隨て其の發達進捗を以て國民最高の義務なりとするものなり。もとより之れ個人を蔑視するものに非ず、却て國家の富强を以て個人の幸福の唯一の所依なりとするの確信に本く。是を以て國家主義は國家の幸福に對する貢獻の多少によりて、事物存立の意義及價値を認識す。國家は生命を有し、目的を有し、又之に對して實行の勢力を得むことを希望す。是の如き國家的大運動に一致して其の行動を規定するものにして、初めて國民として、其の義務を盡し、其の幸福を享受することを得べし。是點より見る時は、平等博愛を旨とする所の一切の宗教及道德は、所詮國家の友に非ずと謂はざるべからず。

是見地に據りて所謂る社會問題と稱するものを見れば則ち如何。吾等は毫も國家事業として、當に社會の劣者弱者を保護すべき何等の理由を見ざるのみならず、社會進化の必然なる結果として國家的活動の勢力となる能はざるが如き、不能者に向て彼等に値せざるの利益を惠與するは、國家全體の幸福の上に於て斷然有害

適者生存し、不適者滅亡せざるを得ず。是れや、上は人生寄托の最高形式たる國家より、下は一個人に至るまで、免れがたき制約なりと言ふべからむ。

今世紀に入りて、物質的文化が過重なる勢力を社會に得てしより、是の如き差別はいよ〳〵激しくなりて、社會的生活は多數劣者の幸福を犧牲にするに非ざれば、其の進歩の過程を繼續する能はざるの勢を示せり。幾多の宗教的はた道徳的運動は、是の缺陷を補充せむが爲に平等博愛の旨義によりて、其の事業を作興しゝりきと雖も、嚴峻なる國家的制度の下に、もとより多く其の効を見得べくもあらず。一部の貧民、孤兒、及び不具者に對する幾分の保護は、政府の事業として爲されざるもの無きに非ずと雖も、是れはた多く言ふに足らず。社會進化の大勢は經濟問題と相並びてます〳〵文化の傾向を速むるにいたれり。

國民の利害を同一ならしむと稱せられたる貿易だに、輓近は漸く國家的となり國家宗教の異同は、物質的利害を超えて、感情上、殆ど絶對の勢力を有し、人種の競爭は世界の到るところに行はる。蓋し之れ十九世紀の末葉にいたりて、國家が其の生存の制約に於て一生面を拓くの必要を自覺し來りたるの結果に外ならず。今

所謂社會小說を論ず

上

何時何人が言ひ觸れけむ、文壇時に社會小說の聲を聞くことあり。そも社會小說とは如何なる種類の小說ぞや。何の小說が社會の出來事を描寫せざるものぞ。今の所謂る社會小說とは、社會の如何なる出來事を寫せるものを云ふか。その明確なる概念を得むこと、稍々難しと雖ども、吾等の察するところに因れば、社會進化の上に於て必然の結果とも稱すべき、社會的勢力の不平均なる分配に對する弱劣者の反抗をとりて、其の主要なる資材とするところの一種の小說と見て大過なきが如し。

希伯來の經典の初めに、晝と夜とを別ちし主義は、均しく萬有發達の原理なり。社會進化の過程に於ても、平等無差別の發達は到底是世には見るべからざるなり。所詮、是の限りある地上の資力の上に、是の無定限の所緣を宿す、自から競爭無きを得ず、おのづから强弱あらざるを得ず、自から利害相異なるもの無きを得ず。自ら

に起りしか。幾多の新作家は如何なる氣勢に驅られて其のデビューを爲したりしか。殊に明治の才媛故一葉女史の天才は如何に當代を風化せしか。抑も〳〵觀念派は如何にして衰へたるか。如何に社會問題に關聯せる新小說は起り來るべきか。社會問題と自然派と抱合せるの結果如何に厭世主義の文學を催起するの傾向あるべきか。明治の小說は是展轉反側の間に如何に國民的性情に基ける國民文學を形成するの道に進みつゝあるか。是れ次に來るべき問題なり。他日を待て論述するの時あるべし。

（卅年六月）

ならずと謂ふか。Weltschmerz（エルトシュメルツ）を唱へたるニコラウス・レーナウは熱心なる愛國詩人なりしに非ずや。吾等は我詩人小說家の社會國家に冷淡なるを見て文國亡國論の強ちに齊東野人の語に非ざるを認む。

然れども去るものをして去らしめよ。戰爭文學は明治の小說史に於ける一のエピソーデに過ぎざりき。殘るところのものは、依然として似而非なる寫實小說と浪六小說の殘影とに過ぎざりき。所謂觀念派は是虧漏を衝て時尙を滿たすべく勃興せり。泉鏡花が『外科室』川上眉山が『うらおもて』廣津柳浪が『黑蜥蜴』等は其派の代表的著作者として見るを得べし。之れ實に明治二十八年なり。是に於て明治の小說は其第三期に入る。

吾等は茲に筆を擱くべし。觀念派の性質、缺點、其の小說史上に於ける意義等は今茲に述べざるべし。

觀念派の起りて後、小說界は如何に其局面を一變せしか。舊來の寫實家は如何に其影響によりて心理的傾向を生ぜしか深刻悲慘なる小說は何が故に特に是間

し、社會國家の時事的問題の如きは詩歌小說の材料として最も排斥するの傾を生ずるに至れり。甚しきに至りては實驗を名として不義を行ひ恬然として羞恥せざる小說家あり、世人亦太だ之を怪まざりしものゝ如し。是を以て廿五年井上博士の宗教教育衝突論が一世の耳目を聳動し、哲學宗教の間に健全なる國家的精神の成立を見るに至りし際にありても我濟々たる小說家は冷眼にして之を看過し去りき。王師海を越えて西に動き一國を擧げて國家的精神の大運動を見るに至りし時も二流以下の作家に成れる淺近なる戰爭談の少數を省きて一人の愛國義勇を唱ふものあらざりき。嘗に是の如き詩人無かりしのみならず戰爭に關する著作を出すものを貶して際物師と云ふに至ては吾等は殆ど言ふべき所を知らざるなり。是千載一遇の時機に臨みて一人のアルント無くケルテル無し恨事ならずとせむや。

吾等は人生と爲す所無きの文學を要せざるなり。人生は一のみ。空靈幽玄なる理想を唱ふものは何が故に旦暮往來の世事を歌はざる。ゲーテが其母國の運命に冷淡なりしの故を以て誰かアルントキョルテルリュッケルトウーランドを詩人

姿繪』の如きは、さすがに子が久しく嚢中の物にあらざることを示して、遙に今日の全盛を豫告したるものゝ如し。

任他、浪六小說、探偵小說、つぎ〳〵に寂れゆきて、さしも渴望の聲高かりし歷史小說亦遂に出でず。明治の小說は遂に其觀念小說を歡迎するの時期に達せり。

是時に當りて日淸戰爭起り、年を越えて尙戰まず。一般文學は一時社會耳目の外に拋擲せられたるの觀あり。然れど其の純文學に及ぼしたる影響は何等恒久の性質を帶びざりしが如し。社會の上層より下層に至るまで、政治、宗敎、學術の上に於て那の如き大勢力を有したる世界的戰爭の大勝利が、詩歌小說の上には何等著大の關係無かりきと謂はゞ、是れ頗る奇怪の言なるが如しと雖も、吾等は我國民の審美的意識の實に斯の如きものなりし事實を認むるを奈何せむや。そも〳〵我國の文學者は概ね超世脫俗の氣風を有し、文學の本領を以て全然出世間的なるべきものとなし、人生世相に密着して共に俱に向上精進の道を踏むべきものなることを思はず。是れ主として勸懲主義一度び仆れてより寫實的小說家及批評家の擧て Art for art 主義を推奬したるの結果なりとす。其極彼等は道念、宗敎を無視

少しとせず。南翠はリットン卿の小なるものか。其の時と共に推移して文躰思想を改易したるの點に於て、歷史小說、罪惡小說、世話小說、冒險小說の作者なることに於て、其の脚本作者となりたることあるの點に於て、又其の俗間に多數の愛讀者を有したるの點に於て、酷だリットンに似たるものあればなり。巖谷漣は素硯友社の秀才、其の作る所、清妍瀟洒、情致きよくして高く、文字亦輕妙纖麗なり。可隣無邪氣なる少男女は其の最も得意とする所『友禪染』『こがね丸』『菫日記』近くは『伽羅物狂』の如き、其得意の作ならむ。然れども子は遂に當時は紅葉と共に其狹隘なる主觀的寫實を顚脫する能はざりしものゝ如し。森田思軒は外國文學の飜譯家として知らる。『探偵ユーベル』『蒼使者』『月珠』『哀史』等は英文によりてユーゴー、ヴエルヌ、コリンス等の作を譯せるもの、文躰は和漢折衷躰なり。粗大の文字を以て能く情緻の意を傳ふるの才ありと稱す。其門末の輩はユーゴーの輸入者として子を崇拜すと雖もロセッチにして初めてダンテを註解することを得たりきと聞き傳ふる吾等は、佛文を解せざるもの如何にしてユーゴーの眞趣を傳へ得たるべきかを驚くのみ。二十六年以前に於ける廣津柳浪は其名甚だ高からず。然れども『五枚

ふべきものあらざりき。是れ時か、勢か、又は機の未だ熟せざるが爲か。吾等つら〳〵我邦の狀態を察するに後年に至りてロマンチク文學思潮が土を捲て再來するの時あらむか。明治文學の最盛期は蓋し其後に來らむ。

吾等は本論を叙述するに當り、饗庭篁村、森鷗外、須藤南翠、巖谷漣、森田思軒、廣津柳浪の諸子に及ばざりしは、他の故あるに非ず。ロマンスとノベルとの消長は、明治小說史の大勢を決する主要なる事實なるを信じたるを以て、主として是に着眼したるに因る。篁村は其思想、文躰に於て寧ろ守舊派に屬するもの。其文藻は其脉を浮世草子、氣質物、及び三馬、一九の戲作にとりて、更に明治の新衣を裝ひたるもの、輕妙洒脫他の摸倣すべからざるものあり。『堀出しもの』、『當世商人氣質』、及び『むら竹』載する所の諸作は、舊文學の殿將として一種の異彩を明治文學に添へたるものなり。鷗外は素獨逸の文學に精通するもの、其着想、文致共に他に異なるものあるは、其の親むところに私淑したるの致す所ならむ。『舞姫』、『空象の記』、『埋木』等は、紅葉、露伴の外に獨得の風趣を保ちて、永く後代の珍となすに足る。且獨逸文學輸入の端緒は、實に子によりて開かれたるものなれば、讀書社會の子に負ふ所亦

オバルヂの以太利に於ける。スコット及び湖上詩人の英吉利に於ける。はた又ラマルチン、ユーゴー、デューマの佛蘭西に於ける、皆是大潮流の所産に外ならざりき。今是を我邦に比ぶるに事躰の大小素より同日の論に非ずと雖も、維新以來物質的勢力の增加は、我國民の詩的生活の範圍を削減し、人情は古代の敦厚溫籍に遠かりて、日に刻薄冷淡に流れ、風俗も亦隨ひて淳樸を失ひて、漸く浮華に赴けり。社會の鏡たる文學は明に是を示しぬ。あはれ過ぎにしを昔の慕はしきかな、已むなくむば今を捨てゝ古を取り、乾燥なる功利の世に高雅なる古の人を現はせよかし。是れ意識的にはた無意識的に一般社會が小說に對するの渴望には非ざりしか。似而非寫實小說衰へて撥鬢小說起り、次いで歷史小說の出場を望みたるは、小說其物の性質自然の變遷なるべしと雖も、そも〳〵又是懷古的風潮の暗流に乘じたるものに非るか。

然れども悲しきかな。明治二十七年の前後に於ける歷史的小說の渴望は、遂に醫せられずして已みにき。夫の『瀧口入道』の如きは、小說と云はむよりは寧ろ抒情的敘事詩として見るべかりき。村井弦齋、遲塚麗水、塚原蓼洲諸子が作には、殊に言

なる風潮を小說界に喚起したり。何ぞや。歷史小說を求むるの傾向即是れなり。

吾輩は茲に歷史小說に就て十分の意見を吐露するの遑なきを恨とす。其性質、由來、及び是傾向の原因に到りては、他日詳述するを期すべしと雖も、吾等は今世紀の前後に跨りて歐洲各國の文學世界を振盪したる、所謂 Romantik（ロマンチク）の趨勢に似たるものあるを認めずむはあらず。佛蘭西の大革命、及び之に續きたる奈破翁の併呑主義に反對して。各國民族が其團結と平和を維持するの必要に迫りたるや、そが保姆となりて安慰と奬勵とを與へたるものは、所謂ロマンチク文學なりき。彼はガンケルマンよりゲーテ、シルレル一輩に至るまで、多少感染するを免れざりし古代希臘の崇拜摸倣に反對して、中世紀に於ける羅馬民族の風尙を思慕し、當代社會の凋弊枯燥なる原野に、中古文學及び宗教の縹緲典雅なる花卉を移植せむと務めたり。是一種保守の反動が、バイロン一輩の新思想に打破せらるゝに至るまで、歐洲文藝の世界に又ぼしたる効果の見るべきもの、一にして足らざりき。シレーゲル兄弟を初めとして、クライスト、シャミッソー、ウーランド、リュッケルト等の獨逸に於ける。カラムジン、プシュキン、レルモントフの魯西亞に於ける。マンツォーニー、レ

べきこと、總じて死、自殺、血、美女、意氣地、磊落、不羈などいふ想像を斷えず念頭に蓄ふべきこと。

一總じて寛活なること、すごいこと、すばらしいこと、強いことに心を注ぎ、兼ねてやさしいこと、あはれなることに留心すべきこと、所詮剛柔の二面を常住の心得といたすべきこと。

一『鬼の目に涙』『一寸の蟲にも五分の魂』『武士は喰はねど高楊枝』『柔能く剛を制す』などいふ諺を、毎朝百遍づゝ唱へてよく〳〵服膺すべきこと。

一言葉使ひはモサ言葉を男子の理想的とすれども、今更に死語を恢復すべきものにあらねば、只精神を彼れにとりて今樣の言樣を用ふること。

一總て奴といふ尾語を添へ用ひて、憎々しげに物すべきこと、『うぬ美人め』『うぬ天人め』『うぬ幸福め』『うぬ風流め』『うぬ文學め』の類なり總じて喧嘩口調をよしとすること。

撥髪小説漸く衰へて探偵小説行はれし頃に到りて、小説は其墮落の極に達したり。勢極まれば必ず變ず。文學社會は是に於て端なくも最も健全に、且最も多望

達物に拘らず、倜儻情に泥まず、而かも一度び感激すれば一念赴くところ鐵石を貫く。是れ豈我國人の愉悦羨仰する所の人物にあらずや。夫の自由と云ひ、民權と云ふが如きは、嚴峻なる形式によりて組織馴致せられたる、我が社會人情と容れざる所多し。然れば、俠客勇士の事蹟は上下を通じて嘆美措かざる所なり。浪六是俠客傳の久しく中絶せるを捉へて、茲に其奇矯遒勁なる筆を鼓して之を描く、寫實小說につかれたる讀書社會の滔々として一時之に謳歌したる、素より怪むに足らざるなり。

然れども浪六の描くところ、千篇一律。文字の洒落、脚色の斬新を衒ひ、又情操の掬すべきもの少し。其人物も亦面に磊塊不羈を裝へども、性格概ね卑淺に流れ、加ふるにまゝ淫猥面を掩ふものあり。文字亦杜撰孟浪、生硬を以て意氣となし、晦澁を以て餘情となす。されば幾もならずして名聲地に墮ちたるもの、素より其所なりと謂ふべし。坪内逍遙が當時『小說學校發賣科の敎則』を早稻田文學に揭げたるもの、善く其弊を抉摘して痛切なり。其二三條を左に轉載す。

一本科の作家たらむものは、筆先にて人を殺すこと棟馬大根を切るが如く心得

貶の意を寓せざりき。然れども是れ極めて偏窄なる主觀の眼孔を通じて見たる自然實際なりき。故に其作中に表はれたる人生世相は殆ど作家が主觀をば自己の貧少且偏頗なる閲歷に倒照したる小人生觀に外ならざりき。是れ豈永く經驗敎育ある世人の嗜好を繫住して、能く恒久なることを得べきものならむや。其の無味放埒に、浮艶淫靡なる製作に對して社會は漸く倦厭の色を示し來りたりき。村上浪六が所謂撥鬢小說、黑岩涙香一派が探偵小說は是風潮の前驅にして、泉鏡花、川上眉山、小杉天外等が所謂觀念小說は其後殿たり。是を明治小說の第三期に到るの變遷時代となす。左に其大勢を略述すべし。

吾等の思惟する所によれば、所謂撥鬢小說の一時非常の流行を極めしは、主として從來の寫實小說の柔弱平板、狹偏單調に對する一の反動なるべしと雖も、又其任俠剛毅にして而かも風流韻致に富める三日月次郎吉、井筒女の助一流の人物性格の、いたく我國民の性情と調和するものありしに依らずむばあらず。蓋し任俠義に勇むは我國民の特性にして、夫の武士道なるものと其本を同ふす。一言の然諾を重じて甘じて身命を抛ち、苟も己を知るものゝ爲には水火に入るを辭せず。濶

として獎むるもの無く、非理として斥くるものも無し。渾然として天地の心に同化し、物と我と主客に於て隔つるところ無かるべし。是れ寫實の理想にして、詩人、小説家は是境地に到りて初めて其圓滿を稱すべし。是の如き古來千百年にして一人無し。世の所謂寫實は單に自家の個性にして意識の中にあるものを除去し、冷然として等々の觀察を爲すものを謂ふ。よしや、意識的個性は務めて之を排くることを得べしとするも、個人は遂に個人たるを免れず。自己の依て以て自己たる所以の性格、はた特質に至りては自我其物を滅却するに非ざるより、安ぞ之を解脫するを得むや。是故に人は遂に其主觀を離るゝこと能はず。意識的に純客觀的なるものも、無意識的には純主觀的なるを免れず。是意味に於てあらゆる詩人小説家は、其の寫實的なると否とに關らず、悉く主觀的なりと謂ふを得べし。只是主觀の大小廣狹は其品等高下の別るゝ所以なり。

今夫れ明治二十年より二十五年頃までの小説家は、そが先頭たる紅葉を初めとして、多くは狹隘なる主觀を有せる寫實家なりき。其觀察いかにも從前諸作家のに較ぶれば疑も無く自然、實際の域に近けり、又そが作意の中にもあらはに勸懲褒

も、其命脈は決して絶えたるに非ず。須藤南翠が照日葵、黄雛鸝、驢月夜、宮崎三昧が桂姫、末廣鐵腸が南洋の波瀾、村上浪六が三日月、女の助、並に矢野龍溪が浮城物語は遙に經國美談の系統を紹ぎて、暗に寫實小說に對峙せりき。傳奇小說に與するものは、當代の寫實小說を以て規摸偏僻にして雄渾跌蕩の姿無しとなし、寫實小說を賛くるものは、以爲らく形骸の大なるもの、精神必ずしも大ならず、性情の幽微を盡したるものにして、初めて大小說と謂ふべしと。當時の世評は、概ね寫實派に傾き、未だ二者各々獨得の長所を有して、永く小說界の双關たるべきものなるを覺るに至らざりしに似たり。

遮莫。さしも全盛を窮めたる紅葉一流の寫實小說は今や漸く衰頽すべき機運に迫りたり。そは所謂寫實小說其物の凋落せるにはあらずして、當時の小說に現はれたる、言はゞ似而非寫實が、自家破滅の原因を其中に包藏したればなり。眞正の寫實は無私無我なること、須らく大自然の如くなるべし。彼に親しくして此に疎きことあるべからず。況むや已に近きものを揚げて已に遠きものを貶するをや。其の絶對平等の見地に據りて世相物性を看破するや、眞假なく、美醜無く、理想

種の個人主義に據りて製作せられたるには非ざるか。吾等の見る所を以てすれば、子が作には常に一個の觀念と名くべきものを有す。例へば風流佛の如き、一口劍の如き、はた又五重塔の如き、皆之れ殆ど同一のモーラルを以て之を貫けるものには非ざるか。即ち一念の强さは岩をも穿つべし、一念にして屈せず、撓まざれば、外來の勢力又吾を奈何ともすべからず、精神一到何事か成らざらむの意を鼓吹せるものと見るを得べからざるか。是の如く意を重ずるは、子が作に於て見遁し難き特色なり。是を紅葉が作に比すれば、やゝ單調一律の嫌無きに非ずと雖も、其一條の生氣全篇を通じ、凜乎たる道念の犯すべからざるもの存するの點に於ては、夫の散漫なる、若くは狹隘なる、主觀的寫實に比すれば、寧ろ遙に優れるものありと謂はざるべからず。然れども子が作特色あり、主角あり、其文躰亦まゝ嶮奇解し難きものありしが爲めか、一般社會の嗜好は紅葉に比すれば遙に其下にありしものゝ如し。とにかく廿五年の頃に至るまで紅葉は寫實小說の高潮に駕し、殆ど一世の風尙を占斷せるの觀ありき。

是時に當りて傳奇小說は、紅葉、露伴の氣勢に避易して一時其顏色無かりきと雖

ずと否む能はざるを認む。見よ、紅葉の傑作と稱せらるゝ伽羅枕、二人女、三人妻等の如き、其文躰の尤も西鶴的にして鍛錬を累ねたるものは、皆之れ花柳の痴情、肉慾の世界を寫して、尤も西鶴的なるものには非ざりしか。然るに降りて二十八九年の彼が作は、文躰に於て全く西鶴を離れたると共に、意想に於ても亦全く西鶴を離れたるを見ずや。さはれ吾等は紅葉當年の傑作が文に於て西鶴的なるを問はず、只其想に於て其然るを悲まずむばあらず。

若し夫れ露伴は紅葉と等しく寫實の流を汲みて、而かも其趣を異にすること、猶同じく西鶴に私淑して其文、那の如く異なるが如し。紅葉の小説は、主として無意にして當眼の事物を觀察し、性に近きところに隨て之を筆に上ぼす。若し紅葉が假作的人物に於て作者たる彼の面かげ映れりとせば、そは彼が狹隘なる主觀の倒影ならむのみ。必ずしも一定の意志を挾て性を造らざるに似たり。露伴は則ち然らず。聞説らく彼嘗て人に語りて曰く、人おの〳〵特色無かるべからず。物に觸るゝ毎に化せられて自己の特質を沒了し、彼の紺色の如き曖昧雜駁の色となり去るが如きは、人の屑とせざるべき所なりと。惟ふに、彼が著作はおしなべて是一

足らずして卑近に陷り易し。是に於てか言文一致體の弊を認めたるものは、更に之を補充するに足るべき新文體の工夫に苦心せり。之れ紅葉、露伴二子が西鶴調に基ける一種の雅俗折衷體を搬造したる所以なり。是れ西鶴的文體が婉曲暢達にして而かも遒勁に、文字淺近にして而かも餘韻あるは、尤も社會的、はた平民的の事物を直寫するに適するが爲なり。露伴が風流佛、及葉末集、紅葉が伽羅枕、三人妻以下の作、多くは西鶴躰によれり、是より言文一致躰漸く衰へて西鶴躰漸く行はる。

文躰に於ける西鶴調の流行は端なくも元祿文學の研究を催起せること、及びそが更に我小說に及ぼせる影響の如何は、歷史上頗る注意すべきことならむ。心、形を制するが如くば形亦た能く心を制す。夫の筆を執れば書を思ひ、絲竹を執れば管絃を思ふは、すべての事物に於て當に然るべき所なり。元祿文學の研究漸く熟し、老西鶴の輕妙なる文致のいたく我小說家を感動せしめしや、又そが花柳色情の社會を通じて人間の煩惱界を描きたる鋭利なる寫實の筆を味ひしや、更に又之れを摸倣擬似して文情の相應はしからむを求めしや、彼等は果して知らず識らず西鶴的思想の誘致する所とならざりしか。吾等は少くとも紅葉に於て強ちに然ら

作、一時世人の喧傳せし所のもの、而して其文體を問へば、何れも言文一致體ならざるは無かりき。そも〳〵是の如き異樣なる文體の起りたるは何故ぞや。蓋し文體は思想によりて規定せらるゝ形式なり。今や我文壇は古來未た曾て有らざりし一種特殊の思想を經驗せり。如何にして是自然の情想をありのまゝに描寫することを得べきか。寫實的小說は時尙の赴くところ、如何にして寫實することを得べきか。古來の文體は粗笨に非ざれば緩漫、未だ縈紆九回の情理を曲盡し、寸鏑分銖の精微を描破して、其の眞に迫り實を盡すこと難し。果して然らば、吾等は如何にかして他の新しきかゝる目的に適應して遺憾無き、文體を求めざるべからず。言文一致體は即ち是目的に對する一の試驗に外ならざりしなり。是文體は年を追ふて圓熟に赴き、今日尙小說の一文體として生存し、國文の範圍、爲に一層の廣袤を加へ得たり。紅葉、美妙諸士が創始の功業、決して沒すべからざるなり。

然れども言文一致體は、動もすれば含蓄餘情に乏しく、簡淨輕妙の姿少し。圓轉自在は則ち之れ有りと雖も、風韻雅致は即ち未だし加ふるに、語尾句末、常に單調に流れやすきにつれて、自ら强健奇拔の風を缺く。且通常の談話に近きを以て、品位

作爲せる小說は、おのづから彼邦の風尙を貴び、叙事、寫景より文躰、記號に至るまで、主はら洋風を模寫するに至れり。さしも寫實的傾向の旭日の勢ありし當時なれば、其作殊に青年讀者の間に行はれ硯友の一社は暗に文壇の梁山泊を以て目せられき。其牛耳を執りしものは尾崎紅葉にして、川上眉山、巖谷漣、渡邊乙羽、江見水蔭、石橋思案等、後年隆々の聲名を文壇に馳せたるもの多く是社より出づ。されば硯友社は實に明治小說史に於ける一大勢力なりと謂ふべし。

同じ年に山田美妙が『夏木立』出づ。こは武藏野、柿山伏等三四の短篇を合綴したるものにして、其文章は、硯友社一派と均しく、言文一致躰なり。是書載するところ、意匠嶄新にして文字亦瑰奇富麗を極む。其景物を叙するや、盛に聯念照繳の巧を盡して之を脩飾し、切りに直喩隱喩、若くは間々活喩等を使用して讀者の奇を好むの心を樂ましむ。若し夫れ其想に至りては遂に浮雲の渾然自然に近きに及はざること甚だ遠し。然れども美妙の名是より人の知る所となれり。

硯友社及び美妙の作出でゝより、言文一致を學ぶもの漸く多し。美妙が國民之友附錄に揭げたる『蝴蝶』紅葉が新著百種に揭げたる『色懺悔』皆之れ二氏が當年の傑

逍遙が小說神髓出でてより、俄に其勢を得、忽にして化政以來小說壇を壟斷したる傳奇小說を厭倒して、優に文學世界の重要なる勢力と化し來れり。言ふまでも無く、傳奇小說も亦西洋文學の影響によりて多少改善の效を奏し、一部の社會の嗜好を繫ぎしもの無きに非ざれども、勢甚だ揚らず、到底寫實小說に對壘して相拮抗する能はざりき。二葉亭四迷の浮雲は、是時代の先鋒として顯はれたり

逍遙が書生氣質は、其根本的精神は素より寫實的なりしが、其文體意匠等に於て多少舊傳奇小說の風ありしが、『浮雲』は則ち然らず。其思想文字共に全く舊圈を脫し、眞個新時代の產物なるの觀あり。即ち人物の性情を主として脚色を主とせず、故に其規模結構に於ては從來の作に比すれば遙に狹少なれども、而かも事皆人情の自然に基けるを以て、宛然一個の有機體を爲す。夫の强理義を牽索し、附會杜撰の趣向を專とするものに較ぶれば、其優劣の差、決して同日の論に非ざるなり。

越て二十一年硯友社の一派、其機關雜誌『我樂多文庫』を發行し、盛に創作の筆を執れり。硯友社は當時明治時代の敎育を受けたる青年文士の會合にして、其社員は概ね英語、若くは獨逸語を解し、多少西洋學にも曉通せる才子なり。されば彼等の

意義を有せるものと謂はざるべからず。逍遙著はす所の小說、倘妹と春鏡、內地雜居未來の夢等の數種あり。皆書生氣質と均しく、寫實を主とせるものなり。

逍遙一度筆を寫實小說に染めしより、名聲倏ち都鄙に喧傳し、其例を學び其跡を追ふもの、亦比々として輩出せり。是に於てか舊來の小說は頓に其影を潛め、世又勸懲を言ふもの無きに至れり。文體に於ても從來の馬琴、春水、三馬、等の舊套を襲ふもの少く、寫實に相應はしき種々の新體を創むるものあり。明治小說は是の如くにして其二期に入れり。

第三　明治小說の第二期

明治小說の第二期は、一言すれば寫實小說の全盛時代なりと謂ふを得べし。二十年より二十八年の頃に至る前後凡そ十年に跨る。

是寫實小說の系統を尋ぬれば、前章にも一言せし如く、遠く其源を元祿時代の浮世草子に發し、中ごろ傳奇小說の爲にけおされて、三馬、春水、一九等の戲作に於て僅に其俤を止めしを省きては、明治十八年頃までは殆ど其形影を存せざりしが、坪內

是の如きは小說神髓の唱道せる新旨義なりき。其の說く所必ずしも正鵠を得たりと謂ふべからず。其寫實の意義の偏狹に失したる、傳奇及ノベルの並立を認めざる、心理的描寫を過重したる、又心理的描寫の適用せられ得べき小說の如何なる種類なるかを究めざる、理想小說の眞價を認むることを欲せざる、今日より見れば疑はしきふし少からずと雖も、是れはた舊來小說に對する反動として已むを得ざるの弊なりしならむ。若し夫れ淺近なる勸懲の定型を株守し、善惡應報の圓滿なる結局を須要とし、其人物も事件も徒に抽象形式に拘泥して具象自然を拋却せりし當代の小說界に對し、寫實と自然との重ずべきことを訓へ、心情內部の陰密なる過程を穿鑿することの、外界事件の慘憺たる經歷を描くことよりも遙に小說の體を得たるものなることを示し、我が昏々たる小說界をして十九世紀文學思想の曙光に接するを得せしめたるものは實に是小說神髓を以て破天荒となす。

書生氣質は逍遙が小說神髓に說くところの理論に本きて、寫實小說の紛本を世に出せるものと見ることを得べし。されば是小說は、其審美的價值は措て問はざるも、明治小說の新紀元を開きたる過渡時代の產物として極めて重大なる歷史的

の行を見よ。否其行爲はとまれかくまれ肚の裏にて思へる事だに徹頭徹尾道にかなひて嘗て劣情を發せしこと無し。矧や一時瞬間と雖も心猿狂ひ意馬跳りて彼の道理力と肚の裏にて鬪ひたりける例も無し。よしや堯舜の聖代なればとてかゝる聖人の八個までも相並びつゝ世に出でむこと殆と望みがたき事ならずや。

又小說作者たるものは專ら意を心理に注ぎ、假作の人物と雖も一度篇中に出でたる以上は之を活世界の人と見做し、其思想感情を寫し出すに敢て自己の意匠に任せて善惡邪正の感情を挾むことを爲さず。只傍觀して其自然の狀態を摸寫するを主とすべしと說きて寫實以外に小說無きを示し、更に勸懲小說を貶し、摸寫小說を揭げ『摸寫主意の小說には求めずして誹刺諷誡の法そなはり、暗に人を敎化するの力あり』となし『我邦の小說作者はこゝらの道理をさとらざるにや、ひたすら笠翁が語を師とし、小說といへば必ずしも事を凡近にとりて意を勸懲に發せざれば叶はざる事のやうに思ひて、奬誡といふ摸型を造りて強て趣向をそのうちにて工風なさまくなしたり。いとも嗚呼なるわざならずや』と論斷せり。

官者流がひたすら脚色の骨髄に入らむことを務めて、寫情の皮相に止るを憂へず。此の如きは眞の小說と謂ふべからざるを說き、更に一步を進めて

それ稗官者流は心理學者の如し。宜しく心理學の道理に基づきて其人物を假作すべきなり。苟にもおのれが意匠を以て強て人情に悖戻せる。否心理學の理に戻れる人物なんどを假り出さば、其人物は已に既に人間世界の者にあらで、作者が想像の人物なるから、其脚色は巧なりとも其譚は奇なりといふとも、之を小說と謂ふべからず。

となし、曲亭の八犬傳を例證として、其說を敷衍せり。曰く

彼の曲亭の傑作なりける八犬傳の八士の如きは、仁義八行の化物とて決して人間とはいひ難かり。作者の本意はもとよりして彼の八行を人に擬して小說を爲すべき心得なるから、あくまで八士の行をば完全無缺の者となして勸懲の意を寓せしなり。されば勸懲を主眼として八犬士傳を評するときには、東西古今に其類無き好稗史なりといふべけれど、他の人情を主腦として此物語を論ひなば、瑕無き玉とは稱へがたし。其故を如何にとならば、彼の八士公

時代の遺風を紹襲し、馬琴種彦の荒唐を學ぶものに非ずむは一九春水の鄙俚に倣ふもの、然らざれば西洋小說を模して生呑活剝に陷れるもの、明治時代の小說として見るに足るべきもの殆ど之れ無かりき。逍遙一度び出でゝ其小說神髓と書生氣質とを著して勸懲主義の誤謬を極論し、寫實小說の嚆矢を開きてより一世靡然として之に赴き小說壇の旗幟爲に一變せり。是れ素より時勢のおのづから然らしめし所なりと雖ども、そも〳〵又世を擧げて舊習の夢中に昏睡し一人の能く舊圈套を顚脫する者無き時に當り滔々たる時に逆ひて一世の木鐸となりたるは、逍遙其人の識見亦非凡倫を絕えたるものあるに因らずむばあらず。蓋し氏の如きは百世の下永く我邦文學史上に於て獨得の位地を有すべき者なり。

小說神髓は一部の小說論なり。小說の變遷、主眼、種類、裨益より、立案、性格、描寫の方法に及ぶ。其の主意とする所は、前にも言へる如く馬琴以來我小說作者の金科玉條としたる勸懲主義を打破して寫實を奬說するにあり。其の小說の主眼を論ずるや、先づ小說の主腦は人情にして世態風俗これに次ぐと喝破し、是人情の奥祕を穿ち、心裏の活動を描寫して、周密精到ならむは小說家の本務なりとし、和漢の稗

泰西文學の知識亦たゞ〳〵國民の間に播布せるを見る。而して今やスコット、ヂケンスの譯者によりて、外國小說の規模結搆の巧妙自然に近く、思想文章の精緻高尙なる、遙に本邦小說に卓越するものあるに驚きたる文學社會は、猛然として深く自ら省みる所あり。是に於て小說革新の機運初めて動く。柴東海が佳人の奇遇、末廣鐵腸が雪中梅、花間鶯、藤田鳴鶴の文明東漸史、乃至少しく後れて矢野龍溪が經國美談等は、實に是風潮に乘じて出でたるものに外ならず。然れども是等の著作は新好尙に對する一定の見地と明確なる意識を以つて現はれたるものに非ずして、單に在來小說の缺陷を補はむとするの消極的煩悶に過ぎざりしに似たり。是時に當り東西文學の比較研究によりて我小說の過去現在を觀察し、詩學若くは美學の脚地に立ちて、在來の作家を論評し、且小說の性質理想を說きて併せて將來の方針を指示し、以て我小說の史上に一新時期を劃したるもの、之を春のや主人坪內逍遙となす。

明治の小說は逍遙を以て過渡の時代に入れり。明治初年より其十八年に至る吾等が所謂第一期に於ける紛々たる小說は、汗牛充棟も啻ならずと雖も、概ね德川

其の進歩せる嗜好を滿足する能はざりしを以て、茲に指を外國小說の飜譯に染めしに至れるなり。主として其資をリットン一輩の歷史的、はた政治的小說に藉りし所以の者は、其譯者が政論家たりしこと素より其直因を爲せしなるべしと雖も、そも〳〵又當時社會の文學嗜好の幼稚粗大なる、未だ人情人生の精彩妙相を描破せる寫實的、はた心理的小說の旨味を鑑賞すること能はざりしに因らずむばあらず。然れども其の舊小說の陳套に滿足せず、從來のとは異なりたる新しき或物により、て、其慰藉と娛樂とを求めむとするの進歩的傾向は、たしかに是の飜譯小說流行の現象に表はれたり。

飜て當時社會の狀況を察するに、維新このかた引續きたる改革の精神も漸く靜穩中正に傾き、無謀なる進歩と、頑迷なる保守とは、互に自他の長短を覺識すると共に、十有餘年の仇敵は漸く其舊怨を解きて一堂に握手するの道に近けり。民約論的急進派も、彼我國情の差別を覺りて自ら戒省し、皇學的守舊派も世界の大勢に鑑みて漸く其反動の氣燄を收むるに至れり。此と同時に科學、哲學のひらけゆくと共に、國民思想の範圍亦一層の廣きを加へ、英佛獨諸國の語學研究の進歩につれて、

當時の小說は主として繪入新聞の續物として表はれたり。其の主なる作者は花笠文京、高畠藍泉、染崎延房、條野傳平、古川魁雷、伊藤專藏、須藤南翠、渡邊義方、宮崎夢柳、小室案外堂諸氏なり。然れども今日見るに足るものとては絶えて無し。是等作者の小說を掲載せる新紙の主なるものは東京繪入、繪入自由、繪入朝野、自由の燈等なり。但自由の燈に掲げたる宮崎、小室諸氏の小說は、多くは民權革命を鼓舞する西洋小說の飜案若くは飜譯にして、當時政治界の暗澹たる風潮を伺ふに足るもの、他の群作家のと自ら其趣を異にせるものありき。

この頃に前後して泰西小說の飜譯切りに出でしは、頗る注意すべき事實なりとす。其の二三を擧ぐれば、織田純一郎氏の花柳春話を魁として、關直彥氏の春鶯囀、藤田鳴鶴が繫思談、其他春窓綺話、梅蕾餘薫、經世偉勳等、他にも少からず。多くは其原書をリットン、スコット、ディスレーリ等の英國近時の歷史小說の中に求めたりしが如し。而して其譯者は概ね時の政論家の、やゝ文字あるものにして、專ら文學に從事するものに非ず。蓋し是等の人々は、當時の最も敎育ある讀者を代表せるもの、其頭腦の西洋文明に薫染しそめてより、在來及び當時の小說の荒唐陳腐なる、到底

くべからざるの階段なり。然れども詩歌小說の上に於ては未だ著しき影響を見ず、僅に魯文、應賀一輩の著作が、小說史上に一縷の光明を保ちしを以て之を見れば、『議論より實を行へ、なまけ武士』的の感情は、尙舊に依りて社會の思潮を支配せしならむ。

明治十年に於ける西南戰爭は、直接には何等恒久の勢力を文學の上に有せざりしに似たり。國民は尙其制度組織の改善と共に、國民的思想の固定に忙しく、多く純文學に關心するの餘裕を有せざりき。蓋し國民的思想及感情の一定せるものあるに非ずむば、所謂國民的文學は成立するを得べからず。維新このかた、英國思想に乘じて改革の途上に突進したる我國民は、今や殆ど撰擇なく收容したる諸種の異質文明に食傷せり。保守と進歩と、外國と內國と、政治宗教學問の上に於て互に相格鬪せり。而して是等の衝突軋轢を調和し、同化する所以の唯一の勢力たるべき國民的性情は、世界的知識の缺乏の爲に未だ自覺の域に上らず。あはれ、是の如き時に於て聰明なる國民に安慰娛樂を供する文學はそれ如何にして生起するを得べき。

に官費の學生を募集したる等、政府事業としての教育は頗る務められたりと謂ふべし。又定期刊行の新紙大に起り、其中には多少文學に關するものも無きに非ず。西洋書籍の飜譯、亦盛に續出せり。即ち福澤、中村二氏の著譯を初として歷史には萬國新史、泰西通鑑、地理風俗には輿地誌略、西洋新書、西洋見聞錄、修身倫理に關しては勸善訓蒙、政治科學には眞政大意、立憲政躰略、萬國公法、道理圖解、博物新編、天變地異、人身窮理等一々枚擧に遑あらず。殊に中江兆民氏が譯にかゝるルーソーの民約論の如きは、一時大に社會に流行し、民權自由は少しく新知識を有する輩の間に套語となれり。語學、殊に英語學も亦漸く榮へ、バックル、ギゾーの文明史は、博く學者の間に讀まれたり。又他方には、洋學の大流行に反對して國學神道の再興あり。久しく德川幕府の下に殘酷なる待遇を忍びたる、所謂平田派の皇學は、今や極端なる開進主義の反動として、一部の人心を風靡するの勢を得、和文の研究亦隨て復興せり。

是れ明治十年以前の狀況なり。見るべし、今や我邦は物質的改革の急務を了して、方に漸く思想界の改革に着手したることを。是れ純文學發達の過程に於て缺

を要せざりしの結果なりと謂ふべし。若し夫れ明治四五年の交、魯文の滑稽物が當時の小說壇に獨歩したりし事實は當代の粗笨なる人心が如何に眞面目なる文學を味ふに堪へざりしか、又維新前後の創痍につかれたる國民が如何に鄙俚なる諧謔の中に其鬱悶を慰めしかを想見するに足る。其西洋膝栗毛、胡爪圖解等は西洋文明に眩倒せる當代人心を倒照するの鏡として見ることを得べし。英國主義の第一の唱導者たる福澤諭吉氏が其功利的學風によりて舊弊を打破したる功績は、頗る痛快なるものあれども、其一種の新文躰を創始して明治の時文に一生面を開きたるの外、殊に純文學に直接の關係なかりしが如し。魯文の作と共に一時流行せし松村操氏が戊辰前後の戰爭談の如きも、小說史上の事實としては殊に言ふに足らず。

然れども、他方より社會の狀態を觀察すれば、進步改善の跡着々見るべし。政府は明治二年を以て、府縣に令して小學を設け、昌平黌を大學にし、四年文部省を置きて大に敎育制度を改善し、士官、農、商、百工、技藝より法律、政治、天文、醫療に至るまで皆其學校有らざるは無し。外に對しては盛に海外留學生を派遣し、內に向ひては大

社會の改善國家の富強を企圖する時に當りては、從來支那、印度の思想に於て見るべからざりし進歩の主義は、彼等が双手を擧げて歡迎せし所なりき。

是英國思想が改革の餘勢に乘じて進歩の精神を國民の間に鼓舞しつゝありし間に、そが純文學上に及ぼしゝ直接の影響の見るべきものとては、甚だ僅少なりしが如し。蓋し詩歌小說の盛に行はるゝには、なべての場合に於て、其國の富盛にして其社會の平穩ならむを要す。されば維新の際は社會の秩序を回復し、十九世紀の世界の大勢に適應する新文明を移植するの急務に迫り、上下を擧げて政治經濟の改善に熱中したる時なれば、純文學の如き、物質的生活に須要ならざるものは、おのづから社會の注意以外に放擲せらるゝに至りしなり。故に明治十年以前の小說は、德川時代の殘肴冷杯を嘗啜して僅に其餘脈を繫ぎたるの有樣なりき。すなはち鶴亭秀賀、假名垣魯文、山々亭有人、柳水亭種清、二代目春水、笠亭仙果等の著作は、其脚色より見れば、讀本草雙紙の舊型を脫せず其思想より見れば勸善懲惡の樊裡を出でず、其文躰より見れば馬琴、春水、三馬、一九の糟粕を嘗むるのみ。殆ど一人の新機軸を出して是圈套を籟脫したるものあらざりき。是れ主として時勢の文學

の歷史が多くの處に於て是の如き非日本的思想に對する國民の無意識的反抗を表示せることは、炯眼なる史家の夙に看破せる所ならむ。

明治維新の初に於て、我邦に輸入せられたる英國思想は、支那印度の思想と大に其面目を殊にせり。若し國民性情に適應するの程度を數量的に觀ば、我はむしろ英國に遠くして支那に近かゝらむ。然れども英國思想は支那思想の我に反するの點に於て我に一致せり。何ぞや。其の進歩的功利主義是れなり。アングロサクソン民族は主として亞里安種に屬すと雖も、人種の混和、風土の勢力は殆ど彼をして亞里安民族の主性を失はしめたるの觀あり。彼はチュトン民族の空想を有せず、又羅甸民族の輕浮に染まず、彼は考察を喜ぶと共に着實を尚び、改革を迎ふると共に保守を棄てず。荒唐なる形而上學は彼の知る能はざる所、然れども適切穩健なる常識は彼に於て殆ど他に見るべからざるの圓滿を見る。彼は學問に於ては實驗を重じ、事業に於ては功利を喜ぶ。一切の文物は現世の幸福を增進するの點に於て初めて貴重すべしとなす。是の功利的且進歩的なるの一事は英國思想の正に我國民性情に吻合する所なり。殊に維新草創の際に於て、國民を擧げて銳意

て代表せらるゝ支那思想は、其實際的傾向の我國情に適するものありしを以て、國民の思想を影響すること甚だ小ならず、一切の文物其感化を受けざるは無かりき。然れども其の保守回顧に傾き、退嬰自滿に安ずる支那的精神は、必ずしも敏活鋭利なる我民性と相應はしと謂ふべからず。其の文化を停滯し、空形虚式の中に逡巡して、動もすれば過去の舊夢を慕ふて退轉せしめむとしたるは、所詮主として儒教の及ぼせる惡結果なるが如し。印度思想に至りては、殆ど根本的に我國民の性情に同じからず。世界に於て最も理想的、はた宗教的なりと稱せらるゝ印度亞里安民族が世界に於て最も實際的、はた非宗教的なりと稱せらるゝ蒙古日本民族に對して、色即是空の妙想を訓へ、寂滅爲樂の玄理を觀ぜしめむとす、寧ろ木に接ぐに竹を以てせむと欲するに均しからずや。吾等は佛陀教二千年の傳播も、徒に枯淡なる形式主義を馴致し、厘に淺薄なる厭世思想を鼓吹したる外何等較著の効果なきを見て國民的性情の遂に動かすべからざるを觀ずるなり。且夫れ現世を蔑視し、彼岸を憧憬する佛陀教は、其の超絶的の點なるに於て、啻に我國民の性情に背反したるのみならず、孔子教と同じく又大に國民文化の進歩を沮害せり。我邦二千年

左右に應じて一々其時期を別たば、僕を更ふるも及ぶべからず。且夫れ大勢の趨くところ自ら其軌なくむばあらじ。紛雜の間尙一條の理文ありて、將來發達の針路を示すものあり。つら〳〵這般の情狀を考察し、大小相商り、輕重相較ぶれば、明治小說の歷程を前後二期に分つを妥當とすべきが如し。即ち明治の初年より十八年に至るまでを第一期となし、十八年以降二十八年頃までを第二期となす。若し夫れ二十八年以下に至りては事最近の過去に屬するを以て今日未だ明に其變遷の蹤跡を分つの時に達せざるが如し。

弘化、嘉永このかた、內外の情勢穩かならず。人心洶々として又娛樂を文學にとるの遑少なかりき。維新の戰爭漸やく其局を結びしころより、闔國の民心は舊物打破の傾向に驅られて西洋文明の輸入に忙はしく、本邦古來の文學はすべて度外に拋却せられたる有樣なりき。西洋文明は明治の初年にありては主として時の英學者によりて紹介せられたるを以て、もつぱら英國思想なりしことは、最も注意すべき所なり。

是より先き、外國思想の我邦に入れるものに、支那、印度の二種あり。儒敎により

我明治の小說は斯の如き時勢を承けて提起せられたるものなり。乞ふ章を繼ぎて其變遷の一斑を叙述せむ。

第二　明治小說の第一期

古より改革維新と稱せらるゝ時期を我邦歷史中に數ふれば一にして足らず。然れども、我明治の改革の如く、短日月の間に深大なる變化を效したるものは未だ其例を見ざる所なり。小說も亦社會政治文學の一般の推移に隨ひて、古來未だ曾て經驗せざりし新潮流に乘ぜしは、素より自然の勢なり。

變化の急激なると、改革の殆ど根本的なるとにつれ、我小說は一般社會の事物と共に幾多の異なれる局面を經過したり。蓋し舊思想は破壞せられて新思想は未だ成らず。社會人心は尙だ其根抵を有せず。國民的性情は新文明の光明に眩惑して未だ自ら省慮するの遑あらず。同化の中心的活力は一時殆と停止して、己を守るの本領なく、自ら立つの脚地無く、一に其指導を外來の勢力に仰ぎたるの時代にありては、社會の風尙嗜好も亦朝暮に改易せらるゝを免れず。若し是際其進退

實的小說が、一時馬琴の歷史小說の爲に壓倒せられ、明治に入りて辛やく土を拔て再來したるが如からずや。

幾度か比較せられたる馬琴とスコットとの類似は、大體に於て吾等も亦認むる所なり。二千年の間、歐洲各國の產出せる歷史的詩歌小說は、其數幾何なるを知るべからず。然れども之を以てスコットが僅々二十年の間に述作したる所のものに比すれば、螢火の曜光に向ふが如し。是れ猶馬琴が一部の八犬傳、能く本邦古來の物語をして顏色なからしめたるとほゞ均しからずや。若し夫れ十八世紀の韻文的傳奇に倦み疲れたる英國の社會が、更に浩瀚なるウェーバレーの散文的傳奇を歡迎するを辭せざりし因緣に至りては、固より種々ありと雖も、是老詩人が能くアングロサクソン的國民性情を把捉し、道義人情に緣りて之を鼓吹したりしこと、亦其一因ならずむばあらず。是れ亦酷だ馬琴に似たりと言ふべし。但其結構の多樣に、其人物の自然なる、はたまた其描寫の精緻なる等に到りては馬琴到底スコットの匹儔に非ざるなり。西鶴は其史上の關係に於てオウステンに較ぶべしと雖も、其特色に於ては寧ろフィールディングに酷似せるものゝ如し。

ど其衰頽の極限に達したりしが如し。

西鶴と馬琴は言ふ迄もなく德川時代の二大小說家なり。今其歷史的位置を考ふるに、是二人は酷だ英國十九世紀小說史に於けるオウステン女史とヲルター・スコットのそれに似たるものあるが如し。そも〳〵世紀のはじめ、所謂ジャコビニズム衰へて、時の好尙は漸く十八世紀の政治哲學的文學に背きし頃より、茲に英國小說の新潮流を催起せりき。ノベル作者として其劈頭に表はれしものをオウステン女史となす。女史は恰もスコットが十九世紀に於ける英國歷史的小說家の父なるが如く、十九世紀に於ける英國寫實的小說家の母なり。されど女史の小說が當代を風靡せしにも係はらず、死後其蹤跡に隨ふものとては殆ど皆無なりき。當時國民の嗜好は他に一層有力に且一層通俗なる勢力を喚起し、そをして雲時英國小說壇の全權を握らしめたりき。是れ卽ちヲルター・スコットの創始したる歷史的小說なりき。數十年の後是歷史小說の潮流漸く退轉し去りたる後に至りて、全く傳奇巷談を離れたる寫實的、はた心理的小說は、初めてオウテンス女史の後を享けて其頭を擡げ、漸く其勢力を回復することを得たりしなり。是れ西鶴の開始したる寫

馬琴小說の勸懲主義一度び時尙を壟斷してより、我小說は殆ど全く淺近なる功利的方便の渦中に沈溺し、所謂純美術的詩趣は漠然として地を掃ふに至れり。三馬、一九、春水一輩の戲作の遙に元祿初期の寫實小說に照應するもの無きに非ざりきと雖も、是れはた勢力微々として言ふに足らず。是の如くにして小說界は大政維新の大關門を超えて古來未曾有の新舞臺に入れり。

是を要するに、德川時代に於ける寫實的小說の萠芽は夙に元祿の當時に胚胎したりきと雖も、其成熟を見むが爲には數百年の長日月を待たざるを得ざりき。超て百年幾多の戲作者、人情本作者の世に出づるものありきと雖も、未だ老西鶴の遺鉢を襲ふに足らず。況むや其の遺業を紹ぎて之を進むるをや。西鶴は實に寫實的諷諧家として空前絕後の位置を獨占せるものと謂ふべし。明治小說の第二期に入るや、春のや、紅葉、美妙諸氏は遙に其系統を繼承し、大に寫實小說を振興せり。西鶴氏茲に於て初めて其後を得たりと謂ふべし。文化の初年浮世草子の血統殆ど絕えてより、傳奇小說盛に出で、次て馬琴之を振作し、種彥、仙果等の小摸倣者其後を承け、春水、一九一輩と双々相並びて明治の世界に入れり。維新前後の小說は殆

曲亭氏の勢力の如何に廣大なりしかを察するに餘あり。

吾等潛に惟ふ。馬琴の著作は尤も健全なる我國民の性情を代表せるものには非るか。彼が唱道せる勸懲敎訓の主義は、主觀的、はた理想的潤色を與へたることによりて大に小說の意義範圍を狹窄したるの觀無きに非ずと雖も、我國民の現實的、はた功利的性情を投射して尤も明晰なるものに非ざるか。是の如き小說によりて慰藉を得敎訓を受くるは、即ち我國民的性情に尤も健全なる進步の動機を與るものには非ざるか。彼が小說は今日より見れば素より幾多の缺點に滿つ。其描寫の方法は極めて幼稚なり。其人物の性格は極めて不自然なり。老農故事を說き、估客道を談ず、極めて笑ふべし。強ひて地を作り務めて理を構へ、知を擧げて情を抑へたる、更に極めて惜むべし。彼は到底明治三十年の寵兒に非ずと雖も、其の精神主義に對しては我國民は永く彼が知己たるを失はざるべし。殊に彼が描寫したる武士道の如きは、任俠義に勇む大和民族と共に永く埋沒すること無かるべし。

遽莫、吾等を以て傾向小說（アンッロマーン）を推奬するものと爲す勿れ。そは別に說あるなり。

後の小說が、競新衒奇を之れ務めたるの極、徒に婦女童蒙の翫具となるに過ぎざりしを見て、深く潛に慨する所あり。其の所謂勸懲主義は在來小說の品位を高め、以て士人學者の閱讀に資せむとするの主旨に出づ。其作一度び世に行はれ、其該博なる學識と、雄麗なる詞藻と巧妙なる脚色とを以て勸善懲惡の大旨義を皷吹するや、天下の荒唐なる草雙紙、浮艶なる浮世草子、無趣味なる實錄、仇討物等に倦厭せる時好は翕然として之に赴き、遂に一世の風尙を形成するに至れり。馬琴著す所の稗史小說は、素より其趣向に於て必ずしも前代に優れりと云はず。其の寫す所の事實は多く怪奇不自然なるものにして、其の描く所の性格も亦舖張夸大に失するの評を免れず。然れども、理義を以て首尾を貫徹し、到る所寓するに訓誡勸懲の意を以てす。強て道理に拘泥し、事を枉げ、情を矯めて、尙且成案を遂ぐるの嫌なきに非ずと雖も、夫の狂言綺語を以て隨處當眼を喜ばしむることを之れ務め、孟浪散漫、說く所一致なく、理義無きものに比すれば、遙に優れしものと謂はざるべからず。是に於てか、文化初年以來の小說は其面目を一新せり。夫の狹斜洞房の事實を描寫せる鄙俚浮靡の人情本の如きも、勸懲の名義を被るの已むべからざるを以ても

西鶴一度び寫實の門戸を小說界に啓きてより、其所謂浮世草子は幾多游蕩子の摸倣する所となり、其積、自笑を初として、箕山、鷺水、其角、了意の徒より、下りて田螺金魚、吉田の錦江、振鷺亭等の所謂洒落本の作者に至るまで、競て其流風を學び、多くは遊里敎坊の痴情を穿ち、娼婦嫖客の內秘を傳ふるを旨とせり。是等は概ね簡短なる情話にして、素と一部の結搆主旨の存するにあらず。文化以後に至りて、小說の風潮漸く一變し、爭ひて新奇の事實を結綴して巧に複雜なる趣向を搆へ、以て讀者の嗜好を惹かむことを務めたり。是れ素より時尙の變遷に應じたるものなるべしと雖も、是れ素よりして漸く荒唐無稽の譚說を餙飾して婦幼の耳目を娛ましむるの風を生ぜり。是の如く怪奇なる傳奇風の普く小說界を汎濫せむとする時に當り、一種異樣の旗幟を擧げて、在來の小說に一大刷新を加へたるものを曲亭馬琴となす。

歷史小說家としての馬琴は、世既に定評あり、吾等又玆に之を贅せざるべし。而かも彼れが德川時代の小說史上に特殊の意義を有するは實に其勸懲主義に在り。蓋し馬琴は素深く儒敎の精神に薰染し、常に世道名敎を以て事となすもの、文化以

に非ず、國民の情想を發揮することの愷切なるものあるに非ずはた又一部人生の運命を描破して趣向の殊に巧妙なるものあるに非ず。只其世態風俗を觀察し之を筆端に上すに當りて着眼の銳利敏活に描寫の逼眞輕妙なる他の容易に企及すべからざるものあるが爲のみ。吾等は敢て彼が色欲の消長を描寫したるを以て人間の煩惱を觀じたるものとなすを拒まざるべし。然れども彼若し寫實家として不朽の名譽を保ち得べしとせば、そは只彼が世態風俗を觀察する着眼の非凡なるに歸すべきなり。何となれば彼の筆にする所の片々は、徒に彼が見聞したる肉慾世界の現狀を直寫したるに過ぎずして、概ね趣向無く、性格無き零碎の巷談街說に外ならざりければなり。

然れども西鶴の着眼及び文躰は、即ち是れ寫實的小說の着眼及び文躰なり。彼の後、江島や、八文字屋の氣質物あり、三馬、一九の滑稽本あり。春水の人情本あり。然れども其觀風の眼光と輕妙の筆致とは遂に遠く彼に及ばず。宜なるかな、明治小說の第二期に於て寫實的傾向の一世を風靡する時に當りて、先づ元祿文學の大復興を見るに至りしや。

る小說家ありて、是兩者を熔鑄して一丸となし、同時に主客兩觀の過程を示すこと、猶戲曲に於て見るが如き作を爲るあらば、是の如き小說は形式上理想的圓滿に到達したりと謂ふを得べし。然れども實際の技工上是の如き事の到底望み得べからざる以上は、是二種の小說の永く兩端に對立する亦已むべからざるものあるに似たり。故に吾輩は我一派の批評家が『傳奇小說は死にたり』と絕叫するの大早計なるを信ずるものなり（後章參觀）。

德川時代にありては馬琴京傳はローマンスを代表し、西鶴春水はノベルを代表すと見るべからむ。然れども其完成の程度より二者を觀れば、馬琴の歷史小說が傳奇として我古今の文學史上に獨步するの偉觀は、百世の瞻仰すべき所なりと雖も、西鶴春水のノベルに至りては極めて幼稚なるものと謂はざるべからず。若し單に彼等の著作に對して峻嚴なる含蓄的批判を下さば、恐くは彼等は是名稱をだに價値せざるべし。唯吾等のしか呼稱する所以のものは、そが後年小說の發達に對して一縷の歷史的系統を繫住するものあるに依るのみ。

げにや、西鶴が小說家としての眞價は、人情を穿鑿することの精微なるものある

馬、十返舍一九等をして其作者を代表せしむ。所謂浮世草紙は古來の物語を繼ぎて資料を俗間に取りたるもの、井原西鶴の作を云ふ、更に作者を以て時代に繫くれば、元祿は西鶴の時代にして、文化文政は京傳馬琴三馬一九の時代なり。是の他西鶴の餘波を受けて別に世態人情を寫したるもの、爲永春水あり、所謂人情本の作者なり。

若し是時代の小說を精說せむと欲せば、卷を重ね帙を革むるも尙足らじ。今其の二三の要點を指摘せむに、其の描寫の樣式より之を觀れば、浮世草子、滑稽本は寫實的にして、讀本は理想的なり。其資料の上より之を見れば、前者は事現世に關りて平民的、後者は主として歷史に本きて、やゝ貴族的に傾けり。前者は英語の所謂ノベル（novel）に近く、後者は所謂ローマンス（romance）に近し。蓋し狹義に謂ふ所の小說と、傳奇とは、小說文學の二大種類なり。人生を觀察する方法の異なるに隨ひて、其描寫の方法亦自ら分れ、茲に外部の經過を主題とする所謂傳奇小說も、內心の作用を對象とする所謂心理小說との別を生ずるは寧ろ自然の勢ならむ。其人生を觀るや、前者は敘事詩の如く客觀的にして、後者は抒情詩の如く主觀的なり。若し一大天才あ

任他。謠曲はもと樂器の幇助により、一定の節調に應じて唱咏するものなるを以て、小說と云はむよりは寧ろ夫の舞本、淨瑠璃草子等と共に音樂的文學と稱すべきものならむ。其他曾我物語、鴉鷺合戰物語、魚鳥平家、鳥部山、松帆の諸種の物語も室町時代の末に出てたれども、取出てゝ言ふべき程のものにあらず。

累代の戰亂に倦み疲れたる國民は、德川幕府の下に三百年の平和を樂めり。是時代に於ける諸般の文學の隆盛は、今更絮說するの要無かるべし。是に於てか小說も亦一新紀元を開きぬ。蓋し今日の概念にやゝ相應はしき小說の歷史は、實に是時代に初まりしと云はむも敢て過言に非ざるべし。

德川時代に於ける小說は其種類を言へば凡そ三種あり。即ち所謂浮世草子、所謂讀本及滑稽本是れなり。其時代を云へば假に二期ありとすべし。元祿を初期となし、文化文政を後期となす。是中讀本は鎌倉、室町時代の演義史談より脫化せる實錄と、近松以下の院本とを抱和して、更に一部の趣向を構へたるもの。山東京傳、曲亭馬琴等を以て其主なる作者とすべし。滑稽本は俗に所謂草雙紙より出でたるものにして、繪卷物御伽草子の系統を引けるものと見るを得べきか。式亭三

あらゆる外來の勢力は、之と同化するに非ずむば、何等著大の感化を人心に及ぼすこと能はざるべし。鎌倉以降、干戈頻りに動き、民心其堵に安ぜず。足利將軍の末路に及びては、累世の積弊は根抵より社會の秩序を搖撼し、綱常地に墜ち、淳風美俗又見るべからず。人心離散して又拾收す可らず。久しく烽烟鼓聲に戰慄せる圖國の民は、憫憂の眼を擧げて齊しく救濟の道を憧望したりしならむ。是の如き時に當りて世間の無常を說き、有爲轉變の現世を厭離して解脫成佛の淨樂を鼓吹したる謠曲が、一般人心に歡迎せられたるは、蓋し當然の勢ならむのみ。斯の如くにして謠曲は、雪舟、雪村一輩の禪學的繪畫と兩々相並びて、我邦の文學及美術に於ける佛敎的勢力の最高點を標示せりき。

然れども吾等は思ふ。謠曲は眞に我國民性情を代表せるものに非ざると、猶雪村一輩の禪畫が美術的特質を發揮せるものに非るが如きを。吾等は謠曲を以て佛敎僧侶が、我國民性情の罅漏に乘じて自家の情感を發露したるものなりとするの、寧ろ至當なるを想ふ。何となれば我國民は決して謠曲中の諸國行脚の僧によりて、其慰藉濟度を受くる亡魂幽靈の如きものに非ざればなり。

時代にもてはやされしは、蓋し自らなる勢なるべし。然れども天平美術の高妙は最早や運慶諸慶の製作に見るべからざるが如く、源勢二語に見るが如き優雅は永く其跡を絕ちたるが如し。

更に室町時代に入りては、福富、文正、鉢かつぎ等の繪卷草子の行はれしものありしが、素より殊に言ふに足らず。當時戰國の積弊を受け、天下の文學は壓に五山の僧徒に依りて其餘喘を保つの勢なりしを以て、我邦文學の衰頽は是時に於て其極に達したりと謂つべし。是暗黑時代に於て一種の光彩を我文學史上に拋ちたるもの之を謠曲となす。

若し我文學史中に於て佛教文學と稱すべきものを求むれば、そは即ち謠曲なるべし。そも〳〵佛陀教の我邦に渡來せしは、室町時代を去る遠く千有餘年の昔時にあり、而かも無常流轉の人生を悲觀し、空靈幽冥の他界を憧憬して是厭世宗教の特色を發揮したるに近きものは實に謠曲を以て最となす。何故に佛教は室町時代の最後に於て殊にしかく其影響を文學に及ぼすことを得たりしか。主要なる其理由は極めて簡單なり。蓋し苟も健全なる國民的性情の社會を支配する間は、

らず。殊に源氏、狹衣等に名のみ聞こえて其書傳はらざるものに至りては、一々名擧に遑あらず。當時佛典漢籍盛に輸入せられ、上流社會の思想を影響すること少なからざりしを以て、是等の物語類は、竹取の如く其趣向を踏襲するが如く甚しからざるまでも、自然人生に對して多少の悲觀をほのめかさゞるは無し。然れども其の資材とする所は、概ね月卿雲客の私事にして、其の骨子とする所は、王公貴人の戀愛談の圈套を出でず。是れ當時の作者も、讀者も、共に皆上流社會の人にして、其經驗の範圍の狹隘なるより生ずるおのづからなる結果なるべしと雖も、他方より之を見れば我國民性情の眞相の幾分は已に明に玆に呈露せられたりと謂つべし。

進て前後保平の戰亂より、鎌倉時代に入りては、朝家の式微と共に文學も亦一時大に衰へ、源平盛衰記、平家物語、判官物語等の史談を除きては、小說として見るべきもの、鳴門中將、秋夜長等二三の物語ありしに過ぎず。蓋し藤氏の勢力頓に衰へ、權柄武士の手に移りてより、殺伐武斷の氣風世に尙ばるゝに及び、政治社會の趨勢と共に、文學美術も亦公家戀愛の文縟を離れて、專ら武人干戈の功名を慕ふに至れり。彼の地獄草子の如き『繪卷物』と共に、大江山、戸隱山、鵺退治、鬼一口等の巷談街說の是

涵養せられたるを以て、さすがに大陸蒙古民族の如く、其知鋪張空驚に流れずして着實穩健に、其情乾燥無味に失せずして清妍婉微に、加ふるに、雄邁の資性と、敏活の機能とを以てす。よしや玄々を夢み、幽冥を想ふの天賦に乏しとするも、熱情至誠の宿する所、何の處にか文學無からむや。春晝窓下百花開くところ、桃紅李白、それ何れを是非すべき。吾等は斷じて言はむ、國民性情の同化し得る所は即ち國民文學の生長し得る所なりと。

餘論はしばらく措く。今我邦小說の發達を顧みるに、西洋諸國と自ら日を同うして論ずべからざるものあり。神話に初まり、敘事詩（英雄譚）に移り、傳奇を經て、遂に今日の所謂小說に至れるは、おしなべて歐洲に於ける小說發達の次第なり。然れども、神話無く、英雄譚無き我邦にありて、小說の起原として觀るべきもの、上古に於ける二三の巷談、夢野鹿、浦島子の物語及び降りて神佛に關する緣記談等に過ぎず。延曆遷都以後は、上下の恬熙につれて文運大に開け、拮倨破格の漢文躰を脫して、優雅典麗なる和文に成れる諸種の物語續出せり。即ち竹取物語を初めとして、宇津保、伊勢、住吉、濱松、落窪、とりかへばや等より、源氏を經て、狹衣、多武峰等、其數少か

相關せざるもの多し。是の如きは吾等が國民の文學として何の價値やある。印度歐羅巴民族の宗教的敘事詩の如きも、彼邦の文物に心醉せる者流を除きては、我國民的性情と、爲す所甚だ少きに似たり。是れ亦我文學として極めて價値無きものと謂はざるべからず。昔者ゴットシェド一輩の自國民族の性情如何を顧みず、偏に形式の精透と、情感の華麗とに垂涎して佛蘭西文學の輸入を務めしや、獨逸文學は實に其衰頽の極點に達したりき。是時に當りて若し所謂瑞西派のミルトンに關する抗議なく、クロップストックが其の『メシアス』を著はしてチュートン民族の意識に一大反省を促すこと無く、更にレッシングが『文學書簡』を刊行して國民文學の旗幟の下に全獨逸の文壇を風靡すること無からむには、三十年戰以降の獨逸は、何れの時に至りて其『國民文學』を有するを得べかりしや殆ど知るべからず。夫の國民性情の如何を蔑視して、徒に他の雄渾跌宕を稱へ幽玄高崇を賞するものに向ひては、身レッシングに非ざるも吾等は『知識ある人夫』を以て之を目せむと欲す。

國民性情の文學に於て重ずべきこと是の如し。況むや我國民を以て假りに等しく蒙古民族なりとするも、歷史ありてよりこのかた、是秀麗明媚なる天然の間に

て、所謂武士道なるものを造るや、其根柢牢乎として抜くべからず、百般の文物是に胚胎し、永く我歴史上の一大勢力なりき。武士の面目を維持せむが爲に白刃を蹈みて笑て死に就くは我邦人日常の事なりき。而かも眞に佛教擁護の爲に鼎鑊を辭せず、若しくは宗教的熱誠に驅られて生死を顧みざるもの、高僧名衲の二三を外にしてそも幾何ありとするや。單に表面上の事實より之を見るも、現世を度外に附する超絶的、はた神祕的宗教の眞味は、我邦人の知る能はざるものなりしに似たり。

讀者よ、是の如く述べ來りたるが故に、漫に吾等を以て我邦文學を輕侮せるものと爲す勿れ。吾等は國民文學の眞價は國民的性情を滿足するの多少によりて評定せらるべきものなりと思ふ。文學本來の目的は詮ずる所人を娛ましむるにあり。吾等は是意味に於て實用を離れて文學の價値を認むるを欲せず。摩訶婆羅多と、羅摩耶那とは、印度亞里安民族にとりては洵に偉大なる詩篇なるべし。然れども、其想像の瑰奇夸大なる、其情感の幽玄神祕なる、チュラニアンなる吾等の到底其蹤跡に依傍する能はざる所徒に其怪異を驚嘆するを外にして、吾人の希望、安心と

りき。夫の天地人間に對して幽玄なる考察を下し、隱微なる感慨を托したる、中古の南歐羅巴に見るが如き、宗教的、はた哲學的詩歌は、吾國民の知らざる所なりき。是に於て古事記を外にして一篇の叙事詩を有せざりし我文學は、戀愛、教訓を離れたる一首の抒情歌を有せざりき。

外國の文化は如何の勢力を我人心に及ぼしゝか。支那思想は儒教によりて、印度思想は佛教によりて、共に我未開の文化に汎濫したりきと雖も、我國民の同化力に富みたるや、幾もあらずして之を日本化したり。佛教の如きは、絶大なる政權の幇助によりて殆ど強迫的に傳播せられしにも係らず、印度思想の幽玄深邃なる宗教觀は、乾燥冷淡なる形式主義と、輕薄膚淺なる不合理的厭世の感情を皷吹したるとを外にして、又何等の注意すべき痕跡を止めざりき。流石に儒教は根柢より我邦人心を薫陶せり。そはチュラニアン民族の血液は、功利教の繁茂すべき土壤に外ならざりければなり。

是を以て、上層より下層に普及するに隨ひて、佛教は漸く非印度的となれるに反して、儒教はいよ〳〵支那的となれり。中世以後本邦固有の敬神的國風と抱合し

思惟する所によれば、古事記の載する所は決して所謂ミトロギーと稱すべからざるものなるに似たり。されば天然を人視し、宇宙を神化し、風雲月露の中に不可思議なる或物を冥想するが如きは、我邦の詩歌に甚だ稀なる所なり。況してや、ゲーテ詩中のモハメットが、日月星辰を望みて之を讃美し、更に是等を以て全能獨一の大威靈に歸せむとしたるが如きは、我邦人の意識する能はざりし所なり。

Hebe, liebendes Herz, dem Erschaffenden dich!

Sei mein Herr du, mein Gott! Du Alliebender du!

Der die Sonne, den Mond und die Stern'

Schuf, Erde und Himmel und mich!

是を以て歐洲各國の詩歌は、何れも其起原を神話に發せしに違ひて、我邦の詩歌は直に人間を以て初まれり。神と人とのかけはしとも見るべき英雄（ヘルデ）の譚の如きも亦我邦に見る能はざりし所なり。

我國民は宗教を有せざると共に、形而上學をも有せざりき。怪力鬼神を語らず天命上帝を說かざりし孔丘氏の功利的學說は、是島國に於て絶好の知己を發見せ

是の如きは國民文學として有し得べき最高の價値なればなり。遍く世界人心に對して平等なる功果を有するものは知らず、凡そ文學の價値は國民的產物として、遂に國民性情の所依たるを免れざるべし。

二千五百年の文明史は一個のチュラニアン民族としての我國民の特質を最も明白に呈露せり。吾等は人種學上の殘量的エッキスなるチュラニアン民族をば、決して亞里安民族の如く、單一なる人種なりとは思惟せざるべし。さりながら大陸蒙古民族の特質は、均しく是島國人民の殊性たるは疑ふべからざるなり、即ち我國民は實際的なり、現世的なり。是世界を虛僞と做し、迷妄と觀じ、現象以外の彼岸に向て理想的圓滿の淨樂界を想望したる印度亞里安の宗教的觀念の如きは、我國民の夢にだも思ひ至らざりし所。我國人にありては、見得べく、聞き得べき是現實世界を外にして何等の世界あらざりき。由來宗教なるものは主觀的理想を外界に投射したるもの、理想的觀念に乏しき我國人は古來一の宗教若くは神話をだに有せざりき。一の古事記のやゝ宗教的なるに近きものありと雖も、之を印度、希臘、羅馬若くは北歐羅巴の諸神話に較ぶれば、吾等は其間に根本的差違あるを認む。吾等の

て最も有益なるが如く、國民各々其殊性を自覺して是を發揮するは、やがて人道に對して最大なる貢獻を爲す所以にはあらざるか。セミチック民族と亞里安民族と其間に天職の差あること、猶亞里安民族とチュラニアン民族と其間に職能の別あるが如し。其文物の彼に長くして此に短きもの、素より鴨脚の接すべからざるが如く、鶴嘴の斷つへからざるが如し、それ何れを是とし何れを非とせむや。吾等は文學に於ても亦是理を見る。

國民の感情希望を唱ふものは、國民文學なり。國民は是に依りて其慰藉を求め、其安心を樂む。國民の性情に其基礎を有する文學は、永遠なる文學なり不朽なる文學なり、とは國民と其終を共にすべければなり。つら〳〵各國文學の歷史を通觀するに、文豪詩傑、名を馳せ聲を傳ふるもの、一時に喧しくして而して永遠に寂しきは、多くは國民の性情を會心せず、私心偏好に任せて當眼を籠絡したるに依る。技巧倫を絕ち、情想亦世に超えて、遂に百年の知己無くしてやむ、亦悲しからずや。

吾等は我文壇の今日に於て亦常に是慨無くむばあらず。

要するに我邦の文學は我國民の性情を滿足する所のものならざるべからず。

王政古に復し、知識を世界に求めてより、國民の思想殆ど其面目を一新し、小說も亦全く舊時の觀を止めず。最近三十年の間、我邦上下の人心を影響したる改革の精神の激烈、且周到なるは、實に古今內外の史上に多く其例を見ざる所なり。然れども事物の變遷は、所詮歷史的發達なり。さらば明治の小說は過去の我文學と如何の關係を有するか。乞ふ我等をして先づ維新以前の文學を回顧せしめよ。

國民文學は國民的性情の發露せる一の形式なり。吾等は世界人文の歷史に於て各國民族によりて到達せらるべき理想的職能の各々特殊なるものあるべきを信ず。そは民族固有の本性が百般の外物を同化するの作用に於て多少の特質を有することを信じ、而して更に是特質を發揮し、完成することの、其國民にとりて尤も有益に、且尤も成功し易き事情あるべきを信ずればなり。蓋し桃李其壤を同うして遂に其樹を同うせず。國民的殊性の中亦自ら是の如きものあらむ。是れ國民心理學の攻究を待て初めて知悉するを得べしと雖も、吾等は各國民族の過去の作業に於て、既に明に是を認めずむばあらず。性の赴く所自ら他の企て及ばざる所あり。恰も一個人が其の性の長ずる所に隨て其職能を盡すことの、社會に對し

甚だ容易なることを思はざるに非ず。唯是の如き歷史の、自家の哲學主義の說明に終ること、猶ヘーゲル一輩に見るが如きことあらむを憂ふるのみ。

さはれ、吾等は玆に歷史を論ずるものにあらず。唯明治小說の歷史は是の如き事情によりて其完成を今日に期すべからざることを讀者に告ぐるを以て足れりとせむ。

然れども、よし三世を貫きて其歷史的意義を究むること能はずとするも、明治の聖世は年を經ること玆に三十、小說文學亦多少の變遷無しとせむや。吾等は將來に於て如何の位置を有すべきかを知る能はずと雖も、過去の歷史が如何に當代の文學に影響せしか、內外の時勢と共に推移したる國民の思想の反映として我文學殊に小說は隨時如何の態度を取りたるか。保守の反動と進步の趨勢とは政治、宗教、哲學のそれと同じく、小說の世界に於ても亦如何に相拮抗消長したるか。此等の問題に向ひてはさすがに說明の途無きに非ず。吾等が本論を草するは、唯這般の經過に對して大躰の所見を誌し、かねて他日明治文學史を完成するもの丶參考に資せむと欲するのみ。

の限界無し。海波の峯頭が一波徑の長短を以て預め測知し得べきが如きものに非ず。彼の文藝復興と云ひ、宗教革命と云ふが如き當代精神の大運動、はた大昂揚にありては、何人も直に其歷史的意義の重大なるを認ることを誤らざるべしと雖も、其時代の眞相をして較著ならしむべき事情の未だ全く經過し了らざる時に當りては、何人の炯眼か能く其歷史的『時期』なると然らざるとを看破し得べき。過ぎ去りたる幾世に比して殊に注意するの價値無きが如き時代も、將に來らむとする幾世を待て初めて非常の關係を人文の全過程に有するに至るもの無しとせず。而して是の如き『幾世』の果して經過し了りたるや否やは、絕世の豫言者的史眼を有するものに非ざるよりは誰か之を能くせむや。

吾等は文明史を愛す。殊に形式に於て獨逸の所謂理想派史家の論述に於て取る所甚だ多し。そは史的事實の說明は完全なる演繹法によりて初めて爲さるべきものなるを信ずればなり。然れども這般の事實に於て確實なる根據を有するなからむか、理想派史家と雖も如何にして安じて其大前提に依傍することを得べきぞ。吾等は貧少なる客觀的事實に基きて、妙巧なる一部の史論を草することの

れるものを取りて是を觀れば、黃紫の著落、井然として一絲亂れず、然れども其の成る所以の理に到りては梭を投ずるものと雖も未だ甚だ知り易しとせず。況むや傍觀者を於てをや。

歷史の言ひ難き理未だ玆に盡きず。是を過去に徵するに、人文の過程は猶海波の搖蕩して進むが如し。數十年若くは數百年にして其形勢を一變して所謂『時期』なるものを成すこと、猶彼の海水の一波又一波、進行の節に應じて其高低を更むるが如し。故に歷史は其『時期』に於て小紀元を劃す。當代の事實は是一契點に至りて初めて其說明を求め得べしとなす。是を以て史家は其筆を執るに先ち、其の將に說明せむとする所の事實の後にありて、是の如き契點の明に指摘し得べきものあることを確認せざるべからず。然らざれは彼は單に之れを記、述し得るも、決して之を說、明することを得べからざらむ。然らば則ち吾等は如何にして是契點、即ち所謂『時期』なるものを知り得べきか。

若し歷史にして果してジンソンが所謂反動の理によりて進行するものならむには、所謂時期は其兩極端なりと見るべからむ。然れども歷史的擺動には素一定

明治の小說

第一　序論

題して明治の小說と云ふと雖も、明治の小說。。。歷史を述ぶるは吾等の志に非ず。そは今日尙ほ未だ其時に達せざるを想へばなり。

蓋し世の歷史の過程ほど知り難きは有らじ。表面より是を觀れば、往來消長の跡簡明にして自ら秩序あり、強ち鐙朱の分解を要せざるが如きものと雖、もし其裡面に入りて備に其由來を尋ぬるものは、誰か筆を拋ちて望洋の嘆無からむや。げに社會は一大活物なり。個人下にありて之が基礎を成し、國家上に在りて之を統率し、上下を通じて幾十層、各々其品を異にし其性を別つ。若し夫れ其共同の生存を經營し一致の幸福を維持する所以の因緣に至りては、遠くは民族の殊性、國土の情狀に關し、邇くは隨時偶然の事躰に係るもの、素より名擧すべからず。其間內外諸般の勢力相交錯し、同異相離合し、差等相渾融し、前後に喎吁するもの上下に引接するもの、左支、右吾、一昂、一低、茲に燦然たる歷史の織文を經緯するに至る。既に成

の如き輩に同ずべき所以を知らざるなり。

いさゝか蕪言を陳べて發道の辭となす。

（卅年六月）

らしむるにあり。

既に時代と作者との間に受發の關係の成立せるありとせむか、批評家は更に一歩をすゝめ、一世の好尚を率ゐて當に向て進むべき所の理想を啓示せざるべからず。所謂る一代思想の高潮とは是の如き理想の全躰に外ならず。夫の天才なるものは、畢竟是の理想を摸捉し、素象するの技工に於て、天稟の奇才を有するもの。若し夫れ是の如き理想を修養し、供給するは、主として文藝批評家の本務たり。

吾れはほゞ上の如き覺悟を以て評論の筆を執らむと欲す。行藏大に失して才識之に伴はず。實際と希望と或は相違ふものあらむも知るべからずと雖も、そは預め吾れの問ふべき所にあらざらむ。吾れもと文筆に嫻はず、婉言微辭は其の尤も拙なしとするところ。是を以て先には罪を我が敬畏せる諸先輩に得て深く自ら慚悔する所あり。今や奕々として其の過を再びするあらむを恐る。然りと雖も、理は遂に曲ぐべからず、天下の理にして一人の理に非ざればなり。理の存する所は、千萬人之を沮むも吾れ往かむ、理の存せざるところは、千萬人之を勸むるも吾れ往かじ。吾れは遂に夫の區々の私情に泥みて公明の爭を爲す能はざる膽大豆

意識の狀態を所依とするが如く、是の如き直觀綜合は其の根據を精緻確實なる客觀的觀察の中に有せざるべからず。然らざれば其の描くところ、はた其の唱ふ所、自家の私情に本くもの多くして、平等遍通の旨趣に於て缺くるところ少からざらむ。是故に今の作者は古の詩人と異なり。自家固有の熱情直觀にのみ依頼せず、深く人生の實相を了知せむが爲には、進みて批評的眼孔を以て、社會の事物を考察し、歷史的見地に立ちて當代思想の趨勢を思索せむことを要す。然らざれば一世の希望感情を發揮せむこと思ひもよらざるなり。

是時に當り、作者に向ひて最も聰明なる讀者を代表して、一代社會の精神を告白し、國民の性情に順ひて其の文藝の理想的圓滿に到達するの前程を啓示せむと務むるもの、是れ即ち文藝批評家なり。蓋し批評的觀察の作者に必要なること、已に說ける如しと雖も、天才と思辯と素兩立し難きふし多し。且や一氣の神來に觸れて直情揮灑の靈筆を皷するの瞬間は、多く靜穩なる心狀を離れて、動もすれば夢幻の境に徃往す。細心枯淡を旨とする批評的能力と、柄鑿相容れざるものあり。文藝批評家の本務は、是の缺陷を補充し、放埒なる作者をして、常に反省顧慮する所あ

吾れは又文藝批評の眞價未だ多く我社會に知られざるを恨とす。吾れは以爲らく、創作と批評とは兩々相並びて初めて其の完美の域に達し得べしと。難ずるもの或は言はむ、ペリクレース時代の雅典、エリサベス王朝の英吉利には批評無かりきと。是れ時勢を知らざるの說、歷史は正に是輩の蒙を啓かむが爲に、其の誨を垂れつゝあるを見ずや。そも〳〵文藝は一代思想の高潮に駕するに非ざれば、能く民衆の希望を繫ぎ、感情を慰めて、其の久きに耐ゆること能はじ。是を以て人文漸く進みて思想亦漸く複雜となるにつれ、文藝も亦た漸く其の面目を瀆ふる、是れ亦おのづからなる勢ならむ。古の詩人は、世を觀じ、勢を察すること、甚だ力むるを要せざりき。そは社會の組織單純にして、一代の思潮亦甚だ覩易きものありければなり。今の作者は則ち然るべからざるなり。人生世態の錯雜糾紛を究めたるや、幾千年の歷史的發達を一面の現實にたゝみて、著落離合の跡容易に了知すべからず。古の詩人が幼稚なる直觀と、貧少なる閱歷に憑據して社會の眞相を描破せむと擬す、其の無謀寧ろ憫笑に堪えざらむや。まことや、詩人小說家の想を着くるや、素綜合を尙び、直觀を旨とす。然れども猶吾等の精神に於て有意識の狀態は、無

るに過ぎざるを覺らざるもの、是等は多く言ふに足らざるなり。若し夫れ一人にして數雜誌若くは數新聞に筆を執り甲雜誌の紙上に掲ぐる所は乙雜誌の紙上に之に賛同し、丙紙上に說くところにして他の駁撃に遇へば、則ち丁紙上に於て之を反駁し、以て他人期せずして之を辯護するの狀に擬し。喁吁相呼應して輿論と稱し公議と唱ふるもの、其の實一人の筆に成るが如き所謂『掛持記者』の徒に至りては吾れ實に言ふに忍びざるなり。是れ人を欺き、世を陷るゝ好個文壇の欺詐師、破廉恥沒道義の小人、素より多く齒牙にかくるに足らずと雖も、是の如き鼠輩の尙ほ批評家の假面を被りて、文壇の一隅に存在するに至りては、吾れは寧ろ我が文藝の社會に於ける道德的制裁の薄弱緩漫なるに恨み無き能はず。

さはれ吾れは是の如き群小『批評家』を以て毫も爲す無きなり。一國文藝の發達に於ける批評家の責任や、極めて重、極めて大。吾れ不敏なりと雖も、いさゝか自家の職責に顧みて多少の懷抱無からむや。吾れや才短く、時に疎しと雖も、分に應じて責を知るに於て多く人後に落ちざらむを期す。吾れの樸樕の器を挾みて私かに孤負するところ唯是れのみ。

吾れは疑ふ、今日の文藝批評家の多くは果して是の覺悟を有するか。彼等がヴルミキを說き、ダンテ、ミルトン、ゲーテを說き、ブラウニングロセッチを說き、古代希臘を說き、中古羅馬を說き、嘆美、艷羨、日を盡して足らざるもの、果して是の覺悟を有するか。吾れは一私人の翫賞する所に向て容吻するの權利なし。唯文藝批評家として國民文學の進捗を事とするもの、當に是の如き覺悟無かるべからざるを想ふのみ。

上來說く所は、素陳套殊に言ふに足らざるなり。吾れ今日我批評家の爲に之を說く、世人或は吾れの迂を笑はむも、識者はむしろ吾をして是の如き陳言を反覆せしめたる所以を悲まむ。吾れ豈に辯を好むものならむや。

當代批評家の多くのもの、不能無識は尙是に盡きざるなり。夫の二三倫黨の消息を揭げて互に贊同阿附を事とするもの、褒貶の利器を把持するを恃みて、私己の恩怨に報ふるもの、他と論戰して辭屈し、筆窘むや、當面又堂々の陣を張らず、陰に托すべきの機ある毎に冷笑暗罵を以て厘に慰むるもの、はた又誹毀讒謗を以て痛快とするの俗尙に投じて、鄙俚聞くに堪えざる言語を列ね、偶々士君子の一哂に資す

することを忘るべからず。何にぞや國民文學是れなり。國民文學とは何ぞや。國民性情に基ける文學即ち是れ。

吾れは我が批評家の國民性情を蔑視するを以て其の最大缺點の一なりと思惟す。吾が信ずる所によれば各國民族は、各々其の完全なる發達により、當に到着すべき殊特なる理想を有す。所謂る具體一元的發達は、萬有の一體として國民の間に於ても、亦然かあるべきを信ず。是れはた歷史的研究上、爭ふべからざるの眞理なるに似たり。是故に吾れは想ふ、先づ國民の性情に鞏固なる根據を與へ、以てそが外來勢力に對する同化の活力を熾盛にし、更に其の性の近き所に遵ひて補育助成の效を累ぬれば、庶幾くは最も有功にして、且最も多望なる發達を見るを得む。是の如きは一國民が、世界人文の過程に貢獻する最大なる効果ならずむばあらず。是を以て文藝批評家が第一の本務は、審に國民の性情を理解するにあり。比較と云ひ、取捨と云ひ、折衷と云ひ、調和と云ふもの、國民性情を外にすれば、全然無意義の文字ならむのみ。國民文學の完成を企圖するの批評家が立言の地は、須らく茲に存せざるべからず。

鉢、拆の工を盡し得べきも、熱情ある嘆美者として綜合渾化せる審美的意識を形成すること能はじ。學理は能く形式的に審美的意識の成功に對する、主客内外の規定を釋く。而かも審美的意識其物は直觀綜合の結果として犀利鋭敏なる賞鑑力を待て、初めて其の實質を了することを得べし。是故に美學研究者は分析と共に綜合を能くし、思索と共に直觀を能くし、批評と共に嘆美を能くせざるべからず。而かも是の二つのものは其の性質上一個人の心性に於て兩立し難きを常とするもの、吾れは是に於て美學の事ます〳〵言ひ難きを知る。今の紛々美學を口にするものゝ如き、識者よりして之を觀れば、突飛無謀寧ろ憫殺すべきものならずや。

世界的知識の缺乏が我が批評家をして公正かる比較研究に勝えざらしめたる。是れは亦爭ふべからざる事實なり。今や世界の思潮は我が邦に集注せり。人文の歴史は今や世界を通じて一團となれり。吾人は須らく世界大の眼光を破して我が國民文學の位置及ひ天職を覺悟するの機會に臨めり。比較研究は實に是の目的を達するの鍵鑰なり。

然れども漫に比較と言ふ勿れ。比較とは以て比較せらるべき所のものを豫想

べき所は、平等なり、抽象なり。苟も藝術批判に應用して其の謬無からむを望まば、國民性情の特色に本ける歷史的研究に依りて、審に差等圓融の理を考へざるべからず。あはれ、今の批評家と稱するもの、果して這般の覺悟を有するありや。彼等の美學を論ずるもの、多くは徒に諸種の術語學語を挾みて、幽邃精緻を衒ふもの、所謂る鬼臉を被りて稚兒を威すものに非ずや。美とは何ぞや。是れ美學全躰を包含する一大疑問なり。今の大膽なる批評家は一言決し去りて快刀亂麻を斷つの概あり。而かも彼等の中、自ら顧みて、自家美學の系統を擧げて、個中の數語より演繹し得べしと信ずるものあるか。斯の如き疑問に對して、愼重なる學者は常に斯の如き覺悟あらむを要す。今の批評家の多くは、自家素一定の所信なく時に隨ひて、漫に先人の所說を踏襲し、若くは恣に杜撰の臆說を揑造し、以て刻下の私心を立するの料に資するものにあらずや。吾れは是の如き似而非美學を喋々するものよりは、むしろ穩健なる常識に率由するの遙に安全にして且穩當なるを擇ぶ。

且夫れ美學は哲學的思索力と、美術的賞鑑力と、兩々相待ちて初めて其の十全の研究を期すべきもの。彼に長じて此に短なるものは、冷淡なる理論家として、錙解

る所にして審ならずむば來によりて徃を察する批評家が戒勸の旨義はそれ何んによりてか到達するを得べき。批評には回顧と共に希望を要し、解析と共に綜合を要し、說明と共に忠告を要す。是の如きは濶達なる文明史的觀察の下に於て初めて爲し得べきなり。新作出づるを待ちて徒に衆俗に和して漫然賛否の私見を闘はし、而して其の餘を知らざるが如き寧ろ兒戲に類せずや。

精緻且確實なる審美學の知識は藝術批判の規準なり。蓋し美學なるものは素と吾人が審美的意識を說明する系統的知識にして三千年の歷史に於て人類の到達したる思想の最高産物の一なり。其の說くところ所生國民の性質に從ひて各々其の色彩を異にするものありと雖も其の原理にいたりては素平等遍通の性質を有するものたり。藝術批判の規準とすべきもの是を外にして何くにか求むべき。而かも美學は之を演繹的に說明する時は純理哲學の根據を要し之を歸納的に解釋する時は實驗科學の研鑽を必とす。若し夫れ其の發達進捗の跡に依傍して當來の趨勢を明にせむと欲せば是れはた純然たる人文の歷史に基かざる可らず。美學の事甚だ言ひ易からざるなり。且や其の說く所はた其の說く所に取る

保姆たる批評家の尊敬すべく、感謝すべきものなるを忘れて、却て彼等を輕蔑し、憎惡せむとするならずや。是れ一は、社會が批評の何物たるを辨知せず、亦其の職能の效果を認識するを欲せざるの致す所ならむと雖も、主として所謂る批評家其人の無能無識なるに由らずむばあらず。彼等の爲す所を見るに、其の限界の偏狹にして、識見の陋劣なる、其の歷史的、はた比較的知識に乏しき、精微なる審美的知識及び賞鑑力を缺ける、はた又國民性情を蔑視せる、何れか今日の所謂る批評家が通弊にあらずとする。己を持する斯の如くにして、尙他の己を待つの至らざるを咎む、其の痴寧ろ及び難からずや。

吾れを以て漫に他を刺るものとなす勿れ。見よ、今日の所謂る批評家が事とする所は、小說に非ざれば新躰詩なり。一作出で、一篇顯はるゝ毎に、爭ひとりて自家評論の資に充つること、猶ほ餓虎の肉を爭ふが如し。ひろく人文進捗の過程に鑑み、一國文藝の由來する所に至りては、茫乎として知る所少し。吾れは思ふ、あらゆる學藝文物は素是れ一體なり。偏に小說詩歌の一面を見て、而して社會人心の推移を思はずむば、其の說くところ、爭でか其の依る所を審にするを得べき。其の依

尚び、今を卑め、ひたすら摸倣擬似を務めて、進歩の風潮を沮遏せんとするものあり。狹隘なる自家の閲歴を臚列して、以て寫實の旨を得たりと爲すものあり。世に離るゝを以て高しとするものあり。人を刺るを以て賢しとするものあり。幾多の識見無き小批評家は、幾多の識見なき小文學者と相提携して、姦々として盲動するもの、實に今日文壇の現狀に非ずや。素より高才達識の一世の師表と仰ぐべきもの無きに非ず、而かも尊大自重して輕々しく衆俗を以て事とせざるや、われ寧ろ其の出處に就て恨無き能はず。あはれ、國民的立脚地に據りて、衆愚の紛々たるを打破し、公平なる比較的、はた含蓄的批判によりて、國民文學の旗幟を明かにする、是れ豈今日文藝批評家が最大本務に非ずや。

われの淺才薄識なる、豈是の如き任に當り得べしと謂はむや。唯獨逸國民文學の根據の確立は、實にレッシングが文藝批評に負ふ所少からざるを思慕して、敢て當代批評家の三省を求めたるのみ。

さるにても、當代批評家の文藝社會に於ける位置、及勢力の如何は、吾れをしてうたた浩嘆に堪えざらしむ。吾が觀る所にして甚しく謬らずむば、世は文藝進捗の

人道の名の下に、科學、宗教、文學等の一切の文物は、方に其の世界的大同盟を組織するの機に迫りたり。同と異と素より相容れず、遍と殊と亦其の堂を同うするを望むべからずと雖も、彼此交通の結果、一國文化の上に表はれたるもの、偉大ならずと謂ふべからず。是時に當りて、人文相關の理を認めて洽く世界文化の大勢を達觀し、これに國民的見地に據りて一國の文藝を批判する、是れはた文藝批評家の務めに非ずや。文藝批評のこと豈それ言ひ易からむや。

吾れを以て之を見れば、文藝批評の必要は蓋し今日より大なるは無し。明治維新このかた、歳を經しこと既に三十、而かも大東帝國の文學は未だ其の國民的立脚地を占むるの勢に達せざるなり。極まれば變じ、屈すれば伸び、局面常無く、行止定まらず。是れ一は素より外來勢力の頻繁多様なるに依るべしと雖も、そも〳〵亦一國の特質未だ萬殊の事物に對して撰擇同化の活力を得るに至らざればなり。數年以來、殊に王師西に動きて暴清膝を屈してより、國民的意識漸く其の中正の發達を爲しそめたりと雖も、文藝の世界には尚頑迷の徒少からず。國民性情の如何を顧みず、偏見私好にまかせて、他の宏壯幽玄を稱ふるを事とするものあり。古を

我邦現今の文藝界に於ける批評家の本務

去ぬる年の九月、吾れ故ありて帝城を離れしこのかた、文壇に負きしこと半歳餘、今や事志と違ひ、桑蓬の居久しきを得ず、茲に再び評論の筆を執りて讀者と相見ゆるの機を得たるは、吾が深く喜びとする所なり。

文藝批評のこと豈言ひ易からむや。吾れ常に以爲らく、人文の進捗は批評の必要を增し來る。社會萬般の變化につれて、思想感情亦漸く複雜となるに隨ひ、三世を通じて一軌の瀉らざるを求め、時尚日に新に褒貶月に革まるが中に、大勢推移の跡を究めて、世をして向背に惑はざらしむる所以のもの、是れ豈文藝批評家の務めにあらずや。世は人を造り、人は又世を造る。理を以て事を律するの偏よれるは、猶事によりて理を曲ぐるの正しからざるに均し。具に内外受發の趣を察して、一は以て作家を戒勵し、一は以て時尚を提撕しともに〳〵其の一大理想と立する所に向て不退轉の精進を勵まむこと、是れ豈文藝批評家の務めにあらずや。今や世界のもろ〳〵の邦國は既に其の精神的城壘を撤して、人文渾融の途漸く拓けたり。

第二期

明治三十年六月より
明治三十三年七月まで

今の小説愛を説くもの多し、われ等は其の淺きを惜まずして其の清からざるを恨む。戀の清きものは世に尤も美はしきものの清きなり。澆季浮薄の塵の世に、名の爲に動かず、利の爲めに走らず、つれなき運命の風波に搖られつゝ、身を以て其の清き愛情に殉ずるものにいたりては、われ等是を高しと言はず、又大なりと言はず、只其の甚だ美はしきを認めずむばあらず。あゝ美なる自然に圍まれて、人は獨り何ゆゑに醜なりや。『わすれ水』はたしかに愛情の福音を傳ふるものなり。

『わすれ水』は小說と言はむよりはむしろ無律の抒情詩なり。美はしき自然の中に包まれたる、美はしき自然の子が、其生命もて織り成せるきぬの美はしさよ。われらと共に花袋子が是篇に向て滿幅の同情を表するもの果して何人ぞや。

（二十九年九月）

是れ『わすれ水』が吾人に語る所の大躰なり。

鐘一がお禮を戀ひ、お禮が鐘一を慕ふに到りし、因緣の淺きを咎むる勿れ。吾等の何人が戀てふものゝ成立をば全く外部の事情によりて說明し得べしとするか。悲風慘雨、二十年の世路を閱盡して、尙靑春の愛を渝へざるもの、眞に戀するものの事情にあらずや。戀は尙電火の如きなり。吾等は其の由て來る所以を知らず只其の現に然る所を認め得るのみ。

さはれ、是篇の表はす處は戀と云はむよりは、むしろ戀てふものゝ人生に於ける運命の果敢なきことにあらずや。思へば、相思ひ相慕ひて、遂に一度も其志を告ぐるに由なく、楚雲湘水長く相別れて天涯に放浪し、中夜人無き處、空しく往事を追懷して、世事の意の如くならざるを悲むもの、果して幾何ぞや。われ等の世に尤も悲しきは語らですごす戀ならずや。生ける間は影の如く心を苦めばてては吾が汚れたる骸と共に墓門の中に葬り了るに至りては、何物の悲哀か是に如くなるべき。

『わすれ水』はまことに人生至深の悲哀を歌ひたるものと謂ふべきなり。

人は世に背き、人に離れ、人生最後の幸福をば返へしがたき昔の記憶の中に見出さむとしたり。かくてかれ等は悲哀、絶望、斷腸の中に僅に其の滿足を求めたり。

その終りの談話はまことにきく人の腸を九回せしむ。

何故に打明けては下されざりしと、お禮は言葉を重ねて極めて悲し氣なる顏色を爲しぬ。男は愛然として溢出づる涙を揮ひしが、おのれの君に告げざりしは、君の我に告げ得ざりし如く極めて美しき戀にてありたるが故ぞと、いふや否、女はいたく泣きて君、君もまたしか思ひたまひしか。

否それのみにはあらじ、御身の其心を知らざりしばかりにて、おのれもこの一生を如何に墓なく如何に情なく過したるか知れぬものをと、詳しくその一伍一什を語りしに、あい君も亦然なりしかとお禮は打伏になりて聲を擧て泣きぬ。今は堪え難くなりたるなるべし。

されど今宵はと、やがて涙を欷歔けて絶々にお禮は又いふ、今宵は何といふ嬉しき夜ぞ。君に此心を語り得しだに已に限なく嬉しと思ひしに、君の其心をさへ聞くことを得たるは如何ばかり嬉しき事に候ふべき。妾はこの心を君に語り得ずに一生を終るにはあらずやと、幾度悲みしかしれぬ身なればと、又泣く。

籠一も溢れ出づる涙を支ゆる術

一弊簑、一破笠、雨に臥し、露に宿り、失はれたる戀の想に二十年の月日を泣きくらしたる憐れなる多恨の詩人は、くれゆく秋の風、尾花が末を吹わたる頃、かの里にたどり着きぬ。山の容、水の姿、昔のさまにかはらねどもありし家は跡だに無し。人に聞けばかの少女の家は夙に其産を失ひしのみならず、渠女は思はぬ人に嫁ぐべく強いられて、今は又其夫にさへ見捨てられ、遠く村端れに別れ居るなりと。鐘一は泣きぬ。

日暮秋風かれは悄然として渡頭に泣きぬ。『同じ船にみにくからぬ中年の婦人ありて、木崎様にてお在さずやといふ。』その誰なるかを知りし時のかれの驚愕はまことに譬ふるに物なかりき。戀しきかの少女の君にてありたれば。』あはれ、少女は鐘一が少女を戀ひ焦れたるが如く、亦鐘一を戀ひ焦れ居たるなりけり。

無慈悲、殘忍、酷薄なる運命は、二十年の久しき間、二人の愛情をばかくまでなぶり弄びしにも飽き足らず、今や相語り相抱くの機會を得せしめ、更に其の無益なる悲泣と涕涙とを弄ばむとす。悲しき者は世なりけり。哀しきものは人なりけり。

さながら老蝶秋にやせて、空しく衰殘の黄花を擁するが如く、世にも憐れなる二

ちたるが、今は早や平生の嗜み深き心をも忘れ果てたるなるべし、其まゝ戸外に走り出てぬ。』

烟の如き春雨を衝きて、鐘一は少女の家の方に急ぎぬ。彼れは、今や情熱し、心狂ひて、『その少女の姿だに見えなば、一散にかけ寄りて、藻掻くをもかまはずかき抱きてわがこの心を殘る所無く打明けむと思ひ』けるなり。かくて少女の家の裏門に立つくしたる彼は、少女が姿をば見ずして、只其指先に彈かれたる妙なる琴の音に聞きとれぬ。

琴の音は熱したる情をなだめ、狂ひたる心を鎭めて、跡には悲しき涙のみぞ溢れたる。鐘一は無限無量の感慨を胸一つにつゝみて、力なく〳〵其家に歸りぬ。

あくる朝、運命は彼れを驅りて永く少女と彼れの間を隔てぬ。

京に歸りて妻を迎へしが、氣合はずして別れぬ。母も此世を去りて、今は是身を累はすものもなし。鐘一は別れ去りてより二十年の間、片時と忘るゝことなきかの地の天然を見ばやと思ひ立ちぬ。なつかしき、戀しき、かつて狂はむまでに憧れてし、まことの愛は今も尙すこしも褪らざる、かの少女をも見むとてなり。

て是の可憐なる無韻の抒情詩に寄するものなり。

乞ふ、われ等をして先づ其大躰の次第を叙べしめよ。

木崎鐘一と云へる容貌秀麗の青年詩人は、さる地方の中學教師に聘せられぬ。山川風色、田園の閑居、共にいたく彼が詩情に協ひて彼は平穏なる自然の中に樂しき月日を送り居たり。

間もなく彼は一の戀人を見出せり、そは禮子と呼ばるる十七歳の少女にして、其地の財産家なる矢貝なにがしの娘なり。山を愛で、水を賞したる彼れは、今は人間の戀てふものによりて心を惱ますの身となりぬ。されど言寄る術もあらなくに、よりてもあはぬ片糸の合ひがたき身を喞ちつゝ、好き機會もと待ち居しが、年はくれ、雪は消え、花草は萠え、花さへも散りかけしに、よき機會とては遂に來らで已みぬ。とかくする中、彼は家の務めの已みがたきありて、永く其地を去らざるべからざるの場合となりぬ。心狂はむまでに戀ひ忍びたる少女には、わが赤心の片影だに明かし得で、長へに相別れざるべからざる場合とはなりぬ。鐘一は『いたく熱したるさまにて身を起し、語らねばならず、語らねばならず、と、旋風の回轉するが如く、思立

樂は清風朗月と共に悠々として盡くる所を知らず。あるは水冷かに蔭綠なるほとり、一卷會心の詩集を繙て、天地の間に放吟するが如く、あるは夜明に星稀なる時、片舟湖心に棹して斷琴の友と囁くが如く、心のどかに意胖かなること、さながら閑雲孤鶴にもくらぶべかりき。中ごろは、わが心あやしき夢に魘はれし如く、言ひ難き一團の情火吾が胸に燃えひろがりて、吾れはこゝに吾が心の平和を失ひぬ。苦しきに非ず悲しきにも非ず、されど譬へば秋風蘆葉に戰ぎて、孤月中天にさやかなる夕、一道の笛聲天涯の羈客を動かすが如く、又は五更夢さめて孤燈隻影を弔ふの時、落寞寂靜の氣、冉々として吾が心を壓し、情迫り感塞りて覺えず顏を掩ふが如く、吾が心あやしう動き、はては涙潸然として零つるを忍ぶ能はざりき。終に及びては陰雲中天にかゝり、希望の星影やうやく其光を失ひて、遂に黑闇々の中に埋沒し去るが如く、又は急霰亂雨闌春の芳を散して、殘紅瘦蝶飛で行く所を知らざるが如く、吾が心人生の悲運に打たれ、心事のいたく違ふを悲みて、俯仰感愴、慟して又哭せむとの思ありき。

是れわれ等が『わすれ水』を讀みゆける時の感情なり。われは滿幅の同情を捧げ

田山花袋の『わすれ水』

『國民の友』夏季附錄は中に三篇の小說を輯む。田山花袋の『わすれ水』を以て壓卷となす。

蓋し『わすれ水』は曾に國民の友夏季附錄の壓卷たるのみならず、曾に已に公にせられたる花袋の作中に於て最も優等なるものゝ一なるのみならず、亦近時發行の群小說中に於て屈指の一たるを失はざるべし。

其人物や單に二人のみ。其場所や、只狹隘なる山村水郭のみ。其筋を言へば只一片相思の愛情あるのみ。然れども人を動かすには必ずしも事の多きを須ゐず、必ずしも言の繁きを要せず。人生至深の情趣は往々只胸臆最後の琴線に觸るゝことによりて解せられ得べきものあり。短篇小說の作家として花袋は實に是訣を解したるものに非ずや。『わすれ水』の一篇讀み了れば涙滂沱として吾面を沾し、われは卷を掩て暫く仰ぎ見ること能はざりき。

初めわれ青松を追て水涯にさまよひ白雲に伴はれて山巓にあそべり。自然の

評はそが實際舞臺上に演出せらるべき時當に觀者に及ぼすべき全結果に就て商量する所無かるべからざるに非ずや。故に猶歌曲ある抒情詩の批評家には、一般歌曲に就ての知識を要するが如く、戯曲脚本の批評家にして其職責を全くせむと欲せば、詩學美學の知識の外に、演劇としての舞臺的結果に就て多少の知識を有せむことを必とすべきに非ずや。

もとより世には單に机上に朗讀せらるゝを目的とせる所謂朗讀戯曲（レーゼドラマ）なるものあり。是場合に於ては、批評家は其舞臺上の全結果を豫想するを須ゐずと雖も、少くとも其科白に就ては默讀以外に於て注意酌量する所無かるべからず。而かも科白とは、少くとも現今吾邦の場合にては、實際生活とは多少相異なれ、舞臺的事情に關聯して初めて其効果を有するもの、故に戯曲脚本の批評家は、何れの途、演劇の實際に就て多少の知識を有せざるべからず。

單に小説傳奇を讀むの覺悟を以て戯曲脚本に臨むものあらば、其人は決して是戯曲脚本の眞相及眞價を認了し得ざるべし。知らず、今の批評家の幾人か果して是覺悟あるべきや。

（二十九年九月）

戯曲脚本の目的は美術の一科として毫も叙事詩、若くは抒情詩等のそれと異なる所無きなり。あらゆる美術の目的は、其視點の異なるに隨て、種々に解釋し得べしと雖も、尤も廣き意味に於ては、所詮美の感覺直觀的表象（sinnlich-anschaulicho Darstellung des Schönen）と謂ひ得べし。是目的より見る時は、戯曲脚本は尤も進歩せる詩なりと謂ひ得べし。

何を以て是を言ふ。叙事詩及抒情詩にありては、其表象の手段は主として言語なり。已に言語を以て其表象の手段となす、故に其主觀の側に於て感覺し寫象し想念する所のものは主として時間的なり、故に單に實在の一面を表象し得るに止まる。已に實在の一面を表象し得るに止まる、故に其美に對する發現の方式分量等も亦自ら一面に偏依するを免れず。是を戯曲が演劇の幇助によりて吾人の前に呈露する所の審美的結果に比すれば、其種類分量の多少明暗言はずして明なり。

若し一事物の批評は、其事物が目的とする所の全き意義と全き結果とに就きて立言することによりて、初めて公正なる判斷を下し得べしとせば、猶歌曲の伴へる抒情詩を評するに當りて、其歌曲をも併せ考ふるの必要あるが如く、戯曲脚本の批

りて、現實の規束は氷の如く解け去り、心は理想の洗禮を受けて、一種空靈の世界に往住す。是の如きは普通の劇が企て及び難きものにして、獨り能樂と樂劇の吾等に被らするの感化なりとす。吾等は是點に於てたしかに能樂の價値を認む。

希くは事に能樂に從ふもの、漫然時流に累はされて、是の貴むべき精神を誤ること勿れ。能樂は須らく保存すべし、猥りに進歩せしむべからず。吾等は古來の遺型を株守せるの能樂は、何れの時代に於ても、高尚なる嗜好を有する多少の翫賞者を有するを失はざるべきを信ず。

（二十九年八月）

脚本の批評法

吾等今の文壇の注意を促さむと欲するは脚本の批評法是なり。批評法と云ふと雖も、逐條其方法を述べむとには非ず。我批評家の一般に注意せざる一事を擧げて其省思を煩はさむとするのみ。

戯曲脚本は何故に他の詩歌とまかく其形式を殊にするか。我脚本批評家は多く是一問に答ふることを逸せるなからむや。

らずして、其の純粋なる理想的狀態に於て能く各部の一致を保ち得たるを喜ぶ。

さはれ、是の如き種類の劇（吾等は系統上能樂を以て一種の劇なりとなす）は、人生の如何なる狀態を表象するに適當すべきか。是れ吾等の一考を要する所なりとす。

歌謠を以て言語となし、舞踊を以て動作となすものに向て、吾人の同感を寄せむが爲には、吾等は想像の翼に駕し、人生以外の生活に其心情を接着せざるべからず。俗界のあらゆる鏁鐵鎖尾より吾等の心を拔き、簡淨醇粹なる一種の世界に其身を處かざるべからず。そこには靈界の見得べきこと、猶現世の觸れ得べきが如く、感情意となり、直觀智となり、あらゆる權數詐術僞貌の痕跡を止めず、幽現二面の世界をして渾然として茲に融會せしめざるべからず。是故に能樂の形式たる、素と神祕的事物を包容し表彰するに適す。吾邦の謠曲が多く佛敎的精神を通して、幽明兩界の關聯を表はせしもの多きは、尤も能樂の躰を得たるものなり。想ふに我邦の能樂は猶歐洲に於ける樂劇の如きか。觀聽するもの感激し、神集まり、靈躰やふやく一致し、形神やうやく交はり、恍然、唫然、身は限なき空想の世界に導かるゝに至

ずして一種の歌謠を以てし、其の動くや、日常の起居に倣はずして一種の舞踊に依る。斯の如きは能樂の外觀なり。

吾等は能樂を以て一種の理想化(精しくは抽象理想化)を受けたる演劇なりと謂はむ。其故如何に。

そも〳〵歌謠は吾人の情想を尤も明晰に、且尤も有効に表はさむが爲に、技術が音聲の上に製作したる一の方便なり。通常談話の得て表白すべからざる激越微妙の心事は、實に是方法によりて能く聽者の感情を動かすを得るなり。是れ理想化されたる言語と謂ひ得べし。假面は吾人が善惡、賢愚等の性質を固定的に表はしたるもの、通常の顏容に於けるが如く、自在の變化を闕くと雖も、其人の心性原態の如何を發露して、尤も明晰なり。是れ亦理想化されたる顏面と謂ひ得べし。舞踏も亦人の行止をして尤も明白に、符號的に、其性行意志を發揮せしむるもの、是れやがて理想化されたる動作に非ずや。其他舞臺上のあらゆるもの皆然り。能樂は是の如き言語、顏容、行止、舞臺によりて組織せらるゝもの、是れ即ち一種理想化されたる演劇に非ずや。吾等は吾國の能樂が、猿頭蛇足の怪獸的改革の累す所とな

て歷史上に享有したるあらゆる事物の共存俱在を要求すべし。吾等が古物保存に對する意見は實に是義に胚胎す。

吾等は能樂會の諸氏が意見の存する所、亦是の如くならむを望む。

能樂の性質

序に吾等をして能樂の性質に就て一言せしめよ。是れ將來の能樂者が當に執るべき方針に就て多少の裨益あらむを思へばなり。

演劇は其喜劇に於て、殆ど全く現實の世界に密接し、其悲喜劇及悲劇に於て漸く實際の生活と隔離す。是れ其劇の性質上、當に然るべきものありて存するなり。而かも其科白、裝飾、衣裳等は常に其劇曲的性質の許す限りに於て、成るべく現在の事物に近似せむことを務む。然れども能樂に到りては則ち大に是と趣を異にす。啻に現實に近似せむことを務めざるのみならず、徹頭徹尾、一種理想の境域に行動し、現實を以て毫も爲す所無し。其舞臺には一の裝飾なく、其道具は單に符號のみ。人は喜怒其色を變せざる一定固着の假面を被り、其の言ふや、通例の言語を以てせ

歷を閲せざるべからざるを想へば、吾等はうたい當代作家たるの、士君子にとりて甚だ困難なるべきを想はずむばあらず。吾等は詩人の閲歷に就て云々することの批評家の務にあらざるを知る。而かも明治文壇の道義の爲に奕々の情に堪えざるものなり。

（二十九年八月）

能樂會

近時中等以上の社會に、謠曲及能樂に對する嗜好の增殖し來れるは、著しき事實なり。謠曲に關する議論、能樂に對する批評等は、數々府下の新誌上に散見する所又一部の學者、高等官吏は已に能樂會を組織して、斯道の盛運を助成するの企畫を成せりと云ふ。

國民の前進するや、常に回顧の眼を着けむことを要す。彼は其過去の中に、其未來を同化せざるべからざればなり。一家族が其祖先の遺典を存するが如く、國民も亦彼等の先世が今日に殘したる遺物を保存せざるべからず。人は現在に於てのみ生活するものに非ざればなり。是を以て國民の完全なる幸福は、其國民が曾

湖已に定評あるを以て、吾等今茲に贅せず。只子が明治小説には未だ多く、否殆ど絶て其類を見ざりし、是好題目に向て率先其筆を染めたるの功は、吾等が子に於て甚だ多とする所なり。

遮莫、吾等は『今戸心中』を讀みて、大に遺憾に堪えざるものあり。あはれ、明治今日の小説家は青樓遊女の汚れたる愛情に於ての外は其情死の題目を求むると能はざるか。青樓何物ぞ、游女何物ぞ。吾等は一般人間の不幸悲哀に對して一視同仁の博愛を托することの甚だ詩人らしきを想はざるに非ずと雖も、而かも吾等は同時に詩人が其詩人たるの名譽と品位とを保たむが爲に當に有すべき見識と覺悟とあるべきを信ず。元祿時代にありては、社會的階級の境域頗る嚴密なりしが故に、楊臺狹斜の地を外にして、人情の痛激なる活動を實驗するとの甚だ難かりし事情ありしを以て、詩人の題目多く斯の如き社會に關せざりしは、寧ろ自らなる勢なりき。而かも吾等が社會的道德の卑陋に就て恨無き能はざるなり。明治の今日愛情の題目として尙且靑樓遊女を要すと謂ふものあらば、吾等は獨り其責を社會に歸する能はず。更に『今戸心中』の如きものを作らむが爲には、其作者は如何の經

世に最も麗はしく樂しきものと爲すものなり。忠孝節義の死には自ら人を強い且人に逼るものあり。情死は尤も自由の死なり、一度び現實の繫縛を擺脫し去れば、望春の如く、喜海の如し。他にも自らにも尤も樂しきはげに情死なり。情死は脆弱無力なる人間が其精一なる情思と專念とによりて如何に廣大なる力を有し得べきか、又如何に無量なる歡樂を享け得べきかを吾等に示すものなり。情死は自力によりて尙永遠の解脫を望み得べきを吾等に示すものなり。

吾等豈情死を奬むるものならむや。唯是の如きものにありて日常一般の理義を以て律すべからざるものあるを想ふのみ。あはれ詩人の好題目、小說、傳奇家の好資料、人情の全能を表はし、現空二面の世界を示すもの、何物かよく情死の如きを得べき。愛を說くものは遂に情死に到らざるべからず。情死は此世に於ける最も大に且最も終りなる愛の發現なればなり。巢林子は愛の詩人なりき。彼が情死の詩人たりしもの、素より當に然かあるべかりし也。

* * * * * * * * * *

廣津柳浪子が『今戸心中』は情死を以て其の主題となすもの、其價値に至りては、江

其の死するや、孤影相吊して慷慨劍に伏するに非ず、怨嗟煩悶の間に處して一死僅に逃避の途を得たるにあらず、食なく、家無く、天涯に漂浪して秋風路頭に踣死するに非ず。青春の愛情に包まれ、蛺蝶の輕翅に扇がれ、鳥啼蜂舞の間、鴛愛鴦戀の男と女と、安車の中に相擁し、九穢五濁の世を離れて悠々理想の天地に遊ぶ。是の如きものを情死となす。

死と言はゞ則ち死。而かも是れ最も幸なる死に非らずや

心を潜めて想へ。吾れ人は何が故に今日生きたる如く、明日も亦生きむと、欲するぞ。何故に吾れ人は今日今時を以て直ちに死すべからずとなすか。是れ決して他の故あるに非ず、詮ずる所、吾れ人が今日愛し且愛され、如く明日も且愛し、愛せらるべき或物を有すればに非ずや。是の如きもの必ずしも一個の人たるを要せず、一頭の飼犬にても可なり、一枝の花にても可なり、兎にかく愛は吾れ人が生活の第一條件なり。人生を經營する所のもの、萬千不同、數ふるに日も亦盡きずと雖も、吾人は實に是の如くにして日又一日其生活を持續し居るものに非ずや。

情死は死によりて生を得るものなり。常には悲慘なるべき生活の最後をして

天にありては星、地にありては花、人にありては愛。是れ世に美はしきものゝ最ならずや。あらゆる死は美はしきなり。されども、吾は愛に忍び戀に憧れて自ら天命を裁する、所謂情死なるものゝ甚だ美はしきものなるを想ふ。

道德家をして其の言はむと欲する所を言はしめよ。哲學者をして其の說かむと欲する所を說かしめよ。而かも吾は遂に人生の脆弱を認め、盡軀の染汚を救はむとする宗教家が、現世の中に其身を容るゝ所無き是憐れなる犧牲の爲に、其最後の住居をすら拒まむとするの意を解する能はず。吾は脆弱有漏の人間として、情死に向て滿幅の同情を寄するものなり。Das Leben ist der Güter Höchstes nicht（生命は持ち物の最高なるものに非ず）。是れ悲劇と共に情死が吾等に訓ゆる所の福音にあらずや。人は生きんが爲に生まれ來りたる者に非ず。何ぞ必ずしも坐して自然の死を待つを要せむ。幸福は褫はれ、希望は亡はれ、愛去り、春逝き、光消え、喜滅びて、猶且生き得べしとする乎。悲哀、落寞、絶望、暗黑の中にありて、高遠無限の天を仰がば、人の當に爲すべきもの唯一あらむのみ。人は善を爲さむが爲に生まれたり。生命の最高の寶ならざるを知らば、彼は當に死すべきに非ずや

しなり。

人或は彼の平生傲岸人に譲らざるを譏ると雖も、斯の如き個人に關する所の毀譽は、毫も舞臺上の市川新藏の價値を上下するの力あるものに非ず。今や一眼を亡ひて病痾の中に落魄する所の彼に向ては社會はむしろ其の不遇薄倖の爲に一滴憐愍の涙を濺くべきに非ずや。

帝京の士民は、恐くは是より永く是俊髦を歌舞伎座の舞臺に見ること無かるべし。團洲は其繼續者を失ひ、社會は其慰籍者を失へり。新藏先に誤て其死を傳へらる。然れども一個の游蕩兒岡本某は今尚活けりと雖も、團門隨一の秀才市川新藏は已に其社會的生命を亡へるに非ずや。新藏の心事を想へば吾等はうたゝ憫然の情に堪へざるなり。

（二十九年七月）

『今戸心中』と情死

人の人らしきは其情にあり。吾は情に殉するの人を見る毎に、感究まり意切なるの餘り、其最後の尤も人らしきを想はずむばあらず。

汪溢、精神常に躍如たり。時に舊格を守らず、往々自ら成語を改删するが如き、一部の劇評家は痛く是を誡ると雖も、所詮死型以外に活動の餘地を求めむとする彼が有爲の資性の然らしむるところ、必ずしも師翁の胡蘆を描きたるのみに非ざるべし。青年血氣の俳優をして、寧ろ夫の摸倣擬古是れ務むる屑々たる儕輩の間に一頭地を劃するものに非ずや。舞踊は我邦の演劇に缺くべからざるもの、幼少の時より是形躰的技藝の過重なる教育の中に成長したるの弊は、我俳優の大多數をして精神的教育の缺乏に陷らしめ、其爲す所をしてしかく形式的、感覺的の一方に走らしめ、遂に那の如き沒精神の技藝を演出せしむるに至る。吾等が新藏に於て多とする所の一は、身彼が如く舞踊に巧妙にして、而かもよく劇の精神、人物の性格に留心し、場に臨て先づ是を活現せむと務むることにあり。彼が扮する所の人物のしかく生氣の躍如たるものあるは實に這般一捻の用意に存す。夫の所謂壯士俳優なるものは、自ら學問あり、識見ありと稱すと雖も、其の技、生呑活剝見るに足らざるは、畢竟彼等が全然舞踊の素養に缺けるの弊に坐す。新藏は身舊俳優の中に籍すと雖も、我演劇の將來に於て新舊二素を調和するに尤も適當なる俳優にてあり

らざるなり。今日の人團洲の繼續者を悦惚して已まざるもの、洵に偶然に非ざるなり。

あゝ團洲の繼續者乎。社會は彼に於て自己の咏嘆者を認め、自己の慰籍者を認む。輕じて一俳優と爲す勿れ。社會が今日民富の程度に比し、那の如き過大なる報酬を懸けて、敬重尊崇毫も慊色なきを以てするも、彼の技藝が如何に吾人の幸福に關聯するものあるかを諒るべきなり。あゝ團洲の繼續者乎。幾十年の後吾等もはや巨眼厚眉の是翁を見る能はざるべきの時、吾等は何人に於て其遺風を樂むを得べしとするか。社會が缺焉として暗に忡傷する所のもの、洵に偶然に非るを見る。

團洲門下素英才に乏しからず。而かも老團洲の衣鉢を繼紹して多く其名を辱めざるの望を負へるもの、吾等の見る所を以てすれば、單り一新藏あるのみ。而かも方今唯一の團洲繼續者たるべきの彼は一眼を失ひて已に俳優たるの資質を缺損したるを如何せむや。

好劇の士は夙に彼が伎倆を認識したるなるべし。彼の舞場に云爲する所、才氣

市川新藏

自己の感情と希望とを歌ひ、自己に慰籍と娯樂とを與ふるの故を以て、詩人に感謝することを知るの國民は、亦大に其の俳優に負ふ所あることを遺るべからず。

歌舞伎、明治の大劇部を東京より奪ひ去りたりとせよ。帝城の士女是が爲めに惆悵たるもの幾十萬ありとするや。一場の愁嘆場に其百結の袂を絞らむが爲には、營々屹々として貯蓄したる幾月の餘贏を惜まざる食ふや食はずの其日暮しよ、都大路の高樓に浮世を外なる姫御前に至るまで、平生劇部に懸くる所の熱情執心は殆ど吾等の意想外に出づるものありて存する也。壁一重を浮世の境なる是別天地に、彼等が現實世界を解脫することによりて得らるべき慰籍と快樂とは、殆ど如何なる條件の下にも彼等を索引するの力あるなり。

劇部の勢力のしかく熾盛なるは素より俳優の妙技に職由す。今假に團菊二優をば是世より奪ひ去りたりとせよ。劇部の寂寥落寞果して如何なるべしとするぞ。滿城士民の幸福の是によりて損殺せらるべきもの其の幾何なるを知るべか

文學者として、政治的記者として、又著述家として天下又君の名を知らざるものなし。必ずしも學殖の深きに非ず、必ずしも議論の正きに非ず、必ずしも文章の工なるに非ず、而かも君は他の得て摸倣すべからざる、君の因て以て君たる所以の特色を有す。是を以て天下の人君を愛し、好で君に聽く。

蘇山の麓より君が懷にして來たりたる一片の放膽的時事論は、其論旨よりは寧ろ其文躰を以て天下の青年を動かせりき。君の奇才は洵に昭代の珍なり。今や君、母國を離れて遠く海外に游ぶ。所謂日本的眼孔を以て世界を觀、世界的眼孔を以て日本を察したるの結果として君はた何を齎して歸らむとするや。吾等は君が抱懷の獨り文字の上に存せざることを希ふ。

年少にして新紙の事業に從事したるは寧ろ君が畢生の過失なるなからんや。歐雲米雨徐に君が雅懷を養へよ。希くは英才に假すに時と力を以てせよ。成功せる新聞事業を以て寧ろ君が過失とする吾等が君に對する囑望と尊敬の如何に大なるべきかを思へ。

君は生來蒲柳の質、幸に文學の爲、國家の爲に加餐せよ。

（二十九年六月）

轉滑脫、痒き所に手のとゞくフレクシブルの書振此等は一葉女史が獨得の長所なり、殊に女性の談話には一種云ふべからざる同情を湛ゆるあたり、殆ど天品の筆とも謂つべくや。

もとより一葉が作とて賞めるとばかりあるでは無し。さりながら其佳處長處の應接は、殆ど人をして缺點を指示するの遑無からしめんとす。文藝倶樂部おさむる所の八編、光彩陸離たる『われから』の一篇にけおされたるの觀無きに非ず。『濁り江』や『十三夜』や、はた『わかれ道』『たけくらべ』や、願へば社會は如何なる賞讃を以て彼等を迎へしや、文界に成功したるもの近時一葉女史が作の如きは蓋し少し。吾等は明治文壇の爲に是好女小説家を得たるを喜ぶと共に、滔々たる男性作家に向ていま一段の奮勵を希望せざるを得ず。

（二十九年六月）

德富蘇峰君を送る

『國民新聞』及び『國民の友』の主筆蘇峰德富君は去月二十日を以て歐米漫遊の途に就かれたり。

りの氣儘よろづ派手好みに下々の思ひやり厚く情多く嫉妬深く氣の輕き割りには心細く憂しと思ひつめては一日一夜泣きつづけもし兼ねまじく、エゝまゝよとやけの上にては何事にても爲兼まじき』神經質の女性はお美尾のありし昔にくらべて親子の緣淺からず筆の跡床しうたとられぬ。『旦那樣の身持ちは那程までに吾を袖にし給へども女の身の悲しさはあげて夫とも怨じ難ね思ひ〳〵てつらやの果は心にも無きあさましの擧動ひ家つきとて許されず浮世の外にわれから身を捨つる』お町の末路。吾等は讀み終りて女子の身の憐れに悲しう涙こぼれぬ。

吾等は一葉女史が筆の痕にお町の身の上に十分の同情を認め得たるを多とす。お美尾とお町、與四郎と恭助、是間の因緣を冥想すれば、一部の世情歷々として鏡にかけて見るが如し。書生千葉がお町に對する隱然たる依戀の情は下婢の間話の中にほの見えて、賴り少き天が下に我一人の奧樣の問に、一抹の情糸を遊ばしめたる作者の手際などにくらしき程床しや。

會話の調子の品能くて實らしく、地の文との繫ぎの穩かに角目たゝぬ、さては圓

一葉女史の『われから』

（二十九年六月）

文藝倶樂部の第六編は又もや一葉女史が『われから』と題する一佳篇を掲げぬ。女史がけふこのごろは殆ど吾等をして、加ふべき賛辭の選擇に倦むことを覺えざらしめむとす。

おのづからとは云ひながら、扨ても見事なる女性の觀察は、鬚眉作家のなか〳〵に及び難きものありて存す。お美尾のことに就きては、巧みに筆を省かれたれども、ありしにも增して明かに思ひ遣らるゝは、たゞの腕にはあらず。上野わたり浮世の榮華を思ひ染めて、見る影も無き身に較べては、ありし我にもあらず心狂ひて、與四郎との中、是より永く隔たゝりし。はては出處あやしき二十圓の金を名殘に、其子までを置き去りて跡無く消えしお美尾は、二十年の後に、派手作りにはたち下とも見ゆる奥樣となりて顯はれぬ。

そもや『お前、母の性を受けつぎて、高品にきやしや骨細の生れつき。家つきを冠

ぐるに非ずや。吾等は寧ろ鷗外が會得し難しとて、是の餘りに明瞭なる事實の說明を吾等に求めたるを恨みとなす。

シレーゲルガ所謂勢力（クラフト）とは主觀の側に於て美術を形成する所の能力の義にして內容（インハレ）とは客觀の側にありて是能力によりて形成せられて美術となる所の實質の義なり。是れやがて吾等が嘗て形成と實質と言ひしものと同じ、是亦注意すべき也。

吾等が鷗外に答ふるところ概ね右の如し。多謝す、吾等は是によりて審美學者なる鷗外がハルトマン以外に於ける歷史的知識の一斑を窺ふを得たりと雖も鷗外が爲に計るに斯の如き疑問を發する代りにシェリング、フヒテの前にあるのシルレルが如何にして二氏の說を調和し得しかと云ふが如き問を起すの寧ろ無邪氣なるには如かざりし。さても惜しや。

若し夫れフヒテ、シレーゲルか說として鷗外の揭ぐる所のものに就ては言ひ聞こえたきこと山々あれども、こゝは審美學の講壇にも非れば、只吾等に屬する他の批難を辨ずるに止めつ。鷗外もし敎る所あるを得ば乞ふ聽かむ。

多の階段を精進せざるべからず。所謂 Das Interessante は是階段の一にして、曾て失ひし Das Schöne の理想境に達する一の準備に外ならず。Das Schöne (美)は即ち Das Objective (客觀)なり。內容と勢力との均衡なり。內容ありて勢力無からむか、若くは勢力ありて內容無からむか、是れ共に一面の偏輕若くは偏重を表はして、共に非美若くは醜なるを免かれず。所謂 Das Interessante は是の如き狀態を示すものなり。シレーゲルが是説を鷗外の好きなる表もて示せば左の如し。

內容及勢力 } 美 Das Schöne

內容(無勢力)
勢力(無內容) } D. Interessante.

苟も審美學史を解するものは、誰かシレーゲルが是説の中に美の理想を以て心力の調和的遊動に歸するシルレルが根本的思想を認めざるものぞ。シルレルが所謂る心力の調和的遊動とは何にぞ。理論的形式と實際的實質の二個の動機の均衡に非ずや。是れやがて希臘の昔にありて今は無く、却て是れ今の美術の理想なりと云ふシレーゲルが客觀 (Das Objective) 若くは美 (Das Schöne) に非ずして何ぞや。是れ吾等が一個の審美學者として言說するには歷史上餘りに明瞭なるに過

近史家の齊しく唱ふる所なり。第三者とは誰ぞや、シルレル是なり。げにやフヒテが審美説は所詮シルレルが審美説を自己の哲學に包容したるものに外ならず。シレーゲルが『希臘詩歌の研究』はた同じくシルレルが審美論に基けるものにしてダンツェルが言ひし如く、其文躰さへも似通へり。審美史家の或者が、シルレルの繼續者の中にシレーゲルを數ふるものあるは、かゝる因緣あればならむ。

是れ二者が外部の關係に就て言へるものなるが、更に其學説の内容に就て一瞥せば、二者の間に更に親密の連絡あるを見出さむ。審美學史に精しき鷗外の獨り是を訝りしぞかへすゝも訝かしきや。

『希臘詩歌の研究』の中にシレーゲルが口を極めて近代の美術、殊に詩歌を難ぜしは、果して何が爲なりしか。彼が希臘時代の理想的完美を Das Schöne（美）となせるに對し、近代美術を Das Interessante（興）（是譯語當らず、暫く記して大方の教をまつ）となしたるは、果して如何なる意味なりしかを鷗外は知れりや。古代圓滿の美、一度び地に墜ちて、美術は私心の興と爲り了りてより、茲に無限の實在に對する向上的渴仰は初まりぬ。是に於てか、文は野の終れる邊りに初まりて、更に新に客觀的完美の域に到るまで幾

も暗記すべき所のものを以て、却て吾等の教を求む、是亦甚だ迂なりと謂ふべし。

其二

吾等は又シルレル、シレーゲルの一輩がStoff=Form(材料=形式)の方式の下に美術の思想を置きしは、やがてフヒテが主觀理想主義とシェリングが客觀理想主義との兩端の調和を企てたるものと見るを得べきを注意せり。鷗外は是を評して曰く。

> 藝術にては、形もて質を滅すと云ひしシルレルが頗るめでたき説と、藝術にては人空き形となり、自然のみにては人野にありて愛を失ふと云ひしフリイドリヒ、シレーゲルが頗る虚誕なる説とを一樣に見て、シルレルもシレーゲルもフヒテとシエリングとの極端なる説を調和せるものぞといへるは、わが會得し難き所なり。

と。あはれ、意外の批評を聞くものかな。希くは審美學者としての鷗外に對する吾等の尊敬をして却て吾等を誤らしむる勿れ。さるにても獨乙の美學史に精通する一學者の言として、あはれ意外の批難を聞くものかな。

シレーゲル(云ふまでも無くフリードリヒ)がフヒテの流を汲めりとは尋常の見にして、まことは是二人は共に其の審美説に於て第三者に負ふところありし、觀

すと謂ふを得べきに非ずや。換言すれば精靈の中に自然を見るの吾等は同時に自然の中に精靈を見得べきに非ずや。彼が自然界に與へたる審美的意義も亦寧ろ甚だ明瞭なるに過ぐ。

自然界を以て精靈の發現となしたるが故に、シェリングを以て自然の摸倣を推奬したるものとなさば、是れ亦未だシェリングを解せざる者なり。彼が理想派たるを失はざる所以の一は、實に是點に於て所謂るVorbilder（理想）の思想を輸入したるに依る。歷史的眼孔を以て絕對の表現を觀じたる彼は自然界を以て完全（ズスツオルコムメ子）と不完全、美と不美との混合となしたり。是意味に於ては事實に於て存在する自然界（"Die in der That seiende Natur"）は畢竟非實在（"Nichtseiende"）のみ。然らば則ち完全なる美術の造り出したるものは自然の美を判斷すべき標準なることも、亦甚だ明瞭なるに過ぐるに非ずや。

吾等はシェリングが自然を以て美術を規束すべしと說きたりとは言はざりき。曩外が美術を以て自然よりも完美なりとせるシェリングが說をとりて吾等を難ぜむとするは、甚だ疎忽なりと謂ふべし。獨逸美學の一斑を窺ひたらむものゝ何人

也。さるにてもフヒテの主觀理想主義を擧げて寫意派に比ぶるを妥當なりとせる鷗外は、寫意派を以て一の哲學主義となすにや。覺束なや。

鷗外若し予の說を評せむとならば、乞ふ予の說ける所を評せよ。シェリングが自然界に重きを措きしは、彼が哲學たる客觀的理想主義に本く。絕對の中に於ける主客物我の合一は、一步を轉ずれば直に彼が套語とも見るべき『自然界の無意識的產物は人間の意識的製作に似たり』てふ命題を得べきは、何人も見るを過まらざる所、彼がフヒテ一輩の主觀的理想主義に對して客觀的理想派と稱せらるゝは、やがて彼が自然界に與へたる如是意義あるが爲に非ずや。シェリングが美術を以て形躰の中に物我を包容し主客兩界の完全なる調和となし、以て相對の中に現はれたる絕對、有限の中に表はれたる無限となしたるは、美學史の一斑を解するものゝ業に已に熟知する所、美學に篤き鷗外の言として寧ろ甚だ明瞭なるに過ぐ。而かも是故に彼が精靈の發現を自然界に拒否したるを非とするの理由を見出し得べしとするものあらば、其人は未だシェリングが哲學を了解せざるなり、若し審美觀に於て、我の中に非我(物)を合一したりとせば同一の理を以て飜て非我の中に我を合一

となし、此を審美見となしたればなり。記者がシェリングの抽象理想主義を擧げて寫生派に比べしは、或は妥ならざるべし。シェリングは偶然に美なるのみなる自然は、藝術に法則を與へむこと思も寄らず。是に反して完全なる藝術の造り出したるものは、自然の美を判斷すべき規則及標準なりと云ひしことあればなり。

是れ甚だ不適當なる批難と謂はざるべからず。總じて他の說を評せむは、他の言ひし所、もしくは其言ひし所より必然に歸納、又は演繹せらるべき結果に就て論ぜざるべからず。吾等はフキヒテが自然界を輕視したるの一點を捉へて、今の所謂る寫意派の口吻に似たるものあるを注意したることあるも、未だ曾て彼が『主觀理想主義を擧げて』是を寫意派に等しと言ひしことあらず。シェリングが自然界に對して前人未だ曾て與へざりし所の審美的價値を附與せしの點に於て、如何に今の所謂る寫生派の所說に類するかを言ひしことあれども、未だ曾て彼が『客觀理想主義（若くは抽象理想主義）を擧げて』寫生派に等しとせしことあらず。甲の人砂糖の白きを以て鹽の白きに比せし時、この人是を駁し、砂糖を擧げて鹽に等しとするは不可なりと言はば、是れ寧ろ失笑すべきに非ずや。蹋外は人を誣ひ且笑はするもの

鷗外に答ふ

其一

吾等の鷗外の審美學に篤きを耳にせるや久し。而かも氏がハルトマンの祖述の外に斯學の歴史に關する意見を窺ふを得たるは、實に今回を以て始めとなす。

吾等去る四月上旬の本誌に於て、今の繪畫界に於ける寫生と寫意の是非を一言せしに際し、其の爭の獨逸美學の歴史に似たるものあるを注意して以爲らく、今の寫意派の口吻は、さながらフキヒテが自然を斥けて無味乾燥なる感覺界に過ぎずとなし、全然精靈の發現を拒否したるにも比ぶべく、又シェリングが是に反して自然界を以て可感的形躰に於ける精靈の直接なる發現を爲したるは如何に、我が所謂る寫生派の所說に似たるものあるかと。

鷗外は吾等が是言を批評して曰へらく。

記者がフキヒテの主觀理想主義を擧げて寫意派に比べしは、或は當りたるべし。プロヒテは自然に限劃の結果たる側と、自由なる理想的行爲の結果たる側とを分ち、彼を尋常見

眞贋を辨じ、流派を別ち、歷史を索むることは、是を鑑定家に一任せよ。其審美的價値を討尋し、所謂る本躰研究を爲すことは是を審美的批評家に待たさるべからず。前者は過去美術の史家たるを得べきも、理想の標準を呈示して將來の進路に光明を抛つことは是を後者に待たさるべからず。鑑定家と批評家は所詮相隔離すべからざる者也。

吾邦の美術界には彼ありて此れ無し。日本美術は宛然一個の考古學の觀あり。可なる所以を知らざる也。

（二十九年六月）

故に大なる感想を寄せむと欲せば勢ひ個人的ならざるを得ず勢ひ餘情に依頼せざるを得ず。而かも如是餘情は尤も特殊なる境地に於ける特殊なる感想によらざるを得ず。故に勢ひ平等遍通なるを得ず。

然れども俳句は遂に符號たらざるべからず。餘情なき俳句は詩の尤も小なるものなればなり。

（二十九年五月）

俳句

吾等を以て漫に俳句を擯斥するものと爲す勿れ。吾等は俳句の價値を絶無なりとするものに非ず。むしろ今日の俳家が唱ひ得る所の詩句としては、無上の價値あるものなることを認識せむと欲す。只吾等は、今日幾多の大俳家諸君の思惟するが如く、しかく尊重すべきものに非ざることを一言せば則ち足りなむのみ。

世上の俳家、俳論家乞ふ安心せよ。

（二十八年七月）

鑑定家と批評家

今や國民は彼等の詩人を有せず、而かも彼等は歌はざるべからず。是を以て當顏物に隨て詩腸を皷吹す。文學的嗜好の旦暮常無きものは即ち是が爲なり。

漢詩家、歌人は新躰詩の勃興によりて自ら淘汰刷新せざるべからず。若し能はずむば自滅あるのみ。新躰詩家は俳句の隆盛に鑑みて、更に自家を改革せざるべからず。俳句の流行は所詮新躰詩の朦朧、迂濶、單調、軟弱に對する一反動に過ぎざるのみ。彼等自ら顧みて往時彼等が成功したる所以の道に向て、更に一革新を施すこと無くんば彼等亦自滅に終らんのみ。今の新躰詩家果して是覺悟ある乎。

漢詩和歌の新躰詩に移りたるは喜ぶべし。是れ日本文學が少くとも健全なる發達の途上に一歩を轉じたるものなり。新躰詩の俳句に轉じたるは喜ぶべきに非ず。俳句の狂詩に行きたるは更に大に喜ぶべからず。俳句と狂詩とは一は我文學の縮少を表はし一は我嗜好の墮落を意味す。

（二十九年五月）

俳句と符號

俳句は一の符號なり。特別の境地に於ける特殊の感想に對するシムボルなり。

是れ吾等がたけくらべを讀みて感ずる所なり。敢て批評とは謂はじ。

（二十九年五月）

俳句及狂詩

漢詩和歌は新躰詩となり、新躰詩漸く衰へて俳句漸く榮へ、俳句漸く廢れて今は方に狂詩の全盛時代ならむとす。

新躰詩の流行は漢詩和歌の恥辱なり。俳句の流行は漢詩和歌新躰詩の恥辱なり。然らば則ち狂詩の流行は果して何物の恥辱なるべきや。

詩は詩人の詩に非ずして國民の詩なり。詩人にして國民の感情と希望とを發揚して、能く彼等に安慰と快樂とを與ふるに非ずんば、國民は國民的詩人として彼等を奉戴するを肯ぜざるべし。國民的詩人に非ざるの詩人は失敗の詩人なり。流行の詩人なり。一時の詩人なり。短命の詩人なり。

所謂る漢詩家、歌人、新躰詩家、俳家、狂詩家は所詮短命の詩人に非ずや。彼は隨時序を追ひ國民の試驗を經由して首尾能く落第せるものに非ずや。

資材を驅りて、是幽妙の人心を曲くせるは、たしかに女史が『十三夜』以上の作と云べし。正太も、三五郎も、信如も、各自の性格に於て洵によく其一致を保てども、かへす〳〵も面白きは美登利なり。吾等つら〳〵是作を讀みしとき、人情の自らなる美はしさ、人生の本末の果敢なさ〳〵の思ひに堪えざりき。見よや、女子の勢力、と言はぬばかりの春秋知らぬ五丁町の賑ひに、美登利の眼に女郎といふもの、さのみ賤しき勤めとも思はねば、姉の全盛を父母への孝養と羨やましく、お職を通す姉が身の憂いのつらひの數も知らねば、廓のことよろづ面白く聞なさるゝ年はやう〳〵數への十四。習は性を移す世に、是末如何の運命に到るべき。玉の如く清き少女の初戀は、あはれや露の如く脆く消えて、恐ろしき淺ましき前途の蛇の口を開いて待ち居るとも知らで、あへなき夢を忍ぶらむ美登利の身の哀れさよ。生れにはなど變りなき人の種。十三四の友どちはげに無邪氣なる天人の群れとも見るべくも、年經ち、心長けては、濁り江の底なき水に交りて、本の雫の珠の影だにあらず。たけくらべ。あはれ床しく忍ばるゝ吾れ人の昔かな。一葉女史が是篇はやがて吾等が懺悔錄として見るべきに非ざるか。

と堺も無く遊びし美登利。お俠の本性は瀧つ瀬の流れに似て、心の底に停るもの無しと見えしはあだなれや。扨ても是の道丈は思ひの外の美登利。浮名を唱はる迄にも無き人のさりとては無情き仕打、會へば背き、言へば答へぬ、意地惡は、友達と思はずば口を利くも要らぬ事と、少し疳にさはりて摺れ違ふても物言はぬ中はホンの表面のいさゝ川、底の流は人知れず湧き立つまでの胸の思を忘るゝとには無きふた月、三月、秋の夜雨の檐下にしほらしき人の後影見るとはなしに、何時までも何時までも見送りし心の中はやがて胸倉捉てほざき散さむずお俠の本性もあはれや。今は紅入の友禪に赤き心を見する可憐の少女、是より後は中よき友とも遊ばず、衣ひきかつぎて一間に籠る古風の振舞生れ變りたらむ樣の美登利は有りし意地を其まゝ封じこめて、こゝしばらくの怪しの態を誰が何時言告ぐるでも無く、格子門の外にかゝる水仙の作り花は、龍華寺の信如がなにがしの學林に袖の色變へぬべき當日のしるしなりとは、あはれ〳〵。たけくらべ、あへなく過ぎし昔の夢を思ひやるだにいと床しや。

一葉女史いかなる妙手あれば、是間の情理をかくまでに穿たれしや。是平淡の

まことや「たけくらべ」の一篇はたしかに女史が傑作中の一なるべき也。

吾等の是編を推す所以の一は、其女主人公の性格の洵に美はしく描かれたるにあり。姉なる人は憂き川竹の賤き勤め、身賣りの當時、めきゝに來りし樓の主が誘ひにまかせ、養女にては素より、親戚にては猶更なき身の、あわれ無垢なる少女の生活を穢土にくらし過ごすことの何にとも心注かず、田舎より出てし初め、藤色絞りの半襟を袷にかけ着て歩るきしを、田舎もの〳〵と笑はれしを口惜しがりて、三日三夜泣きつゞけし美登利。男の弱き肩持ちて、十四五人の喧嘩相手を、此處は私が遊び處、お前がたに指てもさゝしはせぬ、と物の見事にはねつけし美登利。額にむさきもの投げつけられしくやしさに、親てさへ額に手はあげぬものを、長吉づれが草履の泥を額に塗られては踏まれたも同じことゝ好きな學校まで不機嫌に休みし美登利。我は女とても敵ひがたき弱味をば付目にして、祭りの夜の卑怯の處置を憤り、姉の全盛を笠に着て、表一町の意地敵に楯つき、大黒屋の美登利、紙一枚のお世話にも預らぬものを、あのやうに乞食呼はりして貰ふ恩は無しと、我儘の本性侮られしが口惜しさに、石筆を折り、墨を捨て、書物も十露盤も要らぬものに、中よき友

吾審美學者が先づ斯學の邦文歷史を公にせられむことを希望す。

美學史の研究は、美術史の研究に伴ふを必とす。美術を成す所以の感情は美學を成す所以の知力と共に、兩々相待て、初めて人類の審美的意識の全活動を成就すればなり。故に吾等は敎ふるもの、學ぶもの、共に『審美的意識の歷史』てふ名義の下に、美術史と美學史との兩者を包括せむことを望む。

（二十九年五月）

一葉女史の『たけくらべ』を讀みて

本郷臺を指ヶ谷かけて下りける時、丸山新町と云へるを通りたることありしが、一葉女史がかゝる町の中に住まんとは、告ぐる人三たりありて吾等辛やく首肯きぬ。やがて『濁り江』を讀み、『十三夜』を讀み、『わかれみち』を讀みもてゆく中に、先の『丸山新町』を思ひ出して、一葉女史をたゞ人ならず驚きぬ。是時『めざまし草』の鷗外となにかし等との間に、詩人と閥歷の爭ありしが、吾等は耳をば傾けざりき。

一葉女史の非凡なることをわれ等『たけくらべ』を讀みてます〳〵確めぬ。丸山新町に住むことに於て非凡なることも、又小說家として其手腕の非凡なることも。

ハッヘ等の歷史的著述あれども、其觀察或る特殊の時代、若くは邦國に限れるものにして、審美學の全躰の發達を盡せるものに非ず。就中ハルトマンの如きは、カントを以て獨逸美學の十分なる發足點となし、カント以前の歷史を全然蔑視拋却したるは、吾等の同意し難きところ也。

右の歷史の中に於て、初學の讀者の爲に吾等の意ふ所を陳べむに、ナイトのは餘りに簡截にして、未だ以て憑據するに足らず。ボサンケのは、其書躰凡て批評的にして、事實の敘述甚だ少きを以て、哲學史に精通するものに非ざれば、容易に解し難し。シャスレルのも亦批評的にして、ヘーゲル流の演繹法により純理學的方式の中に歷史的事實を箝束したるの弊ありと雖も、其の含蓄する所の材料の豐富なるは、是書の長所なるべし。チンメルマンのは審美學史中、最古のものなれども、敘述明晰其一家の所執にかゝるもの亦割合に少し。吾等は是を以て現存の全き美學史中最良なるものゝ一なりと思惟す。

是等の書典を飜譯するも可なり、又自家獨立の研究によりて新に審美學史を編述するも可なり。吾等は兎にかく斯學に關する知識を弘通するの第一步とし

美學史及び美術史

審美學者の研究何を以てか先とすべき。吾等は他の諸學に於けるが如く、其歷史より入るを以て當然なりと思惟す。ハルトマンを講ずるも可なり、ギユーヨーを說くも不可なし。而かも彼等はハルトマンのハルトマンに非ずして、歷史のハルトマンなるを知らざるべからず。何となれば個人としてのハルトマンは今世紀の人なれども、學者としてのハルトマンは遠く希臘の古代に產聲を擧げたればなり。

如何にして審美學史を研究すべき。言ふまでも無く西文の著述に依らざるべからず。而かもバウムガルテンこのかた、斯學の一科を爲せしより僅々百年の歲月を經由せしに過ぎざるを以て、其歷史の西人の手に成れるものも亦甚だ少し。吾等の知れる所にては、今より五十年前の著述、チンメルマンの美學史を初めとして、斯學の全系を評叙したるものは、シャスレルガ『審美學の批評的歷史』、ボサンケの『審美學史』、ナイトの『審美學史綱要』等あるのみ。其他、サリー、ハルトマン、クザン、ロ

信念

の書家に乏しきこと已に久しきかな。明治美術會に列する處の辨天は媚態宛然一個の娼婦なり。吾等は少女の純潔をすら書くに能く成功したるものを多く見ず。彼等の書く少女は老婆の如し。是れ果して何事を意味するものなりや。

書題

に就て吾等の言はむと欲するところ一にして足らず。今日の書家、殊に日本書家は餘りに形式になづむ。此處に山あれば彼處に川あり、一石、一樹、一亭、一人、宛として其式を具ふ。是れむしろ笑ふべきに非ずや。

嘗てバルソン氏の竹叢圖を見る。滿幅是れ皆孟宗の巨竿、深藪杳として微に日影を點綴するのみ。落葉半ば黒く、半ば黄に、前面を埋むるが中に、一條の趾痕あり。人の躊躇して行きたるが如し。只是のみ。如是書題は本邦書家の夢にだも想ひ至らざる所、偶々遠遊の外客によりて是の幽趣を傳へらる。寧ろ恥づべきにあらずや。

（二十九年四月）

餘情とは所詮斯の如きものには非るか。

大なる美術は觀るものを自己以外の異境に導かざるべからず。古代希臘の美術家の中には其所作によりて殆ど一の宗教を作りたるものあり。是れ夫の己れの勞を省きて他の想像に委ぬるが如き倏々たる小技に孰れぞや。

吾等は必ずしも全く餘情を排するものに非ざれども、是を過重するの非を爰に一言するのみ。

怪奇

所謂る毛を謹みて而して貌を失するは不可なり。單に其趣を形跡に求めよとは吾等素より之を說かず。論畫以形似、見與兒童隣と云へりし東坡が詩句は慥に一面の眞理を顯はせること吾等亦之を領知せり。然れども世上往々怪奇の畫を作るものあり、人畜花卉の常型を變じ、以て我れ能く人の敢て爲し得ざる所の新機軸を出だせりとなす。異を好み、奇を愛するの人、群焉之に雷同し、遂に其狂怪を成就するに至ては吾等言の加ふべきを知らず。常形を離れて天下豈理想の加ふべきものあらむや。畫家須く心すべき也。

在り、心痛み、色蒼み、而かも忠實やかにと。）

吾等の爰に說くところ、素より一面の理を擧げたるのみ。今日の新體詩家よ、虛心平氣具に吾等の意を察し、幸に以て獻芹の微意を取れ。吾れ豈諸子を律するにパーンスパイネを以てせむことを希ふものならむや。

（二十九年四月）

畫談一束

餘情

本邦の繪畫には餘情を尙ぶの風甚だ熾なり。世人其利を見て其弊を見ず。吾等竊に之を憂ふ。

大なる美術は觀者を支配せざるべからず、觀者より支配せらるべからず。所謂餘情とは美術を擧げて觀者の支配に一任するものに非ずや。

人は自己より大なるものを作爲すること能はず。其筆を省き、其色を毀す、故に婉微模稜を裝ひて、觀るものゝ想像を催起するは、觀者をして美術家たらしむるものなり。其効果大なるが如くにして而かも極めて卑、極めて小ならずむばあらず。

Those records dear of transports past
Thy image at our last embrace,
Ah! little thought we' twas our last.

(那の神聖なる時を何時かは忘れ得べき、戀しき別れのひと日を過さむが爲に、アイルランドの綴れる邊りに吾等の會ひ見し、那のゆかしき森影を何時かは忘れ得べき。限り無き年は立つとも、過ぎにし喜びの樂しき記憶は永く消ゆる事なかるべし。吾等の最後に抱き合ひし時の御身の面影、あゝそれが吾等の最後なりとは思ひかけざりき。)

蘇國の田舍詩人が依て以て英文學の歷史に不朽の名を傳へ得る所の一は、實に斯の如きものにてありき。ハイネは獨逸の大抒情詩家なり、然れども其作の多くは實に左の如きものにてあるなり。

Schöne, helle, goldne Sterne!
Grüsst die Liebste in der Ferne,
Sagt, ass ich noch immer sei
Herzekrank und bleich und treu.

(美はしき、冴え輝ける、金色の星よ。遠かなる我戀人に言告げよ。吾は尙當に依りて

是れシルレルが『理想と生命』と題する詩中の句なり。抒情詩の簡意約言、而かもよく鬼神を動かすもの、古より多く斯の如くにして作られしなり。意匠を經營し、字句を推敲し、索引比擬興去り韻涸れて、尙獨り筆墨を强ゆるもの奈何ぞ這般不用意の妙境に達するを得べき。バーンスは一農夫のみ。吾等は是を彼の傳記家なるニコルに聞く、風邪に罹りて床に臥せし一夜、彼は忽ち寢衣のまゝ庭園に出て、霜夜の風に袂を吹かせ、獨り喟然として天上の列星を眺め居たり。妻なる人、病の重らむことを恐れて强て家に誘ひしに、彼は直に筆と紙とを命じ、涙ながらに一詩を走り書きたり。彼が情歌の最も秀でたるものとして稱せらるゝ To Mary in Heaven は則ち是れなりき。其一段は實に左の如きものにてありき。

That sacred hour can I forget,
Can I forget the hallow'd grove,
Where by the winding Ayr we met,
To live one day of parting love!
Eternity will not efface

是れ其成立の次第を知らざるが故に爾か名くるのみ。世豈自己を外にして神來など云ふものあらむや。

一 今の詩人と稱するもの、想を構ふること餘りに刻なり、情を驅ること餘りに強なり。是を以て他の袂を捉へて強ゐて悲喜するものに似たり。詩は靈魂の談話なり、強て境を作り、務めて情を動かすもの、爭でか恍惚非念の妙境に他を導くことを得べき。夫の故らに其言を迂にし、其語を微にし、僅に聲調の美を求めて得々たるもの、如き、豈共に詩を言ふに足らんや。

今の人の多くは強て詩人たらんとあせるものに非ずや。其の筆にする所の文字、美はしからざるに非ず、辭句工みならざるに非ず、而かも俗氣紛々として人に迫るものあるは何にぞや。吾れに一條の詩契あり、沙翁を云はず、ゲーテを說かず、必すしもバイロンケルチルを云ふを要ねず。試に今の人の爲に之を掲げんかな。

Schlank und leicht, wie aus dem Nichts gesprungen,
Steht das Bild vor dem entzückten Blick.
(曩々として輕やかに、さながら無より躍り出でたらんが如く、像は迷はされたる眼の前に立つ)

るものなり。羅馬、巴里、維納、倫敦の美術館に藏むるところ、殊に君の精緻なる觀察を要す。君の夫人楠緒子、才色秀絶『暮ゆく秋』の一篇、夙に文壇に喧傳す。吾等は君の幸福なる前途を瞻望して、我哲學及び文學の爲に幸に自重せられんことを望むや切也。カリエルは曾てミュンヘン大學の敎授たり、君亦思ふに茲に遊ばむ。而かもミュンヘンの地、氣候慘烈、恐くは君の健康に適せじ、吾人君の爲に竊に之を憂ふ。勉旃哉。

（二十九年四月）

今日の新體詩家を警醒す

シェレーは生れながらの詩人にてありき。彼は謂へらく、詩を作るてふ語は吾れ人の言ひ得べき所にあらずと。今にして想へば洵に陳腐の言草なれども、人若し今日の新躰詩家の爲に言を求むれば、吾等は先づシェレーが是語を以て彼等が座右に呈せんかな。

詩は奇蹟に非ず、瓢より出なりと云はるゝ馬の如きものにはあらず。詩人は所詮自己を現ずる者なり。所謂る神來と稱するもの、妙機一閃人の肺腑を貫く。唯

今日の邦人が以て四海に誇示すべしとなす所の本邦古代の美術が、其存在を負ふ所のものゝ果して何物なるかを吾等は爰に問はず。而かも其發達變遷に對して、歷史的敘述、はた批評を試みたるもの、古來今に至るまで未だ曾て是れ有らざる也。美術國たる日本吾れ是を了せりとせむ。而かも吾等は這般の事實に向て大に恨無きこと能はず。

まことや創作の時代は必ずしも辨明の時代に非ず、而れども民族の資性は一面の事物にのみ發達すべきにあらず。美をめづるの心は、やがて美を辨ふるの心なり。是を以て創作の後には回顧あり、回顧の後には批評あり。之を希臘に徵せよ、羅馬に徵せよ、中今古に於ける伊太利、獨逸、佛蘭西に徵せよ、あはれ一千五百年にして我邦未だ創作の時代を離れずと云ふか。それ然り、豈夫れ然らむや。

大塚君、今や美學專攻の爲に歐洲に游ぶ。欽羨の情何ぞ堪へむ。而かも君は斯の如き美術國に於ける斯の如き時代に遭遇せることを記して、君の責任の重且大なるものあることに想ひ至らざるべからず。君はまさしく我國の美術に審美的解釋を與ふるの責任あるものなり。東西美術に對して比較研究を爲すの責任あ

に横濱を解纜せられたり。洵に斯學の爲に祝すべきことにこそ。

我邦人は謂ふ我國は美術國なりと。洵に然らむ、吾等も亦然らむことを望む。されども斯言を作すものゝ多くは、西洋人の然か云ふを以て然りと信ぜるものには非るか。我國の美術國なること吾れ之を了せりとなさむ。而かも我國の美術は何を以て全世界に誇るべしとなすか。繪畫彫刻その他諸般の工藝美術は、一國の特質を具へて他邦民族の企て及ぶべからざるものゝ是れあることは、吾れ是を了せりとなさむ。而かも是等の美術の如何なる點が如何に萬邦に卓絶せりとなすか。西洋には多くの美術史家あり。ルュプケや、ミュルレルや、如何に我國の美術を品隲せるかを見よ。彼等は我國の所謂る賞鑑家が知れる程には、我美術を知らざるならむ、而かも其の云ふ所の如何に我邦人の所信と相戻れるの甚しきや。吁我邦人は我國の中にニュー、ギニアを見むことを預望したる無識なる外人が一片の好奇心に依頼して、其美術國たる名譽を世界に維持せむとするか。

美術國たる日本は我れ是を了せりとせむ。而かも一部賞鑑家の云爲を外にして、我美術に向て精透なる審美的評論を試みたるもの、未だ曾て是れあらざるなり。

界に觀るべからざる異形の怪物を描けとの謂にあらず。美術家は理想的ならんが爲には當に自然の現實に依傍して已むべきに非ず更に一歩を進めて自然其物よりも更に多く自然的ならざるべからず。斯の如くにして成りたる美術の中に吾人は尤も標準的事物を觀ずるを得べし。標準的事物の中に於てに非ざれば理想は遂に見るを得べからず。是點に於ては理想と自然とは慥に其致を一にすと謂ふべし。故に吾等は謂はむと欲す、理想は非自然の中に現はれ得べきも背自然の中には現はれ得べからずと。

世の所謂る寫生派なるものゝ徒に怪、支離を描いて得々たるもの、須らく三省せんことを要す。

（二十九年四月）

大塚文學士を送る

哲學の一科文科大學に設けられてより、年を經ること既に十數に及べども、審美學を專ら攻むる學士とては過去にありては僅に大塚保治君一人あるのみ。このたび君は文部省の命によりて、該學專攻の爲め、歐洲留學を命ぜられ、去月廿七日已

なり。是故に古希臘の塑像は、おしなべて個人的に非ず、現實的に非ず、はた又何等の特殊性をも具へず、殆ど平等遍通の躰相を有し、洵に彼等の間に於ける種族的理想（ガツツングスイデア）として見るべきものなりき。然りフヰデアス、ミュロン、プラキシテレース等の塑像は實に意想的美術の最も純粋なるものにてありき。

而して彼等が美術は如何にしてしかく理想的なるを得しか。是れ畸形を描きしが爲に非ず、又支離を寫せしが爲にもあらず、自家特殊の妄想に依傍して放埒なる意匠を構へしが爲にもあらず。自然が眞實なるよりも更に多く眞實なりしが爲のみ、換言すれば自然其物よりも尚遙に自然的なりしが爲のみ。自然界にありては質は形よりも勝り、想は物よりも劣れり。假に獨逸の對比美學（エステチク、デス、ゲーゲンザツツエス）が說きけむ語に依れば、平等なる絶對は其物質的一半の過重なる有樣を是自然界に現はせるなり。美術の要は精神と物質との二者をして偏輕なく、偏重なく、渾然融和せしむるにあり。夫の所謂る寫生派は自然界の摸倣を以て其本領となすもの、爭でか美術の眞諦を得たりと謂ふを得んや。吾等は寫生派に向て理想的なれと勸むるを躊躇せざるべし。然れども理想的なれと謂ふは、其形を畸にし、其躰を支にし、現實世

極めて是畸形書を激賞せしものありき。

獨逸の審美學史に通ぜる讀者は、夙に注意せられしならむ、フヒテが自然を却けて無味乾燥なる感覺界に過ぎずとなし、全然精靈の發現を拒否したるは、如何に吾が所謂る寫意派の口吻に似たるものあるか。又シェリングが之に反して自然界を以て可感的形躰に於ける精靈の直接なる發現 (Die unmittelbare Erscheinung des Geistes im Sinnlichen) と爲したるは、如何に吾が所謂る寫生派の所說に似たるものあるか。而かも是二者の極端說を補充調和せむが爲にシュレーゲル、シルレルは如何にGestalt=Formの方式の上に美術を建立したりしか。惟ふに今日の我が美術界は所謂這般の歷史を反復しつゝあるものに非ざるか。古希臘の塑像は、千萬年を通じて人類の偉大なる製作物なり、フヰデアスがツォイス像は實に一種の宗教を作り、ヘラス半島の民族をして、先を爭て巡禮趨拜せしめしこと、猶中世紀に於ける基督敎國民のパレスチナに於けるが如かりき。是れ果して何が爲なりしか。他なし、希臘民族は彼等の美術に於て、彼等の祖先が、バクトリアより齎し來り、ヘラス半島の優雅なる天地に於て、幾百千年の間醞釀夢想し來りたる、彼等が理想的人物を認めたれば

んには、如何ばかりめてたからんと想はる。後段寢所の場も妙ならざるに非れども、同樣の仕打を重復するの嫌あり。長良堤は悲劇の最後にあらずして抒情詩の結末なり。六段十四場の作業は何等の果報を止めずして爰に漠然霧消したるの觀なきに非れども、荊棘紛縈の裡を擺ひ去れば、一路悠々として春水の如く、暮鐘遠客を送り、羈情旅愁俄に至りて人の腸を斷つが如し。

（六）著者の技倆及び是脚本は世已に定評あり爰には只思ひつきし二三を記しつ。素より著者の大名を輕重し得るものにはあらず。

（二十九年四月）

寫生と寫意、意想と畸形

今の寫生の是非を說き、寫意の可否を論ずるもの、多くは一面に偏す。寫生に緣りて寫意を達する、即ち是れ美術の第一義なるを知らざるものゝ如し。

或は以爲へらく、意想は全形に於て見るべからずと。於是乎、其形を畸にし、其躰を支にし寫意を以て自ら高しとするもの漸く多からむとす。橋本雅邦氏が龍虎圖の如き其の最も著しき者なり。而して世の所謂鑑賞家なるものゝ中には口を

されど場として面白き所も少からず。饗庭の局部屋の場は鏡山の長局にも較ぶべく、豐國神社の場は蜻蛉に手紙を丸呑にしたる色消しの無理もあれど面白く、黒書院の再評議に沖の井擬きの木村の辨舌も妙なり。第一段の茶屋と第三段の城内溜の間は、忠臣藏の三段目の俤ありて而かも一層脫胎の工を見る。さりながら吾も人も尤も感服に堪へざるは、第二段の二場にあるべし。吉野山櫻狩の一場は淀君が小歴史とも見るべく、歡樂全盛の境より幽黯悲慘の地に轉じ、畜生關白が怨靈を以て之を結びたるは、是の女丈夫が良心の苛責を髣髴して餘情掬すべし。切て落す黒幕に『扨ては今のは夢であつたよな』の舊套を擺脫し、更に茲に夢現境の淀君を拈出したるは何等の妙ぞ。

まだ初夜ながらねぶたげ氣に、火影しよぼつく次の間の、口から耳の入沙汰も、いつか途切れてしん〳〵と、隙間漏る風秋たてり。宵れ惑の腰元どもが、寐耳にびつくり曉き聲、驚り見かへる上段の、御簾にきらり氷の刃、これはと見る間にすつくりと、立現はれし女の影、髮ふりみだし異形の體。

斯の如きは我が在來の舞臺に多く見ざる所にして、凄凉幽寂の氣人に迫る。もし名優梅幸の如き手腕を有し、眞に此役の精神を會得せる俳優をして、是に當らしめ

か。作家の意を謀るに、出來得べくむば、正史に戻らざるを利とすと雖も、文學は遂に歷史に非ず、又歷史の爲にすべきものに非ず。由來獨立自存の地位を保つべきものなるを知らば、美文的著作として容れ得べき範圍內に於て、正史を演義すべきことも合點し居るべきに非ずや。

(五)舞臺の上の『桐一葉』はいかゞあるべき。是れ吾等の最後に考へむと欲する所なり。

是脚本の素舞臺に上ぼせむとて物されたるものなるは無論のこと也。吾等は此點に就て逍遙氏の用意の怠りなきを到る處に認むるものから、而かも尙舞臺上の好脚本として容し難きふしあるを恨みとす。曾て是を經驗ある斯道の作者に聞く、脚本家の最も苦む所は人物の造り難きに非ずして、造りたる人物の動かし難きにありと。是言果して全分の理を盡し得たりや否やは扨措き、人物を動かすことの困難は實際左もあるべきことと思はる。若し吾等をして忌憚なく言はしめば吾が春の家氏も亦是點に於ては尙初心の脚本作者なるべきか。第三段、第五段、第六段等を實際舞臺上に演じたらむには大半は、到底、ダレ場たるを免れざるへし。

る身と人も自らも許しながら、一片の誓文に前後を顧みず、情僞を察せず、己れ一人を潔うせむとは先の遠慮に似もやらず、突飛無謀の觀あるは如何に。木村清藏が注進に醺然として、

あゝしなければ殘念や、かくまで望の破るゝとは

と言ひつゝ、『無念あふるゝ兩眼に、かなたを睨みて慨然たり』と言ふに至りては、吾等遂に其何の意たるを解する能はず。是主人公の性格は啻に悲劇的ならざるのみならず、又其一致をさへ失ひたり。かへすがへすも惜むべき限りにこそ。主人公たる且元の性格にして既に斯の如し、是脚本の全躰の感興の割合に膚淺なるも素より自らなる勢ならむのみ。洵や、潺々の流れは紆餘曲折の趣に於て其のすがたの愛づべきもの無きに非ざれども、落るも瀧とならず、溜にも海とならず、銀河天より落ちて百雷地に震ひ人をして心悚れ氣喪はしむる底の壯觀は、いかでか見るを得べき。大なる悲劇は大なる破裂を要し、大なる破裂は大なるクライマックスを要す。大なる人物に非ざるよりは何物か是に堪へん。惟ふに逍遙とも言はるゝものが、如何でか這般の理を辨へざらんや。蓋し是れ氏が正史に忠なるの致す所ならむ

言ひけむ如く、まこと因循姑息の男なり。逆境に處して飽迄志を貫かむず大勇猛心あるに非ず、恩に感じ義に勇み死を以て節を全うする忠烈の士にも非ず、既往の跡に鑑み、未然の事を察し、機に先ぢて算を制する智謀の人にもあらず、いはゞ律義一遍の老武士に過ぎず。其の爲す所は短視尺歩機に臨て常に謀を誤り、其の謀る所は薀醸宿慮に過ぎて、多く事に益無し。まことや大事を辨ずるものは獨り智略を以て勝るに非ず、蓋し亦其意氣の倫を絶えたるものある也。況して且元の如き一片愚直の士、いかでか斯かる傾危の際に處して駭目驚心の悲劇を演出するを得べき。石川伊豆が難詰に答へたる申譯の如何に見苦しく、而かも是れや此主人公が實情ならむとは驚くべきも亦可惜らしきことならずや。片桐邸の場に『憂々たる算珠の響』と共に且元を見はしたるは、主人公が細心遠慮を描かむとせる著者の用意ならめど、『大御所がげに怖ろしき深謀遠慮』の裏をゆく魂膽は遂に何處にありや。朝三暮四の姑息の苦計をきゝて、『百年の後』を慮れる智謀の忠臣と稱えたるに木村長門、さては『かゝる大忠臣を見ちがへし』とて『どんぐり眼進上』したる石川伊豆の顔までが、さりとては餘り利口にも見えぬぞあたらしき。主家の安危を負へ

いひかけて聲くもらせ

市「須彌より重き御遺命夢いさいかも忘れざれども御運の末が情なや、此且元がすることゝ爲すことゝいすかの嘴とくひちがひ、兩家を繋ぐ絆にもと迎へ奉りし千姫君は東西不和の導火となり、毘盧舍那佛の御胸にも、大慈大悲は宿らざるか、お家とこしなへに廉かれと祝ひし文字が元となり、降て沸たる難題は只前門の虎にして後に不慮の豹狼あり、かゝる仕儀となつたること、御運の末といひながら

こらへず馬よりとび下りかなたに向ひ平伏なし

市「これ併しながら、不肖且元愚昧にして先見無く、姑息因循して大事を誤り、空しく關東の罠にかゝり、おほせつけられし御遺命に背き奉るけふの仕合せ、不忠といふ甲斐なしとも、おぼしめさん、それを思へば且元が此腸はちぎるいばかり實ひがたき不臣の罪は、あの世で御わび仕らん、おゆるしなされて下さりませ

(四)主人公且元が性格　吾等想ふに、是脚本が悲劇の形式に於て缺くる所あるは、主ばら主人公たる片桐且元が性格のはなはだ悲劇的ならぬに由れり。こは少しく眼ある讀者の夙に注意したる所なるべきを以て、精しくは爰に贅せざれども、今其大要を擧げむに、そも且元は是脚本に見えたる限にては、長良堤の述懐に自らも

(三)文字の妙。脚本なれば科白に念入れられたるは勿論のことなれども、舊來の脚本に見る如く單調平板に流れず、緩急の變化其自在を極め、言辭の使ひ分け、情緒の移り行きまで、さても見事に物されたり。句調に注意せられたる、殊にめてたし、地の文の中にも六號にては惜しきほどの名文句少からず。例として左に長良堤の塲の一節を拔摘す。

後には何にか一思案寂然として駒立つる長良堤のありあけがた。塒に囀づる小鳥の聲、川霧やう〳〵晴れゆけば、遠樹模糊として幹を分ち、ほの見えわたる賤が屋に、一筋のぼる朝烟、くだかけの聲勇ましく、生氣溢るゝ東の空には似ぬや入るかたの月すさまじき柳蔭、枯葉枝まばらにして風颯々、見る目も昏し遠方に、おぼろ〳〵とあらはるゝ、名におほ阪の四衢八街、悄然としてさびしげに一棟高く聳えしは。

市「すゝあれこそはお天守じやなア。南山不落と祝はせられ、千萬年の後迄もと築かせられし大阪城も放殿下かくれさせたまひて後、まだ程も無きに礎ゆらぎ、諸大名の心はなれ〳〵、取わけ加藤肥州逝去の後は、思慮あるものには堅節なく、義勇を存するもの才略乏しく、阿附同黨して相爭げば、大御所の御方さへ當家を餘所にみそなはし、浮世はなれし御ありさま、唇齒已に亡ぶ、今にも事起らば金城湯池も其甲斐なく」

語を挟みしはよけれども、後文には是愛情に對して何の言ふ所無きを以て、父を思ふて亂心の餘り自刃せりと外見えずなりしこそ惜しき限なれ。吾等潜に察するに著者は劇中の人物を片付けるに餘程の苦心をせられしもから亦餘程の無理をゆかれたるにはあらずや。石川伊豆の死の如きは尤も漠然たるものなり。『我若し今朝心はやり大野の邸に亂入せずは、せめて最後の一ッの望を御邊に遂げさすべかッしものを』と曰へるを、自殺の申譯とは附會牽強の批難を免れまじ。銀之丞の乳母の自殺の如きも、亦頗る無理なるゆき方なり。叶はぬ戀を叶はせむと嚇せし爲、又正榮尼より銀之丞を御殿につれ出せしと誤られし爲め、それで自害するとは餘り飽氣なき沙汰ならずや。流石に著者もかくのみにては心細くや思ひけむ、乳母をして『先殿さまのお仁情で御手討になるのを助かり、去年ゆかしやれた夫につれそふとが出來なんだなら、とうに死んでゐる此のからだ』と述懐せしめ、よした。で捨てゝも、彼れ此れ苦情のあるべき命ならぬを前以て吹聽せられしは滑稽なり。かく二三の缺點を指摘するものゝ、其好所佳所に至りては枚擧に遑あらずこれ等はむしろ白璧の微瑕とも見るべからむなり。

(二)性格を工に描けること。流石に在來の脚本に憚らて筆を執りし作とて、人物の性格の概してよく物されたるは敬服の外なし。就中めてたきは淀君の性格ならむかし。傲慢多情偏執にして嫉妬の念強く、而かも太閤殿下の未亡人として一種氣韻の高き、神經質なる女性を描きて殆ど憾なし。殊に關白秀次の狂死に關せる淀君が良心の呵責に色々の形象を予へ、裏面の動機となせる技倆など、二なくめてたし。第二段の夢の場は更なり、第五段の淀君寢所の場に、修理が『近い例は聚樂御殿、秀次公の御身の果』と曰へるに『エヽ』と胸にこたへし淀君が『心はやがて畜生道の』語に一轉して妄想の現化を眺め『執念くも祟らうでな』の獨白に移るまでの用意の細やかなるなど、又と得難く覺えたり。惟ふに是女性の性格は著者の尤も苦心せしところなるべく、又最も成功せりと謂ふべし。又取上げて注意すべきは蜻蛉の性情なり。吾等は是の憐れなる少女の死の主因をば失意の戀愛に歸するを以て最も妙なりと考ふ。少女を自殺せしむべき尤も美はしく、又尤も自らなる情機は、實に其の清き戀愛の外に求むべからざればなり。著者も是に省みる所ありてか、原文を改刪して『父樣のお目がねて木村長門守重成樣へ內々兼て結髮』云々の

精練にして、誦讀のまゝにて優に人を動かすの力ある、其思想の清新にして舊來の陳套を襲ざる、是等はこれまでの脚本に見るべからざる本篇の長所ならむ。されど之を一個の悲劇として見る時は、是篇が讀者に與ふる感激はあまりに薄弱にして餘情の割合に索然たるものあるは如何に。是れ恐くは著者が餘りに正史に忠なりしが爲めに、悲劇的勇者の性質を主人公たる旦元に附與せざりしに職由せるならむ。されば悲劇の緣としては殆ど遺憾なきに庶幾き境遇を以てしてしかく龍頭蛇尾の閱歷を現するに至りたるは畢竟著者が預め悲劇的勇者に要する性格の如何なるものなるかに就て餘りに冷淡なりしの罪に坐せずむばあらず。吾等は是を以て本篇の最大缺點なりと思惟す。吾等をして憚りなく言はしめば著者は總じて悲劇の形式には餘り注意せざりしが如し。是を以て一齣一場の興味は津々たるものあれども、全篇を通じて之を觀る時は情淺くして感薄し。旦元の對手たる大野父子を以て豐臣氏の忠臣となし、常に叛逆の名を以て旦元を排擠せむとせしが如きは、旦元の逆境に對して當に寄すべき同情を如何ばかり減殺したるべきかを思へ。

春の家が『桐一葉』を讀みて

一昨年の暮より去年の秋かけて、早稻田文學紙上に載せられし『桐一葉』は、このたび春陽堂より美はしく裝へる一卷となりて顯はれぬ。こは廣告にも見えし如く、逍遙氏が我が在來の脚本のあまりに荒唐無稽にして、其人物のあまりに漠然として性格無きをあきたらず思ひて、脚本刷新の一媒介にもなれよとて綴られたるものなれば、苟も劇文學に志あらむものゝ必ず一讀すべき書ならむかし。筋は大阪落城前の正史上の事實に基き、片桐が苦忠、淀君が嫉妬、大野父子が偏執を經とし、蜻蛉と呼べる可憐なる乙女の寃死、銀の丞と呼べる痴少年の失戀等を緯として、七幕十五場の脚色を織り出せるものなり。かりそめにも批評の筆を執らむものゝ默して已むべき作ならずと覺ゆれば、左に思ひ寄れる二三を錄しつ。

(一)總評　逍遙氏が作としてはあきたらぬふし少からざれ共、氏を措きて今の世に斯程の作を出し得べき人無きを思へば、桐一葉は明治文學の珍として吾れ人の尊重すべきものなること勿論なり。性格の明に個人的差別相を具へたる、文字の

之に反して一世の批評家を擧げて之を卑下するの著作が、往々にして最大なる讀者の渇仰を以て迎へらるゝものあるも敢て怪むに足らざる也。

何れの邦に於ても文學社會の狀態は常に斯の如き者也。我文學者の多數は果して如何なる決心を以て其業に從はんと欲する乎。一個の文學者として世に立たむとするものは早晩是の岐路に遭遇することあるべき也。（二十九年二月）

何なる價値をも附與す、感情を主とする美術文學に於て殊に然りとなす。吾等は所謂賞鑑家なるものが健全なる常識の發言を蔑視するの弊は、遂に美術文學に於ける公共弘通の要諦を沒却し去り、一種僻性を有せる少數人士間の翫賞物と爲り了らしめむことを恐る。

之を聞く、歐洲美術が本邦のに異なる一の點は、常識と常感とを有せる人心の普く其の價値を認むるにありと、是れ豈美術の要義に非ずや。吾等は疑ふ我邦賞鑑家の多數は最も狹少なる自己を有する偏人に非るなきかを。

任地、吾等は國民の最大多數を門外漢視する美術文學を讃美する所以を知らざるなり。

（二十九年二月）

時好と批評家

批評家の認むる所、時好亦是を認む、然れども是を認むるもの、必ずしも是を好まず。是を以て秀逸なる著作は徃々其の秀逸なるを認識する社會の爲に冷遇遺却せらる。

エリオット、エッヂヲース、クレー諸氏の著作を翫味せば其の成功したる所以の如何に女らしき所にあるかを知るに足らむ。

（二十九年二月）

賞鑑家と國民

物に就て知識の多少を較ぶれば天下何人が賞鑑家に若かむや。然れども吾等は賞鑑家の判斷の動もすれば大偏僻、大不公平に流れ易きを覺悟せざるべからず。

あらゆる判斷は自己の判斷なり、自己の感情知識を標準とせるの判斷なり。是を以て學に偏し性に傾くは多數人の免れざる所、畢竟人は自己を超越する能はざればなり。是を以て吾等は謂ふ、知識と習慣とは動もすれば人の嗜好をして狹隘固陋ならしめ、人の判斷をして、偏僻不公平ならしむ、換言すれば自己を縮小する者なりと。

試に今日の賞鑑家なるものゝ判定する所を見よ。往々常識を以て揣摩する能はざるものを採り來りて激賞措がざるが如き、常人をして故らに鑑識の幽玄と、好尚の非凡を衒ふ者に非るかを疑はしむるものあり。習性は如何なるものにも如

ふする輩に向て、吾等の希望を屬するは寧ろ蕁草に於て蘭香を求むるが如けむ。而かも滔々たる世人は斯の如き著作によりて漸く戀愛小說を排棄せむとするに至りては、吾等豈戀愛小說の爲めに其寃を訴へざるを得むや。我國閨秀作家は是際宜しく潛心熟慮すべき也。

人生の假想は一にして足らず、心境雜然として相交はりて其の歸する所を知らざるが如し。然れども人は遂に道義的生物なり、最も健全なる思想があらゆる人間の活動を評價する繩墨は即是の道義なり。故に道義の不滿足はあらゆる人心の不滿足なり。是點より見るときは、今日の小說は多く不滿足なる小說と謂はざるべからず。吾等は閨秀諸君の著作も亦遂に是軌を脫する能はざりしを恨みとす。想ふに諸君が著作の摸範として取る所のものは今日の男性作家の作に非る無きか。果して然らば是れ大に誤れり。女性は男性と共に人心の一半を別つ、元より是れ自らの觀察と情緒と理想とを有す、其著作亦吾等の見るべからざる世界を有すべし、何を苦んで不健全不自然たる當今の群小作家に私淑するを須ゐむ。其の獨特の見地に據りて平生の素養を傾注せば妙自ら其中に在らむ。諸君もし

の程も浅ましく忍ばるゝに非ずや。吾等は滔々たる文壇作家の通弊を以て獨り殊に閨秀作者を責むるものに非ず、淑徳あり才藻に富める諸子に望むに純潔なる戀愛小説を以てするものは、男性作家の品性に於て深く慨する所あればなり。曾てシルレルが『ワレンスタインの死』を讀みて、少女テクラが高潔なる愛情に涙を濺ぎしことありしが、今尚其言を記憶して忘れず。テクラが命をかけて愛せるマックスは、其去就に惑ひて最後の決心をテクラが一言の上に托せり。公道の中に愛に對する最大の義務を認めたる哀れなるテクラは儼然として謂へらく、

行け、御身に忠なるは即ち妾に忠なる所以なり、
運命は吾等を別つも吾等の胸は依然として一也。
(Wie du dir selbst treu bleibst bist du's mir, Uns trennt das Schicksal, unsre Herzen bleiben einig.)

美は善を容れて餘りありと謂ひしが、道義を透して見たる愛は清水を透うして見たる眞珠の如し、水は眞珠によりて其清きを加へ、眞珠は水によりて其光りを增す。想へば我作家の寫せる戀愛の果敢なさよ。人は自己より大なるものを作る能はず。夫の少女の純潔を誘瀆し、楊臺狹斜の中に湎溺し、小説家を名として獸欲を逞

として決して男性作者の後に立つものに非ず、而かも吾等は未だ其創作に接せざるを以て二子を認むるに暫く小説家を以てせざるべし。

一葉、花圃以下の作を讀で吾等の先づ感じたるは其意想と觀察の甚だ狹きことなり。『萩桔梗』と『暮ゆく秋』の如何に似たることよ。『白ばら』や、『黒眼鏡』や、はた『十三夜』や、其の材とする所は婚嫁の事情に非ざれば、淺薄なるはた卑猥なる戀愛談に過ぎず。彼等が筆には天然に對する同情のほの見ゆる痕だにあらず、高尚なる道義の觀念は殆ど求むべからず、まして宗教、哲學の思想をや。觀察の狹き、人の世界を廣むる想像力の如何ばかり彼等に缺けたることよ。彼等の作の多くを以て其實歷談の潤色に過ぎずと謂ふ者あらば、彼等の幾人か能く然らずと言ひ得べきか。

戀愛は人情の活動中最も清く最く美はしく且最も貴きものゝ一なり。沙翁も近松も愛の詩人なりき。眞に愛の寶壺を叩きて其靈泉の一滴を掬し得るものあらば、何れの日、何れの人か大詩人たるを得ざるべき。吾等は戀愛小説を卑しとする人々の所謂高き小説の如何ばかり卑きかを見むと欲する者也。さりながら今日の小説が描寫する愛情の如何に淺薄に僞り多きかを想へば作家が理想の高さ

ふべき程のものに非るや否やは吾等は知らず、されど其筆や洵に麗はし。友義の爲に愛情を捨つるは是れ身を殺して仁を爲すものなり、女性として爲し得べき最高の德義は何物か是に若かむや、女史が老練なる手腕は是の間の委曲を盡さざるに庶幾し。一葉氏の『十三夜』に至りては、よしや其深刻は『濁り江』に及ばずとするも日常市井の資料を驅りて是の凄愴悲慘の情理を曲盡す、筆路洒脫淡きこと雲の如きも、情火斑々として人に迫まる、是れ所謂血三年にして碧を藏するの契を得たるもの、洵に得易からざるの才と謂ふべし。『黑眼鏡』、『村時雨』、『片時雨』、『しろばら』等は決して女流作家が名譽の作と謂ふべからず、就中『しろばら』の如きは吾等は淑德ある作者の品性に於て累を爲すあらむを惜む。而も『十三夜』の一篇能く閨秀小說の重を撐持し、女性作家の爲に萬丈の光燄を放ちたるものと謂ふべし。

若松賤子の『わすれがたみ』は飜譯の珍として夙に當年の好評を博したるもの、小金井喜美子の『名譽婦人』はた是れ黃絹幼婦の小品、清新高潔、優に我作家を啓發するに足るものあり。されど是れ飜譯なり、吾等は當代作家の陳套なる意想に對する一 Hocker として是を見ることを得ざるべきか。若松、小金井二氏の技倆は飜譯家

り、形あるものゝ形無き有樣を描くの謂なり。血となり肉となり骨とならざる前の見えざる命を示すの謂なり。沙翁、デケンス、ゲーテ、シルレル、近松、エリオットは大なる裏面の觀察者なり。

象ある宇宙の形無き源を探るものあらば、更に大なる裏面の觀察者ならむ。ジュピタルを塑りしフヰヂアスの心を探るものあらば、又更に大なる裏面の觀察者ならむ。

（二十九年一月）

女性作家に望む

歲寂びて野山と共に霜枯れし去冬の文壇に時ならぬ花を匂はせし文藝倶樂部の閨秀小說が、讀詩社會に博したる喝采は實に驚く可きものにてありき。其批評の詳細なるは幾多の新聞雜誌既に之を盡せしを以て、女流作家の幸運なる發途を祝するの外、吾等今是を再びするを要せじ。但所感二三を陳して少しく閨秀諸君に望む所あらしめよ。

花圃女史が『萩桔梗』は女流作家の先鞭を着けたりし女史が作として取上げて言

る能はざるを怪まず。さりながら最も高き道德とは人と人との間にのみ存するものなりや。其實際の生活に於てはいざ知らず、苟も理想を有する人の心は、人の外に其道念を擴張するの餘地を有せざるか。あはれ道念最後の光明は、獨り宗教に依つて得らるゝものには非るか。

理想ある、道念高き、思索深き國民は滔々たる俗流と共に其眞摯なる慰籍を現代小說の中に求むる能はずとすれば、小說家はこゝ一番の猛省を要する所に非ずや。

（二十九年一月）

裏面の觀察とは何ぞ

社會一切の出來事は表面的のみ、記號的のみ、其の由て來る所以の徑路は之れを裏面の觀察に待たざるべからず。吾等は裏面の觀察が當今文學者の注意する所となりたるを喜ぶ。

然れども幾何人が裏面の觀察の眞意義を解するものぞ。

裏面の觀察とは他の祕密を訐くの謂に非る也、他の內幕を露はすの謂に非るな

宗教小說

自然と神とを說くものは神話なり。我邦未だ曾て一の神話無し、一篇の古事記あれどもイリヤス、アエスタ、乃至吠陀に比すべきものに非ず。

神と人との關係を說くものは宗教なり。我邦元來宗教無し、佛教渡來し、耶蘇教傳播したれども、夫のエルザレムを故鄕とし、バクトリアを祖國とせる民族に比すれば宗教的意識の遙に薄弱なるを見る。

自然と人との關係を說くものは哲學なり。我邦人は遺憾ながら未だ哲學的思索に於て十九世紀の世界思潮に雁行する能はず。

神話、宗教、哲學の思想に乏しき日本民族は倫理道德の實際的觀念に於て宇內に卓絕せり。其理想必ずしも高しと言はず、其思想必ずしも弘しと言はず、唯其實際的なるの一點に於て世界何れの民族が敢て是と並馳するを得べき。倫理道德とは何ぞや、所詮是れ人と人との關係を解するものに非ずや。

されば予輩は、今日の我邦文學が小說にまれ詩歌にまれ、人を外にして題目を採

る人種學及言語學の知識の皆無なるに驚きたりき。あはれかゝる有樣にて東西文明の調和もいと〳〵覺束なしや。

東洋の哲學は主として印度支那の古代思想なり、就中支那哲學は世界文學の歷史上たしかに有力なる一契點を作りしことは掩ふべくもあらず。今日文化發達史の上より、批評的には、また比較的に其關係位置を考へんこと洵に興味ある題目なり。現に獨逸のヸンデシマンは已に今世紀の初めごろ其哲學史を編するや、筆を支那哲學に與し、今日キールのドイッセンが編著に從事しつゝある世界哲學史も先づ東洋より始むべしと云ふこと也。然れども斯の事業は西歐及印度の哲學に就いて十分の知識あるものに非ざれば容易に爲し得べからず。吾等をして忌憚なく言はしめば、今日好て支那哲學を論ずる少壯漢學者の多くは未だ深く西洋哲學に通ぜざるなり。哲學概論一部を讀みて東洋哲學の比較研究はちと世話に言へば凄しと言はざるべからず。

何はともあれ、吾等が切に東洋哲學研究者に望むところは常に歷史的また比較的立點の上に其脚地を占むべきこと是れ也。

（二十九年一月）

を說明しつゝあるものに非ずや。

東方亞細亞に民族の特性に本づける西歐のとは異なれる特殊の流れありしは論無きこと也。さりながら所謂る特性とは如何なる程度まで其差別を有すべきものなりや、はた如何なる程度まで其平等を容るべきものなりや。東西文明の交渉せしより日尙淺く、未だ斯る問題には唯一の解釋者なる時日をして說明せしむる能はずと雖ども、世界歷史に於ける幾多の比較的研究は、明に這般の消息を想はしむるものあり。殊を知りて遍を認めざるものは事物の一面を見たる者のみ。

かつは今日の少壯漢學者が事も無げに言ひ放つ特性てふ文學の怪しさよ。彼等の何人が果して是『特性』を明らめしものぞ、關係を知らざれば特性を知る能はず、比較に非ざれは關係を知る能はず、世界歷史の上より各民族の文化の上に廣く且つ深き比較研究を施すに非ざれば、言語人種の源流に溯り宗教、美術、哲學、文學の各方面より其自然的及び精神的生活を曲盡するに非ざれは爭でか一民族の特性を明らむるを得べき。彼等の何人が果して是事業を爲したるものぞ。曾て漢學專門の某文學士の著述に成れる東洋史を讀みしに、吾等は斯る著述に第一に必要な

たるを發見しぬ。あはれ新學術の隆興と共に日にまし忘れゆかむず見えたりし斯學は俄に生氣を帶び來りて孔孟老莊の研究は一面毎に榮え來ぬ。是に於て支那の古學は三千年間の學者の夢にだも知らざりし幽深なる意義と莫大なる尊敬とを受け取りぬ。

更に其思想の流れを汲みたる民族の歷史、文學と相關聯し、東亞文明の名の下は西洋文明と對壘して相讓らざる勢を示しぬ、かくて一派の人士は民族特性の根據の上に東西文明の差異を覺識し、其衝突を認むると同時に其調和を計らむと企てぬ。

まことに少壯學者の意氣の勇ましさよ、其思ひつきや眞に善し、さりながら其道ゆきの餘りに心なきを如何にせむ。

歷史は現實にあらず、歷史上の價値を以て現實的事物を律すべからず、國民は他物を取り入るゝに先ちて自己が現實の意識を檢覈せむことを要す。最も進歩せる意識は哲學的原理として支那哲學を奉ずるを肯んずべきや、說明するものは說明せらるゝものより常に大なることを知らざるべからず。吾人は今日支那哲學

南歐羅巴のはてやかなる天地に育ちたるかゝる流派の、果して我邦人の嗜好に協ふべきや。新しきに就く世の習なれば『時』をして判斷せしむるの外なし。印象派はまことに清淡なり、一種の眼を以て自然以外に其れ自らの自然を彩色し、看者をして杳然理想の世界に遊ばしむる其技術や、まことにめでたし。然りながら其調子は輕薄なり浮麗なり、沈痛深刻、はた崇高なる趣きはいと〳〵尠し、是點に於ては遂に一籌を舊派に輸さゞるを得ず。あはれ新派の人々は一時の小成に滿志せず、國民性情の確乎たる根據の上に其觀美眼を躍らすに非ざれば永遠の功業は六づかしからむ。

最後に演劇に就て言ふべき筈なれども、度々本誌上に論ぜしこともあれば繁を省きて又玆に贅せず。

（二十九年一月）

少壯漢學者に告ぐ

東洋哲學の研究一たび學者の注意する所となりてよりこのかた、訓話比擬の外に啓學の餘地あるを知らざりし漢學者は、さながら一新生面の自己の前に拓かれ

る國學者、語學者によりて反響せられ、其勢焔一時文壇を聳動したりしが、怪しきかな、吾人が豫期せし如く學者社會の眞面目なる問題として認識せらるゝに至らず、所謂る老大家は寧ろ冷眼を以て袖手傍觀したりき。あはれ是學術上、はた國家上の大問題も健忘なる國民の腦裏に其痕を止めざるかと嘆きし人もありしが、去ぬる十月の帝國文學第十卷は二十八年最後の新國字論として、而かも最大最長の議論として、岡田正美君が『漢字全廢を論じて國文國語國字の將來に及ぶ』てふ論文の第一章を吾人に紹介しぬ。爾來卷を重ね章を追ひ、氏が精細卓拔なる研究の結果を發表し十二月を以て其稿を結びぬ。前後無慮百餘頁の大論文蓋し苟も國學に志あるものゝ一顧を煩すに足るものならむ。そも〳〵國字論は決して學者好事家の閑話に非ずして國家文運の消長に關するもの、篤學の士の決して等閑に付すべきものに非る也。予輩は碩學大家の續々其意見を發表せむことを希望す。

哲學のことはむしろ越俎のことなれば暫く措きつ、美術のことに就ては取わけて言ふべき程のこともなし。只日日に盛りになりゆく所謂アンプレシヨニスト派は、永く今日の全盛を保ち得べきや、之れ疑問なり。ロメオジュリエットの戀を生みし

と律語との關係を研究せるもの少からず。外山博士の新躰詩出づるや、一般社會は其外形の無律放散なるを見て鵺文字なりとして之を冷罵せるに對して、一派の評論家は律語を以て詩歌の定形と爲すの非なるを說き、其內容に從て各々其特殊の形式を取るべきことを主張せり。他の一派の論者は之に反して律語論を固執し、双方の議論未だ酣なるに至らずして歲は暮れぬ。蓋し廿八年の『新躰詩歌集』は猶十三年の『新躰詩集』の如きもの乎。少くとも單調平板なる詩歌の世界に一新生面を開鑿したるの點に於て我文學史上の一紀念を止めたるものと謂ふべし。夫の抜刀隊の歌は十數年前には見るべからざりし幾多今日の詩歌を生みたりとせば、吾人は鵺文字に向て少くとも發達の恩を謝せざるべからざるに非ずや。予輩は是大膽勇敢なるBlowが學界知名の士に出でしが爲に、幸にして十分世上の注意を覺醒したりしことを喜ぶ。

顧ふに二十八年の文學界は日清戰爭の結果として比較的多樣の方面に向て豐熟なる結果を殘したりき。新國字論勃興の如きも其一として見るべきものか。機を見るに敏き早稻田文學記者によりて唱導せられしより、主として少壯有爲な

蕭勃として昂揚するに方り、滔々たる軍歌は遂に一の注意すべき大作を吾人に與ふること能はずとは、そも〳〵何等の奇觀ぞや。一朝雲の如き作家は一夕霧の如く消え去りて、殘る所は七五五七の元の李阿彌のみ。雨江、羽衣、桂月等二三少壯作家のやゝ注意すべきありと雖も、其詞其調、はた其想、所詮共に陳腐の評を免れず。彼等はたしかに吾人が優雅なる王朝的感情を歌ふことに於て成功せりと雖も、而かも遂に十九世紀に於ける大國民として吾人の最も進歩せる情想を暢發することと能はず。其詞如何に溫籍なるも、國民は未だ國民的詩人として彼等を奉ずることと能ざる也。其思想のやゝ清新なるもの少壯作家の中に乏しからずと雖も、其文辭生硬險爛に失するもの多く、未だ以て讀詩社會の同情を惹くに至らず、湖處子、天遊、鐵幹一輩の作家が遂に其功を成す能はざりし所以也。外山博士一流の新躰詩は旅順の英雄可兒大尉を先鋒とし、輸卒、喇叭卒等五七七五を見慣れたる詩壇を驚動し、賛否褒貶の聲世上に喧しかりしが、是が爲に端なくも眞面目なる文壇の疑問を惹起するに至りぬ。蓋し新躰詩家が最近十數年の失敗の經驗によりて學者の中には我邦詩歌の形式に向て疑を狹むもの漸く多く、殊に國語の性質上より詩想

遮莫所謂る觀念派によりて代表せらるゝ一派の小說は昨年に於ける小說界の新產物として特筆するの價値あるものなり。利弊素より相半ばするを免れずと雖も、其深刻なる心理的經行を曲盡し、筆墨以外に主張する所あるが如き、慥に一步を舊小說に駕するもの也。若し其狹少なる主觀を離れて漸く純客觀に近くを得ば、一世の好尙を左右するに至る、亦甚だ難きに非るべし。是れ新派の小說家が當に進むべき針路ならむか。若し夫れ高尙なる道義の觀念を缺ける、純潔なる宗敎的熱誠に乏しき、皆是れ當代文學の痼疾、其の由來する所深く且遠し、決して一朝一夕の改悛を望むべきに非る也。頃來一流の評論家はゲーテ、ダンテを持出して當代の作家に比擬し冷笑熱罵到らざらる所なし。洵に歷史的觀念に乏しき無識者の空論に過ぎずと雖も、所謂る大文學を未來に惝怳すれば予輩亦轉た望洋の嘆無きを得ざる也。

新躰詩は如何。其呼聲の高かりし割合に、其議論の喧かりし割合に、其新作の夥かりし割合に、はた所謂る『新躰詩人』の多かりし割合に、最も少き效果を貽したるものは實に是の新躰詩なりき。振古以來の國民的大活動に際會して國民的精神の

家が　時口を極め凄悄奇拔を以て是派の小說を歡迎しながら、間もなく不自然不健康を以て痛く之を難ぜしも、所詮其狹隘なる主觀的精神の一般の嗜好に適する能はざりしに依らずんばあらず。

觀念派小說が餘りに人情國俗に相應はしからぬ事件人物を描けるより、一面には飜案小說なりとの批難喧しかりしぞ道理なる。抑も外國小說の飜案は今更觀念派に初まりたるにあらず、堂々たる大家と自らも人も許せる作家すら、早く已に指を飜案に染めて嶄新の譽れを博しつゝありしは隱れ無き事實なり。其原作の多くは最近の歐米雜誌等より採取せるものにして、殊に此頃近時の作家、例せばイブセン、アンデルセン、ヨオカイ、ツルゲ子フ、プーシキン、トルストイ、乃至ビョルンソンレルモントフ等の短篇小說はレクラムの出版等に依りて可なりに多く我讀書社會に讀まれたるが故に、隨て飜案の種本となりしものも割合に此種の小說に多かりしが如し。予輩は絕對的に飜案を非とするものに非ずと雖も、異邦民族の特性に對應し來りて、初めて圓融の趣味あるものを採り、其名字と服裝とを改め、漫然他の好奇心に投じて朝夕の虛譽を賭するが如きは遂に其可なるを見ざるなり。

り再び筆を戀愛小說に染めなんか、寧ろ一蓋の朧富士に鎌髭の町奴を振舞はさむか、思へばおいやるも古く穿つも末なり。予輩紅葉、露伴一輩の所謂老大家が瀟洒又深刻なる寫實の筆彩が、相も變らず時尙を揶揄する間に、社會は已に一派奇警なる作家を歡迎したるを觀て、時好の一部の已に那邊に傾きしかを知るに難からず。少壯作家が相率ゐて所謂る觀念小說に赴きたるもの蓋し怪むに足らざる也。

所謂る觀念小說の主眼とする所は、小說的活動に依傍して、一の觀念若くは理想を現化描寫するにあり。故に其精神の深刻なるを得るも、其規模は窄少なるを免れず。隨て又狹隘なる主觀的傾向に陷るを免れざるなり。然れども之を溜々たる從來一樣の小說に較ぶれば、其人物性格の明晰なることに於て、其心理解剖の深刻なることに於て、はた又其氣魄精神の幽玄高尙なることに於て、多少の進步を見るに足る。然れども其主義の人物に在らずして一の觀念に存するを以て、其性格も動作も、やゝもすれば怪奇不自然に陷るの弊あるを免れず。且や其旨意とする所の主義は自ら作者の性癖意向に基くもの多きを以て最大多數の讀者を滿足せしむるの點に於ては遙に從來の小說に及ばざるなり。單調一律に倦厭せる批評

の未來を測るを得べき。理想は懺悔の上に立ち、希望は失敗の道に横はる。徒に幸運の前途を夢みて失意の後程を忘るゝは遂に事を成すの所以に非るなり。

さしも賑はしかりし明治廿八年の文壇は所詮見事に失敗の歴史を描きぬ。されど落膽するを止めよ、其失敗や成功せむが爲の失敗なりき。あはれ古往今來、何人か成功の歴史を吾人に示し得るものぞ、歴史とは畢竟失敗の異名にな非ざるか。

先づ文學的著作の大半を占むる小說を觀むか、戰爭は凡てのものを戰爭化したり。去むぬる廿七年の前半期に於て、呼聲の可なりに高かりし歴史小說も、一時中等以下の讀者を壟斷せんず勢ありし探偵小說も、日清戰爭と共に一頓挫して再び振はず。其跡を襲ふて原燎枯草を拂ふが如き勢ありし軍事小說は、敵愾心の勃興に乘じて新聞に雜誌に殆ど文壇の大半を席捲せしも、馬關條約の締結せられし頃には、既に早く其氣焰を失ひて世好は又新たなる或物を望みぬ。世に大家と目せらるゝ一流の小說家は素より世態の推移に際し尙依然として多少の隨喜者を有せりしも、讀書社會は一般に缺焉として他に惝怳する所ありしは事實なり。之れ作家殊に少壯作家が多少の苦心を費せし所、そもや歸去來を唱て寫實の鳩巢に歸

明治廿八年の文學界

烏兎冉々として須臾くも停らず、明治昭代の第廿八年もいつしか無限なる過去の大闇黑中に埋了し去られ、青松翠竹、またもや新正の門に上りぬ。今や筆硯を新にして廿九年の文壇に立つに臨み、去むぬる一年の文界に對して暫く後顧の一瞥を放たむか。

事物は時と共に連續なり、其發達の途上に於て毫絲の缺陷あるを容さず、舊冬去りて新春來る、素是れ一晨一夕の送迎のみ。而かも吾れ人は毎に新しき希望を以て新年を迎ふるなり、恰も舊套を擺脫し去り宛然未來に向て一大飛躍を作すの感あるなり。吾れ人が過去を顧盼して最も愷切なる感慨を催すは是時なり、未來を瞻望して最も快濶なる希望を屬するも亦是時なり、新年は正に是れ平板單調なる日常の經過の上に一大段落を劃するの社會事物の進歩的動機の、是に依りて促進せらるゝもの決して小少に非ざる也。過去は敗喪の歷史なり、失意の紀念なり、而かも同時に最良の師友なり、誠に自己の過去を解するものに非ずむは爭でか自己

さむ、草葉の裏に神の御影を仰ぐと言ひけむむづかしき學者は、纖維細胞の中に全能の大手を認むべく、宇宙の眞と美と善とを己が理想の中に萃めて之を萬有の中にうつし見る大詩人は、『哀れ是花、汝を知るものは亦宇宙を知らむ』と歎美せむ。吹萬不同元是れ同一の風、一輪の紅花千樣の意料を妨げざるは、自然の萬物各小宇宙を現ずればなり。今若し小大萬殊に應待し、限なき變相に遇て毫も凝滯する所無き宇宙大の心容を以て是大自然界に對し、其感を掩ひ其情を包むに縹渺模稜の詩歌の衣を以てするの詩人あらば、之を解するの難きこと尙自然其物を解するの難きが如けむ。是れ即ち其詩人を批評せむよりは寧ろ自己を批評するなり。猶洪鐘の響は打つものゝ力によりて大小あるが如し。現時の文壇往々古來の大哲人大詩人に對して群盲撫象の奇觀を演ずるものあり、少しく顧みる所あるべき也。

（二十八年十二月）

當に然かあるべしと思ふのみ。予が『桐一葉』に對する批評は他日發表するの機會あるべし。

批評に就きて

批評眼の序に一言すべきは他に對する批評は時として自己に對する批評となること是なり。己より卑きもの、小さきものは時に自家一定の規矩によりて之を評隲し得べきも、自己より高大なるものに對しては其標準を作家自らの中に求むるを可とす。是場合には他に對する批評は即ち自己に對する批評となるなり、他の意義價値を發揚せんとして却て偶々自己心容の廣狹と理想の高下とを示すに終る。自然に等しと謂はれし大沙翁が、批評家の難物なるは是の爲なり。

一輪の薔薇、情を解せぬ傖夫も其色の紅ゐなるを美はしとせむ、垂髫の少女は採てかざしの花とせむ、而かも蛺蝶一枝の春に離るゝを思はず、徒ならぬ思に結ぼれて、春の恨を解くよしも無き妙齡の處女には、露も情けと見られぬべく、色も衰れを添るならむ。常無しと見し世をも流石に捨て難き世捨人には、盛者必衰の理を示

作者の意を解せざるものには非る乎。げに外面のみより見れば少女の狹量に、前後見ずの無分別に過ぎざるが如きも、十六の春の齡に影薄きかげらふが世を果敢なむまでの衰れを尋ぬれば、唯ならぬ思のはし〴〵言葉の上にもほの見ゆるに非ずや。

こんな心があればこそ自身で招く告わざはひ、アゝ思ふまい〳〵といさまの爲ならばとはいふものゝ雪炭ほどにとまたひとしきり袖の雨

是の一路の情絲をたどりゆかば渠女には死と狂との二た途あるのみ。若し銀之丞無くば予は如才無き逍遙氏が茲に一の好オフェリアを現出したるべきを疑はず。又氏にしていま少し明に是の邊の委曲を顯はすことに務めたりしならば、氣早やなる評者の誤解を免れ、且は全曲の上に少からぬ光彩を添へしなるべきに、扨も惜しや。學海氏は又淀君の修理に對する嫉妬をも謂はれ無しと言はれしが、是れ『目見えの折』云々と云ひしを見逃がせしなるべし。豐國神社廣前の場と對照し來らば、思半ばに過ぎむか。

予は予の意見が逍遙氏の心を得たりや否やを知らず。只逍遙氏の戯曲として

向て其功益決して小少に非るべし、我邦人の風として所藏の美術を惜みて人に示さゞるは甚だ謂はれ無きこと也。

（二十八年十二月）

批評眼

室空しければ明にして、水止まれば澄むの道理にて、豫め成心を除去して虛靜他に對するに非ざれば事物の眞價は判ち難し。されば批評家の最も難しとする所は、學理に照して他を規束するに非らずして、著者の作意はた作の眞意をありのまに發揚するにあり、自家の主觀を離れて他物を觀んことは雅襟宏量の人ならては爲し得べからざればならむ。今日の評者は兎角其標準を著作以外にのみ取りて、眞摯なる含蓄的批評を務むるもの少し、歎かはしき事共也。

近來稀有の好戲曲『桐一葉』の主なる批評家二人あり、一を寫實劇の勇將依田學海翁とし、一を文科大學の才子上田敏君となす。學海翁の評は、窮屈なりに固まりて流石に確乎たる見地の程面白し。上田君のは稍單純にして主旨は學海翁のと略ゝ同じ。是二人は共に蜻蛉の死をば謂はれ無しとて批難せり。されど是れ未だ

り。何となれば我邦の事物は古來組織的に研究せられたるもの少きを以て、今日の學者は自ら原料の採集配列に非常の勞力を費やさゞるを得ず、之を西洋人が既に整然と按配せられある材料に就て比擬概括するに比すれば、其勞同時の論に非ず、大著述の出てざるは素より已むを得ざるものある也。故に予輩は想ふ我邦學者、殊に古學者の第一の責任は學術社會に向て事實の材料を供給するにあり、若し夫れ之を案配取舍して完全なる組織を成すは之を新學者の考察に一任するを可とす。斯く言へば舊來の學者を輕ずるが如しと雖も決して然らず、各々其長ずる所に從て其力を盡すは即ち是れ學者の本分を盡す所以にして、彼此分業の間素より輕重の差別を立つべきに非ず。漫に其分を超て功を一人に收めんとするの弊は偶々其功績を消却するのみ。小杉槇村氏頃日『本邦美術史』の著あり、予輩之を讀みて同一の憾無きを得ざりき、是れ學者の宜しく注意すべき所に非ずや。

序に予輩は一私人にして珍奇の美術を藏せるものは徒に之を庫裡に祕藏するが如き陋見を去り、或適當なる方法によりて公衆の縱覽に供するの途に出でんことを希望す。之れ美術研究者に便利を與へ、且は一般人民の審美的敎化の目的に

世界の美術國と誇稱する我邦が、今日一部自國の美術史を有せざるは予輩の常に浩嘆に堪ざる所なり。想ふに推古、天智、所謂奈良朝よりこのかた、空海、金岡によりて代表せらるゝ藤原時代、光長、運慶によりて代表せらるゝ源平、鎌倉の時代を經て、雪舟の東山、永德の豐臣より、探幽、應擧の德川時代に至るまで、本邦美術が繪畫に彫刻に連綿たる歷史的發達を爲したるは事實なり。之を歲時に繫げ、且さに內外の影響を考察して發展推移經行を叙述せむことは、尤も興味ある事業にして、又今日學者の急務なりと信ず。本朝文學の歷史は今日一にして足らず、敎育、宗敎亦各々其史乘に乏しからず、美術豈永く獨り歷史無かるべけむや。予輩斯道の碩學が予輩後進の爲めに、はた國家學術の爲に、本邦美術史を編纂せられむことを切望して已まざる也。

予輩は平生本邦美術に對して多少の觀察を怠らざるもの、然かも一人の能く古今の材料を涉驗することを得ず、書窓亦多事にして全力を茲に傾注する能はず、常に甚だ之を恨とす、想ふに世上予輩と感を同うするもの極めて多からむ。蓋し今日の狀態にては本邦の事物に關するものゝ研究は却て外國のものよりも困難な

と、命とを斷たんが爲に泣きしなり、彼は吾等を殺さんが爲に泣きしなり、彼は博大なる永遠なる人道に向ては涙を濺がざりき、そは彼の悲みは常に下と內とに向ひたればなり。人は徒に悲哀すべからず悲哀によりて悲哀を脫せざるべからず、是れ大なる人、健全なる人、道德ある人の悲哀なり。吾等は文學界の諸子に向てゲーテ、シルレルを持出すほどの物の勘定だに知らぬ男』にあらず。されど諸子は Shut the Byron, open thy Goethe. と叫びしカーライルが語の意を知れりや。萬能のゲーテだに Es sich in dieser Welt etwa bloss so mit der Leyer in der Hand nicht leben lässt. と言ひたるに非ずや。此世には琴よりも花よりも大なるものあるなり。兎にも角にも吾等は今日バルンスを歡迎せざるべし。

是の世界を生みたる物を食ふ惡魔と見しエルテルは、あはれ自ら食はれにき、そは惡魔は自らの胸にあればなり。吾等はあらゆる詩人を敬愛す。我親愛なる『文學界』の諸君子、乞ふ自愛せよ。

（二十八年十月）

敢て日本美術史の編纂を促す

and leave us nought but grief and pain
For promised joy.

と嘆きけんも正しく同じ心には非ざるか。若し夫れ『爭ひ難きは運命の歸するところか我等は神と爭ふを得べし、されど定まりたる天地の形勢を如何にすべき、我等は只怨みつゝ死すべきか』と言ふに至りては正に是れ "Man was made to mourn" と同一の深恨同一の情致。さはれ吾等は孤蝶子がバルンスと酷似せるの痕あるを見て太だ子の爲めに之を悲まざるを得ざるなり。

吾等の見る所にして甚しく誤らずんば、孤蝶子をして『文學界』一派の思想を代表せしむるを得べきか。さはれ吾等は今日バルンスを歡迎せざるべし、そは浮世の荒海に吾等を導く小やかなる望みの光の、涙の爲めに消え去らんを怖るればなり。美はしきものは善をも容れて餘りありてふゲーテが言葉にして眞ならば其美はしきものは人に望と命とを與ふるものならざるべからず、そは命なく望みなきものは善に到る能はざるべければなり。吾はバルンスを美はしからずとは言はじ、花に泣き、鳥に泣き、戀人に泣きし彼の涙やまことに麗はし。されど彼は吾等の望

意味無き賛賞の爲めに其生活を費し、不遇の詩人は其冷遇の爲に斃る

誰か是熱血淋漓たる筆痕を見て同情の涙を濺がざるものぞ。蝶を葬り詩人を哀む、吁吾れ遂に孤蝶子其人の心事を想ひ遣らずんばあらず。蘇國の詩人バルンスは悲哀と失望と窮苦との間に其生を終りたるもの、何ぞ其感愴する所の孤蝶子と相似たるの酷しきや、己が鋤先にかゝりたる野花を悲みては、

Such is the fate of simple bard,
On life's rough ocean luckless starr'd!
Unskilful he to note the card
Of prudent lore,
Till billows rage, and gales blow hard,
And whelm him o'er!

と歌ひ、過て野鼠の巣を覆しては

But, Mousie, thou art no thy lane,
In proving foresight may be vain:
The best laid schemes o'mice and men
Gang aft a-gley,

して我を宥さゞるべし、されど萬有の神は凡ての物を其意のまゝに倒し或は殺すも己の樂の爲にするに非ずや。神は善か、神は惡か、血を見て笑ひ屍を見て冷然たる我等の神は果して善か。

と言ふに至ては正に是れ所謂厭世思想の絶頂、其語美はしく穩やかなれども、其意の激しく暴きは、バイロンがマンフレッドもよもや是上に出づる能はざるべし。まこと孤蝶子の言葉の如くば、是世はいかばかり悲しき世なるぞや、己を立て己の自由を求め、己の權利を求むるは、如何に無益なることなるぞや。孤蝶子が言ひし如く、吾等は虐君を讃美せんが爲に作られたるものと謂ひつべし。吾等を造りし神已に惡なり。吾等人間のいかでか獨り善なるを得べき。吁、吾等自らは已に惡魔なるに非ずや。さてもさても望無きの世の中や。

憐むべきは詩人なり。清想の翼に宇宙の美を追ひ、匿に彷彿として其形を認め得たるとき、頑迷なる社會は彼を遇するに狂者を以てし彼を敵視し彼を迫害し彼の詩想を虐殺す。或時は彼が心血を濺ぎし跡を見ては、社會は益すべきを取り、益無きを唾棄し、謝する所無く責むる所のみ多し。詩人は己の持てるあらゆるものを犧牲として社會を斃へたり、背恩の社會は其報酬として荊棘の笞を彼に加へたり。幸福なる詩人は世の

『蝶を葬むるの辭』てふ一篇は孤蝶と云ふ人の作ながら『文學界』一派の感想を洵に明に言ひ顯したり。そもや孤蝶、秋風も吹き初めぬ野邊に、愛づべき花は澤なるに、運命拙なく幼兒の手に捕はれ、今は翼破れて路泥にさすらふ哀れの孤蝶、

美はしきは汝の罪か、天は何故に汝を生みけむ。汝をして盛春糸遊の間に滿地の花香に醉はしめし神は、羽折れて可憐の渾泥土上に委する今日の汝が運命を冷視し得るか。神は汝に美を與へたり、されども汝を滅ぼせしは此の美なりき、怨むべきか怨むまじきか。

美は汝に何故に與へられたる。汝以外の者の爲に汝は作り出でられたるなるべし、此をば怨む勿れ、今汝の傍にある草も木も土も人も、盡く汝の如く或者の爲に作られたるなればぞ。然り、あらゆる物は或物を樂ましむる爲に作られたるのみ。敢果無きは我等が命ならずや、他の爲に生れ、他の爲めに泣き、他の爲に死に行くなり。

如何に其言の悲哀にして沈痛なるぞ。白熱の度に昇りたる情炎の前には、一心氷の如く溶け去りて、吾等は全く感情の塊なり、いかでか是の稚き哲理の是非を問ふに遑あるべき。

試に思へ、我人の身にして我友を倒し、我友を賣り、我利をのみはからば人世の制裁は決

明治文壇の異彩ならずとせんや。さるにても諸子の歌ふ響の、いかなればかくは悲しく心細きことのみ繁かるぞ。

去んぬる七月の紙上に雜誌文學に就て見る所を述べし折、其筆の『文學界』に及ばざりしは聊か感ずる所ろありてなりき。感ずる所の何なるかは願くは請ひ問ふを止めよ、吾等は斧もて切るべき木と、袖もて拂ふべき露とは其間に自らなる差別あるを認むればなり。文學者の道念を說くの故を以て吾を不情なりと謂ふ勿れ。露に惱むの花に向ては吾れ願はくは一双蛺蝶の翼となりて之を拂はむ、柔腸硬骨由來相並ぶを妨げざる也。さるにても諸子の筆の痕のいかなればかくは悲しく心細きことの繁かるぞ。

一夜雨降り風凄し、殘んの燈を引寄せて枕頭に近刊の『文學界』を讀む。讀みもてゆくうちに我心何となく悲しく、心細くなり、世にも人にも捨てられて天地の寂しきに吾れ一人の心地して、吾は得堪えず、燈吹消し、衣引被ぎて打臥しぬ。點滴の音、夢を繋ぎて吾は安からぬ一夜を明かし、翌朝起出で見れば、『蝶を葬むるの辭』てふ一篇は吾枕頭に開かれぬ、あはれ、雨にはあらぬ怪しき斑を所々にとゞめて。

たるものを食ふとかこちしエルテルは、あはれや遂に自から食はれにき。

吾等の軀は獸と神との爭ひの巷なり、『吾』は何れにも與する能はず、又何れにも抗ふ能はず。獸と神との二つの力は割き難き『吾』を割かんとして、吾は遂に其間に悶死するなり、詩人は是苦みの聲を明に擧げしものには非ざるか。生とし生ける者の所詮免れ難きは是苦みなり、是嘆きなり。されば吾ならぬ物の中に、物ならぬ吾の實現を喜ぶの心はやがて詩歌美術を喜ぶの心なり。假初にも吾等に慰籍を與ふるものをすげなく斥くるは心無き業なるべし、吾等はあらゆる詩人を敬愛す。

塵の世のさがなき事は何處の風と聞き流しつ。自然を友とし、理想を師とし、情熱を說き、聖愛を歌ひ、詩神を懷ひ、生死を觀じ、十九世紀の冷酷なる文明に慊らではボメロス、エスキロスの舊山河を愉悅し、錙分朱折の乾燥なる科學を厭ひては文藝復興の大思潮に棹し、あるはダンテ、ペトラルカの遺韻を尋ね、あるはアンジエロ、ラフハエロの流風を慕ひ、悠々高踏して天地別に人間に非るものを作れるは洵に『文學界』一派の諸子なりとす。物質と因果を以て一切を處理せんとする今日學風の大勢に背いて、超然一意、靈界の幽趣を樂み、美術の神韻を歌ふものあるは、まことに

的生物として吾人は美術を制限し、又迫害するの權利、否寧ろ義務を有するものなり。

獨逸にヨルダンなる人あり、千八百九十一年一書を顯はし、題して Die moderne Bühne und die Sittlichkeit（近世の演劇及び道德）と云ふ。近世歐洲の文學漸く非道德的となれるを慨し、ハウプトマン、ズーデルマン、イブセン等の諸戲曲を批難して到らざるなし。其所論稍々矯激に失するの嫌無きに非ずと雖も、小說戲曲の非道德的傾向に對する反動としては注意すべき著作なるが如し。我邦美術、文學の社會に於て道德の薄弱なる今日、道德と美術との關係を明にするは蓋し目下の急務ならむ。

（二十八年八月）

『文學界』の諸君子に寄するの書

時世の兒なりといふ人の、如何なれば時世と相容れざることのしかく多かるや。產みたる母の罪か生まれたる兒の咎か。事多くは望みと違ひ、志常に世と容れず五十有盡の身軀、誰と共にか其生を全うすべき。さはれ宇宙は惡魔の戲れか、生み

こと能はず。美術家は美、哲學者は眞、道德家は善を以て人生の第一原理と爲し、他の二を此一に隷屬せしめむと要む、吾人は其何れを擇ぶべきか。例へば道德を害ひても、はた害ふの虞ありても美術の自由と獨立とは固く維持せらるべきものなるか。是れやがて實踐道德と美術との關係にして學者たると不學者たると、將た美術家たると非美術家たるとを問はず、何人も決定せざるべからざる問題也。

美感には本質ありて目的なし。（ツヴェック）目的無きもの以て人生の原理と爲すに足らず。智力には目的あるも命令（インペラチフ）なし、命令無きもの以て人生の實踐的原理と爲すに足らず。道德は本質と目的と命令とを兼ね有す、是れ蓋し人生の第一原理と爲すべきか。想ふに智力は感情を預想し、意志は智力を預想す、人が宇宙間に於て最高等の生物なるはやがて其の意志的即ち道德的生物なるが故なり。若し人は偶然徒爾に此世に生れ來りたるものに非ずして、當に到達すべき或理想を有すとせば、吾人は之に應ずる目的及び吾人をして是目的に達せしむるの命令とを有する者を以て生活の原理と爲さゞるべからず。故に美術は道德に衝突せざる範圍内に於て其自由と獨立とを有すべきなり。人の人たる所は道德的生物たるにあり。道德

在の歷史に據りて將來發達の徑行を案ずるに、吾人は其當に到達せんと欲する究竟の目的を有し、良し是目的は永遠に到達する能はずとするも、少くとも是目的に向て進化しつゝあることは疑ふべからざるの事實なるが如し。是究竟の目的は主觀的にはやがて理想にして、是理想的狀態に於ては眞と善と美とは相一致せんとするの傾向を有すと言ふを得む。而かも無限不退轉の精神を重ぬるも理想は遂に現實となる能はずとせば、現實世界に於て是三者の全く相一致せんことは到底望み得べからざる事なるが如し。故に是點より觀る時は、人は三個の獨立せる原理を一心中に包容するものにして、吾れ人が有限なる生物にてあらむ限は、是三者の間に時に多少の衝突を免るゝ能はざるべし。故に美にして必ずしも善ならざる者あり、善にして必ずしも眞ならざる者あり、眞善美は同一躰の三異相と言へるが如き所詮俗論に過ぎざるのみ。

眞善美の三諦の各々獨立せることは是世に於けるありのまゝの事實なり。然れどもあらねばならぬ事實としては、是三者の獨立は果して好ましきことなり、否や、是れ自ら別種の問題に屬す。人は同時に異なりたる三つの原理を遵奉する

新聞は去んぬる頃『美術辨妄』と題し、其問題に對する意見を述べて曰く

眞善美の三相は素一躰、其觀る所の面によりて名を異にするのみ、故に善なるものは必ず美、眞なるものは必ず美、善なるものは必ず眞且美なり。更に美術上より言はゞ美術の美なる所、やがて其眞且善なる所なり、偽且悪の性を具するものには美術と稱べきもの無し。若し強ひて美は眞善に關係無しとし、偽悪なるものに許すに美術の名を以てせんには施いて世道人心を害すること尠からざらん、されば技工の美如何に巧妙を極むとも内容の理想に缺點あらば眞正の美術品とすべからず。理想とは眞善の抱合を謂ふなり、近時論者往々美術の根據を卑俗なる寫實に取るものあり、よりて其妄を辯ず云々（早稲田文學第九十號抄錄に據る）

是れ學理としては何等の根據無き極めて幼稚なる俗論なりと雖ども世人の信ずる所、通例是説に外ならざるが如し。想ふに道徳と美術との關係はやがて是れ哲學上の大問題の一にして美術の眞相を理會する上に於て一應は明らめ置かねばならぬとなり。茲に之を詳説せんことは素より能はざれども、吾等の信ずる所を簡説せんに、眞善美の三者は理想に於ては相一致せんと欲すと雖も、而かも現實に於ては多少相分離するを免れず。人は進化の生物なり、而して萬有進化の過去現

道の爲に將來の大成を期せざるべからず。吾等の見る所を以てすれば、從來新演劇を評するものは毎に其目安を卑ふし、『書生にしては』を標準として之を賞揚するが如し。然れども今日は新舊兩劇に對して公平なる比較評を爲すべきの時なり、宜しく一定の規矩により之を軒輊すべし。慈善的批評は偶々世人を惑すの弊あるのみ。吾等は諸新聞の劇評家中、銅臭によりて其筆を枉ぐるものあるを耳にす、萬一斯る事實ありとせば之れ實に文筆の賊にして社會の公德を害せるものと謂ふべし。凡て美術の批評は批評中の最も難きものなり。然れども其難き丈け其れ丈け多く批評の必要あるものなり。吾等は我批評家の公平無私にして、兼て其批評の綜合的ならんことを希望して已まざる也。

(二十八年八月)

美術と道德

黑田清輝氏の裸躰畫一たび博覽會の美術館に顯れてより可否褒貶の評判一時は喧しき迄に盛なりしが、それを難ずる人の論點は主に風規に關せるのみにして學理上より道德と美術の關係を論じたる人とては絕て見當らざりき、獨り大阪朝日

去んぬる七月七日の讀賣新聞は報ずらく、

壯士演劇は近來益々好人氣にて舊演劇は之に壓倒せられんとするの趨あれば、玆に舊俳優を混じて一種の折衷劇を作り、仕組脚本は勿論舞臺茶屋等凡て改良を加へたる一大演劇を組織せんとて奔走し居るものある由、之は久しく外國に遊びたる某某氏共黒幕の由にて、金主及び俳優の望手も頗る多く、略其組織も成りたりと、兎に角演劇界の爲めに喜ぶべきことなり。

是れ果して事實なるか。新演劇も舊演劇も共に未だ全く時勢に投合する能はざるの今日、巧に是二者を調和して更に演劇界に一生面を拓くものあらば、社會の歡迎を受けんこと疑無し。而も是れ容易の事に非ず、經驗學識に富み、兼て斯道に天才ある人にして初めて是を爲し得べし。吾等は我演劇の將來の爲めに愼重なる計畫を希望せざるを得ず、新事物に於ける先達の失敗は、大に後進有爲の意氣を沮喪するものなればなり。

吾等は是に於て我劇評家の責任の甚だ輕からざるを認む。俳優は他の美術家と等しく、自己の技藝に對して多く無意識なり。審に其長短を指摘し、改善取捨の道を示すものは、之を劇評家に待たざるべからず。劇評家は嚴に公正自ら持し、斯

む。園洲子人に語て曰く、『天井から泥棒が落ちたり、縁の下から赤い顔をしたり、巻物をくはへたりして出ると、入るから妙です』と。斯の如く歌舞伎演劇にありて夢幻劇の多く成功し、寫實劇の多く失敗するは何故なりや。之れ蓋し舊演劇の藝風及び舞臺が寫實劇に適應するの困難なるに職由せずんばあらず。是困難は果して打勝つべからざるの困難なりや、若し然りとせば舊演劇の前途は甚だ望無しと謂はざるべからず。我歌舞伎俳優は是點に向て大に注心せんことを要す。今日は變遷時代なり、社會は未だ全く新を迎へず、又未だ全く舊を去らず、其一半は後顧し、其他半は前面す。而かも世運暫くも停らず、後顧するもの漸く去りて、前面するもの獨り殘り、社會は茲に全く其革新の功を竣ふるに至らんとす。今日舊劇の尚一部の嗜好を占斷するは、要するに社會嗜好の保守的傾向に遲ぎざるのみ。吾等を以て之を見れば從來歌舞伎劇に於ける區々の改良は、未だ以て日進の時勢に伴ふに足らず。因循姑息斯の如くにして日を曠せば、吾等は舊演劇の漸く現實社會に遠り、遂に今日の能樂の如く古代の遺物として僅に其餘息を保つに至らんことを恐るゝ也。

ふ可きに非ず。吾等を以て是を見れば新演劇は決して一時の反動のみに非ず、吾等は將來國劇の要素と爲すに足るべきものの慥かに其中に存するを認む、壯士俳優の成功は實に是要素あるに依る。然れども彼等は是要素に就ては殆ど無意識なり、彼等は何故に成功しつゝあるかに就ては殆ど知る所無く、漫に寫實を尚び、生呑活剝の末技を固執するのみ。若し炯眼なる批評家の之を提撕し、戒勸するもの無くんば彼等の前途も亦危いかな。要するに新演劇は時勢の寵兒なり、然れども時勢に乘ずる所以を知らずんば寵兒亦棄兒と爲り了らんのみ。新演劇の勢力斯の如くなるに當りて歌舞伎演劇の依然として其全盛を維持することは頗る注意すべき事實なりとす。而して歌舞伎演劇の中にて常に最も評判好きは古來其まの所謂夢幻劇若くは世話狂言にして、新作物の概して不評なるは更に大に注意すべき事實なりとす。早稻田文學記者曾て劇を論じて曰く『夢幻劇の快なるものには自家特有の長所あり、宜しく其純なる有樣にて保存すべし、之に加ふるに寫實的分子を以てすべからず』と。之れやがて世人の嗜好を代表せるものと謂つべし。歌舞伎座曾て連に新作物に失敗し、遂に仙代萩を演ず、滿都喧傳し看者毎に場を塡

に非ず、川上某者が本來已に壯士也。これもしも演劇と稱するを得ば、衆生は盡く俳優なり、人事は悉く演劇なり。故に予は斷じて川上某の動作を評せず。云々

さらば其狂言は如何と言ふに、是とても只新奇なるをのみ主眼とし、多くに我邦とは人情風俗を異にせる佛蘭西あたりの脚本若くは小說を極めて拙なく飜案したるものにして、とても正劇として見るの價値あるものに非ず。某雜誌記者が所謂『偶然、不自然、沒人情、無關係なる片々零碎の事實を、極めて拙劣に、竝べて秩序無く』書き綴りたるものにして、婦女童幼の耳目を喜ばしむべきも、少しく敎育ある社會の嗜好を滿足せしめんこと思ひも寄らず。技藝も狂言も共に彼等が成功の原因と爲すに足らずとせば、吾等は之を一般社會の氣運に歸するの外無き也。

社會の氣運とは、一般人心の傾向に外ならず。之れ今日一朝にして顯れ來りたるものに非ずして、已に維新以後の新文化の中に胚胎し、演劇改良會に其產聲を擧げ、爾來文化の發達と共に冥々地に社會の中に生長し、遂に今日に至りしなり。勿論壯士演劇は今日の嗜好に向て十分なる滿足を與ふる者に非ず、然れども新文化によりて育成せられたる新嗜好に多少適應する所のもの、其中に存することは疑

比に非ず。以來市村座、歌舞伎座等に於ける彼等が成功は、傲慢なる歌舞伎俳優をして背後に瞠若たらしめたりき。彼等が斯の如き全盛は果して何によりて然るか。彼等の技藝の巧妙なるに據るか其狂言の面白き爲なるか。吾等は想ふ、共に然らず。技藝としては彼等の爲す所は殆ど見るに足らず、彼等は只まことらしきを得て其の能事終れりとなし、寫實以外に美術の本領あることを悟る能はず、之を歌舞伎俳優が所謂る蘊醸神韻縹渺たるに比すれば、其の巧拙雲に天淵のみに非ざる也。毎日新聞の劇評家は元來新演劇に酷なるものなれども、其の言ふ所甚だ理に當れり。曰く

> 名優梅幸が牡丹燈籠の伴藏を勤めし時、一疋の蚊なき歌舞伎座の舞臺に團扇使ひと仕種とにて忽ち千萬疋の蚊の入り亂れ居るが如く感ぜしめしは實に至藝に非ずや、無を有と變じ虚を實と化す、之を美術と云ふのみ。更に卑近の例を求むれば、彼の鐵拳を揮つて眞に他人の頭を打つは之れ技藝に非ず、只頭を打つ眞似して眞に頭を打ちし如く見せしむるもの、即ち眞の演劇なり。今夫れ川上なるもの亀も演劇の本旨を解せず、已れ壯士なるが故に壯士の役を勤めて能く壯士を寫し得たりと稱すれども、こは寫せる

然るに今を去る數年前、西鳥越の中村座にて劇界革新の新旗幟を擧げたるものあり。是れ即ち川上某が所謂壯士芝居なりき、之れ明治の演劇史上に於て殊に注意すべき事實なりとす。よしや彼等が當時の成功は極めて微々たるものなりしにもせよ、歌舞伎演劇が全盛を極むるの時に當り、渺たる貧書生の一群が帝都の中央に於て新劇座を組織したることは、少くとも社會の氣運が斯の如き大膽なる、殆ど無謀なる計畫を爲すの餘地を彼等に與へたるに依らずんばあらず。是れやがて反面には社會の人心が多少舊演劇に慊焉たらざるものあることを暗示するものには非りしか。新文明は新嗜好を生じ、新嗜好は新事物を要す、舊演劇にして新嗜好に伴ふ能はずんば、人は當に新演劇を求めんのみ。然れども新演劇の爲には不幸にも、舊演劇の爲には幸にも、壯士俳優が當年の伎倆の拙劣なる、歌舞伎俳優が巧妙なる技藝を見慣れたる世人の注意を惹くに足らざりき。或物は物無きに優る、是に於て社會は舊に依りて歌舞伎演劇に謳歌せり。然れども幾もなく川上劇は土を捲て再來し、旗皷堂々、二度び舊演劇に對壘したり。彼等が昨春淺草座に『意外』及び『又意外』を演ぜしこのかたの勢力は、佐賀騷動、板垣退助傳を演ぜし當年の

に至れば、則ち臂を攘て之を放棄し、冷然として顧みず。故に社會にありて永く其の生存と昌榮を保たんと欲せば、世運の推移に伴ひて、隨時其身を處するの覺悟無かるべからず。

今日の歌舞伎演劇は如何。果して能く世運の推移に伴ひ得たりとするか。十九世紀の新文明の爲に殆ど全く搖盪せられんとする今日、人心の嗜好を繋ぎ得て尙能く過去二百年の榮華を持續し得べしとするか。去んぬる二十年の間に歌舞伎演劇が多少其面目を革めたるは事實なり。而かも斯の如き改革は、急激過渡の今日、自家將來の生存に對する十分なる擔保なりとするか。吾等は甚だ疑ふ。

顧れば社會が舊劇に對して不滿足を感じ初めしは今より十數年以前のことなりき。於是演劇改良の聲は一時團洲をして活歷熱に浮かれしめたるまでに喧しかりき。而れども當時之を唱へし人は、主として洋行歸りの學者官吏等にして、一般社會の嗜好は未だ中心より演劇改良の必要を感ずるまでには進歩し居らざりき。之を以て團洲が苦心せし活歷劇も、多數劇評家の嘲笑を招きし外は、何等の結果をも殘さず、舊歌舞伎演劇は、舊に依りて天下の嗜好を壟斷せり。

氏が國文に精通せるが爲、其語遣ひの精嚴且優美なるは驚くべしと雖も、一般國文の常として、單調和平に流れ易く、概して氣力に乏しきは是非も無きことか。又道行中の有名なる『コーラス』を省きしは惜むべし。又最後に氏に注意したきは『小夜砧』の如き想は面白きに相違なけれども、吾國情には寧ろ相應はしからぬふし多し。吾等は氏が徒に西文の舊套に依らず、獨得の詩思を皷吹して平生の素養と天才を十分暢發せられんことを希望して已まざるなり。

（二十八年七月）

演劇界の風潮と劇評家の責任

社會は個人の如く活物なり。凡て活けるものは念々變遷流轉して一彈指の間も同處に停滯することなし。社會の事物にして時と處とに隨ひ、是變化に順應して能く其身を推移するものは生存するを得べく、否ざるものは滅亡するを免れず。學者が謂ふ所の適者生存は即ち是れなり。社會は唯自己全躰の保存を以て事となすを以て、其中の個々躰に對しては極めて冷淡無情なり。其の己れに適するものは即ち之を容る、而かも唯容るゝに止まる。一朝己れと雁行並馳する能はざる

Sechs Bretter und zwei Brettchen.

と言へるに比して其深刻及ばずとするも、温雅は勝れたるが如し。吾等を以て見れば、ビュルゲルのは少しく露骨に失せるに似たり。スコットが之を英譯して

'Tis distant far, low, damp, und chill,
And harrow, trustless maid.

とせしに比すれば、武島氏のは數層巧なるが如し。總じて武島氏の文字は溫籍縹緲として餘情に富む、之れ西文には見られぬ長所の邦文に存するが故ならんか。鬼氣讀む者を悚らす如き馬上の問答の代りに、夫を形容して『霧のまがひに影薄く』と云ひ『身は朝影と細り』と示せるが如き、少くとも妻が夫を抱きて

But why so stern and cold?

と怪める様にせしスコットの譯のありのまゝなるには優りなん。斯く書振の異なるは、前にも言へる如く、主として想の相同じからざるに因るなれば、穴勝ち之を以て彼此を上下せんとには非ず。武島氏をビュルゲル、スコットに較べ得べしとは尚更思はず。只武島氏の此一篇は一個の抒情詩として、又一個の飜案物として注意すべき價値あることを述べたるのみ。勿論氏の歌に難ずべき點なしとには非ず。

と記したりしはビュルゲルが

Tasch' auf ein eisern Gitterthor
Ging's mit verlängtem Zügel:
Mit schwankter Gert' an Schlag davor
Zerspringte Schloss und Riegel.

と明に書きたるに比すれば、自ら兩者の差別を見るべし、但し夫の行衛を其口よりほのめかしたる用意は、武島氏亦之を怠らず。『あはれ、吾夫待ちねかし、寢よとの鐘も打つなるに、こよひは馴れし我閨のなごやが下に明してよ』と言へるに、夫は答へて

おな心無のいひごとや
來ん年月の末かけて
千代に住むべき我宿を
いそぐに何か憂かるべき

と言へるは『レノレ』の夫が妻に答へて

Weit, weit hier,...still, kühl und klein:

Des Leibes bist du ledig:
Gott sei der Seele gnädig!

と言へるにても明なるべし。故に『レノレ』は首尾を通じて記實的なりと言ふべくして『小夜砧』の純ばら主觀的若くは抒情的なるとは自ら趣を異にす。要するに『小夜砧』は『レノレ』の事實を取りて之を「ファンタジー」化したるものなり。予は是二者の間に優劣の意を寓するものにあらず、只武島氏が此歌は普通の飜譯と見るべからざるを謂へるのみ。既に想の上に於て根本的にけじめあれば、其の文章亦等しからず。武島氏は全く妻と母との問答を省き、妻と夫との馬上の談話を畧し、常に間叙法を用ひたる邊は察するところ、記實的筆法を出來得る丈避け、專ら婉微恍惚の文字によりて夢現の境を叙せんと務めたるが如し。故に美はしき馬上の道行の終りに

物も覺えぬけうとさに
あたりの景色ふと見れば
人氣たえたる古寺の
牛ばやれてぞ立てりける

脫躰せるものと見しは僻目か。是詩はビュルゲルが作としては有名なるものにして、英國にてはスコット之を飜譯して William and Helen と題せり（尙此外にテーロルスペンサーなど云ふ詩人の譯もあり）、されど飜譯の常として原作の妙を缺ける所少からず。『レノレ』(Lenore)の大意は『小夜砧』に同じけれども其の主とする所の意は大に異なり。即ち『レノレ』にありては妻は夫の歸りの晩さに神を怨み罵りしが爲に其罰として夫の死靈に伴はれて死せりと言ふにあり。妻は母の慰むるを耳にもかけず

O Mutter, Mutter! Hin ist hin!
Verloren ist verloren!
Der Tod, der Tod ist mein Gewinn!
Stirb hin! Stirb hin in Nacht und Graus!
Bei Gott ist kein Erbarmen.
O weh, O weh mir Armen!

など狂ひ罵りしが爲に望み通りに死の天罰を受けしなり。之れ其末段にて、

Geduld! Geduld! Wenn's Herz auch bricht!
Mit Gott im Himmel hadre nicht!

昇りつなりつ行く程に
千さとの外に來にけらし
五百重の峰も越えぬらし』

とかくする内、猛き駒も行なやみ佇みぬ。妻は不圖四邊を見ればこはいかに、身は古寺の塚の邊に空蟬の魂無き骸を抱きながらに仆れ居りぬ。折しも月影消えて天地の間に闇のみ殘り『木深くもゆる青き火にうかるゝ魂の叫ぶ』聲のみぞ聞ゆ。

是れ『小夜砧』を叙事詩として見たるあらましの筋なり。事如何にも奇怪なれども、之を一篇の抒情詩として見たらんには、洵に意味深き作なりと謂ふべし。秋夜思婦の心、麻に亂れ火に燃え、世に遺る瀕無き一念の幻に、吾身ばかりの現を寄するもの、情誠にかくもあるべくや。文辭の精鍊典雅なるは言はずもあれ、再讀三讀すれば、幽玄一物の微我心に冥契するもの有るを覺ゆ、世の徒に詞藻を富麗にして俗耳を娯ましむるものと自ら徑庭あるが如し。吾等は武島氏が是詩篇を近來有數の作と稱ゆるを吝まじ。

蓋し『小夜砧』の一篇は獨逸の詩人ビュルグルが『レノレ』と謂へる詩より所謂換骨

ぬ岩が根の對のやどりに急』かんと言ふ。妻は夜も更けぬれば、今宵は我閨に明かしてよと言へば、夫は心無の我妻や、行末長く住むべき宿に行かんに、何とて躊躇ふぞと言ひつゝ、妻を抱きて駒に打ちのせ、やをら手綱をかいぐりて、二つ三つ鞭をあつれば、駒は大地を蹴て進み行く。野を掠め、山を横り、川を越え、山又山、野又野、川又川、妻の心は冷え入りて小百合の如き腕もて夫の胸を抱きしむれば、休まぬ駒の歩みにも、夫は尚飽かず思ひけん、鞭の響ひま無く疾風の如くかけりゆく、

積もる落葉のさやげるは
深き山路に入るならん
白雲路をうづむるは
み山の奥になるならん』
岩瀬の浪のとどろくは
谷の小川やわたるらん
雫の露のちりくるは
滝のあたりやすぐるらん』
こいしき岩のついら折り

待つ女あり。秋の夜に月影もうら寒く、虫の音もたえ〴〵なるに思ふことのみ増りて、砧打つ調べもたゆみゆく折しも『軒端の荻か木枯か、穂波をわたる小夜風か前の柵橋音たてゝ』越えくる聲の聞ゆ。やがて『拂はぬ庭の草わけて、駒の足掻の止むなべに、板やの扉打ちたゝき音なふ聲』の聞ゆ。妻は

荒れたる閨のひまとめて
とのもの方を見出せば
霧のまがひに影うすく
戀しき夫ぞたてりける

夢とも現とも分らぬ嬉しさに身を倒しつゝ、さしよりて『好くぞ吾せこまさなくて』と縋りつけば、夫は

旅路の露に濡りけん
身は朝影とほそりつゝ
やつれはてたる手をのべて
泣きふす妻をかき撫でぬ

夫は長の月日わびしとも思ひ撓まで、待暮したる妻の嬉しさに、是より『とはに動か

其の罪洵に惡むべし。死せるもの又如何ともすべからず、之を弔ふと稱し、我面目の小兒らしき議論を列べて是の恐るべき罪惡を辯護し稱贊するものに至つては其の愚遂に及ぶ可からず。自殺せる人を憐むことに於て吾等素より人後に立たじ、然れども之を責むることに於ても亦衆に卒先せざるを得ず。私情と公道とは嚴に區別せざるべからざる也。

（二十八年七月）

武島羽衣の『小夜砧』を評す

征清の御軍につれて一時無暗に流行りし軍歌は頓に下火となりて、韻文界も稍々物寂びたる折柄、武島羽衣の『小夜砧』の如き立派なる作を得たるこそ嬉しくも亦心強けれ、曾て帝國文學に墨染櫻と題する長詩をものして江湖に名を知られしも同じ人なりき。此度のはそれにもまさりて詞も想も共に秀でたりと覺ゆれば、茲に短評を下して是新詩人の爲に我文學社會の注意を促さむ。

『小夜砧』は形の上よりは敘事詩なり。其概略を物語らんに、遠征の夫の果敢なき最後を遂げしをも知らで、傾けるよもぎが宿に衣して打ちて、歸らぬ人のかへるを

青年文人の厭世觀

近來青年文人の間に世を厭ふの思想著しく萠え出て、爲に自殺を遂ぐるものすらあるは洵に慷はしき事共なり。世も人も共に全からずして事多く望と違ふは悲しきことには相違無けれども、受け難き人身を一時の情に殉せしむる無分別は憐むべくも亦笑ふべし。是れ詮ずる所人道に對する道念の淺くして理想と現實との關係を辨へざるの罪に坐す。さるにてもかゝる傾向の、基督敎の青年に多きこそ、訝かしけれ、吁之れ健全なる實驗的知識に乏しき青年が慾に宗敎の中に安心の地を求めんとしたる弊に非るか。人生至愚ならば即ち已む、僅かの知識に依りて漸く懷疑的精神を持ち初めたる青年をして宗敎に近かしむるは生兵法者に正宗を假すが如し、大疵の基ならざること希なり。道理の疑は道理を以て解かざるべからず、宗敎は感情の對象を以て終始すべきなり。

三十足らずの黄口の書生が、其の小やかなる胸の中に自分勝手の三段論法を組立てゝ拳銃往生を遂ぐるが如き、其の情洵に憐むべしと雖も、其の愚洵に笑ふべく、

人は、其の篇頭にチョーサーの時代、シェキスピアの時代ミルトンの時代等、一人を以て一世の文學を代表する者、少からざるを見るなるべし、然れども我邦の文學は、古來一人を以て其時代を代表し得る者、果して幾何ありや。英國の文學はチョーサー以來厘に四百餘年を經過したるに過ぎず、我文學は少なくとも其三倍の年齡を有せるに係らず、一人の大文學者の其時代を代表せし者なし、豈慚づべきの至ならずや。彼の鷗外、露伴は、今代の大家として目せらるゝ者なり、而して猶一年を代表する能はず、安ぞ能く一世を代表せんや。吁明治の文學界果して其の人なき歟。若し今代を以て文學隆盛の時代なりとせば、ストラトフォードの孺子安くにかある。

(二十四年六月文學會雜誌第一號)

らず、或は種類によりては、大に簡明平易を嫌避せざるべからざるなり。設令ば彼の崇高（サブライム）なる事物を寫すに當て、其の一目瞭然たる者と、幽暗測る能はざる者と、其の想念孰れか深大なりや、其の平易なると、嶮難なると、其の感情孰れか深刻なりや。世界は夜と晝とに於て少しも變化する所なし。人は何が故に晝を恐れすして、夜を怖るゝや。渺茫たる平原と大洋とは、極目際涯なきは一なり。人は何が故に獨り大洋を望て崇大なる感情を喚起するや。此等は修辭學の初歩にても讀みたらん人は、容易に理解し得べきなり。蓋し詩文の高妙なる者は片言双句の間に、宇宙を包含せんと欲す、凡人俗子の一見して會得する能はざる、素より其處のみ。吾人は敢て文學者に望む、其の文學の拮掘なるを憚かる勿れ、其の意味の模稜なるを忌む勿れ、崇高なる文字は實に之に依て生ずればなり。

時代

二三年前に、明治廿三年の小説界は鷗外、露伴の時代なるべしと預言したる人ありき、而して渠れ鷗外露伴は、果して如何なる大著を殘せしや。英國文學史を繙く

第一高等中學校不敬事件

吾等は日本帝國臣民として、平生甚だ這般の事を口にするを憚る者なり、今や之に向て佞辯利口を逞ふせんとする者あるに至る、豈慨嘆に堪ふべけんや。嗚呼、我國民の德義心、將に腐敗せんとせり、今にして高尙純潔なる德義心を、國民の思想に感銘せしめずんば、百歲の後、鼎の輕重を問ふ者あるに至るや、未だ測るべからず。吾等は將來の我文學者が德義上の責任の甚だ輕からざるを見るなり。

美學と科學

近來人動もすれば曰く、文章の要は己れの言ひ顯はさんと欲する意味を、簡明に人に知らしむるにあり、故に其の文字は須く婦人小兒の解し得るまでに平易ならざるべからずと。此れ美學と科學との區別を知らざる者の言のみ。物理學の講義は務めて平易ならざるべからず、商店の帳簿は極めて簡明なるを要す、然れども美學の詩文は、必ずしも平易簡明なるを要せざるなり、否、當に之を要せざるのみな

夏季休業

日本の風景は東北にあり。東北は恰も支那の蜀の如く、又歐洲の瑞西の如し。若し山川偉人を生ずるの言をして眞ならしめば、ホーマーの希臘に於けるが如く、ダンテの以太利に於けるが如く、我東北の天地は當に一大詩人を出さゞるべからず。夏期休業は近けり、一笠一杖、筆と紙とを腰にして五岳の壯遊を試む、亦快ならずや。吾をしてホーマーたらしむる者、實に茲にあり、吾をしてダンテたらしむる者、亦實に茲にあり。

才と苦學

才ある者は苦學せず、苦學する者は才あらず。苦學と才と何が故に一致せざるや。是れ苦學は冒險を惡み、才は束縛を賤めばなり。才を惜むこと處女の如く、苦學を愛すること駿馬の如くんば、吾等大學者たるを得ん、大文學者たるを得ん。

は則ち妙なりと雖崇高（サブライム）なる品位は何くにかある、吾人は我が文學の爲に深く之を惜む。

故郷は文學上の一大勢力

嗚呼、故郷よ、爾は抑も如何なる力ありて吾れ等をしてかくまで重く爾の上に頼らしむるか。吾れ等は富貴を忘るゝを得、吾等は名譽を忘るゝを得、否吾れ等はあらゆる人生の事を忘るゝを得、然れども決して爾を忘るゝ能はざるなり。孤客日暮に折柳の曲を聞かば、世界を擧げて之に與ふるも渠は寧ろ歸て舊廬に眠らんとを願ふなるべし。嗚呼故郷、爾は實に一大勢力なり。古來詩人の爾を咏ぜし者、夫れ幾萬篇の多きに達せしや。若し爾を去らば我文學の世界は、如何に荒涼無味なるべきぞ詩に歌に愈々出でゝ愈々新なるは爾の感情なり、如何なる詩も歌も吾れ等をして遺憾なからしむる程爾の情味を寫したる者はあらざるなり。鳥は其の巢に歸り、人は其の土に歸す。敢て同窓の諸子に告ぐ、春夏閑を得るあらば故郷の山川に游びて、文學の爲に其の詞藻を涵養せよ。

究する者、寥々として晨星の如し。當今の文學者、能くミルトンを讀み、シェキスピアに通じ、能く「ファウスト」を說き、「ラオコン」を口にす。然れども敢て問ふ、渠れ等の中、左國史漢を遍讀し、楚辭八子に通曉する者、果して幾何かある。彼の現今の歐洲文學の淵源をなす者は、實に羅甸希臘の古文學なり、我文學の基礎をなす者は、實に支那文學なり。方今の小說家等之を知らず、徒に支離滅裂の文字を臚列し、輕妙奇警を以て相唱和す、吾人我文學の爲に深く之を悲む。

元祿小說の流行

吾人は元祿小說の流行を以て我が文學の衰兆となす者なり。彼の西鶴、其碩の輩は素と市井の游冶郎のみ、孳實なる文學を學ぶに堪へず、曲巧世に阿り、歡を婦女子の間に求む、宜なり其の理想卑下、其の文字猥褻、少しも高尙純潔なる趣味なきや、然るに方今の人、其容易なるを利とし、甘じて其の冷杯殘肴を嘗むる者、比々踵を接す、豈慨嘆に堪ふべけんや。日本文學の要する所は輕妙なるにあらずして、寧ろ森嚴なるにあり、洒落なるに非ずして、寧ろ眞摯なるにあり、幇間巧に人の頤を解く、妙

之あらん。吾人以爲く、斯の如き者は、畢竟今日の人、才餘りありて學足らざるが爲なりと。世人動もすれば曰く、詩は以て學ぶ可からず、小說は以て習ふべからずと。是れ大に然り、然れども內學問なくんば、區々たる曲巧小才又何をが爲し得ん。所謂胸中萬卷の書なくんば能文亦豪煎の語ならんのみ。學問ありて人初めて識見あり、識見ありて而して後初めて高妙の著を見るべし。嚴滄浪曰く、詩に別材あり、書に關るにあらず、詩に別趣あり、書に關るにあらず、然れども多く書を讀み、多く理を窮むるに非ずんば則ち其の至を極むる能はずと。吾人以て至言となす。現時の人、身に些少の才あれば、則ち筆を弄し文を廻し、彫虫鎖尾の巧、以て一世を籠絡せんとする者多し。是を以て累篇積牘、月露の形を出でず、雄大眞摯なる大著の、以て後世に誇るべき者なし。吁、一時を欺く、何かあらん、只後世の明治文學を評する者夫れ之を何とか言はん。吾人は日本文學の爲に竊に之を憂ふ。

漢學の衰頽

西洋の新思想一たび我が文學界に入りてより、漢學漸く衰頽し、今や熱心之を講

之が爲めのみ。

是に於てか吾人は知る、所謂詩人の眼孔は此の自然を感得するの靈性に外ならざるを。物を形なきに觀、聲を響なきに聞き、能く形躰以外の「美」を闡揚するもの、目之を見るに非ず、耳之を聞くに非ず、靈想只之を認むるのみ、靈想は實に詩人の生命なり。彼の徒に平仄を排列し、「ライム」を喋々する者は是れ「ライミスト」のみ、安ぞ詩人と謂ふを得んや。

文學者學問なし

吾人、世に詩人と稱し小說家と稱する者を見るに、才思煥發、一見人を歡ばしむる者少からず、然れども之を再讀し之を三讀して猶餘情ある者は其れ幾何かある。吾人平生好で古人の書を讀む、之を十數遍して飽かず、情味愈讀て愈深き者あるを覺ゆ。之を喩へんか、古人の書は猶千尺の碧潭汪洋として其深さを知らざるが如し、蛟龍潛まんか、長蛇伏せんか、人得て知る能はざるなり。今人の書は猶行潦の消々として流るゝが如し、一目清冷人意を快ふすと雖、底沙以て掬すべし、何の餘情か

すれば、尤も巧妙なる詩を作らんと欲せば、其の寫す所の者亦其の外形最も單純にして、內情尤も弘大ならざるべからず。何となれば、前に云ふ如く、詩は最も簡單なる言語を用ひて、最も深長なる意味を寓する者なればなり。然らば則ち、世界何物か其の外形最も單純にして、其の內情最も弘大なる。吾人は直に自然其の物を推さゞるべからず。所謂詩人の眼孔とは此の自然の微妙を看破するの能力に外ならざるなり。

譬へば、明月天半に懸り、蒼穹杳として星斗辰なし、唯是れ一個の圓躰、光を天に放つのみ、常人の之を賞する者、只其の皎々として明なるの美を稱するのみ。曉靄淡然として風烟四もを掠む、仰き見る、一星晃として尙山巓にあり。唯是れ一點の光輝のみ、誰か又之を激賞する者あらん。然れども詩人の之を觀察するや、形躰以外に蘊蓄する微妙は汪洋として其情琴を鼓し、或は宇宙的觀念より、或は歷史的聯想より、感情橫溢し意氣八荒を充塞する者あらん。李靑蓮が「天上有月來幾時」と傲呼し、「今人不見古時月、今日曾經照古人」と浩歎せしもコレリッヂがアルプス山を仰ぎて、「爾は抑も如何なる靈異の力ありて能く曉映の運行を停滯するか」と叫びたるも、皆

水底に潜入せざるべからず

批評家の務むべき所は、即ち此水底の眞珠を獲取するにあり。徒に外面の缺點を喋々する者、是れ「穴探し」のみ、豈批評と稱するを得んや。何となれば詩の本躰は其缺點にあらずして、其美に存すればなり。

詩人の眼孔

詩の意義たるや、實に弘大なり、是を以て古より詩人の之が定義を下すに當て各々多少の相違あるを見る。或は單に感情の語なりと謂ひ、或は最善の思想を歌ひ得る樣に排列したる者なりと謂ひ、或は最も幸福なる人の、最も幸福なる時の記述なりと謂ひ、紛々として一ならず。然れども之を形躰上より觀察して、詩は最も簡短なる言語を用ひて最も深長なる意味を含蓄したる者なりとの說は、何人も首肯する所なるべし。

凡そ殺伐なる戰爭を叙するには、其の文字自ら激勵慘憺ならざるべからず、優柔なる愛情を記するには、其の文字自ら委曲纏綿ならざるべからず。是を以て推論

なりとする者に非ずと雖、往々批評家が示す所の理想の、却て著作の下にある者あるは、吾人の深く遺憾とする所なり。スッコト曰く、文學者は能く世好に動かさるゝも、亦能く世好を動かすの力なかるべからずと。批評は即ち時代の趣味を顯はすの星斗なり、或る場合に於ては著述其の物よりも、却て人心の好尚を左右するに勢力ある者なり。如し批評家の理想にして卑下陋劣、其の跡却て高潔なる著作を沮喪するが如きあらば、吾人は何れの日か我文學の大興を望むを得んや。

豈啻に之のみならんや。現今批評家の一大缺點は人の美を成すを好まざるにあり。渠れ等は只に誹謗罵言を以て批評家の本領となす。此の如くんば初學後生を誘導補育する所以の實、果して何くにかある。吾人は是等の輩に向て其の理想の高尚にして其の胸襟の濶大ならんことを望むと共に、批評の本領は缺點を摘發するに非ずして、寧ろ作者の隱匿せる微妙を顯彰して之を世界に傳ふるにあることを知らしめんと欲するなり。ドライデン云はずや

缺點は藪片の如く水面に浮ぶ、
眞珠を求めんと欲する人は。

分析解說するに依らずんばあらず。之を以て「ホーマー」の如き、沙翁（シエキスピア）の如き、其の千古の大家として稱道せらるゝ所以の者は、一に少數批評家の達眼、能く其の眞相を看破し、之を世界に說明したるに歸し、世の之を崇拜する者は、只此等批評家の讃辭を反覆するに過ぎず。之を要するに詩人は天然を解して、之を批評家に傳へ、批評家は詩人を解して、之を世界に稱導するに外ならざるなり。

然どれも吾人は彼の孟浪放縱なる批評を以て詩を益する者となす者に非ず。吾人が詩に於て缺くべからずとする者は、破壞的批評に非ずして、構成的批評なり眞正の批評は、其の缺點を示すと同時に、其の改良すべき進路を指示せざるべからず。彼の徒に其の過失を摘發し、罵詈百出、以て自ら高しとする輩の如きは、「文學界の破落戸」と謂つべし。

二、批評の本領

文學の進步は、批評と著作と相提携して、共に完全の域に達するにあり。故に何れの國に於ても、批評家の理想は遙に著述家の上にあるを常とす。然るに我文學界の現狀を見るに、間々之に反する者あり。吾人は決して今日の著作を以て、完全

分析する者、必ずしも之を構成すること能はず、其の詩の詩たる所以の者に至ては如何に精緻なる批評家と雖、決して之を指摘すること能はず、只其の心を以て心を傳ふあるのみ。

卓見と謂つべし。試に見よ、彼の植物學者は、一朶の櫻花を採り來りて、巧に之を分析し、蕊瓣蕚葩一々之を吾人に示すを得ると雖、彼れ如何にして再び之を結合して、元の櫻花となすを得べきや、之を分析すると同時に、花は全く其の生活を失ひたればなり。詩尚ほ花の如し、所謂「詩の詩たる所以の者」に至ては、幽玄微妙、其の感情の神祕なる、其の銘覺の神速なる、錙銖補綴の功、人以て其の美を成すと能はざるなり。

批評の詩情に於て益する所なき、已に斯の如し。然らば則ち批評は詩に於て全く益する所なきか、曰く、之れ大に然らず。蓋し詩人は能く美妙を直覺するも、之を理解する者に非ず、之を理解する者は即ち批評家なり。詩人は直接に自然を感銘し、能く其の微妙を知得するを得るも、自らは其の如何にして微妙なるやを知らず、之を說明する者は批評家なり。若し夫れ詩人の託興高遠、寄情深幽にして、常人の理解する能はざる者に至ては、其妙を悟り其理を識るを得るは一に批評家の之を

一、詩と批評との關係

世に學て摸すべからざる者あり、習はずして神に入る者あり。言論文章の如きは、拙劣なるものは、學て以て巧妙なるを得べく、粗野なる者は、習て以て優美なるを得べし。是れ人、何故に其の巧妙なるか、何故に其美妙なるかを知るに止まらずして、尙ほ進て自ら其の域に達するを得ればなり、言を換へて之を言へば、人は之を批評し得ると同時に、之を構成するを得る者なればなり。然れども詩人は天生せられたる者にして人造せられたる者に非ず。勉勵苦學は詩人の發達に於て、或は補益ありとするも、決して詩人を感銘（インスパイア）すること能はず、此等は詩中に多少の材料を供給し得るも、決して吾人に與ふるに所謂詩想を以てすること能はざるなり。

詩人と外物との關係已に斯の如しマコーレー、其の著「ドライデン」論の首に於て、詩人と批評家との關係を說きて曰く、

一の器械を分解し再び完全に之を組成するの法を知れる者は、必ずや新たに斯の如き器械を構造するを得べし。凡て分析的の學術は、其の科學と哲學なるとを問はず、能く之を分解する者、能く之を結合し得るなり。然れども詩にありては然らず、之を

文學會漫評

靈想

世に自ら詩文家と稱する者あり、其の言ふ所を聞くに、曰く、文躰は斯くせざるべからず、曰く、文字は斯く用ひざるべからず、曰く、某の文は語格を誤れり、曰く、某の句は「テニヲハ」を破れりと。吁、文體何物ぞ、語格何物ぞ、文學の極致は天地人情の靈想を發揮するにあり。靈想の本源を棄てゝ、章句の末流に走らば、議論愈々巧にして、本を去る愈々遠からん。昔し一靴工あり、畫士をして其の肖像を畫かしむ、畫成る、靴工一見して曰く、汝の畫く所誠に善し、只恨らくは靴形甚だ眞を失すと。夫れ畫に尚ぶ所は氣韻にあり、全體の風致にして其宜しきを得ば、則ち好畫たるを妨げず。靴工之を知らず、屢々靴の形狀を是非して以て得たりとなす、愼むべきなり。世の所謂詩文家は其の痴呆ぼ之に類するなきか。

現今批評家の一缺點

路の過ぎ來れるを顧れば、又多少の感慨無き能はず。身事に茲に從はずと雖も、我が文學の光榮ある前途は吾等のくれ〴〵も祈望する所なり。今より數年の後、筆を執て諸君と再び相見ゆるの日、吾等は其の吳下の舊阿蒙たらざらむことを期すべきなり。

終りに臨て特筆すべきは、吾等の後に本欄の記者たるべき人のことなり。此等の人々は皆是れ當世の才人、學東西に洽く、語は數國を兼ね、英獨及び印度佛敎の文學は殊に其の長所とせらるゝ所なり、識見共に吾等の淺劣に比すべくもあらず。吾太陽の讀者は、是等の記者より當代一流の文學評論を聞かむことを樂み得べきなり。

最後に讀者諸君の健康と光榮とを祈る。

（廿九年十月）

往々過去に溯り、未來に及び、必ずしも時事に切中せざりきと雖も、當代文運の潮流に一滴の加ふるものなきに非ざるを信じて心潜に甘ずる所あり。吾が親愛なる讀者も亦夙に吾等が献芹の微意を了せられたるべきなり。然れども我等の樸拙不文にして幾微に遠く、加ふるに文筆の禮に嫻はざるや、大方の怨を買ひたるもの亦少しとせず。奕々の微意遂に通ずるに由なく、偶々筆端の餘波の爲めに他の誤解嫌惡を招くに至りしは、吾等の深く恥ぢ又深く悲む所なり。然れども吾等の云ふは素より言ふべきの理ありてなり。吾等は抱一庵、思軒諸氏を刺れる事あり、『青年文』一派の文士は吾等と多く相見る所を異にせり。吾等は鷗外をだに難ずることを憚らず、吾等が親友なる『帝國文學』の諸氏に向てすら其の齒に衣することを爲さざりき。吾等は學問の途上にありては、其の目的とするところ、只一の眞理あるのみなればなり。世の人希くは感情の眼を以て吾等を見る勿れ。吾等は文壇の仇敵と私交の一味とを包容すべき雅量の學者の胸襟に存すべきものなるを信ずる也。

然れども、吾等は今や已むべからざるの私情ありて、暫く文壇を退かむとす。

若し夫れ文學の審美的評論に關しては、吾等は十分の懐抱を表はすの機なくして已みぬ。一二歴史上の爭論にかゝはりしことありしが、素より多く言ふに足らず。我が文壇には審美學に於ける專門的智識の皆無なる事。されば斯學の大躰を世上に紹介したる上ならでは、專門的議論をなすことの公刊の紙上を私するに同じき事。殊に我が『太陽』の如き弘通公布を目的とせる雜誌にありては、少數人の間に内祕的爭議を容さゞると、是れ等は是れ吾等の筆を箝束せる主なる理由なり。而れども單に具象理想を偏執すると單に抽象理想を頑守すると、其の弊相同じきと。されば或學者の如く最近の學統なるの故を以てひたすらハルトマンを株守することの迂濶なること等は吾等の敢て公言するを憚らざる所なりき。吾等の斷案は當に然るべき根據ありて然るなり。吾等の精細なる意見を發表する蓋し遠きに非ざるべし。

十有六ヶ月の間吾等の本紙上に言議したるもの、無慮二百五十頁。哲學、史學、文學の諸科に渉り、歴史、戯曲、小説、詩歌、宗教、美術等、事に隨ひ時に應じ、論策建言したるもの、一書生が窓外の餘業としては、穴勝ち勤めずと謂ふべからざるに似たり。事

り。世人往々吾等を目して善美一致を說くものとなすと雖も、是れ他を正解するを欲せざる輩のみ。

小說に關しては、吾等は飽迄完全なる客觀的著作を求めたり。是れ觀念小說の全盛に際して尙作家の爲に一道の前路を拓きたる所以なり。事態是の如きにも拘らず、吾等が言を曲解し、吾等を以て誤て抽象理想を奬說せるものとなせる輩あるは、吾等の甚だ心外とする所なり。若し夫れ新躰詩に關しては、吾等は主として實質論を固執し、夫の區々たる形式に拘泥して古型遺式の中に盲動する輩に反對し、外山博士の新躰詩の如き、形式上敢て詩と稱すべからざるものに非るを明にせり。吾等は大學派の新躰詩を朦朧躰として批難したることあれども、亦是の如き朦朧躰に相應しき詩想の存在をも承認せり。是れ等は其の當時にありては多少俗耳を驚かせしものありしなるべしと雖も、今や新躰詩形の最も自由なるものは到る處に歡迎せられ、一時は世を擧て嘲罵せし巽軒博士の『比沼山歌』の如き漸く公平なる批評の中に其の適當の位地を占得せむとするに至れり。今日尤も有望なるは新躰詩の將來なり。

來の學者の概して歷史的精神に乏しきや、今を以て古を推すものあり、古を以て今に及ぼすものあり、念々に轉流し不斷に發達する人文の過程に對し一雙の活眼を破して、其の終始の當に然るべき所以を究め得るもの少し。獨創の意見とは彼等の好んで口にする所、而かも吾等は歷史的發達の大統を外にして斯の如きもの無きを說けり。素より人文の發達に新しき或物を加へむことは學に志すものゝ志なり。而かも過去現在未來に透徹する歷史的生命を理解するものに非ざるよりは、斯の如き事業の甚だ爲し難きを思へばなり。若し夫れ古典、人種學、比較研究、古代文學の推奬の如きは、歷史的研究の方便として打算し來りたるものに外ならず。

文學と道德との間に於ける密接なる關係は、吾等の習俗に先ちて指摘したる所なり。是れ當代文學者の恐るべき誤解の爲に人道に背戻するの極、遂に文學の墮落を來すあらむを恐れたればなり。吾等は曾に實際上より其の然る所以を述べたるのみならず、聊か目的學上の立脚地より善美雙關の說をなしゝことあり。是の目的に向て吾等は先づ青年文人の厭世的傾向を批難し、次に今日の新作小說の高尙なる道德に乏しきを指摘し、終りに宗敎小說及び宗敎美術の振張を希望せ

て是の壇上を去るに臨み吾等の事業に就て少しく後顧の一瞥をなさしめよ。政黨に謂ふ所の主義は吾等是を持たず、持つを要せず、又持つべからざるなり。文學のかゝはるところ、深く且弘く一の原理、一の主義を以て到底萬殊の問題に透徹し得べきに非ればなり。故に吾等は吾が文學の改善進歩を計ると謂ふが如き形式上の目的の外は、何等一定の所執なきことを自白するものなり。

然れども、已に其の改善進歩を企計す、自家に何等の依據する所なき能はざるなり。素より百藝に通じて貫一の標準たる能はずとするも、抑も亦時に隨ひ事に應じて固く執る所なき能はず。是を以て當代文學の各部を通觀し、往に鑑みて來を察し、是を學理に照し、是を實際に考へ、一二の畫策論述したる所無きに非ず。素より大方識者の一粲に資するに過ぎずと雖も、一片耿々の赤心、吾が文學の爲に多少の作效を期したるもの無きに非ず。是の如きものは、其の由て來る所匆々一日の事に非ざるを以て、今日尚固く其の所見の改むべき所以を知らざるもの多し。是れ吾等が再び江湖に告白して、潜に同賛の士を待たむと欲する所なり。

吾等が今日の學術界に向て第一に推奬したるは所謂る歴史的研究なりき。從

たるに由りしならむ。是の大潮流を享けて去年一月に生まれ出でたる吾が『太陽』が實に其躰裁に大改良を施し、吾等が其の文學欄に主筆として評論の筆を執りしは實に是際にてありき、是れ實に去年七月の事なりとす。

既に苟も一個の批評家として文壇に立つ、吾等は其の責務の甚だ輕からざるを覺悟して忡々の念に勝えざりき。批評家は啻に時文の紹介評隲を爲すに止まらず、一面には其の行くべき道には殆ど無意識なる作家の爲に其の針路を指示し忠告すると共に、更に他面に向ては一般讀者の嗜好趣味を高めむことを務めざるべからず。更に一歩を進めては社會的敎化の目的を以て新知識の傳播を介し新問題の注意を促さんが爲に、流行時文以外に於て普く世界文學の新潮流に着目することを怠るべからず。是の如き職責を自覺して評壇に立つ吾等は、吾等の事業の決して世の心なき輩の思惟する如く、容易氣樂なるものに非ざる事を諒せられん事を望む。況んや吾が『太陽』は本邦第一の大雜誌、毎回發刊の部數數萬部、販路は海の內外に及び、寒村僻地と雖も能く到らざる所無し、筆を其の紙上に取るもの責任の關する所、他の群小雜誌と自ら其の倫を殊にするものあるをや。乞ふ吾等をし

少青春の活氣を鼓吹するに力ありしことは疑ふべくもあらず。世の人々、殊に大學に快からざる一輩は、猥りに是の雜誌を謗るを業とせるものあれども、公平なる判斷を以て是に對すれば其の說く所の局面の廣大なることは、少くとも一部の小知識に偏安せる當時の文壇に向て幾多新知識新學問、もしくは少くとも新學問新知識に對する向上的精神を鼓吹したりし事は爭ふべからざるの事實なり。見よ、評壇の面目は『帝國文學』の發刊このかた殆ど其の靑紫を一變したりしにあらずや。

『帝國文學』の出てしは去年一月なりき。是時にあたりて『柵草紙』已に其刊をやめ、文壇獨り『早稻田文學』ありしのみ。越て三月『靑年文』の發行あり、其の評論は『帝國文學』に似、さながら其の學識を削りて其の客氣を加へたるもの。文學專門雜誌にして新に表はれたるもの殊に云ふに足るもの無かりきと雖も、新著の盛に出づると共に評論界は一段活氣を加へ、『國民の友』『八紘』『國學院雜誌』『文學界』等の諸雜誌が、各自專門の傍ら、力めて文學に容吻せしは素より、府下地方の各新聞も亦新著時文の評判に關する一欄を設けざるもの無きの勢なりき。是れ國勢振張の大風雲に乘じて一般社會が大國民の希望感情を表はすべき大文學の欽乏を自覺し

關を構へたり。

さりながら是二雜誌が論議せし所を以て今日の評論に較ぶれば、其の思索の度量はさすがに遜る所無き能はず。試に當代の最も高尚なる問題と稱せられたる『沒理想』の爭論を繙き見よ、何人か此數年間に於ける文學的知識の進歩の大なるに驚かざるべき。廿七年征清の役ありて、膨脹的國民の套語は社會の何れの部分にも遍ねかりし時、文學界に於て是風潮を代表して起りたるものを『帝國文學』となす。『帝國文學』は其の發刊の廣告の餘りに大袈裟なりしが爲に、其の表裝の錦の如く赤かりしが爲に、否尤も多く帝國大學に緣故ある人々の手になりしが爲め、嫉妬猜疑の眼を以て迎へられ、多く誹譏嘲罵を以て遇せられき。然れども紛々たる毀譽褒貶の間に樹ちて、迫らず激せず、當初の目的に向て進み行ける堂々たる歩武は、たしかに彼が文學界に於ける一大勢力なることを說明したり。『帝國文學』の說く所、或は博引旁證、各國の原語を列ねて後進の爲に註解を附せざるの不親切あり、或は傲岸遜らず高く自ら標置して他を瞰下する無禮あり、君子の德風、長者の慈愛に比せずと雖も、年少氣銳幾微を知らざるところ、却て當代文壇の沈滯老衰を刺激して、多

學語めきたる言葉の十個を任意にとりて彼等の前におきたりとせよ、其中の八個は彼等得て解す可らざりし事吾等の敢て疑はざる所なり。當時の創作素より多く言ふに足らずと雖も、其の評論にいたりては更に一層あはれなるものにてありしなり。是を以て當代にありて文學雜誌と稱すべきものあらざりき。やゝ是に近きもの例せば『文明雜誌』『學庭志叢』もしくは『頴才新誌』の如きものありと雖も、皆是れ古風の文章雜誌にして、殆ど全く時文と相關與せず今の所謂る批評と云ふものは未だ社會に知られざりしに似たり。

『國民の友』及び『日本人』の發刊は、疑も無く國民殊に青年間に於ける文學思想の發達を催促せり。其の論說寄書の欄に萃むるところ、古今文學の批評を含めるもの尠からずさりながら概ねみな粗枝大葉の論議にして、學理上より立案せるもの割合に少かりしは掩ふべくもあらず。適當に謂ふ所の文學評論は實に『しがらみ草紙』を以て初まれりと謂ふべし。『しがらみ草紙』出でゝ幾もならず『早稻田文學』出でたり。彼れは獨逸文學に精通する森鷗外の筆に成り、此は英吉利文學通としてかくれなき坪內春のや主人の統率するところ、兩々相對して宛然當代文壇の双

民所化の上より觀ずる時は、一國文運の汚隆は其の民衆の好尚鑑識の能力如何に依るものと見なさゞるべからず。而かも此の如き好尚鑑識の縁て顯はるゝは主として國民の審美的意識の程度を示す所の文學の評論の形式に於てなりとす。吾等が評論のありさまを以て文學そのものゝ盛衰をトせむとする穴勝理由無きにも非ざるべし。

顧みれば明治十年代の半ばにありては所謂る文學的評論といふものは之れ有らざりき。稍評論のかたちを爲せるもの、春の家主人が『小說神髓』、青萍居士の『日本文章論』、もしくは某々等が演劇改良意見と云ふが如きもの無きにしもあらざりきと雖も、今日より見れば其の說きしところ、まことに幼稚にして甚だ多く取るに足らず。是等の諸學者も亦應病與藥の便宜上より立論せられしにて百世の爲に不朽の眞理を說かれたるにあらざるべし。更に鐵腸居士、東海散士もしくは藤田鳴鶴等の小說に對する當代の批評を一顧すれば、當時の最も進歩せる文學嗜好を代表せると見なすべき新聞雜誌の記者すら、如何に文學の何物なるかに就て明晰なる觀念を缺きたりしかは想ひ見るに餘あるなり。かりに今日批評家の用ふる

史上の最大偉觀なり。そも〳〵明治の文化や、歲を閱すること尙三十に充たず、極まれば變じ屈すれば伸び、局面の常なくして行止の定まらざる、後世史家の鑑識を待て初めて其の歸着を知るべしと雖も、而かも其の大勢の趨く所、さすがに其の潮流の上下を見解け難きにあらず。事を今日に處し、道を將來に求めむとするやからは、須らく這般の狀勢を審にせむことを要す。

文學のこと甚だ言ひ易からざるなり。時尙日に移り、褒貶月に變ずるや、人をして向背に惑はしむるものあり。確かなる批評の規準に憑據し、之を歷史に考へ、之を現在に徵し、一は以て作家を戒勵し、一は以て時尙を提撕する、是れ所謂る文學批評家の務めなり。つら〳〵明治文學の過程に於ける推移の跡を尋ぬるに、必ずしも其創作の價値を問はざるも、吾等は其の一進一退が一部文學が歷史として洵に面白き現象に富めるを認めずむばあらず。

遠き過去は述ぶるにも及ぶまじ。明治の文學が是十數年に於て大なる進步をなしゝこと、は、其の評論のありさまにても知らるべきなり。吾等は素より文學史上に重きをなすものは所謂る美文的創作にあるべきを認む。左りながら之を國

退壇に臨み吾等の懐抱を白す

歳は半を過ぎて菊花復び東籬にかゝりぬ。天高く草衰へ、妖氣凄寥として感更に新なるの時、吾等に茲に告別の筆をとりて江湖に見えむと欲す。越し方行く末を思ひはかれば亦多少の感慨無くむばあらず。

顧れば吾等がはじめて讀者と是の壇上に相知しりは去年の七月なかばなりき。其の後、年を踰へしこと一たび、月を閲せしこと二に十六、淺學不材の身、素より所期の十一をも成し遂ぐる能はざりしにも係らず、諸君の優篤なる眷愛が爾かく永き時の間、吾等をして評論の筆を執るを得せしめたるは吾等のくれ〴〵も感謝する所なり。今や身に世故の累ありて諸君と是の壇上に見ゆること能はず、茲にいささか平生の懐抱を陳べて告別の辭となさむと欲す。吁諸君は當に吾等の哀情を思ひやらるべきなり。情迫りて筆窘むこと切なり、諸君乞ふ其の意をとれよ。

是非正邪の論かしましく進退汚隆の評切りなる間に、人文發達の大勢が社會のあらゆる事物を包容して、徐ろに、はた確かに暫くも進歩の踵を停めざるは、洵に歴

是點に於て吾等は『桐一葉』の淀君が、其の幻覺中に認めたる畜生關白の幽靈を表彰するに、一に此女主人公が態度科白に依頼したるを見て、春の家主人の卓見に敬服するを忍ぶ能はず。是れハムレット公子が其の母后と會談の中に認めたるものと其の軌を一にするものなり。

以上は尋常一般の理論に據りて述べたるものゝみ。若し夫れ特殊の事情、例ば、其の戯曲の性質にして大に現實世界の狀態と隔離し、吾人をして可感的形躰が於て幽明世界の俱在を認識せしむるの餘地を存するものに至りては、素より例外と謂ふべし。然れども斯の如きは悲劇の極めて理想的なるもの、若しくは樂劇、能樂等に於て初めて見るを得べく、通常の喜劇、悲喜劇若しくは世話狂言に於ては、到底容すべからざるものなるを知らざるべからざる也。

（廿九年九月）

なるを察すべきなり。

主観的に成立する幽霊とは畢竟良心の苦痛、思想の迷執等によりて醸せられたる妄想妄念の所生たる錯誤若しくは幻覚に外ならず。而かも斯の如き錯誤若くは幻覚が適當なる表情術によりて舞臺の上に演出せらるゝ時は、其の看衆に及ぼす所の同感的效果は實に形躰を具備せる岩的幽霊に讓らざるのみならず、幽凄深刻の情趣更に大に之れに優るものなくむばあらず。且夫れ、是場合に於ては看衆の心を動かすものは、蒼面蓬頭の形骸にあらずして、主として更に斯の如きものを自家主観の中に形成するに至りたる精神的狀態に存するを以て、其の情趣亦自ら高尚崇大なるものあるなり。吾等は一切の感情思想を表象する一種の技術によりて、舞臺上に成立する所の演劇が、從來何が故に特に均しく主観的產物精しくは錯誤若しくは幻覚たる幽霊を表象するにあたりて、しかく奇怪否むしろ滑稽なる方便を用ひたるかを解する能はず。もし幽霊の存在を信じ、冥鬼の威力を怖るゝが爲に然りと謂はゞ斯の如き迷信の已に過ぎ去れるの今日、何の必要ありて又斯の如き陳腐なる手段を須ゐむや。

吾人を滿足せしむるに先ちて、先づ幾十年の經驗教育によりて打立てられたる吾人の知性を制服せざるべからざるなり。

果して然らば幽靈が一の戲曲中に或位置を有し得るが爲に要する全條件は、其存在の全然主觀的なるにあり。主觀的存在の性質として、他のあらゆる戲曲的人物及び看衆は對者其人の言動によりての外は何等斯の如き現象の存在を認識する能はざるが如きものならざるべからず。

是點より觀察する時は、『ハムレット』劇に於ける父王の靈、『マクベス』に於けるバンコーの靈、『佐倉義民傳』に於ける宗吾夫妻の靈、『四谷怪談』に於けるお岩小平の靈、『播州皿屋敷』に於けるお菊の靈等の如きは、所詮不適當なる戲曲的幽靈と謂はざるべからず。就中『四谷怪談』の如きは、毫も對者の心情に函數的變化あるなくして、獨り幽靈等が普通活人間の如く作動するが如きは、非常に幼稚なる幽靈劇と謂ふべく、彼の髮梳、戸板返し、等唯幾多の人を恐怖するの事情を列ねしのみにして、戲曲として、又美術として、何等著しき價値を有するに非ず。斯の如き劇が吾邦第一流の俳優により第一等の劇場に演ぜらるゝを以ても、我邦演劇的嗜好の尙甚だ幼稚

事にあらず。形躰と活動とによりて人間及人生を現じ、文字と演劇とによりて最大なる美術的具象の効果を收めむとするの戯曲にして、或適當と効果を以て幽霊の如き不可思議的現象は資籍するを得むが爲には、其の存在及活動の原因を以て對者の主觀的表象に歸すべきを信ずるものなり。

戯曲は其の一般性質上詩歌の中にて尤も寫實に近きものなり。敘事詩や抒情詩や、吾人の想像空念に依頼するもの甚だ多きを得べしと雖も、社會の人事を取りて是を舞臺上に演出せむとするの劇にありては、おのづから甚しく現實的事情に隔離するとを容さゞるものあり。是を以て不可思議的事物、幽霊の如きものを躰現して、幽明二界の同存を表出せむが爲には、看衆をして、預め事實上是の如き現象の有り得べき事を信ぜしめ得る迄に、其感情思想を影響せざるべからず。

而れども幽霊の客觀的實在を信ずるの時代は已に過ぎ去れり。敎育あり、分別ある人士は、もはや如何なる事情の下にも、暗夜に彷徨する盜賊の如き幽霊の存在を認めざるなり。事態已に斯の如くにして、而かも尙荒唐無稽なる幽霊を以て吾人に強ゆるものあらば、是れやがて吾人の知識に向て叛旗を擧げたるもの、彼れは

りてもアリストテレース以來多少の議論ありし所なり。而れども其說の歸する所は喜劇に於て『偶然』として顯はるゝ所のもの、悲劇にありては『不可思議』として表はると言ふに過ぎず。ア氏がアルゴスのミチスの例によりて說けりし所、亦是に外ならず。近代レッシングが其の『ドラマツルギー』に於て論ぜし所は、多少是と異なるものあり。然れども要は幽靈を思念し、恐怖するの情は、人心の本然に固有する所なるを以て、適當なる事情の下に、是を戲曲に使用するは、敢て不倫なる事に非ずと云ふにあり。而して氏は斯の如き適當なる事情として、中夜、寂寞、單獨等を列擧せるのみにして、是點より沙翁が『ハムレット』に於ける幽靈を是認し、ヴォルテールの戲曲に於ける如き白日群行の幽靈を、有るべからざるものとして批難せるは、寧ろ淺薄の見たるを免れず。

蓋し喜劇に於ける『偶然』と悲劇に於ける『不可思議』とを同視する說の謬れるは、斯の如き實際不可有的事物に向て客觀的實在を認むるの點にあり。レッシング一輩の說の缺點あるは、人心の必然の上に客觀的に有り得べからざる事物に向て主觀的成立を與ふるの一轉步を缺きたるにあり。哲理上より幽靈を論ずるは、吾等の

戯曲に於ける幽靈

身既に現世の生活を離脱して、魂は幽冥の境地を逍遙し、過去業因の繋がる所、一念尚兩界の間に彷徨し、怨恨伏する所、再び有盡の身軀に形して、是を報復せむことを計る。目是を視、手是に觸るゝ能はず、影消幻失、得て摸捉すべからず。是の如きもの世俗の所謂る幽靈なるものに非ずや。

是の如き幽靈が小說戯曲の資料となれるもの、我邦にありて甚だ少からず。近年窮理の學漸く普及してより、是事亦漸く少きに到れりと雖も、尚未だ其跡を絶たず。近くは春の家主人の『桐一葉』に於て關白秀次の如き、歌舞伎座に演ぜられし『四谷怪談』に於けるお岩、小平の如き、新舊脚本の怨靈を材とせるものにして世に行はるゝもの、是他甚だ少からざるが如し。吾等は未だ世上の文學批評家が是事に關して何等の說を爲すものあるを見ざるを以て、茲に少しく思ふ所を陳べ、作者及劇部關係者の一顧を煩はさんと欲す。

不可思議的事物の戯曲に於ける存在の意義及び使用の規定に就ては、西洋にあ

見重太郎宮本武藏より幾何か多く彼等を敬重すべしとするや。日本文學に叙事詩の缺乏せるは國民的性質に本きたる當然の結果のみ。民友記者の所論の如きは其の本を察せざるものと謂ふべし。

其天分を發揚せよ

國民は其の天分に安ぜざるべからず。希くは望むべからざるの事を望まずして其の天分の資性を發揚せむことを務めよ。櫻花の香芬無きを嘆ずるを已めよ。天分はGrübeなり、是を發揚するは國民のAufgabeなり。吾等は深く吾が邦に叙事詩なきことを悲まず。

（二十九年六月）

馬、獨逸に於けるが如きものと大に其の趣を異にするものあり。支那にありては宗教的思想は更に薄弱なり。勿論、天帝等の文字は詩書以下の古典に數々見る所なれども、其の意義に至りては大に今日の宗教に所謂る神と異なれり。殊に詩經の如きは、黍離に悠々蒼天、是何人哉と云へるを初として、天作昊天有成命、時邁、執競、思文、敬之、桓、般等に昊天、上帝のことを言ふもの甚だ多しと雖も、吾等は一も宗教的渇仰と稱すべきものを認むる能はず。思文の章に天に配すと云ひ、又天に從ふと云ふは、只これ自然法を說けるものにして、後世の道と同一なり。敬之の章には天は高く上にあれども、近く人間を瞻視すと云へるは、やゝ宗教的に近けれども、而かも人生に對する何等の關係勢力を言はず。宗教的意識の根本たる恐怖讃美の情の如きは絶えて是を見ず。頌と云ふものありと雖も、皆君侯の威德に對するの頌にして、神を讃美するの頌に非ず。東洋民族の宗教心に乏しきは、支那に於ても日本に於ても明白なる事實なり。

斯の如き民族が雄大なるエポスを産出する能はざるは、寧ろ自然の現象に非ずや。よし歴史上にまことのラーマ乃至アーサーありとせむも、斯の如き民族は岩

蓋し敘事情（エポス）なるものは、素文學に於ける一種の宗教とも稱すべきものなり。宗教と共に理想の上に根據す。エポスの勇者は歷史的人物と言はむよりは、寧ろ國民が渴仰景慕の對象を現化したる理想的產物なりと云ふを妥當なりとす。偶々史中の人名を假るものは、竟畢國民が自己より大なるものを更らに大にし、是を美にし、是を壯にし、更に恐怖嘆美の情を傾けて神として崇拜するのみ。所詮自己主觀の理想を客觀界に投射したるものに外ならざるのみ。

斯の如きは、やがて宗教の成立する第一義に非ずや。是を以て宗教心に富める民族は、一神教に到達するの途次に於て、自然宗教と共に英雄宗教を有す。アリヤン民族は到る處として其の勇者（ヘルド）を有せざることなし。希臘のペルソス、ヘラクレス乃至エヂプス、羅馬のロミュルス、獨乙のジーグフリード、若くはヲルフデトリッヒ、印度のクリシナ、若くはラーマ、波斯のキユロスの如き皆是れ也。所謂る敘事詩は實に是の如き根據ありて生じたるものなり。

然れどもチュラニヤン民族は由來宗教的の民族に非ざる也。吾が邦に古事記ありと雖も、其の宗教的分子は甚だ薄弱にして、神話として是を見るも、希臘若くは羅

何故に叙事詩は出てざるか

去月廿三日の國民の友は『叙事詩』と顯する一文を掲げ、勞頭蔚林には虎豹住み、深淵には蛟龍潜む、二千五百年の古國、一の叙事詩を有する能はざるか、と喝破し、

夫れ我國の歴史は英雄的出來事を以て滿つ。若し其中に叙事詩の骨組を求むれば、獲る所豈に一二にして止まらむや。材料無きに非ず、工匠無き也、豈遺憾千萬ならずや。

と論斷せり。

民友記者が我が文學に叙事詩の缺乏せるを悲めるは甚だ善し。而かも我が邦歴史の英雄的出來事を以て滿つるの故を以て直に責を作者に歸するは未だし。吾等は寧ろ記者に反し、我が邦に是種の文學の當に缺乏すべき理由あるを認む。叙事詩の出でざるは洵に惜むべし、然れども罪は材料にあらず、又工匠に存せず、當に然の理なり。

何を以てか是を言ふ。

きなり。今日の詩人は飽迄歩を差別の中に占め、自己の主觀により、歌はざるべからず。而れども道德は個人的人格と平等的人道との調和に存ずるが如く、眞理は遍通の原理に依りて特殊の事實を說明するに存するが如く、尤も完美なる詩歌は主觀的に自家の感情を唱ふことによりて同時に客觀的に最大多數の同情を占得せむことを務めざるべからず。一言すれば、尤も成功せる詩歌は主觀的にして而かも同時に客觀的ならざるべからず。戲曲は種類に於て是の二者を調和せるものなるを以て歷史上尤も進歩せる詩なりと稱すべしと雖も、吾等は抒情詩其物の中に於て天才は容易に內融調和の餘地を見出し得べしと思惟す。夫のヨルダンが「ニーベルンゲ」(W. Jordan's "Niebelunge")の如きは、エダ及び古獨逸の傳說等の上に於て、叙事的根據を求めたるもの、是れ豈吾等の意味する客觀的主觀詩ならむや。人心は、一人の思惟する如く、左程狹隘なるものには非ざるなり。

（廿九年八月）

は、一に猶文學の歴史に於けるが如きなり。ワッケルナーゲルが咏歌美術と、形象美術とは、其の進歩の方向正に相背馳せりと謂へるは、甚だしき謬論なりと謂ふべきなり。

是を要するに、吾等の見る所にして大に謬らずむは、客觀的より主觀的に進み、叙事的より抒情的に趨るは、一般に文學美術の歴史的大傾向なりと云ふを得べし。吾等は茲にヘーゲル派の顰に倣ひ、是の如き發達の方式に就て、純理哲學的説明を與ふるを欲せず。唯是の如き潮流の間に介立して詩人文學者が當に懸念記憶すべき準備、及び覺悟に就て一言せむと欲す。

四　客觀的主觀的

歴史的發達の根本的原理として、あらゆる人文は、政治と道德とを論ぜず、美術と文學とを問はず、差別主觀の一面に趨向することは到底避くべからざる一種の運命なりと觀ずるを得む。是を以て今日純然たる客觀詩、たとへばホメーロスの如きものを作るの詩人ありとするも、十九世紀の人情は決して是に耳を傾けざるべ

や。吾等の畫幀に對するや、徒に線條彩色の如何に拘らず、山水人物の左右に泥まず、一物の微、直に吾れに迫りて、吾れは畫家自らが主觀的情性の吾が同感を要むるものあるを認むることを忍ぶ能はず。斯の如き感情の吾が性に合すると否とは、やがて斯の如き繪畫が吾れに對する價値の多少を規定するものとす。是れ猶抒情詩の如きなり。繪畫の巧妙なるもの、往々畫家と觀者と、胸と胸と、相接して直に心靈の呼吸を通ず。是を以て其の情切實、其の感深刻、建築等の美術が、空冷超絶、由來我と相關するもの少きの比にあらず。是れ猶抒情詩の如きなり。繪畫の性質は、斯の如く主觀的なり。是を以てコレッジョを好むもの必ずしもルーベンスを取らず。ミケランジェロを愛するもの、必ずしもラファエロを賞せず。況して百世を貫きて遍通平等の價値を支撑し得るもの決して有り得べからず。是れ亦猶抒情詩の如き也。

叙事詩より抒情詩に至るまで、其の間幾多の階段あるが如く、建築より繪畫に至るまで、幾多の第三者あり。而かも古より今に至るまで、美術の歷史に於て、叙事詩的なる建築の分子漸くさびれゆきて抒情詩的なる繪畫の分子漸くまさり來れる

の歴史に於ても亦同一の傾向を認め得べし。乞ふ少しく左に是を說かむか。

三　美術史に於ける叙事抒情兩分子の消長

美術を以て詩歌に比せむか、建築は猶叙事詩の如く、繪畫は猶抒情詩の如し。建築なるもの、其の樣式、精神等多く時代民族の文化によりて規定せらるゝものにして個人の特質に歸するもの甚だ少し。是れ猶叙事詩の如きなり。まことや、聖ペーテルの寺院はミケランジェロが偉大なる宗教的熱誠に負ふ所のもの無しとせず、而かも彼れが個人的製作と云はむよりは、寧ろ彼れが時代的精神の磅礴せるものと云ふを妥當となす。古代民族の美術は、何人も知る如く、悉く皆建築を以て初まれり。是れ猶叙事詩の如きなり。窟殿と精舍と尖塔とが、能く妄迷、瑰異、誇大なる印度思想を表はすが如く、ドリア、イオニア、若くはコリンシァの諸式が、能く平等、自由、中和なる希臘思想を表はすが如く。ゴチックとビザンチンの樣式は、一は中世に於ける峻嚴精一なる舊教的信仰を示し、一は誇大、勇猛なる東歐的精神を現はす。是れ亦猶叙事詩の如きなり。繼て繪畫を見よ。何ぞ其の感興の一に建築等に異なる

抒情詩人漸く其の數を增し、傳奇家漸く去りて小說家漸く來る。是と同時に、讀者と詩人とは、類を以て相集り、好を同うして相樂む。民族百世の爲に永遠不斷の感想を唱ふもの極めて希なるに至れり。

誠に是の如き傾向の間に立ちて能く民族と個人との間に圓融なる調和を爲し得たる詩人を數へ來れよ。吾人は其のやがて多少成功の詩人あるを發見せむ。沙翁是れなり。ゲーテ是れなり。シルレル、ミルトン、ダンテ、ヴォルヅヲース亦是れなり。人文の進步と共に差別は益々峻銳となるを免れず。夜と晝とを別ちしヘブライ聖書の原理は、たしかに世界の運命に徹底せり。而かも人は遂に平等に歸するを忘るゝ能はず。差別の世界にありて平等の天地を現出するの詩人は、猶天涯の孤客に向て戀々の故鄉を示めすの魔術者のごときなり。一世人心の翕然として是に向ひ、桂冠を捧げて其の足下に拜跪する、蓋し又自然の數にあらずや。

兎にも角にも、敍事的分子の一般に漸くすたれゆけるとともに、抒情的分子の一般に漸く榮えゆくは、文學史上に著しき事實なり。是れ獨り咏歌美術 (Dichtende Kunst 即ち歌詩)に於て然るのみならず、形象美術(Bildende Kunst 即ち普通に所謂美術)

今若し歴史上より叙事詩の過程を依傍し來れば、吾人は人文の進歩と共と詩歌は、叙事的より漸く抒情的となり、客觀的より漸く主觀的となり、事實的より漸く想像的となることを發見すべし。是と同時に詩歌に於ける成功の要件は、主觀的たると同時に客觀的なるにあり、抒情的なると同時に叙事的なるにあり。換言すれば、個人的差別の渦中に投せられたる一般人心の爲に、民族的平等に達するの通路を開拓するにあることを發見すべし。

是れ甚だ空漠たる言なるに似たり。然れども細心の讀者は已に吾人の意を首肯せらるべき也。ホメーロスの二大叙事詩の如きものは、古希臘このかた遂に見るを得べからず。『ラーマーヤナ』の時代一度び去りて、中近古の印度は幾多の詩人戯曲家を産みたりしが、印度民族の理想を唱へるもの遂に彼れが如きものあらず。ダンテ、ミルトンの宗教的詩歌は、一時、一國の感情を表はせりと雖も、神曲は遂にダンテ的にして、失樂園は遂にミルトン的なるを免れず。詩人、文豪綺羅星の如く、各國の文學史上を裝飾せりと雖も、其の傾向は代を經、世を換へて、いよ〳〵個人的に傾けるは掩ふべからざるの事實なり。其の極まる所叙事詩人漸く其跡を絶ちて、

よりして、全く民族的なることを許さゞると同時に、亦全く個人的なることを容れざるものなり。ミルトンが『失樂園』若くはクロップストックが『メシアス』の如きは是種に屬す。夫の獨乙の學者が普通に Heldenepos（英雄譚）と謂ふ所のもの、例せば遠くはギルギリウスが『エチアス』近くはテニズンが『キングス、アイデル』の如きも亦是類なり。其他ヰーランドが『オベロン』、タッソーが『自由になされたるエルサレム』乃至グーテが『ヘルマンとドロテア』の如き、所謂 romantische 又は bürgerliche 叙事詩なるものも皆是に屬す。

問ふて曰く、民族的叙事詩は何によりて個人的叙事詩に遷るを得べきか。答て曰く、主觀的傾向を表はすに依る。然らば詩歌に於ける主觀的傾向とは何にぞや。所詮自己特殊の情性によりて粉飾を施すの謂にあらずや。やがて是れ所謂る抒情的なるものと其の大部分の性質を同うするものに非ずや。然らば則ち個人的叙事詩の窮まる邊りはやがて抒情詩の始まる所にあらずや。

二　叙事詩の歷史的觀察

の種類の詩人に於るが如く、多く國民の注意する所とならず。畢竟民族中の個人は、各々讀者なると共に自ら詩人なればなり。一は民族的叙事詩に對して當に個人的叙事詩と稱すべきもの、精しくは其の材料の選擇思想の傾向が多く詩人自らの特質を印するもの、或る學者等(ヲッケルナーゲル、メットネル等)が所謂る技術叙事詩(Kunst-Epos)なるもの、即ち是れなり。是種の叙事詩にありては、詩人は自家の主觀的情性に向て、多少の自由と獨立とを與へ得るを以て、他に對して其の詩人的技倆を發揚するの機會と便宜とに富む。而かも是種の詩の一般の弊として、自家特殊の主觀的傾向に走るの極、往々國民普通の情性に遠かり、他の爲に怪奇不自然を以て目せらるるものあるを免れず。故に大なる叙事詩人は其の主觀的自由を維持すると同時に、念頭常に國民多數の同情を得むことに注意するを怠らず。彼れは詩人が成功の鍵鑰は常に是の兩者の調和一致に歸するもの多きを知ればなり。

吾等は、是の如く叙事詩を別て民族的個人的の二者となすと雖も、純然たる前者より純然たる後者に移るの間、幾多の第三者あることを遺却すべからず。今其の一二の例を擧げむに、所謂る宗教的叙事詩と稱するものの如き、其の主題の性質上

叙事詩と抒情詩

つら〳〵古今東西の文學史上に就き所謂る叙事詩(Epos, Epic)なるものの經過し來りたる行程に依傍し、その將來の運命を觀察すれば、吾等は吾人が文學的嗜好の推移に關して、頗る注意すべき現象を認めずんばあらず。左に是を略叙して當代文壇の一粲を博せむか。

一　民族的叙事詩と個人的叙事詩と

吾等一概に呼で叙事詩と云ふ。而かも是の文字の中には、今日少くとも兩義を包容することを忘るべからず。一は專ばら一民族若くは一國民に普通なる感情希望、はた理想を歌ひたるものにして、素民族的叙事詩と稱すべきものなり。印度の『ラーマーヤナ』若くは『マハーバーラタ』希臘のホメーロスの二大叙事詩の如きは、是に屬すべきものとなす。是種の叙事詩は民族一般の情性を其の資材とするを以て、個人的傾向は殆ど全く其の跡を止めず、隨て其の作者の姓名の如きも、他

如く、磁針の北極を指すが如く、其の意識の有無に關せず、皆人道の進歩に對して多少の貢獻を作しつゝあるなり。天才は個人に顯はれたる人道の一面なり。彼れは二個の生命を有す、現世の生命は肉體に亡ぶるも、彼れは翻て人道の中に無窮の存在を保有すべし。是を以て吾等は斷言せむと欲す。天才は必ず道義的なりと Sittliche und dichterische Kraft in der Wurzel Eins ist (道義の力と詩人の力とは其根本に於て一なり)。吾等は是に至て詩人シルレルが詩的思想の高尚卓絶なるを思望するを禁ずる能はず。

(廿九年八月)

七

天才の吾人に與へ得る所のものは、畢竟彼れの個性に外ならず。現在及未來の世界が彼れの製作の偉大なる感化に對して、しかく崇仰する所以のものも詮じ來れば、彼れが一個の『自我』に歸すべき也。眇乎たる三寸の胸憶、是の限なき生靈の間に立ちて、何を以て斯の如き盛大にして且永遠なる勢力を有するを得べしとするか。同胞の希望と感情とを代表すると云ふことは、未だ以て其の十分の說明となすに足らず。何となれば時代と方處に隨て能く社會の嗜好に投合したるものは必ずしも其の名望を後世に持續する能はざればなり。

吾等を以て是を見れば、天才がしかく盛大にして且永遠なる名譽を有し得る所以のものは、大世界の道義的運行に對して若干の貢獻を作したるが爲なり。蓋し人間社會に於て滅びざるものは、獨り人道のみ。希臘は亡び、羅馬は跡なく、邦家の興亡掌を覆すが如きも、古今東西の歷史を貫通し、人道は毫も其運行を渝えず。人生のあらゆる正義、あらゆる道德、あらゆる價値あるものは、恰も鹿の溪水に下るが

六

カントは天才の要する、必要にして十分なる條件を擧げて、三を數へたり。第一、創作（オリギナリート）即ち既存の法則の何れにも適應せずして、其れ自身の新しき法則たること。第二、其の製作の典型たるの資格あること。第三、其の製作は一個の自然として法則を與ふること。此くしたるは、吾等の同意する所なり。然れども、天才を以て感情を對象とする美術の範圍に限り、智力及意志の發表に關して、全く之を拒否したるは、吾等敢て其の誤謬なるを斷言せんと欲する所也。吾等を以て是を見れば、古より大なる哲學者は多く大なる天才なりしなり。デモクリトスの元子論は、二千年前已にダルトンの實驗説を預言し、ライブニッツのモナドロギーが近世の獨逸哲學、及び實驗科學の進歩の爲に、無答案の問題を呈出したるの觀あるが如き、何れか天才の直觀に非るべき。吾等の見る所を以てすれば、智力の天才を拒否せむとしたるカント自らは已に智力の大なる天才にてありけるなり。

らを視ること能はず。天才は身自ら法則なり。如何ぞ自己以外に區々の規律を要せむや。

五

是故に世界は天才を通じて常に新しき法則を得。學者識者が冗漫なる論議によりて初めて打建つるを得し所の理法を、天才は其の製作によりて直に吾人の眼前に呈露す。是を以てイリヤスとオデッセーは大なる敘事詩たると共に敘事詩の法則也。沙翁は大なる戲曲家たると共に戲曲の立法者也。プラクシテレースとラファエルは同時に型像術と繪畫の敎師なり。彼等は何れも哲學者の問題をとり、直に是を具躰的事物の上に表現したるものにてありしなり。

是故に天才は典型の製造者なり。彼れの極めて自然に、極めて特殊なる形躰の中に表現したる所のもの、往々百世を通じて摸倣の對象となることあり。ホメーロスのアヒレウスとオデセウスに於ける、ラファエルの聖母に於ける、乃至ゲーテのファウストに於ける、皆是れ個躰的種族と稱すべき者にあらずや。

ざることを想ふ。

四

天才は無邪氣ならざるべからず。彼れは法則を知らず、只元精を解す。黒白糾紛の間に處して彼れの精神は毫も其の累はす所とならず、自家特有の直感によりて、直に事物の眞相を覺悟す。而かも其感ずる所は往々萬世不磨の法規となり、永く後昆の鑑仰する所となる。シルレルが小兒の口より出でたる神の語（Götter-sprüche aus dem Munde eines Kindes）と云ひしは、洵に旨深き語なりと謂ふべし。

然り、天才は規則を解せず、理法を知らず、然れども其の作る所のもの其物は規則たり、理法たるなり。所謂る無爲にして爲すことあり、無法にして而して法あるもの則ち是れ。夫の世上凡庸の輩、定型を破り、規準を外にして、故らに怪奇不自然の事物を創作して得たりとするもの、虚僞輕薄是より大なるは無し。まことや、規則は未だ曾て大なる人を造りたること無き也。而かも身自ら規則に非ずして口徒に自由を唱へ無法を言ふものは、沐猴にして而して冠するものに非ずや。眼は自

嗜好の陋劣なる、今日の獨逸の社會の如きもの少し。一個獨立の詩人として、吾が目的とする所は、社會の嗜好に同化するに非ずして、却て自己の精神を遽盡して社會を風化するにあり。時代の壓抑を忍耐し、社會の迫害に反抗し、以て吾が良心と理性の指導に從ふは吾が詩人たるの天職なり。

盛なるかな、シルレルの志や。『ロイベル』以下の彼れの製作が、是の如き偉大なる精神の中に醞釀せられたるものなることを思へば、吾等は天才の其の功を成す所以のものは、徒に文才、詞藻の末技に存せざることを思ふ。むかし、ケプレルが天躰運行の調和を認めし時、彼れは以爲へらく、吾が運は天にあり、吾れは只吾が信ずる所を書かむのみ。現代の人果して吾れを解すべきや、否やは、吾が問ふ所にあらず、吾れは知己を後世に求むるものなりと。偉なるかな、其の志や。スピノザが硝子を磨きて其の獨立を守りしも、實に是の志ありしが爲なり。陶靖節が五斗米の爲に其の膝を屈せざりしも、是の志ありしが爲なり。想へば Wess Brot ich esse, dess Lied ich singe とは決して天才の言ふべき所に非ざるなり。

吁吾等は吾が邦現代の詩人文學者の趨舍を觀じて天才のまた甚だ言ひ易から

れば、個躰によりて遍通を表はし、具象によりて抽象を描き、自然によりて原理を說かさるべからず。

哲學者フヒテは抽象理想派の人なり、是を以て其の天才を說くや偏に重きを平等の一方に措く。其の言に曰く、美術家の美術家たる所以のものは、自己一身の中に常人が其の心に有する所のあらゆる感想を包括するにあり。彼れの感情昂揚するや、彼れの心は個人的差別の境遇を脫して、一般人性の中に沒却せられざるべからず、と(“Die Abhandlung über Geist und Buchstab in der Philosophie”)。詩人シルレルが是を駁したるの言は、頗る吾人の注意を惹くべき者あり。曰く、天才の貴むべきは、單に一時代若くは一社會の一般感情を表彰するが爲に非ずして、彼れの前人には未だ曾て知られざりしのみならず、彼れによりて社會は初めて知る所の新しき或物を世界に貢獻するに存するなり。是を以て天才の爲す所は、往々賞讚の代りに嘲罵を買ひ、桂樹の代りに棘冠を得ることあり。閻龍の未だ新大陸を發見せざりしに當てや、時の人は彼れに於て單に一個の妄想狂者を見たるに過ぎざるべし、と。シルレルは更に言を繼ぎ、一個の詩人として實に嘆美すべき言を發して曰く、

のものを世界に出だす。而して斯くして出でたるものは、中に永遠の眞理を含み外に普遍の認容を博す。彼れの作る所のものは創作的なり、自我獨立の活動として出で來りたるものなり、故に純ら主觀的なり。而かも彼れが新に表彰したる主觀的世界觀は同時に全く客觀的なり。彼れは差別の中に平等を現じ、特殊の間に遍通を寓し、自己の中に世界を包容す。是を以て彼れの言ふ所は世界の聲なり、彼れの感ずる所は萬人の情なり。是を以てフヰデアスが手に成りたる雷神の前には全希臘は最高の敬虔を捧げて其の頭を垂れ、ミケランジェロが作れる聖ペーテルの寺院は、今日尙人をして覺えず肅然として歸敬せしむ。げにや眇乎たる天才が人文の大勢に乘じて、不朽の生命を有するものは、必至遍通なる或物が其性質の要諦を成せばならむ。Le sens commun c'est le génie de l'humanité!

三

時代の感情を表彰し、同胞の思想を現化することは、未だ以て天才を爲すに足らず。天才は自己の胸によりて感じ、自己の口によりて歌はざるべからず。換言す

なり。心理學の根據に立ちて、所謂る天才の自然的說明を與へむと欲するものは、先づ事實若くは現象としての天才に就て預め考察する所あらむを要す。

二

人各々自家に特有なる思想(Lebensidee)を有す。而かも一家の思想を以て能く世界の歷史を動かし、其の思索、行爲、藝術の製作に於て能く人生の疑問を解釋するもの、千萬人中僅に指を屈するに過ぎざるなり。今若し閻世の人の言はむと欲して言ふ能はざる所のものを捉へ來て、是に形態を付し、是に言語を與へ、是に色彩を加へ、『見よ、爾等の渴仰する所の理想を見よ』と叫ぶものあらば、吾人は彼れに於て自己の救主を認むべく、時代は彼れに於て自己の發言者を認むべし。彼れの言ふや、聲必ずしも高からず、彼れの動くや、步必ずしも濶からず、而かも發すれば以て一代の文化を動かすべく、延ては以て後世の典型たるを失はず。吾れ人は是の如きものを名けて天才と言ふ。

第一、天才は創作的(オリヂナル)なり。彼れは必ず何物か彼れの前に未だ曾て有らざりし所

天才論

一

天才とは何ぞや。是れ近時評論壇に喧しき問題の一なり。『國民の友』の批評家是を言ひ、『めざまし草』の鷗外是を駁し、『青年文』記者は『天と人』と題して才に天人の別あるを說き、『少年文集』記者は『天才と學問』と題して天才も亦學殖を要するを論じ、其他『文學界』『萬籟』『新文壇』諸雜誌亦是を評論し、『早稻田文學』の彙報記者も亦是等の諸論を並べ揭げ、自家の標準を示さずして例の短評を下し『眞理』記者も亦天才の必ず倫理に適應すべきことを切論せり。

所謂る天才の何物なるかを論ぜむと欲せば、先づ是文字によりて代表せられたる概念の內容如何を稽査せむとを要す。吾等の見る所を以てすれば。是天才てふ文字は常に極めて曖昧なる意義に於て用ひられ居るなり。天才の差別的原理は果して何處に存するや。天才とは全く常識の彼岸に超絕し、連續律以外に獨立自依の存在を有する者か。前者は即ち事實の問題にして後者は即ち成立の問題

ウォーヅヲースとバイロン

吾等ウォーヅヲースに於て多とする所以の一は、其の善く英國人民の性情を歌ひたるにあり。實に大沙翁を外にして斯の國民の性質を發揮したる彼れが如きはあらざる也。ミルトンは夙に燃ゆるが如き熱誠を以て當代の感情を顯はせりき、されど彼れが筆に上りたる英國は宗教家の英國なり、學者の英國なり。ウォーヅヲースに於けるが如く婦人、小兒、農夫、商賈の英國には非ざるなり。彼れがカンブリアンの谷間に於て歌ひたりし所のものは、永く全英國民心の中に其の同情の反響を見出し得べし。

バイロンは則ち然らず。彼れは常に彼れ自身を歌ひたり。彼れの詩は彼れの性情の外に十分の同情を得べからず。彼れは其の文學的生命に於ても亦短命の詩人たるを免れざるなり。

吾が邦の詩人小説家にはバイロン多くして、ウォーヅヲース少し。明治文學の慶事に非ざる也。

（二十九年六月）

り。ソクラテース、釋迦基督が道德上不朽の功業を殘したる所以は、即ち沙翁、ゲーテが文學上永遠の勢力を維持する所以にして、共に其の個體主我の境域を離れて、人道客觀的の裏に入りたるに因る。國民は個人よりも長壽なれども、人類よりも短命なり。國民の爲に盡したるものは國民と共に亡ぶべく、人類の爲に盡したるものは人類と共に榮ふべし。個人的道德家（主我者）若くは詩人（主觀詩人）が國民的道德家若くは詩人に於けるは、尙國民的道德家若くは詩人が人類的道德家若くは詩人に於けるが如し。故に吾等は理想として國民的詩人を說くものに非ず。希くは凡ての詩人が人類的詩人たらむことを望むものなり。然れども是の如きは現實の世界に於て望むべきことにあらず。社會は漸を以て進まざるべからず。今日文學にまれ、道德にまれ、著し人類的標準に據りて現實の事物に臨むものあらば、破壞に非ずむば即ち虛無、彼れ自身世を仆さずむば、則ち自ら仆れむのみ。世人は悖德を以て是を難じ、法律は刑罰を以て是に迫らむ。是れ吾等が實際上の目的として國民的詩人を奬說する所以なり。

個人の範圍を脫却して、國民若くは人類の根據に樹つものに外ならず。是の如き功業は、國民のあらむ限り、はた人類の存せむ限りは、永く其の感化勢力を維持し得べければなり。

是故に詩人文學者にして、自家の事業をして永久の光榮を保たしめむと欲せば務めて自己の個人的特色の範圍を脫却して、國民的性情の中に同化せざるべからず。沙翁は是の如き詩人にてありき。バイロンは是の如き詩人に非りき。

然れども是れ單に抽象的なれ、純ら種族的なれと奬說するに非ず。遍と殊と、全躰と個躰と、平等と差別とを圓熟融和することを解せざるものは、是れ已に詩人たるの資質を缺けるなり。

詩歌と道德との比較

是の如く見來れば詩歌と道德とは、其の目的の上に於て兩々相並馳するものと謂ふべし。道德の理想は平等の中に差別を沒し、差別の中に平等を現ずるにあり。詩歌の理想も亦個躰の中に種族を現じ、孤て個躰を擧げて種族の中に沒するにあ

吾等の言素より必ずしも新しからず、而かも其の陳套なるの故を以て之を捨つるの人あらば、そはやがて吾等が、爲めに是の文を草せし所の人なるを知れ。

國民的詩人とは何ぞ

國民的詩人とは何ぞ。答は一兩言にして足らむのみ。曰く國民的性情を歌ふの詩人なりと。

批評家は何が故に客觀的詩歌を尙ぶか。何が故に沙翁をばバイロンよりも大なりとするか。是れ他の故あるに非ず。人類の比較的多數が其の中に安慰と快樂を求め得べきが爲に非ずや。吾等は詩として主觀詩の客觀詩に若かざる所以を知らず。所謂る詩は觀相を尙ぶとは、所詮其の客觀的勢力の多寡の上より打算したるものにして、一種の功利的見地に立つものと謂ふべし。

蓋し事物の價値は、其の事物が屬する所の種族の幸福發達の上に若干の貢獻を爲す上に存す。個人の特質に據るものは個人と共に亡び、國民の性情に基くものは國民と共に榮ふ。所謂永遠の事業と云ひ、不滅の功德と稱するものは、要するに

しを外にして、世人は甚だ深く是を怪まざりき。作者の筆に上す所、人道の爲に一滴の熱涙を濺ぐものあるを見ず、往々却て悖德を奬め非道を憐むの情を露はすものあり。斯の如く作者と社會と既に道義を重ぜず、其の宗教的思想に乏しきもの亦素より其の所なりとす。物質の外に精靈を認めず、功利の外に信仰を容れず、無常流轉の人生を超絶して、吾等の當に到達すべき圓滿常住の理想界を想望し渴仰する所の宗教的感情は、全く其の跡を見ざる也。社會と作者とが以て宗教的なりとする所の詩歌小說は、佛名を挾み、佛經の語を用ひたるものゝ謂のみ。信念の薄弱なる、今日我が邦の如きもの蓋し稀なり。佛教も、基督教も未だ中心より吾人を滿足せしむること能はず、日本宗教の前途如何は今日尙茫漠たる疑問に屬す。如是時代に於て、如是文學を有す。吁々吾等は吾等が當に有すべき所のものを有せるが爲に顧みて自ら滿志飽足すべきなるか。

美術に就て言ふも亦然り、宗教に就て言ふも亦然り。我が邦の文化を一躰として之を見れば、吾等はおしなべて其の規模の狹少矮陋なるを認識し、大東帝國の品位及び名譽の爲に深く是を悲まざるを得ず。

讀めば一書を造る。含蓄素養は彼等に於て何の要むる所なし。神來と稱するものあり、一氣呵成にして一朝百年の譽を成すものなきに非ずと雖も、雄篇大作にして萬世景仰する所となれるものは、必ずや積年工夫の結果に依らずむばあらず。是れ實に歷史上動かすべからざる事實なりとす。吾等は効を一人に收めず、其の遺志を紹述するものを後世に求むるが如き壯活雄偉なる大事業を以て今日の我邦人に望むものに非ずと雖も近くは曲亭氏が桔据經營二十年の勞力の結果として里見八犬傳を大成したるの高志に倣はむことを希望せざるを得ず。夫の宵越しの錢を使はずとは、洵に小氣味よき言草なれども、陶朱の富は斯の如くにして遂に成し得べきに非ることも亦注意せざるべからず。

暫く今日の文學が吾人に示す所の內容に就て是を見むか。おしなべて其の情淺く、其の意輕し。深遠なる哲學的思索を寓したるもの無きは素より言ふを待たず、一度勸懲主義を捨てゝより、一世文學の士の敢て道義を口にするもの無し。托興寄意往々にして人道に背戻するものあるも、敢て是を咎むることを爲さず、遂に小說家を名として不義の巷に入りたるものありしも、二三有識の士の是を難詰せ

ざるべからず。是れ素より作者に於て一半の責任を辭すべからずと雖も、亦國民性情の搖蕩輕浮なるの弊に坐せずんばあらず。

嗜好の變化は時勢の已むべからざるものありて然りとするも、其の縮少と墮落とは何に籍りてか其の辭を求むべき。吾等は一片草葉の裏にも造化自然の妙理を現ずるを認む。一行の文字尙人生の美を藏むべしとするも、滿山の白雲は遂に盆栽の一枝と比すべからざるものあるを思ふ。吾等は必ずしも卷帙の大さを以て著作の高下を品するものに非ずと雖も、三百頁以上の著述を卒讀するに堪へざるの讀書社會に於て、果して如何なる大文字が生じ得べきかを思へば、轉た心細さの情に堪えざるものあり。書くものは筆を落すと共に其の書く所以の目的を達せむと欲し、讀むものは卷を開くと共に其の讀む所以の目的を達せむことを要む。讀むものと、讀まるゝものと、斯の如き狀態に安ずる間は、吾等は永く所謂る大文學を有すると無かるべし。一面に短篇小說と俳句と狂詩とを歡迎するの口を開いて、他方に向て沙翁、ゲーテを想望するも爭でか其の甲斐あるべきや。

且つ夫れ大なる準備は大なる事物を成す所以の通則なり。今日の學者一書を

而かも是れ尙恕すべしとせむ、何となれば彼等は少くとも己の執る所に忠なるものなればなり。今の思想界には、隨時、隨處、自ら己の是認したる所のものを否定するの輩に乏しからず。流行の奴隷即ち是れなり。

スペンサー、ベンザムが神輿の上に擔がれし一時は、已に十年の昔となりぬ。次てヘーゲル唱へられ、シヨーペンハウエル學ばれ、やがて詩的哲學尊崇せられ、世を擧げて殆ど神祕說の幽玄に心醉せむとせしことありき。禪學の流行は國民の懶惰を示めすと雖も、數ケ月を經ずして世又以心傳心を言ふものなきに至りては、更に國民思想の輕薄突飛を暴露して日本の哲學史に一汚點を印したるものと謂はざるべからず。斯の如きは獨り哲學社會に於てのみならず。

文學宗敎に於ても亦然り

新文字、新語法に關する論議の如きは更に重ねて言はじ。文學的嗜好の旦暮に變化して常なきの事實は、果して何れの邦の文學史に其の類儔を見るべきや。社會に於ける嗜好の常なきは猶個人に於ける良心の定まらざるが如し。良心嗜好は經驗と共に進歩すと云ふと雖も斯の如きは寧ろ特操無きの甚しきものと謂は

偏執なるもの益々偏執となり、其の學愈々深うして其の迷いよいよ大なり。已に成心を以て萬物を觀る苟も一見己に同じからざるものは深く討尋究索の途を遽さずして、一概に淺薄虛僞なりと罵倒す。故に碩學大哲と雖も彼等に於て何等の研究を要むるを得ざる也。そもや彼等が自信の強固にして、意氣の壯快なるは、甚だ喜ぶべしと雖も偏へに己を申ぶるを知りて、他を容るゝことを肯ぜず、其の異に泥みて其同を察する能はざるは頗る惜むべしとなす。是を以て先入は常に彼等の師なり。彼れは書典を研究するに非ずして、書典に研究せらるゝなり。先づハルトマンを讀みたる人は、終生ハルトマンを脫する能はず。是を以て彼等の論議に主角多くして圓融の趣味少し。畢竟彼等が胸襟の窄少なる、容與莞爾として優に比較的研究を爲すの餘裕無きの弊に坐す。斯の如く見來れば彼等が所謂る一定の見識と稱するものは甚だ有り難きものには非るなり。

夫の獨逸哲學學ぶに足らずと高言し、カントを淺薄なりと罵り、形而上學を排斥すと呼號するもの、多くは實に斯の如き精神を以て哲學的思索に從事するの輩なりとす。吾等は其の思想の規摸の甚だ狹少なるを恨みとなす。

の盛なればなり。內包の淺きは熱心の缺けたればなり。

數千年の間風土と歷史とによりて涵養育成せられたる國民の稟性は、素より一朝にして擺脫せむことを望むべからず。而かも己を樹て、己を革めむと欲するものは先づ己を知らむことを要す。吾等今日國民の缺點を憂ふるよりは、寧ろ國民が自己の缺點を自覺せず、若くは務めて自ら掩蔽せむとするの自尊心を憂ふ。吾等は是を稱して

島國的習氣

と云はむ。哲學思想に就て是れを觀むか。苟も多少の知識を有するものは已に早く一定の見地を占め、飜て百般の事物に對して其の是非を糾すの規準と爲すは、今日學者の通弊なり。夫の一部ハルトマンを讀みて吾は是れ具象理想派なりと呼號するが如き、天下概ね皆然り、彼等は偏に概括に急にして、資料の精博ならむことを願はず、一部特殊の典則をとり、直に依て以て全分の事物を拘束せむと要す。定形已に胸に成りて後、萬殊の事物に接す、己に同じきものは是を取り、己に異なるものは是を捨つ。事を制するや情を以てし、物を別つや類を以てす。是に於てか

きたるは、從來小乘の敎義を脫する能はざりし國民思想の上に偉大なる影響を及ぼせしものにして、後世の美術及び文學が是の高大空妙の敎理に負ふ所のもの、太だ少小ならずと謂ふべし。藤原時代の美術の根據たる弘仁期の美術は、內は斯の如き文化の事情に因り、外は支那四千年の歷史中に炳焉たる光輝を放ちたる盛唐文物の感化によりて、初めて成立したるものにてありき。

マムモース洞窟の闇黑中にありて苦蘚は其綠なく、魚類は其眼無し。一幅の土佐繪をとりて仔細に是を檢覈すれば、炯眼なる批評家は學術宗敎等に表はれたる藤原時代の文化を髣髴するを得む。

然らば卽ち是の視點を通じて明治今日の文化を觀察すれば卽ち如何。其の哲學、美術、文學の現狀は日本文化の運命に關して奈何の默示を與ふべきや。

日本文化の規模

吾等の第一に感ずる所は、我が邦文化の規模の狹小なることなり。國民の心性は其の外延に於ては狹隘にして、其の內包に於ては淺薄なり。外延の狹きは僻性

舊教主義に適應す。絶對の從順と不斷の渴仰を以て上帝に對するの性情は、其の中に躍如たるものあり。是を希臘式に比すれば、そも如何の相違ぞや。希臘式は概して水平的なり、平等的也、鉛直の柱等は只水平的構造を撐持するに必要なる限に於て存在せりしのみ。やがて是れ兩時代の世界觀及び人生觀を代表せるものに非ずや。

歷史は古より今に到るまで斯の如き例證を反覆せり。支那に於ても然り、日本に於ても然り。

試に藤原時代の美術によりて代表せられたる當代裏面の文化を見よ。天平の盛世一度び地に墮ちて再び見るべからず。朝政紊れ、律令廢れ、僧侶獨り社會に跋扈して四民解體す。嵯峨、弘仁格式を定め、淸和、貞觀格式を制せしより、律令其の緖に就き、桓武以來山野を拓植し、道路を開鑿して、統治亦其の便を享く。冬嗣、勸學院を造り、陽成、奬學院を設けしより、佛敎の外に儒敎の新生面を闢き、朝野の思想亦漸く新ならむとす。殊に特筆すべきは密敎の傳來なりき。延曆七年傳敎大師根本中堂を叡山に建てゝ天台を弘め、續て弘仁七年弘法大師高野山を開きて眞言を布

文化の關聯

知識は一體にして、文化は關聯す。要は國民心性の狀態如何に因るのみ。動物學者が一片の齒によりて能く動物の全形を揣摩するが如く、思想家は一面の學術に據りて全分の文化を推測することを得べし。歷史は客觀的に這事實を是定す。

試に見よ、ターレス、アナキシマンデルよりヘラクリトスに至るイオニヤの哲學主義は活物論（ヒロゾオイスムス）なりき。是に反してドリヤの哲學はピタゴラスによりて代表せられたる數學主義なりき。思想の傾向に就て是を見れば、彼れは自由にして、此は必然、彼れは快濶にして、此は峻嚴なり。翻て是の二民族の美術を見よ。誰か其の樣式の各自が哲學的思索の特質に適應せるものあることを認めざるべき。イオニヤ式の閑雅優美なるは、ドリア式の嚴格方正なると相對して、一は活物主義を、一は數學主義を代表す。

ゴチック式の鉛直的、若くは尖角的傾向は、是樣式の生じたる中世の嚴格瑰偉なる

謂る注意の經濟の爲に、主人公の性格動作を說明し明瞭ならしむるに必要なる限界に於て、各人物に各特殊の性格を附與せむことを要す。故に主人公の性格動作に依倚し來りたる視線を轉じて、是を副人物の上に注がば、何れも不完全不明瞭なるを免れざるべし。炯眼なる批評家は漫に其の不全不明を責むることをなさず、退て如何に不全にして、又如何に不明なるかを稽査せむことを要す。是れ作家及び評家の特に注意すべき所に非ずや。

(廿九年七月)

び線條の配列、連合の上に存するか。そは吾等の玆に問ふ所に非らず。しかも吾等は視角の統一を以て、何れの風景畫にも必要なる條件なりと思惟する者なり。吾等は洋畫界の新作ある毎に好て是を觀る。然れども吾等は彼等の多數に於て、統一を發見すること能はず。吾等の觀察にして誤れば、幸是に過ぎずと雖も、もし不幸にして吾等の思惟するが如くむば、吾等は我洋畫界の爲に甚だ是を悲まざるを得ず。門內の君子吾等の迷を解かるれば幸甚。

風景畫と小說

吾等は是點に於て風景畫と小說との類似を注意することを禁ずる能はず。風景畫に所謂る主眼躰と小說に所謂る主人公とは殆ど同一の關係的位置を有するものに非ずや。

風景畫が主眼躰を圍繞せる、陪從物を描くに際して、常に是の主眼躰との距離の比較を斟酌せざるべからざるが如く、小說家は其の副人物を寫すに當りて、其の主人公に對比して常に適當の潤色を與ふることを遺却すべからず。換言すれば、所

讀者もし上野公園に於ける明治美術會の常置館を訪はば、其の繪畫の大多數は風景畫なることを注意するならむ。げにや今日洋畫の製作は殆ど風景畫により て其の大半を占得せられ居るなり。

畫家諸君よ、しばらく一個の素人として吾等の門外評をゆるせよ。吾等は臆面なく言はむと欲す、現時の風景畫には統一少しと。

風景畫の統一とは何ぞや。是れ初心なる畫家の既に熟知し居るべき所のもの。一言すれば畫幀中の主眼躰に對する觀者の一視角によりて全幀を統一するの謂なり。精しく言へば畫家が因て以て觀者の注意を萃めむと欲する所のものを取て、所謂る視線的圓錐躰の中心に据え、全幅の物躰は是の一點を中心として、其の色彩及び光線の增減强弱を酌量すべきものとす。是れ吾人が尤も自然なる觀察法にして、主觀的には吾人の網膜の上にある中央小窩を中心として全視界の物躰の漸く其の光彩を減ずるに相應す。

風景畫の尙ぶ所は、或新派の言ふが如く、光線及び色彩の催起する幻影、作畫の素品の逼眞及び變化等より生ずる直感的効力の上に存するか。はた又意匠畫題、及

若し夫れ日本畫の爲に謀るに、果して自家特有の筆法に依て自然を描寫するの外、更に進で西洋繪畫を利用し、包括すること能はざるべきか。久米氏の說は玆に至て未だ其の左右を窺ひ難し。是れ吾等の遺憾とする所なり。

時代と美術

美術の價値は其の時代と相待て始て全きを得るものなり。フヰデアスの作甚だ妙ならむ。而かも今日の人にして是を摸倣して其の原型を失はずとするも、誰か其のヅヰス像の爲に巡拜の隊伍を作るものあらむや。天平の美術は古雅高尙、吾人の嘆賞して措かざる所なり、而かも是れ天平時代の人を待て初めて可なり。明治の人做て是を爲らむか、終に剽竊摸倣の譏を免れじ。文化は不斷に流轉し、人心は念々に精進す、夫の後生の人を率ゐて、往古の殘型に陷れむとするものは、美術進化の歷史を解せざるものなり。

風景畫の統一に就きて

是を以て畫家は自己特有の世界觀によりて其の筆を染めざるべからず。是れ繪畫が美術中の尤も主觀的はた理想的なるものゝ一たる所以にして又建築の如きものと大に其の趣を殊にする所以なりとす。建築にありては、建築家の性格は其の製作の中に表はるること甚だ尠し。何となれば是種の美術は隨時隨處國民の一般性格によりて其の形式自ら制せられ、其の風樣亦自ら定まるものなればなり。ゴチック若くはビザンチンの樣式は、一二建築家の創作にあらずして、時代と國民とのあらゆる文化の綜合的勢力の上に現はれたるものなり。建築の繪畫に於けるは猶敘事詩の抒情詩に於けるが如き也。繪畫は已に斯の如く其物の性質上主觀的なるものなり。吾れ人のそを見るや、獨り其の線條彩色を見ずして、更に畫家の精神の映像を其の中に認めずむばあらず。描く所は等しく是れ神父なり、一は暴風の中に在り、一は旭日の赫灼の光の裡にあり。吾人は是によりて、ミケランジェロとラファエルとの差別を見得べきに非ずや。繪畫が美術中の或者に比して吾人の深厚なる同情を惹起する所以のもの實に是の主觀的性質の上に基く。久米氏が自家の感情を主とするを說きしも亦大に吾等の意を得たりと謂ふべし。

久米氏の日本繪畫談

所謂る南派の洋畫家として有名なる、美術學校教授、久米桂一郎氏の說に曰く、自然に對する觀察を其のままに表象するは畫道の本意なり。從來の日本畫は餘りに形式に泥み、流派に拘る。今後の日本畫は、日本畫の畫き方によりて、畫家が自然に對する感情を其のまま現出することを務めざるべからずと。

大躰上よりは、何人も氏の所說を非認するものなかるべし。蓋し畫家(一般に美術家)の情思は、第一に眞ならざるべからず。時代と方處とは各々是に通ずるの精神を有す。個人たる美術家が是の如き精神の中に薰陶化育せらるゝは、素より免るべからずとするも、又其の製作中に包容する所の實質の如何なるものなるにもせよ、而かも其の表象する所のものは、彼の自我の誠實なる情思に本けるものならざるべからず。夫の成式に依傍し、舊型を固守するものは、其の情思に於て已に誠實ならざるなり。是れ豈人を感じ世を動かすに足るものならむや。久米氏が自家の觀察を主とせられたる、素より通論なりと謂ふべし。

華山は單に書家にあらず。然れども那が如き時世にありて洋學を學び、遠大の志操を抱負したりし彼れが作書に於て、吾等は繪畫界に向ても亦殆ど和漢洋の三派を調和大成せむとしたる彼れが偉大なる希望の痕跡を認め得べし。彼れが作書には、寫生の精緻、まゝ應擧の畧を摩するものあり。豪放なる文人畫あり。時としては油畫に於て見る如く、光線の濃淡を附したるものあり。又邦畫の筆法を驅りて洋風の寫法を取り、明に折衷調和の企圖を示めせしものあり。皆是れ凡庸畫家が剪綴餖飣の陋技にあらず、一氣全幅に亘りて、渾融の妙まゝ云ふべからざるものあり。今日より見れば粗笨未熟の跡あるは勿論なりと雖も、彼れが如き時代にありて、那の如き畫風を作するの卓見才氣は、後世畫家の須く鑑仰すべき所なりとす。今日の人華山に對して果して如何の感ありや。

吾等は畫家にあらず、自から筆を驅りて折衷の方法を講ずる能はずと雖も已に數十年前の故人にして尚且華山の如きものあるを知らば、吾等は明治昭代の濟々たる多士に向て是の希望を述ぶることの必ずしも越俎の言に非ざるを思ふ。

慶長、寛永このかた幕府の爲に特に允許せられし荷蘭貿易は、油畫、銅版畫等の輸入を長崎に開始し、同時に支那船は清畫を齎らし、茲に日本の繪畫界に二個の新分子を紹介したり。後者は柳里恭、大雅堂の一輩及び黄檗派の僧侶の手によりて、遂に所謂る文人畫の一派を成し、大に學者、文人の間に流行せりと雖も、前者は其の當時にありて著しき影響を遺さゞりき。僅に司馬江漢等の二三輩ありて、西洋畫風の痕跡を止めたりと雖も、其の製作は、幼稚にして見るに足らず。然れども是の嶄新にして自然に、未だ曾て我が邦人に知られざりし繪畫が、舊來の畫家に及ぼせる感化は、案外に冥々の中に深大なるものありしならむ。世人或は圓山應擧の寫生風を以て洋畫の勢力を被りたるものとするも、穴勝ち無根の説には非ざるべし。

應擧西に出て、文晁東に起りてより、我が繪畫界の風潮はいよ〳〵改革の氣運を昂めたり。もし應擧を以て和洋折衷の畫家となすを得ば、彼れは古今和漢の各派を一團として熔化したる谷文晁と共に、更に和漢洋三派の統一を第三者に催促したるものと謂はざるべからず。渡邊華山は實に斯かる時に際して崛起したるなりき。

吾等は今日深く東西繪畫の內容に立入りて、精細なる比較研究を爲し得るの位地にあるものに非ず。而かも敢て折衷の能ふべく、且望むべきを認むるは、主として歷史上の根據あるが爲めなり。乞ふ少しく是を語らしめよ。

金岡、彼れ何人ぞや。所謂る百濟畫師、高麗畫師の渡來によりて、新に我が邦に輸入せられたる印度式の繪畫を捉へて、大和民族の美術思想の鎔爐中に融化渾成したるものは彼れに非ずや。彼れが製作を以て是を印度式に比せよ、明に彼れが成功せる折衷家の一人なりしことを示すべし。探幽、彼れ何人ぞや。豪放粗勵なる宋元の繪畫を同化し、醇化し、一種特異なる日本的精神の中に再造したるもの、即ち彼れに非ずや。彼れは決して己を捨てゝ他に走り、新奇に趨て歸るを忘れたる、滔々なる當代群畫家の儔にはあらざりしなり。近くは是を渡邊華山に見よ。吾人は彼れに於て東西繪畫の折衷者の好望なる先驅を認めずむばあらず。

想ふに探幽が從來の土佐派及び宋元以降の支那畫に對して、一種の天才的綜合を成就し、茲に狩野派の一流を樹立せしより、其の勢殆ど一世を席捲せりき。然れども時勢は暗々の中に更に一層偉大なる改革を繪畫界に促しつゝありしなり。

る也。國民は自己の胃腑によりて消化せざるべからず、自己の頭腦によりて思考せざるべからず。故に折衷は咀嚼と共に同化を豫想し、補充と共に獨立を豫想す。眞の知識は統一を必要とする如く、眞の折衷は調和を必要とす。

然らば則ち是の如き折衷を實現するに必要なる準備如何。他無し、己を意識するは其の一なり、他を理解するは其の二なり。既に己を識り、又他を解せば他を取りて己を利する所以の道、亦自ら明ならむのみ。是の如き準備無くして、漫に折衷を口にするも、爭でか其甲斐あるべきや。

世を擧げて東西美術の折衷を說くの今日、一の金岡無く、一の探幽無し。吾等は其の當に然るべき所以を思ふて、敢て濟々たる美術家諸君の猛省を乞はざるべからず。

過去の我邦に於ける折衷美術

人或は謂へらく、折衷なるもの遂に成し得べからず。東西畫風の特質は由來氷炭相容れざるものある也と。果して然るか。

生まるゝ所の人種を異にす。歳を經ること幾百千、源泉いよ〳〵遠くして、末流いよ〳〵隔つ。一朝交通の便に際會して、胡漢たま〳〵手を握るも、彼の文物を移植して、直に我が田園を賑はさむと欲するも、豈容易すく爲し得べけむや。所謂る折衷と云ふものゝ叫聲のみ高くして、事實の上に成功したるもの少き、はた是れ當然ならむのみ。

東西畫風の折衷も亦夙に唱道せられたり。九鬼圖書頭の一行が京畿の古美術を討索せしころより、東西美術の折衷は已に說かれたり。近時橋本雅邦氏是を說き、狩野芳崖氏も是を說き、五世田、原田、久米、黑田の諸氏も亦是を推奬するの意なきに非るが如し。日本美術の外に西洋美術史及び美術解剖を敎へ居たる美術學校は、來九月より新に洋畫の一課を設くるが如き、想ふに亦是の折衷の氣運を鼓吹するに於て多少の力無しとせず。要するに東西美術の折衷は、獨り公衆の輿論なるのみならず、美術專門家大多數の意見なりと云ふも、亦不可無きに似たり。知らず、斯く社會の公議とも云ふべき折衷は、事實の上に於て幾何か其の功を奏したるか。

蓋し吾が希ふ所の折衷とは、徒に彼の長を剪りて我の短に糊するの謂にあらざ

書に傾倒して、單に今日の如く小景物を寫すに止まらず、夫の水彩畫の最も秀でたる英國に於けるが如く、續々歷史人物畫に筆を染むるに至らむことを希望して已まざる也。

（二十九年三月）

日本西洋兩畫風の折衷

西洋文明の東漸してより、摸倣先だち、折衷之に繼ぐ。彼の長を取り、我の短を補ふ。事是より美なるはなし。折衷の二字が始ど一部論者の旗幟を染出せしは、蓋し無理ならぬことゝ謂ふべし。

されど是を言ふことの易くして、是を行ふことの難き、所謂る折衷の如きもの亦稀なるかな。人は己の足の上に立たざれば安ぜず、己の心によりて考へざれは安ぜず。彼れは自由の動物なり。其の手を援き、其の足を捉へ、他の好む所に隨はしめむと強ふるも、彼れは久しからずして本來の自己に歸らむ。自己を外にして彼れに滿足を與ふべきもの無ければなり。

東西の文化は其の來る所の歷史を異にし、其の據るところの風土を異にし、其の

以て一切を處理せんとする今日の時勢にありて、世の人多くは信仰の何者なるかを知らず。僧侶牧師は如何に多くとも、教會寺院は如何に立派なりとも、宗教的意識の薄弱なる今日の如きは蓋し稀也。是を以て文學にまれ、美術にまれ、宗教的熱誠の發揮せられたるもの殆ど絶無なるを見るも、吾等之を怪まず。却て狩野芳崖氏が觀音の一幅を以て甚だ多とするなり。是れはた一朝一夕にして如何ともすべからず、鎌倉の宗演氏賞を懸けて宗教畫を募るが如き、吾等は其の全然徒勞に歸せんことを預言すべし。神豈金錢によりて拜まれ得べきものならんや。

水彩畫に至りては、近年漸く畫家の注目する所となりたるが如しと雖も、其の伎倆幼稚にして見るに足るもの甚だ少し。元來、從來の畫家は水彩畫を見ること甚だ輕く、甚しきに至ては油繪の下繪なりと信ぜしものすらあり。本邦人が眞に此種の畫の價値を認めしは、兩三年前夫の英國の水彩畫家アルフレッド・パルソン氏が本邦に渡來して、其の神品の伎倆を示せし頃にあり。爾來日猶ほ淺く、發達の幼稚なる、洵に已むを得ざるものあらん。吾等は水彩畫を以て最も我が邦人に適應せる美術なりとする幾多の理由を有す。されば我邦の畫家が十分の精力を是種の

刻の趣を缺けばなり。然らば則ち舊派の中之を何人に求むべきか。原田直次郎氏は肖像畫家としては當今殆ど其の匹儔を缺く。而かも意匠を經營し、資料を布置するの想像力は、その最も短所とするところ、氏を知るもの皆氏の爲に之を惜む。山本芳翠氏が歷史畫家としての技倆は吾等の未だ知らざる所『浦島子』の一幅の如き吾等は、氏が爲に寧ろ其の素才に下る數等なるものならむを望む。河村清雄氏は好て自ら隱るゝを以て、世人多く之を知らずと雖も、筆力の圓滿才思の煥發優に儕輩の間に一頭地を抽づ。而かも吾等は花鳥畫家としての氏を知るも、未だ歷史畫家としての氏を知らず。松岡壽氏は高く自ら標置すと雖も、所作甚だ少きを以て何人も氏が眞の手腕を知るに由無し。數へ來れば、當今の歷史畫家たるべき者は、夫れたゞ五世田の二芳と小山正太郎氏乎、吾輩は三氏に向て敢て是希望を屬す。

歷史畫に次ぎて我現今の美術に缺乏せるものは

宗教畫と水彩畫と

なり。物質の外に精靈を信ぜず、金錢の外に道義を認めず、コムパスとバランスを

來の目的に就ては割合に冷淡なるを悲まずむばあらず。

美術家は少くとも其の精神の一半を功名以外に托する所無かるべからず。功名なるもの、多く現在の好尚に依て立つ。偏に時尚に阿附するの美術家は、其の所作に如何にして恒久の價値を附するを得べき。斯の如きものは一朝にして生まれ得べきも、而かも尚一夕にして死すべからむ。

さもあらばあれ、吾等は所謂る北派の先達に向て恨無き能はず。彼等は新派の跳梁を目撃し、爲に其田園を蕪され、爲に其の與類を奪はるゝも、恬として知らざるものゝ如きはいかにぞや。五世田の二芳、原田、河村、山本の諸氏は其の才識手腕に於て、各々一面の鎭たるもの、諸氏にして大に奮はゞ、其の効豈獨り舊派の面目を昂むるのみならむや。

歷史畵の缺乏

景物を描くを知りて、歷史を描くを知らず、斯の如きは明治繪畵の名譽に非るなり。歷史畵は之を今日の南派に求むべからず。其の色彩、清淡浮麗にして沈痛深

たむと欲せば、咀嚼せざるべからず、同化せざるべからず、印象派自ら國民の特性につれて一改革を施さゞるべからず。是れ豈所謂る南派なるもの、一大危機に非ずや。

南派の歸依者

一時洋畫界を席捲せむず見へし南派の羽振に、黒田、久米二氏の麾下に馳せ集りし青年畫家の數は、頗る夥しきものにてありき。元來南派の畫風は北派に比すれば甚だきようなる所あり。是きようなる所こそ我が邦人の得意とする所なるを以て、北派より南派に投じたるもの、多數は、功名を成す道の割合に近きを喜びしならむ。吾等は是等の青年畫家が南派のきようなる所を摸倣し得たるの外、果して印象派が精神氣魄を會得したるや否やを知らずと雖も、時好に投じ、氣運に媚びたるの跡の明なるは少しく惜むべしとなす。吾等は北派の不平家の如く、北派の反忠なる和田某の作畫が博覽會より受けたる妙技二等の名譽ある批判に無禮なる疑惑を有するものに非ずと雖も、南派の青年が餘りに功名心に急にして、美術本

に精しと、是の畵恐らくは骨を構へ肉を附せしのみにて未だ表皮を被らせざるものならむと。或は又評して曰く、西洋の家屋には五彩の窓紗を懸く、顏面手足の彩色は盖し日光の窓紗を通して射入したるに依るならむと。吾等は遺憾ながら黑田氏が是等の批評に對する答辯を聞くことを得ざりきと雖も、竊にかゝる色彩を美はしと見む人の眼球の如何に造られ居るかを怪みたることありき。

黑田、久米諸氏が歸朝の際、明治美術會の展覽會に列ねたる畵中には、かゝる怪しげなる繪畵の幾個をも吾等は見たりき。恐くは是れ守舊の輩を警醒せむが爲なりしならむ。而れども兩三年後の今日、尙かかる怪畵を弄ぶを見れば、斯の如きは果して氏が眞面目の作物として見るべきなる乎、果して然らば吾等は黑田氏に向て其の精細なる說明を求めざるべからず。人は動もすれば呼で理想々々と曰ふ、今や理想はあらゆるものゝ辯解の府たらむとす、世に形なきものを律すべき規準無ければなり。然れども必然の根據無きものは是れむしろ空想のみ。

あはれ舊來の弊風を刷新するには生呑も可なり、活剝も可なり、南歐直傳の印象派も其の目的を達すべし。さりながら斯國土の上に永遠なる根據と昌榮とを保

べき天才の作物あらむには知らず、人種風土の異なるにつれて社會のあらゆる事物に於て、其の特質を有せむ限りは、永く一國民の嗜好を充たすべき美術は、飽迄國民的ならざるべからず。今の所謂る南派は今のまゝにして果して國民的美術とするに足るべきもの乎。有識の士は一考せむことを要す。

黒田、久米二氏の繪畫は果して我邦人の審美的嗜好に投じたるが爲に賞美せられたるなる乎。歡びを以て迎へられしが如く見えたるはむしろ彼等が其の清新なる色彩もて吾れ人の好奇心に一驚を喫せしめしに依るものには非るか。一切事物の最良の判官なる『時』は現に爾か宣言しつゝあるに非ずや。

かつて明治美術會の會場に、本邦の美人肱を枕にして横臥するの一畫幅を見しことあり、南派の畫伯黒田氏の筆にかゝる。黄紅青紫の色線を以て密に顔面手足を彩飾し、一見人をして其の肉躰なるを辨知するに苦ましめたり。南派の流を汲める人の眼には、如何に美はしく見えしかを知らざれども、さしも繪畫好きの會員も、何れも呆然として顔を見合はすのみにて、期せずしてルードヤード・フルダーが Talisman の滑稽劇を演じたりき。人あり評して曰く、聞説く西洋畫家は人躰組織

云はむ方、其の當を得たるに庶幾かるべし。是派が未だ見はれざりし以前の我が洋畫界は、たしかに一改革を要するまでに墮落しつゝありしなり。意匠に拘泥し、流派に繩綿し、形容布置の瑣尾に苦心し、小慧曲工を弄びて得々たるの弊は、たしかに因襲の遺疾として畫家の間に浸潤しつゝありし也。是時に際して所謂る南派の出現は平板單調、沈鬱腐爛せる我が繪畫界に對して如何に大膽なる一打撃なりしぞ。題目に於ても色彩に於ても目覺ましきまでに快濶自由なる是派の繪畫は、如何ばかり彼等の觀察を肵ふし、如何ばかり彼等の手腕を解放せしや。斯くて我が洋畫界が將に一生面を拓かむとするの氣運に向ひぬるは、是の新派の刺戟與りて力ある也。吾等は所謂る南派が吾が美術界に於ける價値は、實に是の刺戟に存せりと思ふ。

そを如何にと云ふに、吾等の見る所にして大に謬ることなくば、南派の畫は所詮我が國民の嗜好に協ふべきものに非ればなり。凡て一の國民の美術は其の稟性と歷史とによりて涵養せられたる國民の審美的嗜好に據りて立たざるべからざることは毫も文學政治と異る所無し。千古を貫き萬邦に通じて渇仰讃美せらる

南派の危機

所謂る觀念小說派と所謂南派とは、共に不自然なる流派にして、又共に一種異樣の改革派なれども、二者の間に著しきけじめあることも亦忘るべきに非ず。前者は形式の上に於て不自然なれ共、後者は發表の方法の上に於て不自然なり。前者は自然を破壞し、解剖し、自家の理想的模型に隨て新たに事物を構成すと雖も、後者は飽迄自然の成立を尊重し、容易に其の形式に立入りて之を添削することを爲さず飜て一切當眼の自然界に向て理想的潤色を施さんことを務む。故に是の派の目的は所詮客觀の自然を離れて自己以內に自家特有の自然を再成せむとするにあり。

任他かゝる差別は吾等の今茲に論はむとする所にあらず、吾等は洋畫南派の危機に就て斯道先達の省察を乞はむと欲す。

吾邦に於ける洋畫南派は、多くの改革派に於て普通に見る如く、其の價値は是派の製作物其の物にあるよりはむしろ其が美術界に及ぼしたる影響の上に存すと

歸れ』に外ならざりき。彼等は是を言はずとするも、瑰奇荒唐なる形而上的妄想を破壞して、認識論の根據の上に一切を改造せむとするものは、やがて是れ『自然に歸れ』と敎ゆるものに外ならざりき。

而れども我が南派と觀念派は共に是の常軌を踏まざりき。彼等は共に『自然に遠かれ』と敎へたり。是れ彼等が一種異樣の改革派たる所以なり。

世人或は洋畫南派即ち印象派を以て自然派と爲すものあり、是れ吾等と全く見る所を異にするもの也。自然世界の何處に印象派の描くが如き色彩ありや。彼が筆に上る自然は少くとも其の色彩の上に於て最も理想化されたる自然界なり、若くは最も自然化されたる理想界なり。是れ實に印象派が特長として見るべきもの、探題索位に多く力を勞せず、滿幅に平野を寫し、全紙に一樹を描くが如き、或は以て自然と稱すべきも、繪畫の主性たるべき色彩に於て已に斯くの如く理想的なるを如何にすべき。吾等は多く印象派のことを知らずと雖も、自然派として呼ばるゝは恐らく是派の畫家の喜ばざる所ならむ歟。

一種異樣の改革派としての所謂る南派

繪畫界に於ける所謂る南派と、小說界に於ける所謂る觀念派とを以て、改革派とするは何人も異論無きところなるべし。而かも吾れ人は是の二派が一種異樣の改革派なることを記憶せざるべからず。

自然に歸れ、其の事の何たるを論ぜず、總じて改革派と呼ばるゝものゝ旗章と爲るものは常に是の一句也。一流の祖は自然に本づく、彼れ自ら改革者たりしなり。然れども年經ち、代變るにつれて、流を樹て派を別することいよ〳〵鋭く、いよ〳〵深し。是を以て曾て自然に本きたる流派は、遂に不自然の中に陷りて、更に自然に本づける他の改革者の破壞を要するに至る。古より今に至るまで、美術、殊に繪畫の歷史は、洋の東と西とに論無く、常に是の次第を反覆したりしなり。獨り美術のみならず哲學に於ても亦然り。自然に歸れ、是れプロタゴラスの聲なりしなり、デカルトの聲なりしなり、カントの聲なりしなり、ルソー殊に明に之を說きたりき。所謂る、アウフクレールングス、ペリオーデと稱する時代の呼聲は、畢竟是の『自然に

等の茲に問ふ所に非れども、現今の繪畫界と小說界のありさまの、怪しきまでに似通へるこそかへすゝも驚かるれ。世に所謂る南派と稱せらるゝ新しき流派が、從來の繪畫界に及ぼしたる影響は、所謂る觀念派と名くる新しき小說家が、文學社會に於ける勢力と、いかばかり似たるべきかを思へ。恒久の好み無き社會が、その內容の如何には深くも注目せず、ひたすらに其の外形の新しきを喜び稱へたるの點に於て、二つの者のいかばかり似たるべきかを思へ。其の自然に外るゝとの漸く著るしきまでに表はれゆくに連れて、批難の聲も漸く高まらむとするの點に於ても、二つの者の如何ばかり似たるべきかを思へ。更に特操なく、識見定まらざる斯道の青年が時尙の日に非なるを望み見て、爭て舊派を辭して新派の麾下に集まりたることに於ても、亦是の二つの者の如何ばかり似たるべきかを思へ。更に又新派が永く健全なる國民の嗜好に協はむが爲には、嘗て依て以て舊派を壓倒したる特質の幾分を今は却て自己より取り去らざるべからざるを悟りたるの事實に於ても、是の二つ者の如何ばかり似たるべきかを思へ。小說界と繪畫界とは、沙翁が喜劇中の同胞の如し、殆ど他の映像に依りて自己の衣髮を鑑し得べからむとす。

文學と美術と

吾等は本號に於て現今の繪畫に就て少しく述ぶる所あらむと欲す。文學、美術、及び美學の三つのものは、同じ根より萠え出でたる三つの幹とも見るべからむ。其のきざせる源は何れか美的意識に非るや。所謂る美的意識は、其の躰を言へば渾一にして素二つなし、されど其の相を言へば、主なるもの別れて三つとなる。精しく言へば、可感的方便に緣りて表はるれば美術となり、文字言語の媒介に緣りて人の感情に訴る時は詩歌と爲り、理性の思辨に任ずる時は美學となる。されば文學と美術とは末の流れの各々途を殊にすれども、素を糺せば同じ源の水に非るは無し。されば吾等が文學欄に於て繪畫を論らはむに誰か是を理り無しと言ふや。

現今の繪畫と現今の小說

事偶然に過ぎざるか、または當に然かあるべき故よしの存せるに因るか、そは吾

に見るべからず。都會は人間を墮落せしむと云へりしルソーは慥に半面の眞理を訓へたり。爾の文明を去り、爾の風習を去り、更に爾の巧言と虛禮と僞善とを去らば、爾に殘るものは赤裸々たる自然の兒ならむのみ。自然を忘るゝは即ち人間を忘るゝ也。詩歌小說は所詮吾人をして自然を追憶せしむるものに非ずや、詩人戲曲家は都會の中に田舍を描くものに非ずや。能く眞を知るものに非ざれば僞を別つこと能はず、自然に親きものにして初めて人生を會得するを得べし。臭に入りて臭を忘れ、一生を汝々の裏に消却するものは、如何ぞ這般の消息を解するを得べき。何故に大文學は出てざるか。吾等は文學者が自然を忘れたるとを以て少くとも其の原因の一なりと思惟す。佛のドォデェ初めて英に遊び、倫敦に至る。嘆じて曰く、寂寥夜の如しと。彼が大小說家たるを得しは斯の一双の眼孔を具へしが爲なりき。

（廿九年六月）

夫のバイロン一輩の徒は太だ世を憎むの餘り、妄りに自然を愛したる者のみ、否寧ろ瀆したる者のみ。彼れ若し眞に自然の意義を解せば、之を憎むこと猶人を惡むが如けむのみ。眞に自然を愛するものは、其の中に吾人と同一の生命を認めざるべからず。彼れはあらゆる人工、人爲を大自然界の一部の現象として認識せざるべからず。ヲルヅヲース、シェリングは眞に自然を愛し且解するものと謂ふべきなり。讀者試にヲ氏がエストミンスター橋畔の述懷とバイロンが希臘海上の感慨とを比較せば、思半ばに過ぎむ。

吾等は現在に於ても過去に於ても、自然の詩人の甚だ缺乏せることを以て我文學史上の一缺點となす。寄語す、我が親愛なる青年の詩人よ、人を愛するは其の美を愛するの謂に非ず、眞に自然の詩人たらむものは萬象の中に他の自己を認識せむことを要す。

（廿九年二月）

天然と田舍

天然は人の母なり、田舍は人生の素地なり。人間至純の感情は都會に於て容易

するは、蓋し怪むに足らざる也。吾等は我邦に自然の詩人乏しきを恨みとす。風雲月露を歌ひ、人生の無常を悲むものは佛教文學に於て素より尠しとなさず、只自然を以て其の友と做し、生を分ち情を托して熱愛を傾瀉するものに至ては未だ曾て之を見ず。彼等は只明媚なる風光を喜び、嬋娟たる花月を愛するのみ、感淺く想卑し、畢竟自然と人との間を連繫するの自然宗教を作ることに於て、拈華微笑の一悟入を缺ける者なるなからむ乎。西洋文學思想の我邦に入りしよりこのかた、其の自然に對する熱情は、多少青年文士を感染同化する力ありしが如し。然れども彼等の多くは人間に背て自然を愛するものに非ずや、彼等の多くは人工と自然とを反對せるものと思へる如く、自然界と人間界とは多く相容れざるものなるを信ずるものゝ如し。是に於てか、自然は世を厭ひ人を憎むものに對して、唯一の慰藉を與ふるものとして考へらるゝに至れり。是の如きは果して眞に自然を愛するものと謂ひ得べきか、はた正に自然を解するものと謂ふべきか。其の親を愛せずして其の友に忠なるもの未だ曾て是れあらざる也。世豈人を愛する能はずして眞に自然を愛する者あらむや。街上の紅塵江中の白沙、眞詩人に於て素兩致なし。

意匠は限ある形式なり、只夫れ内容の如何によりて新陳の差別を生ずるのみ。之を以て限あるの意匠は其の著作の精神如何によりて無限の創意と特性とを發揮するを妨げず。詩人小説家の技倆は要するに舊摸型の中に新生命を鼓吹するにあるのみ。

（廿九年二月）

自然の詩人

あらゆる法界の生物は吾人と其の生命を共有すとは、印度亞里安民族が有名なる生命同一の觀念也。亞里安人が自然界に對する熱愛は實に是の觀念に職由する者にして、吠陀讃誦を一貫せる凡神的精神も、婆羅門哲學及佛敎に於ける不殺の戒律も、亦實に是に胚胎す。是を以て古の印度人は

かくてあらゆる生物に福音を傳へよ

So preach the Gospel to every creature.

と云へる經典の本文を文字通りに實行するに、必ずしもアッシシの聖フランシスを待たざりしなり。亞里安民族の詩人が、自然世界に向てしかく深厚なる同情を寄

詩人と摸倣と天然

詩人と摸倣

多くの批評家は摸倣を以て創作家の不能を表はすものと爲し、甚しきに至ては其の不德義の一に數ふるが如し、吾等は文學批評家として斯くまで摸倣を賤むべきなるか。古往今來、横目縱鼻の族是の世に在らむ限り、文學は時と共に絶ゆることと無かるべし。新しき時代は新しき慰藉を要し、新しき慰藉は新らしき詩人を要す、而かも之を求むるもの、之を予ふるもの、共に所詮同一の人心に非るか。人は常に新しきものを要す、而かも全く異なるものを作る能はず。是の意味に於て、人類は遂に歷史を反覆するの運命を免るる能はざるものに非ずや。

創作とは何ぞや、社會人心の新しき感想に應與せむが爲に新しき精神を鼓吹する者に非ざるか。もし人其の素地を仔細に檢覈し來らば、彼れは新しき衣の下に同一の人身を見出すが如くなるべし。過去の事物を繼承することを摸倣と謂ふべくむば、凡ての創作は摸倣の上に立つと言ひ得べきに非る乎。

然れども西鶴、春水一輩の戲作者が、如何に當代の社會の必然なる所生兒にして、社會は又飜て如何に彼等の爲に影響せられたるかの歷史を知るものは、慥に社會的立脚地より西鶴、春水を排斥するの權利を有するものなり。社會的立脚地よりの批評の標準は道義なり、道義は凡てのもゝの最高の判官にして又絕對の標準也。

今や吾等は現代作家に對して、社會的立脚地より嚴正なる批判を下すの必要あるを認む。今日殆ど凡ての評者が單に純文學の批判を事とするの弊は、薄志弱行の群小作者をして遂に不義悖德を唱道せしめずむば已まざるべし。徒に彼等が私行を摘發するも、遂に滔々たる頽波を奈何すべき。

吾等は敢て社會的道義を標準とする嚴正なる文學批評の盛に世に行はれんことを希望す。

（二十九年二月）

べしとするか。吾等は作者の性情を知ることによりて其の著作の上に於て少からざる興味を覺ゆ、而かも是れ著作の如何にして出來たるかの知識より生ずるの興味に過ぎずして、既に出來上りたる著作の價値を增損するものに非ず。是間の差別を明にせず、漫然作と作者とを混同し去らむとするは何等煩眼の批評家ぞや。是れ甚だ瑣末の事たるに似たり、然れども其の實決して然らず、作者の性情を移して著作の價値を上下するは、即ち是れ文學の獨立を破壞するもの也。

社會的立脚地よりの文學評論

嘗て『日本文學史』の著者は、德川文學の條下に井原西鶴を評し、猥褻野鄙風敎を瀆したるを以て之を排斥したりき。近年過去文學の批評漸く盛なるや、之に異論を挾む者亦漸く多く、殊に早稻田文學の評者の如きは痛く之を難じ、『日本文學史』の著作を以て文學を解せざるものとまで激論せり。其の西鶴を見るや、前者は社會的立脚地よりし、後者は純文學の眼孔を以てしたるもの、共に一半の眞理を會得したるものと謂つべし。

るの職責は寧ろ社會の制裁に歸すべきものにして、文學批評家の當然關知する所に非ず。

腐敗は凡て腐敗より生ず、吾等が特に現代作家の素行を慨するものは、其の著作の上に顯はれたる薄弱なる道念の必然なる由來を明にせむが爲めのみ。素行其物は吾等と何の關知する處かあらむ、文學者の價値は飽迄其の著作に於て決せざるべからず。

然るに世に一種の僻見者あり、以爲らく作は作者の影なり、故に作者の心性を會得するに非ずむば、其の作の眞價を解し得べからずと、何ぞ其の言の幼稚なるや。吾等は作者の性情を知悉することに依りて、著作其物に包有せるより以外の價値を發見するを得べしとするか。作者の傳記性行が著作の次第（プロッセス）に就いて多少の解釋を與ふべきは、素より自然の理、殊に喋々するを須ゐず、而かも是れが大著作の文學的價値を輕重し得べしとするか。次第は價値に非ず。ゲーテの傳記にして一朝湮滅せむか、ファウストは果して從來の名譽を維持する能はざるべきか。若し美妙齋の平生をしてダンテの素行あらしめば、其の著作は果して倍舊の尊敬を受く

人なるかを知らずと雖も、過去を以て未來を察すれば、其の聲名の永く持續せざらむことを恐る。

明治文學はあらゆる點に於て幼稚なりと雖も、獨り小說は多く歐米に遜色なしと稱す。スコット、デッケンスの名譽は果して斯の如く短きものなりしか、我邦の小說家は兩三年を支配する能はざりし間に、彼等は文學史上に堂々たる時代を作りたりき。

小說家の壽命の短きは、獨り作家の技能無く特操無きを證する而已ならず、亦讀者の鑑識なく、見地なきを表はすものなり。吁誰か現今の文學社會を幼稚ならずと謂ふや。

作者の性格と著作との關係

吾等が平常作者の道念に就いて區々の言を作すものは、純ら其著作に就いて曰へるなり、必しも其の私行を穿鑿して云々するに非ず。文學者としての唯一の價値は素より其の文學的著作の上に存すればなり。一私人としての德行を是非す

ては之を言ふもの甚だ少し。是を以て世好の勢力は遂に少壯作家を驅りて、似て非なる觀念小說を作りて得々たらしむるに至れり。

星野天知氏の『のろひの木』、泉鏡花氏の『琵琶傳』等は如何なる種類の小說なるか。讀過一遍、吾等は何等の托想寓意を其中に認むる能はず。吁是れ文字の凄刻、人物の僻性を以て俗目を眩惑せんとする似て非なる觀念小說には非ざるか。

想あるもの漸く想無きものに還らむとす。我が讀書社會は何の日にか想に充てるものを見るを得べきか。青年小說家は宜しく沈思一考すべき也。

小說家の壽命

試に過去十年間に於ける小說家の趨舍に就て一瞥せよ、何人か其の流轉無常に駭かざらむや。綠簑談の南翠、夏木立の美妙、今はた何こにかある。曾て文壇の梁山伯と聞えたる硯友社の領袖として、久しく宋公明の盛を擅げたる紅葉すら、今や眉山、鏡花の一輩の新作家に蹴ゑとされて、暫く著作壇を退くの已むを得ざるに至れりと謂ふに非ずや。吾等は向後の小說壇に將に來るべき第一流の作家の何

きの時ならむ、吾等は紅葉一靈の作家の運命を以て今日に終れるものと思惟する能はず。

然れども眞に想を沒するは、想無きに非ずして、實は想に充てる也。是の意味に於て紅葉は果して沒想的作家と稱するを得べきか、吾等は甚だ之を危む。

似て非なる觀念小說

假に小說を分て左の三種となすを得べし

一、想あるもの（觀念小說）

二、想無きもの（無想小說）

三、想に充てるもの（沒想小說）

想に充てるものは暫く言はず、想有るものは想無きものに優る。よしや觀念小說は其の主觀的傾向の如何に狹隘なるにもせよ、意想無く、主張なく、漫然文字を臚列せる舊來の小說に比して慥に一步を進めたるものなり。然るに世上の諸君多くは單に深刻慘憺を以て外形の布置を稱し、觀念小說の觀念小說たるの本領に至

偏に流るゝを奈何せん。深刻なる意想は自ら非常なる人物を要す、其の怪僻不倫は殊に咎むべからずとするも、かゝる著作に必要なる弘通の資に於て缺くる所あるを奈何せむ。今日観念派小説の狭窄なる主観的傾向は、終に一種特異の性僻ある讀者のみを滿足するに終る無くむば幸なり。是點に於て吾等は紅葉氏一輩の所謂る排想派の説を多とするもの也。

古來尤も成功したる詩人小説家は、所謂る排想派、否寧ろ無想家の作家なりき。之れデッケンスがホウソルンよりも大なる所以にして、又バイロンが沙翁に及ばざる所以也。

一種特異の想に由て小説を喜ぶものは讀者の上乘なるものに非ず。尤も博大なる心容を有せる讀者は博大なる意想を寓せる著作を見むことを望む。想の至大なるものは、是れやがて想無き也。

我が讀書社會が靡然として観念小説を歡ぶものは、是れ寧ろ從來『無想派』小説家の平板に慊らざる一時の反動ならむのみ。其の漸く偏僻なる主観的傾向に倦厭して稍々弘博なる意想を歡迎するの時は、やがて是れ無想派小説家が取て代るべ

り、道義の觀念の薄弱なるにあり。吾等は敢て是を以て現今作家の根本的二大痼疾なりと謂はむと欲す。其の作家の技倆才藻に關するものゝ如きは、之に比すれば皮髪の病のみ。

紅葉山人

敏捷なる國民の友の批評家は、近來小說界の趨勢を案じ、眉山、鏡花以下所謂る觀念派の新作家の勃興を以て『排想派』の領袖たりし紅葉一輩の末路をトし、更に一種皮肉の評を下して曰く、紅葉が著作壇を退けるは之れ創作の能無きを自覺せるものなり、彼は小說家よりは寧ろ紀事文作家なりと。

あゝ是れ寧ろ殘酷なる批評には非るか。

社會の事物は其の發達の次第に於て振子的擺動を作爲するを常とす。一是一非必ずしも當來の歸點を案定すべきにあらず。誰か所謂る想なる者を惱悅したる讀書社會が、次に渴望するものゝ果して何物なるべきを知るものぞ。

奇警、凄艷、慘憺は觀念派小說の好て描寫せんと企つるところ、而かも其の性僻不

義は理想化の上に存することを知らざるの徒のみ。見よ、古來何人か平凡なる人物と事件とによりて絶好の小說戲曲を成就せしものありや。事件を先にして人物を後にするを非とするものも、亦小說戲曲の本領を誤れるものに非るか。之れ古來詩學上の一問題にして、今日尙未だ異說を絶たずと雖も、吾等は事件を先にして人物を後にしたるアリストテレスが千古の卓見を贊するものなり。人生の經營する處は常に平等を主として差別を客とし、種族を主として個躰を賓とす。人類全躰の發達幸福の上に個々人の性格は幾何の價値ありや。所謂る詩學上の事件なるものは、人生の意義を發表するの手段なり、所謂る性格なるものは事件を構成するの方便に外ならず。夫の個人の性格末葉に注意して、是の性格の織り成せる人生活動の根蒂に注心せざるものは、眞に詩を讀むものと謂ふべからず。事件は素より性格を待て生ず、而かも所定限は其の價値に於て常に彼定限に劣るてふ原理は、是處にも格好なる應用を發見するに非ずや。

吾等の見る所を以てすれば、現今小說の缺點は、其の事件を先にして人物を後にするに非ず、其の人物事件の非倫異常なるにもあらず、國民の特性を蔑視するにあ

作家の道念と觀念

現今小說の二大缺點

吾等は文學に關して今日多數の批評家と其說を異にするもの多し、現今の小說に關しても亦然り。多數の批評家は現今の小說を難じて曰く、事件を描て人物を描かず、故に其の性格怪僻不倫に陷り、容易に有り得べからざるの人物を驅りて、容易に有り得べからざるの事件を描く、其の作愈巧に入りて、其の情愈人を離る。彼等は何が故に通常自然の人間を描く能はざるかと。何ぞ其の說の尤もらしきや。

小說戲曲の要は社會の假象の中に人生の眞相を示すにあり、吾等平生實際の社會に見るべからざる理想的狀態を發揮して之を現實にするにあり。事件と云ひ、人物と謂ふものは、畢竟是の抽象想を具躰にする上に於て必要なる手段に過ぎざるのみ。人生の眞相は單調平和の常躰に於て見るべからず、之を闡揚するには容易に見るべからざるの人物と事件とを要するは、素より自然の數のみ。小說的人物の非倫なるを難ずるものは、平凡なる寫實論者に非ざれば、あらゆる美術の第

と希望とを洩發する詩人の口より、吾人の過去談を耳にせむことを渇望す。歴史に現はれたる國民的性格は吾人の根本的自我を造るものなり。吾人は詩人美術家が美はしき形躰の上に結象したる吾人が胸底の自我を自己以外に見むことむ。

(廿九年三月)

原理を承認せざる讀者の前には、一個の空論に過ぎざるべし。ヘーゲルが哲學の如きは即ち是れのみ。第一、第三共に取るに足らず、歴史研究者として吾人の擇ぶべきは夫れ第二の法乎。自家を沒し私見を離るゝに非ずむば、全き歴史は遂に解し得べからざる也。夫の一班の事實を採り來り、自家の成心に準りて之を批判するものは、是れ未だ歴史を知らざるもののみ。歴史の摯實なる研究は自家を立するの代りに、他を申することを務めざるべからず。

（廿九年三月）

歴史畫と歴史小說

現今の繪畫に歴史畫の缺乏せる如く、現今の小說界は歴史小說に貧し、是れ何が爲ぞや。想ふに當今の人、新奇の想を求むるに急にして、回顧の精神を挑揚するの遑無きに依る乎。人は現在に於てのみ生活し得るものに非ず。僅々五十の人生は過去と未來の二つの無限に挾まれたる槿花一朝の榮枯に過ぎずとするも、彼れは尙三世に渉りて其の生命を有す、即ち歴史は吾人の幼時を語るものなり。人生平面の慰藉は常に歴史の回顧より來る。是を以て吾人は吾人の爲に人生の感情

則ち如何にして歷史を研究すべきか。

凡そ歷史研究の方法に三あり。研究者が自家の學說主義を標準として他を批判するもの其の一なり。研究者自身が何等の主義を有するも、一切之を度外に付し、純ぱら標準に就て研究せんとする學說の中に求め、歷史の範圍内に於て其推論發展の正誤趨勢を討尋するもの其の二なり。預め事物に就て純理的原理を抱持し、是の原理によりて歷史的發展の必然なる理由を說明せんとするもの其の三なり。吾人は是の三者の中何れを取るべきか。第一の法は今日の青年學者が好みて用ふる所のものなり。之れ一家の私評としては、依て以て論者の懷抱を發表するに足るべきも、動もすれば己を樹て他を排せむとするの弊に流れ易く、隨て歷史上の事實に就て忠實なる叙述を缺き易し。加之、隨て歷史上の事物は主として其の當年の思想の程度に關して其の價値と意義とを有するものなるを以て吾人の立脚地より之を批判するは、寧ろ歷史研究の旨趣に協はずと謂ふべし。歷史は吾人が現在の意識に達する迄閲歷し來れる失敗頓挫の記述なり。吾人は之によりて誡められ得べきも、敎へられ得べきものにあらず。第三法は、自家が純正哲學の

且將來進歩の指針を得むと欲せば、古より今に至るまでの、必然なる思想の歴史的發展を知悉せむことを要するは言ふまでも無きことなるべし。但し是れ最も進歩せる現代若くは未來に來るべき思想は、單に過去の歴史のみによりて演繹し、若くは推渡し得べしと謂ふには非ず。最も進歩せる知識は、時勢人文の進歩につれて、日に新たなる物質的及び精神の材料の上に、日々に新たに建立せらるべきは、素より論無きとなれども、斯く成り行ける發達の針路、はた精神を會得せむには、主として歴史的研究に依頼せざるべからざる也。若し夫れ現今の思想によりて歴史を解釋せむか、はた又之に反して歴史によりて現今の思想を是正し、改造すべきか。是れ從來歐羅巴の學者間に數々爭はれし疑問なれども、要するに楯の一面を看取せるの議論に過ぎず。預め現代の知識を有せる人は、容易に歴史を會心するを得べく、既に歴史に曉通せば、更に飜て其の思想の正誤を鑑識するの明を加へ、將來の進路に少からざる光明を抛つべし。吾等は創見と歴史とは或人の思惟するが如く相容れざるものと思惟せず、寧ろ脣齒輔車の關係を有するものと謂はん。歴史的研究とは何ぞやと云へる疑問に對する吾等の意見は概略右の通り也。然らば

(其二)

吾等は昨年以來、折に觸れ事に感じて、歷史的研究の必要を唱へしと一再に止まらず。之れ徒に說を求め異を樹てむが爲にあらず、聊か吾學界近時の趨勢に慨する所ありてなりき。然るに世人の容易く人の言を容れざるや、故らに是を曲解し、往々却て吾等に向て倖々の辯を弄するものあるは、吾等の恨とする所なり。故に茲に歷史的研究の精神を紹述して更に讀者の注意を請はむと欲す。蓋し人類の思想は其の時と處とに隨ひ變遷推移するものなれども、而かも偶然にして然るに非ず。一見したるのみにては自依獨存、他と何等の關係無きが如く見ゆる事實も、具に其の由來する所を尋究すれば、悉く皆歷史的發達の自然の徑行に依傍せざるは無し。往けるものは來るものを提起し、後なるものは先なるものに影響せられ、三世相互の因緣を作爲して、茲に初めて歷史の潮流を經緯するに至る。故に今日の學問は如何に進步し、如何に十九世紀特有の新面目を有せりとするも、過去數百年の歷史的發達に繼續せる一契點たるに過ぎず。故に現今學術の眞相を會得し、

實の連續は幾千年を經るも歷史たる能はざるを、猶兩國橋上幾萬の行人が終日遂に一戲曲を作す能はざるが如し。徒に關係無き零碎の事物を列ねて、其の博識を衒ふものは啻に其の論證に向て何等の效果を奏せざるのみならず、偶〻自己の盲識不能を暴露するに終らむのみ。事物の間に必至の因緣を認むるものに非ざれば、形體の中に生命を認むる者に非ざれば、はた又連續の中に生長を認むるものに非ざれば、眞に歷史を解するものと謂ふべからざるなり。個々の事實は歷史の精神を歸納し、歷史の精神は飜て個々の事實を演繹す、是の全分の關係を包括し得て始めて圓融の歷史を味ひ得たりと謂ふべし。

或は謂ふ、歷史は人をして回顧せしめ、保守的ならしむと、之れ亦歷史を解せざるものゝ言のみ。歷史は啻に過去を說明するのみならず又將來を指導するもの也。歷史の精神が過去に於て不斷に向上し來れるの道は、卽ち吾人が未來に於て常住に進步すべきの道なり。預言者の眼を以て歷史を讀むの覺悟無き者は、歷史の活用的半面を遺却したるものなり。吾等は以上の言を以て敢て歷史研究者の座右に呈す。

（廿九年二月）

歷史的研究とは何ぞや

(其一)

發達論の進歩と共に日にまし榮え來りたる歷史的研究は、十九世紀思潮を代表するの旗幟なり。過去の影響勢力の遺傳、時間の連續、三世の因緣を認むるものは、同時に歷史的精神が究學の第一義なるを認識すべし、是れ吾等が今更喋々を要せざる所なり。されば吾等は今日の文學批評家が漸く歷史に對して特別の注意を爲すの風あるを見學術進歩の一徵候として之を歡迎する者なり。さりながら論語讀みは必ずしも論語知りに非ざるが如く、吾等は歷史を口にする幾何人が眞に歷史的研究の意義價値を知れるかを疑ふ。今日の學者批評家の中一事を論ずる毎に其の過去に於ける經歷を述べ、具に其の典故を比擬し其の儀例を考索するものは則ち是れあり。前人の遺言を引索し、殘型を考證し、巧に斷簡零墨を補綴して揣摩臆測を逞ふするものは則ち是れあり。而かも彼等の幾何人か果して歷史的發達の精神を模捉し來りて、三世不解の因緣に點晴し得たるものぞ。生命無き事

及ぼせしや。希臘美術は如何にして發達し、印度に入りて如何に變化し、更に支那三韓、日本に入りて如何に變形したりしや。是れ亦頗る趣味ある問題に非ずや。

宗教無き國民として、支那、日本は如何なる精神的生活を營みしや。古事記の神話と吠陀、ホメールの神話と、搜神記との比較は如何なることを吾人に敎ゆるものなるか。是れ亦頗る趣味深き問題には非るか。

かくの如く at random に列擧し來れば數限りも無きことなり。然れども是れ皆國民性情の上に根蒂を有せざるもの無く、隨て各國文學の精神發達の上に密接の關係を有するものに非るは無し。我か邦文學者が人類歷史の表面に立ちて研究し得べき題目、夫れ斯の如く豐富なり、務めざるべけんや。唯之を爲すには博大なる精神と不拔なる決心と堅強なる忍耐とを要す。但し世に死書死文なきことを悟らざるべからず。歷史を生物として見ざるべからず。異邦の知識を惡むべからず。自己一人の主觀的滿足は何の價値も無きことを悟らざるべからず。あらゆる知識意見は、世界人類の歷史に關係して初めて其の價値を有することを覺悟せざるべからず。

（廿八年十一月）

同一アリアン族の祖先の言語は近くして、印度、イラニック、スラボニック、チュートニック、グレコ・イタリック、ケルチック等となり、遠くして梵語、ゼンド語、羅甸語、索遜語等となり、更に遠くして英、佛、魯、以、西、波等の諸語となりたるは何が故ぞ。是れ素より言語學上の大問題なるべし。而かも之を吠陀、ホメール希伯來、波斯の古文學、中央亞細亞の諸舊記等に鑑みて、國民文化の變遷に考へ到らば、或は意外の結果を生ずるやも知るべからず。之れ亦頗る趣味あることに非ずや。

ザーゲは民族の天性を尤も飾り無く發揚したるものなり。弘く各國の傳說民族を參照し、飜て之を人種學の假設に照鑑せば、爰に亦意外の結果を得る無きを保せず。是れ亦頗る趣味あることに非ずや。

同じく原的アリアン族の子孫なり、吠陀とホメールとは何が故にしかく差違ありや。吠檀達以下の印度哲學とタレース以下の希臘哲學とは何が故にしかく差違ありや。印度人は何が故にしかく厭世的にして、希臘人は何が故にしかく調和的なりしや。チュラニアンなる支那人は之に反して何が故にしかく樂天的實際的なりしや。將た又大乘佛敎は支那、日本に傳はりて如何の影響を國民性情の上に

文學研究の好題目

發達論と共に近代思想の新傾向とも見るべき比較研究的精神は欝勃として歐洲學者の間に興起せり。我が邦文學者が文學研究の好題目一にして足らざるなり。

漫に異邦文學に就て考索比擬するは比較的研究の精神に非ず。文化發達の歷史と關聯して必然の徑行を抉摘し、彼此の差別に就て一樣同致の關係を表示せざるべからず。三と六と八とは相異なるも、三と六と、四と八と相等しき所以の理を明にせざるべからず。比較的研究は世界歷史の心髓を發揚するものなり。今夫れ之を人種に分ち、之を風土に照し、之を歲時に繫け、各國文學の特質を表明するは、甚だ趣味あることに非ずや。

更に之を哲學的思索の發達に照らし、宗教的意識の推移に徵し、美術詩歌の上より、風俗習慣の上より、文學言語の上より、各國民族の特性に研究し到らんは頗る趣味あることに非ずや。

而かも其の學識の足らざる爲か、材料の足らざる爲か、兎に角往々杜撰臆說に陷るは頗る惜むべしとなす。例せば自己一部のグリーンを讀み、亦二三のグリーンを言ふ人あれば、彼等は直にグリーン哲學流行などゝ素破抜き、而して萬一其言にして歐洲哲學界に聞えたらむ時、我哲學者の如何ばかり迷惑すべきかを察せず、或は二三禪學雜誌の發刊を見、二三知名の士の之を談ずるを見ては、直に捉て禪學流行と唱道し、種々の牽強附會の說を附して我が思想界に於ける必然なる歷史的發達の一契點なるを證せんと要す、而かも國民的思想の推移の更に深遠宏大なる根據を有することを覺らざるなり。斯くの如きは、所詮歷史的觀念の必要の未だ十分に我が思想界に認められざる弊に坐する無きを得んや。

吁憂ふべき哉、今日の學風や。世間若し予輩を大言自ら高く標置すと爲すものあらば、請ふ先づ自家面上の蠅を拂ひ來れ。予輩は顧みて背後に照膽の鏡あるを忘れずと雖も、而かも倖々自負の徒に遇へば、睫を交へて顧みて他を言ふことを忍ぶ能はざるなり。

(廿八年十一月)

と雖も、所詮幾千年の歴史によりて涵養せられたる我邦人の審美的意識に基くこと勿論なるべし。然らば即ち彼等が排斥する所の『死書死文』を外にしては、彼等自身の目的すらも尚且達するを得ざるに非ずや。彼等が言論の無責任なる、概ね是の類なり。

吁、學に志すものは堅強なる意志と、剛毅なる忍耐と、博大なる精神とを以て事に從はざるべからず。漫に速成を望みて、獨創々々と叫ぶものは是れ學界の外道のみ。歐洲哲學の歴史を通じてプラトーンの面影を逸する事なく、クヰーン、ベッスの記憶はヰルヘルム三世の胸に活けるかを見、はた又ラマルチンとユーゴーとは已にラフォンテーヌとラシヌとの詩中に胚胎し、ボシュエとヴォルテールとの懐に養はれしを看破するものに非ずむば、如何ぞ茫々たる學界に棹して彼岸に達するを得むや。

然りと雖も、予輩は我邦の青年間に一も歴史的思想なしと即斷せむと欲するものに非ず、只其の概して缺乏せるを嘆ずるのみ。一派の青年が、常に其の歴史的眼孔を以て思想界の大勢を觀察せんと務むるは、予輩の大に賛成する所なりと雖

而かも予輩は彼等の大言に傾聽し拍手する醉興者流の世に少からざるを見て、吾國學風百年の爲に轉々感々の情に堪えざるなり。東洋の新美學を作れよとは、如何にも尤らしき、又尤もなる語なり、而かも其の旨趣とする所の如何に幼稚、無邪氣なるかは予輩已に前號に之を一言せり。遮莫予輩は、常に放言壯語の爲に容易く挑撥せらるゝを見て、社會の品位に於て缺くる所あるを惜まざるを得ず。試に思へ、古書を斥けて死書となし、古文を排して死文なりとせるものが、如何にして東西思想の淵源を探りて、勘解裁斷の途に出づるを得べきぞ。例を近きに取らむに、細々ながらも今日まで連綿たる歷史的發達を爲し來れる本邦の美術に對する現今美術の關係的位置は、彼等が所謂る死書死文を外にして、如何にして明かにするを得べきか。更に手近き例を取らむに、天平美術の成立を助けし推古、天智二朝の美術は印度式と如何の關係ありしや。之より溯りて、我邦美術の眞相を明かにせむと欲せば、勢ひ三韓、北朝、天竺よりアッシリア、バビロニア、希臘に入らざるべからざるに非ずや。然らば則ち法隆寺の十一面觀音像を悟了せんと欲せば、ミュロン、フヂアス、アルカメネスの知識を要するに非ずや。彼等が所謂る日本の新美學なるもの

想界は趨新の外に溫古を知らず、些々たる教科書的の講究思辯を以て足れりとなす。是の渦中にある一般の人は是の皮相膚淺の狀態を以て自ら進歩的趨新的なりと信ずるものゝ如しと雖も、教科書は自己の關係的位置を悟了せしむるものに非ず。自己が古人に對する位置如何、將來如何の方向に進むべきやの問題は、古典の講究に非ずむば到底爲し能はざる也と。是れ全く予輩の意を得たるもの也。

學に進むは猶道を行くが如し。方處歳時に於ける自己の關係的位置を知るに非ずむば、即ち歷史的發達の方向結果を知了するに非ずむば、自ら自己研鑽の價値を知ること能はず。吾人は如何にして自ら安じて大思想界の進路に多少の貢献を作したるを信じ得べきや。薄志弱行の少年往々學に倦む、即ち師を退け、書を抛ち、偏に自家針頭大の頭顱を苦しめて、一朝古今千載の聖哲を驚倒せむことを僥倖す。何ぞ自ら重ぜざるの甚だしきや。彼等は猶暗中に摸捉するが如し、だま〳〵鼻うごめかして獨創と自稱するものありとするも、古人の陳套を反覆するに過ぎざらむのみ。吁、學は天下の至難なるもの、如何ぞ薄志弱行の徒の怪我にも成功すべき謂れあらむや。よしや之を言ふものゝ卒直無謀なる、寧ろ憫むべしとするも、

歷史的精神

現今の我學術界に於ける歷史的精神の缺乏

十九世紀の思想界に於て最も貴むべきものゝ一は歷史的觀念なり。天地間の萬物は凡て活ける發達を爲しつゝあるものなり。之を個々體に見るも、之を全種族に徵するも、將た又之を美術、文學、宗敎の過去の經歷に求むるも、一貫不斷の歷史的發達は耿々として覆ふべからず。夫の散たり、漫たり、亂たるもの、起伏し、浮沈し、離合して、著落趨舍の跡、雜然として一ならずと雖も、所詮全體の精神に一毫の累を爲すを得ず。是の偉大なる歷史的發展を幇助し裨益するの限に於て、萬物其の存在の價値と意義とを享くべき也。夫の歷史に背いて進まんと欲するものは猶運命に忤て戰はんとする希臘人の如し、唯々其の犧牲たるに終らむのみ。歷史的發展を外にして、世間又安ぞ獨創なるものあらむや。予輩が歷史的研究を唱道する所以のもの、洵に明々白々たるに非ずや。

吾友の一人曾て古典研究の必要を論じて曰く、文學哲學を問はず我邦現時の思

も大なりと。悲劇家は自己より大なるものを造らざるべからざる也。

終に臨て一言すべきとあり。我友姉崎正治氏曾て『印度戲曲の特質』(帝國文學第七)を論じ、中に日本の戲曲に眞の悲劇的勇者無きを慨し、明治の文學者が徒に男女の愛情に齷齪し、未だ曾て一人の南洲の如き偉人物の悲劇的最後を題目とする者無きを浩嘆せり。予輩は氏が過去日本戲曲に悲劇的勇者無しとの斷言に對しては、多少の異論なき能はずと雖も、而かも我が作劇家が老南洲の如き人物を描くを欲せざるは、予輩の氏と共に慨嘆する所なり。我が邦歷史的英雄多しと雖も、南洲の如き悲劇的生活を爲したる者は甚だ少し。想ふに南洲は高邁磊落の士、一たび志を廟堂に得ざるや、冠を掛けて故山に躬耕し、誤て知己青年の擁戴する所となるや、情義之を捨つるに忍びず、忠烈の高士甘じて叛賊の汚名を受け、『笑て殘骸を擲て數弟子に附し』、當世紛々の毀譽を排して、嘿然として千年の知己を俯仰す、何ぞ其の事蹟の悲劇的なるや。作劇家の好題目何物か是に如かむや。今日の文人往々にして指を爰に染むるもの無きに非ずと雖も、是の老雄千歲の肝膽を照すもの絕て無し。盱我が作劇家は何故に是の好題目を提へざるや。

(廿八年十一月)

は未だ全く悲劇を解せざりしものゝ如し。

讀者は、上來述べ來りたる所によりて畧々運命と悲劇との關係を知了せられしなるべし。之を要するに、唯一不易の精神は宇宙の終始を貫徹す。或は自然界にありて種族維持の原理となり、或は人間界にありて人類發達の主義となる、所謂る人道なるもの是れなり。性格は人道の個人に顯はれたる者なり。予輩は先に人道を大なる運命と言ひ、性格を小なる運命と名けしが、今主客の差別に從ひて、前者を外部、後者を内部の運命と見るを得べし。悲劇の目的は、内部の運命の反抗と沒落とによりて、是の外部の運命の不拔なることを示すにあり。今の人、多くは單に個人的性格を描くを以て戯曲の能事了れりと思惟し、幽遠深大なる悲劇の精神に至ては多く意を用ひず。故に其の作多くは散漫腐爛に流れ、捕捉する所を知らず、嘆ずべき也。夫の沙翁を讀みて單に其の性格にのみ住心し、其の間に磅礴せる悲劇的運命を認むる能はざるものは之れ徒に其の字を讀みて其の意を解する能はざる輩のみ。詩人シルレルをして『大なる哉リチャード三世』と叫ばしめしものは實に是の運命に非ずや。ハルナック曾てファウストを評して曰く、是れゲーテ自らより

吾は我が身を最小さく又最大きく感じぬ。（ファウスト、第一、夜の場）

と云へりしも亦是の境地を指せしものに非ざるか。是れ文學が吾人に與へ得る絶頂の快樂なり、宜なる哉ショペンハウエルが悲劇を以て最高の詩なりと云ひしや。

然れどもショ氏が悲劇に對する意見の予輩と同じからざるものあり、是れ讀者の一顧を煩はすに足る。氏曰く、

悲劇の目的は人生の怖るべき方面を示すにあり。即ち名狀すべからざる人道の苦惱、罪惡の勝利、嘲けるが如き偶然の支配、正義と無罪との救ひ無き沒落を吾人の前に明かにするにあり。即ち是れ是の世界實在の眞相を示すものなり。（意志及寫象としての世界、第三卷プラトーの理想、第五十二節）

悲劇は人生の怖るべき一面を顯はすものなることは洵に氏の言の如し。而も其の目的は氏が說ける如く偶然の支配、罪惡の勝利を示すものに非ずして、却て永遠なる道義的制裁の存在を明かにし、正義最終の勝利を示す者なり。是れ予輩が悲劇を以て人生最高の德義を發揮するものと謂ひし所以なり。是の點に於て氏

の實は爰に存す。

運命の發表者として悲劇は二樣の快感を吾人に與ふるを得べし。一は運命を敵として戰へる悲劇的勇者の偉大なる事業より來り、一は不拔なる運命其物の認識より來る。吾人悲劇を讀みて、身を以て知らず〳〵劇中の勇者と合體し、共に憂へ、苦み、惱み、戰ふ時に當りては、吾人が本然の能力を遽盡し、餘蘊なく之を現化するを得るを以て、吾人の內心に於て沈痛なる滿足を感ずべし。而かもあらゆる煩悶は徒勞に屬し、神衰へ力竭き、敗軀に杖て、仰で崇大無邊曠劫不易なる運命の存在を認識する時は、激雷暴雨其の跡を收め、悠々蒼天、茫々無際、一路の春風我を誘て其の行く處を知らざるが如く、望生き氣復し、俄に人生盈尺の繫縛を解脫して、眞如常住の世界に再生したるの思あり。ファウストが人世の汚濁を離れ、天上の光に眞理の面を眺むと夢みし後。

In jenem sel'gen Augenblicke
Ich futilte mich so klein, so gross. (Faust I- Nacht.)

彼の幸なる一刹那

uns ist sein gebiet'rischer Vollzieher.—
Der Zug des Herzens ist des Schicksals Stimme
In deiner Brust sind deines Schicksals Sterne.　(Wallenstein's Tod, I, 7)

運命は恒に其の目的を成就す、
吾等の胸は彼の執行者なればなり。
心の赴く所は運命の聲なり、
汝の胸に運命の星あり。(ヴァレンスタインの死、第一齣、第七場)

洵に知言と謂ふべし、古へラクリトが『性格は人間の惡魔なり』と言ひ、ゲーテが運命は勇者の內性(ヘルド　インネレ・ナツール)なりと言ひしも、全く是意に外ならず。

斯の如く、個人的性格は悲劇の根本たりと雖も、而かも其の目的には非ず。悲劇の目的は性格によりて運命を顯はすにあり、是の世界を支配する所の人道即ち道義的制裁の神聖にして犯すべからざる所以の理を表明するにあり。是に於てか性格は啻に人道に反抗することを要するのみならず、敗衂して自ら運命の犧牲となり、以て人道最終の全勝を示さゞるべからず。悲劇の悲劇たるを得る所以のも

道の存在を示すに足らず。抑も是の無事なる社會は其の根柢に於て如何に幽深なる意義を含めるか、表面平和の外觀は、如何に裏面鬪爭の結果なるか、社會の中に生活する吾れ人は如何に恐るべき地磐の上に立てるか、是れ悲劇の主として表白せんとする所なり。是を以て悲劇的人物は其の非凡なる資性と特質とを以て人道の全能に反抗し、展轉煩悶して百方其の非望を到達せんことを務めざるべからず、而して人道の勢力の無限にして犯すべからざる事を示さんが爲めに其の反抗は成るべく強大ならむを要す。而して是等は凡て人物性格の必然なる結果なる事、猶梅樹は梅子の必然なる所生なるが如くならざるべからず。夫のエデプスが示せるは運命に非ずして實は偶然のみ。是を以て沙翁がマクベスの運命は、既に其の鬱勃たる有爲の氣象に胚胎し、妄に自ら王者の資あるを信じ、偶〻戰勝の餘威に乘じて覬覦を遂げんとしたるに成りしなり。ゲーテがタッソーの悲劇的なるは自己の英才を孤負し、妄想自ら媚び、遂に現實の知識を遺却したるに基きしなり。シルレル其のワレンスタインをして言はしめて曰く

Recht stets behält das Schicksal, denn das Herz

氣品と不屈なる精神を要するのみ。見よ、テベスのニオベを。渠女は纖約蒲柳の一女性つみ、而かもラオコーンの恐るべき煩悶に比して、如何に遙に沈痛悲壯なる悲劇的感情を吾人に與ふるや。渠女は七人の子の母なり。無慈悲なるアポロ神、アルテミス神の殘酷なる復讐初まるや、渠女は避くべからざる運命の前に毅然として臆する所無く立ちたりき。其子の殺されたるものは渠女の脚下に横はり、傷けるものは蹌踉として渠女の膝を攀づ。吁暴神の來撃に面して敢て憐を乞はず、敢て救を求めず、限りなき哀悼の中に高雄の氣韻を堪へ、端然幼兒を抱て立てるニオベの心事の如何に悲劇的なりとするや。人は無限に小なり、而かも運命に抗死することに於て無限に大なる事を得べし。彼れは死生を賭して運命と其の權力を爭ひたればなり。ワレンスタイン、ナポレオン、ソクラテス、將たニオベは實に限なく大なる人に非ずや。限りなく小なるの人は常に限りなく大なる人を觀んことを樂む、彼れは其の中に自己の理想を認むればなり。

次に悲劇的人物は不幸ならざるべからず、而して其不幸は人道と其性格との關係より必然に生まれたる不幸ならざるべからず。蓋し日常平板の生活は以て人

裁の存在を想へば、轉た茫々無限の感慨を忍ぶ能はざるなり。是を以て予輩は常に謂ふ、人をして最も深大なる道義的觀念を感銘せしむるものは世實に悲劇に若く者無しと。

蓋し悲劇に要する所のもの凡そ三あり。其の勇者の英邁非凡なる其の一なり、其の性格をして人道に背かしむる其の二なり、人道最後の勝利を明にする其の三なり。要は運命の存在と全能とを表白するに在り。想ふに讀者をして深痛なる同感を與さしむるは、其の人物も亦異常の才器を顯はさゞるべからず。況して天下の氣運に反抗して昂然相下らず、望失はれ志破れて尚驚かず、一膽斗の如く、身死に瀕して猶其の傲岸を失はず、冷然笑を含みて運命を嘲るの膽勇に至ては、決して尋常一樣の人物に望むべからず。ソクラテス、ナポレオン、ワレンスタインの如きは實に是種の人物なり。讀者試に思へ、ヴォルテールの『モハメット』に於てバルミラが死に臨みて『世は暴君の世界なり』と叫びしは、ジュリアン帝が『ガリエール汝は勝てり』と呼ばはりしに比して、如何に遙に悲劇的なりとするや。悲劇的人物は必ずしもヘラクレスの如く其の躰軀の剛大なるを要せず、只ニオベの如く高尚なる

び揮ひ難し。青春の榮華永く去りて敗餘の意氣而かも少しも衰へず、昂然天地に俯仰し、從容自若として笑て運命の犧牲に就く。何ぞ其の精神の高邁にして其の心事の落々たるや、英雄の末路誠に丈夫をして號泣せしむるに足る。而かも予輩は斯の如き慘憺たる悲劇に接する毎に自ら顧みて悚然として畏るゝ所あり。吾人人生を支配する道義的制裁は、遂に吾人が一毫の瀆累を容さず、千古萬秋毅然として不拔なるものあるを觀て、轉た人道の崇大無限にして個々人生の如何に憐むべきかを痛覺せずむばあらざる也。昔希臘人は運命を以て嫉妬の勢力となせり、是を以て彼等の禍福は常に流星の如く外より來る。エデプスや、アドラストスや、皆是の盲目なる嫉妬力の犧牲に過ぎざりき、斯の如きは悲劇の眞意を得たるものに非ず、荒誕無稽寧ろ笑ふべき也。若し夫れワレンスタイン、マクベスに至ては、運命は大に其の面目を異にせり。彼等は各々其の特殊の性格を持して特殊の方處時代に立ち、強健なる自由意志を以て其の爲さんと欲せし所を爲しゝなり。彼等の事其の志に違ひしは、彼等自ら之を招きし也。予輩は彼等の運命は彼等の性格と人道との必然なる關係に外ならざるを見、更に世界に於ける悠遠なる道義的制

根原的運命なりと言ふを得べく、其の一般の人道に顯はれたるものは大なる運命、其の個人の性格に顯はれたるものは小なる運命と言ふを得べし。而して小なる運命は恒に大なる運命に從はざるべからざるなり。

悲劇とは何ぞや。詮ずる處個人と世界との爭に非ずや。個躰と種族との鬪に非ずや。個人性格の一般人道に對する反抗の歷史に非ずや。一言すれば、大小二個の運命の衝突に非ずや。然り是二個の運命の衝突は悲劇の要件なり而かも悲劇の能事爰に終れるに非ず。其の最終の目的は、個人性格の滅亡若くは服從を描くことに因りて世界的人道の神聖崇嚴にして犯すべからざる所以の理を明にするにあり。悲劇の價値快感亦實に爰に存する也。

哀むべき哉、人間の運命や。平生史乘戲曲を讀む毎に、予輩未だ曾て是嘆無くむばあらざるなり。古より豪邁卓犖の士、動もすれば世事の倖々に甘ずる能はず、眇たる孤軀を起して一代の風雲に背馳し、赤手以て廻瀾を飜倒せんと要す。世を亂り人を苦め、天に背き命を悟らず、傲然として古今を睥睨するや、意氣虹の如く風稜鐵に似たり。一朝槀枯處を代へ、非運潮の如く其の身に迫るや、殘骸力盡き孤劍再

全體の發達を催進し以て其の理想を現化するにあり。故に人道は其の起源よりして之を見れば素個人の性格を外にして存在するものに非ずと雖も而も一び人道として存在したる以上は其の成立の目的を遂げんが爲に個人に對して絶對の制裁力を有するに至る。之を喩はゝ猶個人の意志の一致より成りたる法則が一度び國家の意志となれば飜て個人に對して絶對の權力を有するが如し。已に人道は人類全體の發達を目的とするを以て個々人の生活に對しては極めて冷淡なるを免れず彼れは偏愛する所無し唯己に順なるものを福するのみ。

人類が先天的に稟有せる進歩的動機が社會の中に顯はれたる時は之を人道といひ個人の中に顯はれたる時は之を性格といふ。換言すれば性格は特殊なる方處歳時の下に制限せられたる人道なり故に性格と人道との關係は尙個體の種族に於けるが如し。個體が種族の生存に效力ある限に於て自己生存の價値を有するが如く性格も亦人道の發達に裨益ある限に於て自己の幸榮を全うするを得べし。若し性格にして一朝人道の利福に衝突し若くは背反したる時は忽ち自家覆滅の禍を免れざるなり。運命なる語を假りて之を表はさば人類の進歩的動機は

るものあらざるなり。所謂る人道は吾人を支配するの運命なり。然らば則ち人道は何處に存するか。曰く人間を外にして別に人道なるもの有らざるなり。所謂る性格は吾人の胸裏に存する人道なり。是故に人間ある所即亦運命なかるべからざるなり請ふ少しく之を說かむ。

人類はあらゆる生物と共に偶然にして生息する者に非ず、或る最終の目的即理想に向て精進する者なることは、之を過去の歷史に鑑み、之を現在の狀態に察し、炳焉として爭ふべからざるの事實にして、今日最も進步せる哲學者、倫理學者の等しく認むる所なり。抑も何者か吾人に是の如き進步的動機を與へたるか、何故に吾人は是の理想に向て不退轉の精進を爲さゞるべからざるか、將た又是の理想の如何なるものなるかは、今日人智の能く說明する所に非ずと雖も、兎にも角にも斯の如き進步的動機の先天的に人性中に存在すること、又人間の諸々の歷史は所詮是の動機の活動に驅られて人生の理想に到達せんとするの盡力に外ならざることは、今日あらゆる學問の證明する所なり。人間社會に在りて所謂る人道なるものは個々人の內性に存在せる是先天的動機必然なる合成力にして、其の目的は人類

に惜むべしとなす。されば今日悲劇と運命との關係に就て一言するは、予輩其の不急の辯に非ざるを信ずるなり。

想ふに、世事の常無くして人生の長へに流轉するは苟も生を觀じ世を念ふ人の容易に認むる所なるべし。然れども一び皮相の見を離れ、熟々沈思靜觀すれば、必ずや人世を營むものは偶然徒爾の事件のみならず、常住不易なる或物の其の間を貫通するものあるを見む。更に之を諦視し、洞察し、具に其の幹枝を尋究すれば、先の無常偶然なりと思はれしもの、多くは避くべからざる必然の行路を經過して、各々其の始終を遂げたるものなることを發見すべし。更に又縱に歲時に繫げ、橫に方處に涉り、古今東西の史乘に照らして、審に人生興廢の跡を察すれば、是常住不易なる或物は、萬千不同の世事を綜べ、殺活喜憂の樞機を握り、己に反するものは之を斃し、己に順ふものは之に福し、成敗著落の跡、今にして之を見れば儼として一絲の增損を容さゞることを悟了すべし。是の古今を通じて人世を統轄する常住不易なる一物の存在を認識したる人は、即是れ運命の存在を認識したる人なり。

然らば則ち吾人の所謂る運命は何處に存するか。曰く、人世を外にして運命な

運命と悲劇

昔者フヰヂアス雷神（ゾオイス）の像を造る。工成り、將に之を殿堂に安置せんとするや、彼れ像前に佇立して凝視沈想すること多時、敬虔の情自ら禁ずる能はず、覺えず地に跪き、双手を擧げて叫て曰く、賤匠の作能く神意に協ふことを得たりや否やと。何ぞや、蓋しフヰヂアスは自己より大なるものを造りたればなり。

自己より大なるものを造ることに於て、悲劇家は美術家に異ること無し、何となれば彼れは運命を顯はすものなればなり。

夫れ運命は悲劇の骨髓なり、生命なり、運命なきは即ち是れ悲劇無きなり。然るに希臘古代の運命劇一び評論家の非認する所となりてより、近世劇を言ふもの靡然として一に性格を旨とす。而かも運命主義の最大なる發表者たるに於て、大沙翁は毫もソフォクレエス、エスキラスに讓らざることを認むるもの甚だ少し、是れ予輩の潜に怪訝に堪えざる所なり。近來我が作劇家の指を悲劇に染むるものも、偏に性格を重じて深く意を運命に住めず、遂に此の悲劇の第一義を逸し去るは洵

第一期

明治二十八年九月より
明治二十九年十月まで

ては此の一語は之れ最高の法庭に於ける死刑の宣告に外ならざりしなり。吁々愛は失はれ。名譽は毀たれ倚るに人なく歸るに家なし。三界牢廓として夫れ何くんか適かん。高絶無情の天を仰で感愴すれば人は只一死あるのみ。お千代の如き眞に憐むべき哉。

一語は永劫の墮落、無限の罪惡より渠女を救ひたる福音なりし也。あらゆる渠女が幸福は擧て此一語の中に包含せらる。父の病又渠女に於て何かあらん。孝子となり、貞女となるの第一義は、實に此の一語の中に存すればなり。

可憐なるお千代は、斯の如くしてやがて落膽すべき暫時の希望を夢みたり。姑の邪慳、半兵衞の苦心は少しも知らず、底まで見ゆる詐りに、其の身ばかりの誠を寄せて、再び夫の家に歸り行く。今にも來む嵐の前に戲れ遊ぶ胡蝶の如しとも見るべくや。半兵衞が涙と共に一切の事實を打明すを聞き、

エ、イずりやどふでも去らるゝか。

思はず叫びし一語は如何なる斷腸の響ぞや。此の一語と共に渠女は其最終の希望に離れたり。一切の苦心は空々如として泡沫の如く、涙の外は何の痕もなく消え去れり。上田村より歸り來りし暫時の月日は、眞に一場の夢に過ぎずして、一旦覺め來れば身は依然としてお輕に恥しめられ、金藏になぶられし故の我なりき。而かも一切の情實明になりて前には義理の刀に向はん術も無く、後には三度び焚火せられし門に戻らん途もなく、進退維れ谷まれる今の我なりき。お千代にとり

らば顔も見るまじ、物言ふまじとの我もありしが、六十に足蹈込ては年許りよるてなく、月もより、日もよつて、病にからまるゝ、身の衰る程彌增に案じらるゝは子の身の上。三度はおろか、百度、千度去られても、去らるゝに定まりし前世の約束と思ひあきらむれば、悔もせぬ、憎うも無い。笑ふ人は笑ひもせよ、譏らば譏れ、指もさせ、子の不憫にはかへぬぞ。

今更合す顔もなき老父が思ひかけぬ悲慈の語は、憤怒嘲罵の聲にもまさりて如何に痛切に、如何に激越に、渠女が小き胸に響きしや。吾身一つは忍ぶべくんば則ち忍びもせん、行末長からぬ老父が名譽と幸福とを拋て猶且此の不孝の身を愛し給ふ、風下だにも嫌はれし家門父兄の恥辱を思へば、多恨なる渠女は必ずや『吾なかりせば』と思ひしならん。愁ふに自殺の一念は既に此時よりして其の胸奥に胚胎せしならんか。思ひがけなき半兵衛が『盡未來まで女夫』の一言に驚喜度を失ひて、倉皇旅裝を束ね歸らんと言ふ嬉しさに『親の病を何とも言はぬ』『しどなさ』は、渠女に於て敢て怪むべきに非ず。何となれば、渠女は如何に孝順ならんと欲するも、去られたる身は已に最大なる不孝不順の子となり了りたるを知ればなり。半兵衛の

なうお千代、五度三度の聟入嫁入も世にある慣とは言ひながら、悪いことは手本にならぬ。恥かしい〳〵と口で言ふ計りが恥を知つたと言はれふか。和女もかる〳〵三度の嫁入。尤始めの男、道修寺町伏見屋の太兵衛殿、心ぶしようにに身躰を持くづし、たゝずみもない様に成り、あかぬ別れ。互に難は無けれども、人は和女の辛抱がないゆへに去られた〳〵と批難付、此度の嫁入も追出さるゝに間もあるまい、忘れて島田平右衛門が娘の風下に居るなと、娘持た人々は寄合茶呑咄にも和女の噂。ま一度戻ては親兄弟、人中へ顔が出されぬとは知りぬいて、火に入骨を砕かるゝとも歸るまい、ヲゝ必ず去られて戻るなと、念に念をつがふた今度の嫁入。よう戻りやつた。父様おきなされたらお悦びなされうぞ。

お千代はそも如何なる感情を以つて姉が此諷誡を聞きしぞや。『恥かしい恥かしいと口で言ふばかりが恥を知つたと言れふか』とは、渠女の耳には何ぞ『死んで恥を知れ』と迫らるゝに異ならんや。

心は若かりし昔にかはらず、氣も強く、義理にもひかれ、おのれ重ねて去られた

而かも其の居を安ずる能はず。渠女實に愛せんと欲するも、愛すると能はざりしなり。猶春に後れし蛺蝶、風に折れ霜に痩せ、秋氣落寞として徒に衰殘の黄花を擁するが如し。渠女の半兵衛に於ける、愛せざりしに非ず、實に愛するの力無かりしなり。渠女の爲し得る所は、只其の毀損せる名譽を回復せんことを務むる一事あるのみ。進ては愛する能はず、而かも退て名譽を保つ能はずんば、お千代たるもの只一の死あるのみ。柔婉溫籍なる女子の身を以て、慘酷無慈悲なる社會に立ち、爭てか此の大恥辱を忍び得べけんや。已に愛を失へるや、お千代は半ば死せり。名譽を失ふの日は即ち其の全く死するの日なり。『心中宵庚申』は實に此半死の人が苦悶して全死に終るまでの一大悲劇なり。

『五月雨ほど戀ひ慕はれて今は秋田のおとし水』。三度迄去られし身の三界に住むべき家なく、戻るは元の親の家。『駕籠の戸明くれば打凋れ、目元しほるゝ縮緬の二重廻りの抱帶、涙の色に染かへて泣く〳〵出』でしお千代の心中はそも如何なりしぞ。姉の問に包み得て『恥かしや、又去られて』と答へし渠女の胸をば、離婚の一念は如何に蛇の如く纏ひ苦めけん。

代の胸中を察するに、恐くは其の名譽を回復するに之れ急にして、夫に對する愛情の如きは太だ住心せし處に非るべし。猶之れ數回の試驗に失敗せる學生が偏に及第をのみ希望し、其の成蹟の優劣等に就て特に注意する所なきが如きなり。想ふに、お千代は半兵衛の愛を維持せんが爲には出來得る丈けの力を盡したるべきこと素より論無し。されど之れ素半兵衛に對する眞摯なる愛情より出でしに非ずして、只彼れの愛によりて夫妻の關係を固うするに在りしこと亦敢て疑を容れず。故に半兵衛を愛せしと言はんよりは、夫妻の關係其物を愛せしと言はん方、一層妥當なるべく、夫妻の關係其物を愛せしと言はんよりは、其身の名譽を愛せしと言はん方、尚一層妥當なるべきなり。之を以て一旦姑の爲に是非なく離緣せらるるや、半兵衛の眞意如何の如きは問ふに遑あらず、表面上夫妻の關係無き以上は、渠女は路傍の人よりも太だ多く半兵衛を愛するの意なきなり。宜なる哉、半兵衛に逢て『物をも言はず障子を立切て』遽々然として立去りしや。

さはれ、お千代の愛情を想ひ遣れば、眞に憐むべきものあり。生まれて女子となり誰か愛情なからん、お千代や二度び其の夫に見え、生離、死別、幾度か其の樣を變て、

知らざりしのみならず、彼を疑へり。祇王を以て己に擬せし渠女は、眞に暴戻無情なる淸盛を以て半兵衛に擬せしならん。渠女は淸盛に泣きしにあらずして『定め無き男女の習』に身の薄命を寄せしのみ。人、己に相信せず、疑心早く情を隔つ。其間如何ぞ眞の愛情なるものを容れんや。お千代已に眞に半兵衛を愛せず、愛情の力は以て渠女を殺すに足らざるなり。然らば則ち何物か渠女を殺したる。名譽心是れなり。

予輩の先に言ひし如く、愛は女子が精神的生命なり、是を以て愛の品位と純潔とを保つは、勢ひ女子が第一の動機にして、苟も之が累を爲すものは其の最大恥辱として忌避する所なり。愛の純潔を累すの大なる蓋し離婚に若くもの無かるべし。結婚は女子にとりては猶愛情の試驗の如し。之に落第せるもの、即ち離婚せられたるものは、即ち公然事實の上より女德に於て缺くる所あるを證明せられたるものに外ならざればなり。其の內情は如何にあれ、お千代は一度ならず、二度までも、此の試驗に失敗せるものなり。女性の名譽の上に二回の大打擊を被れる渠女は垢を含み、恥を忍び、其の最後の運命を半兵衛の掌中に委ねたり。是時に於てお千

衛に嫁してより僅に『足かけ二年』、『良し』お腹に四月唯もない身』なりとも、予輩はかかる夫妻の間に純潔無二の愛情の存しがたきを思はざるべからず。但し相縁奇縁の世の中に、渡頭舟を同うして一見傾蓋の思あるものなきにしも非れども、そはまことに例外の事のみ。そもや夫の留守に暇をくれる姑心、お千代誠に半兵衛の愛を解せば、毫末だも其の夫を恨む由やある。何事をも知らぬ半兵衛が其の家に立寄りて『ヤアお千代爰に居るか』と呼はりし時に、眞に膠漆の情ある夫妻ならんには、當に急遽走り寄り相抱て衷情を訴ふべし。一言の挨拶だにせず、夫の言を『聞捨て物をも言はず、直と入り、障子をはたと引立』たるお千代の心中には、幾何眞に半兵衛を愛するの情ありとするや。渠女の眼には半兵衛は『去狀さま』と見えざるまでも、其故を問はゞ、少くとも『譯聞きたくば此方の心にお聞なされ、人の知つた事の樣に』と空笑せんこと疑無し。如何ぞ嬌羞好て人を避くる少女を以て、三度び家を換へしお千代に擬するを得んや。お千代は半兵衛が己を知れる程だも半兵衛を知らざる也。『足かけ二年の馴染、子までなしたる夫の心、知ても言譯して呉れぬか』と怨みし半兵衛は、少くともお千代を買被りしなり。お千代は當に眞に半兵衛を

思はぬ難に浮名を流し、命を果すお前もいとしいが、三人の子をなした二十年の馴染には私しやかへぬぞ。

と言ふに至ては人情最後の絶調、予輩毎に巻を掩て言ふ所を知らざる也。

女子を殺すものは愛情のみならず、名譽心亦之を能くす。巢林子が世話物中の女子は多少名譽心の爲に動かされざるもの無し。

八　『宵庚申』のお千代

は其の最も適切なる一例なり、渠女を殺したるものは實に名譽心に外ならず。

『宵庚申』は他の心中物に異なれる一種の特色を有する者なり。げにやお千代は情に死せり、されど渠女が半兵衞に於けるは、小春の治兵衞に於ける、お房の德兵衞に於ける、若くはおさが、お島の嘉平次、八郎右衞門に於けると同一の關係なるか。否々、然らず。要するに彼等は愛の爲に死したりき。されどお千代にありては則ち然らず『かる〳〵』ながら三度の嫁入に心詫しき跡も見せず、或は飽かぬ別れに浮世を嘲ち、或は歸らぬ死出の途に夫を送りて、身は萍の定めなく、緣も因もなき半兵

也。一言すれば渠女は其の身の實境を自覺せざる也。權三がアヽおろかな、兩人の帶を證據に取られ、寢亂れ髮の此體、誰に何と言分せん。もう侍も廢つた。御身も人畜の身となつた。エヽ〳〵無念や。

と憤慨するの刹那、おさいは俄然として初めて現實界の我に復れり。是と同時に、渠女は恐るべき而かも動かすべからざる未來の運命の宛然として眼前に横はれるを見たり。渠女は落膽せり、戰慄せり、悲泣せり。猶之れ深宵床を離れて夢遊せし人が忽然醒め來りて、身の何時しか萬仞の斷崖に懸り、進退活路なきに心付き、且惶れ且悲み、爲す所を知らざるが如し。

扨は御前も私も人間はづれの畜生になつたか。

之れ世界に於て尤も悲しむべき語の一なるべし。『扨は』嗚呼何ぞ此『扨は』の遲かりしや。渠女は人の妻として、人の母として、はた一個の女子として、享受し得べき過去現在未來の三世に渡れるあらゆる希望と幸福とは擧げて、此の悲むべき一語の犧牲と爲り了りたることを痛切に自覺せり。而かも一死以て寃枉を雪がんと欲し、尚後顧の情に忍びず、

と叫ぶに至ては狂態極まれりと謂ふべし。惟ふに嫉妬の一念は渠女が爲に渠女自身の別世界を作りし也。其の眼中に只其の娘の愛あるのみ、否己が胸に燃ゆる愛情の焔あるのみ。渠女を圍繞せる天地は滅したり、渠女は最早や現實界の人に非ずして、理想界否寧ろ夢幻界の人となれる也。何の邉ありてか屑々たる俗緣に拘泥せんや。深夜空屋に美少年を引入れて、少しも顧みず、喧爭席を擾し、衣襟寬濶して少しも憚らず、伴の丞の爲に權三と己の帶を拾はれ『市之進女房笹野權三不義の密通』と高呼せらるゝも尙少しも恐れず、渠女は其の內心に對して疚しき所なければなり。流石は權三は男子なり『南無三伴之丞、弓矢八幡遁さじと刀引抜き障子蹴破り飛出で』しが、其の嫌疑の遂に釋くべからざるを知り、自殺して其の身の潔白を示さんとせり。おさいは是の時如何にせしぞ。渠女は尙昏々として其の理想界に夢みつゝあるなり、權三の煩悶は渠女に於て解すべからざりしなり。されば渠女は亂心の人を諭すが如き口氣を以て驚慌の權三を止めて曰く、

此やどうじや不義者は伴之丞身に曇り無いお前に何の過り死なうとは。

可憐なるおさいは只中心の淸きを見、心以外別に社會に制裁あることを忘れたる

蕭洒冶靡の態度、之れ謹厚の女の爲すべき所に非ず。權三が茶の湯の祕書を見んことを請へるを許し、良人越在の空宅に於て深夜引見の約を爲すに至ては、不注意も甚しと謂ふべし。而かも渠女は自ら其の、しまり無きに心付かざる也。約を履み夜を冒して來るに遇ひ、『直に數寄屋へ〳〵』と手燭片手に傳授の箱、二人忍びし有樣』は、伴の丞ならざるも誰かは『影は障子に男と女忍びあふ夜の私語』と疑はざらんや。而かも渠女は其の不注意に心付かざる也。權三が他に情人あるを知りて嫉妬の念に堪えず

是れ見よがしの其の帶は、定紋の三つ引と裏菊とふじたゝるい引並べ、誰が縫た、誰が遺つた。

と問ひ詰め、『之には樣子がある』と言へば、『樣子といふが妬ましい』と泣きつき、腹立ちまぎれに權三が帶を解て中庭に投じ、權三が庭に下りて之を拾はんとするを引とめ、

あゝ帶に名殘惜いか、不肖ながら此帶なされ、一念の蛇となつて腰に捲付き離れぬ。

過ぎるなり。而して渠女は斯る性質の女子が以て其の身を節制すべき嚴格なる素行に乏しきなり。一言すれば渠女はしまり無きなり。

おさいは流石茶人の妻、物好もよく氣も伊達に、三人の子の親でも、きやしや骨細の生れつき、風忍ばしく床しくの、三十七とは見えざりし。

數句能く其の人と爲りと容貌とを寫し得たりと謂ふべし。渠女は其の娘お菊の年十三なるに權三を添はせんと欲し、頻に權三の器量を褒めたる後、お菊の娘氣に結婚を否むを見、

そなたがいやなら母が男に持つぞや。ほんに市之進殿と云ふ男を持たねば、人手に渡す權三樣じや無いわいな。

と事も無げに言廻せる氣輕さよ。斯かる言語は苟も人の母たるものが其の子の前に於て發すべきものならんや。權三に遇て其の娘の結婚の約を結び、

まづ娘には遇はせませぬ。私に似たらば恪氣深からう、脇へ心散さず一筋に頼みます。惡性があつたらば此の姑が恪氣の腰押し、お持たせの名酒お前と私が此樽にかう手をかければ、契約の盃した心。

其の罪に連坐せざるまても、盗み得たる金の却て情郎の累と爲らざることを如何にして知り得たるか。心なきも甚しきかな。然れども深く怪むに足らず、吾妻は其の戀人を見て其の他を見ざれば也。『殺生の罪、盗の罪、男の爲に作る心』既に此一事を意識す、渠女は天地に俯仰して疚しき所なし。愛はあらゆる罪の辯解者なればなり。書して茲に至れば予輩はヘスター、プリンが、

吾等の爲せし事は其れ自らの純潔を有せり。

(What we did had a consecration of its own)　(—Hawthorne's Scarlet Letter)

を想ひ出さずんばあらず。あゝ、此の世にありては、罪と愛とは常に不幸なる伴侶なり。吁之れ愛の罪か、社會の罪か。

七　『槍權三重帷子』のおさい

『槍權三』のおさいは最も善く世に有勝ちなる女性の不注意を示せるものなり。渠女は貞操に於て缺くるあるに非ず、其の夫を思ふの情は普通の女子よりも寧ろ篤且實なるものあり。只其の心愛情に充てるを以て其の擧措は總じて愛嬌あり

大金を調へんとせる。げにや渠女は何の術も知らず、又考へず、恐くは然諾の刹那にありては、其の出來得べき萬一の望だに胸裏にあらざりしならん。而かも渠女は漫に口舌を以て受合ひしにはあらで、滿幅の誠意を捧げ、斷々乎として其の必ず調達すべきを決心せりしなり。其の能ふべき望だに無く、しかも斷じて人と契る、そも何等の不注意ぞや。是れ猶不合理なる大前提より合理的結論を預想するが如し、勢ひ不合理なる小前提を用ひざるべからざる也。吾妻が藤五郎を殺せるは實に自然の結果のみ。藤五郎の胸上に跨りて白刃を擬し、

御身に恨も罪もない、假にも惚れて呉れた人、殺したうは無いわいな。殺さるる御身よりは殺す我身が悲しい(と涙は刃に傳へしか)なう生置いては請出して女夫になるが情ない。私には大事の男がある。其男と緣切れる戀路の仇となる故に今刺殺す。懷中の小判は貧な男に遣りたい、殺生の罪、盜の罪、男の爲につくる心少しは恨を晴れてたも。

と辯解するに至ては何ぞ其の心のやさしきや。そもや渠女は人を殺して後は如何せんと思へりしぞ。絃歌の地人を殺して身の全きを得べしと思へりしか、將た

を覺りたる此の刹那にありて、渠女の心臟は如何に皷動し、渠女の血液は如何に逆流し、渠女の精神は如何に錯亂せしや、いかんぞ『はつと行當』らざるを得んや。予輩は思ふ、此の際渠女が眞の『我』は殆ど此計畫を放棄せんとせしに非ざるか。只名譽の一念、渠女を驅りて此の小献身的義膽を顯はさしめしに非ざるか。自己の現境を自覺して『アッアそうじゃ』と悟りたる渠女の心中は、忽ち名譽と愛情の爭鬪を示し、渠女をして『ハテ何とせふ』と歎息せしめたり。『子供の乳母か、飯焚か、隱居なりともしませふ』と言ふに至ては、渠女の心中に於て、流石に名譽の一念の遂に愛情を抑制したるの蹤跡を見るなり。洵に自然の徑行と謂つべし。

乞ふ予輩をして女子の特性の一なる不注意をば近松が如何に寫せしかを觀ぜしめよ。其の一例として

六　『出世瀧德』の吾妻

を取らむ乎、渠女は其の情郎の窮困を見て其のいとしさに堪えず、咄嗟の間に二百金を調達すべきを受合へりき。身はまゝならぬ遊女なり、そも如何にして斯る

となることぞ。

と言はれて『はつと行當り』

アッアそうじや、ハテ何とせふ、子供の乳母か飯焚か、隱居なりともしませふ。

と『わつと叫びて伏沈む』。吁、此の刹那の渠女が心はそも如何なりしとするぞ。然り、渠女は眞に小春をいとしがれり、然れども所詮只義理として之をいとしがりしのみ。女子の名譽を賭して一切のこと小春に打明けしも、小春の情義に感じて眞に之を憐むに至りしも、はた家を傾け產を蕩して小春の死を救はんと務めしも、所詮治兵衛の愛を復したきが爲のみ、若くは少くとも復すべきを信じたるが爲のみ。渠女は一切の事物を釣懸して以て其の夫の愛情に換ゆるに忍びしなり、一言すれば渠女が小春を愛せしは治兵衛を愛せしが爲也。若し爲に治兵衛の愛を失はんとならば渠女寧ろ小春を憎まんのみ。『女子は吾れ人一むきに思ひかへしの無きもの』、小春を救んとする念の切なる渠女は、自己の身も治兵衛のことも全く忘れたり。『請け出して扨其後は』の一語と共に、渠女は一彈指の間に其の現實の境遇を自覺せり、而かも痛切に自覺せり。吁、小春を救ふは卽ち治兵衛の愛を失ふ所以なる

と口説た文に感じ、身にも命にもかへぬ大事の殿なれど、引かれぬ義理合、思切るとの返事、私しや是れ守りに身を離さぬ。是程の賢女がこなさんと契約違へ、おめ〳〵太兵衛に添ふものか。女子は吾れ人一むきに思ひかへしのないもの、死にやるわいの〳〵。アヽ瓢ンなこと、何卒助けて〳〵。

斯く彼女は其の私財を擧げて小春を請け出すの資となさんと決心せり。其の身の晴衣は勿論

是を曲ては勘太郎が手も綿もない袖なしの、羽織もまぜて郡内の、始末して着ぬ淺黄裏、黒羽二重の一張裏、定紋丸に蔦の葉の、のきものかれもせぬ中は、内裸ても外錦、男錺の小袖まで、さらへて物數十五色。

無いものまで有る顔して、夫の名譽と自己の義理を世に立てんとせり。而かも小春を請け出して扨其の後はなど云ふ未來の事に考へ及ばざる也。小春到底治兵衛と絶つべからず、絶つべからざればこそ請出さんとは務むるなれ、而かも渠女は這般の影響に慮り到らざる也。治兵衛より

手附渡して取とめ、請出して其後、圍ふておくか、内に入るにしてから、其方は何

しも其の然諾を豫想せしに非ず。されば殺活浮沈の機實に小春が一片應答の上に懸れりしなり。小春が義理を重じて其の依囑を容れ呉れしを見て、おさんは如何に其の高義に感ぜしぞ。此の大恥辱より己を救ひたる小春は、今や渠女が大恩人となれり。渠女は今や治兵衛と共に小春を愛せる也。先の嫉妬の心は今や純然たる友愛の情となれり。是を以て夫の述懐を聞くに及び、

ア、夫れなればいとしや、小春さんは死にやるぞや

と絶叫するも敢て怪むに足らず。『あの無心中者何の死のう』と嘲けらるゝに及び、渠女爭でか義として、否寧ろ情として、小春を辯護せざるを得んや。是を以て自己の未來を慮るに遑あらず、情義に感激したる一念は渠女をして一切のことを治兵衛に打明さしめたり。

いやそふでない、私が一生言ふまいと思へども、隱し包でむざ〳〵殺す、其の罪も恐ろしく、大事の事を打明る。小春殿に無心中芥子程も無けれ共、二人の手を切らせしは此のさんが機關。こなさんがうか〳〵と死ぬる氣色も見えし故、あまり悲しさ。女は相見互ひごと、切れぬ處も思ひきり、夫の命を賴む〳〵

心の束縛を脱せんと欲するの歎聲にして、所謂『浮世の義理』とは名譽心が愛を抑制するの羈絆に外ならず。仔細に巢林子が女性を觀察すれば、予輩は此の二者が女子の胸中に輾轉反側して相煩悶するの情狀を見るに難からざる也。

五　『天の網島』のおさん

乞ふ予輩をして巢林子が女性の一例として『天の網島』のおさんを取らしめよ。蓋し之れ彼れが女性中最も善く寫されたるものゝ一なり。抑もおさんは、夫治兵衛の放逸度なきを憂へ、小春に乞ふに治兵衛との緣を切り呉れんことを以てせりき。良し其の口を藉る所は如何に立派なるにもせよ、其の形跡の嫉妬に類することは爭ふべくもあらず。家の爲、夫の爲にと言へる口の下に、誰か『我身の爲』を認めざるものぞ。『嫉妬は女子の役』ながら、他人、殊に愛の競爭者とも謂ふべき小春に、明々地に斯かる事を表白するは非常なる恥辱に相違無し。渠女は此の時、其の名譽を擧げて小春の掌中に托したる也。此の忍び易からざる恥辱を忍び、此の爲し難きの事を爲したるは、勢洵に已むを得ざるに出づ、必しも小春を信じたるに非ず、必

嫉妬あり、嫉妬は愛情の反面に過ぎずと雖も、畢竟利己排他の願望に外ならず。故に他の爲に自己が嫉妬の情を知らるゝは、即ち自己の卑陋なる心事を表白するに異ならず。況して其の戀する人の爲に之を知らるゝは、即ち己れが愛せらるべき價値無きことを、自らの口より懺悔すると一般なりと謂ふべし。之れ戀する其の全力を傾けて嫉妬の情を掩蔽し、具に靜平を裝はんと務むる所以なり。

得意の愛は女子の最大幸福なるが如く、失意の愛は其の最大不幸なり。而して得意の愛より生じたる幸福は女子の最大名譽なるが如く、失意の愛より得たる嫉妬は其の最大恥辱なり。是故に女子の名譽心は主として他の前に其の嫉妬の情を抑制し、他をして之を覺らざらしめんとするの盡力に存す。故に名譽心も亦愛情に本くものにして、之を喩へんに一度び反射したる光線の如し、其の進行の方向は全く相反するも、所詮其の本體は愛情なり。蓋し愛は女子の實性にして名譽心は假性なり。愛は放縱恣睢にして節する所を知らず、之を抑制し調和するものは即ち名譽心なり。愛は多く破壞的にして名譽心は多く構成的なり。作用に於ては、愛は常に積極的にして名譽心は消極的なり。所謂る『まいならぬ』とは愛が名譽

せしは言ふまでも無し。『祈りものけたい戀の敵』に表面の情の僞なりしことは素より、『法界悋氣』の腰元共の言を待たず、深窓琴を撫して『夕べ〳〵の涙川』を歌ひて廬に懷を遣りし一少女、花情柳態殆ど春に堪えざらんとす。而かも波れ豈仇と情と怨念の三つの鐵輪に燃ゆる火』に戀の敵咀ひし小島が崎の狂鬼女に非ずや。

名譽心は愛を外にして別に存在するものに非ず。女子は男子よりも一般に名聞を重ず。然れども所謂る名譽心の主とする所は、其の愛の品位と純潔とを保存するの謂に外ならざるが如し。蓋し愛の物たる神祕言ひ難し。予輩自ら其の然る所以の理を知らずと雖も、蓋し戀心の第一義は所詮吾が愛する人をして常に自己の心情の純潔なるを知らしむるに存し、他を排して己を利せんとするが如き陋劣なる人我的意志は、自らは實に之を有するも他をして之を知らしむるは其の最も忌避する所なるが如し。故に其の戀人に對しては不仁者も仁者となり、不義者も義者となり、怯夫も勇夫となり、小人も君子となる。戀する人にとりては其の愛する人に賤めらるゝ程苦しきこと無ければ也。故に日夕奕々として憂懼する所は、其の戀人が自己を輕蔑するの理由を發見するにあり。今夫れ愛情ありて玆に

れば一見相貌相異なるが如しと雖も、其實は同一物の兩面に過ぎざること、猶彼の花絨の表面に薔薇の花と刺とを織り成せるものは、裏面にありては素同一の彩絲なるが如し。其の花を喜て其の刺を憎むものは、眞に薔薇を愛するものに非ず、其の笑を好て其の涙を嫌ふものは眞に人を愛するものに非ず。陰となり陽となるは素之れ偶然の緣のみ、嫉妬と愛とは元來兩岐なし。人は嫉むこと無くして愛することは能はざれば也。

巢林子は已に愛は女子の本性なるを認めたるを以て、同時に嫉妬も亦女子の本性なるを認めたり。彼れは强大なる嫉妬は即ち强大なる愛情を證するものと信ぜるを以て、强大なる愛情を寫すに數ゝ强大なる嫉妬を以てせんことを務めたりき。『琴のつれびき、ついまちの歌かるた』に後庭の人を羨殺せし窈窕たる淑女と、『愛と妬みと浮世のつらさ』に身も世も忘れ、『天も落ちよ、地も裂けよ、山崩れて落かゝり世繼が五體碎けよかし』と咒咀せし狂亂の妬女とは、抑も何等の相違ぞや。而かも同一玲瓏、姬たるに於て失ふ所無し。『取て噛まうと言ましたか』と影なき人に吠えしおまんの、實に取て噛まんまでもお蘭を嫉み、而かもお蘭を嫉みし丈け事助を愛

事情相經緯して愛情の活動を合成す。故に彼れが女性の千緒萬端の行爲の情機は、尋ね來れば一として愛の大根本に歸着せざるは無し。彼れは女性に特有なる不注意を以て強大なる愛が理性の光を暗うしたる結果なりとせり。彼れは女子にして若し勇氣あらば、そは愛の感激に本くべく女子にして女らしからざる罪惡を犯さば、そは愛の眩惑に因るべきを信ぜり。彼れは又

四　嫉妬は愛の反面

なるを最も明晰に表現せり。蓋し財を欲せざる者は他の富を羨まず、他を愛せざるもの、若くは他を愛せんと欲するの情無きものは、他を嫉妬するの謂れ無ければなり。仔細に觀察すれば、嫉妬に二樣の別あり、一は積極的の嫉妬にして一は消極的の嫉妬なり。夫の二女子一男子を爭ひて相嫉妬するの情は前者なり。若し夫れ自家胸裏の愛情尚未だ其對象を見出さず、戚々として隱に忡傷するの時に當り、他の纏綿たる情交を見る時は、自己が孤介の狀に比して羨仰欽慕の餘り、飜て嫉妬の情となる、所謂る法界悋氣なるものは卽ち後者なり。今嫉妬と愛情とを較ぶ

渠の滿足は廣さの中に在らずして、寧ろ深さの中にあり、大さの中に在らずして寧ろ強さの中にあり。故に一朝此の滿足を失ひたる時は其の悲哀自ら深刻にして、其の間往々思慮考察の餘地を殘さず。之れ女心の『一徹にして思返の無き』所以なり。男子にありては卽ち然らず、世界は其家なり、あらゆる人は其の友なり、夙に世路の辛酸を嘗め盡し、人生の流轉に遇て多く驚く所無し。故に心自ら開濶にして物に拘泥せず、失敗の後には回復あり、失意の後には希望あり、彼れは得と失とに對して甚しく關心せざる也。然れども女子は全く之に反す。庭前盈尺の地は渠が世界なり、愛は渠が唯一の希望なり、淵瀕定めぬ人世に在りて平和と笑とを以て此の小樊籠に滿足し敢て外に求むる所無きは所詮此の愛の中に無上の滿足を夢ればなり。故に一旦愛を失はんか、日月輝かず、花鳥笑はず、天地は渠にとりて暗黑なり、渠は只剃刀を執て已まんのみ。之れ實に一般女子が性情ならずや。

予輩は、巢林子が這般の委曲に深く住心せしことを多とするものなり。げにや彼れが女性は無邪氣なり、溫柔なり、あらゆる女性の弱點を有せり、其の理性も常に其の女らしきを失はず。其の關する所は己の身に非ざれば己の家族なり、此等の

に非ず。只其の生ける戯曲的人物によりて其の特性たる所以を説明したるもの、古來幾人かある。予輩は巢林子が單に之を認めたるを稱するものに非ず、唯そを實際に描きたるを甚だ多とするのみ。乞ふ彼れが如何にして此の二大特性によりて女性を活動せしめたるかを見ん。

凡て人間の動作は慾望を滿足せんとするの手段として見るを得べし、而して此の慾望は女子にありては概ね保守的なり、消極的なり、受動的なり。渠は新しき慾望を滿たさんとせんよりは、寧ろ既に得たる幸福を失はざらんことを務むる也。故に渠の心は容易に外物に適應し、其の力の及ぶ範圍内に於て其の小さやかなる滿足を求む。斯の如くにして一度び其の滿足を得るや、渠は全幅の精神を傾けて之を修飾し、醇化し、美化し、茲に自己の外は何人も想像する能はざる一個の樂園を成就す、運命の前には渠は從順なる奴隷なり。此の屈從は渠にとりて苦痛に相違なきも渠は幾も無く此の苦痛の中に幸福と滿足とを認むることを誤らざるなり。然れども愛情の前には渠は專横なる君主なり。愛情の自由獨立の爲には渠は生命を賭して之を爭ふ。渠は一點塵の之を累はすだも容さゞる也。

僞を察せず、利害を窮めず、一氣熱し來れば渠の眼は見る所なく、渠の耳は聽く所なく、渠の心は石の如く木の如し。渠れ果して怯懦、勇無きか、何ぞ其の志の一徹にして奪ふべからざるや。威武屈する能はず、富貴誘ふ能はず、節義凛然、鬚眉尙愧色あるものあり。渠は醇なるが如くにして而かも僞なるが如く、驕なるが如くにして而かも謙なるが如く、思慮深きが如くにして而かも行爲謀無きが如し。渠れ畢竟何物ぞ。誰か此のスフヰンクスを解するのエデプスぞ、巢林子は如何に之を解せしか。

三　愛と名譽

愛の詩人なる近松は亦女性の詩人なり。愛情は女性によりて最も多く發揮せらるゝものなれば也。彼れは愛を以て女子の本性と爲し、之に配するに名譽心を以てせり。渠にありて名譽心は他人に賞揚せられんと欲する積極的願望に非ずして、只他より惡く言はれざらんと欲する消極的意思に過ぎず。巢林子は此の二者を以て女子の二大特性と爲せり。愛を以て女性を說かんとするは素より創見

つが如きあり。誰か女子を僞なりと謂ふ、其の偏に感情的なる、一度び情機の動く所、強て虚静を裝ふ能はず、天眞爛熳として蘊蓄する處少し。渠はなべて感情の鏡なり、社會の生ける戯曲なり、一般人生の悲哀と希望とは最も明晰に最も忠實に渠によりて發揮せらるゝ也。渠は實に天成の戯曲的人物なりと謂ふべし。女子徹りせば此世如何に寂しかりなむや。哀情、美はしきもの、樂しきもの、所詮女子を外にして何處より來る。天にありて星、地にありて花たるもの、人にありて女子に非ずや。何物の痴人ぞ、敢て猥りに『革嚢臭穢』と罵倒し去らんとする。

さるにても思議すべからざるものはスフィンクスと女子の性情とならん。女子果して柔順なるか、何ぞ其の僻めるや、睚眦の怨も渠は執念深く記憶して復讐せざれば已まざる也。渠を以て蛇に比するものは慥に其の半面の眞相を示せる也。渠の性果して皎潔なるか、何ぞ其の陰險恥を知らざるや。動もすれば渠は清きものを惡み、正しきものを疑ひ、幸なるものを猜み、自利を謀るに倦むことを知らざるなり。臭鼠の瓚尾を捉へて毀憂夜を徹し、成心己に構へて人を待つ、訓諭は只其の迷を深うするのみ。渠れ果して智慧あるか、何ぞ其の事理を解せざるや。渠は情

時の名妓フリヂーに求めしが如く、巢林子は其の女性を遊女の間に求めしは、少しも怪むに足らず。彼れは遊女の中に人間を見たればなり。

二　女子は如何なるものぞ

任他、女子はそも如何なるものぞ。昔の法師が言へりし如く『人我の相深く』願に滿たず、慾に慊らず、物の理を知らず、而かも頑迷にして訓ふべからずそもすなほならずして拙きものは女子なるか。『花は咲きながら藤蔓のねじれたる如く』其の性は推なべて僻めるか。吁何ぞ夫れ然らん、此等は只すなほならずして僻める一面を見たるに過ぎざるのみ。渠れ僻めるもの無きに非ず、されど渠の情は時として清きこと珠の如く、鮮かなること露の如く、累心刪韻の之に對して愧づべきもの有る也。渠れ理に冥きもの無きに非ず、超邁頴脫の才、縷心刻骨の勞は渠に於て見ざるところ。されど無心の裏却て天眞の妙理あり、猶斷氷月に對して自ら鏡を爲し、餘雪蕭管に入りて自ら音を發するが如きもの無きに非ず。渠れすなほならざるものあり、されど柔婉溫藉、言尙勝えず、一枝の紅杏曉露に惱て輕風の來り拂ふを待

なされ、心の外の罪つくる。勤め寂しき夕間暮是も遣手の科ぞとて、内の夫婦の鬼顔は苛責の責より猶つらく、此世の地獄の情なや。遣手に種は無きものを、欲より外は知らぬとて、人に疎まれ憎まるゝ、這はそも何の因果ぞや。

傾城に誠無しと世の人の申せども、それは皆僻言譯知らずの詞ぞや。誠も嘘も元一つ、たとへば命抛ち如何に誠を盡しても、郎の方より便無く遠かる其時は、心矢竹に思ひても斯した身なれば儘ならず、おのづから思はぬ花の根引に遇ひ、掛けし誓も嘘となる。又初より僞の勤ばかりに、遇ふ人も、絶えず重ぬる色衣、つひの寄邊となる時は、初の嘘も皆誠、兎角戀路には僞も無く誠も無し、縁のあるのが誠ぞや。

『親里を振捨てゝ扇の影に給仕へ』川中に立ども人中に立たれずと迄賤まれし遊女遣手の心事も斯く析き來れば元之れ本來一般の人情、偶〻境遇によりて其の常體を變じたるのみ。巢林子が人性を見る概ね此類なり。されば遊女の娘に五位の局は彼が眼には敢て不倫に非ず、何んぞ故らに古今集と明月記とを引て之を證するを須ゐんや。昔者プラキシテールがエヌス神の像を作りしや、其の模型を當

のみ。『二本指すを侍、一本指せば町人と計り思ふか、大小は此の胸にある』（生玉心中中巻五兵衛の言）とは、誠に彼れが戯曲的人物の眞相を言ひ盡したるものと謂ふべし。

今若し如何に彼れが幾多の貴むべき德義を以て藝娼妓に歸し、又如何に其薄命悲哀に對して痛切なる同情を表せしかを思へば、予輩は優に彼が心容の博大なるを認むると共に、愈々彼れが眼中只天眞の人性あるのみなるを知る也。讀者試に『遊君三世相』を繙け。一般社會が等しく卑しとする遊女の爲、又遊里の爲に、境遇が本性の上に如何の勢力を及ぼすかを示して、函人必しも仁ならず、矢人必しも不仁ならざるの理に及ぼし、以て人爲的階級の必ずしも品格の高下を累さゞるを說けり。

偶々人界に生を受けながら、士農工商の家にも生まれず、又は琴棋書畫を事とする身にもあらず、あるが中にも河竹の遊女は何の報ぞや。夫さへあるに自ら古の仕業は憂き流より遣水の果さふらふ。此身のつらさは女郎より尙憂きものとは人知らず。實に好色の世の中に誰が身の上も戀衣、いとしい事と知りながら、身の役なれば君達をさがなくせいて竹はせねば、木仏の樣に言ひ

外形の殊は内部の遍を顯はすの縁となるに過ぎず。故に凡て人性の本體を示すに適當なるもの、即ち之れ戯曲の適當なる材料なるのみ。多くの人は巣林子が戯曲的人物の、殊に其の女性の一般に卑賤なるを咎むと雖も、素より戯曲家として彼の價値を上下するに足らざるの俗論のみ。蓋し想ふに、封建時代にありては、社會的階級の區別峻鋭にして、上下永く相懸絶し、親和交際の機會に乏しく、嚴重なる慣習の制裁は、一般世事をして、一定の樊裏に沈着固定せしむるの傾向あり、此際一個の戯曲家として、人情の眞相を發揮し、大多數の國民に向て一般人間の希望と感情とを表白せんと欲するものは、其の材料を比較的尤も自由なる活動の範圍を有せる、中等以下の社會に求めざるべからず。而して尤も多く人情の痛激なる活動を經驗するものは中等以下の社會中、殊に楊臺狹斜の里たるべきは素より論を待たず。果して然らば巣林子が其の材料を主として遊里敎坊の中に求めしは、啻に批難すべきことに非ざるのみならず、却て寧ろ戯曲の目的を達する上に於て最も至當の方便を取りたるものとして稱揚すべきに非ずや。夫の殿上高家の事情を寫すを以て一に高尙優美なりと心得る輩は、未だ共に戯曲を談ずるに足らざるもの

想ふの心は、即ち相の山の辻歌に花一時を唱ふの心なり。櫻井驛の訣別に忠孝の義烈に感じたる涙は、即ち蜆川の夕風にまゝならぬ戀路を忍ぶの涙なり。吉野初瀬の名木も、哇い小路の名も無き花も、共に等しく彼を喜ばせしなり。都大路に青海の簾を捲上げて月前に彈琴する深宮の上萬も、埴生の小屋に立かぬる煙に咽ぶいぶせき賤の枘男も共に、等しく彼れを感ぜしめしなり。彼れは狹隘なる人爲の階級によりて人間に城壘を築き、若くは自が特殊の嗜好に準りて他を規するが如き種類の人には非ざりき。彼れは大沙翁に似て、廓大なる胸襟を披き、自由なる精神を以て萬象に接するの人なりき。是れはた眞に戲曲家の旨を得たるものと謂つべし。

蓋し戲曲の目的とする所は或る特別なる社會、又は人物に非ずして、一般人間にあり。社會の階級と時代の差別とを離れたる一般人間の本性眞相を顯はすにあり。戲曲中の人物は、素より一定の時代、階級、其他百般の制限によりて各々其の假相を帶び來るも、其の發揚せんと務むる所のものは一般人間に平等なる眞相ならざるべからず。故に戲曲の要は殊の中に遍を寓し、差別の間に平等を示すにあり。

何となれば、沙翁が基督教的廣義に謂ふ所の詩人なるが如く、巢林子は佛教的詩人なればなり。漫に沙翁と巢林子を並び稱するもの、少しく這般の差別に住心する所あれ。吾は我が文學史上に假に一の沙翁を有せんよりは、眞に一の巢林子を得んことを望むものなり。

八（題目本文共に缺く）

九　巢林子の女性

Von Sonn' und Welten weiss ich nichts zu sagen,
Ich sehe nur, wie sich die Menschen plagen.
—Goethe

一　巢林子が戲曲に於ける『人』

予輩は巢林子の戲曲を讀む毎に、其の心容の如何に大に、其の同情の如何に博きかを想見せずんばあらず。須彌栴檀の山の月に色卽是空を觀せし三界の敎主を

し道義の沙翁に於けるは猶感情の巢林子に於けるが如し。巢林子が道義を重ぜざるが如く、沙翁は感情を輕ず、夫のローレンスは初めは訓ゆるが如く、中には戒むるが如く、終には誡るが如く、三度びロメオに向て愛情に迷ふべからざるを說けり。其語の中に言へるあり。

These violent delights have violent ends
And in their triumph die, like fire and powder,
Which as they kiss consume. The sweetest honey
Is loathsome in his own deliciousness
And in the taste confounds the appetite:
Therefore love moderately; long love doth so;
Too swift arrives as tardy as too slow.

(*Romeo and Juliet. II. v.*)

之れ巢林子が愛情を本躰とし義理を假相とせしと殆ど對角線的反對をなせり。而して、斯く見る所の相違へるは、蓋し其の宗教の影響を受けたる結果なるべし。

知了せられたるならん。人は往々渠が文躰の渾然として鋒鋩を表さず、叙事亦多く平淡にして偏倚する所無きに迷ひ、直に以て沒理想の詩人となすもの、蓋し先入主となりて自ら沈思精讀せざるの弊に坐す。之を要するに巢林子は、沙翁がさなりと言はるゝ如く、沒自我の詩人にあらずして、儼然たる一個の厭世詩人なり。渠が此の人生觀の因となりしものは、自然感情にして、之が緣となりしものは、社會の制裁、人事の錯誤、及び渠が沒道義的傾向なり。

吾は人生觀の上より巢林子と沙翁とを比較して以て此の論を終らんと欲す。蓋し此二人は其の戯曲的主義に於て已に根本的の差別を有す。即ち彼れは沒道義的にして、此は道義的なり。茲に道義的とは、言ふまでも無き事ながら、學校教師が倫理を講ずるが如きを言ふにはあらで、只其の目的が善惡の標準を明にして、德義の永遠なる本躰を發揮するにあるを謂ふのみ。故に沙翁にありて良心は先天的に無上の權力を有す。若し人此天性に背きて行動することあれば、其の結果内面的には良心の苦痛となり、外面的には宿命の魔力となる。故に苟も必然なる道義の命令を遵奉せざるものは如何なる英雄豪傑も、苦痛と死の應報を免れず。蓋

忠兵衛は依托金を消費せり、宗七は海賊となれり。而かも作業の應報として見るべきもの、凡て甚だ少く、意志と良心との間に於ける內面的煩悶の如きに至ては極めて希なり。善を善として崇敬し、惡を惡として嫌避するか如き、高尙なる道義の觀念に至ては吾は巢林子が戲曲中絕て是なしと斷言するを憚らず。沙翁に曉通せる讀者は、必ずや此點に於て、二者の間に著大なる相違あるを認むるならん。

吾は、おしなべて純ぱら道義の觀念に據りて社會を見る人にありては幸福問題に謂ふ所の人生觀なるもの無きを信ず。彼れは唯其の當に爲すべき事を爲すの外、人生の價値を上下するの權利を有せざれば也。彼れにありては人生の問題即ち道德の問題なり。之と同理にて吾は只感情に憑りて人生を觀ずる人は幸福問題に所謂る人生觀の外に超絕する能はざるを疑はず。彼は唯其の感ずる所を知るのみなれば也。厭世や、樂天や、只此種の人に就てのみ言ひ得べきのみ。此の理を解せる人は巢林子の沒道義的傾向が其の人世觀に幾何の影響を與へしかを想ひ見るべき也。

以上述べ來りたる所によりて、讀者は略ゝ巢林子が人生觀に關する吾が意見を

斯の如く、一方には社會の制裁が積極的に、他方には人事の錯誤が消極的に、共に渠が厭世觀の構成を助くるに當り、他に其の根蒂を鞏固にする上に於て一大勢力を有するものあり。他なし渠が沒道義的傾向之なり。

吾は敢て沒道義と謂はずして沒道義的傾向と言ふ。巢林子が戲曲中、吾は勿論多少の道義的分子の存在を認む。さりながら、夫の大沙翁に於けるが如く最も重要なる戲曲的原理として認められたるに非ず、只自然の感情に隨伴して屢に第二位以下の勢力を有せるが故にしか言ふのみ。げにや道義の觀念が一篇の原理となれる者は巢林子が戲曲に於て絕て見ざる所、只其の役目は自然感情を成功し調和する上に於て存す。之れ吾が先に言へりし如く、渠は人生觀の立點を主として幸福問題の上に置きしを以てなり。請ふ見よ、渠が戲曲の如何に沒道義に傾けるかを。其の社會劇の骨髓なる情死其の物は如何に。其の親を捨て、其の子を捨て、其の兄弟姉妹を捨て、人をも家をも其の戀人に思ひかへて、一念煩惱の奴隷と爲り了るは、よしや自殺の是非を基督敎に問はずとも、已に之れ甚しき沒道義的なるに非ずや。愛情の爲に吾妻は人を殺せり、清十郎も人を殺せり、小かんは母に背けり、

同じ、之れ悲哀中の尤も悲哀なるものには非るか。且夫れ個人と社會との對比は吾人が一身中にも之あり。よしや外界の事物、敢て我を累はさずとするも我に具はれる不完全なる能力は到底吾人が理想的願望を現化するに適せず。吾は巢林子に於て印度思想に固有なる厭世的傾向の髣髴を認む。かゝる思想は巢林子が戯曲を貫きて終始渝らざる所のもの、更に熟々其の人物の按配、事件の終始等により、渠が同情の趨向する所を察すれば、吾は之に依傍して渠が厭世觀を想像せんこと難きに非る也。

吁罪惡過失冤枉零落自殺是等の出來事は殆ど巢林子が社會劇に貫徹せる唯一の材料なり。社會いかでか只斯る悲哀のみに充滿せるものならん。花咲ひ月冴えて、人世の樂地亦尋ね難からず。巢林子は唯其の暗黑なる半面を觀たるものゝみ。渠は何故に喜ふべきもの樂むべきもの笑ふべきものを捨てゝ、故らにかゝる慘劇のみを擇みしか。渠が笑を寫せしは只其の涙をば一層悲しからしめんが爲のみ。若し巢林子を厭世の詩人なりと假定するに非ずば、吾人は渠が戯曲の精神とも言ふべき此の悲哀的傾向を如何に說明すべきか。

の潔白を表せり。權三とおさいは、身に露ほどの犯せる罪も無きに、浮世の義理と夫の名譽の爲に、市の進が刃にかゝりて斃れたり、是等の人々は、よし多少の過失ありしにもせよ道義上より見たらんには、多くは純白無辜の人のみ。唯厘に不注意、淺慮等の瑣細なる錯誤によりて、其の第一歩を誤りたるが爲に、外形にのみ憑據して冷酷なる判斷を下すなる盲目なる社會の慣習制裁の爲に、斯の如き慘劇を見るに至れるのみ。抑も社會の慣習制裁なるものは是非を混同し、醇僞を顚倒し、幾多の罪無き人を苦めても、猶且維持せらるべき者なるか。お種を刺殺せし彦九郎が、其の情を包みかねて『さほど母姉兄嫁を大切に思ふ程ならばなど最前に衣をきせ尼にせんとて命をばなぜに貰ふてはくれざりし』と言へりしもの、眞に人の至情ならば、社會の制裁程、悲むべきものあらじ。お種やお才や、所詮此哀むべき空なる名の犧牲となりしものゝみ。情を枉げ性に背くも、吾人が社會の一分子たるの故を以て、是非なく之に屈從せざるべからずとせば、之れ最早や制裁にも非ず、慣習にもあらずして全社會が一個人に對する壓制として見るべきに非るか。罪の其性に本づくものは自ら慰むる所なきに非ず。斯の如き社會の制裁は人を暗撃するに

不完全なる動物なるを知れり。渠は人間が凡てに於て弱點を有し、知識、德義、其他の上に於ても到底有漏煩惱の奴たるを免れざるを認めたり。故に此世にありて正義は必ずしも勝を占めず、正邪時に相轉じ、是非屢々相反し、孝貞節義の人、往々にして無慘の死に終ることあるを知れり。渠は不完全なる人間が不完全なる社會と相縺れ相縺れて、如何に往々不圓滿なる出來事を生み來たるか、又『偶然』が如何に悲むべき『必至』を生み來るか錯誤過失となり、過失罪惡を產み、罪惡遂に死を齎して純潔無垢の人往々、如何に恥づべき惡名の中に葬られ了るかを注意せり。故に渠は人世の缺陷を寫すは世相の本躰を顯はす所以に於て缺くべからざることを覺識せり。見よ卯月の紅葉の與兵衛は、只傳三郎が一片の奸言に欺かれしが爲めに、身は『公事巧』と誤られ、死に瀕して尙汚名を雪く能はざりき。今宮心中の二郎兵衛は只おきさと夫婦になりたさの一念に、淺慮の推量をなし、成るに垂とせる望を自ら絕ちて、人には盜人の申譯なく、惠比壽の森の露と消え果てぬ。柱暦のおさん、堀川波の鼓のお種は偶然の不運にて其の淸き體に終生雪ぐべからざるの汚點を印し、或は不義者と唱はれて世上に恥をさらし、或は自ら匕首を胸に貫きて其の情操

も恩愛情の道缺けたり何に樂みの娑婆世界』と言ひしは之れ自然の愛情を以て人生の眞諦となし人爲の義理を以て社會の假相となせしものと見るべく又夫の薩摩歌のおまんが手縫に事よせて

　　慾にまた着替なき此生は五尺に足らぬ襟落し狹き浮世は何かせん戀にさはりのせき縫の積る思を肩上で同じ刀にたち違へ一つ枕に伏せ縫して三途の川の脊筋にて結留めましよ縫留ましよ

と言ひしが如き恨嗟搖々の間に人生の悲觀をほのめかしたること擬ふべくもあらず。其の男女の愛と親子の情とのけじめこそあれ何れか一面には人生最大の幸福を愛情の滿足に歸し一面には社會の制裁の下に人生の悲相を現ぜしものに非るべき。之れ巢林子が社會劇に通じて何人も認むるを誤らざる所。吾は只二三の例を引て讀者が類想に便ならしめしのみ。

　よしや社會は吾人の自由を束縛せず吾人が本能的感情に對してしかく反抗することと無しとするも吾人は又此の不完全なる人間に免るべからざる過失の存在は如何に悲慘なる結果を人世に持來るべきやを想見すべき也。巢林子は人間の

知らぬ人の名になつかしみて、犯せし罪の顯はるゝにも驚かず、母は眼のあたり白刃我が子の前に閃くも之を救ひ得ず、子は母を、母は子を互に顔を見交せども、母様とも我子とも言はれず

是ぞ本望〳〵惡名取つて人には陷まれ助けられても生きて居ぬ。一人死より人きれば往がけの駄賃じや。父様も母様も誰も一度は死るもの來世でゆるりと逢はふ迄

語々無限の意料を呑吐して感慨究りなし。誰か同情の涕に咽ばざるものぞ。

吁々戀せる男女にとりては人は戀せんが爲に生れ來りたるもの、而かも浮世の波に寄邊を失ひてバーンスが天の惠を人間界に認むと言ひけん所、却て双々相擁して『是程思ひあふた中なぜに女夫になられぬ』と嘆ずる人の心を探れば『去り難き希望の中に惡魔の顔を眺むる』眞個厭世の悲觀に非るべきか。人の作れる世の慣習に、天の結びし親子の情を得遂げず『父様も母様も一度は死ぬるもの來世でゆるりと遇はふ』とは不自由不圓滿に充ち滿てる現世をはかなみて、其の小やかなる望を來らむ世にかけしものに非るか。若し夫れ安東入道が『世間武士の義理立てど

ひ子の親子夫婦の寄合は、又今生では叶はぬ』と嘆く、人生不如意の極と謂べし。芙蓉の眼尻衰へて、半ば死の黒影に掩はれたる嵐の前の夕霧が人目の關に隔てられ、一曲の俚謡に三世の情を忍ぶに至ては、誰か慟して哭せざらんや。

丹波與作が總領は、近江の石部に生まれもつかぬ馬子奉公、貧苦と無常の中に人となりて、いや慕はるゝ親の慈悲。由留木殿の御内、お乳の人の名をきゝて『そんなら己が母樣』と抱きつく。天涯ゆくりなき母子の再會は、人生至大の樂事ならずや、されど憐れなる重の井は、お乳の人の身分に顧みて『飛び付いて懐に抱き入れたく氣はせけども』快く此の憐れたる孤兒の望を滿足せしむること能はざりき。心にもなき情なき言葉に、却て血をはくばかりの母の思を知らず、頑是なき我が子が『胴慾な母樣覺えて居さつしやれ』と泣き號ぶを聞きし時の渠女が心はそも如何なりしや。『現在我が子に馬追させ、母は衣裳を着飾つて、お乳の人よお局よと、玉の輿に乘たとて是が何になる事ぞ』。『養ひ君お家の御恩を思はずば扨一人子を手放して何の遣ふぞ奉公の身の淺ましや』とは實に渠女が中心の熱血を咯きたるの言に非ずや。あはれや三吉は幼心（オサナゴヽロ）にさすが浮世を恨みわびながらも、其の親の慕はしく、

の罪人となり、身は三界を家として、夢の世を狂亂の中に觀ず。只一人の父はありながら、其の子を救ひ得ず、家あれども其の人を庇ひ得ず、知己なく、友朋なく、さながら天地の間に孤立して、『是程思ひあふた中なぜに女夫になられぬ』としんき泣きに泣焦れたる憐れさよ。鐘に待宵鳥には別れ、狂ふ野末の涯に見るものは、我が戀人の無殘の刑戮、男は流石に諦めて脫るゝも業、殺さるゝも業、生年廿五才の迷を一念『夢の戲れ』と觀じ去り『思へば〳〵此世の絆はふつゝと思ひ切たぞや』と言ふに至ては其の光景何ぞ一に悲慘なるや。

夫の夕霧伊左衛門は如何に。戀にはやつす浮身をば、包む紙子の袷一枚に、七百貫目の借錢負て、ぎくともせず、人には知れぬ戀の夢路を春の夜寒にたどる藤屋の伊左衛門、人にも一門にも見離されて、心の宿は只夕霧が愛情の胸。夫れさへも今はまゝならず、恩愛の羈にひかされて、空にも慣れぬ下賤の姿に身をやつし、母子三人の際會を眼前に見ながら、妻とも得言はず子とも言はれず、却て『駕舁』と卑められ、『穢き姿て侍に抱き付く慮外者め』と罵られ、現在の我が子に戲れに父と呼ばれ母と呼ばるゝを『お慈悲』として『額を疊に摺付け手を合せて』嬉し涙に咽び『兩人が中の思

る能はざるの社會は寧ろ厭ふべきの社會に非ずや。吾人はかゝる高價を拂て涙と血とを買はざるべからずとせば、吾人の生命は寧ろ哀むべからずや。斯の如き境地に陷りて高絶無情の天を仰て感愴すれば、人生唯一の死あらんのみ。巢林子があらゆる社會的戲曲は要するに個人と社會との此の衝突を寫したるものに過ぎず。內には自然感情の殆ど必至なる『宿命』を帶び、外には此の冷淡無慈悲なる社會的制裁の束縛に當らざるべからず、一心兩界の間に煩悶して、終に慘憺なる最後を遂ぐるもの、寧ろ自然の結果に非ずや。內外兩界の利害、水火相容れず、調和讓步の望全く盡きたる時にありては、內外の關係は之れ即ち理想と現實との差別なり。胸裏盈寸の裡よしや無際の淨樂を惱悅するとも、有盡の塵軀人間に起伏する間は、彼と此とは、曠劫の時と無限の空を隔つ。現化せらるべき靈は獨り理想の界に游び、醉化（イデアリゼーション）せらるべきの身は常に現實の裏に展轉するもの、何にぞよく其の終を全ふせんや。試に二三の例を引かんか。

一歌念佛のお夏を見よ。互の心は釋けながらも、世の柵にせきとめられて、假の宿を己が家にかこつのみか我が思ふ男は、腹黑き人の奸計に陷りて、心にもなき無殘

と言ひ、はたボルシアが

(*Love's Labour's Lost II. i.*)

The brain may devise laws for the blood; but a hot temper leaps o'er a cold decree;

(*Merchant of Venice I. ii.*)

と言ひけんも蓋し同じ意ならんか、吾は巣林子が厭世の悲觀已に此間に胚胎せるを認む。

自然感情を因として巣林子が人生觀を構ふるの緣となりしもの凡そ三あり。一に曰く社會の制裁、二に曰く人事の錯誤、三に曰く渠が沒道義的傾向。

人集りて社會を成し、社會に制裁ありて人を保つ、要する所は人生の利福を增進するにあり。誰かは自ら零落を招かんとて社會の人となるべき、さはれ其の暗黑なる一面よりして之を觀れば、人は多く世と背き、世は多く人と違ふ。個人と社會、吁之れ如何に悲むべき對比ぞや。人生の希望と感情とを歌ふなる詩人が題目となりて幾十世の悲哀をたゝみしもの多くは此對比に非ずや。人は素より世を離て幸なる能はず。されど人生最大の幸福を犧牲とするに非れば、其の中に生活す

を以て、之れはた人生の最大なる目的なりと考へしが如し。渠が愛の詩人たりしもの實に、之が爲なりき。されば渠は愛情の遂に已むべからず、なにがしの詩人が言ひけん如く、あらゆる思想、あらゆる感情、あらゆる悦樂、凡て有漏の人身を動かすものは、所詮愛の僕（しもべ）にして、其の靈火を養ふの柴薪に過ぎずと爲しゝ也。渠は愛の發揮者たると同時に辯護者なりき。想ひ見よ、渠は愛の自由獨立の爲に如何に盡瘁する所ありしか。偏狹なる社會の制裁、慣習が愛の進行を妨碍するものに對して、渠は如何に反抗の氣炎を吐きたりしか。反抗の極、殆ど矯激に奔るの嫌なきに非ずと雖も、愛の詩人たる巢林子に於て勢洵に已むべからざるものありしならむ。愛は既に吾人と共に生る。自我に對しては、三世離るべからざるの友、人生に對して幸福の最大なる源、吾人の宿命は天に在らず、地に在らず、只此の自己の胸奥に潛在せる一點愛情の靈火に存す。故に吾人は外界に對して、此の內面的必至の運命を現化（レアリゼーション）し了るに非ざれば已まざる也。夫のビロンが

Every man with his affects is born;
Not by might mastered, but by special grace.

其の愛せし亡き人の記憶を失はんと望むものぞ。よしや幽情化して石立ち怨風結んで塚青き、千年萬年の怨まこと有盡身軀の命なりとするも、半生の刧を血に染めし此の願、此の望將た此の涙、誰か好で脫離せんとするものぞ。之れ豈驚くべき現象に非ずや。若し夫れ生は人の好む所、死は人の惡む所、今宗敎的命令あるに非ず、道義的制裁あるに非ず、而かも莞爾として生を捨て死に就くこと暗室を去りて光明に就くが如きものあるに至ては、寧ろ怪むべからずや。愛そも何物なればかゝる靈妙なる力を有する。死を以てに非れば其の失意を慰むること能はざるの愛が、若し其の望みを得たるの時に當りて吾人に予ふべき幸福は、如何に大なるべきか。かゝる愛情が吾人と共に生れ來ることは吾人の生活と何等の關係ありて存するか。吾人は生れて幸福ならざるべからず、而して遂に戀せざるを得ず、愛情と人生と此間何等の因緣あるか。此の如きは蓋し巢林子が胸中にありて夙に疑問と沈思との題目となりし也。而して渠は如何に之を解せしか。

巢林子が人世を觀るや、常に自家の立點を幸福問題の上に置けり。渠は吾人が生れながらにして享有せる自然の感情の滿足は、吾人が幸福の最大なる源泉なる

の目的又唯一の光明なり。世界は只此の目的を助け此の光明に照されたる限に於て彼れに對して其の存在を有するのみ。一旦唯心の夢覺めて、社會と自我との衝突を感じたるの曉にありては、吾れ社會を仆す能はざれば、只一の死あるのみ。是を以て百難潮の如く天を滔して掩ひ來るとも少しも驚かず、諷咏歎嗟從容として死に就く。此の如きは巣林子が戯曲に於ける幸福なる愛の最後なり。

さるにても、斯る愛の終始をば巣林子は如何に見けん。其の犀利なる眼、其の同情に富める心には、かゝる愛の靈活なる作用は如何なる感觸をか與へけん。愛や迷と見れば悟にて、悟と見れば迷なり。虫の音、鳥の聲さへも、唯ならぬ思を惹ける今にありて、戀せぬ昔を思はゞ、誰かかゝる荒凉なる生活に堪え得し過去幾年の朝夕に驚かざるものぞ、安からぬ心に寢る目もあはぬ思して一念尚ほ斷ち難き絆はそも何者の惡魔ぞ。樂と見れば苦、苦と見れば樂、愛は畢竟苦しきが爲に樂しき也、樂しきが爲に苦しき也。愛に泣く人は喜と笑となきを悲めども、喜ぶべきものを捨て、笑ふべきものを去りて故らに悲み嘆くなり、而かも彼れは此の悲哀をば如何なる幸福にも代ふべしとは思はざる也。誰か其の唯涙の種なるの故を以て好て

て單純なり極めて自然的なり。想ふに渠が人物の偏に感情的なる、怒れば便ち面上血を漲らし、感ずれば則ち悵然として涕を揮ひ、喜では高く笑ひ、興じては起て舞ふ。其の理性の薄弱なる、單に情緒の趨向を制する能はざるのみならず、往々却て其の奴隷となり、徒に既往を回護し、失敗を慰藉するの料に供せらる。斯る人物にありて自然に待設けらるゝ如く渠が描ける愛情は殆ど本能的なり。あらゆる情緒の主宰として、其の本能的命令を逞ふする時にありては、其の勢力往々測る可らざるものあり。愛の靈火一度び發するや、過去も無く、未來も無く、利害もなく、是非もなし、若し捨つべくんば富をも捨てん、名をも捨てん、生命だも喜て之を拋たん、理を以て論ずべからず、威を以て恐らすべからず、尊卑なく、賢愚なく、天地の間唯相愛し相慕ふの情あるのみ。斯の如きは忠兵衛の梅川に於ける、お夏の清十郎に於ける、德兵衛のお初に於ける情致にして、はた之れフロリツェルが、王孫の富と尊とを以て、甘じてエルヂダが愛の犧牲となり、イモルガンがボストヒューマスと共に寧ろ牧人の子女にてあらんことを望みたるの心なり。此の境地にありて、愛は自己の外はあらゆる物を抽象す。其の前には法律なく社會なく、己れ其の唯一の智識唯一

は石部の宿に因縁なき人の名に憧れて、心にもなき罪業を甘ぜし人、はた胸を貫く刃の切先に、無言の辯解を藏せし人、各〻相を變じ體を殊にすれども其の動機の源を尋ぬれば何れか愛情の中に在らざる。渠が戯曲は殆ど愛によりて活動し、愛によりて終始し愛によりて存在す。吾は巢林子を以て愛の詩人なりと言ふとも決して不當の評に非ずと思ふ。渠が戯曲家としての名譽の大半は、たしかに此の愛情の裡にあり。渠は曾に此の愛情の本末終始の徑行に依りて、巧に戯曲を經緯したるのみならず、亦之に依りて個人と社會との關係を觀じ、現實理想兩界の衝突を說明し、延いて人生に對して其の偉大なる悲觀を構へたりき。誰か知らむ渠が厭世觀は其の佛敎的詩人たりしが爲に非ずして愛の詩人たりしが爲なるを。

さらば渠が描きたる愛情は如何なるものなりしか。勿論基督敎に於けるが如き、一種の高尙なる宗敎的意義を有せるものに非ず。又曲亭氏に於けるが如く、醇化の極、縹渺として鏡花水月に對するが如き、超人間的の理想は渠に於て絶て見ざる所。さればとて西鶴一輩の如く、卑猥露骨なるにあらねば、ホーソーン、サッカレー等に見る如き、深刻なる躰相を備へしにあらず。渠の愛情は其の人物の如く極め

る所のもの、如何に往々讀者自身の理想なるかを知る。吾は又戯曲中の人物が口外せし一語一句を捉へ來りて直に作者の思想と見做すことの、如何に危險に、又如何に笑ふべき批評なるかを記憶す。今若し沙翁を評するに當り、ハムレットの獨語に遇ては彼れを厭世家となし、イアゴが自由意志を疑ひしを見ては直に彼を宿命論者となし、ヘンリー五世がフォールスタフに向て、『吾は基督を知らず』と云ひしが故に彼を異教者となす者あらば、誰か其の杜撰を笑はざるべき。吾は是等の事情に鑑み、務めて心を虚ふし、其の戯曲大體の上より、人物性格の上より、事件行動の上より、具に作者の同情が那邊に傾けるかを察し、茲に巢林子が明に一個の厭世詩人なりしことを知る。讀者吾が之より説く所によりて、吾説の『佛教詩人なるが故に厭世詩人なり』と言ふが如き、薄弱なる論據に立つものに非ざるを知れ抑〻巢林子が戯曲にありて、吾人の性情中、愛情ほどよく描寫されたるものはあらず。其の史劇の大半、社會劇の殆ど全部は所謂愛情の小さき歴史に非るはなし。或は蜆川の春の夕に身を散る花に類へし人、或は相の山に無常を傷みて三世の情を傷みし人、或は伏見の橋に浮世の哀をあびて甘じて仇ならぬ刃に倒れし人さて

の意料を容れて而かも綽々として餘裕あるを、猶夫の渾然無私の自然の如かりしか。彼れは果して純客觀の詩人なりしか。吾は未だ沙翁が果して沒理想の詩人なりしや否やを究めずと雖も、比較上純客觀に近きが故に、ゲーテがハイネよりも多く沙翁に似たりと言ふの意味に於て、巢林子が我邦に於て最も沙翁に似たる詩人なりと言はゞ、吾は此の意義無き比照を笑ふの外敢て異議を挾まざるべし。されど渠は沙翁と共に純客觀沒理想の詩人なりと言ふに至りては、吾は之を謬見となすに躊躇せざるべし。何となれば、渠は決して純客觀の詩人に非ず、又沒理想の戲曲家に非ずして確然たる一定の人生觀を有すればなり。而して此の人生觀は實に厭世の悲觀なればなり。

吾は凡て其の著作に依りて作者の人生觀を定むるの甚だ困難なる所以を熟知す。バイロン、ハイネ等の如き狹量の詩人にありては、讀過一遍、徑に其の理想の彷彿を窺ひ得べけれども、巢林子の如き戲曲家にありては、尤も愼重なる考察を要すべきは無論のことなりとす。吾は作者の理想の朧ろげなる邊には、讀者の主觀が之に代りて、如何に其光景を潤色すべきかを知り、而して其の以て作者の理想とす

多様なることの相似たりと言ふか。蓋し然らざるべし。巣林子の人物は概ね單純なり、感情的なり。そが中にロメオは之あり、ジュリエットも之あり、されどハムレットの如き、イアゴの如き、はたプロスペロの如き種類の人物は、其の片影だも認め難きなり。又吾は沙翁に見る如き嚴しく謂ふ所の個人的性格なるものを巣林子が戯曲中に發見する能はざる也。然らば則ち其の戯曲の種類の多きことの相似たりと言ふか。蓋し亦然らざるべし。巣林子が作は其の人物の單純なるが如く單純なり、殆ど同一の結構に據り、殆ど同一の精神に本き、而して殆ど同一の結果に終る所、沙翁劇の千殊萬様なるに比すべくもあらざればなり。然らば即ち、作者が一定の人世觀として認むべきもの、其の作中に顯はれざる所謂る沒理想なるの點に於て兩者相似たりと言ふか、吁蓋し然らむ哉。吾は之を以て全く理由なき比較とは思はざれども、其の小同を見て其の大異を見ず、粗笨なる觀察により。漠然たる臆斷を下し、概括夸張を以て自ら喜ぶの徒は吾が與みする所に非ず。巣林子はバイロンの如きキーツの如き、はた西鶴、三馬一輩の如き、しかく狹隘なる主觀的作家には非りしまでも、果して多少の個人的印象を其の戯曲中に止めざりしか。千萬

以上述べたる所は、近松が戯曲的人物の梗概に就て、抽象的観察を試みたるのみ、其の詳細なる實例に關して題を改めて別に論ずる所あるべし。

七 近松巢林子が人生觀

世に遺られ、時に遇はず、茫々二百年の長夜の夢を住吉の松風に澄ましたる元祿の大詩人が、人に知られんとするの日は漸く來ぬ。是に於て題を探て書を讀み流を追て水に浮ぶの輩の、評論の筆を染めしもの少からざる中に、正鵠を誤らずと覺ゆるもの、いと稀たり。吾は敢て獨り此の翁全幅の面目を知悉せりとは謂はじ、唯誤を知りて默するは、我文學に忠なるものに非れば、いでや將來批評家の問題となるべき巢林子が人生觀に就て少しく語る所あらむ。

巢林子を我邦の沙翁なりとは誰がいみじくも言ひ初めけん。又誰がいみじくも言ひ囃しけん。そも此の二人は何れ如何なる點に於て相似たりと言ふか。之を言へる人は數あれども、之を說けるものは未だ見ず。殆ど自明の事にてもある如くに輕々看過せらるゝは、吾が寧ろ怪訝に堪えざる所なり。そも戯曲的性格の

毫毛の羈束を離れて恣に其の爲さんとする所をなさしめば、吾人は其の男なると女なると、老なると壯なるとを問はず、擧げて赤裸々なる小兒となり了らん。吾人が本來の希望は實に是にあるなり。然らば即ち尤も幼稚なる感情を描くは、尤も適切に人間の原性を寫すものに非ずや。『我は賢なるが故におさんに泣かす』と言ふものあらば、是れ人間以上にあらざれば人間以下の動物なり。且や感情は其れ自らの世界を有す、道理の與る所にあらず、德義の關する所にあらず、一切外物を超絕して其れ自らの道理と德義とを有す。是れ苟も情を解するものゝ分解を須すして心通默會する所、何物の痴漢ぞロジック獨り一切事物を判斷するに足ると思惟し、以て猥りに人物の高下を品尚せんとするや。畢竟近松の人物は其の外貌は則ち他人なれども、其の根柢は則ち自己なり。讀んでおさいの薄倖を悲み、小春の情義に泣くものは、所詮自己を悲み、自己に泣くものなり。讀過の際恍惚として自他を辨せず、心揚り情切にして身は宛然詩中の人となり了り、而も卷を閉ぢて後、卑と呼び賤を稱するもの、予輩其何の意たるを知らず、是れ則ち只自己を卑うし自己を賤むるものに非ずして何ぞや。

オ及びジュリエットは前者を代表しハムレット、プロスペルは後者を代表す、幾多の人物は此兩極の間に按排せらる。ハムレットの如き、亡父の靈を見て復仇の念慮一たび肚裏に浮ぶや、斷然オフェリヤの愛を絶ち、「方寸の海に外に見えぬ波を包み」、沈思深念全く思想界の人となる。如此は我が近松に於て絶えて見ざる所、故に其の作天眞爛熳として少しも餖飣剪彩の痕を見ざれども、幽玄深刻なる思想の人は絶えて之なし。近松の人物は凡て是れロメオのみ、ジュリエットのみ。蓋し近松は只沙翁の半面を會得したるものと謂ふべし。

只始終感情に支配せらるゝの故を以て近松の人物を一概に卑賤なりとするは誤れり。然れども、若し之を幼稚なりと謂はゞ、予輩は之を首肯すべし。何となれば予輩は幼稚なる人間にありて、最も純粹なる感情の活動を認むればなり。所詮人は大なる小兒に外ならず、小兒の時期を經過せりと雖も、小兒の本性は終生之を失はず。吾人が一生の動作は要するに小兒の幼稚なる感情の上に起因し、敎育境遇によりて隨時特殊の潤飾を受けたるものゝみ。若し吾人をして少しも社會の慣習制裁を顧みることなく、生存上利害得失に就て絶えて思料する所なく、天下地上

風を裝ふもの果して幾何ぞや。半夜、神澄み氣靜なる時熟々思ひ廻らせば、誰か浮世のまゝならぬを悲まざるものあらんや。人の詩歌を好み、戲曲小說を嗜む所以のものは、所詮此のまゝならぬ現實世界より理想界に入り、其の中の人物に向て同情を表することによりて自己が霎時の救ひを得んことを望みてなり。近松が人物を描くや、主として吾人の感情即ち原性に訴えたり。彼れの人物は全然感情的也。其事物に應待するや、感情は恰も動物的本能の如く咄嗟の間に斷案を下し、其の間推敲熟慮の隙を與へず、心已に決し氣漸く定り意思變じて將に動作とならんとして、利害の形勢漸く意識の內に現はるゝに際し、茲に始て理性の容喙を見る。故に近松にありては、道德は決心を左右するの力なく、只意志が已に感情の爲に決定せられたるの後、其の實行に反して多少の沮碍的勢力となり得るのみ。之を以て感情は最初の決定者にして亦最後の勝利者なり。近松戲曲に於けるあらゆる大なる動作は、歸する所感情の中に發動せざるなしといふも敢て過言に非ざるべし。此點に於ては、近松は大に沙翁と異なり。沙翁にありては予輩全く相反する二種の人物を見る。即ち一は感情的の人物にして、一は思想的の人物なり。ロメ

なり。故に其の結果よりして之を見るときは、原性の中に先て必然力ありて人間の行爲を支配するが如し。然らば則ち何物か此の原的性格を成す、他なし自然感情是れなり。感情の作用は本能的也、直覺的也、理を以て之を拆くべからず、辯を以て之を枉くべからず、其の來る電光の如く、其の去るや石火の如く、徵候の前知すべきなく蹤跡の追訪すべきなし。感奮激揚の際に在りては恍惚として醉へるが如く、而も一種抵抗すべからざる壓抑の氣ありて麋鹿の溪水に向ふが如く、人をして知らず識らず其の指導に從はしむ。人誰か其の性の赴く所を見て之を喜ばざる、之を喜て誰か之を欲せざる、欲して得ざる時は誰か之を悲まざる、得て而して他の爲に奪はる、誰か之を恨まざる。如此はよし宇宙の眞理に徹底して世界人生を達觀するの大哲學者も眼に一丁字なき田夫野人も、孰も同感を表せざるものあらん。然るに世事如此單純ならざるは畢竟各自が內外の狀態に隨ひ、生存幸福の利害に迫られ、理性の力を以て感情の自然なる傾向を定限するが故なり。感情は心性中尤も單純なるもの也、或る意味に於ては尤も高潔なるもの也。想ふに世に社會生存の必要に迫られ、中心淚を飮て燃ゆるが如き感情を窒塞し、外冷然として恬淡の

傳等あらゆる一時若くは偶然なる内外諸勢力の感化影響を被らざる原的性格を謂ふ。是れ貴賤を論ぜず賢愚を問はず、凡そ常識あらんものゝ共に稟有する所なり。個人的性格とは、此の原性が隨時、時代境遇に適應して特殊の形容を裝ふものに外ならず。故に之を喩ふれば、原性は質なり、境遇は形なり。人は時と處とによりて千樣萬態の形樣を有つと雖も、其の内包せる質に至ては古今上下を通じて異なる所なき也。今近松の人物を見るに其の外面こそ各自殊別の形躰を具ふれ、其の内部の本躰に至ては、此の原性に外ならず。故に何人と雖も容易に戯曲中の人物と自己とを合躰するを得べきを以て、亦以て最大多數の同情を得べき也。蓋し西鶴に非ざれば世の助となる能はず、馬琴に非ざれば信乃となる能はず。然れども何人かおさんとなる能はざる、お千代となる能はざる。予輩は近松の戯曲を讀むに當て、おさんを見ず、お千代を見ず、宛然自己の幻影想像の世界中に活動しつゝあるを認むるのみ。畢竟自己の外に我れと異なれるおさんなくお千代なければなり。如此原的性格は、近松が人物の最大なる活動なり。一の意思が一の動作となるまで其間幾多の自由なる權力の爭ありと雖も、原性は常に其の最後の勝利者

時の定めなき假相を寫すに非ずして、此根本的普通なる人性の眞相を描くにあることを信じたるが故に、小理想の中に大理想、小性格の中に大性格を發揮せんことを務めたりき。是れ素より其の心容の廣大にして、物に應じて凝滯する所なきに職由せりと雖も、亦天禀の才器に非ざるよりは安ぞ能く如此を得べき。予輩彼れが戯曲を通讀するの際、見る所聞く所、悉く個人的なるにも拘らず、知らず識らず一般平等の人性を其の間に認識すること、猶明眼なる數學者が普通因數を數多の錯雜せる式中に發見する如きを覺ゆる也。又他方より觀察すれば、個人性は常住不易なる人間普通の本性に對して假なり僞なり。隨時變遷流轉して常體なき幾多の偶然によりて彩飾せられたるものに外ならざれば也。本躰は理想也、假相は現實也、假相によりて本體を發揮したる近松は、文學上能く理想と現實とを調和したるものと謂ふべし(前章參觀)。故に近松の人物性格は現實的なると同時に、理想的なり、理想的なると同時に現實的なり。

斯の如く近松の人物は外面上種々の假相を裝へりと雖も、根本的には人間普通の原性を具へざるはなし。抑も吾人々類が原性とは、少しも時代、社會、教育、生活、遺

時其の人に乏しからず、されど一時に呼吸するものは萬世に生くる能はず、新陳相代謝して遂に遺忘の墳穴に葬られざるもの果して幾人ぞ。古今を通じて萬人の爲に厭かず愛讀せらるべき沙翁、近松の如きもの、誠に絶世稀有の例と謂ふべし。

戯曲の人物の個人的性格を具へざるべからざることは已に述べたるが如し。衆多の個人的小理想を包容するの大理想を有し、衆多の個人的小性格を有せる近松は、此の原理に背反するなきや。彼れは個人的性格を要し、此は非個人的性格を有す一見明白なる矛盾なるが如し、安ぞ知らん、此の「矛盾」こそ一大戯曲家として近松が名を刻するの鐵印ならんとは。即ち此の論理的矛盾は（沙翁に於けるが如く）、近松の手によりて實際的に調和せられたり。特殊と遍通、差別と平等、小理想と大理想、個人的性格と非個人的性格、此等は近松にありては啻に矛盾ならざるのみならず、戯曲に於て缺くべからざる要素なりしなり。彼れの差別を描くは只〻平等を描かんが爲なり、彼れは時代境遇を離れ、一般人類に普通なる原性の存在を信じたるが故に、所謂る各個の性格傾向なるものは此の原性が一時特殊なる内外の勢力によりて定限せられたるものなるを信じたるが故に、而して又戯曲家の務は一

戯曲中の人物は必ずしも完全なる終始を有すべきものにあらず、只戯曲動作の完成に必要なる限に於て戯曲中に其の個人的獨立を保つのみ。世人が多く誤認するが如く、戯曲中のあらゆる人物は其の戯曲との關係の厚薄輕重の如何に關せず、盡く結構中に現出せざるべからずとなすは動作と人物との關係を辨ぜざるの過に坐す。

任他、我が近松は如何に人物性格を描寫せしや、其の戯曲的動作との關係を如何に理會せしや。

ヘブレル曰ひけらく、ギョーテは自己を描き、シルレルは自己の理想を描けり、されど大沙翁は衆多の理想を一身に具有せしと。予輩も亦同じく言はんと欲す。西鶴は自己を描き、馬琴は自己の理想を描き、近松は衆多の理想を一身に具有せりと。この一點に於て大沙翁と我が近松は著しく相似たりといふを得べし。げにや何れの作家にせよ、其の時代の性質により國民の好尚により、將た又自己が特有せる個人的性格によりて、其の著作は一種の形式を被り、多くは偏見私癖の爲に彩色せられざるもの稀也。故に一時代若くは一部の人によりて賞翫せらるゝは、古今隨

なり主客兩觀の詩なり、其の人物の心性に關しては自由の詩なり。現在の詩なるが故に予輩が日常の世事に於けるが如く、現實ならざるべからず、若くは少くとも現實の動作として吾人の覺能に感受せらるゝ丈の實らしさを具へざるべからず。個人的の性格に非ずば何物か斯る活動の中心となるべきや。主客兩觀の詩及び自由の詩としては、外界因果と共に內心が外部の動作に發展するまでの情狀を明にせざるべからず。個人的性格に非ずば、何物かかゝる內外特殊の事物に應待する心性活動の性質を顯はすを得べき。今若し特殊の性格に代ふるに一般人間に普通なる心性を以てせば、啻に以て實際の事物を顯はす能はずして、極端なる理想詩となり、荒唐なる「夢幻劇」となり了るのみならず、吾人は惡人の代りに惡を得、忠臣の代りに忠、義を得、阿房の代りに痴愚を得ん。戲曲の要する所は、現實の人物にあり。幾百の抽象的觀念あるも、以て安ぞ能く一齣劇を成さんや。個人的性格を描くとは、言ふまでもなく寫眞の如く個人の心性を、殘る隈なく寫すの謂にあらず。其の特質の自他を區別するに足るものを捉へて之を明晰に發揮するの謂也。戲曲の目的は素、動作の完成に在りて、其の人物は所詮其の方便に外ならざるを以て

意義との解釋を吾人が道義宗教の觀念に訴へたりき。一言すれば人及び人生の解釋は近松が最大の目的なりき、想ふて此に至れば、我が近松は元祿文學の地平面に斬然一頭地を出したるもの、尋常戲作者の繩墨を以て規度すべきものに非る也。然らば則ち彼れ如何に又如何にして此目的を達し得しか、是れ予輩が解釋せんと要する所なり。

蓋し戲曲は主觀と客觀とを兼ね、其の動作は啻に外形的に終始の經過を示すのみならず、人をして其の動作を活動せしむる內部の勢力をも知悉せしめざるべからず。故に內部の自由なる心性活動と外部の必至なる事件の經過とは、戲曲を組織するの經緯なり。而して此の外部の事件は只人物心性自由なる活動が形體を具へて外部に顯れたるものに過ぎざるを以て、根本的には戲曲の原動力は主として心性の活動にありと謂ふも不可なかるべし。故に近松戲曲の本領を知らんと欲せば、予輩は先づ其の人物性格に就て精細なる觀察を下さんことを要す。

個人的性格とは、一言すれば諸々內外の諸因緣によりて定限せられたる各人心性の傾向を謂ふ。戲曲は何故に個人的の性格を要するか。蓋し戲曲は現在の詩

者との間、一鴻溝を劃し得しものは即ち近松巢林子なりき。勿論彼れと雖も亦時代の子なり、彼は實に元祿文學のあらゆる特徴を具有せりき。然れども予輩が彼を大なりとする所以のものは、此等の特徴の外、別に近松の近松たる所以の本領を有すればなり。即ち彼れは浮世的たると共に超浮世的なり、彼れが流轉究りなき世事を寫せしは、緣て以て常住不易なる人生の眞相を解釋せんがためなりき。故に運命は彼に於ては天道にして、超人事界と人事界の道義的關聯を表示するものに外ならざりき。故に人生は彼れに於ては決して偶然なる浮世的事業の連續に非ずして、嚴格なる宗教的意義を有せりき。彼れにありて現實（アクチュアリテート）を描寫するは眞實（リアリテート）を發揮せんが爲なりき。故に彼れは零碎斷離せる個々の事物を單に集合して得たりとせるものに非ず、其の存在と活動の根本を洞察して生ける全體の結合を就すことを誤らざりき。彼れは徒に寫實によりて吾人が卑劣なる慾情を喜ばしむるが如きものに非ず、文學の目的は單に現實の鏡となるに止まらず、亦之によりて理想の標準を示すにあることを知れり。故に彼れは社會の眞相を根本的に發揮し、運命と希望、現實と理想、人事界と超人事界との關係を明にし、以て人生の價値と

するのみ。之を要するに元祿文學は徹頭徹尾具躰現實の世界を超えず彼の上代を倘恍し、來劫を夢想し、圓滿完美なる理想の中に社會人生の標準を求むるが如き、其の能くする所に非ざりき。

人間を以て宇宙現象の一部となし大自然界に遍在せる萬有本體の裏に個躰的實在を沒了するが如き大觀察を爲すこと能はざりし元祿當時の文學者に在りては、人事界を外にして別に現實界なるものあらざりき。故に彼等は出入共に現實界の裏に在るを以て、其の蹤跡亦人事界を出づる能はざりき、是故に人間は彼等が文學上唯一の對象なりき。運命とは人生の窮達、因果とは人事の應報、自然萬物は只人に關する限りに於て文學上其意味と存在を有するのみ。一言すれば、人間を外にして文學なるものあらざりき。然れども之に賴りし人事界と自然界との關係を說明し、若くは宗教道義の觀念によりて人生の目的眞相を明にせんとするが如きは彼等の事に非ず一般に言ふ時は彼等の思想道念は共に淺膚薄弱の誚を免るゝ能はざりき。西鶴一輩の戲作者は、實に此種の文學の代表者なりしなり。

此時に當り、元祿文學一般の傾向に對して、一轉語を下し以て紛々たる浮世的作

曲の人物性格に就て評論する所あらんとす。

六　近松戯曲に於ける人物性格

凡そ何れの邦を問はず最も浮世的の文學を求むれば、我が元祿時代の文學は當に其の一たるを失はざるべし。げにや、一般に元祿文學者は天を歌はず地を咏ぜず、高絶なる大自然界に對して多く想念する所あらざりき。春花の開落、秋月の盈虛は人生の流轉に思ひ較べて、何人も感愴するを讓ざる所、而も彼等は之に向て多く言ふ所あらざりき。彼等の觀察は現實界の地平線を超えず、事實は只事實、現象は只現象として之を觀るのみ。其の超自然的原因本體等に關しては、少しも思惟する所あらざりき。倫理道義の觀念と雖も、特に確乎たる宗教的の基礎を印せるに非ず、神明佛陀の教義若くは「子曰」を以て人生を規約せんとするが如き、彼等の思ひ至らざる所なりき。其の死を歌ふは、其の生を安ぜんが爲なり、其の生を安んずるは其の天を樂まんが爲なり。他界未來の觀念は極めて幼稚に非ざれば極めて空漠なり。彼等は時に神を說く、然れども其の神らしき所は其の人らしき所に存

的本領の然らしむる所、其の人物の活動事件の經過、皆此の目的に隨て凡て此の小宇宙の中に於てす。詩は其の原料を歷史中に求むること素より少からず、然れども一たび詩人の筆に上りて詩の世界に入りたるの時は、即ち其の歷史との關係より全く離絶し了りたるの時なり。詩中の人物としての楠正成は、歷史上の人物としての楠正成にあらず、只偶〻同一名稱を有せるのみ。而して詩人が詩の目的本領を毀損せざる限りは可成歷史上の名稱及び事實に梗概等を保有せんと務むるは、通讀の際、讀者をして詩的感情と共に歷史的感情を興起せしむる爲の方便にして、詩として別に重要なる關係あるに非ざるなり。彼の詩人の作を歷史に照し、以て杜撰となし孟浪となすものは、畢竟之を歷史として、若くは歷史的詩（狹義に於ける）として之を觀るが爲のみ。一の詩として之を見れば、却て自家の說の杜撰孟浪なるを知らん。正史の事實を變更したるの故を以て近松を難ずるもの、畫工を責むるに測量圖を以てし、詩人に求むるに歷史家の事業を以てするに同じ。是れ所詮歷史と詩との關係を誤解せるの罪に坐す。

予輩は大體の議論を了りたりと信ずるを以て、次章より筆を改めて、愈〻近松戲

何ぞ主從讓歩の關係を有すべきものならんや。歷史の目的は事實にあり、詩の目的は然らず。若し詩にして歷史上の事實に對し少しも變更することなく徹頭徹尾忠實なる奴隷とならば是れ最早詩にあらずして歷史なり、何となれば如此は純然たる歷史と毫も區別する所なければなり。巧慧なる折衷論者或は云はん、詩は歷史的事物を題目とするに當て、一々正史の細目にまで準據することを得ず、只其大體の綱領に於て差ふ所無くんば則ち可なりと。是れ世人普通に唱ふる所、一見甚だ其の當を得たるが如しと雖も、甚だしき誤謬なり。予輩は問んと欲す、如此もの歷史乎、將た歷史的詩乎と。已に事實を誤る、以て正史となすに足らず、已に正史にあらざるものを題目とす、如何ぞ之を歷史的詩と稱するを得んや。故に歷史的詩なる名稱を與ふるは、只其の想像の原因を歷史中に得たるの故にあらば即ち可。然れども其の歷史上の或事實を包むの故にあらば則ち不可。予輩は只此意味に於てのみ歷史的詩を認むるなり。

予輩は疑ふ、歷史的事實にして正史の事實を詩中に容るゝの必要抑も何くにある乎。詩は其れ自身の獨立せる世界を有す。詩の世界は小宇宙なり。是れ其目

瑠璃中正史に關するものは只時代物のみ。先にも言ふが如く、予輩は戯曲として時代物の價値を認めざるを以て、勿論茲に之を辯護することをなさじ。然れども正史を改刪したるの故を以て近松を非難するものあるに至ては、近松の爲、又戯曲の爲、一言其の妄を辯せんと欲す。是れ文學に志すものゝ決して輕々に附すべき問題にあらず。何となれば、歴史と戯曲の關係は、卽ち一般に詩と正史との關係なればなり。

詩は歴史に向て徹頭徹尾忠實なる從順を表すべきものなりや。卽ち歴史上の事蹟は、詩に於て少しも變更すべからざるか。若し然らずとせば、二者各獨立して全く相關係せざるものなりや。將た又多少の關係ありとせば、如何なる程度まで詩は歴史に向て忠實なるべきものなりや。此の問題は古來學者の頗る異論ある所なり。予輩は詩と歴史とは全然相離絶して、其の間毫末の關係なきものなることを主張するものなり。予輩にとりては是れ甚だ明白なる事實なり。何となれば全く目的本領を異にせる二個の事物は、其の手段方便の上に於て主從的若くは讓歩的關係を有すべきものに非れば也。全然目的本領を異にせる詩と歴史と、如

する輩の如き、他を傷くるに足らず、偶〻以て自家の淺見薄識を表はすのみ。

近松が世話淨瑠璃の純然たる想像に出でしものにあらずして、當時實際に起りたる事蹟に憑據せしものなることは先に言ひしが如し。近松は之を取て一の淨瑠璃となすに當り、如何に此の事實を變更せしやは、今日より之を知り難しと雖も、戯曲の目的を達するが爲に最も適當なる補綴取捨をなせしことは疑ふべきにあらず。文化未だ開けず、社會の嗜好幼稚なりし元祿享保の時代にありては、戯曲家は著作上決して今日の如き自由なる範圍を有せしにあらず、社會の好尚は多く人口に膾炙せる如き事實の改刪變更を容さず、戯曲家は戯曲の爲よりは寧ろ事實の爲に著作せざるべからざりしことは今日尚想見するに餘あり。如此時世にありて、明治聖世の予輩をして歎稱措く能はざらしむること如此の戯曲を作らんことは、決して尋常一樣の困難にあらず、想ふて茲に至れば予輩は愈〻我が近松が非凡なる手腕を認むる也。

世に一派の論者あり、稗史傳記に據りて猥りに正史の事實を改刪したるの故を以て、口を極めて近松を批難し、甚しきに至ては歷史の罪人なりとなす。近江の淨

を卑しとすと雖も、是れ決して戯曲家としての彼れの價値を上下するに足らず。蓋し想ふに封建時代にありては社會的階級の區別峻鋭にして上下相懸絶し、親疎長へに離隔して親和交際の道に乏しく、就中武家等にありては嚴重なる德義慣習の爲に制裁せられて、世事一般に沈着固定し一定の樊籬を超えざるの傾きあり（而して此の傾向は社會の高等となるに隨ひ一層甚し）。此際一個の戯曲家として、國民の大多數に向て社會人情の眞相を發揮し、一般人間の希望と感情とを表白せんと欲するものは、勢ひ材料を比較的尤も自由なる活動の範圍を有せる中等以下の社會に求めざるべからず。而して尤も多く人情の痛激なる活動變化を經驗するものは、中等以下の社會中楊臺狹斜の遊里たるべきは勿論自然の數なりとす。果して然らば、我が近松が其の資を主として中等以下の社會殊に遊里敎坊の中に求めしは、決して非難すべきことにあらずして、却て寧ろ戯曲の目的を達する上に於て最も適當なる方便を執りたるものとして稱揚すべきにあらずや。彼の殿上高家の事情を寫すを以て一に高尚優美なりと心得る輩は、共に戯曲を談ずるに足らざるのみ。彼の下等社會の情事を寫せるの故を以て、近松を下卑賤陋なりと譏誣

なり。吉野初瀬の名木も、畦の小途の名もなき花も、共に彼れを喜ばせしなり。都大路に青海の簾を捲上げて、琴を彈じ月に歌ふ深宮の上臈も、埴生の小屋に立かねし煙に咽ぶいぶせき賤の柚男も、共に同じく彼れを感ぜしなり。彼れは狹隘なる人爲階級によりて社會人間の中に壘壁を築き、若くは自己が特殊の嗜好に據りて他を規準するが如き種類の人にあらざりき。彼れは大沙翁に似て廓大なる胸襟を開き、自由なる精神を以て衆に接するの人なりき。是れはた誠に戲曲家の旨を得たるものと謂ふべし。戲曲の目的とする所は、或る特殊なる社會若くは人物にあらずして一般人間にあり、社會の階級時代の差別を離れたる一般人間の本性眞相を顯はすにあり。戲曲中の人物は、素より一定の時代階級其他一般の差別の制限によりて個々特殊の假相を帶び來ると雖も、其の發揚せんと務むる所のものは一般人間の平等なる眞相ならざるべからず。故に戲曲の要は殊の中に遍を見はし、差別の間に平等を顯はすにあり。其の外形の殊は單に內部の遍を顯はすが爲の手段に外ならず。只吾人本性を發揮するに適當なるもの即ち是れ戲曲の適當なる材料なるのみ。多くの人は彼が戲曲的人物、特に其の女性の一般に卑賤なる

は好題目なりしなり。吃の又平、武藏坊辨慶は釋迦如來、月蓋長者と共に其の好資料なるを妨げず。楠正成は平良門と共に主人公たるを失はず。川中島に龍虎相戰ひし天下の壯觀と三筋の里に痴話狂ひせし大津の公子とは共に相輕重する所無し。是れ只時代物に就て云ふのみ、予輩は其の材料の豐富なると題目の種類多きの故を以て、近松を褒揚せんと欲するものにあらず。如此は寧ろ戲曲家の末事にして特に其の價値を增損するの力あるものにあらず。予輩只讀者が好色一代男、永代藏の作者と國姓爺、日本振袖始の作者とは、其の着想識見の間に如何の差別あるかを注意せんことを望むのみ。

時代、世話二種の淨瑠璃の比較的價値は之を論外として、只此の二種の著作が近松巢林子なる同一戲曲家の手に作りたるを思へば、予輩は轉だ驚嘆の情に堪えざる也。予輩巢林子が戲曲を讀む毎に、其の心意の如何に廣濶にして同情の博大なるしかを見ずんばあらず。須彌栴檀の山の月に色即是空を觀ぜし三界の敎主を想望するの心は、即ち相の山の辻歌に花一時の眺めを歌ふの心なり。櫻井驛の訣別に忠孝の烈義に感じたるの涙は、即ち蜆川の夕風にまゝならぬ戀路を嘲つの涙

心容の豁大不凝なる恰も大自然の如きものあるに驚かずんばあらざる也。予輩は其想を研究するに先ち、想の因て發揮せられたる媒介即ち其材料に就て少しく言ふ所あらんと欲す。

近松は想に於て多く同異を擇ぶ所なきが如く、材料の種類に於ても殆ど定限する所あらざりき。彼は戯曲家として殆どあらゆる人間の階級を網羅して自家藥籠中の資料となせり。上は天神帝王より、下は市井敎坊の少女に至るまで、戯曲的人物として其の筆端に上らざるものなし。而して區域に於ても獨り之を內國にのみ限らず、弘く天竺、支那、三韓の間に求めたりき。其の釋迦誕生會、前後の國姓爺、善光寺由來等は其の戯曲としての價値は暫く措き、其の識見規模の壯大なる、當代群作者の夢にだも造る能はざる所にあらずや。其の時代の如きも、其の範圍頗る浩瀚、殆ど我古今の歷史を包容せり。彼は振袖始に於て神代を描けり、天智天皇、嵯峨天皇を描けり、木曾の山中に惡鬼を捕へたる賴光、戶隱山に鬼女を殺したる惟茂は、隅田河原に蕾の花の哀を止めし梅若丸、逢坂山に未來の爲に身を捨てし蟬丸と共に彼の心を惹けり。北條時賴、太田兼光は曾我兄弟と國姓爺と共に彼にとりて

ころあり、人相好む所あり、故に薫と蕕と相接せず、氷と炭と相容れず、是を以て察々の明あるもの洞然の大観なく、潺湲の清あるもの混々の濁あるなし。豫め成心あり、而して後萬物に接す、物、式によらざれば入らず、情、物に適せざれば應ぜず。是故に西鶴は伏姫を描く能はず、馬琴は世の助を寫す能はず。『エキセルシヨル』はウォルヅヲース獨り之を善くし、『マンフレッド』はバイロンにして、始めて之あり。如此作者に向て如何ぞ槍の權三と共に振袖姿を望み、若くは『ハムレット』と共に『ロメオ』及び『ジュリエット』を望むを得んや。萬殊の事物に應じて凝滯する所なき、猶大山江河の細流土壤に對して選ぶ所なきが如きもの、文學史上其の類似を求むれば、予輩は英に於ては沙翁を得、我に於て近松を得るのみ。他は措て言はざるも、此一事、予輩は我巢林子に於て甚だ多とする所なり。馬琴や、西鶴や、一九、三馬や、讀過一遍、得る所は畢竟馬琴のみ、西鶴のみ、一九、三馬のみ。近松に至ては則ち俄に捕捉し易からず。其の聲を聞き、其の跡を探り、其の影を追ひ、窮討して厘に其の髣髴を認むるのみ。予輩の小理想小觀念は動もすれば倏ち大理想大觀念の中に沒了せられ、茫然として自ら其の行く所を知らざるなり。予輩近松を讀む毎に、未だ嘗て其の

れ其の誘因なり。第二齣にありては以上三原因と八右衛門の個人的特質と相結合して、一方に於ては八右衛門が忠兵衛の評判となり、鬢水引の披露となり、一方に於ては梅川の哀情苦心となり、又一方に於ては忠兵衛の慚愧憤怒となり、遂に封印切に至てあらゆる動作の發展の最高點に達す。第三齣に至りては斯種の戲曲の常として、目前に迫れる終結を延引せんが爲に、故に忠右衛門の一條を托出し、遂に新口村捕縛の終結となる。如此觀來れば、獨り近松世話物淨瑠璃の區分を明にするのみならず、亦以て其の動作の一致完成せる所以の一端を知るに足るべし。然るに時代淨瑠璃にありては、已に動作の完成を缺けるが故に、之に對して脚本的區劃を爲し能はざること勿論なり。尙此動作の完成のことに關しては後章傑作の各論に於て評論すべし。

五　近松戲曲の材料に就て

太山は土壤を擇ばず、故に能く高峻、故に能く雷霆を躡らし風雲を呑吐す。江河は細流を拒まず故に能く深大、故に能く鯨鯢を接し、滔天の波を起す。物各親むと

る發展に過ぎざればなり。此事に關する詳細なる辯論は之を戲曲學に讓り、予輩は茲に戲曲的動作の完成と、近松世話淨瑠璃の區分との關係を略述すべし。

前にも言ひし如く、近松世話物の三大段は直に脚本的三齣と見なすも差閊無し。而して一般に言ふ時は第一齣は原因に、第二齣は最高點に、第三齣は終結即ち大破裂に當る。今其例として冥途の飛脚に就て之を說明せん。抑も梅川と忠兵衛との愛は、冥途の飛脚一篇の大動機にして因と果を包裹して、都て此中にあり。鬢水入の五十兩は其主因にして、新口村の捕縛は其の終結なり。而して封印切は其の動作の最高點なり。動作の進行上に於ては、揚屋の久右衛門は最高點に對する促進的媒介（發展）にして、新口村の忠右衛門は終結に對する沮滯的媒介（結果）なり。第一齣に於ては、封印切に對する三原因を敘す。即ち預金の催促、妙閑の言葉及び忠兵衛が門口の振舞によりて「我家ながら敷居高き」までの忠兵衛の放埒なる身持を示せしは、是れ其の素因を敘せるなり。母の手前に退引ならず、燒物の髮水入男と賴みて五十兩の似せ物は是れ其の主因也。堂島の預金三百兩懷にして、急く「霜夜の門の口、出なれし足の癖になり、心の北は身の南」、覺えず米屋町に步み行きしは是

最後の終結即ち大破裂に達するまでには通例結果(コンセクコンス?)の時期を經過するものとす。發達結果の二期は原因終結と最高點との中間に立ち、主として動作の進行を急速にする促進的媒介となり、若くは之を緩緩にするの沮滯的媒介と爲るものにして素と戲曲の要素にあらず。近松世話淨瑠璃にありて、予輩は往々其の缺乏せるを見る。抑も原因は獨立自主の發達によりて最高期に達し、大破裂に終るべきものなりや、即ち最高期及び大破裂の要素は、悉く皆初より原因中に包含せらるべきものなりや、反言すれば戲曲的動作は、其の發達の中途に於て新要素の追加を容すべからざるものなりや。是れ古來學者の議論の別るゝ所にして、予輩の思考する所によれば、戲曲の大目的は所詮動作の一致と完成に在るを以て、必ずしも其原因の唯一なるを要せず、又其の發動期の同時同處なるを須ゐず。而も互に相倚り相扶け協同一致して一大動作の完成を助成するものならんには、相異なれる種々の原因の時と處を異にするものあるも、少しも戲曲の旨義を害せざるなり。但此等幾多の原因の發動期は最高點以前にあらざるべからず。何となれば最高點は喩へば滿引せる弓の如く、之より以後の結果は悉く最高點に潛伏せる將然力(ホテチユル、クラフト)の必然な

りしことは、「槍權三重帷子」が上下二段より成るも、實際明に三齣に別つの必要あるにても知らるべし（第一齣鳥居通馬場の場、市の進留守宅の場、同數寄屋の場、第二齣岩木忠兵衛内の場、第三齣伏見川岸の場）。

予輩は此迄屢〻「動作の完成」なる文字を用ひ來れり。今や世話淨瑠璃の動作と其の區分との關係を明にせんとするに先ち、戲曲に於ける動作の完成とは果して如何なることを意味するやを確め置かざるべからず。

戲曲は啻に動作即ち筋の一致を要するのみならず、此の動作の完成せんことを要す。動作の一致は必ずしも動作の完成を豫想するものにあらず。其の動作は能く一致するも、其の「カタストロフイー」に到らずして、中道にして其の發達を止め、若くは破裂するもの、往々にして之あり。之を草木に譬ふれば、猶結果期に到らずして萎縮枯槁するものあるが如し。如此は決して完全なる戲曲と稱するに足らざる也。完成せる動作は發達上必ず三大段に區別し得べし、一、原因、二、最高點、及び三、終結又は「カタストロフイー」是也。一の原因が最高點にまで發達するには、其の間必ず發展の時期を經過せざるべからず。既に最高點に達したるの動作は、其の

物に留めざるを以て至當なりと信ずる也。斯く言へばとて、予輩は世話物を以て何れの點よりも完全無缺の戯曲なりとするものにあらず。予輩が公平なる批評眼は、決して其の長處の爲に眩惑せられて其の短處を見逃すものにあらず。猶世話物に關しては後章に細説する所あるべきを以て此に贅せず。

近松は齣塲の區分に就ては極めて不注意なりしが如し。時代物にありては概ね五齣より成る。中には傾城反魂香の如く上中下の三部より成るものあり。又甚盤太平記の如く全部少しも篇章を分たざるものあり。又最明寺殿百人上臈の如き、殊に區劃を設けずして、時に「義經ふくみ狀」「最明寺殿道行」「女勢揃」等任意に冒頭を設けたるものあり。此等の區分は、予輩が今日謂ふ所の脚本的區分とは寧ろ全く別物にして、若し今日近松が淨瑠璃を取て之を舞臺に上さんとする人は、前後の關係を斟酌して新に齣塲を分たざるべからず（第九章參考）。故に時代物は概ね五齣より成ると言はんよりは、寧ろ五章より成れりと言はん方適當なるべし。世話物にありては概ね上中下の三段より成る。此の區別は直に移して齣の區別と見るも、多く過る所なきが如し。然れども、近松が元來齣の考にて此の區別を立てざ

」と見るべき第五齣は其の事蹟の奇々怪々なるは措て言はず前齣と何の必然的關係かある。總じて戲曲は一の三段論法の如し其「カタストロフイー」と他の齣との關係は、猶結論の二前提に於けるが如し。結論は前提の必然なる結果なるが如く、戲曲の「カタストロフイー」も亦前數齣の必然の結果ならざるへからず。故に其の中一の偶然の存在を容さゞるなり。之に反して、女楠結齣の如き、始ど皆數多の偶然の附和混同せるものに過ぎず如此もの如何ぞ一個の戲曲として見得べけんや。

これまで述べし所は、只戲曲の生命なる筋の一致に就て言へるのみ。已に戲曲の生命を缺く、其動作の完成人物の性格等に就て一々其缺點を論證するの必要なしと信ずるを以て、餘は盡く讀者の判斷に一任せん。

吉野都女楠は慥に近松時代淨瑠璃の見本として見るを得べし其の中曾我會稽山、國姓爺合戰、日本振袖始、碁盤太平記等の如き多少筋の一致を有するものなきにあらざれども、動作の完成、人物の性格等の點より之を見る時は、予輩が我邦第一の戲曲家たる近松巢林子の著作として當に標示すべきものあるを見ず。故に予輩は我文學及び我近松巢林子の名譽の爲に、重きを世話淨瑠璃に置き、多く意を時代

日の如く中天に上る。彦七少しも恐れず「よし〳〵さはらぬ神に祟なし、此上は只心を懸けし女を連れて歸らん」のみと、勾當の內侍を引立て去らんとせしに、今まで杉にかけ置ける神劍自ら鞘を離れ彦七の頭上に閃き、其の北ぐるを追て虛空を渡り去る。此時恰も北畠親房、新田義貞、楠正行吉野より神器奉迎の爲に來り、偶々足利尊氏も亦靈夢に感じて吉野殿に詣らんとして、亦此處に會す。恰も好し、和田源秀、坊門清忠の首を提げて、其の間に入りて南北兩朝の平和を調停す。此時又寶劍は大森彦七の首を貫きて虛空より舞下り如舊鞘に納り、如例「天下一統、源氏一統、太平國に太平の君が威光は萬々歲治まる御世こそ久しけれ」を以て全篇を結ぶ。

以上記せる所によりて、讀者は吉野女楠の結搆の梗概を知るを得べし。其の支離零丁一篇の戲曲を以て目すべからざること又予輩の評論を待ちて而して知るを要せざるなり。第一齣と第二、三齣とは毫末の關係なく第二、三齣と第四、五齣とも亦全く異なりたる事件なり。前後に出沒せる人物の如き、只名稱の偶合せるものに過ぎずして、少しも戲曲の上に於て必至の連絡あることなし。只幾多の偶然的人物と事件とが漫に離合し、漫に集散するを見るのみ。全篇の「カタストロフィ

暗合せるを知り、力を協せ、謀を以て首尾よく帝を奪ひて河内に奔るまでを叙す。第二場は河内に奔れる長年は圖らず楠正行母子に天神の森に逢ひ、茲に十三歳の正行奇計を運らして追手の賊軍を奔らすを叙す。第五齣は三輪の里神前の場にして、幾多の人物事件同時に輻湊して頗る奇怪を極む。想ふに、是れ由來聯絡なき關係なき數多の事物を採り來て、強て一場の下に結合せんとしたるの弊にして近松時代淨瑠璃の多數の結齣は概ね此類也。今要略を擧げんに後醍醐帝楠正行の守護によりて吉野山に皇居あり、新田義貞馳參じ都作りと聞えしかば、北の方勾當の内侍内裡に殘しありし三種の神器を盜み奉り、神璽、寶劍は内侍自ら之を護り、小山田高家の妻之に從ひ、神鏡の御箱は千種の頭の中將と洞院左衛門督之を荷ひて三輪の里の神前に憩ふ。茲に坊門宰相其の部下十餘人と共に神器を奪ひ還さんと謀り、姿を變じて百姓となり、代りて神器を擔はんとを乞ふ。和田源秀亦變裝して農夫となり之に加はる。清忠と源秀とは、抗爭の末互に其本名を明し、源秀は清忠を追て三輪の山に入る。茲に大森彦七手勢を引具し來り、先づ頭の中將と左衛門督とを縛し、内侍所の櫃を開きしに、御箱の内俄に鳴動して電光天地に輝き、神鏡

に捕へられて義貞の本營に引かれたるを、義貞は其の夫を思ふの志に感じて其の罪を赦し、自己が着捨の鎧太刀を與ふるを敘し、第二場は高家の出陣を敘し、第三場は高家が義貞の高義に感じて、自ら義貞と稱して求女塚に戰死し、恩人の危難を救ふを敘す。第三齣は東寺尊氏本營の場、一條大路梟首の場の二場より成る。第一場にては大森彦七が、小山田高家の首を以て眞に義貞なりと信じて尊氏の實驗に供せしに、尊氏は其の眞僞を疑ひ、豫て義貞の顏を見知れる小山田前司を召して之を判ぜしむ。前司一見、久來勤當せる其の子の高家なるに喫驚せしが、思ふ所ありて、己れ一人にて眞僞を判ずる能はざるを以て、一條大路に梟首せんことを乞ひ、尊氏之を許す。第二場は勾當內侍と高家の妻と共に伴り狂して、其の獄門に處せられたる首を奪はんと謀る。トヾ二人は前司と互に實情を吐露し、愁嘆の末前司は自殺して、さもなき首を苟も義貞なりとして梟首せし身の疎忽を謝するに終る。第四齣は坊門清忠邸外の場、河州天神の森の場の二場より成る。前場は坊門清忠、尊氏と謀りて、後醍醐帝を其邸に幽屏し奉りしをば、名和又太郎長年と小山田高家の妻とは、期せずして各樣を變へて之を奪ひ奉らんと謀り、門前にて互に其計畫の

區別は明確ならず、尚ほ此事に關しては後章舞曲と淨瑠璃との關係を論ずる條下に詳說する所あるべし)は第一禁中軍評定の塲、第二、櫻井驛勾當內侍危難の塲、同訣別の塲、第三湊川の塲の三塲より成る。第一塲に於ては、坊門宰相清忠が大森彥七と內通して正成の策を沮み、正成は衆議一決の勅諚に已むを得ず、死を期して出陣するを敘し、第二塲に於ては、勾當內侍が清忠の爲に長持の中に押込められ、今しも足利軍の大森が許に送られ、湊川の邊を通過するの際、正成が爲に救はれ、和田の源秀をして都に送り歸さしむるを敘し、又次に其の子正行を召して「吉野、初瀨の名木も、老木は次第に枯れ共、こぼるゝ種の色香をつぎ二葉の苗を殘す」こそ忠孝兩全の道なるを說き、强て本國に歸らしむる、所謂る櫻井驛の訣別を敘し、第三塲に於ては正成以下の戰死を寫し、又和田の源秀が勾當の內侍と稱して大森彥七を驚かすを敘す。第二齣は第一、新田本陣麥盜人吟味の塲、第二、小松原小山田高家出陣の塲、第三、求女塚身代の塲の三塲より成る。第一塲は小山田高家の女房某が、由緒ある夫の貧苦に迫りて、一領の鎧、一指の太刀だもなく、見すゝ功名の機を逸するを悲み、兵粮の麥を盜み、便よくば陣所に忍び入りて太刀物具を盜まんとせしに、番卒の爲

綜すれども、概ね個々獨立の目的の爲に個々獨立の活動をなすものにして、木に根幹あるが如く、河に本流あるが如く、全篇の事件を湊合し、人物活動の中心焦點となる筋なるもの其の間に存することなし。勿論、強て附會すれば、其の間皆多少の關係なきに非ざるべし。然れども戲曲の要する所は單純なる關係にあらずして、生ける聯絡を有するにあり。胃は手なくして働く能はず、手は胃なくして働く能はず、人は胃と手となくして生くる能はず。如此身幹の諸機關は個々獨立して存在する能はず、互に必然なる相關的補助に倚て其運用を全うし、所詮生命維持なる大目的の爲に共同的活動をなすが如く、戲曲の各部分も死せる飯盒補綴にあらず、生ける共同的活動をなさゞるべからず。故に酷言する時は、戲曲中の各分子は當に全編の活動に要用なるのみに止らず、必要にして缺くべからざるものならざるべからず。近松が時代淨瑠璃は、此の點に於ては所謂る支離滅裂と評するも敢て不當にあらざるべし。

今試に其一例として吉野都女楠を吟味せんか、此の淨瑠璃は元來近松が時代物に於て普通に見る如く全編五齣より成る。第一齣（勿論後世脚本に見る如く場の

格の活動を示さず、況して種々の人物と因て以て相區別する個人的特質あるなく、又況して各個人物の自稱(Self-consistency)なるものなし。筋の一致と動作の完成とは戯曲の依て以て其の目的を達する所以にして、其の動作のまことらしきと、其の性格の個人的なるとは、戯曲の依て以て活動する所以也。戯曲に此四者を缺くは猶家に柱礎なく車に軸輪なきが如し、安ぞ戯曲と稱するを得んや。

一般に言へば、戯曲とは詩文にて二個以上の人物と事件の媒介合動によりて一個の大計畫若くは大動作の完成せらるゝ首尾の經過を表白するの技術なり。故に戯曲は其の悲劇なると喜劇なると、若くは歴史劇滑稽劇慘憺劇たるとを問はず其の主とする所は一の動作即ち一個の筋を完成することなり。筋は戯曲の生命なり、此の筋を活動し完成するには、其の動作の必ずしも單一なるを要せず、其の主人公の必ずしも一人なるを要せず、只此等の幾多の動作、幾多の主人公は徹頭徹尾唯一なる大動作に對する助成的手段たること、猶身躰中幾十の機關が相倚り相助けて、以て其の唯一の目的即ち生命を維持するが如くなるべきことを忘るべからず。近松の時代淨瑠璃にありては多く此筋なるものなし、幾多の事件一篇中に錯

として我文學の光明榮譽として近松を尊敬し評論するは只彼が此の世話淨瑠璃の作者たるを以てなり。　時代淨瑠璃に至りては予輩の多く留意する所にあらず、よしんば此等三十有餘の時代物が一朝湮滅して其跡を世に止めずとするも、予輩は戯曲家としての近松が爲に、其價値の毫厘を損ずることなきを信ずる也。故に此の書の讀者は予輩が立論の際にありて其の眼中只世話物ありしのみと見るも、本書を理解するの上に於て些の困難を感ずることなかるべし。

如此、予輩の本書に於て關する所は、主として世話物にあるを以て時代淨瑠璃に就て多く言ふ所あるを欲せず。されど讀者をして予輩が理由なくして漫に時代物を輕視せるに非ざることを知らしめんが爲に、予輩は茲に戯曲として時代淨瑠璃の價値に就て、一言するの已むを得ざるを覺ゆ。直截以て予輩の思ふ所を述べしめば、單に時代淨瑠璃は戯曲にあらずと言ひて已まん。是れ多言するを須ひず苟も戯曲の何者たるを理解せる人は予輩の言に首肯せん。詳細の說は煩しければ言はず。近松が時代物は第一、筋の一致を缺ける也、第二、完全せる動作を有せざる也、第三、而も其の動作は荒誕不稽に流れて誠らしき所あらざる也、第四、絶えて性

心中天の網島　女殺油地獄　心中宵庚申

時代物　出世景清　雪女五枚羽子板　國性爺合戰

日本振袖始　十二段　信州川中島合戰

百日曾我　曾我會稽山　千疋犬

本朝三國誌　遊君三世相　碁盤太平記

嫗山姥　天智天皇　甘露雨

枹狩劍本地　傾城反魂香　釋迦誕生會

孕常盤　平家女護島　國姓爺後日合戰

善光寺御堂供養　世繼曾我　源氏烏帽子折

關八州繫馬　傾城酒呑童子　最明寺殿百人上臈

吉野都女楠　蟬丸　双生隅田川

天神記　一心五戒魂

右の中予は殊に重きを世話淨瑠璃に描く。否、予輩は斷じて言はん、近松の近松たるを得る所以の價値は一に此の世話淨瑠璃にあり。予輩が我邦第一の戲曲家

を措く所にあらざる也。

四　近松戯曲の種類及結搆

予輩は此章に於て近松が戯曲の種類結搆に就て簡略なる観察を下すべし。近松の戯曲を大別して時代物及世話物の二種となす、聲曲類纂によれば其の數凡て百數十の多きに上れども、今日世に流布する所は纔に時代物三十餘種、世話物二十餘種に過ぎず。此書を著すに當り、予輩の有せし所は左の四十八種に過ぎず。

時代物　淀鯉出世瀧徳　曾根崎心中
薩摩歌　心中重井筒　五十年忌歌念佛
心中二枚絵草紙　戀八卦柱暦　堀川波の鼓
卯月の紅葉　卯月の潤色　伊達染手綱
心中萬年草　今宮心中　生玉心中
夕霧阿波鳴渡　冥途の飛脚　心中刃は氷の劍日
鎗の權三重帷子　山崎與次兵衛壽門松　博多小女郎浪枕

地自然が厭世樂天等の主義を超越して無心無我なるが如く、戯曲も亦勸善懲惡の域を離脫して空心虛情ならざるべからずとなせしなり。沙翁曰く

The end of playing...is to hold, as 'twere, the mirror up to nature; to show virtue her own feature, scorn her own image, and the very age and body of the time, his form and pressure.——*Hamlet* III. ii.

劇の目的は天然の鏡となるにありとは沙翁の言、善惡人の鑑となるとは近松の語、古今東西其の說の一致豈驚くべきに非ずや。以上は予輩が嘉平次の一語によりて近松の思想を忖るところ、蓋し中らずと雖も遠からじ。然れども彼れ能く此の目的通りに實際其の戯曲を作り得しや否やは、勿論別種の問題に屬し、予輩の目下判斷すべき限にあらず。茲に一事の注意すべきことあり、難波土產(?)の傳ふる所によれば、近松が用ひし硯、半二に傳ふ、其の裏面に刻して曰く、事取凡近、意在勸懲と。此の銘果して近松が意に出でしものとせば、前に生玉心中に據りて予輩の知る所と其岐を兩にするものと謂つべし。遮莫、其の眞意の在る所は其の著作を研究せば自ら明瞭なるべきを以て、其の言ふ所の一致するとせざるとは、予輩の重き

命の綱の十六兩、長作に騙られて嘉平次は躍起となり扨もたくんだ〳〵、今思ひ當つた嵐の芝居の曾根崎の狂言が面白うて再ゝ見ると吐したがよう見覺えた。取もなほさず油屋の九平次、惣じて狂言淨瑠璃は善惡人の鏡になる。己はかたりの手本にするか。

『善惡人の鏡となる』此の一句以て近松が戲曲の目的に對する意見の髣髴を窺ふに足る。鏡は萬象に應待して少しも其眞を失はず、美人も之を喜ぶべからず、惡婦も之を憎むべからず、妍醜素己れに存すれば也。善を善として勸むる所なく、惡を惡として懲す所なく、人生の狀態をありのまゝに描寫するの明鏡となるは近松が戲曲の目的なり、理想なり。故に近松にありては戲曲は天然と同じ。猶無心なる天然が自ら其の計畫意味を告ぐることをなさずして、一に各人の意料する所に委ぬるが如く、戲曲も亦衡平無私、其の間に勸懲の意を含むべきものに非ずとなせしなり。故に人若し其の中に道德の原理を發見せば、是れ樂天家が自然界に於て天道の公正を認むるに同じ、人若し厭世主義を其の間に見ば、是れ薄倖轗軻の人が悲哀不平の心を以て天地を觀じ、以て正義公道の存在を疑ふに同じ。故に近松は天

して見るべきものならんや。眞に社會の眞相を觀察し、人生の希望と悲哀とを表白するの上に於て、大戲曲家の見る所、知らず知らず同一軌道に出でしなり。

以上は表白の方法に屬す。若し夫れ戲曲の目的に就て我近松は如何なる觀念を有せしやは、予輩の讀者と共に切に知らんと欲する所也。是れ其の全著作を通讀し研究せば、自ら明なるべきを以て、其の詳細に渉るものは凡て後章に讓り、茲には只近松が言に就きて大躰の主義を慥め置くべし。

近松は實に行爲の人にして理論の人にあらず。何れの作者にありても、通常自己の事業の主義目的に就て多少の意見を述べざることなし。大沙翁すら『ハムレット』（第一齣第二場）の中に於て戲曲及劇の主義目的を頗る精細に說明せり。我が近松にありては、全戲曲を通じて予輩は其の戲曲に對する意見を見る能はず、只僅に生玉心中（上卷）の中に之に關する嘉平次の一語を見るのみ。是すらも、沙翁の『ハムレット』に於けるが如く故らに言へるものとは思はれざれども、又其の意に反して故らに言へるものにもあらざるが如し。故に予輩は之を以て近松の意見の一部となすも不可なかるべしと信ず。

想像力を活動せしむるの餘地を具へざるべからず。是れ予輩が、戯曲家は須らく現實を摸せずして自家概念中の理想に據るべしとする所以也。

昔沙翁に向て、其の作中の妖魔窟の一段の今少しく眞らしからんことを求むるものあり。沙翁莞爾として之に答へて曰く、善し若し子にして予が表白の方法を好からずとなさば、茲に此上なき改良の方法あり、そは他なし、子自ら其の想像力を以て之を補修することのみと。人あり曾て近松に謂て曰く、

（本文缺く）

此言によりて察する時は、今日吾人が論證する所のものは、二百年前已に近松の胸裏に明白に覺識せられありしなり。寫實に奔るべからず空想に流るべからず。所謂る皮膜の間に戯曲の本領ありとなせしものは吾人が現實と眞實の區別を說き、沙翁が想像の必要を認めし其の言は各異なれども、其の意は詮ずる所相同じ。予輩が是迄て說き來りし所、直に反覆して近松が此の言に對する解釋となすを得べし。吁沙翁や近松や、美學を知れるにあらず、詩學を學べるにあらず、而も其の言ふ所今日の學說と一致する東西恰も符契を合するが如し。是れ豈偶然の暗合と

實界より如何にして之を抽象し、以て一個の概念となすを得るか。予輩は先に觀念中の理想は即ち眞實なるを説けり。如何に天稟の才ある戯曲家と雖も先天的に斯る觀念を有するの理なし、彼れは如何にして之を得たりや。是れ戯曲家が天賦の才能の然らしむる所にして、予輩の研究すべき限にあらず。只予輩が茲に讀者に注意せんと欲するは、戯曲家は現實界假相を去る代りに、吾人に與ふるに想像力の範圍を以てすること是れなり。げにや戯曲家は幾多の人物、種々の事件を用ふ、然れども尚以て實際社會に於けるが如き現實の事物に比するに足らず。此の足らざる部分は即ち是れ吾人が想像力を以て補綴すべき所のものなり。凡て審美的感情は、其の目的物の美術なると詩歌なるとに關せず、自動的なるを要す、即ち單に客觀的に物の刺激を感受するに止らず、此の他動的狀態より飜て自動的作用となり、自己の主觀を外界に射出して主觀的客觀（若くは客觀的主觀）を構成せざるべからず。所謂美なるものは、此の主觀的審美想と客觀的技術とが感覺の媒介によりて一致調和する時に始めて生ずる感情なり。故に審美的感情を生ずるには、技術の中に主觀的作用を容るべき未定限の部分を存せざるべからず、即ち觀者の

とによりて、一面に於ては現實を再造し、他面に於ては眞實を掩蔽す。是れ一見先きに言ひし所と相矛盾するの觀ありと雖も、是れ戲曲の依て戲曲たるを得る所以なりとす。即ち戲曲家は特殊の人物と事件とをば一種巧妙の技術によりて、啻に眞實の發揮を妨害せざるのみならず、却て之を助成する樣に措置安排せざるべからず。若し特殊の人物事件によらずんば、戲曲は平板單調なる一個の抽象的空理とならん。吾人は假相媒介あるが爲に戲曲の中に個躰性を得、其の實相たる眞實あるが爲に、普通性を認む。而して其の二者は個々分離して戲曲の中にあらず、吾人が普通性を認むるには個躰性によりてなり、個躰性を認むるは普通性によりてなり。即ち再言すれば、吾人は特質によりて本性を認め、假相によりて實相を認め、變化によりて常住を認め、偶然によりて不易を認む。此の殊遍相關は戲曲の最大目的の一にして、戲曲家が伎倆を判する重要なる規準なり。

以上述べし如く、戲曲家は殊と共に遍を知らざるべからず、殊は即ち現實なり、遍は即ち眞實なり。覺能を有するの人は何人も現實を知るを得べし、眞實に至ては目之を見るべからず、耳之を聞くべからず。戲曲家は錯雜紛糾せる假相變躰の現

眞實とは或物を一絲一髪も殘す所なく寫實的に否寧ろ寫眞的に描寫するの謂にはあらず。如此現實は到底吾人の爲し能はざるところ、好し爲し得るとするも、決して望ましきことにあらず、何となれば現實は眞實に非れば也。眞實とは物の眞相實躰の謂にして、現實とは只物が吾人の眼に映ずる外觀の謂のみ。吾人は記憶せざるべからず、物の實躰實相は常に現實の中に顯はるゝものにあらず。現實の事物として吾人の覺能に感ずるや、已に各物特殊の事情と境遇とに應待せる幾多の假相と偶然性とを被り來り、決して其の本躰實相即ち其の眞實を發揮せるものにあらず。眞實は時間と空間に制限せられたる現實界に於て見るを望むべからずして、只吾人の觀念中に理想として存在するのみ。故に予輩は理想と眞實とは同躰異名にして、偶然の變躰、一時の假相を蒙れる現實は寧ろ虛僞なるを信ずるもの也。世の無學者徃々眞實と現實とを混じ、理想を以て空想と同一視す、甚だ誤れりと謂ふべし。戲曲家の事業は、事物の變躰假相中より本躰眞相を抽象し濾過し、特殊なる人物と事件との媒介によりて之を讀者の前に明白に表彰するにあり、言ひ換れば眞實を發揮するにあり。戲曲家は此の特殊なる人物と事件を用ふるこ

りて、抒情詩の主觀と自由とに調和し、之を過去と未來の結合點なる現在に現はせるものなり。蓋し是れ戲曲が詩の最も進歩せる所以にして、敘事、抒情の詩人に比して、戲曲家の極めて史上に寥々たるも、亦以て前二者に於けるよりも數層大なる手腕を要するものなるを知るべし。今詩の發達上より見るも、尤も寫實的なる敘事詩は尤も早く、最も理想的なる戲曲は尤も遲く顯はれしは歷史上較著なる事實なりとす。之を詳述する時は、岐路に涉るの恐あるを以て故らに言はず。

以上略述したる所によりて戲曲の性質を了得せる讀者は、亦略ゝ戲曲家の本領を理解せしならん。彼れは敘事詩人なると同時に抒情詩人ならざるべからず、彼れは過去の事と未來の想とを一團として現在の動作に融化するを要す。形より見れば客觀なり、必至なり、想より見れば主觀なり、自由なり。少しく大袈裟に云へば、彼れはカント、シェリングが哲學上に解釋せんと企てたる自由意思兩界合併の大疑問をば、人物が實際の動作によりて調和するの任あるなり。戲曲家たる亦難い哉。

吾人は、戲曲は現實の詩にあらずして眞實の詩なることを知らざるべからず。

動が自主的發展は言ふまでもなく、自由意思を豫想せるを以て、抒情詩に付するに自由詩の名稱を以てするを得べし。如此敘事詩と抒情詩とは兩々相對して對角線的反照をなす。即ち其の關係は客觀の主觀に於ける、過去の未來に於ける、又必然の自由に於ける關係なり。此の客觀と主觀との反對を調和し、過去と未來との差別を結合し、必然と自由との兩極を融化したるものは即ち第三の戲曲なり。

戲曲は事件及び之を構成する內外の活動力を現在に作用しつゝあるものとして讀者の前に呈出す。故に單に事件の物語若くは心性の敘述によらず、主として吾人が日常社會に經驗する對話の方法に賴る、故に戲曲は現在の詩なり。戲曲は徒に零碎支離の事件の經過を示すものに非ず、讀者をして個々の事件を通じて全篇の頭尾を連環する一大綱領即ち筋なるものを知らしめざるべからざるを以て、此の事件の外部的形樣と共に、其の原因を成せる內部的活動を知らしめざるべからず。即ちあらゆる事件は外に向ては歷史的發達を示し、內に於ては自由なる心性的聯絡を有せざるべからず。言換れば、必至自由の二條の因果は一事件の內外に平行して兩〻相依傍せざるべからず。故に戲曲は敘事詩の客觀と必至とを採

意志の存在を容さず。抒情詩は之と異なり。一の出來事に對して、外部に顯れたる結果を觀察せずして、或る目的計畫に對して、主として內部の原因、即ち其活動の中心たる人物の心性を敘述せんことを務む。即ち理性と感情との衝突、希望と現實との不調和等より喜怒哀樂百般の情緒が出入去來起伏上下して、肚裏千百の變化を生ずるの委曲を盡さんことを務む。此點より見る時て、敘事詩の客觀詩に對して主觀詩と名くるを適當とす。人物の心的動作は此種の詩の主眼なるを以て、個人の性格は各自固有なる特質を具有し、外界の刺激と之に對する內部の反動は、此の特質によりて一種殊異の發展を爲す。されど抒情詩が主として描出する所は此の心的活動の樊裡に止まり、其の發展の極、遂に一個の出來事として外部に顯るゝ所以、又已に顯れたる出來事に關係して遂に一の戲曲的計畫を構成する所以に至ては一も記述する所なし。抒情詩は事件の旣然的形跡を敘せずして、將然的準備を述ぶ。故に若し過去の事實を物語る敘事詩を以て過去詩と言ふを得ば、常に其の目的を未來の動作に措く抒情詩を未來の詩と稱するを得べし。又歷史的事實の必然なる因果を認むるの故を以て敘事詩を必然詩と稱するを得ば、心性活

三　戯曲及び之に對する近松の意見

予輩は近松の著作を研究するに先ち、一般戯曲に就て大躰の觀察を下さゞるべからず。

何人も知る如く、通常詩を別けて叙事詩、抒情詩、及び戯曲の三と爲す。叙事詩は過ぎ去りし出來事の物語にして、人物の活動と事件の經過とを單に歴史的に叙述するもの也。此人物が如何にして如此に活動し、如此事件が如何にして如此經過をなせしや、即ち動作の中心なる個人的性格の内部に立入りて、其の歴史的事件となるまでに如何なる發展變形を經たりしやに就ては一も言ふ所なく、内部の心性活動は全く外界の固定せる事物の中に沒了せられ、只事件を事件とし、人物を人物として、純ら客觀的の觀察をなすのみ。此點に於ては叙事詩一に客觀詩と名くるを得べし。故に此の種類の詩にありては、人物は個人的特性を失ひて、溫藉縹渺たる一樣尋常の人間となり、事件は寫實的主角を離れて、漸く理想的瑰異と優雅とを具ふ。萬づ外形によりて歴史的聯絡を制するを以て、其の作用は必然にして自由

なり。勿論予輩は、例へば戯曲の結構に關するものゝ如き、一般に通ずる形式的標準を有せざるにあらず。只其の目的原理等に關しては、豫め自家の任意的尺度を以て之を規定せざるを言ふのみ。抑も標準なるものは、只研究を簡便にするが爲に吾人が隨意に假設する方便に過ぎずして、決して多くの人が信ずるが如く知識の要素にあらず、故に或點に於ては偏頗を意味す。凡て標準は其の何等の主義によるにもせよ、畢竟自己の知識の全部若くは一部なり。標準によりて他を知らんとするは、自己を以て人を測るに同じ、故に元來標準は自己以下のもの即ち己より小なるものに向てのみ用ふべきものにして、決して大詩人、大戯曲家を研究する所以の道に非ざる也。是を以て予輩の近松を知らんとするや、其の心を虚うし、其の氣を平にし、一切自主的任意の度量を抛棄し、只々其の戯曲の中に其れ自身の標準尺度を求めんことを務めたり。吁、近松自身にあらざるよりは、誰か近松を知悉するを得べき。予輩は只此の研究によりて此の大戯曲家の朋友となり伴侶となるを得ば則ち足りなん哉。

明となし、名譽とする所以は、實に彼れが一個の戯曲家として其の本分を盡せしに存す。是に於てか予輩は知る、予輩が批評は歷史的ならずして須く審美的なるべきを。何となれば予輩の目的は歷史によりて近松を知り、若くは近松によりて歷史を知るに非ずして、近松の爲に近松を知るに存すればなり。然りと雖も、歷史上の近松を離れて別に近松なる戯曲家あるに非ず、一個の戯曲家としての近松の外に別に歷史上の近松あるに非ず。予輩は此點に於て慥に兩者の相關を認む。只予輩が目的は、主として近松及び其の戯曲の審美的研究に在るを以て、已むを得ざるに非ざるよりは敢て歷史的批評に入らざるべし。若し夫れ比照的方法に至ては、文學的評論として予輩未だ其の價値を認めざるなり。

予輩が批評は主として審美的方法を用ること前に述べたるが如し。然らば則ち批評の標準は之を何くに求むべきや、是れ次に決すべき必然の問題なりとす。予輩は目下之に對して明確なる答辯を爲すこと能はず、何となれば予輩が批評的標準の主要なるものは審美學にあらず、倫理學にあらず、修辭學にも詩學にもあらず、只近松の戯曲其物の中に存し、戯曲を外にして別に標準なるものを有せざれば

的とを有せる一の文學的著作と見做し、主として思索研鑽の勞によりて其中に含める主義原理を說明し、尙且其の審美的價値を論定せんことを務む。歷史的方法にありては、歷史を知るを以て目的とし、審美的方法にありては著作を知るを以て主義となす。二者各其の適く所を異にするを以て、其の間毫も相關する所なし。比照的方法は前二者と異なり、時代を論せず、國土を問はず、文學哲學上のあらゆる知識の中に相似の點を求めて、之を比較評論するにあり。要する所は一般知識の間に一致合同の點を求むるにあり。故に其の研究の範圍に於て殆ど定限する所なく、或は文化發達の點より、或は歷史變遷の上より、或は審美的標準の上より、或は道義的基點の上より、其他哲學にまれ理學にまれ、其の材料と方便とに於て極めて自由なる範疇を有す。予輩は三者其の何れを執るべきや。抑も近松は如何に濶大なる心容を以て其の材料を集め、如何に巧妙なる腕を以て其の戲曲を作りしか、又吾人の希望と情感とに向て如何に痛切なる同情を表せしか、將た又社會人生の眞相は彼れによりて如何に觀念せられしや一言すれば近松は如何なる人物なりしか、是れ予輩が近松に於て知らんと欲する所也。予輩が彼れを以て、我文學の光

んよりは、寧ろ文學史中の一大資料なり。猶戰爭平和の出來事が歷史の發達經過を示すが爲に史上に記載せらるゝが如く、詩歌戲曲は文學の變遷進步を審にせんが爲に研究せらるゝなり。故に因果の理法は常に外界と著作との關係を示す唯一の手段にして著作其物の爲に格別の研究をなすを容さず。政治史上の一產物としては、主として時勢の變遷と社會の狀態とは、如何なる影響を著作の上に及ぼせしかを明にし、境遇、政治、氣候等凡て外界諸勢力の合同作用によりて著作の由來する所を說明せんことを務め、文學史上の一著作としては過去文學の精神及び經過は之に向て如何の勢力と材料とを與へしか、又後代の文學は之によりて何等の變化を受けしか、又之と如何の聯絡を有するかを窮め、又一個人の活動としては此の如き著作が如何にして作者の性格、敎育及び生活境遇より必然の結果として生ぜしかを明にせんことを務むるなり。審美的方法にありては全く之に異なり、著作の上に作用せる一切外界の勢力に就て一も言ふ所なく、あらゆる外物の關係より抽離したる著作其物を以て研究、唯一の目的となし、全然自家の理解力と判斷力とによりて之を會得せんことを務む。故に詩歌、戲曲を以て各自特殊の意味と目

彼れは曾に戯曲を知るのみならず、其の戯曲の因て來りたる人世の狀態を知るを要す。人世は質なり個人は形なり、而して戯曲は二者結合の果也。批評家は人生の實相を採て戯曲に比較し、熟〻其の著落輕重の跡を考索商量して以て戯曲家が個人的特性を論究せざるべからず、是れ詩人戯曲家の批評家にとりて最も肝要なる所、最も其技倆の著るゝ所、而も尤も困難なる所なり。吁誰か批評を以て容易の業となすや一の事物を知るものは、其の心其の事物を包容するか、若くは少くとも之と同一の水平面に立たざるべからず。近松を評するものは、其の心近松と同じからざるまでも、等しからざるべからず。淺學の後生豈全く近松を知れりと言はんや。予輩安ぞ我文學の名譽なる光明なる大戯曲家に對して崇敬の意を表する所以の道を知らざらんや。

詩歌戯曲を評するに三個の方法あり、歴史的、審美的、及び比照的是なり。今予輩は此三者の中何れを取るべきか、一言茲に辯じ置くも穴勝無用に非ざるべし。

歴史的方法とは、批評家の着眼點を歴史上に措き、一個の歴史的産物として詩歌戯曲を研究するにあり。故に此方法にありては、著作は文學其物の目的物と言は

之を理會するのみに止らず、其の未だ成らざるの時に當り、各個の成分は如何の狀態にありしやをも考へざるべからず。勿論彼れは此の成分を集めて完全なる戲曲を作る能はず、實地に之を現化するの方法は戲曲家獨り之を知れば也。然れども彼れは少くとも此の現化の可能的なるを知らざるべからず。詩人に於て要する所は綜合にありて分析にあらず、批評家にありては全く之に反し、要する所は分析にありて綜合にあらず、此點に於ては二者凸凹的關係を有せりと謂ふべし。批評家は實地に綜合する能はず、而も分析したる成分と共に其の綜合せる結果を知らざるべからざるが爲めに、分析によりて綜合を認め得べき程の强大なる想像力を要す。故に彼れは或る意味に於て詩人たらざるべからず。彼の危評家と詩人と枘鑿相容れずとなすものは、啻に批評の性質を知らざるのみならず、亦詩を知らざるものと謂つべし。凡そ相互共通の素なくんば、二物安ぞ相知り相關するを得んや。

近松を知らんと欲せば、近松の知りし所亦之を知らざるべからず。故に批評家は局外より近松を觀察すると共に、近松自身と同一地盤の上に立たざる可らず。

れたる個々特殊の『想』が其の活動者なる近松の心中に如何なる遍通の主義として存在せしか、而して此の遍通の主義が如何にして此の如き個々特殊の外形を帶びて著作の中に出で來りしかを明にすること也。即ち一言すれば戯曲の中にある近松と戯曲の外にある近松との關係を明にすること也。若し夫れ各個の戯曲が其の內部に於て互に如何なる連絡を有するか、其の目的の一致と手段の差違とは如何なる關係を有せるか、又其の人生觀が如何なる影響を事件性格の上に及ぼせるか、將た人物と外界とは如何なる主義によりて配合せられ、又如何なる目的によりて活動せらるゝや、等種々の問題の解釋に至ては、一に此の根本的大問題の必然なる結果として演繹せらるべき也。

然らば則ち如何にして將た何によりて近松を知らん乎。言ふまでもなく、其の唯一の方法は其の戯曲を研究するにあり。然れども戯曲は只能く活動するのみ少しも議論せず。批評家は是に於て殊の中に通を認め、數多の中に單一を捉へ、矛盾の中に調和を識り、具躰的事物中に抽象的理義を發見せんが爲に、銳敏なる分析力と概括力とを具へざるべからず。即ち彼れは啻に已に完成したる戯曲として

の實躰を顯し、其の性質目的結構に就て摯實なる研究を遂ぐるにあり。其の價値を上下し、其短長を是非し、若くは改良修正の立案を作るが如き、其の固有の目的にあらざる也。蓋し知識は受動的なるが故に遍通必然なるを得るに近しと雖も、優劣是非の議論の如き能動的の作用は、多く各人の殊別なる判斷力と審美的賞翫力とに由るを以て、萬人をして直に首肯せしむる確乎たる一定の鐵案を下し難し。如此は決して批評家が本來の事業となすに足らず。彼れが目的とする所は、普通遍有なる吾人の理性の上に必至不拔の知識を構ふるにある也。世人往々此本義を誤り、個人的判斷を以て批評家の本領となすものあり、是れ本末大小の辨を知らざるものなり。予輩が批評の目的は讀者に向て事實の知識を供給するにあり、其の判斷の如きは明確疑義なきものゝ外は盡く人々各自の意料に一任せむ。

予輩が近松に就て得んと欲する知識とは、即ち一個の戲曲家として近松を理解することも。戲曲家として近松を理解するとは、彼れが傳記を詳にするの謂にあらず、彼れが著作を評釋するの謂にあらず、只彼れが如何にして斯の如き戲曲を作り得しかを明にすることなり。言ひ換れば種々の形式を帶びて幾多の戲曲に顯

が詩人戯曲家の著作を研究するは、詩人戯曲家が人生を研究すると、其の間何の異なる所かある。等しく是れ他物に對して其の知識を求むる者にあらずや。只其の目的の一は人生にして、一は詩歌なるの別あるのみ。人多くは創作者に對して批評家を區別すと雖も、予輩は絶待なる宇宙本躰を外にして、世に創作なる者無きを信ずる也。詩人戯曲家果して創作者なるか。人生の觀念はそも何くより得たる。彼等の著作は、宇宙人生に向て其の感想する所を再造せるものに非ずして何ぞや。哲學者果して創作者なるか。世界なる目的なくして誰か世界觀を構成するを得んや。如何に極端なる唯心學者も、外界其物の存在を疑はず、凡ての知識は此の外界と内界(自己)との關係に外ならざる也。如何ぞ其の間に創作者と批評家との區別を容れんや。詩人も批評家も、其の目的は要するに外物に就て正確なる知識を得るにあり、故に知識は全然受動的のものにして能動的のものに非ず。詩人の目的は宇宙人間に就て其の眞相を發揮し、一般人生の希望と感情とを顯すにあり。個人の特性によりて猥に是非の臆説をなし、若くは社會改良の策を立つるが如きは決して其の本旨にあらざるが如く、批評家の目的も亦ありのまゝに原著

のに非ず。若し批評によりて其の趣味を打破せらるゝの詩ありとせば、是れ決して眞正の詩に非ず。彼の批評を以て詩の趣味を害ふと信ずるものは、未だ共に詩を談ずるに足らざるの輩のみ。批評果して如此虛僞の詩と、如此愚鈍なる讀者を排斥するの力ありとせば、予輩の事業は目的以外に、期せずして一の新領地を發見せりと謂ふべきなり。

二　批評及其方法

夫れ批評するとは短處を抉摘するの謂にあらず、長處を賞揚するの謂にもあらず、只〻眞に理解するの謂なり。價値を判斷し、優劣を比較する等は、寧ろ其の第二義にして、眞正の批評は全く受動的ならざるべからず、一言すれば眞の知識は其の批評也。

哲學者は宇宙の批評家也、詩人、戲曲家は人生の批評家なり、理學者は自然界の批評家なり。彼等は宇宙、人生、自然界を以て其の知識の目的となせばなり。世人批評の字義を以て他人の著作を論評するものゝみに限るは、甚だ其謂れなし。吾人

得る愉快は、決して迷妄（イルーション）にあらず。詩は瑣末なる理論に拘泥せず短刀直に宇宙人世の本躰を衝くもの、其の訴ふる所は吾人の理性判斷力にあらずして、良心と感情とにあり。動もすれば誤謬に陷り易き晦澁綿密なる理論に倦厭せる吾人の心性は、之に依て絕對の理想を仰ぎ、天眞の快樂を享く。故に詩の快樂は吾人の有し得る尤も現實なる快樂也。夫れ已に現實也、現實と眞理とを以て唯一の目的とする批評は、何爲れぞ、詩の趣味を妨ぐるの理あらんや。啻に之を妨げざるのみならず、批評は通常吾人が知る能はざる價値と意味とを敎示することによりて、吾人の詩に對する快樂を增加すべき也。植物學者は草木機關の妙用を會得せるを以て、同一草木に對しても通常人の知らざる快樂を享受し得べく、地質學者は岩石山脈の構造組織を知れるを以て、同一山水に向ても通常人の思ひ到らざる快樂の新境地を有すべし。雄雌蘊の作用を知れるが爲に、花は其の香を損するものに非ず、其の火山石なるや將た始元紀層に屬するやを知れるが爲に、斷崖は其の傾斜を失ふものに非ざる也。加之批評は現實と迷妄を區別することによりて吾人の快樂を純潔にし、吾人の趣好を高尙にす。詩歌は決して吾人を紿きて不正の愉快を賣るも

を詰るも辯ぜず、古來天才の事業は多く此恍惚の間に成る、原理主義に準據して豫め答辯の素を成すが如きものに非ざる也。予輩は近松が其の著作の原理主義に對して全く無意識なりしや否やを知らず、否知るを要せず。只予輩は幾多の巧妙なる大戲曲を成就せる活動力の根本は、悉く皆其の心に具備せることを知るを以て、此の活動力を分析し考察し研究し、眞に一大戲曲家としての近松門左衛門を理解するは、批評家の一大責任なるを確信するなり。吁人間の思想を顯すの方便豈獨り必ず乾燥なる論理のみに依らんや。美術家にありては、繪畫彫刻は其理想を發揮する唯一の手段なり、詩人にありては詩は其感想を吐露するの唯一の器械なり。發表の形式相異りと雖も、其の根本的思想は通じて皆一のみ。詩人が理論によりて其の感想を顯す能はざること、尙哲學者が繪畫に依て其の世界觀を論證する能はざるが如し。予輩詩人を評論するに當り、若し爲し得べくんば、希くは詩によらん、夫れ唯能はず、之を以て已むを得ず理論によるのみ。

世に又批評を以て詩の趣味を損ふとなすものあり。予輩は之に反し、詩の眞の趣味は却て批評によりて增加せらるゝものなるを信ず。抑も吾人が詩によりて

る也。然れども若し其の著作にして、精確なる學理によりて得たる批評的標準に照して驚くべき價値を有するものありとせば如何。全篇に貫徹して人物活動の中心となり樞軸となる主義原理の、其の著作に歷然たるあるも、近松が直接に之を說かざりしの故を以て之を偶然の暗合となすべきか。若しさなくば、人物事件に關せる幾多了解し難き疑問が一個の主義の豫想に依て豁然氷釋せられ得べしとするも、近松が口之を言はざるの故を以て、其の著作中に如此主義なしとすべきか。然らば斯る論者は、天地言はず、日月語らざるの故を以て、引力說若くは地動說の眞理なるを否定せんとするか。吾人が經驗せるあらゆる現象を說明し得るの設想は即ち眞理にあらずや。人或は如此原理主義が著作に顯るも近松が一意識中に存在せざりしの故を以て、近松が名譽にあらずとなすものあり。予輩は以爲く、一個の主義が意識中に顯はるゝや否やは寧ろ偶然の事實にして、決して之を以て其の人の價値を增損すべきものに非ず。且や高妙なる天才は到底意識中に描寫し得べきものに非ず。一去一來恰も電光の如く捕捉端倪すべからず夢現の間に髣髴を容れず之を口にし之を筆にして其の然る所以を知らず、之に問へども答へず、之

り以上は全く反對の方法に出でざるべからず。即ち差別の中に平等を求むるにあらずして、却て平等の中に差別を認め、特殊の中に遍通を發見するにあらずして、却て遍通の中に特殊を發見せざるべからず。而して此の差別特殊が批評家自身の任意の形式を比擬せしものにあらずして、果して近松自身の特性なりや否やは、此の論文の價値を決するに必要なる標準にして、予輩が切に讀者に向て公平なる判斷を仰ぐ所也。是れ近松を評論するの甚だ困難なる所以にして亦同時に甚だ趣味ある所以なり。

世往々一種の論者ありて曰く、詩人戲曲家の著作するに當てや、只時に隨ひ物に觸れ感想せる所を文字に顯したるのみ、批評家の分析し論辯する如き錯雜深邃なる理論の結果として成りたるものに非ず、如何ぞ之を分析し評論すべきものならんやと。如此謬見は素より一笑に付すべしと雖も、批評的文學の尚未だ發達せざる我邦なれば斯る皮相の議論を抱けるもの亦少からずと信ずるを以て、一言辯明し置くべし。げにや近松は哲理を談せず、人生觀を說かず、宿命自由を論せず、戲曲文學に就ても彼は決して今日吾人が考ふるが如き高尙なる目的を有せしに非ざ

ん。吹萬不同、元是れ同一の風、一輪の紅花千樣の意料を禁めざるは自然の萬物各小宇宙をなせばなり。若し今小大萬殊に應待し、無限の變相に遇て少しも凝滯する所なき宇宙大の心容を以て、此の大自然界に對し、其の感想する所を被ふに詩歌の衣裳を以てするの詩人あらば、之を解するに難きこと、猶自然其物を解するの難きが如けん。之を批評するものは尙自然其物を批評するが如し、即ち其の詩人を批評するよりは寧ろ自己を批評する也。他の詩人哲學者が大自然に對して驚嘆し眩惑するが如く、批評家は其の詩人に對して等しく驚嘆し眩惑する也。而して大沙翁は實に此種の詩人也。

予輩は我が近松を以て敢て直に大沙翁に同じと言はじ。只此の大自然に對して其の心容の廣大なる、遙に尋常詩人の繩墨を超たる所、沙翁に似たるものあるを認むるのみ。故に予輩は或點までは自己を批評するの覺悟を以て近松を評せざるべからず。凡そ批評の主とする所は、原作の殊を採て其中に遍を發見し、平等普通なる原理の下に幾多の差別を概括するにあり、言換れば、分の中に全を知り、歸納より演繹を攝ふるにあり。然れども近松を評論せんとするに當て、吾人は或點よ

く所千種萬樣にして、而も同一の自然たるを妨げず、茜に廬山の向背、巒となり峰となるのみに非ざる也。詩人哲學者は詮ずる所、自然の批評家也明鏡人に應じて妍醜を分ち、水其の器に隨て方圓を異にするが如く、自然素と定形なく定名なし、只こ自己固有の理想と感覺の形式とに依りて幾多の世界觀と人生觀とを作り來るのみ。故に詩人哲學者は自然を批評すといふと雖も、其の實自己を批評する也。自然の計畫意味を發見せんとして、偶こ自己心容の廣狹と感識の高卑とを示す也。試に一輪の薔薇花を見よ。情を解せぬ傖夫も尙觀て美となさむ、而も其美となすもの只其の色の紅なるが爲のみ。摘草に餘念なき垂髫少女は採てかざしの花となさむ、而も蛺蝶一枝の春に離るゝを思はず。徒ならぬ思に結ぼれて春の恨を解くよしもなき妙齡の處女には、露も情と見られぬべく、色も哀を添ふるならん。常なきものと世を觀じて、四曼不離の行業に一切衆緣を思換えたる世捨人の眼には、盛者必衰の理を示さなん。草葉の裏に神の影を見ると言ひけん理學者は、纖維組織の中に全能の大手を認むべく、宇宙の眞と善と美とを己が理想の中に萃めて、之を萬有の中に認むる大詩人は、『哀れ此花、汝を知るものは亦宇宙を知らん』と歎美せ

大沙翁がウルリチ、ウェッツ、ゲルビヌス、ドーデン、ハドソン諸家の評論を容れて綽々尚餘裕ある如く、我が近松も亦幾多の異りたる評論を容れて戻る所なかるべきを疑はざる也。是れ即ち近松の大なる所以にして、予輩が日本文學の名譽とし光明とする所以也。

英文學に通ぜる人は、沙翁と近松との間に著しき類似の點あるに驚くべし。予輩は敢て茲に優劣と言はず、高卑と言はず、又其の類似せる點の大戯曲家に必要なる條件なりや否やを論ぜず、只此の類似の點が如何に二者の批評家に向て同一の困難を呈するかを一言せむ。彼の一般の批評家が以て沙翁に比擬したる『自然』なる語は、或度までは亦當に以て我が近松に比擬すべし。自然のものたる、漠然として定限する所を知らず、空を緯とし時を經とし、萬有を擧て流轉するもの是れ自然なり。草木花卉の小より日月星辰の大に至るまで皆是れ自然に非ざるなし。唯物となし、唯心となし、二元となし、多元となす、皆是れ同一自然に對する絶對的根本を說ける也。進化說や、週期說や、皆是れ同一自然に對する發達の原理を說ける也。厭世と云ひ、樂天と云ふ、亦是れ同一自然に對する幸福の問題を解ける也。其の說

の光明なる近松巢林子を評論せんとする予輩は、熟々我文學の大勢を斟考し、戒愼省慮以て其の說の公平無私ならんことを期せざるべからず。

近松門左衛門なる名が我文學社會に喧しく、日本第一の戲曲家として普く世上の知る所となりたるは屢々數年以來のことにして、其迄は或る一部の人を省きては其名だに知らざるもの多かりき。予輩は今日巢林子を云ふもの、果して其名を口にするに止らずして、一個の戲曲家として眞に其價値を認むるものなりや否やを知らず、只之を言ふもの甚だ多きに比して一篇の評論さへも世に出でざるを見て少しく奇怪の感なきを得ず。げにや二三の世話淨瑠璃の解釋と評論とは予輩已に之を見たり、然れども未だ一箇の戲曲家として之を論ずるものあるを聞かざる也。『ハムレット』は大なり、されど之を創作せる沙翁は更に大なるに非ずや。『天の網島』や『油地獄』や『柱曆』や皆是れ大戲曲也、されど之を作りし巢林子は更に大戲曲家たるに非ずや。『紙治』を談ずるもの『油地獄』を說くものは世即ち之あり、巢林子を說くものに至ては恨むらくは予輩未だ其人を見ず。日本文學の氣運は已に巢林子を知らんことを望むや切なり。予輩不肖、獨り全く之を知ると謂はず、猶彼の

此の二つの時期は、共に其の常軌を外れたるものにして、素より之に向て公平なる比照的評論を望むべきに非ず。殊に後者にありては、從來自己の價値を識らずして一意他を崇拜せしの愚なりしを覺りしと共に、其の反動として强大なる自尊心其の動機となるを以て、只々自家の價値を振揚して他に拮抗せんと欲するの情より、知らず識らず、其の短處缺點までも曲庇掩蔽するの弊に陷らざるもの殆ど罕也。顧ふに明治維新と共に歷史上一の新發達をなせる我邦文學が、他尊の時期を脫せしは已に數年前にあり。和漢文學の反動的流行と、學者が派を分ち壘を守り、力を極めて他を擠下せんと務めたるの事實は、其の已に自尊の時期に入りたるの徵候と見て大過なかるべし。而して今日果して此偏頗なる時期を經過して、公平なる比照的觀察に堪ゆるの時期に達したるや否やは趨勢の過渡する所、少くとも今後十數年の後に非れば、確乎たる斷案を下す能はずと雖も、兎にも角にも、已に自己を覺識し、自己の價値を認め、尙進て公平なる自己の評論を得んとするの傾向あるは即ち文學發達上必然なる階段を踐めるものにして、亦以て我が文學が健全なる進歩を爲しつゝあるを證する者と謂ふべし。是時に當て、我邦唯一の劇曲家、我文學

一　緒論

英の沙翁唱へられ、獨のゲーテ稱せられ、今や我が近松は漸く知られむとするの時とはなりぬ。予輩は敢て之を以て奇異の現象となさず、却て當然の事となすなり。蓋し何物にまれ、其の發達の初期にありては、自己を覺識せざるを常とす。自己の貴重なる物品を抛棄して漫に他人の所有を欽羨する、彼の小兒の時期は、獨り一個人の上に於てのみならず、文學の發達に於て亦之を見る也。是れ假に他尊の時期とも稱すべきものにして、摸倣と崇拜とは其の徵候也。他を知ること漸く深く、稍其の眞相を會得するに及びて、飜て他に對する自己てふ觀念深く意識の中に顯れ、明確に自他の區別を自覺するに及びては、從來他に向て用ゐたる勞力を移して自己の研究に從事するに至るべし。若し此際自家の事物に意外の價値を發見するか、若くは是迄他に見ざりし新生面に遭遇する時は、驚嘆の情と好奇の心とに刺激せられ、一切他物を捨てゝ銳意專心只ゞ自家の考究に熱中すべし。是れ假に自尊の時期とも名くべきものにして、自他の關係前と全く反す。言ふまでもなく、

一、緒論
二、批評及其方法
三、戯曲及之に對する近松の意見
四、近松戯曲の種類及結構
五、近松戯曲の材料
六、近松に於ける人物性格
七、巢林子の人生觀
八、（題目本文缺）
九、巢林子の女性

（廿五年頃より廿八年四月迄）

近松巢林子

知りて精靈あるを忘れたるなり。吾人は之を以て主として當今敎育の無風流なるの罪に歸せんと欲するなり。

吁、吾人豈辯を好む者ならんや。其の斯の如く呶々する所以の者は、只人生の貴重なるを知ればなり。吾人は敢て世人に向て文學者たれと勸むる者にあらず、只文學的趣味を蓄へんことを勸告するものなり。ウォーヅウォース言はずや『若し吾れ自然（ネーチュア）の美を理解する能はずんば寧ろ異敎者となりて魔神の海より上るを見ん』と。

（廿四年六月）

なる此の世界より其の靈想を發揮するなかりせば、此れ等は又言ふに足らざる者ならんのみ。詩は即ち文學者の心なり、其の精神は即ち文學者の理想なり、故に文學者の胸襟や快濶、其の心事や高潔、百難の際に處して恰も光風霽月の如く、常人の呻吟苦楚する時にありて獨り悠然として大船に坐するが如し、內に樂む所あればなり。之を以てシェレーは『寂寞』（メランコリー）に樂み、李謫仙は夜郎に笑へり。

論じて茲に至り、顧みて我が邦方今の學生を見るに、實に長大息に堪へざる者あり。渠れ等の眞理を認むるとは吾人之を知る、渠れ等の「善」を認むるとは吾人又之を知る。然れども敢て問ふ、渠れ等は果して完全に「美」を理解するの能力を有するか。渠れ等は花を見て之を愛し、月を見て之を樂む、然れども其の興起する感情は單に其の美なるを認め、其艶なるを識るに止まるのみ。渠れ等は物を見て其の物たるを知り、聲を聞て其の聲たるを知る、然れども物を形なきに觀、聲を聲なきに聞き、能く形躰以外の微妙を闡揚すること能はざるなり。渠れ等は尙ほ以て世界の最も幸福なる人と言ふを得るか。渠れ等は能く事物を分析し、又能く事物を測量す、然れども能く自然の美を感受する者幾何かある。渠れ等は人間に意識あるを

文學者は最大なる同感の情を有するが爲に人間中の最も幸福なる者なり。曹孟德が十萬の吳軍に動かずして却て烏鵲南飛を歌ひ、ウォルフはケベックの戰勝者たるを願はずして、却てグレーの詩藻を羨みしは實に之が爲のみ。

以上述べたるが如き最高なる理想を以て最大なる感情を動かし以て之を文字に表はしたる者、之を詩（弘き意味の）となす。詩は實に文學の神髓なり、精粹なり、文學の價値實に此に存す、吾人請ふ少しく之を論ぜん。

夫れ詩は靈活なる者なり、其の感情は無限なり。吾人の意識の中心たると同時に其の圓周となる者なり、詩は吾人の思想の根本たると同時に花葉となる者なり、萬物之に因て生じ、萬物又之に因て美なり。若し詩なからんか、此世界は乾燥無味にして吾人は何くにか純潔なる快樂を求めん。之を花に喩へんか、婉妍たる櫻花と雖も之を組織するものは纖維と細胞のみ、之を人に喩へんか、傾國の美人と雖も、元と是れ骨と肉とのみ。之をして美色を呈し、之をして芳香を放たしむる者即ち詩なり。所謂る德義とは何物ぞや、愛情とは何物ぞや、所謂る愛國友誼の情とは果して何物ぞや、所謂る美麗なる風景とは果して何物ぞや。若し詩にして永遠無窮

落して赤幟復起たず、一門相將ゐて究島波濤の間に銷沈せり、何ぞ夫れ慘憺なるや。然れども吾人が平家物語を讀で尤も快樂を感ずるは、時めく六波羅の春花にあらずして、却て千鳥鳴く須磨の秋月に非ずや。アレキサンダーとマリアスは共に一世の英雄なり、然れども吾人が其の歷史を讀で左も快樂を感ずるは、前者がアルベラ原頭に波斯軍を鏖殺したる時に非ずして、却て後者が形容枯槁カルセーヂの殘墟に坐して今昔の淚に咽びたる時に非ずや。是れ等の快樂は實に文學の賚にして、人皆多少其の情を有せりと雖も其の感慨の深くして快樂の大なるは文學者に如くものあらざるなり。而して吾人をして悲哀的現象を樂ましむる悲歌哀詩は、文學者實に之を吾人に與ふるなり。若し世に悲歌哀詩なく、人にして同感の情を缺き若しくは薄弱なるものあらば、人生快樂の範圍大に減殺せらるべきは疑ふべからざるなり。シェレー其の著『アラスター』に序して曰く、人にして此世界に一の愛する所なく、一の望む所なく、人の喜びを喜ばず、人の憂に動かず、恰も乾燥したる土砂の如く、同感の情を失はゞ是れ人にして人に非る也。渠れ等は人の父にあらず、人の友に非ず、又人の爲に愛せられず、渠れ等は精神的に死せるなりと。實に然り、

を免れざるべし。是に於てか文學は吾人に與ふるに同情同感の靈性を以てし、以て理想界と此の世界とを連結し、吾人の幸福をして圓滿完了ならしむるなり。所謂る同情同感とは何ぞや、自己の心情を移して他物を忖度するを謂ふ、吾人の快樂を感ずる、主として此情あるに由るなり。已に同情同感の性を有す、之を以て吾人は春花の綽約たるを見ては深く其美に感じ、秋月の皎々たるを望では深く其の色に動き、笛聲の嘹喨たるを耳にしては深く其の音に感ず。勿論、花月の美を愛するの情は蒲人漁父にも之れあり、然れども文學者の之に感ずるや、常人の得て夢想する能はざる極めて高遠幽邃なる微妙を感銘する者なり。人、大詩人の著作を讀て恍然として心醉し、斯の如き高妙靈活なる思想は抑も如何にして人心に興り得べきかを驚嘆するも皆之が爲のみ。又吾人が人の喜びを喜び、人の悲みを悲むも、皆此の同感の情あるに由るなり。否啻に是れのみならず、此の情あるが爲に、人の悲に遇て却て之を轉じて樂となすを得、吾人が大詩人の作れる悲曲を讀て大に快樂を感ずるも之が爲なり。哀別離苦の慘狀の大に吾人に快きも亦之が爲なり。試に見よ、昔者平氏の盛なりしや、一世の榮華を極め、宗領扶桑の半を占めしも、一朝沒

嘗然として自己の理想の卑下なるを慨嘆せざる者あらん。是れ即ち人は其の體を以て生活すると同時に其の心を以て生活する者なるを證する者に非ずや。眞正の幸福は肉體の上にあらずして精神の中に存するを證する者に非ずや。其れ然り、吾人は豚となりて樂まんよりは寧ろ人となりて悲まんと欲する者なり。一國の帝王となりて宣室の談に迷はんよりは、寧ろ窮巷の匹夫となりて高尚なる理想を懷て眠らんと欲する者也。若し其の心高尚なる理想を缺き、內に顧みて一點忸怩の思ひあるあらば、世界を擧て之を與ふるも吾人又何の樂か之れ有らん。然らば則ち何を以て最も高尚なる理想と云ふか。他なし心塵寰を脫して自然と同化するに在り、眞(善)美の三者を正當に理解するにあり。是に於てか吾人は知る、文學は吾人に與ふるに最高尚なる理想的標準を以てする者にして、文學者は世界に於て最も多く眞正の幸福を享受し得る者なるとを

斯の如く高尚なる理想は、吾人に與ふるに安心立命の地盤を以てせりと雖ども、吾人は現に地上に生活する者なるを記憶せざるべからず。若し只理想界に彷徉するのみにして、少しも現生の快樂に與らずんば、其の間自ら慊焉たらざる者ある

を修成するのみならず、此の紛々たる俗界より吾人を援て直に自然と同化せしむる者なるを信ずればなり。眞理と共に其の「善」を理解し、其の「善」を理解すると共に其の「美」を感應する能力を吾人に與ふる者なるを信ずればなり。

文學の目的既に斯の如し。吾人は一歩を轉じて、之より文學は人生の上に於て果して幾何の價値を有するかを論ぜん。

試みに問はん、所謂る人生の幸福とは果して何物ぞや。人動もすれば精靈の其の身に宿するを知らず、貪夫は財に徇ひ、誇者は權に死し、茫として生れ茫として終る者世上滔々皆然り。彼の權威を以て其の下を制し、徒に口體耳目の慾を逞ふする者は、是れ人に非ずして寧ろ獸のみ、安ぞ以て人生の樂事となすを得んや。彼の泉貨瑚璉を累積し恬然として飽臥する者は、是れ人たるに非ずして寧ろ器たるのみ、安ぞ以て人生の快事となすを得んや。若し獸となり以て足れりとせば、吾人は將に此活々たる精靈を如何せんとするや。蒙昧敎ふべからざる輩は吾人之を知らず、苟も少しく學問智識あるもの、三更神を靜めて、一たび人生てふ觀念を起し、引て古來の達人哲士の心事に思ひ到るあらば、設令ひ身は富貴榮華を極むるも、誰か

文學及人生

吾人は本論に入るに先ち文學の目的如何を攻究せざる可からず。抑も文學の目的如何。或は曰く、文學の要は吾人の氣韻を高くするにあり。或は曰く、吾人をして巧妙明晰の詩文を作ることを得せしむるにあり。或は一歩を進めて曰く、文學の目的とする所は人生を解釋するにあり、吾人は依て以て社會古今の狀態を知り得るなりと。吾人は何れか其の當を得たるを知らずと雖ども、若し此等の說をして眞ならしめば、吾人は文學の爲に、其の目的の卑下淺薄なるを悲まずんばあらざるなり。文學の目的は只氣韻を高くし巧みに詩文を作るに止まらん乎。境域人生の外に出でず。只社會の狀態を寫すに止まらん乎。吾人は實に文學を崇ぶ、然れども今や之を擲たざるを得ず、吾人は實に詩歌を愛す、然れども今や之を賤まざるを得ず。吁文學豈斯の如き淺薄狹隘なるものならんや。吾人が半生の精血を灑て而して尙逐々として怠らざる所以の者は人世以外更に高尙悠遠なる目的ありて存するを信ずればなり。何ぞや、文學は啻に吾人の性行風格

目次

二　ドレの挿畫……九四四
三　人の容貌……九四六
四　文藝は嚴肅……九四七
五　當今の文章……九四八
六　眞正の寫實……九四九
七　例と談理……九五〇
八　俗學者の猾手段……九五〇
九　表……九五二
十　畫家と小說家……九五二
十一　繪卷の寫實……九三三
雜談（三十五年一月より同十一月まで）……九五五

終

土井晩翠を送る(三十四年七月)……八一
大橋乙羽を悼む(同上)……九二〇
留學生諸君を送る(三十四年十一月)……四二〇
無題錄(三十四年七月より同十二月まで)……九二三
三十四年の文藝界(三十五年一月)……八三〇
一 吾人の批評は無遠慮也……八三〇
二 表紙挿畫は恰好の代表者……九三一
三 紅葉露伴を葬れよ……九三二
四 惡寫眞の流行の例(天外)……九三四
五 進歩せざる新體詩……九三六
六 皆無の新著述……九三九
七 小兒童の時文評論……九三九
八 見るべき論文……九四〇
九 斷片の事件……九四一
文藝雜談(三十五年四月「中學世界」所載)……九四三
一 挿畫……九四三

（本邦文壇の側面評）（文）（三十四年一月『太陽』所載）……八三三
姉崎嘲風に與ふる書（文）（三十四年五月『太陽』所載）……八四四
作文論（三十四年三月『中學世界』所載）……八七八
現代文章私見（三十四年五月『中學世界』所載）……八八二
一　序言……八八二
二　雪嶺蘇峰及び矧川……八八三
三　政論家の文章……八八七
四　逍遙……八九二
五　鷗外……八九四
六　逍遙と鷗外……八九六
七　青年文學者の文章……八九七
八　結論……九〇一
嗚呼凡俗改良（三十四年七月『太陽』所載）……九〇三
笹川臨風が『奈良朝史』の首に書す（三十四年七月『新文藝』所載）……九〇六
『元祿時勢粧』を讀む
（元祿時代の側面觀）（以下『太陽』所載）（三十四年七月）……九一〇

小說の意義(文)(三十三年六月)……七六七
小年の文學熱(文)(同上)……七六八
煩瑣學風(文)(三十三年七月)……七六九
煩瑣學風と文學者(文)(同上)……七七〇
人名字書中の文學者(文)(同上)……七七二
人の出處進退(同上)……七七三
學者と文章(同上)……七七六
詹々錄(文)(三十二年四月より同七月まで)……七七九
無題錄(一)(文)(三十二年九月)……七九六
同　(二)(文)(三十二年十月)……八〇二
同　(三)(文)(三十三年一月)……八一二
同　(四)(文)(三十三年四月)……八一五

第三期(明治三十四年一月より同三十五年十一月まで)

文明批評家としての文學者

藝術界の尚古主義(三十二年七月)……七二六
詩人と批評家(三十二年九月)……七二七
木村鷹太郎君に與ふ(全上)……七三一
本邦文章の問題(三十二年十一月)……七三二
我國演劇の前途に就いて(三十二年十二月)……七三六
明治三十二年に於ける小說界の傾向を論ず(三十三年一月)……七四三
一 緒言……七四三
二 昨年の小說の大傾向……七四四
三 時代精神論……七四六
四 小說の社會的傾向……七五〇
五 其批評……七五二
六 露伴の社會的小說に對する批評……七五六
七 結論……七五八
漣山人の『日本お伽噺』(三十三年二月)……七六〇
言文一致の標準(三十三年六月)……七六一
自國の作を讀まざる風(文)(全上)……七六六

詩人唱はず(三十一年三月)……六八五
老人時代(全上)……六八五
作家自衛法(全上)……六八六
實在と空想(全上)……六八七
詩歌の誘惑(全上)……六九〇
新聞記者の資格(三十一年四月)……六九二
ビヨルンソンとゾラ(全上)……六九六
たそがれの辭(一葉舟を讀みて)(三十一年七月)……六九八
『國民の友』を惜む(三十一年九月)……七〇五
滑稽小説の作者に告ぐ(全上)……七〇七
自己の修養(全上)……七一〇
漢文を書き換へよ(全上)……七一一
民族傳説の蒐集(三十一年十一月)……七一八
評家及び作家としての不知庵(三十二年六月)……七二二

現今美術家の精神的敎育（三十年七月）……六五四
美術家の絕好題目（三十年八月）……六五六
歷史を題目とせる美術（仝上）……六五七
佛像陳列の可否如何（仝上）……六五八
閱歷と空想（仝上）……六六一
小說中に顯はれたる現代の女性（仝上）……六六三
德富蘇峰（三十年九月）……六六四
市川新藏を惜む（仝上）……六六四
少年演劇に警告す（仝上）……六六六
朦朧體の末路（時）（仝上）……六六九
柳浪の『畜生腹』を讀む（三十年十一月）……六七三
晚翠の詩（三十年十二月）……六七六
今の滑稽文學（仝上）……六八二
最も悲しき聲（三十一年三月）……六八四

カーライル氏の英雄論の翻譯に就きて(時)(三十一年六月)……五七五
ワルト・ホイトマンを論ず(時)(三十一年五月)……五八五
ホイトマン(再び)(時)(三十一年六月)……六〇一
僞詩人とは何ぞ(時)(仝上)……六〇二
文明の裏面(三十二年四月)……六〇三
時代の精神と大文學(三十二年二月)……六〇五
友人某に與へて昨今の文壇を論ずる書(三十二年七月)……六一二
土井晩翠に與へて當今の文壇を論ずる書(文)(三十三年二月)……六二七
齋藤綠雨が色道論を讀む(三十一年三月)……六四三
泉鏡花に與ふ(仝上)……六四六
『先秦文學』を讀む(仝上)……六四九
藤田劍峰を送る(仝上)……六五一
文學に對する根本的誤解(三十年七月)……六五三

第二期（明治三十年六月より明治三十三年七月まで）

我邦現今の文藝界に於ける批評家の本務（三十年六月）……四〇三
明治の小說（三十年六月）……四一七
　第一　序論……四一七
　第二　明治小說の第一期……四四二
　第三　明治小說の第二期……四五七
所謂社會小說を論ず（三十年七月）……四七七
支那文學の價値（三十年九月）……四八五
春のや主人の『牧の方』を評す（時）（三十年八月）……五〇一
坪內逍遙が『史劇に就いての疑ひ』を讀む（時）（三十年九月）……五二〇
小說革新の時機
（非國民的小說を難ず）（時）（三十一年三月）……五四六
曲亭馬琴（時）（三十一年二月）……五六〇
詩的の兩面と其利弊（時）（三十一年三月）……五六三

一葉女史の『たけくらべ』を讀みて(二十九年五月)……三五七
俳句及び狂詩(全上)……三六一
俳句と符號(全上)……三六二
俳句(二十九年六月)……三六三
鑑定家と批評家(二十九年七月)……三六三
鷗外に答ふ(全上)……三六五
一葉女史の『われから』(全上)……三七三
德富蘇峯君を送る(全上)……三七五
市川新藏(二十九年七月)……三七七
『今戸心中』と情死(二十九年八月)……三八〇
能樂會(全上)……三八五
能樂の性質(全上)……三八六
脚本の批評法(二十九年九月)……三八九
田山花袋の『わすれ水』(全上)……三九二

批評に就て(二十八年十二月)……三〇八
明治廿八年の文學界(二十九年一月)……三一〇
少壯漢學者に告ぐ(全上)……三一八
宗教小說(全上)……三二二
裏面の觀察とは何ぞや(全上)……三二三
女性作家に望む(全上二十九年二月)……三二四
賞鑑家と國民(全上)……三二九
時好と批評家(全上)……三三〇
春の家が『桐一葉』を讀みて(二十九年四月)……三三二
寫生と寫意、意想と畸形(全上)……三四二
大塚文學士を送る(全上)……三四五
今日の新體詩家を警醒す(全上)……三四八
書談一束(全上)……三五二
美學史及び美術史(二十九年五月)……三五五

三　美術史に於ける叙事抒情兩分子の消長……二三〇
四　客觀的主觀詩……二三五
何故に叙事詩は出でざるか（二十九年六月）……二三七
戯曲に於ける幽靈（二十九年九月）……二四一
退壇に臨みて吾等の懐抱を白す（二十九年十月）……二四七
文學會漫評（二十四年六月『文學會雜誌』所載）……二六〇
青年文人の厭世觀（以下『太陽』所載）（二十八年七月）……二七五
武島羽衣の『小夜砧』を評す（全上）……二七六
演劇界の風潮と劇評家の責任（二十八年八月）……二八四
美術と道德（全上）……二九二
『文學界』の諸君子に寄するの書（二十八年九月）……二九六
敢て日本美術史の編纂を促す（二十八年十二月）……三〇三
批評眼（全上）……三〇六

宗教畫と水彩畫と……一九一
日本西洋兩畫風の折衷(二十九年七月)……一九三
過去の我國に於ける折衷美術(以下同上)……一九五
久米氏の日本繪畫談……一九九
時代の美術……二〇一
風景畫の統一に就きて……二〇一
風景畫と小說……二〇三
文化の關聯(以下二十九年六月)……二〇五
日本文化の規模……二〇七
國民的詩人とは何ぞ……二一四
詩歌と道德との比較……二一五
ワヅヅワヲースとバイロン……二一七
天才論(二十九年八月)……二一八
叙事詩と抒情詩(二十九年八月)……二二八
一　民族的叙事詩と個人的叙事詩と……二二八
二　叙事詩の歷史的觀察……二三〇

作家の道念と觀念(以下二十九年二月)……一六六
現今小說の二大缺點……一六六
紅葉山人……一六八
似て非なる觀念小說……一七〇
小說家の壽命……一七一
作者の性格と著作との關係……一七二
社會的立脚地よりの文學評論……一七四
詩人と模倣と天然……一七六
詩人と模倣(二十九年二月)……一七六
自然の詩人(仝上)……一七七
天然と田舍(二十九年六月)……一七九
文學と美術と(以下二十九年三月)……一八一
現今の繪畫と現今の小說……一八一
一種異樣の改革派としての所謂南派……一八三
南派の危機……一八五
南派の歸依者……一八九
歷史畫の缺乏……一九〇

九　巢林子の女性（二十八年四月『帝國文學』所載）時）……一〇一
（一）巢林子が戯曲に於ける『人』……一〇一
（二）女子は如何なるものぞ……一〇六
（三）愛と名譽……一〇八
（四）嫉妬は愛の反面……一一一
（五）『天の網島』のおさん……一一五
（六）『出世瀧徳』の吾妻……一一九
（七）『槍權三重帷子』のおさい……一二一
（八）『宵庚申』のお千代……一二六

第一期（明治二十八年九月より明治二十九年十月まで）

運命と悲劇（以下『太陽』所載）（廿八年十一月）……一三七
歷史的精神……一五一
現今の我學術界に於ける歷史的精神の缺乏（二十八年十一月）……一五一
文學研究の好題目（全上）……一五六
歷史的研究とは何ぞや（二十九年二、三月）……一五九
歷史畫と歷史小說（二十九年三月）……一六四

目次

文藝評論

文學及び人生（廿四年六月『文學會雜誌』所載）……一
近松巢林子……九
一 緒論……一一
二 批評及び其方法……二一
三 戯曲及び之に對する近松の意見……三一
四 近松戯曲の種類及び結構……四一
五 近松戯曲の材料に就て……五六
六 近松に於ける人物性格（二十八年四月『太陽』所載）……六六
七 巢林子の人生觀（二十八年二月『帝國文學』所載）……七九
八 （題目本文缺）……一〇一

五、近松戯曲の材料に就て

太山は土壌を擇ばず故に能く高峻雷霆の上に聳らし風雲を吞吐す、江河は細流を非まず故に能く大、深、故に能く滄溟の波を起し鯨鯢を捲し起す、物々観むと

もあり、萬物に水火あるは人も亦好むところあり星辰の羣と猶と相接せず氷炭と容せざるものゝ以あるあるもの澗の觀ある滄

浪あり、淸あり濁あり混々の海あるも、[illegible]

誰の成りある所とは萬物に接す、物ごとに情物に[illegible]は初せず、故に西鶴は伏姫を描く能はずの事は世の事を写す能はず、

「ヒューマン」と一言くし「バンプ」はバイロン卑きとこともある、

三十七

故著者の自筆なり。扉の文字は守本文靜師の筆に成る。是れ即ち師が從軍布敎出發の間際に京都より書き送られし者なり。

本書の編輯及び植字校正は編者二人その責に任ず。又發刊が豫定よりも著しく遲延せしは、一は編輯上の困難と、一は發行者の都合に出でし者にして、故著者三回の忌辰以前に全集全部を了うせんと欲せし素志は終に達するを得ざりしは甚だ遺憾なり。以下第三卷の『文藝及史傳』の下及び第四卷『時勢及信仰』第五卷『想華及消息』は成るべく卅八年六月中に完成するを期す。

終に第一卷に於けると同じく、本書出版に好意と助力を寄せられし諸君に感謝の意を表す。

明治三十七年十二月二十四日　故著者第三忌辰の日

駿州興津にて　齋藤信策
姉崎正治

ならしめたり。後期に近づくに從ひ送り假名は畧せる者少きも、同一論文の中にて「彼れ」「彼」を共に「彼れ」の義に用ひたるもあり。此等には皆送り假名を加へたり。圈點は皆之を保存したり。

尙本卷に收めたる評論中『巢林子の女性』の外『詩的の兩面と其利弊』以下數篇の第二期に屬する者は、著者が三十一年末に諸評論を纏めて刊行せし『時代管見』の下篇に收められし者なり。又卅二年の春頃より卅四年六月に至る間の數篇は同月發刊の『文藝評論』中に錄せし者なり。即ちこの二書に收められし者は著者がその發行の時にも多少滿足を以て往時の文を收めしを知るべく、その他は當時著者の棄てゝ敢て惜まざりし所の者なり。編者等は目錄中にその文章を(時)及(文)の字にて區別し置きたり。著者の精神的傾向を觀察せんとする讀者はこの關係に注目せらるべし。

本卷の首に揭げたる肖像は故著者が仙臺高等中學校在學の時の撮影にして、その手蹟としては『近松巢林子』中の一頁を寫眞版としたり。卷首の『文藝評論』の文字は即ち曾て同書の表紙たりし者にして、九頁の『近松巢林子』なる表題の文字は

難きを慨したるが如く、後年の信仰時代を豫言する者なきにあらず。

第三期は著者が病の爲に歐洲行を斷念して、卅四年一月三度『太陽』の評論を擔當せしより、卅五年十一月その沒前一ヶ月に亘る一時期なり。この間は數年來醸成し來りし著者の精神的傾向が天才の皷吹となり日蓮の崇拜となりし時代にして、その文藝評論は社會全般の文運を觀察し評論するよりは、寧ろ自己精神の要求に基きて社會を叱咤せし時代なり。此を以てこの時期の文章は本卷に收むべき者割合に少くして『時勢及信仰』の第四卷に收むべき者多きに居る。若し著者の文藝評論を概括して第一期を純客觀の時となし、第二を國民中心の客觀主義と稱すべくんば、この第三期の評論は之を純主觀的と名け得べし。

本卷は大體右に述べたる三期の區分に從ひ、各期毎にその主なる評論を公刊の年代に從て編次し、各期の終りにその間の雜論雜評の類を一括編入したり。用字、送り假名の事は全集第一卷に同じ。概するに著者の送り假名はその初期には畧せる者多く、此等は多くその儘に保存し、只その間「彼れ」「彼の」等混同の憂ある處には之を挿入れ、又「其」の次に形容詞或は活用言ある場合には「の」の一字を加へ通讀に便

月より廿九年九月に至る第一期は著者の大學在學時代にして、著者が初めて中央の文壇に文藝時評の筆を振ひし時期、又著者が倫理問題と文藝美術の事とを關聯して考察せし時代にして、その評論は主としてこの善美一致觀に基けり。而してこの時期には著者は評論家として多く新刊の小說或は論議に着目しその批評を事としたり。されば新刊書に關する批評はこの間に最も多く、著者が如何に精勵して此等の文書を通讀したりしかを示すに足る者あり、又一面より見れば當時小說界、評論界の史料として趣味ある者多し。然れども此等の評論は寧ろ一時的の時論批評にして、著者の精神的發達には直接重要の材料と稱し難し。今本卷編輯の際刪除したるは多く此種の評論にして、その稿一篋を充たすに足る者あるも、後日別に明治文學の史料として之を公刊する迄は暫く全集中より除きたり。

第二期は著者が仙臺より京に歸りし卅年五月よりその留學決定の卅三年七月までにして、この間は即ち主として著者の日本主義時代なり。さればその評論には國民的性情を本として文學を論じ、國民文學を唱導したる者多し。されどその間にも已にフォトマンを論ぜしが如き、又時には文學の理想と社會の現實と相容れ

興したる際、著者はその倫理問題を國民性に基く主義にて解釋せんとし、漸次日本主義の萌芽を養ひし時代となり、終に再び熱心に近松研究を續くるに及ばざりしなり。されば今本卷にて公刊したる稿本は處々朱書の訂正あるも、未だ全躰を整理案排するに及ばずして止みしなり。即ちその論旨の如きも、初めの諸章にては近松を解釋するに沒理想の觀念を以てせんとし、後にその人生觀を論ずるに及びては見處を換え一個の厭世詩人として近松を解釋せり。此の如き矛盾も今はその儘にして公刊せざるべからず。讀者が本研究の來歷に照らしてこの間の消息を諒知せられん事を望む。又本研究には目錄に示したる如く各章の番號あり。その中第十章は『心中論』として稿本存せし事ありしも、その原稿は終に發見せられず、從てその所論今日は知る能はざるも、本卷三八〇頁以下に收めたる『今戸心中』に關する評論にはその片影を殘せし者ありと信ず。

その他の文藝評論は主として『太陽』の評論に係かる。今その時期を劃して三となせり。此は單に著者一身の經歷と『太陽』執筆の時期とに從ふ區分なるのみならず、又實に著者が學風思想の上にても自然に三つの時期をなせり。即ち廿八年九

一年十二月公刊の『時代管見』中に收めたる者なり。又『近松に於ける人物性格』の一篇は『戲曲的人物と近松巢林子』の題名の下に明治廿八年四月『太陽』第四號にて公にせり。その他の章は盡く故著者の稿本の儘にて存し尚訂正攻究中にありし者、即ち全く未定稿に屬する者なり。今その原稿を見るに用紙は東京の罫紙を用ひたれば、廿六年九月以降の述作と稱すべきも、その材料は既に仙臺時代より着手せし者なる事は明かにして本稿は近松研究の第二稿と見るべき者ならん。著者がこの研究の材料に供せしは武藏屋版の活字本にして、この出版は廿二三年頃より逐次發行せられ、廿五年の初めに合本として出でし者なるが、著者の使用せしは合本せざる以前のものなれば、兎に角仙臺時代より著者が此等の活字本を以て研究を始めし事は明かなり。今この研究の躰裁幷に緒論中に『本書』云々の句あるを思へば、著者は一本として近松研究を大成するの志ありしは明白にして、その素志は後年迄消滅せざりしなるべく、現に廿八年頃には著者は同級の桑木君とこの事に關して書簡の往復にて議論を上下せし事ありき。然るに著者は大學在學中特に倫理問題の研究に熱中し、その中には廿七八年役の事あり、一般に國家的意識の勃

所にして、故著者幷に讀者の寛恕を乞はざるべからず。

本卷に收めたる文藝評論の諸文章は主として故著者がその擔當せし『太陽』の評論欄にて公にせし者に係かり、之に少しく仙臺時代の評論と『帝國文學』『中學世界』『新文藝』等にて公にせし者を加へたり。仙臺時代の評論は故著者が第二高等中學校在學中率先して組織したる文學會の雜誌にて公にせし者にして、この『文學會雜誌』は後に『尚志會雜誌』として今に續刊せり。即ちこの間の評論は明治廿四年六月『文學會雜誌』創刊より同廿六年七月同校卒業の時までの時期に亘るも、その雜誌の現存せる者今日僅に『文學會雜誌』の一號（六月刊行）と三號（廿五年十二月刊行）とあるのみなれば、本卷に收めたる者はこの範圍に過ぎず。若しこの二年間の材料にして完全に保存せられたらんには別に之を仙臺時代として一期を劃すべかりしも材料の不完全の爲めに假に之を第一期の中に編入したり。

『近松巢林子』の研究は故著者が仙臺時代より着手し、明治廿八年の春頃までの攻究に係る。その中『巢林子の人生觀』は明治廿八年二月『帝國文學』第二號に『巢林子の女性』は同廿八年四月同雜誌第四號にて、共に高齋林良の名にて公にし、後再び卅

序言

樗牛全集の第二は故著者が文藝及史傳に關する評論敘述雜論を蒐集す。始め編者等は此等の材料を一括して一冊となし、全集第二卷として刊行するを期したるも、材料を蒐集整理するに從ひ、其が分量の到底一冊に收むべからざるを見、輒ち評論中極めて一時的なる者を除きて、その量を删減せんと試み、再三删除を加へしも、その量尙多きに過ぎ、文藝評論の植字半ばに達する頃には、如何にしても當初の豫定を實行する能はざるを悟り、茲に全く豫定の第二冊を上下即ち全集の第二及第三の二卷に分つに決定せり。即ち『文藝及史傳』の上卷は主として文藝上の評論及雜論を收め、その下卷は主として史傳に關する材料を收めたり。若し初めよりこの豫算を確定する事を得しならんには、本卷に收めたる『近松巢林子』の一篇は之を下卷に收むべかりしなり。斯くせば本卷をして殆ど千頁に達するの大冊たらしむるを要せざりしなるも、何せよ材料の蒐集極めて困難にして始めより精確の豫算を立て得ざりしが爲に此の如き不首尾を來たしたるは、編者等の遺憾とする

LIBRARY
JUL 25 1968
UNIVERSITY OF TORONTO

PL
817
A48
1912
v. 2

故高山林次郎著

樗牛全集

第二卷 文藝及史傳 上

明治三十七年

東京 博文館

PL
817
A48
1912
v.2

East
Asiatic
Studies

Takayama, Chogyū
Chogyū zenshū

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

吾人は須らく現代を
超越せざるべからず

高山林次郎